

沖縄市の伝承をたずねて

本格昔話編



沖縄市文化財調査報告書第38集

沖縄市の伝承をたずねて

本格昔話編

ご あ い さ つ

このたび、沖縄市文化財調査報告書第三十八集『沖縄市の伝承をたずねて 本格昔話編』を発刊するにあたり、一言ごあいさつ申し上げます。

『沖縄市の伝承をたずねて』は、今回の発刊で四冊目となります。これまでは、沖縄市を地域で区切り、そこに伝わる民話を報告して参りました。今回の本格昔話編は沖縄県において広く話されてきた昔話を集録しています。こういった昔話も現在ではあまり聞かれなくなり、だんだん失われつつあります。

このようなことから、沖縄市教育委員会では、民話伝承の保存・継承を図るため、昭和五十五年より沖縄国際大学口承文芸研究会の協力を仰ぎ調査を実施し、報告書を刊行して参りました。

本書が、家庭や学校のみならず、生涯学習の場で広く活用されることを期待し、末尾となりましたが、調査にご協力いただきました地域の皆様ならびに関係者の皆様に対しまして、深く感謝申し上げます。

二〇一〇（平成二十二）年三月

沖縄市教育委員会

教育長 眞栄城 玄昌

凡例

一 沖縄市の民話調査と構成

① 沖縄市の民話調査は昭和五十五年「沖縄国際大学口承文芸調査団（遠藤庄治団長）」によって、沖縄市宇池原と登川で初めて行われた。その後、昭和六十年から昭和六十二年度は編集事務局の調査。そして、その調査資料を基礎に、平成二年度に沖縄国際大学口承文芸研究会及び沖縄民話の会で「沖縄市口承文芸学術調査団」を結成し、予備調査を行い、沖縄市全市の組織的調査（第一次本調査・第二次本調査・補足調査）をし、さらに平成三年数回の個別調査まで及んだ。

② 本民話集は昭和五十五年から平成三年にかけて行われた調査で聴取した話と、わらべ歌調査、文化財調査等で聴取された話をもとに「本格昔話」を収録した。

二 本書掲載話の選定

① 民話調査で聴取した話について、沖縄国際大学文学部国文学科の学生七名が沖縄市の民話を研究し、翻字して卒業論文として提出した。

平成二年度	旧美里地区	上門博之・山城綾子・宜保勝
平成三年度	旧コザ地区	香村夏子・照壁京子・石川小百合・大川清子

② 卒業論文として提出された翻字話の中から掲載話を選定した。これらの翻字話は、掲載話本文の分量としては充分な分量でな

かったため、翻字されていない話で語りの良い話を選定し、事務局で追加翻字した。

③ 聴取した話であきらかに出版物からの話に限っては割愛した。

④ ほぼ全話型を翻字対象とし、その中からできる限り多くの話を掲載した。重要な話型については、語りが断片的な話でも掲載した。

⑤ 重複話が多い話型については語りの良い話を採用した。

⑥ 掲載話は行政区や話者について公平になるように心がけた。

⑦ 「姥捨山」は笑い話に分類されているが、親子、人間関係を主題としているので、本格昔話として本書に掲載した。

三 翻字話の整備

① 翻字にあたっては、テープに収録された話者の語りを尊重し、できうるかぎりそのまま文字化するよう努めた。

② 話者の語り口を失わないように心がけ、話者の明らかな語り違いは補正し、言葉の脱落、難解語句、ストーリーが理解しにくい場合は（ ）で言葉を補ったり、話の内容が前後している場合は前後を入れ替えたりして適宜整備した。

③ 段落の設定及び句読点の扱いは可能な限り話者の語り即ずるよう心がけたが、区切りがつかない場合は、翻字者の判断で適宜句読点を打ち、話の展開にそって段落を設定した。

④ 共通語の語りの中で部分的に方言の語りがある場合には、その部分に（ ）で対訳をつけた。

⑤ 方言の語りについては、漢字表記が可能な語句については意味がわかりやすいようにできるだけ漢字をあて、話者の発音通りにひらがなでルビをつけた。

⑥ 漢字で表せない物の名前や擬声語、擬態語などはカタカナで表記した。

⑦ 語りの中の会話部分や文脈上、会話と判断される部分で改行し「」を用い、会話のあとは地の文に続けた。

⑧ 歌の部分は改行し、二字下げて記し、後ろに対訳をつけた。

右記の条件に従って文章の整備をしたが、語りの雰囲気によっては、適宜、カタカナを使うなど条件を外れて表記した部分もある。

四 本文について

① 話型名は、調査時のまま用いた。同じ話でモチーフが違う場合は題名の下に（ ）でくりくりモチーフ名を示して掲載した。

② 話の始めに題名・話者名・生年を記し、その下に所属していた行政区を示した。

③ 対訳・共通語翻字において、方言をそのまま用いたほうが良いと判断した場合は方言を用い（ ）内に訳を入れるか、注記にした。

五 注記について

① 人名・地名・民俗語彙についてはできるだけ注記した。なお、文献などを参考にした場合には（ ）で文献名などを記した。

② 難解語句、意味のとりにくい部分については注記で説明するようにした。

六 本文掲載話の順序

① 掲載話の順序は方言で語られているもので語りの良いものを優先して並び、さらに、地理的に北に位置する地域から配列した。

七 イラスト

① 表紙のイラストは金城友美氏・八田夕香氏に描いていただいた。

② 本文中のイラストは長浜益美氏に描いていただいた。

調査にあたり各自治会長、各老人会長の方々に調査への便宜を図っていただきました。記して感謝の意を表します。

目次

こあいさつ 3

凡例 4

目次 6

一 異類婚姻譚

[1] 婚姻・異類婚 9

(1) 蛇婿入り(芋環) 9

(2) 鍋蓋(芋環) 18

(3) 浜下り 19

(4) 字を書くアカマター 30

(5) 蛇婿入り 30

(6) 犬婿入り 32

[2] 婚姻・異類女房 34

(1) 天人女房 34

(2) 浜千鳥女房 50

(3) 猫女房 52

(4) 木魂女房 54

(5) 鶴と犬の育て子 58

二 婚姻

(1) 難題婚・嫁 59

三 誕生

(1) 子育て幽霊 67

(2) 仲順大主 79

四 運命と致富

(1) 炭焼き長者 81

(2) 産神問答 83

(3) 子供の寿命(米寿由来) 84

(4) 親の声は神の声 90

(5) 千年蛇 92

(6) 金持ちと貧乏者 97

(7) 金持ちと神様 98

(8) 猿の赤尻由来 98

(9) 金持ちのあやまち 99

(10) 屋良ムルチ(生けにえ) 101

(11) 誠の上には弓も矢も立たない 108

(12) 夫婦の縁 109

五 運命譚

- (13) 火の神報恩 111
(14) 棺桶は黄金 112

六 呪宝譚

- (1) 水の神の運 113
(2) 水の神の寿命 113
(3) 十五夜由来 114
(4) 扇子の寿命 115

七 兄弟譚

- [1] 仲順大主 129
(1) 嫁の乳 129
(2) 孝行な子供 145
[2] 屋良ムルチ 146
(1) ウナギ 146
(2) イノシシ 168

八 大歳の客

- (3) 兄弟の仲直り 169

九 継子話

- (1) 猿長者 170
(2) 大歳の客 187

- (1) 継子の麦つき 196
(2) 継子の潮汲み 207
(3) 継子の水汲み 207
(4) 継子の麦入り弁当 208
(5) 継子の水汲み・弁当 213
(6) 継子の茶腹飯腹 213
(7) 継子とニガナ 214
(8) 継子と竹の子 217
(9) 継子とカンダ 218
(10) 継子の機織り 219
(11) 継子の井戸掘り 220
(12) 継子の屋根葺き 222
(13) 継子の井戸掘り・屋根葺き 223
(14) 継子と十五夜の餅 224
(15) 継子と火事 224

(16) 継子の通り池……………225

(17) 姉いじめ……………227

(18) 嫁と姑の話……………227

(19) 継子と二十日月……………228

(20) 継子のシートの実取り・麦つき……………230

(21) 継子の二十日月・機織り・鳥と弁当・水汲み……………230

(22) 継子の歌……………232

(23) 継子の腹はれつ……………233

(24) 手なし娘……………233

一〇 動物報恩

(1) 雀報恩……………234

一一 逃竄譚

(1) 鬼餅由来……………235

(2) クスケー由来……………258

(3) 猫を長く飼わないわけ……………269

(4) マスの角……………269

一二 愚かな動物

(1) 猫とカマブタ……………270

(2) 犬とカマブタ……………271

(3) 豚化け美女……………272

一三 巧智譚

[1] 親捨山……………273

[2] 黄金の瓜種……………284

一四 枯骨報恩

(1) 歌い骸骨……………291

一五 その他

(1) 生き返った娘……………292

(2) 宝比べ……………293

(3) 塩が一番……………295

(4) 旅人とウナイ神……………298

(5) 道楽者の田植え……………299

(6) 婆いるか……………300

(7) サギビサーはいけない訳……………301

(8) 白骨になった旅人……………302

(9) キジムナリ……………303

異類婚姻譚

〔一〕 婚媾・異類婚

(一) 蛇媾入り(芋環)

① 蛇媾入り

与那嶺松栄(明治三十七年生) 池原

〔方言原語〕

ちよーどう言いねし、昔えし、今ぬぐとろしユタんでいしがまんぞししえーやー。あんすくどう、くれ、男ぬ家ぬ家かい忍でい行ちゆし見ちよーるうぬムヌシリぬユタの居てーるばーてー。あんさくどう、うりが、『これ、不思議な人やつさー』んでい思やーに、あんさーに、うぬ壁から、壁のみふぎくわーから見じやーに、うりしちやくとろ、『これは不思議だなー』んでい言やーに。あんさー、うりがうりそし、ウーバーラんち、ウー繋じるウーバーラぬあしえーやー。ありが持つちやーに、『くれ、ちやーしん物考しわるないる』んでいやーに。あんさーにうりが、着ちよーる着物ぬ裾んかい、針通さーに。あんさーに家かい出してい行ちよーなたくとろ、ウーウーラぬいっばい芋や着物うりそししえーやー。あんすくどう、うりが、うり引つ張てい行じえーる所までい後追いし行じ見ちやくとろ、ぼら穴んかい入つちはいたんでいよ。うん、あんさーに、うりさつたんどろくろー、やつばし『変

だなあ』んでい思やーにうりさくどう、うりがあとろ見ちやくとろ。うりがなし、うぬ女おまた、うりんかいだまかさつていどううくどう、うりとう妊娠けーさーに。あんさーに、くぬアカマターうりしえーんでいちぬ話ぬあんし伝とーるばーやしがやー。

うりん、まじ芝居やていんうぬふーじやーし話やあたんよーやー。あんししが、親ふじんちやーが、私達祖父母んちやーからん、うぬ話や『あんかんやてーちさ』でいちぬ話やさつてい聞ちよーるばーやしがない。本當、うれ、現在な、ありぬままたるくどうがやらー、また、伝説ぬくどうがやらー、ぬーがやらーうれーな、はつきれーわからのあしが。な、聞ちよーるふのーな、うつさうりしち、話あんな方んかいうりするばーやしが。

うぬ洞窟んじ産さーにうりさくどう、うぬ体清みーるたみなかい浜んかい下りやーに、浜うとーていうりしさーに、しえーんでいちぬ話やあたるばーてー。

〔共通語訳〕

ちよーどと言つてみれば、昔は、今のようユタというのが多いさあね。それで、この話は、男が女の家に忍んで行くのを見ていたその物知りのユタがいたわけさ。それで、この人が、『この(男の)人は不思議な人だなあ』つて思つて、それで、その壁から、壁のふし穴から見つて、『これは不思議だなあ』と言つて。それで、この人が来た時に、芭蕉の糸を入れる竹のカゴ、ウーバーラといつて芭蕉の糸をつないで入れるカゴが

本相語訳 本相語訳とは人間を主人公にした話、ほんどにあつたことは信じられない話で、めでたい結末でおわる話が多い。

異類婚姻譚 昔話では人間以外のものを「異類」という。「異類」の中に天女や鬼なども含まれる。人間と人間以外のものと結婚する話を「異類婚姻」と言い、それはさらに、結婚する相手が男性の場合は「異類結婚」、結婚する相手が女性の場合は「異類女嫁」の語に分けられる。

※1 ユタ 神がかりなどの状態で神靈や死霊など超自然的存在と霊力を得て託宣・交流し、この過程で霊的能力を得て託宣・卜占、病氣治療などをおこなう呪術・宗教的職務で、大部分が女性である。

※2 ムヌシリ 元來は博識を意味したが、一般に不明な事象についてこれと身察し、原因を判断する能力を有する呪術宗教者を指す。

※3 浜んかい 旧暦三月三日に行われる行事。潮に手や足を浸して、悪いものを流して身を清め、健康であるようにとの願いを込める行事である。

あるでしょう。それを持ってきて、「これは、どうしても一針を案じなければいけない」といって。それで、(男が)着ている着物の裾に(芭蕉の糸を通した)針を刺した。それで(男が)家へ行く時になったので、芭蕉の糸はカゴのいっぱい積み上げて(準備)していた。それで、この男が芭蕉の糸を引つ張つて行つた所まで後を追つて行つて見たら洞窟に入つて行つたそうだよ。そう、それで、その男が行つたところは、やっぱり「変だなあ」と思つて後を追つてみたら案の定(洞窟に入つていった)。ところが、その女はまた、その時にはすでに騙されているわけだから、(その男の子ども)身ごもつた。それで、このアカマターの(子ども)を身ごもつたという話が伝わっていたんだがね。

それは、まず、芝居でもそのような話はあつたんだけどどね。そうではあつたが、親や祖父母は、私たちの祖父母からも、その話は「これこれしかじかだつたそうだ」という話をなされているのを聞いたわけだが。本当、これは現在にあつたことなのか、また、伝説としての伝え話なのか、なんなのか、それは、はっきりはわからないことだが、もう、聞いた分の話だけはあなた方に話しているわけだが。

(女が子どもを)この洞窟で産んだので、自分の身を清めるために浜に下りて、浜で清めたという話があつたわけだ。

② 蛇婿入り

幸島マツ(明治四十二年生) 池原

そのお家にきれいな娘さんがいたつて。それで毎晩アカマターがきれいな男になつて立つていたつて。だから、この女をだまかすというてね。(男は)きれいな着物着けて来て(女は)、あとはだまされてね。して、お腹が妊娠していたつて。だからね、

「もー大変。うちの娘はね外に出さないのに、家に置いてあるけど、なんだかお腹が大きくなつていてねー大変よー」というて、モノシリの家んかい行つたらね、「どーあんしえー、いったーや、や、訳ん分からん男ぬ来、あんしだますんでいしえー、うれー何がらやぐとう。ちやーしんアカマターぬ人にやつれて来ど、あんし、うりだまちそーくとう、(それならば、あなたたちはね、得体のしれない男が来て、あのようになますということは、それは何かあるかもしれない。確かにアカマターが人に化けて来て、それで、娘をだましていると思うから)針に糸を長くつけてから、この(男が)来ている場面にね、この娘さんに針をさしておきなさい」と教えて。長い糸を針にぬいて、そして、着物にこんなにさしていったらな、

「これが行くところにずっと追つて行つてみなさい」というたら、

「あーそうですか」と言つて。あんさーに、追てい行じ見ちさくとう(そこで、追つていって見ると)やっぱしね、森のガマ(洞窟)ね、木ぬとつてもみえていゝる山ぬガマの方に入つていって。行く時にアカマター

※アカマター 奄美・沖縄諸島に分布する蛇。人家周辺から耕作地及び山地にかけて、広い範囲に生息している普通種で性格は悪い。主として夜間活動する。赤褐色を基調に黒斑が見られ、美男に化けるといわれている。

になつて入つて行つたつて。『ああ、これはアカマターだ』ということが分かつて、『どーくれーちやぬふーじーすが(さあ、これはどうしたらいいものか)』というど、それは三月三日に浜に下りて行つて、三月三日に浜下りさせたら、そこで流産するわけさな。

だから浜下りというのが今に伝えて、浜下りというのがあるつて。

③ 蛇婿入り

松下キヨ(大正八年生) 池原

〔方言原話〕

アカマターが男に化きてい、女ぬ前んかい女怒でい来たんでいるばーどうやんどー。そしたら、毎夜うり来ちちやぐとどうや、この女はあととは、『この男はめずらしいねえ』でい。女が着物縫う時に、うまんかい清らすがい、清ら男んかい化きてい来くとどう、裁縫の糸は長くつけてよー、この男が帰る時には、うぬ男ぬ着物ぬまーんでいがらーんかいこの針をさしてね、そして、その糸がこうつないでいるさあねえ、ずつとあつちまで。そして翌日はその糸がいつている所に訪ねて行つたら、大きなガマンかいこのアカマターが大さきのがいたらしいつていう話でー。

〔共通語訳〕

アカマターが男に化けて、女の前に女を怒んで来たというんだよ。そしたら、毎夜男が来たので、この女はしまいに、『この男はめずらしいねえ』と思つた。

女が着物縫う時に、そこにきれいな格好して、好男子に化けて来たので裁縫の糸は長くつけて、この男が帰る時には、その男の着物のどこかにこの針をさしてね、そして、その糸がこうつないでいるさあねえ、ずつと遠くまで。そして、翌日、その糸をたどつて行つたら、大きな洞窟にこのアカマターの大きいのがいたらしいという話さ。

④ 浜下り由来(蛇婿入り)

榮野比トヨ(大正六年生) 知花

〔方言原話〕

うぬ男や清らはぬなー化きてい来くとどう、アカマターどうやひが、うぬ女望でい来に、本当ぬ男ねーし化きてい来に。うぬ女いつべーうー生だいかシ作くたい、布織いんでいうんぐとどうーいつべー上手やたんでいよ。

あんざー、うりがはたんかい来、なー、毎日なー、うりが一本当ぬ男なていどう見くとどう、ぐーなてーんばーてー。あんざーに、ちゆけーとうないぬ人ぬウワサぬ『うぬ男や普通ぬ男あらんどー』でい。あんなーにうぬ女じんぶんのーあてーんてー。どうーぬ繫じえーるウーよー針んけーぬちやーに、『うりが後見どうわるない』んち、針んけー抜ちやーに、あんざーにくんち。うぬ男ぬ着物ぬ裾んかいて、知らんふーなーぐわーしかんしけーとうみていやらちやぐとどう。な、うぬウーや、な、何百尋んちあいどうふつさみやー、あぬフアーラぬいっばいやくとどう。いんねー

※1ウー 芭蕉布、糸芭蕉から取った織
織で芭蕉布の原料となる。
※2フアーラ 芭蕉布をつむいで入れる
のに用いる竹で編んだカゴ。ハーラとも
いう。(沖縄語辞典)

な、かんし、うりがーな、うまんかいぬかつとー
 んでー思んくとう、戻てい行いえーるばてー。ガマン
 かい入ちはいし見じやーに、うぬウさどうていど
 かめーたんでい。あんさくとう、どーんちや、うれ、
 本当ぬ人あらんさーんでい、うにーから。な、どう
 や妊娠のさくとう、『なーちやーやてーしむがや、
 やー。な、うれ、本当ぬ人あらんひが私ねーな、う
 んぐとうーし』んでい。あんさーに親がじんぶ
 んぬあてい、うぬ親ぬどうしんかい聞ちえーんば
 てー。聞ちやくとう、

「どーうれー浜ぬ白砂くだみらしーね、けーうらー
 んでいくとう、サングワチャーねー浜んかいそてい
 行じ白砂くだみらし」んでい、あまんじ、
 むるアカマターがソーロない出じとーたんでい、うぬ
 女。

アカマターん子さぎとーたんでいよ。あんさー
 に女必じサングワチャーねー浜下りはんねーならん
 でい、うりから、サングワチャーねー御重しこてい
 女むる浜んけー行ちゆたんでい。クワツチしこ
 やーに。

【共通語訳】

その男は美男子に化けて来たので、アカマターなん
 だけど、その女にほれて来て、本当の男のようにして
 化けて来た。その女は一生懸命に芭蕉の糸をつむいだ
 り、縦糸を作ったり、布を織るための作業がとても上
 手であつたそうだ。

そこで、その女の所に来て、もう、毎日もう（来る
 ので）、女には本当の男になって見えたので恋仲になつ
 た。すると、隣近所の人のウワサで「この男は普通の
 男ではない」と（言っていたそうだ）。そこでその女
 は知恵があつたんだろねえ。自分の紡いだ芭蕉糸を針
 に通して、『男の後をつけてみよう』と、針に通して
 そして結んだ。その男の着物の裾にね、知らんふりし
 てこう針を刺して行かせたようだ。ね、その芭蕉の糸
 は、もう、何百尋というくらい長く繋いであるさあね
 え、あのカゴ一杯だから。案の定、こう、男は針が
 着物に刺さっているとは知らないで戻って行つたよ
 うだ。洞窟に入っていくのを見て、その芭蕉の糸をた
 どつて探すことができたそうだ。すると、『なるほど、
 これは、本当の人間ではないね』とその時から（思つ
 たらしいが）。だけど、自分は妊娠していたので、『も
 う、どうしたらいいのかねえ。ね、この人は、本当の
 人間ではないが、私はこんなふうになってしまつて』
 と悩んでいた。だけど親は知恵があつて、親の友達に
 聞いたようだね。聞いたら、

「ねえ、これは浜の白砂を踏むと下りてしまふとい
 うから、三月三日には浜に連れて行って白砂を踏ませな
 さい」といわれたので、（言われた通りにする）
 浜で、アカマターがサツと出たそうだ、その女から、
 アカマターの子を妊娠していたそうだ。それで女は
 必ず三月三日には浜下りしないとイケないと、その時
 から三月三日には御重をこしらえて、女は皆浜に行つ
 たそうだ。ご馳走をこしらえて。

「ねえ、これは浜の白砂を踏むと下りてしまふとい
 うから、三月三日には浜に連れて行って白砂を踏ませな
 さい」といわれたので、（言われた通りにする）
 浜で、アカマターがサツと出たそうだ、その女から、
 アカマターの子を妊娠していたそうだ。それで女は
 必ず三月三日には浜下りしないとイケないと、その時
 から三月三日には御重をこしらえて、女は皆浜に行つ
 たそうだ。ご馳走をこしらえて。



※サングワチャー 旧暦三月三日の節句をサングワチャーと称して、女の子のいる家ではこの日にご馳走を作って浜に行き、一日中浜で遊ぶ。

⑤ アカマター

鳥袋トメ (大正二年生) 松本

若い時、必ずしつこする時はね、そのしつこする所に三回は唾はやつてからおしつこしなさいって。そのアカマターが化けてきて、ほんで女になったり、男になったりする場合は、まあ女の方であつたら必ず男がね、また、男の場合は女が来るさーね。

そんでこれはその女は毎日、毎日男が化けて来るさーね、そのしつこの所に。そんで、もう親が、「なんで自分の娘はこんなにも夜中は出て行くけんと思議だわね」言うて。ほんで、これ不思議だから言うて、何時も小便しには行くけん、もう居ないさーね、化けていつてしまっているんだから。その男に化けられて行っているさーね。んで、後はその、しつこする所に針を糸抜いてさ、針をさしてそれから(たどつてみると、そのアカマター所に糸行っていたらしい。それで、女はしつこする時はね、必ず三回は唾をかけたからしつこやりなさいってよ、これ。だから「小便しーねー、唾や三回しかからる小便すんど(しつこするときには、ツバを三回はいてからしつこしなさいねえ)」。こんなあつたからと言ゆて、その意味だったわけ。

⑥ 蛇婿入り

内間シモ (明治四十四年生) 城前

あるさ、とつてもいい女がいたつて。してね、この人はもう愛する男いたらしい。アカマターが(男に)

化けてさ、この女に忍びに来ているわけさ。(女は)普通の人と思つてよ、二人愛していてもう妊娠しているつて。男が来てから、

「いやーがや持つちゆる子や、や、アカマター(あなた)が身ごもつている子どもはアカマターだよ。これ普通の人間でないよ、アカマターだよ。あなたは、普通の人間には愛されていないよ」と言うたつて。

「そんなことがあるか。普通の人だよ立派な男、あの人人間である。アカマターではない」と言つたつて。

「あんちねー、あなたが納得しなかつたら、この男が忍びに来たらや、男の着物の裾にウーを針に抜いてからさして、(この糸)をたぐつていつてごらん。うちが言うのを嘘と思つているなら行きなさい」。ある日ね、あの人と言う通りさやつたつて。どこに行くか忍んで行つたらや、どこに行くのかと思つたら、この男はよ、山奥の岩の下に行つたつて。したらよ、「やっばしー、アカマターが人間に化けていたんだねえ」と言つてよ。この女はこれから納得してよ。して、ある人が、

「あなたの持ちよる子や、や、すぐ三月三日にや、浜下りしーねーや、全部下りていや、(あなたの身ごもつてる子はね、三月三日にね浜下りしたらね、全部下りてね)もう、流産してよあれするから、あなた後見してみようねー」と言うたらよ。女は、すぐ三月三日にさ行つたらよ、もう、ものすこしい子アカマターの子どもが生まれよ、海に流してから。

だからこの三月三日の由来は、女がさ厄払し。も、

※三月三日 浜下りと呼ぶ行事が浜辺の村周辺で行われる日。海で貝などを拾い一日遊ぶ。

昔のようにまたアカマターにだまされてすだち、三月三日に下りたらや流すという由來この意味であるよ。三月三日なつたら、女の子は必ず三月三日は、女の節句でしよう。沖繩人、重箱こしらえてするでしよう。この意味らしいよ。うん。必じ三月三日や、潮、浜んかい必じ下りが行ちゆい、また、朝一に行きなさいという、あれて。

⑦ 蛇婿入り

屋宜ハル(大正三年生) 安慶田

「方言原話」

けー隣なかいいつべー清ら女ぬうたんでい。これがよ、むるアカマターが男んかい化きやーに、うぬ女うすてーういし、てー、な。夜ぬかーじ出じていんじ。あんし、うぬ女おわからんしえーや。あんさーなかいな、いつべーな、うぬ男な、清らくなてい出じてい来たんでい。あんさーに、うぬ女な、いつべーな、うぬ男望でいありし、いつべー遊どーたんでい。あんさーに、今度お隣ぬおばあちゃんがアカマターんち見ゆてーるばーて、側から。うぬおばあちゃんがよ、

「いえ、いやーや、いったーかい毎日男ぬ来しえーあれー人あらんどー。アカマターるやんどー」でいちやん聞かん、うぬ女お、
「全然人どうやる」んち聞かん。
「あんすら、いやー、や、な、私が言しん聞かん。あんしゆくしんでい思いら、私が」。昔えーうちな

じゆし芭蕉作く、いんでいウーバーラ。
「うぬ男ぬ来ね、うぬ糸うぬ男ぬまーんかいやていんくんじやーに、ひかちやらしよ」でいち習ちえーたくと、んちや、来くと、うぬ、おばあちゃんが言んねーしウーまーんかいくんじやーにやらちやくと、翌日よ、うぬウーさとうやーに行じやれーガマンかいうぬウー入ちよーたんでい。見ちやれ、あぬ人が、うぬ女アカマターなてい、うんにんねーそーそーたんでい。あんさーに、
「ど、いやー、あんしや、な、アカマターとう寝んとーくとうかさぎとーん」でいやーに、
「ど、いやーや、浜んかい行じ砂くだみらんあいねーしぐ下りらんどー」でいちやれ。三月三日に由來記があしえーや。あんし浜んかい、女お行じ、あんしえーうり下るちえーんでいしえー聞ちやん。かさぎとーんち分かるすたのーあらに。隣ぬおばあちゃんが言ちやれ、浜んかい行じ砂くだみたしえー下りとーたんでいちぬ話やん。

うぬ後からよー三月三日ね、女ぬちやーびかーんてー砂くだみーがんち昔え行ちゆたしが、今、こんなことないさあ。

「共通語訳」

(おばあさんの住んでいる) 隣にたいそうきれいな女がいたそう。これがね、アカマターが男に化けて、その女を襲ったりしていたそう。夜ごとに出て来て。だけど、その女は(そういうことは) 知らない

※1芭蕉 バシヨウ科の多年生草本。
※2ウーバーラ イトバシヨウの繻襪
(糸)を紡いだ糸を入れる竹製の丸カゴ。

さあねえ。それも、たいそう、その男はもうハンサムになつて出て来たそうさ。それで、その女はもう、たいそうその男にほれ込んでしまい、いつも遊んでいたそうさ。すると、今度は隣のおばあちゃんには(その男が)アカマターに見えていたんだらうねえ、側から、そのおばあちゃんがよ、

「ねえ、あなたは、あなたたちに毎日男が来ているのはあれは人間ではないよ。アカマターだよ」といって、も、聞く耳を持たない、その女は、

「疑いなく人間である」と忠告を聞かなかつた。

「それなら、あなたはね私が言うのを聞かない。あなたがウソだと思ふなら、私が(言うように)してごらん」。昔は芭蕉の糸をつむいで芭蕉を織るための(糸を入れる)ウーバーラというものがあつた。

「その男が来たら、その糸をその男の何処でもいいから結んで、引いて行かせなさい」といって教えていたので、なるほど、いつものように来たので、そのおばあちゃんが言ったように芭蕉(の糸を)あるところに結んで行かせた。翌日、その糸をたどつて行つたら洞窟にその芭蕉が入つていたそうさ。見ると、あの人が、その女(が見たら)アカマターになつて、その時になつておばあちゃんがいつていたことが本当だとわかつたそうさ。そして、

「ねえ、あなた、あのようにも、アカマターと寝たので妊娠している」といって、

「さあ、あなたは浜に行つて砂を踏まないと下りないよ」といふた。三月三日の由来記があるさあねえ。そ

して、浜に女は行つて、アカマターの子どもを下ろしたということ聞いた。妊娠していると分つていたんでしようねえ。隣のおばあちゃんに教えられて、浜に行つて砂を踏んだら下りていたという話であつた。

その後からね三月三日には、女の人たちだけ砂踏みといつて昔は行つていたが、今、こんなことないさあ。

⑧ 蛇婿入り(帽子)

上江洲マカト(明治三十八年生) 比羅根

「方言原語」

清ら女ぬ布織たぐと、うぬアカマターや男なやりに、帽子ん立派かんでい、いっぺり清ら男なやりに、毎日な、布織いとくるな、おしやべりしえーるばーて。あんさくとう、「不思議やつさー」んでい。いやりに、うぬ女(うれ、不思議やつさー)でいやりに。毎日通とーしえーや。あと、針んかい。かんし、くんなげーウーちなじょーしえーや。芭蕉ウー。ウーちなじやぐと、うり、「ひるましーむんていやりに、うりんかい針みーぬちやりに、うりが頭んかいけーたつちやぐと、石垣ぬガマンかいはいたんかい。あんさくとう、うぬウーぬちへーとーしえー使てーならんでい。うりさーに、とらめーとーんでい。くぬ額んかい、かんし針やぬちやりに、額んかいかんし立ていたぐと、ガマンかい入つちはいし、うりさーにとらめーとーるばーて。あんさくとうアカマターやたん



でい。

うぬ話や、わったーウンメーやしみしえーたしえー。
えーりんかさぎとてんでてー。三月三日えー浜んかい
行ちゆしえーや、海くじしーが。あんさぎとて、浜
くだみていちやーに家ていさぎとて、ターレーぬみー
産しんちえーたんでい、アカマターばかり。あんさぎ
とて、「かさぎん人浜んかい砂くだみていくー」んでい
言んどー今やていん。

三月三日えー石煎じてい飲でいん葉んでい。ぬーん
うらんあいねー、石ぐわー取ちやめーていちやー、う
り煎じてい飲でいん、かさぎん人葉やんでい。

あんさぎに、うり、煎じてい飲でいぐとて、ターレー
ぬみー産しんちえーるばてー。

〔共通語訳〕

きれいな女が布を織っているところへ、そのアカマ
ターは男になって、帽子もちゃんとかぶって、たいそ
うきれいな男になって毎日布織っている所でおしゃべ
りしていたわけさ。すると、女は『不思議だなあ』と
思つて。毎日通つて来るでしょう。しまいは、針に
(芭蕉の糸を通した)。ちよつと前まで芭蕉で糸を作つ
ていたでしょう。芭蕉で作つた糸をつないで、それ(い
つも来る男を)『珍しいことだ』と思つて、その訪ね
てくる男に針に糸を通して、男の頭に突き刺したら、
石で積み上げられたガマに行つたそつだ。

そんなことから、芭蕉の糸引つ張られてたのは使つ
てはいけないといわれ、その芭蕉の糸は切つて、全部

投げすてた。芭蕉の糸をたどり、捜しあてたそつだ。
この顔に、こうして針をさして、顔にこう刺したら、
ガマに入つていくのを、その糸をたどつていつて探し
あてることができた。そうしたらアカマターであつた
そつだ。

この話を、わたしたちのウンメーは話されてました
よ。

たぶん、妊娠していたんだね。三月三日は浜に行く
でしょう、海の幸を探し求めに。だから、浜の砂を踏
んできて家に歸つたら、タライのいづばい子どもを産
んでいたそつだ、アカマターだけ。それで、「妊娠し
ている人は浜に行つて砂を踏んできなさい」というん
だよ、今でも。

三月三日は石を煎じて飲んでも、葉になるそつだ。
なにも捕ることができなければ、石を取つて来て、そ
れを煎じて飲んでも、妊娠している人には葉になるそ
つだ。

だから、それを煎じて飲んだから、タライのいづば
い産んだわけさ。

⑤ 蛇婿入り

宮城タケ(明治四十年生)と傳

〔方言原話〕

アカマターが男に化けて来て、隣のおじいさんおば
あさんに話したらね、

「来しが顔むる分からん」。

昔は糸紡ぎあつたさあ、ウーちなじ作くぬ着物て、う

りなかい、

「針んかい糸通ち、あんし、うりんかいちつ立ていやーなかい、うりが行くま通てい行き」でいちゃぐとう、ガマンかい入やーまアカマターなとーるばー。

うりから、ニシエヌスー心配ざーな話さくとう、

「ど、あんすら、三月三日に海ぬ浜踏みーね下りすぐとう」でいちゃぐとう、ホロホロ下りちえーたんでいぬ話やるばー。

あんざーに、うにんから、女三月三日や浜んかい下りてい砂くなーすんでい。

〔共通語訳〕

アカマターが男に化けて来て、隣のおじいさんおばあさんに（そのことを）話したらね、

「（男の人が）来るが顔がまったくわからない。」

昔は糸紡いでいたさあ、芭蕉を紡いで作る着物ね、それに、

「針に糸を通して、そして、その人に突き刺して、その人が行く後を追ってごらん」といわれたので、（その通りにすると）ガマに入ってアカマターになつていたさうだ。それで心配になりニシエヌスーに話すると、

「ねえ、それなら、三月三日に海ぬ浜の砂を踏むと下りるから」といったので（その通りにすると）、ホロホロ（アカマターの子どもが）下りたという話であつた。

それで、その時から、女は三月三日には浜に下りて

砂を踏むんだと。

◎ 蛇婿入り（赤てぬぐい）

高良カマ（明治二十四年志 登川

〔方言原語〕

「うぬ地んかい置ちーねーアカマターぬ七回しりーねーて、人騙かすくとう、うぬ鍋ぬ蓋あ木んかい下ざりよー」んでい。木んかい下ぎてーるばーてー。

あんそーしがてー、女めてーアカマターんかい騙はつてい、赤ティサージぐわーかんでー来れし。けー隣ぬ人ぬ見ち、

「えー、いったんかい来しえーいやーがー男んでいる思んなー」んちやくとう、

「いー、男るやる。ぬー私若者どうやていん男るやは」んちやくとう、

「うれー人あらんどー」でい、

「ぬーがいやー、あんし分かい」んちやくとう、

「どー、いやーや、やー、うつさウー生でーくとう、うりが来るばーや針ぬ耳ぬちやーに、うりが頭んかいちー立ていていやらしよ。あんしーるんしえー、うぬ針ぬ耳ぬかつとーし、すくまーんかい行じよーんちさとうらりーくとう。」

ウーパーラぬみー、ウー生んでーしむるアカマターぬガマンかいすんち行じえーたり。

「どー、とーさとうていんーでー」でいちゃぐとう。あんしえーくとう、さとうていんじえーくとう、ん

ちや、アカマター。

「私ねーシジャかざらちヌーしヌー」でい言ちやぐとって、

「えー、シジャーゆーむのー知つち、なんくるけー下るすんよー」んでい。

「あい、ちやーし下るすが」でい。

「三月三日ぬ海ぬ砂くらみーねー、サラサラけー下りーん」でい言たんでい。

あんさくとう、うり聞ちやー、うぬかさぎやーやー。

三月三日なたくとう、んちや、海んかい行ちやくとう、クワーラないけー産ちヌーたりんり。あんしめ話聞ちやん。

〔共通語訳〕

「その鍋蓋はね、地面に置くとアカカタターが七回ふ化すると、人をだますので、その鍋の蓋は木に下げなさいね」と(言われていたので)木に下げていたわけ。そうしていたんだが、女の人がねアカカタターにだまされてね、(アカカタターが)赤いてぬぐいをかぶって通ってきた。それを隣の人が見て、

「ねえ、あなた方に来る人はあなたは男だと思ってるのか」と聞くと、

「はい男ですよ。私の恋人なので男だよ」と答えた。

「それは人間ではないよ」と言うとうと、

「どうしてあなたにそんなことが分かるのか」と聞くとうと、

「ねえ、あなたはね、たくさんの芭蕉を紡いであるから、その人が来た時には針に糸を通して、その人の頭

に突き刺して行かせなさいね。そうしたら、刺した針がどこまでつないでいるかたどって行けるから」と言った。

芭蕉の糸をつむいで入れてあるカゴのいっばいの糸が、アカカタターのガマの中へ続いていたそうだと。

「さあ、その糸をたどってごらん」と言われたので、たどって行ってみると、なるほど、アカカタターであった。(すると、中から、)

「私は人間を妊娠させたよ」とアカカタターが言うとうと、

「そんな事言っても、人間は物知りだから、いつのまにか下ろしてしまうだろうよ」と言った。

「どのようにして下ろすのか」と問い返した。

「三月三日に海の砂を踏むと、サラサラと下りるだろうよ」と言っていたそうだと。すると、そこで、そのやり取りを聞いていた妊婦は、三月三日になったので(その話の通りに)海へ行ってみたら、たくさん(アカカタターの子を)産んでいたそうだと。そんな話を聞いた。

(2) 鍋蓋(華環)

① 蛇婿入り

鳥袋ウシ(明治四十二年志) 池原

〔方言原話〕

鍋ぬ蓋うぬ地んけーうちよーきーねー、やつぱしうまんじしりーねー、うぬアカカタターが人んけー化きやーに來んり言るばーてー。うじやさーんちやーが、「あー、うれー人あらん、いかなしん人あらんどー」



んでい言ち。あんし、し、さぐと、女の一人人んでい
ち考とーん。

「人あらんどー」でいいちさくとう、

「どーいヤー人んでい思いるむんやいねし、うりが
着物ぬ袖ぐわーんけーていばにしえーるウーくん
じやーに、うぬ足ぐわーくんじやーに、うりがウーパ
ーラんけーよー、うぬまうぬ糸ちながし」んり。か
きにじゅーんぐらまちよーたんでい、うぬ、ウーや。
あんさくとう、さとうてい行じやくとう、アカマター
なとーたんでいぬ話。

あんさーにうれ、三月三日に海んけー連てい行
じ、海ぬ砂くらみらち、うまうとーていうぬアカマター
や、な、あんしみてーんりひが。ターレーぬみちかん
産ちえーんりぬ話るやたる。

〔共通語訳〕

綱の蓋をその地面に置いていたら、やつぱりそこで
すでたら、そのアカマターが人に化けて来るといわ
けさ。おじさんたちが、

「これは人ではない。絶対に人ではないよ」といつて
いるが、女の人は、本当の人だと思つていたんだね。

「人間ではないよ」といつて、

「それなら、お前が人だと思ふなら、そいつの着物の
袖に芭蕉糸を結んで、手でしごいた芭蕉の糸を結ん
で、アカマターにつないで、それとウーパーラに入っ
ている分の糸をそのまま引つ張らせなさい」と。その
糸はけつこうな長さの糸が引つ張られていたようだそ

のウーは。それで、その糸をたどつてみたら、アカマ
ターになつてたそうだという話。

それで、だまされている女の人を三月三日に海に連
れて行つて、海の砂を踏まして、そこでそのアカマター
の子どもを下ろしたというが。タライのいつぱい産ん
であつたという話であつた。

(3) 浜下り

① 蛇婿入り

仲宗根カメ(明治四十二年生)登川

畑に女が芋掘りに行つたそうだね。だから、そのア
カマターが人に化けてね、非常にきれいな人に化け
て、で、それとにんぐる(恋仲になり)して、妊娠し
てしまったから、も、これ大變。知らない男と妊娠し
てしまったとびっくりしてね。

もう心なぐさめに、浜に行つてね、浜砂にすわつて
海眺めたからね、その自分のおなかに入っているアカ
マターがジョロジョロ出てしまつて。

だから、これからね、昔伝え言葉になつてね、「女
は三月三日には海に浜下りしに行きなさい」との伝説
と言われてましたよ。三月三日は海に出て行つてね。
したから、アカマターがもう出てしまつていたつて。

② 蛇婿入り

平田シゲ（明治三十五年生）登川

〔方言原話〕

カマンタよ鍋ぬ蓋。大きい鍋が芋炊く鍋があるさあね。昔や竹しやくやーなかい編まつとーへーやるばーて。鍋ぬ蓋んでいあたんばー、カマンタんでいぬばー、くまぬ。

鍋ぬ蓋かんし置きーねーと、破りどーんでい、いやーい、うりが下に育ちゆるアカマターよ、人間がムヌかむる、ムヌヌシーンでいがらうきていて、人間だまかすんでい聞かーりたつたさー。あんなさーに「鍋ぬ蓋はんなきねー、どうーな一下ぎてい置きよー」でい昔ん人ぬ話あんどーい言らりーたん。

昔え蓋混んじゅやーに編まーにて、かんしーかんしー竹混じてい、むる作くてい鍋どうあていやーに、カマンタに鍋ぬ蓋作くいたるばー。その下に育ちゆるアカマターがどう女だまかすんでいがら。あんなさーに、そのアカマターが、よ、人んけー化きていて、女どうだまかする、や。あんし、かさぎてーぎさくどうよ、側ぬ年寄が見だつていんでいがら、

「いやーやかさぎとーんでい、人んでいだまはつとーひがやー、芋掘いが行じどー、いやーが出じとーるクエーバーキン持ちよーひがや、アカマターが人んか化きていだまかはらーに、いやーうすらつとーん。三月ないねー海ぬ浜んじよ、海ぬ砂くだみーねーや、うぬ子や、いやーが持ちよーしえーアカマターがなん

くるけーうりーくどう、あんし、しーよー」んでい、ちあるムヌシリおばーがやてーらあん言ららーに、

「あい、え、あんやいびーんなん」でいやーに。あんし、うんにーぬよー、三月や浜下りていちて、海ぬ浜んじ、あんしやんでい話しみしえーたん。メーングワぬおじーちゃん言らりーたるばー。

「女とー、カマンタぬわつさくどうんでい、まーにんくいーにんはじし、はん投ぎとーるしーねー、うぬカマンタぬ下んじ、アカマターがしていたいしうまんじ育ちーねー、うりが化きやーに、ムヌヌシうきていて。男やれー女だまかち、女やれー男だまかすん」でいがら。あんなさー、うぬ女はるけーんでい家から出じれー、ンージュンかいくまどーていよ、清らかーぎーなていうりやーに、よ、うりんけーがんまりさつてい、うりがーわからんでい、うぬ女ぬのー。あんし、かさぎてーさくどう、ある遠くぬ人ぬおばーがやらー

な、ムヌシリが妊娠そーしわかららーに、

「いやーや、あるどうくまんじンジュンかい隠きとーてい、いやーがはるかい行ちゆしだまちよーるアカマターんでいがら、いやーだまちよーくどうて、三月ぬ日ないねーや、海ぬ浜んじ砂くなし、よ。うぬ持ちよぬうれー、下りーくどう」でいやーに。あんし習さらーに、あんやたんでい。

あんし、うんにーからどうや、三月やクワツチー作くてい、女アシピンでい、三月アシビえー、浜んじ遊ばんでい歌があひがよ。「三月アシビやくり着ちあしばな」んでいいきばアシピンでー歌ああいやす

※1カマンタ 芋、蕪などで編んで作つた大きな鍋の蓋。一般にカマンタ（チビフタ）（シント）と二つの系統の呼び名がある。

※2ムヌシリ 元來は博識を意味したが、一般に不明な事象についてこれを知り、原因を判断する能力を有する呪術宗教者を称する。

たひが、浜下りさーに皆、わざととう海ぬ浜んじ砂く
だみーね!

今つちえーなり、その前によアカマターにえーだ
まかはらんしがて、昔えあてーるはじどー。私ねー
聞ちやる覚あひん。

〔共通語訳〕

カマンタね鍋の蓋。大きい鍋が芋炊く鍋があるさあ
ね。昔、竹で作られ編まれたものであるわけ。鍋の蓋
があつたわけ、カマンタといつていた、ここでは。

鍋の蓋をこう伏せて置くとね、破れているからと
いつて、その下で育つアカマターはね、人間の食べ物、
食べ物の精を受けてね、人間をだますと聞いていた
よ。それで、「鍋の蓋は使い終わると、私たちに下げ
ておきなさいと、昔の人はそういう話をしていたよ」
と言つていた。

昔は薬を混ぜて編んでね、こんなこんな風にして竹
を混ぜて、みんな鍋と当ててね、カマンタという鍋の
蓋作つていたわけ。その下で育つアカマターがね、人間
をだますらしいと。そして、そのアカマターがね、人間
に化けて女をだましているわけね。そして、妊娠した
らしく、側の年寄りが見えて、

「あなたは妊娠しているが、人だとだまされているが
ね、芋を掘りに行ってね、あなたが出かける時に鎌や
ザルを持っているがね、アカマターが人に化けてだま
されて、あなたは手ごめにされた。三月になったら海
の浜でね、海の砂を踏むとね、その子どもは、あなた

のお腹の子どもアカマターが自然に下りるから、そう
しなさいね」と言つて、ある物知りのおばあさんだつ
たか、そう教えてくれたので、

「え、そうなんですか」と(その時に)わかつた。それで、
その時の三月は浜下りといつてね、海の浜で、砂を踏
むと話をされてましたよ。メーングワのおじいさん
が話していたんですよ。

「女はね、カマンタが古くなっているからといつて、
どこかどこに何も考えないで放り投げたりしたら、そ
のカマンタの下で、アカマターがすでたりしてそこで
育つと、アカマターが化けて、食べ物の精を受けてね。
男なら女をだまして、女なら男をだます」とか。それ
で、その女は畑へ家から出ると、みぞにかくまつてい
て、きれいになつて現われてね、アカマターにだまされ
れるが、それに気づかないさうだ、その女は。そして、
妊娠したらしく、ある遠くの人でおばあさんだつたか
ねえ、ムヌシリが、女が妊娠しているのを知つて、

「あなたは、ある所のみぞに隠れていて、あなたが畑
へ行くのを見計らつてだましたタアカマターが、あな
たをだましているからね、三月の日になるとね、海の
浜で砂踏みなさいね。あなたが身ごもつている子ども
は下りるから」と言われた。そうやって教えられたの
で、その通りにしたさうだ。

それで、その時からね、三月になるとご馳走を作つ
て、女のアソビといつて、三月アソビは浜で遊ぶほうと
いう歌があるがね。「三月アソビはこの着物を着て来
しもう」というアソビの歌もあつたが、浜下りして皆

わざと海の浜で砂を踏んだよ。

今となつては、その前にアカマターにだまされることはないがね、昔はあつたはずだよ。私は聞いた覚えがあるもの。

③ 蛇婿入り

島袋次郎(明治三十四年生) 知花

〔方言原語〕

アカマターぬどうくよ、

「私ねーひや、人間なかい子持たちえーしえー、持たちえーしえー」んちゃぐどう、うりさぐどうてー、

「いやーが人間なかい持たちえーたんでーや、三月にフーチパー汁わかちや、うちゆかてい、海ぬ砂くだみーねーや、むるちんうるするむんや、いやーが自慢ないんな」でい、うりアカマターぬ言し側ぬ人ぬ聞ちよー。あんしる、んちゃ、海んかい下りてい行ちやーにや。あり、三月ぬ浜下りえー、うぬうり下りするたみやたんでい、女ぬたみ。ちん下りちえーたんでい、むる。

アカマターぬ話しどうや、あれー三月ぬ海んかい行ちゆんでい。

昔ぬカマンタむる下ぎーたんよ。ありから地んかい置ちーねーや、うぬカマンタぬ下んじ、アカマターぬクーガなしーねーや、うりが下うていしーるアカマターや、やー、ムンぬシークわやーによ、あんし人だますしが出じーたんでい。あんしる、カマンターむる下ぎーたんどー。「地んかい置くな、下ぎりよー」

でい。うれー、うぬ意味やんでい。

〔共通語訳〕

アカマターがしきりにね、

「私は、人間に子どもを宿してきたよ、宿してきたよ」といつて、自慢していたら、

「お前が人間に子どもを宿したといつてもね、三月にヨモギのお汁をたいて、食べて、海の砂踏んだらね、みんな下りてしまうのでね、お前は自慢できないよ」と、そのことをアカマターの話しているのを側の人が見ていた。それで、ねえ海に下りに行くさあねえ。三月の浜下りは、それを下ろすためだったって、女のため。下ろしていたそう、みんな。

アカマターの話からね、みんな三月は海に行くそう

だ。
昔のカマンタはみんな下げていたよ。それを地面に置くとね、そのカマンタの下で、アカマターが卵を産むとね、その下で孵化するアカマターはね、食べ物の精を食べて、そして人をだますのが出たそう。それで、カマンターは全部下げてたんだよ。「地面に置くな、下げなさい」と。それは、そういう意味からだそう。

④ 蛇婿入り

玉城カメ(大正十年生) 美里

毎晩ねえ、若いきれいな男の人が、女ぬ前かい夜ばいに来るわけ。だから、こつちの娘さんはこの男の人

※1カマンタ 芋、蕪などで巻んで作つた大きな餅の巻。一般に(カマンタ)子ビスケット(シント)と二つの系統の呼び名がある。

に惚れてい(惚れて)。も、この人なしでは生きられないっていうくらいに好きになってしまつて。そして付き合うわけ、男女交際するわけ。そしたら、妊娠してしまつてね、そして親やどー、

「ぬーが私たーわらばーや、男んうらなーそーてい妊娠したがやー(どうして私たちの子どもは、付き合っている者もいないのに妊娠しているのかねえ)」と親は不思議がつているわけ。そうしたらねー、もー、仕方がなくて、産み月になつて生まれたのがアカマター。アオダイシヨーさー、アオダイシヨー。

生まれたのがアオダイシヨー。びつくりしてしまつてねえ、海に連れて行つて流したわけ。それで、も、きれいな体にして。厄払いの意味。それから三月三日は浜下り。

⑤ 蛇婿入り

米原ヒデ(大正元年生) 照屋

昔はさ、三月三日浜に下りないとね、アカマターといつてさへビ、これにだまされるつて。このアカマターがとつてもきれいな男に化けよつたつて。だまされた人もいるわけさあ、昔は。そしてから、うんとねチュラカーギーであつたわけさ。これも昔の話だよ。うちらのおじいさん、おばあさんの話。

このアカマターだがさ、とつてもきれいな男になりよつたつて。なつてからさ、ある女がね、きれいな男だから、これが言うこと聞いてだまされたわけさ。そしてたらね、だまされて、これ、おっかけて行つたら、

石の穴に入りよつたつて。連れて行かれてから、「あーはー、これ人あらん。アカマター私んだまちえーるしじやさやー(ああ、これは人間ではないなあ。アカマターが私をだましているつもりなんだねえ)」といつて、これから、女は三月三日は必ず、海の浜に行つて砂踏んでこないとダメといつてさ、三月三日は必ず海に行きよつたわけ。昔はどー。

そうしてね、今度よ「あんたは妊娠しているから、何月何日は浜に下りなさいね」といつたわけさ。

「あんたはね、これは本当のあれじやないから、月になつたら、おなかが痛くなつたら浜に下りなさいよ」といつて、下り行つたから、もう、こんな大きなカゴのいっばいグワツサ、グワツサしてアカマターの子が出ていたつて。だから、

「三月三日は必ず浜の砂くだみて(踏んで) こないとならんよ」とつて、必ず行きよつたわけ。

⑥ 蛇婿入り

島袋義堅(大正三年生) 古藤

「方言原話」

昔、離島らしいが、どこの離島かはつきりわからんですがね、宮古、八重山どうやさに。あんまりわからんですがね。

野原ですな、ハルバタ、ハルバタヤーに親子ですな、お母さんと娘、親子ねそこに住んでいたらしい。あんさーに、ある晩に、大雨降やーに、そーる中ばに、とちふさくこん遅くよ男らしい声が聞こえたらしい。

「何がやーくれー、雨ん降いしが、人ぬあんしあびーどうやー」んでいぢ、親子黙てい聞ちよーたぐと、ちよつとした後で、

「チャーピラサイ」でいちぢやぐと、
「あ、人ぬ来ん」でいぢ、それから、

「雨宿りしてみていとうらし」んでいぢあんさぐと、

「あい、んでいとーさ、やー」着替えもさせて休ませたそうだと、うりから話んでいきやーに親子三人、好

男子やしえーやー、あんさーに、話んでいきやーに、

夜遅なたぐと、泊まいるくとうなどーるばー。あんさーに親子やぐと、うりさぐと。ちやーりうぬ

女どう男とーな、お互いに好きじやなかつたか。うぬ

ぬ晩のーちやんぬふーじがやらーわからんしが、毎晩、ゆぬ時間、ゆぬ時間また帰ていはち。あんしそ

るなかに、女のーうむつさそーるばーて、好男子やぐと

どう。親また、水知らぬ男やぐと、うれー不思議「んでい思てい。あんしんな、当たり前ぬ人間

んちどう見ちよーぐと、あんまり気ぬーさん、思いしえー思むいしが、ねんじゆわい、しわーし問題なてい

さくとう。

うりから、年ん明きてい、三月前ないね、あぬ、あ

いしえーやー。ちよーどうお母さんが初夢見ちやぐと

どう。初夢えちやーし見ちやぐと、
「三月三日、ご馳走作てい、親子浜辺んかい行じ、浜ぬ白砂踏だみてい、し、浜下りしーるんしえーお産ぬん満足すんどー」でいぢ、あんし、夢見ちさく

とうよ、「不思議やつさーやー」んちそーいるばーに、女ん子ん、

「えー、私んねーお母さん、あんし、夢見ちやんどー、
「えー、あんやみ」。

なうんにーから親のなう勘取とーるばーて。『あたためぬ人間のーあらん』でい。あんし

さぐと、今度お、待ちかんでいし、よー三月、
「な、あんしえーうんにーに、うりさーに、浜んかい行じうりさ、やー」んち。

「あんしえーお産ぬん満足し」でい待ちかんでいし。な、明日三月からん、今日ご馳走ん作てい待ち。

明日いよいよ、うりん、行ちゆるばーすに。

うぬ前によ、女ぬ親ぬどうく不思議思むやーに。毎日あぬ、昔ぬ芭蕉ウーよ、あぬ着物作くいし、あり

繋なじやーに、女お布織いしこーいしえー。ありんかい、うりさーに、なう満ちやかーそーいぬばーに、

うり前にど、三月前にど。『不思議』思むやーに、針結ばーに、肩んかいんでいがらや、着物んかい

がら、突刺さに。忍でいんじ行じやーま、ち刺さぐと、ソールないし出じていいたんでい。人ぬ歩

ちよーいやあらんよーい、な、歩ちよとーちがいしえーやー。ソールないし、出じていはちやぐと、

『とーまた、くれー不思議』でいやーに、うりし後から、女ぬ親追ていはいてい行じやぐと、やつぱし、

浜んかい行じ。『あ、あまやさやー』でいぢ。な、女のー、うにーから、な、じこーお産すしな心労

やしえーや。当たり前ぬ人間のあらんしえー。あんし

な、心配そーるばーに、三月三日明日やんどーい
 にから一クワツチーしこーてい。うぬ日や、な、いよ
 いよ、本人のうむさそーん、や、好男子やしえー
 や。

あんし、し、しこーやーに行じ、いよいよ、白浜ん
 かい行じさどとう、あぬ、うぬハブんでいしえー死
 じよーとうくまーほら穴なてい、うぬほら穴んじ死
 じやくとう、「なるほど」んでいいやーに、親な、
 うぬゴーぬあるとうくる、あるとう白浜んかい行じ。
 うま行じやくとう、な、あぬ、お産し。お産のーさ
 くと、うれー何やがんで、やつばしハブやんでい。
 あんざーい針刺ちえーん所、肩んかいでいがらーや、
 襟んかいでいがら刺ちやんでるむんぬ、親のーや
 しが。やつばし、目に刺さどーたんでい、死じよーん
 とうくま来くとう。あんしそーいね、今度お、な、
 うまー行じやくとう、な、全部ソロソロ生まりとー
 しえーや。そのハブ、片目ハブんち、片目だつたらし
 い。それ本当か、実際にはわからんすがね。お産のー
 立派そーるむん。あんざー元気にし、親な、元氣そー
 くとうな、やつとう、重荷うりそーるばーて、安
 心そーるばーて。安心し細ていしから。

やつばし、うまぬ部落ぬ子ぬ生まりーね、生まり
 がたーね、男ん達、「子ぬ生まりーんどー」しーね、
 昔集まやーし、酒ぐわー飲めーさい、ぬーさい。女ん
 達や、ウバギーんでるい、あんねーしこーたい何さ
 いすしえーや。あんし、大忙し中に、この上じや
 んかい、片目ハブぬ出じていうま来ねー男、また、シ

ムんじよ、女ん達がな、わじやすし、アイメーク
 サメーすしえー、「あ、今度お女やさやー」んち。あ
 んしーね、むるちやーんさんでいよ、うり。あん
 し、そーしが、「とーわかどーくとう」んでいやーに、
 ぬーやが手うしーね、ソロソロ歩ちーし。あんし、
 祝いたんでいぬ話やし、うり事実、あま、あたたてい
 がうたらーうりわからんばー。

「共通語訳」

昔、離島らしいが、どこの離島かはつきりわからん
 ですがね、宮古、八重山だろうねえ。あんまりわか
 らんすがね。

野原ですな、お母さんと娘、親子ね住んでいたら
 い。それで、ある晩に、大雨降っている時に、時遅くに、
 とても遅くに男らしい声が聞こえたらしい。「なんだ
 ろうか、こんなに雨が降っているさな、人声がする
 ものかなあ」と、親子で黙って聞いていたら、ちよつ
 とした後で、

「ごめん下さい」と尋ねてきたので、「あ、誰か来た」と。
 それから、

「雨宿りをさせて下さい」と来たので、それで、

「あ、濡れているね」と着替えもさせて休ませたそう
 だ。それから話もはずんで、親子と(その人)三人で。
 好男子だろ、それで、話もはずみ、夜遅くなったの
 で、泊まることになり、そこは親子で暮らしている
 ところだから。たぶん、その娘と男とは、お互いに好
 きじゃなかったか。その晩はどんな様子であったか

※ハブ 沖縄に生息する陸生毒蛇のう
 ちのハブ・ヒメハブ・サキシマハブの三
 種の総称。毒性は非常に強い。

からないが、(その後も)毎晩、同じ時間(に来て)、同じ時間に帰って行く。そうやっているうちに、娘と愛で結ばれて娘は身ごもったそう。娘は喜んでゐるわけ、好男子だから。親はまた、水知らずの男だから、「これは不思議だ」と思つて。それでも、もう、当り前の人間だと見ているので、あんまり気にすることもなく、(愛だと)思うのは思つていたが。年の終わりに、心配の種になつていた。

それから、年が明けて、三月前になると、子どもも生まれる頃になるでしょう。ちょうどお母さんが初夢見て、初夢はどのように見たかというところ、三月三日、三月三日にご馳走作つて、親子浜辺に行つて、浜の白砂踏んで浜下りをしたらお産も無事にできるよ」と、そういう夢を見たらしく「不思議なものだねえ」と思つている時に、娘も、

「ねえ、私もお母さんと同じ夢見たよ、」

「ああ、そうねえ。」

もう、その時から、親はもう感づいているわけさあ、「あたり前の人間ではない」と。それで、その時から待ちかねていた、三月になるのを。

「もう、それなら、その時に浜に行つてやろうねえ」と。

「それなら、お産も心配ないし」と待ちかねていた。明日から三月という時、今日はご馳走も作つて待つて。明日、いよいよ、そこに行くことになつた。

その前にね、娘の親がたいそう不思議に思つて、毎日、昔の糸芭蕉、芭蕉の着物(を作る糸)、それを繋がないで、女は布を織る準備をするさあねえ。ウーを紡

いで入れたカゴをいっぱいにした時に、その前に、三月になる前に母親は「不思議」と思つて針(に糸を通して)結んで、肩といつていたかねえ、着物だつたかねえ、突き刺して忍んで行つて突き刺したら、スルスルと出ていったそう。人の歩き方ではなくて、それは、(人間の)歩き方とは違ふさあねえ。スルスルと出て行つたので、「やはり、これは不思議」といつて、その後から母親が追つて行つたから、案の定、浜に行つた。「ああ、あそこだねえ」とも、お母さんはその時から、たいそうお産するのを心勞しているさあねえ。当り前の人間ではないさあ。そうやって、心配している時に、三月三日は明日だよという時からのご馳走を準備した。その日は、いよいよなので、ねえ、娘は喜んでゐるさあね、好男子だから。

そうやって、準備して行つて、いよいよ、白浜に行つてみたら、そのハブが死んでいる所はほら穴になつていて、そのほら穴で死んだので、「なるほど」と思ひ、親はその洞窟のある所へ娘と白浜に行つた。そこに行くくと、娘はお産した。お産をしたら、生まれた子どもは何かというと、案の定ハブであつた。それで針を刺したところは、肩だつたか、襟だつたかに刺したというが、親は、だけど、(針は)目に刺さつていたそう。死んでいるのを見ると、そんなこんなしているうち、今度、そこに行つてみたら、もう、全部ソロソロ(ハブの子が)生まれているさあねえ。そのハブは片目ハブで、片目しかなかったそう。それ本当か、実際にはわからんですがね。お産はちゃんとできたそう。

その後、(娘は)元気にし、親は(娘が)元気なので、やっと、重荷を降ろしたようだね、安心してゐるわけ。安心して帰って来てから。

その後、その部落では子どもが生まれると、生まれる日が近づくと、男の人たちは、「子どもが生まれるよ」といって、昔は集まって酒を飲んだりして、喜びを分かち合っていた。女の人は、ウバギというものです、そういうものを準備したり、なんやかんやするでしょう。そんなふうには、大忙ししている中で、座敷の上座に片目のハブが出て、そこに来たら男の子(が生まれる)。また、台所で、女の人たちが仕事しているところで邪魔をしたら、「あ、今度は女の子だねえ」と(言われた)。その時には、まったく、人に災いはもたらさないそうだ。そんなことがあって「ああ、わかったよ」といって、なんというか手を合わせると、ソロソロ歩きをして出ていったそうだ。そして、祝いをしたという。そういう話があるが、それは事実そういうことがあったのか、(私は)聞わったことがないのでわからないが。

⑦ 蛇婿入り(へてぬぐい)

金城ハル(明治四十一年生) 東橋原

アカマターが男に化けてね、その娘のところ来て。そうしたらこの親が不思議でねえ「これ男はいないのねえ妊娠しているねえ」と思ってたね、忍んで見たからね、テヌグイはっ被りして来ていたって。それを針に糸を通してね、そのアカマターの頭に入れ

て、「どこに行くか」と思ったらね、浜辺のガマに行きよったって。そうして、三月三日はね、その女をね、浜に連れて行って潮踏んだら、そこにアカマターがうんと出ていたって。そのアカマターが生まれていったって。

だからね、三月三日はね、女は必ず海行って砂を踏むのだから。その話聞いたの。

⑧ 蛇婿入り

曾久原幸(大正五年生) 酒瀨

昔はこのアカマターがきれいな男に化けてきて女をだましてね、子ども作ったなんとかするあれがあったって。それがねわかって、三月三日は浜下りといつてね、浜の砂を踏ますといつて女の人たちにさせるのは、これから出ていっていったけど。

あれはね、このアカマターがある人に、

「世の中の女性たちをだましているのだから、今度はたぐさんの子どもが生まれるはず」といつたらしい。

「いいや、今度はヨモギモチを作つて三月三日は浜下りし浜の砂を踏んだのね、みんな流れるよ」といつたらしい。だからね、これはね、言葉の力でしようねえ。それならねえ、ほんとに三月三日はね、浜の砂を踏んだのね、全部出してしまったって、全部流れてしまったって、それが。だからこのアカマターというのね、人間にはね、こんなことはできないことになつたって。その伝え話がある。

だから、今でもねえ「三月三日はフーチム子食べて、



フーチム子 流行性の風邪や伝染病のことで、モチを食べて悪疫払いをする

砂を踏みなさい」ということをねえ。必ず、アカマターにだまされるということじゃなくてね、悪霊もつかない、また、病気もつかない、浜の砂を踏んで健康になるという意味でしょう。

⑨ 蛇婿入り

比嘉カツ（大正六年生）中の町

〔方言原話〕

アカマターが清ら女いそぎなてーしーしー、よー、あんざーに、

「かんししえーならん。でいー、なー浜下りさやー」
 でいやーによー。女んかい化きーぐとうアカマターが行じやーに。浜下りしーが女んちやーむる昔え行ちゅたんでいよー、うぬシマー。

アカマターが清ら女いそぎなつたりして化けるわけさあ。

「ひるまさんやー、えー、うり、ハブどうやたしが、清ら女いそぎなとーたつさー」んでい、うぬ話うぬばなしも親に聞かしたんでしよう、この女が。いつも私の枕もとに、このハブが家に入つて来る時はハブだが。アカマターつては思わなかつたはずよ昔は。ハブ、ハブつていゅーていたはず。だからな、

「うとうるさぬ、清ら女いそぎなてい、いつべー清ら女いそぎなとーたん。冠もかんでい」といつてよ。これ話したから、

「あんしえー海下りさやー」でいやー、くぬ女おんなわらばーたーむる、海下りするぐとうとーん。海んかい三月三日や、海んかい浜下りするぐとうなたんでい。

〔共通語訳〕

アカマターがきれいな女に化けたりしてね、それで、

「こんなことではいけない。さあ、それでは浜下りしようねえ」ということで、女に化けるので、アカマターが行つて。浜下りしに女の人たちはみんな昔は行つていたそうだよ、この村では。

アカマターがきれいな女になつたりして化けるわけさあ。「珍しいこともあるものだ。ねえ、これはハブであつたが、きれいな女になつていたさあ」と、その話を親に聞かしたんでしようねえ、この女が。いつも私の枕もとに、このハブが。家に入つて来る時はハブだが（きれいな女に化けるので）。アカマターとは思わなかつたはずよ昔は。ハブ、ハブつていゅーていたはず。だからな、

「こわいことだ。きれいな女になつて、たいそうきれいな女になつていた。冠もかぶつて」といつてよ。こんな話したから、

「それなら海へ浜下りしようねえ」といつて、この女子どもたちみんな海へ浜下りすることになった。海へ、三月三日は、海に浜下りすることになったそうだ。

⑩ 蛇婿入り

〔方言原話〕

こつちで住んでから、昔、女だましたという話があつたから。本当だつたかこれ、話だからわからないがね。

喜屋武英正（明治三十年生）久保田

そうしてあれ（そんな話があつて）から、カマタ下に置かなかつたよ。これ（アカマターが）住んだら化け物になるつて。アカマターと言いつたね。アカマターが人間に化けよつたそうだ。

昔、女をごまかしてから、
「おれ、シジャーやか子持たちえーんどー」んでい言ちやくとうや、

「いやー子ちえーていん、三月三日ねー女浜下りすくとう、うまんじひるほーいるする」んでい言たん。シジャーでいしえー、生身なまみかい子持たちえーでい言ちえーるほ。あんさくとう、

「いやーや、女三月三日ねー浜下りすくとう、あまんじえーひるほーいどうする」んでい言たんでい。

後から分かつたんでいしえー、きれいな着物着けて来ておつたそうだ、この、アカマターは。あんさくとう、袖から、この釘留めておつたそうだ、穴の中で糸が付いておつたそう見たら。これで探して、これ糸見分かつておつたそうだ、アカマターだね。

「いやーや、あんさんてーん、子、子持たちやんでーん、三月三日ね、浜下りしーねー、ひりほーいるする」んちな、他の人が聞いたわけさ。女の人も三月三日に浜行つたからもう、全部下ろしたわけさー、アカマターの子ども。

あんさーに命いのちどうみてーし、本当ほんとう人んでいちやくとうや。それから命さーたぐとう糸ぬあてーるばー。うぬ糸たすにてい行いじやくとう穴んかい。あんさーにアカマターえーさんちわかたん。

〔共通語訳〕

こつち（カマンタの下）で住んでから、昔、女だましたという話あつたから。本当だつたかこれ、話だからわからないがね。そうしてあれ（そんな話があつて）から、カマンタは下に置かなかつたよ。これ（アカマターが）住んだら化け物になるつて。アカマターと言いつたね。アカマターが人間に化けよつたそうだ。

昔、女をごまかしてから、

「おれ、人間に子どもを宿してきたよ」と言つたので、
「お前が子どもを宿してきたといつても、三月三日に女は浜下りするので、そこで、全部下りてしまふよ」と言われたそうだ。シジャーというのは、生身の人間に子どもを宿したといつていられるわけさあ。それで、

「お前な、女は三月三日なると浜下りするから、そこで全部下りてしまふんだよ」といつていたそうだ。

後から分かつたこととは、きれいな着物を着けて来ておつたそうだ、この、アカマターは。そうしたもんだから、袖にこの釘で留めておつたそうだ、（それは）穴の中で糸が付いておつたそう見たら。これで探して、この糸見分かつておつたそうだ、アカマターだど。

「お前は、そうはいつても、子、子どもを宿してきたとしても、三月三日になつて浜下りしたら、下りてしまふんだよ」と、（そういう会話を）他の人が聞いていたわけさ。女の人も三月三日に浜に行つたからもう、全部下ろしたわけさー、アカマターの子ども。

そこで、命を宿したのは、本当の人間だということ

キーカマンタ 某、菓ならずで編んで作つた大きな鯛の類、一般に（カマンタ）（ナビヌフタ）（シムタ）と三つの系統の呼び名がある。



だからね。それから命を宿したものをたどると、糸があつたわけ。その糸をたどっていくと穴についた。それで、アカマターであつたとわかつた。

(4) 字を書くアカマター

① 蛇婿入り

桑江朝盛(明治四十五年生) 中の町

御重ごむねといつて子どもたちにやつて、この明日は三月四日頃は、ひまのある人達はみんなたいがいの人浜下りに行つて、浜に下りてね子どもたち行つてねンナグワー(貝)なんか取つたりなんか、そうやつて。今の何かねえ、ピーチパーティなんかやるようなことをやりよつたすよ。

で、その話は、なんだね、昔、あるアカマターが化けて、女にもう何したという話も伝えられておるがね。だまして、それを名護ぬ親なごぬおや方かたかね、その人が自分の娘をやつてね、本当かといつて見ておつて、そうつて、こう字を書いて退治したという話もあるがね。アカマターが出るものをね。そういう話もあつたよ、昔の人は。

(5) 蛇婿入り

① 蛇婿入り

刃土名ナベ(明治三十七年生) 池原

〔方言原語〕

女メん子コとう女メぬ親オヤとうハルけー行イじやくとう、うぬアカマターや清スらかーぎー男オなていよー。な、うぬ女メん子コ。

「でいか家イけー」でいちん追オてーくーんや、芋ウん掘ウてい、カンダン掘ウいしそーんていしが。家イけー来イんなやーにうりさくとう、うぬアカマターや清スら男オなやーな、うぬアカマターなかいまちぶらつてい。あん、家イ来イくとうなーワタぬやでいーし。アカマターん子コワタぬ内ウんかい入イちよー。あんさーに、「あんかんやんどー」でい病院イんけー行イじ、うぬアカマターんかい薬ヤク飲イますんでいしが出イじらん。えーりん、別ワぬ人ヒトがあん言イたら、

「海ウんじ砂スくだみらーむんぬ下シりんなー」でいち、海ウんじ砂スくだみたぐとう、むる出イじとーたんでい。

〔共通語訳〕

娘と母親と畑に行くとき、そのアカマターは好男子に化けていた。で、その娘は、

「さあ家に帰る」といってやつてこないのね(母親は不思議に思った)。芋も掘り、さつま芋も掘り仕事は終えていたというが。家に戻ってこないのどうしてかと思つていたら、そのアカマターは美男子に

※1名護ぬ親方 程朝則のこと
一六六三―一七三四 久米村輝氏の七世
三司官位にのぼり一七八八年名護間切の
総地頭職となる。美濃道徳家として人々
の尊敬をうけ、名護親方(龍心)と呼ば
れた。

なつて、そのアカマターに感惑あはれされていた。そして（娘は）家に帰つてきたらお腹が痛いと言ひ出した。アカマターの子がお腹に入つていてね。そこで、「これれしじかかだねー」と病院に行つて、そのアカマター（子どもを下ろすための）薬を飲ましたらしいが出でこない。たぶん、別の人が教えたのが、

「海で砂を踏まないのに下りるか」と（言われたので）、海で砂を踏んだら（アカマターの子が）全部出ていたそうだ。

② 蛇婿入り（蛇女房）

渡口ヨネ（大正元年生） 美里

〔方言原語〕

男ぬアカマターんかい化きてーねーんどー。女がアカマターんかい化きやーに。あんさぐと、男だまぢやぐと、うぬ男あまじゅん行ちゆしえーや、なーないねー。「でいつかー二人語らつてい來やー」んち行じやぐと。行じやる所んじえー、うれー人間やあらんアカマターなやーに、うぬ男あうまんじ倒りていぶちくんない、うんぐとーやたんでいち聞ぢやるばー。女がアカマターだよ。男はあんまりかーぎがきれいから、

「行こう」と言つて、行つたわけ。行つた最後、話が終ればどつか何かあるでしょう。この、話小やろうとしたら、ばれてから、

「いやー、私だまぢやんやー」んちやくと、

「いやー、だまさつたんやー」ち、これで男が負けて

しょう。で、こつちで（男が）倒れていたつて。こんな話があつたさー。女がアカマターにできたらきれいからんでい、とつても。

〔共通語訳〕

男がアカマターに化けたのではないよ。女がアカマターに化けて、そうして男をだましたから、この男は一緒に行くでしょう、いいころあいになると、

「さあ二人で語りあつて来ようね」つて行くと、行つたところでは、これは人間ではなくアカマターになつて、この男はそこで倒れて氣を失つて、そんなことがあつたと聞いたわけ。女がアカマターだよ。男があまりにも容姿がきれいだから、

「行こう」と言つて行つたわけ。行つた最後、話が終ればどつか何かあるでしょう。この、話などしようとしたら、正体がばれて、

「お前は、私をだましたな」と言うど、
「お前は、だまされたね」と、これで男が負けてしょう。で、こつちで（男が）倒れていたつて。こんな話があつたよ。女がアカマターに化けたらきれいからつて、とつても。

(6) 犬婿入り

① 犬婿入り

関吉キヨ(大正元年生) 中の町

今でもある人がいうけど。宮古の島よ、あれは宮古の人は全部犬の子といよつたよ、今はそんないう人いないけど。宮古ん人は犬の子という意味が又、これも話、短いだけどあるから、ね。

何かというたらな、ある偉い人の家、殿とんちんの家にね大きな真つ白な犬養つていたつて、殿がよ。その犬はどこに行つても、殿の後お供にしてよ歩いて、みんなもう殿様の助けして歩きよつたつて、その犬が。モノ言わんけど聞いているさ。聞いてつて、もう、何でも、もう頭がいいつてね。丁度、敵に憎む人にねやられる所、この犬が主人を助けてしたから、これはもうこの犬のね、自分の養つた犬の為に命拾ひしたから、この犬に何をほうびあげるかな。毎日馳走は同じように自分が食べるもんやつてるけど、犬はね、そのご馳走食べても喜ばないで、しよつちゆう、このね、殿の前にね、向かいどうし座つてよ、ただ、もう、顔だけこう見てよ、犬が。

「うれ、たしか何かあるんだな、お前は話はせんけど、何か欲しいものなんでもやるけど、なんのために、お前ねえ、なにねー」いゆうて、いっぺんある時に話したつて、その犬に。そしたらね、

「もう、私は何も欲しくありません。娘が欲しい」と言つたつて、殿の娘、犬がよ。

「へー」言うて、もう殿びつくりしてね、「あー、これはこの為ね、私の顔ばつかしらんで毎日向かいどうしで、何かあつたんだね」言うて、もう、この殿が自分の娘に、

「お前もね、そんなに生まれた人間だから、この犬にねつて二人一緒にね島流し、舟に乗せて流すから、着く所に、どこにでも着いたら、着く所に行つたらばね、住みなさいね」言うてね流したつて。

流したら、宮古という島にねこの舟は着いたつてよ。着いたらね、もうやがて、島が見える中頃からね、この女も、もう諦めているでしょう。親の言いままに何でも「はい、はい」言うて。死んでも生きてもいい言うて、犬と二人流されたらね、もう黙っているけど、やがて島が見える所だ、

「あれ、二人がね住む島はもう見えるさ」と言うとつたつて犬が、この娘にさ、

「二人が住む家、島はもう見えるよ」言うての話だから、「あは、やつぱり話是可以るな」言うて、女は少し安心をしてね。だけど、一週間とかね、何日とかね、

「私がちよつと、そこに行つてね帰つてくるまで、お前寂しくても一人がまんしてね、待つとおきなさいよ」と言うけど、

「はい」言うて待つているけど、その約束した日なつたらね、女は待ちきれないでね、走つて見に行つたらね、尻尾がもうちよつと、尻尾が残つておつたつて、人間になつて。尻尾が残つて、犬の子になつてい

※1 宮古 宮古島の主島、沖縄本島からおよそ三百キロメートル、石垣島からおよそ四百二十キロメートルの距離を隔てている。
※2 殿内 殿地頭の親方をさす俗稱。



け。
 「もう少しだったのに、もう、お前早かったな〜」
 っ
 てね、もう、もう、あれからはもう、この尻尾はずつ
 と残っているわけさあ。だから、犬の子になつてい
 てる、あつちは。

神様だったはずね、この犬、やつぱり。だからイン
 ガマ言うて、今、拜んでいるつてよ宮古の人は。イン
 ガマつてあるつて。インガマいうてねほら穴が拝
 む所があるつて。(犬が) この穴に入つて、姿変えに
 行つて。変えに行つて、もうすぐ「私が来るまで
 もね、がまんして待つておけよ〜」て約束しても、
 一週間か、まあ、何日かわからんけど、この日になつ
 たらな、待ちかねているわけさ女はな、「早く来れ
 ばいいのにもう」言うて、自分が行つたらね、もう、
 だから尻尾が少し残つていたつて。もう、あれから
 見られているから、(尻尾の部分は) ずつと残つてい
 るわけさあ。だから、犬の子になつていけるわけ。宮古
 の人は犬の子いうて話があつたもの。

宮古の人は犬の子、犬の子いうわけ。うちら珍し
 くて「何でや、同じ人間なのに、なんで宮古の人に
 犬又子^{いぬまたこ}というのかねえ」と思つて聞いたらね、

「こうこうだったよ、これはね〜」。だから、犬でも
 よ、うちのお祖母さん言つた、

「犬でも養うんだつたら、真つ白な犬を養いさい」い
 うたよ、うちらにも、大きくなつてから。

「なんで」言つたらね、白い犬はね、とても頭がいいつ
 て、「真つ白い犬は頭がいいつて」言つとつたよ。

「真つ白な犬はね頭がいいよ〜」つておぼあちゃんか
 言よつた。

② 犬婿入り

吉村ヨシ(明治四十年志) 山内

「方言原語」

犬ぬちかちんでいがらー負かさーなかい、ちやつさ
 クワツチ、シシんぬーんぬーなしみたんで、ていー
 ちんうれーな、にーうちらていていーちんかまんた
 ぐと、

「な、あへ、ぬーが欲さが」でいちゃぐと、

「うまぬん子。王ぬん子欲さん」でいちゃうりさぐ
 と、

「な、あんしえ、うれ、うりどう欲ささやーな。
 うり、願ん負かちえーるむんぬうりがゆいどうやる」
 んでいちゃい、うり妻しみーんちさくとう、ちゅー
 ちゃん犬うりけーうふあさーなかい、しぐ海んかい
 チャーブンないはいたんでいしえ。

あんさーい、宮古んかい着ちやぐと、^{いぬ}「宮古犬ぬ
 子」ぬーぬーんち、くりかーぬ人の一話すたしが。

「共通語訳」

犬が敵をやつつけたので、どんなにたくさんのご馳
 走、肉なども前に出しても、なにひとつとして犬は、
 うなだれてひとつも食べなかつたので、

「なあ、それなら、何が欲しいのか」と言つと、

「あなたの娘だ。王の娘が欲しい」というのでね、



「もう、それなら、娘が欲しいのだな。この犬のおかげで、戦にも勝つことができたんだから」といって、お前に娘をやるというので、すぐさま犬は娘をおぶって、海に一目散に行つたそうだ。

それで、宮古に着いたので、「宮古は犬の子孫」とか、この辺りの人は話をしていったんだが。

〔2〕 婚姻・異類女房

(1) 天人女房

① 天人女房（銘苅子）

与那嶺松榮（明治三十七年志 池原

〔方言原話〕

銘苅子でいしえー男おじーさんやるばーよ。また、羽衣りしえー天から降りていめんそーちやる羽衣やるばーてー。うぬ人ぬなー、世ぬ始まい。天から降りていめんそーちやーに「沖繩ぬジジうちえーちやぬふーじやーやがやー」んち親から命令さーらーに、あんさーに天から天下りしつち、銘苅川んかい降りていめんそーちやーに。

あんさーに、うなげーぬ長旅やくとう「身体やゆぐりーとーくとう、うまんじなー身体や洗てい、うまんじい泉ぬあぐとう、うまんかい行じやーにうまうとーてい浴みていからなーうりしわるないる」りち。あんさーに浴みーるとちふあに、なー着物はじやーに、まーん置かりーる所ねーらんやーに、木ぬ枝

んかいどうーぬ着ちよーる羽衣掛きていし、どうーや浴みていうりさぐとう。側から見ちよーるおじーさんが銘苅子りる人てー。うぬ人ぬ見じやーに側から、「なー不思議、女ぬくまうとーてい水浴びすつさー」んでいち、「すしえーちやーぬちむえーやがやー」んち、うりしさぐとう。なーうぬ女のーうぬおじーさんがグシチぬ根ぐいんかい隠きとーていうぬ女見ちよーんでいしえー、女のー分からんばーてー。あんさぐとう、なー、よーい知らんふーなーし、うぬおじーさのーうぬ女ぬ浴みーし見じやーに。あんさーに着物んまーんかん掛きてーんちうり見じやーに。あんし、おじーさんがくさーなさーに、浴るとちふあんかい密かに着物下ぎてーる所んかい行じやーに、うぬ着物取やーにけーかじみてい、うりしさぐとう。なー、どうとう、浴みやーに終りなたぐとうなー着物着りわる別んかいあつかりーさいやー。あんすぐとう、どうーぬ着物着りわる天ぬんかい昇らりーぐとうりんでい、うみーさーに、あんさーにどうーぬ着物探ちやーぐとう、着物ねーらんばーてー。どうーぬ着ちよーる着物羽衣ねーらんばーていさぐとう、「ひるましーむんな、一大事なとーん」でいやーに、あんさーうまうとーてい泣きちゆらいすし、泣ちよーしうぬおじいさのー側んかい立つちよーてい見ちよー、

「ぬーがいやー、うまんかい立つちよーていあんしうりししえーる、ちやーるちむえーやが」んちやぐとう、「私ねーなー、あためーぬ沖繩ぬくぬジジうちぬ人あらん。天下りし天から降りていちやる私やしがや、

※1)ジジ 天界から人間の世間をいう。
※2)銘苅川 那覇にあった川で、天女が降りて水浴びした泉井で知られる。

どうーぬ着ちよーる着物うまんかい来に木ぬ枝んかい掛きていしえーしが、うりがねーらんなやーに、天ぬんかい戻るくとうんらんなやーに、なー私ねーちやーしやーしむがやーんでいち、うまうとーてい泣きすらいするばーにでんどーやー」でいひ説さくとう。

「えー、あんやんなーかわいそうやつさーや」んでいいやーに。あんさーに、

「とーあんしえーないやーあんしえーならんくとう、私が着ちよーる着物いやーんかいいくして、いやーどうーはらうすていや、うりしすくとう」りちやーい、

「しばらくぬ間私たーんかい戻てい行じやーに、私ーんじ泊まやーに、うりし、さーやー」んでいち。あんし、泣く泣くうぬおじーさんとうまじゆんうぬおじーさんぬ家んかい行じやーに。

あんし、とーとうりが長日にかかてい結ばーんかい、うりが縁ぬ、なー、悲しくなとーるばーて、ちむがらくなやーに。あんさーに、とーとおじーさんぬ妻なやーに、うりさくとう。なー、あんするうじーんかい妊娠のーさーにけーかさぎていうりさくとう。うぬ子あ産ちえーる子男わらばーとう女わらばーとう三人でいがー産ちえーたんでいーしが。

あんさ、わらばーたーがふるいーていうりさくとう。うぬわらばーたーがなー、うぬおじーさんがどうーぬ倉んかいかじみてーるうぬ羽衣見ちよーるばーて、わらばーたーが。わらばーたーが見ちし

くとう。あんさーに、うりしなー、一人し、しーじやぬ、うつとうぬうり負んぼさーにしかち、あんし、うぬ子守り歌すし、うぬ女ぬ親うり、わらばーたーが歌すし聞ちやーに、「あはー、あんやがやー」んでい。あんさーに、うり聞ちやーに行じ見ちやぐとうなー、うぬどうーぬ着物かくちえーる倉んかい行じさくとう、ちめてーげーか、なー、かみうーさん、うりそーたんでいしがよー。とーとー、あとし、なー、探し出じやさーに「あはー、くまんかいあさやー」でいいやーに。あんさーうぬ着物取やーにうりさくとう、とーとーなーどうーぬ羽衣お探し出じやち、うりやぐとう、今やなー、どうーぬ親元んかい歸りーる事ないんでいいやーに、あんさーに、うぬ羽衣着やーに、どうーぬ親元んかい天ぬんかい昇ふてい行ちゆるとちばに、だー、うまんかい子産ちるういさいやー、子産ちるうくとう、あんさーに、なー、すぐ、たでーまんちえー天ぬんかい昇てー行からん、また、途中うとーていうつけーやーに、わらばーたー顔見ち、涙流さがなーうりしさくとう。あとし、とーとーなー、うりさーに、あんさーに天ぬんかい昇ふてい行じ。

子ぬちやーや、なー、とーとーたきーぬふるやーい、どうーぬ生活ないるぐとうなたぐとう、百姓んかいいうりしさーに、あんさーに、ちゆくいむじゆくい作ていうりしさーに、どうーぬ女あぬ、くーひちがたー、どうーぬ作てーるむじゆくいさーに、うり、うさぎてい、天ぬんかいなー、ちやー、朝晩のーうりう願すたんりちぬ話やるばーて。子ぬちやーがよ。

あんやしが、だーうれーな！後め事ちやーぬふーじやーがなたらーうれーはつきれーうりしえーさんばーどうやさに。

天ぬ暗がみねー雨ぬ降いしえーやー。「うぬ雨ぬ降いしえー私あ目い涙んり。目から出じーる落る目涙んり思てい考げりよー」。あんし通言ぬあんでいし話やるばーよー。だー、うりが歌ぬあたるはじやしが。

〔共通語訳〕

銘苅子というのは男のおじいさんのことだよ。また、羽衣というのは、天から降りていらつしやつた羽衣なんだよ。その人（天女）が世の始まりに天から降りてこられて「沖繩の世の中はどうな風になっているのかなあ」と親から命令されて、天から天下りして銘苅川に降りていらつしやつた。

もう、大そうな長旅だったので、「身体も汚れているからそこで身体を洗おう。そこにいい泉があるので、そこに行つてそこで浴びてから、言いつけられたことをやるう」と思った。そこで浴びようとして、着物を脱ぎ、どこにも置く場所がなかったので、木の枝に自分の着けていた羽衣を掛けてそして浴びていた。（その様子を）側から見ていたおじいさんが銘苅子という方だよ。その方が見て「なんと不思議なことか。女がこんなところで水浴びしているなあ」と。「それはどういつもりなのだろうか」と眺めていた。もう、その女にはおじいさんが、ススキの根元に隠れて女を見ているとは、女はまったく気づいていなかった。だ

から、おじいさんは、ずっと知らんふりをして女が浴びるのを見ていた。そして、またその女の着物はどこに掛けてあると見て。おじいさんは（女を）後ろにして、その女が浴びているさなかに、密かに着物を掛けている所に行つて着物を取つて隠してしまつた。（女は）入浴をすませ（上がろうとした）。着物を着ないどこにも行くことができないさあねえ。それに、自分の着物を着ないと天にも昇げれないので思い悩んでいた。そこで着物を捜したが、着物はどこ捜しても見当たらない。自分の着ていた着物、羽衣は（掛けていた場所からなくなっている）「不思議なことだ。大変なことになってしまつた」といつて、それで、そこで、とうとう泣き出してしまつた。その様子をおじいさんは側の方に立つて見ていた。

「どうしたのだ。あなたはそこで立つてこのように泣いているが、それはどうしてなんだ」とおじいさんは聞いた。

「私はあたりまえの沖繩の世の人ではない。天下りして天から降りて来た者だが、自分が着ていた着物は、ここに来た時に木の枝に掛けて置いてたが、それがなくなつてしまひ、天に戻ることでもできなくなり、もう、私はもうどうしたらよいか分からなくてこうして泣いているのです」といつて話したら、

「ああ、そうなのか、かわいそうだね」といつて、

「そんなことではいけないから、私が着ている着物をあなたに着せるので、あなたの身体をおおつて下さい」といつて、



「しばらくの間、私の家に戻って行って、私の家に泊つて、それから考えてみてはどうですか」とさとした。そこで、女は泣く泣くおじいさんと一緒におじいさんの家に行った。

それから、とうとう長い時間かけて結ばれた。その縁がもう、いとおしくなっているわけさ。それで、とうとうおじいさんの妻となり暮らしていた。も、そうしているうちに妊娠して子どもを身ごもった。そうやって産んだ子は、生まれた子どもは男の子と女の子三人産んでいたというが。

やがて、子どもたちも成長し、その子どもたちは、おじいさんが自分の倉の中に隠してある羽衣のことを見ていたんだね、子どもたちは見て知っていた。そこで、そのことを、一人の上の子が下の子を負ふつて子守りしている時に、その子守り歌をするのを、母親はそれを、子どもらが歌するのを聞いて、『ああ、そんなのかなあ』と思つた。そして、その歌を聞いてから倉を見に行ったが、その自分の着物を隠してある倉に行つても一度では探すことが出来なくて残念がついてたというが。とうとう、しまいには探しあてることができて『ああ、ここにあつたんだねえ』といつて。そこで、その着物を取り出して、とうとう、自分の羽衣を探しあてることができたので、今なら自分の親元へ帰る事ができると思つて、そして羽衣を着て、自分の親元へ、天へ昇つていこうとするが、しかし、そこに子どもは産んでいるわけだから、産んでいるので、それで、すぐさま天へ昇つて行くことはできなくて、途

中で振り向いては子どもたちの顔を見て、涙を流しながら、しまいには、とうとう天へ昇つて行つてしまつた。

子どもたちはもう、次第に成長し、自分で生活することが出来るようになると、百姓として働き、そして、農作物作つて、自分の母親に捧げるものは、自分らで作つた農作物をお供えして、天にいつも朝晩は（お供えして）折つていたという話であるわけ、子どもたちは。

そういう話であるが、それは最後はどうなったのかそれがはつきり分からないので話せないんだけど。

天が暗くなつたら雨が降るでしょう。「その雨が降るのは私の涙です。目から出る落ちる涙だと思つて下さい」。そんな（母親の）遺言があつたという話であつた。ねえ、その歌もあつたはずだが。

② 天人女房（沖繩の始まり）

幸島マツ（明治四十一年生）池原

「方言原話」

そつちに降りて来て、羽衣、きれいな羽衣はずしておいて浴みーたんでいようまんじ。天から降りていち浴みたぐとう、あんさーに、うりが浴みーるえーかぬ羽衣よー、裸になつている人は世の始まりの人だつたかねー。そつだ、裸世のことよねー。

うぬ人が羽衣けー取つていよー、うぬ女ひき寄せて。あんさーにうりとうぐーなてい、子ぐわーけー生ちやぐとうひー、二人ぬ子生まりてい。うりからぬ広がい

やんでいぬ話は聞いてるよ。

おいた所がわからないで、天に昇ることがならんばーてーひー。昇あがるくどうぬならんたぐとう、うまうてい長れー生活くわくわくし、二人ぬ子ぬちやーふるわーちうたんでいしが。

わらばーがひー、「アンマー、アンマー着物や倉んかいかじみてーぐとう、かじみていうちえーぐとう、いやーにん着しーぐとう、あんどーやー」し子守節しえーるふーじ。あんさぐとう、うぬアンマーりる人、「ああ、やつばし倉んかいる私清ら着物のかじみてーさやー」でい思てい、あさてい見じぬ、夫ぬうらんえーかーぬうぬ羽衣おけー取ていよー着ち、天ぬんかい昇ふていさんりぬ話やさ。

うっさから広がとーんり。世の始まりでいし。

〔共通語訳〕

そっち(川)に(天女が)降りて来て、羽衣、きれいな羽衣脱いでおいて浴びていたそうだ、そこで。天から降りてきて浴びていると、そこで、天女が浴びている間に羽衣が(なくなつてしまった)。裸になつているという人は世の始まりの人だつたかね。それは、裸世のことよね。

ある人が羽衣を隠してしまつた、その天女をひき寄せるために。その結果天女と一緒にになり、子ども出来て二人の子どもが生まれた。(神繩の人たちは)それからの広がりといい話は聞いているよ。

(羽衣を)置いた所がわからないので、天に昇るこ

とができないわけさあ。昇ることができなくなつたので、そこで長く暮らして、二人の子どもたちを育てていたらしいが。

子どもがね、「お母さん、お母さんの着物は倉にしまわれているので、隠して置かれていますので、(その羽衣を)お前に着せてあげるからね、あげるからね」と子守歌を歌つたようだ。すると、そのお母さんは「ああ、やつぱり倉に私のきれいな着物はしまわれていたんだねえ」と思つて、探し回つて見つけて、夫がいないう間にその羽衣は取つてね着て、天に昇ぼつて行つたという話です。

その子どもたちから広がつたそうだ。世の始まりというのは。

③ 天人女房

金城永保(明治四十二年生) 松本

〔方言原話〕

宜野湾の羽衣ガーに水浴しに降りておつたらしいねえ、神様が。

髪かみふちきがこういふふうに流れきて、こうして拾いだら九尺あつたらしい。

「ああ、ずつと珍しい」といゆうつたから、神様が水浴して出ようとする時には、この飛羽とびうはあの松にかけて、その人が銘苧めいぢ子が取つたらしい。

「いちやるくとうやとてい、私が飛衣取とびいとりやい、無理あらに」でいちゃぐとーん。

「私が水、私が川どうやる。ぬんち飛衣掛とびいかけきてい置

ちヌーが」んでい。

「ぬが、みやらび、うま浴みーる」んでい、

「私んやみやらびあいびらん。天ぬ産しん子どうやい
びーる。時々くまうてい浴みやびら」

「でいちゃよ私宿に」

「天ぬ義理取ちりあていていあねーないびらん。急じ
くまから帰ていめんそーり」でいちゃぐと、

「いやーが言しん道やし、世間や情どう第一どー」

煙草一吹に ちきなきさい

煙草二吹に 落てい着きてい

煙草三吹に 私が宿に

飛衣げー取やーない、な、仕方ならん。うまうてい、
産しむぬ子三人繁盛さぐと。あんしん、なー、う

やめー上等やてい、な、ちびらーさんてー。

「天ぬ義理恥ちりあていてい、なまからー後や思里
と、深々と、縁結ば」でいそーだいな。子三人
産し出じやぐと、うりんでい、くわわー落てい
ちぢやさざ。

ヨイ ヨイ 泣くな

泣かんありわる いやーに、くいゆる

アンマが飛衣、私ね見ちやさ

米倉粟倉、倉ぬ下

でいちゃぐと、七ちぬ産し子ぬ言るぐと、に、三ちー
ぬ産し子守やがしーな、

ヨイ ヨイ 泣くな

泣かんありわる いやーに、くいゆる

アンマが飛衣、私ねー見ちやさ

米倉粟倉、倉ぬ下

「くみじや、かわぞえぐさ取いどうきてい見ちやり

ば、さらば、あけず飛衣取い隠ち」んでいち、かんし、
天ぬんかい飛はいーんでいそーてい、子と、別りやー
に、三羽に、ない天届ちよーたんでいなが、な、
うれ。

「あい、アンマーよーまーかいめんしヌーが」でいちゃ
ら、

「めんしヌーら、私たーん連ていもーちよー」と、

「アンマーやくぬ世ぬ人やあらん。さらば銘苅にだま
さりー、いつたー三人産し出じやし、飛でいん飛ばら
んいぢやすが、七ちぬ産し子按司なち、五ちぬ産し
子ヌールなち、三ち産し子ぎしなち。三ち産し子な
ハルさーやてーんでい。あんし配いでい天ぬんかい飛
ぶてーるふーじよー。

「アンマーや天ぬ白雲ないみそーち、今から後や三人
いぢやすが」でいちゃぐと、天ん行じよーていん歌あ
掛きーるばーてい。

アンマーが心ぬやししまらぬサー うみんぐわ

夏ぬかたふい雨や アンマーが

冬ぬ霜がきあんむんや アンマーが

雨やアンマーが涙とうむに

んでいち、うぬま、な、うーいるばー。

「アンマーや天ぬ白雲ないみそーち。でいちゃよ私
たーや三人立ち戻ら」んでいそーてい。うぬ後から、
ちやーしが暮らちやらや、な、昔ぬくと。

ちやーしが暮らちやらや、な、昔ぬくと。

※1 あけず とんぼの羽のまに美しい
節物。

〔共通語訳〕

宜野湾の羽衣ガ―に水浴びしに降りておつたらしいねえ、神様が。

髪の手がこういふふう流れてきて、こうして拾つたら九尺あつたらしい。

「ああ、なんと珍しい」といゆうたから、神様が水浴びして出ようとする時には、この飛衣はあの松にかけていた。その（飛衣を）銘苴子が取つたらしい。

「どのようなことがあつて私の飛衣を取るのですか、失礼ではありませんか」といわれたようだ。（ところが、銘苴子は、

「私の水、私の川である。どうして飛衣を掛けて置くのか」と。

「どうして娘さん、ここで水浴びしているのですかと、

「私は娘ではありません。天の子どもでございます。時々ここで水浴びをしているのです」

「さあ、私の家に行こう」

「天の義理や恥というものがあるのでそういうことはできません。すぐにここからお帰りになって下さい」といったら、

「あなたがおっしゃるのももつともなことです、世間は情が第一なんですよ。」

煙草一吹で 座らせて

煙草二吹に 落ちつかせ

煙草三吹に 私の宿へ

飛衣を取られているので、も、仕方がなかった。そこ

で、子どもも三人生まれ繁盛した。だけど、もう、親切にしていたら、もう、すばらしいわけさあ。

「天の義理恥も捨てて、これからは愛しい人と深い契りを結ぼう」と決心した。子どもは三人出来たので、そこで（天女も）落ちついて暮らしていた。

ヨイ ヨイ 泣くな

泣かなければ おまえにあげよう

アンマが飛衣 私は見たよ

米倉粟倉 倉の下

という、七歳になる子どものいうことは、三歳になる子どもの子守りをしながら、

ヨイ ヨイ 泣くな

泣かなければ お前にあげるよ

アンマの飛衣を 私は見たよ

米倉粟倉 倉の下

「米や色んなものを取り除いてみれば、なんと美しい飛衣が隠されていた」と思い、その（飛衣を身にまとい）天に飛び立とうとして、子どもと別れ、三回羽をおおぐと天に届いていたそうだよ。

「おや、お母さんどこにいらつしやるのですか」といつて、

「どこかに行くのなら、私たちも連れて行って下さい」と、

「お母さんはこの世の人ではありません。言わば銘苴にだまされて、あなたたち三人の子どもに恵まれ、飛んで帰ろうと思つてもそれができずにいた。七歳になる子どもは按司にして、五歳になる子はノロにして、

三歳になる子どもは農夫にする。三歳の子どもは、農業をする人だつたんだらうねえ。そういうふうの子どもたちに役を与え天に飛んでいかれたようだね。「お母さんは天の白雲になられて、これから後は三人どう暮らしていけばいいのかわ」。天に行かれても歌でやりとりしているわけさあ。

お母さんの心はやすまることはないよ、子ども達よ
夏のかたしぐれ雨は お母さんの(涙)

冬に霜がかかる日は お母さんが

雨はお母さんの涙と思つて下さい
といつて、そのまま終わるわけ。

「お母さんは天の白雲になられてしまった。さあ、私たち三人は帰らしましょう」ということになつたそうだ。その後から、どうやつて暮らしたのかわねえ、昔は。

④ 天人女房

仲栄真セツ(大正五年生) 中の町

男の人が(天女が水浴びしている)こつちから通つて、この羽衣は隠して。から、も、この人は着けるのもないでしょう。天にも飛べないから、こつちで泣いていたから、この人がこれ(羽衣)を隠してあるけど、言わないで自分のお家に連れて行つて。子ども二人出来てから、あんち、子どもが、長らく十二、三ヶ年なっているんじゃないかねえ。子どもが、

「倉にカゴに(羽衣が)あるよ、あるよ」してかた歌ぐわしたから、お母さんは誰も見ない時に、お父さんが畑に行つた時に上がつていったから(羽衣

が)ありよつたつて。だから、これ取つて、お父さんが来ないうちに、この子どもたちに、「これこれしかじかで帰らんといけないからお母さんは」と話して、

「も、帰るから行こうねえ」として子ども達が泣いている所に、お父さん来てから、

「だれがこれ(羽衣を隠した場所教えて)やつてあるかねえ」と言つて、お父さんは(お母さんが)天に上がつていくのをただ見るだけさあ。

「自分はもう天の人だから必ず帰らんといけない」といつてから天に帰つていけるさあ。子ども二人出来てからよ。

⑤ 天人女房

金城ナベ(明治三十六年生) 松本

「方言原話」

銘苅川で髪洗うへーや。あんざくどう、この男の人は「不思議なむん」ちうぬカーんかい下りてい、くぬ髪流りとんでい、うり拾じや、たたみていどう取たる神様やひえーや。うりが飛び羽や、うりや川うてい浴みへーや、うぬぬ取やーによけーかじみていよ。さくどう飛でいん飛ばらんへーや、な。あんざー、あとー、うりとうままなていよ、子三人なちえーるばーてい。

あんざくどう、飛でいん飛ばらん、あとー、うぬ子や三人なちえーへー。一人ぬわらびぬや、かんし倉まんまーるみぐたくどう、うまかい飛び羽かじみてーん

※1 銘苅川 那覇にあった泉で、天女が降りて水浴びした泉井で知られる。
※2 飛び羽 羽衣のこと、それを着ると空を飛ぶことが出来る衣裳。



でーや。あんざくとう、子ぬ、「飛び羽見ちや、うまにかいあんぞい」言ち語てい。あんざくとう、うぬ、女ぬ親うぬ飛び羽取やーにしぐ飛でいふあちやー。あんざくとう、飛ばがなーや、

「二人ぬ子やヌールんかいなち、一人ぬ子シジャンでいがらーなち、一人ぬ子や偉い人んかいなりよー」んでい言ちえーはに。あんし飛でい行じょーんでい。

うりがる名ちきてーんでいどー、うぬ女ぬる「いやーぬーんかいなりよー、ぬーんかいなりよー」んちる。あんざーに、なー、一羽におーぎわうぬ子ぬ顔見ち、なー一羽にしーねー涙ぬパンナイ落ていてい、別りやひえーや。あんざーになー、うにんからなー、ちやー知らんふーなーんでい、飛でいふあち。うぬ子やなー夫ぬ育ててーんでい。

〔共通語訳〕

銘苅川で髪洗うさあねえ。そうしたから、この男の人には「不思議なもんだ」とその川に下りて、髪の毛が流れているのを拾ってね、たんで取ったようだね神様のものだからね。天女の羽衣はね、天女が川で浴びてるさあねえ、男の人が取って隠してしまつてね。すると飛ぼうと思つても飛ぶことができないでしよ、う、ね。それで、しまいは、その男と共に暮らすことになり、子ども三人出来たそう。

そういうことがあつて、飛んでも飛ぶことができず、ついには、子どもが三人出来たさあ。一人の子どもがね、こう倉の周りをまわると、そこに羽衣がしま

われていたんでしよねえ。すると、子どもが、「羽衣を見た、倉にある」と言つて話した。すると、母親はその羽衣を取つてすぐに飛んで行つた。すると、飛びながら、

「一人の子はノロにして、一人の子は百姓とかにして、一人の子は偉い人になりなさいね」と言つたんでしよねえ。そして飛んで行つたそう。

天女がそれぞれの役目を与えたそうだよ、その母親が「お前はなにになりなさい、なにになりなさい」と。そして、一羽あおくと残した子ども顔を見て、もう一羽あおくと涙があふれ出た、別れたからね。だけど、その後からはもう、知らんふりして飛んで行つたそう。残された子どもたちは夫が育てたんだらうねえ。

⑥ 天人女房

永山ウシ(明治三十七年志) 大里

天から降りてきてね池でお風呂入つたつて。海水浴みたように。女の人がよ、きれいな人がてー(天から)降りてきて池でねお風呂入りよつたつて。ある部落の人がねお風呂入っているのを着物(見て)。これ昔天間の話や。この着物を取つてしまつて、松の上にう掛けていてね。部落の青年が来て、この着物を取つて、逃げたらしいですよね。ほうたら女だからね、着物もなくても行けないし、「どうしようか」とくれているところに、

「いやー妻ないくとう、うぬ着物取らし、取らし(あなたの妻になりますから、その着物を渡して下さい、

※1ヌール 神橋本島地域で公儀(政府)の祭祀を司るために、首里王府から御令書(任職文書)公布され、村々におかれた女の神職のことをいう。

※2替天間 長野市宇曾天間。長野県には森の川という羽衣伝説の地がある。

渡して下さい」と言うたらしいよ。ほつたらその着物はね、渡しはしないで自分の妻にしたわけよ。

ほうたらね、子どもが二人できて、一番姉がね、自分の妹が弟が知らんけれど、お守りしたわけよ。「粟ガラの下にねきれいな着物があるからね、あなたに着せるからね泣かないでよー」ってお守りしたわけよ、その姉がよ。ほつたらね、お母さんはこれ聞いてね、「あら、これは不思議だねー。なんだかねー、自分の着物があるんでないかねえ」。

「庭の粟ダラの下にきれいな着物があるからね、お前に着せるから泣かないでよー」ってお守りしよつたつて。ほつたら、母親がこれ聞いて『自分の着物でないかねえ』つてね、その着物をその粟ダラ探しに行つたわけよ。その、やっぱり飛ぶ着物だつたつて。あの羽衣がある『ああ、自分の着物あつたねー』つてね、それを着けてね、この木の上からこんなして上がつて行きよつたつて、天によ、子どもを捨てよ。そつたら子どもその木の下でね、「母親、ああ、母親よー」してね泣きよつたつて。そのまま母親は天に昇つてしまつた。そういう話だよ、羽衣というのは。

⑦ 天人女房

佐久本トヨ（明治三十九年生） 池瀬

宜野湾に井戸もあるよ。イズミ、山中からや、山の奥から湧いてくる湧きイズミが。あれの側にまた、カーグワがあるからよ、井戸ぐわが。そこで、お風呂入りよつたつて、髪も洗いながら、女が。あれ、天女。

だからね、この衣裳隠したのは農家やつたつたつて。

その衣裳がなければ天ぬんかい昇られないからや、家に嫁さんにしようねえといつて連れて行つてねえ、二人の子ども作つたからね、男の子やつたはず。天に昇らないとわからんから。この男もね、『ああ、家内が逃げたつて大変だなあ』といつて、衣裳は倉庫、倉に隠してあるのにな、倉庫にその衣裳を隠していたんでい、あの、親父が。それを見つかつて、これをつけてね、子どもたちをすかして、お菓子もくれて寝かしてよ、二人。こんなして寝た時分に、自分は衣裳着けて天に昇つてね、中ガカイといつて、半ば頃に木があるよ、木が。高い木があるから、あそこで、少しは休んで、

「子どもよ大きくなつてねえ」といって別れつけてや。

あれは普通の人間じゃない。

子ども連れて行かれないからや女は天女だから消えていった、衣裳着けて。

農家の親父が欲しがつて隠して、隠したら逃げないからといつてね。やもなくな神様が授けたでしよう子どもは。

⑧ 天人女房（察度王）

松下栄吉（明治三十五年生） 池原

【方言原話】

「シジャぬ着物のーあらんしが」でいさくとう、な、ひるまさーそーしが仕方ならんばーてー。あんしさに、なんなくうまんかい、手足洗れーが行じやく

とうやー、あんざぐとう、な、女ぬそーばーてー。うぬ男あ、

「ぬーんち、私松んかいや着物かきてーが、私水んかい浴みーが」言ちやぐとうやー、

「うぬ松えー天ぬさじやかい。水ん天ぬあまむんどうやる、シジャぬあまむのーあらん」でい言ちやぐとうや、

「えーあんやみーりちそーしがやー。うぬ場や婦てい、また、な、一回でい來くとうやー、うにーやうぬ着物のーけー隠みてーるばーよー、男ぬ。かじみていさぐとう、な、裸なてー婦ららんばー。あんざぐとう、ちやつさ願ていん、願ていんならんたぐとう、

「私ん連りり」んち、あと、仕方なく連りたくとう、な、うまんじ二人夫婦なてい子産ちよーるばーてー。

女ん子二人産ちやくとう、な、うぬ妻え天ぬ天女どうやくとう、「ちるかーぬあれー婦らりーしが、ちるかーぬねーらん」でい庭出じてい泣ちやぐとう。うぬ女わらばーたー二人が、

「ぬーんち、オカーや泣ちみしえーが」んちやくとう、「私ねーくまぬシジャーあらんや、天ぬ生し子るやくとう、婦りわるなしが婦ららん。着物ぬあれー婦ららん」でい。

「お母さんの着物のーやー、おとーが米倉ぬくしんかいかじみてーん」でい。

「えーあんやんなー。とーあんやらーかめーていくー」んでい。うぬ女ん子二人し、うんたきなそーるわら

ばーが、かめーていちちやくとう、うり取やーい上がていはいちやるばーよー。

さくとう、うぬ女ん子ぬ成功しち、産ちやる子ぬ沖細ぬ王様ないみそーちやるばーよー。

〔共通語訳〕

「人間の着物ではないが」と思つて、珍しがつてはいたが特に氣にとめることもなかつた。そんなことがあつたが、なにげに、そこに手足を洗に行つたら、すると、そこで女の人が裸になつて浴びていたんだ。それを見た男が、

「どうして私の松の木に着物をかけてるか。私の水で浴びるのか」と言つと、その女の人は、

「この松は天からの授かりもの。水も天の授かりもので、人間が授けたものではない」と答えると、

「ああ、そうか」と、そういうやり取りをしていた。その時はそれで婦つたが、また、もう一度来た時にも、（同じように水浴びをしていたので）、その時はその着物を隠してしまつたんだよ、その男が。隠したので女の人は裸のままでは帰ることができない。（着物を返して欲しい）とどんなにお願いしても返してくれないので、（女は）「私を連れて行って下さい」と、しまいには仕方なく（男に）ついて行き、男と契りを結び子どもも生まれた。

女の子が二人生まれたものの、その妻は天女だから、「羽衣があれば帰ることができるが、ないので帰ることができない」と庭へ出て泣いていた。すると娘

※1 松 天女が羽衣を松の枝にかけるとは、羽衣伝説と同じである。

二人が、
「どうしてお母さんは泣いているのですか」と聞くので、

「私はこの人間ではありません。天の子どものもので帰らないといけないのですが、帰れない。着物があれば帰れるのに」と。

「お母さんの着物はね、お父さんが米倉の後ろにしまつてるよ」と告げた。

「えーそうなの。それじゃあ捜しておいで」と（言いつけて）娘二人が、ほどほどに成長した娘たちが捜してきたら、それを受け取って天に上がっていったんだよ。

それから後は、娘たちも成功し、娘の産んだ子どもが沖繩の王様になつたそうだよ。

⑨ 天人女房（天から降る菓子）

金城眞良（明治四十年生）古筆

銘苧子めいしや銘苧川めいせんちあるでしょう。銘苧子めいしと子どもができてるわけでしょう。だから、銘苧子めいしが羽衣の着物隠して（天に）とうとう行かれないで子どもを産んだから。今度、その羽衣の着物を言い残したら飛んで行くだろう。

だから、その子どもの大きくなって、これだけあればたくさんだと言つて、その子どものおかしは隠すことになつたら、それから落ちていなくなつたらしい。隠すことになつたらね、な、「ひもじい思いするよりね、これだけはまたあした食べよう」この頭ができたもん

だから、それ、その後からはもう落ちやくなつた。
（天女が）御天に上がつてから（お菓子を落としていたが）隠すことになつたから、もう、知恵が出たから、「もう、いー（これでいい）自分でひもじい思いをしなから、もう、これでいい」、このままですんだらしいんですよ。

⑩ 天人女房（歌）

吉田（鳥袋）タケ（大正七年生）知花

〔方言原話〕

アシビぐわーしよつたさ、これ。銘苧子めいしといつてよ。

川は銘苧川めいせんといつてね、島尻方面にあるはず。

一

一の始まり銘苧国めいせんこく
川の始まり銘苧川めいせん

銘苧主めいせぬしぬ前まへや、でいこーなむん

二

はるまいなじきに 川うりてい
川ぬしめいせぬしていに 立ちみそち

髪ぶちぎぬ 流りゆし

三

どーつとう珍めづじゆらさ くぬ髪かみ
取とりやい広ひろぎば 九尺くぢやくあてい

うりどううさんな むんさだみ

四

うりからよいよい あゆらりば
あけじゆどうびんす 取とり隠かくち

ぬがよみやらび うま浴あびみる

天人が降りて来てね、この川で浴びよつたつて。あんざーに、このトゥピンストゥピンスというのこの羽衣うばいさあねえ。着けるのよ、天に飛んで行くあのあれ。これを銘

幸一アシビ 農村において豊年を祈願して行われる祭り、村のアシビナーで踊り、狂言、勧進りかんじんりと多彩な芸能が奉納される。村人は仕事を休み楽しむ。

「おれ子という人が隠してしまつて、このみやらびに、「ぬがよみやらびうまうてい浴みーる」といつて声をかけられるわけ。とうらぬねーるーや、な、アシビぐわーぬむのーわかいるばーて。あんざーに、くれーまた、

五 わんねーみやらび あやびらぬ

天ぬ産し子どう やいびーし

時々くまうてい 浴みやびーん

六 でいちやーよーみやらび 我が宿に

煙草一吹や ちきらさい

煙草二吹に 縁結ば

もう私のおれにならなさいというわけさあねえ。あんしーねーな、始めーじこー断わいしがて、あんしがな、男ねーかなんしえーや。あんざーに、どうーぬ家んかいそーてい行ちゆるるばー。

あんざーに三人子ん産するばー。あんざーに産ちからよー、なーくれーなうまぬ人あらんしえーや。あ

んざくと、

「私んねーくぬ世ぬ人あらん。天ぬ産し子どう私ぬやしが、さらば銘苧にだまさりてい産しんじやち、飛でいん飛ばらん、くぬ哀りしな。くぬトウピンそー、くぬ銘苧子がけーかじみていねーらんくとう、飛んでも行けないさあね。だから、このわらばーたが子守やー歌ぐわーに出てきているわけ。あんざーに、うぬトウピンそー、

「米倉、粟倉、倉ぬ下なかいかじみらつとーくとう」でいち言し、くぬ親や聞ちよーるばー。『ああ、くつたー子守やー歌ぐわーあんそーちしが、私トウピン

又、着物くぬ倉ぬ下なかいあさやー」でいやーに、なけーとうめーてるばー、親やどー。あんざーになー着やーに、天ぬんけー帰いるばーよー。で、この子どもたちもこつちに残して飛んで行つてしまふ。あんざーに泣きながら親はあれしてよ、この親がよ、飛んで行つてからの歌ぐわーよー、

七 アンマーが心ぬ やしまらん

サー ウミングワ

夏ぬかたふり雨や アンマーが涙でーんてい

八 アンマーが心ぬ やしまらん

サー ウミングワ

冬ぬ霜かき雨や アンマーが

九 アンマーが心ぬ やしまらん

サー ウミングワ

アンマーが涙とうむり なし子

天ぬんかいはらつていから、うぬ歌三言葉はらーに、な、くつさし終わいたるばーよー。

〔共通語訳〕

アシビの時に演じていたさあ、これ。銘苧子といつてよ。川は銘苧川といつてね、島尻方面にあるはず。

一 国の始まり銘苧国 川の始まり銘苧川

銘苧主又前は賢い人

二 畑の見まわりをするふりして川におりて

川の下にお立ちになられて髪の毛が流れるのを

三 あまりの珍しさにその髪の毛を取つて

広げてみれば 九尺もあつて

四 これは不思議だと思ひ つきとめようとした
それからあたりを歩いて
きれいな飛衣を取り隠して

どうして娘さん ここで浴びるのか

天人が降りて来てね、この川で浴びよつたつて。それに、このトウピンスというのこの羽衣さあねえ。着けるのよ、天に飛んで行くあのあれ。これを銘苅子という人が隠してしまつて、このみやらびに、「どうして娘さんここで浴びているのですか」といつて声をかけられるわけ。そういう話は、もう、アシビでやつていたので知っているわけさあ。そして、次はまた、

五 私は娘ではありません

天のいとし子であります、
時々ここに来て浴びています

六 さあ娘さん私の家へ

煙草一吹をすすめて
煙草二吹に縁を結んだ

もう私のあれ(妻に)になりなさいというわけさあねえ。だけど、始めは一生懸命に断るが、だけど、男には勝つことができないさあねえ。そこで、自分の家に連れて行くわけ。

そして三人子ども出来るわけ。そうやつて子どもも出来ているが、だけど、その人はこの人ではないさあねそれで、

「私はこの世の人ではありません。天の子どもなんです、なんと銘苅にだまされて、飛ぼうと思つても飛ぶことが出来ないといつも悩んでいた」。この羽衣は、

この銘苅子が隠してしまつていたので、飛んで行くことができないさあねえ。すると、この子どもたちの子守歌に出てきているわけ。それで、その羽衣は、

「米倉、粟倉、倉め下にしまわれているから」という歌を、この母親が聞いているわけ。「ああ、この子たちは子守歌をそのように歌っているが、私の羽衣は倉の下にあるんだねえ」と思つて、それで、見つけることができたわけ、母親はね。そして、(羽衣を)着て、天に帰つて行くわけさあ。で、この子どもたちもこっちに残して飛んで行つてしまふ。そこで泣きながら親は天に帰るがね、この親がよ、飛んで行つてからの歌で、

七 アンマの心が休まることはない

サー 子どもらよ

夏の片降り雨は アンマの涙ですよ
八 アンマの心が休まることはないよ

サー 子どもたち

冬の冷雨は アンマが
九 アンマの心が休まることはない

サー 子どもらよ

アンマの涙と思つてね、子どもらよ
天に行かれてから、その歌三言葉歌われて、これで終つていた。

⑪ 天人女房の歌

鳥袋トメ(大正二年生) 松本

始まり銘刈国

(始まり銘刈国)

川ぬ始まい銘刈川

(川の始まり銘刈川)

銘刈主前が (聞き取り不能)

(銘刈主前が 聞き取り不能)

煙廻なじきに 出じみそち

(煙廻りをするふりをして 出でらして)

川ぬ浴しみ 立ちみそち

(川で浴びてる所に お立ちになり)

ぬがよみやらび くま浴びる

(どうして娘さん ここで浴びているのですか)

私やみやらび あやびらぬ

(私は娘ではありません)

天ぬ産し子どう 私ねやしが

(天の子どもの私ですが)

時々 くま浴みやびる

(時々ここに来て浴びています)

一羽におおぎば 按司ぬはに

(一回あおぎば 按司のはね)

二羽におおぎば (聞き取り不能) かけてい

(二度あおぎば 聞き取り不能)

三羽におおぎば (聞き取り不能)

(三度あおぎば 聞き取り不能)

でいちゃよみやらび 我が宿に

(さあ娘さん 我が宿に)

煙草一吹に落ち着きてい

(煙草一吹に 落ち着けて)

煙草三吹に妻くくる

(煙草三吹に 妻にした)

連れて行つたらね

んげやうじよぐわね しかぬ

(そこに住むことはできません)

天ぬじりとうし

(天への義理として)

あねならぬ いすじくまからんじみそり

(あなたの言う通りにはできません 急いでこ

こから立ち去つて下さい)

⑫ 天人女房へ銘刈子口説

久田繁夫(大正十四年生) 明道

〔方言原話〕

国ぬ始まい銘刈子んちよー、うぬ人がしえーるく

とうやし。銘刈子でいる人農業しえーんちやてーる

ばーてー。農業やみしえーくとう、ハルかい行ちやが

ちーくぬ池んじよー、クムイんちあしえーやー。と、

うまんかい、天から降りていめんそーちやる女ぬ浴

みーてーるふーじてー。浴みたぐとう、くぬ銘刈子ん

でいる人、ハルかい行ちゆ、くま、クムイ側から通た

ぐとう、うぬ女浴みたぐとう、「自分が産し子うまん

かいうる」んち、

「私ねー天ぬ産し子どうやいびーしが、川に下りてい

浴みーんどー、しだまりーんどー」くぬうりんかい。
 「あんしえー、出でてい来」んでい。あんさーうぬ人
 煙草くぬ女んかい、吹かちえーういてー。吹かちやく
 とう、あとー、銘苧子んでいる人ぬ、

「煙草一吹まじてーうい、煙草二吹吹ちんでい」ん
 ちやくとう、煙草三吹なーくぬ、女落ち着きていトウ
 ジしえーるふーじてー。

あんさーい、い一年数ぬんじやくとうよー、二人ウ
 ナイ、イキー生まりとーてる、うり、トウジさく
 とう。あんさーい、うぬ、女ウナイ、イキー産ちやくとう
 天ぬんかい上がいくとうなたくとう。くぬ、子守
 やー、うまーエーキんちゆなやーに、農家やしえーや。
 世ぬ始まいやくとう。

女ぬ親天ぬんかい上いがそーし、くぬ米倉まんまー
 る女ぬ親みくとうしえーや。みくたぐとう、くぬ
 子守やーが、

「アンマが飛びんす私ね見ちやん。米倉下ぬ稲ぬ下」
 あんいちやくとう、うぬ女ぬ親、米倉ぬ下とうぬーた
 くとう、衣裳ぬあるばーて。あんさー、うぬ天ぬんか
 い上がいるくとうなとーるばーて。上がいるくとう
 なたくとう、次、

「羽におーぎば、白雲に
 二羽におーぎば、オー雲に
 天ぬ親んちやーが、

「ぬがよ産し子なまでい来る」いちやくとう、
 「銘苧主前トウジさりてい、七ち産し子や按司になち、
 五ち産し子やヌールになち」。

くつさしうわていてーるふーじやん。銘苧口説ん
 ていよ、うりんかい。

【共通語訳】

国の始まり銘苧子といつてね、その方がなざったこ
 とだが。銘苧子という方は農業をしていたらうね
 え。農業をしていたので、畑に行きながら、この池で、
 池つてあるだらう。そう、そこに、天から降りていらっ
 しゃった女が浴びていたようだね。浴びていると、そ
 の、銘苧子という方は、畑へ行く途中で、その池の
 側から通ると、その女が浴びていたので、「自分の子
 どもがそこにいる」と、

「私は天の子ですが、川に下りて浴びようと涼もうと
 しています」と銘苧子に言った。

「それなら、川から上がつてきなさい」と。それで、
 その方は煙草をこの女に吹かした。

「煙草一吹で仲良くなり、煙草二吹吹いてごらん」と
 といって、煙草を三回吹かせて、この女を落ち着かせて、
 妻にしたようだね。

そして、いい年を重ねて、二人、女の子と男の子が
 生まれたその女を妻にしたから。そして、その女は女
 の子、男の子を産んだから天に昇ることになった。こ
 の、子守りをする人、そこは金持ちで農家でしょう。
 世の始まりの事だから。

この母親は天に昇ろうとしているのを、この米倉の
 周りを母親は回つていでしょう。回つたら、この子
 守をしているのが、

「お母さんの羽衣を私は見たよ。米倉下の稲の下」そういつたので、その母親は、米倉の下を探したら、衣裳があるわけねえ。それで、その天に昇ることになつたわけさあ。昇ることになつたので、次は、

一回羽はたけば、白雲に

二回羽はたけば、雲海に

天の親ごさんたちが、

「どうしたの我が子よ今ごろ来て」というと、

「銘苅主前の妻になり、七つになる子どもは按司にして、五つになる子はノロにした」。

それだけで、(物語は) 終わつたようだ。銘苅口説というよ、これには。

(2) 浜千鳥女房

① 浜千鳥女房

昔久原ウシ(大正二年生) 嘉原良

じいさんが浜千鳥あまぎ助けてきてからに、そして人間に化けて。そのおじいさんには人間と見えるさーねー。だって、そこでも機械りなんか何かやつていて。そして、それを、

「私が仕事している時にはこつちに寄らないでよ、見ないでよ」と言つたけれど、「あんまり不思議」思つて、そのおじいさんがのぞいたつて、

「もう、見られたねー」と言つてそのまま。そういう話はあるけれど。

② 浜千鳥女房

神里マカト(大正元年生) 安藤田

「方言原話」

魚捕いしとらやつたつて。海かい魚捕いしとらてい来きこに、ちやーかでーしーしーさーるばーて。どうー人者ひとものちやー海んかい捕とらいが行ちゆたんでいしがてー、うぬ男おとこてー。うぬ男おとこ海なかいうるばーてー、うりまた家かい来なかいムノすがやーなかい、また家かいほちえーしーしーすたんでい、うぬ女おんなお。家かい、海んかいほちえーしーしーすたんでいてー。あんさーに、「ぬー、うささーな私わたしたークワツチーすがてい誰たれがさがやー」んちよ、いつべーうぬ男おとこひるまさそーたんでい。「あんしひるまさるやー、私わたしたーかい、ぬーぬ来なかいあんしすがたがやー」んち、いつべーひるまささーなかいてー、あんさーかでーしーしーさーなかい、また海んかい出しえーしーしーしー魚捕いしとらていほちえーしーしーそーたんでい。

あんさーなかい、うぬ魚いしぬんでいからー化きやーにてー、うぬ魚いしぬうりさーなかい。あんさーなかい、魚いしんぬーんぬー、しぐ煮にちえーしーしーさーなかい置おち、家うちうてーまたクワツチーんすがてー、また家うちかいうぬ女おんなお海んかいほちえーしーしーそーるばーてー。うぬ男おとこあいつべーひるまささし、「ぬーんち、私わたしたー、あんしクワツチーすがてい置おちえーがやー」んちよーひるまさしうりそーしがてーな。

あんさーなかいうりやたんでい。うぬ女おんなチジュヤーやるばーてー。あんさーに、ちやーうりそーたんでい

「私ねー潮うしほひらすんでいうまいちよーん」

「あんしあんなししええーえ二人夫婦ふとごならやー」んでい夫婦ふとごなやーい、ううまま寝ねんんたくくとうとう。また、朝あさううらんんななてていい。また、ううぬぬ男おとこ夕ゆふさんさんでで一いっ浜はま口ぐちんんかいかい来きににいいちちよよーえたたぐぐとうとう、また上あてあいい来きちち、また二人寝ふたりねんんじじゃゃーいいい。あんさんーいななかかいい、行いじじううららなな。「くり、私わたしぬぬままややーいささーいるるややががややー」んでい。あんさんーい三人男さんにおとこんん子こ産うちち。産うちちややぐぐとうとう、また、うぬ漁師いしやうが魚いさな捕とりりが行いじじゃゃぐぐとうとう、うぬ三人ぬさんにおとこ子こんんちちゃゃーいが船ふねんんかいかいししががつつてていい来きにに、「ひるましひるましーいむむんん」。

「お父おとうよ、お父おとう」三人が、

「いったいーいぬぬーいややがが」んでい。

「ななーい子こどどうう私わたしたたーいややんんどどー。アンマアンマーいやや龍宮りゆうきゆうななかかいいめめんんししええーいんんどどー」

「ええーいあんあんどどううええーいんんなな」んでい。

〔共通語訳〕

海岸かいぎんに行いつつてて潮うしほが引ひくくのを待まちつつてて浜はま辺べに座まつつてていたたら、きれいな女おんなが来きて、

「どうしてあなたあなたは、そこに座まつつてているのですか」と言いうので、

「私は潮うしほが引ひくのを待まちつつててそこに座まつつてているのです」

「それなら二人夫婦ふとごになろうねえ」と夫婦ふとごになり、そこで寝ねた。ところが、朝あさになると（女おんなは）いなくなつていた。また、その男おとこは夕ゆふ方に浜はま口ぐちに行いつつてて座まつつてていたら、また（女おんなが）上あつつてて来きて、また二人寝ふたりねた。すると（また、その女おんなは）行いつつてていいなくななつつた。（男おとこは）「こ

の女おんなは、私わたしを惑まどわす人ひとなのかねえ」と（思おもつつてていた）。だけど、（女おんなの人ひととの間まに）三人男さんにおとこの子こが生うままれてていた。生うままれてていたのので、また、その漁師いしやうが魚いさな捕とりりに行いくと、その三人の子さんにおとこどもどもたたちちが船ふねににひひかかれてて来きて、「めめずずららししことことだ」（と思おもつつてていた。すると）

「お父おとうさん、お父おとうさん」三人の（男おとこの子こが呼よぶので、

「お前おまえたち誰たれだ」と聞いた。

「あなたの子あなたの子どもどもですすよ、私わたしたちは、お母お母さんさんは龍宮りゆうきゆうににいらいつつししゃゃいいますすよ」

「ああ、そそううななんんですすか」と。

(3) 猫女房

① 猫化け

上根うねワサワサ（明治三十一年生）宮里

〔方言原話〕

昔むかしななー、ママヤヤーが化かきかややーいに清きよら女おんなんんかいかいななややーいに。お父おとうや一人暮ひとりぼらししななややーいに夕ゆふご飯いひううささががいたいたくくとうとう、あんさんーいにママヤヤーぬ清きよら女おんなぬ化かきかややーいに、

「お父おとう夕ゆふ飯いひにぬぬんんううささががいいんんななー、私わたしにん食くままちち」んんででいい言いちちゃゃー、

「いいー、いいゃゃーんんううままんんかかいい来きわ食くままししゆゆくくとうとう」来きに二人夫婦ふとごななややーいに。あんさんーいに男おとこんん子こ産うちちやくやくとうとう、うぬ男おとこんん子こぬ五いちち六むちちななてていいから、お父おとうやハハルルんんかかいい出でじじたたくくとうとう、うぬお母お母やククチチャャんんかかいい行いじじゃゃくくとうとうママヤヤーいななややーいに、男おとこんん子こにに見みららつつてていい。ささくくとうとう、うぬ男おとこんん子こ、「ははー、くくれれー、私わたしねねーお父おとうやママヤヤー

※1ウチヤ 裏座のこと。主に二番座の裏。
※2はー 驚いた時やあきれた時などに発する言葉。

とうる子産ちえーさやー」んでいいやーに、しくゴン
ゴンハルんかい行ちやーに、お父呼でい來に、

「今家んかい來」んちやくと、お父や、

「ぬーやが」んちやくと、家んかい來に、

「なーや私マヤーととうる子産ちえーる。合点さんどー」
んでい。

「いえー、あんどやんな」あーに、

「とーあんしえー、今日やパーキぬみー魚買やーな
い持たち、追ぎらやー」んでい言ちさくと、あ
んさー、

「んじ、いやーや、マヤーやていから化き私だま
ちえーくとうな。男ん子産ちとらちえーくとう、

ありがとーやくとや。今日やいやー、パーキぬみー
魚買らわー、な、來ちやる所んかい行きよー」んでい

あーに。お父やー後追いさーに行じやくと、うぬ穴
んかい入ねー、パーキんうるさーに内んかいマヤーな

てい歩ちゆたんでいやーに、あんさーお父や、「はー、
くれー本当マヤーでいやてーさやー」んでいいやー

い、

「とー、いやーや、今から私達家んかい來ねーや、首
くんじやーなかいしく木ぬ上んかい下ぎーくとう、う

まんかい來ならんどー、いやーインマオー」でいあ
ない。

うりからマヤーや死ねーから、首くんじやー木んか
い下ぎーんどー。私達離うていんや、私ね一回のー

うぬ話聞ちよーたくと。ハル行ちくー木なかい下ぎ
ていうちえーん。むる木なかいマヤー下ぎーる、ぬー

ぬ道理やが」んでい、私の間ちーるすたんで離う
てい。

あんさー、うにからー、うぬマヤー來んたんでい。

「いやー、今から私たー家んかい來ねー首くんち木
んかい下ぎーんどー」言ちやくとからー來んた
んでい。

〔共通語訳〕

昔々なー、猫が化けてきれいな女になって。お父は
一人暮らしをしていて夕ご飯を召し上がっていたら、
そこに、猫がきれいな女に化けて、

「お父さん夕飯を召し上がっているのですか、私にも
下さい」と言うと、

「いいよ、お前もここに来なさいあげるから」（といっ
たら、その女は来て（それが縁で）二人夫婦になった。

そして、男の子が生まれ、その男の子が五、六歳になっ
た時（のこと）、お父さんが畑に出かけると、そのお

母さんが裏座に行つて猫に化けるのを息子に見られ
た。すると、その息子は「はー、これは私のお父さん

は猫と子どもを産んだんだね」といって、すぐゴン
ゴン畑へ行つて、お父さんを呼んで来て、

「すぐ、家に来て」というと、お父さんは、
「どうしたか」といって、家に戻ると、

「お父さんは私を猫と産んだんだね。納得いかない」
と。

「ああ、そうなのか」といって、
「さあ、それなら、今日はカゴのいっぱい魚を買つて

※1 パーキ 竹で編まれた目の無いザ
ルをいう。穀物・芋などを入れるのに使
用する。

※2 離 うるま市と那城に属する伊計
島のこと、「イチハナリ」とも呼ばれる



から持たせて、追ひ払おうねえ」と言つて、そして、「ねえ、お前は、猫なのに化けて私をだましているからな。男の子を産んでくれたのは有り難いのでね。今日は、お前にカゴのいっばい魚を買つたなら、もう、行くべき場所に戻りなさいね」といつた。お父さんが後を追つて行つたら、その穴に入る時には、カゴを降ろして穴の中へ猫になつて歩いていいたといつて、それで、お父さんは、「ああ、これは本当、猫だつたんだねえ」と思つて、

「なあ、お前は、今から私達の家に来るとね、首をくくつてすぐ木の上に吊るすから、ここに来てはいけないうよ、お前のような畜生は」といつた。

それから猫は死んだら、首をくくつて木に吊るすよ。私達の住んでいた伊計でも、私は一度その話を聞いていたから、畑へ行く道中の木に吊るされていた。木にほとんど猫は吊るしていたので、「どういふ訳で猫を木に吊るすか」と、私は聞いていたんですよ、伊計で。

それで、その時から、その猫は来なくなつたそうさ。「お前、今から私達の家に来ようものなら首をくくり木に吊るすよ」と言つてからは来なくなつたそうさ。

(4) 木魂女房

① 木魂女房

平野千代(大正十一年生) 明通

とても働くこの百姓が、この女の人をあれ(愛)したから。この木の下で二人がいつも逢つている所で、これ(男)がこの木を切ることになつたからよ。だから、この木を切ることになつたから、

「これ誰が切るか」といゆうてあれなつたから、この百姓の人が切ることになつたわけよ。して、

「これ切つたら、もう、あの二人はおしまいだよ」と言つた奥さんが、

「おしまいだから、切らないほうがいい」と言つたから、

「どうしようか」と言つて迷つている所に、

「皆で、引つ張ろう」と言つて。引つ張つたが出来なくて、この子どもが、

「掃ろう」と言う時に根っこが取れたつて。そのように言つていた。

② 国頭サバクイ(木魂女房)

比嘉真松(大正二年生) 城前

〔方言原語〕

チャーギぬ精妻チャーギぬ精そーる、男役人やてーるばてーるな。チャーギぬ精どうやてーしが、うりとう、妻おつとさくとう。うぬチャーギー切ちえーならんしが、チャーギ切つちさーにかい。カラファーフ造るといつて。な、



※1チャーギ イヌマキ、常緑高木で、一日、十五日に火の神に供える木でもある。最もすぐれた建築材として用いられている。

※2カラファーフ 唐破風。首里城正殿の屋根を特にさす。また、首里城正殿の俗称。(沖縄語彙集)

ありあらんねーならんでいヤーに。切ちえーならんしが、うり、切んくとうなたくとう、今度うぬチャーギぬ精どうやってーるばーてー、うぬ女お。

あんさー、くぬチャーギーわらばー一人産ちえーねーんでいー、芝居なかいや。うりがすんちやぎーしえー。

うぬわらびぬうすらんあれ、あつかんどうあたのーあらに、や。あつかんやーなかい、わらばーんかいうすらし。うぬ女チャーギぬ精やたんでいぬ話、うつびどうわか。

〔共通語訳〕

チャーギの精を妻にしている男は役人だったわけだね。チャーギの精であつたが、それを妻にしたそうさ。チャーギは切つてはいけないが、チャーギを切つてしまった。カラフアーフ造るといつて、もう、あの木じゃないとダメだということ。切つてはいけないが、それを切ることにすると、それ(妻)はチャーギの精であつたわけだね、その女は。

それで、このチャーギとは、子ども一人出来ていたんじゃないか。芝居の中では、その子どもがチャーギを引つばつていたさあ。

その子どもが引つばらなければ、動かなかったのではないかねえ。動かないので、子どもに引つ張らして。その女はチャーギの精であつたという話、それだけしか知らない。

③ 木魂女房

〔方言原話〕

うぬチャーギぬ木や女やるばーてー。あんさーに、うぬチャーギぬ木うりが女んかいないでいさくとう、うぬ男ぬ妻さーに、子ぬん産ちえーんどー。子ども一人産んでいけるけれど。

「琉球王からまぎさる木持ち来」んでいち。うぬチャーギぬ木まぎーやてーんで、えーりん。「切ち来」んでいち命令さつたくとう、あんさくとう、うり切ちやれー。うぬ、また、自分ぬ夫ぬどう切ちやんでいどー。切ちやぐとう、うぬ木やけー倒しねー、うれーうらんないしえーやー精なとーしえー。あんし、うらんないさくとう、だ、夫のーわからんしえー、うりやんちえー。あんさくとう、うぬチャーギよー倒さーに、首里に運ぶんち皆しすびちよーるばーてー。あんそーしが、ていーちんあつかんよー重さぬ。あんさくとう、また、子ぬてー、子一人やうしえーやー。うぬ子ぬよーかちみたくとう、サーラナイあつちいぢたんでい。

〔共通語訳〕

そのチャーギの木は女になつているわけさ。それで、そのチャーギの木、それが女に化けて現れたので、その男が妻にして、子どもにも恵まれたようだよ。子ども一人産んでいるけれど。

「琉球王から大きな木を持ってこいと(命令され

た)。そのチャージギの木は大きかったんでしようねえ、たぶん。「切つてこい」と命令されたので、それで、その木を切った。その、また、自分の夫が(その木を)切つたそうだよ。切ると、その木を倒すと、妻はいなくなるでしよう(木)の精だから。それで、いなくなつたが、ほら、夫はそうだと知らないさあねえ、妻とは。そして、そのチャージギを倒して、首里に運ぼうと皆で引つ張つたそうだ。だけど、少しも動かない重くて。すると、また、子どもがね、子ども一人いるでしよう。その子どもがつかまえると、スーツと引くことができたそうだ。

④ 木魂女房

金城初子(大正五年生) センター

チャージギの精が女なつてゐるわけさ。それで夫はこの村の頭だから。このチャージギの精の下で二人とも見合つてからに仲が良くなるからね。それを、チャージギの精とは思わないさーねー、男がは。あれで、世帯持つて、男の子を一人もうけるよ。あれもうけてから五才ぐらいなつてから、那朝の首里城造ると言つて役目あつてゐるから。チャージギは道の真ん中に立つてゐるといつてね、あれ、どうせ道あけないといけなからといつて、(夫は)、

「チャージギの精切る役目に当たつてゐるよー。これ切つたらね位が上がるわけさ。喜んで、私に任しておきなさい」と言つて出掛けるわけ。(妻は)、

「今切らない方がいいですよー」と一言言うけどね、

「私が役目当たつてゐるからね、私が切つたら位が上がるから、あんたまでのーがだよー(名譽なことだよ)」と言つてね、そうしてからに夫はもう、タスキ掛けてノコギリ持つて行くわけ。もう、ノコギリ一回引く時に奥さん寝てゐるけど、あつちこつち痛くなるわけ。ノコギリの音に痛くなるわけ。も、切られるし、はれてね。も、どうとう四、五回この木が切られる時ね、倒れてしまふわけ。その倒れないうちに着物は「どこかに祭りがある時にこれは着けようねー」と言つて。長男の息子の着物も作つて、自分の着物も作つて、「祭に行くときに一緒にお揃いして行こうねー」と言つて着物を作つてあるのに、もうやられてゐるから。(息子の名前は)亀千代(どい)名。この亀千代は、

「お母さんお母さん、今までいたけど、お母さんどこに行つた、どこに行つた」と。も、お母さんの着物持つてからに追いまわすけど、見当たらないさ。そして、「どこ行つたかねー、どこ行つたかねー」するうちに、お父さん帰つて来てゐるわけ。

「何でどうしたの」と、

「お父さん、お母さんがいなくなつてゐる。お母さんがいなくなつてゐる」と言つたら、自分も気づいてゐるわけさ。このチャージギの精皆、村の人たちが運ぼうとするが動きもしない。絶対動かなくなつたからもう感付いてゐるわけ。『もしやしたらこれは本当の人間じゃない、チャージギの精だつたねー』と思つてゐるつて、それに、

「亀千代あんた、手を引きなさい」と言つて言うたか

※1チャージギ イヌマキの木をいう。沖縄ではイヌマキの木が最も高級な建築材として用いられる。
 ※2那覇 沖縄県下第一の都市で、県庁所在地。
 ※3首里城 那覇市首里当麻町にある城跡。



ら、この亀千代が前の繩を取つて、

「亀千代と一緒ヨッソイ、ヨッソイ」して歌歌つて、亀千代が引つ張る時には動くわけさ。また、歌に合わせて亀千代は、

「ヨイシーヨイシー」、なんとかなんとか言うて、

「亀千代と一緒ヨイシーヨイシー」と言つてね。あれが、亀千代言うたんびに動いて、亀千代が引かなかつたら動かない、あれ。亀千代おかげに、ようやくあの那期に届いたとの話があつた。

⑤ 国頭サバクイ〈木魂女房〉

平安名常亀(明治四十年生) 園田

〔方言原語〕

うれーやー、国頭サバクイ。国頭からやー、あんどろーし一番上等ぬ木。あんし、首里んかいすんち行じ、首里ぬ瓦屋家ん造てい。くぬ村からあぬ村んどうーな、くぬ村からあぬ、あんしむる首里んどうー、村のかーじ寄していつち、あんし昔やみしえーたんでい。

あれーやー、チャーギぬ木、チャーギぬ木ぬ、てー。あれー、皆が皆しえー切らうーさん。くりんかい神などーる、くれー、くぬ女ぬ親ぬ子ぬる、くれー切つちえーる。あんさーにじらう、くぬ木やな、ちやふえーる木がやらー分からん、やるばて、あんどろー、くれー亀千代んでいしんぬとーんよー。うん。

くれーやー、一番国頭なかい、上等ぬ木。くりやか上等。皆が皆しえー切らうーさん。切ーねーな、

くり、あびーるすくどう。あんさーなかい、な、くりやかいー木やねーらんち首里んかい。くれー、あんし、国頭から、首里んどうー、ちやー交代交代。なんじゅー村がけー通らー分からんてー、首里までいなか

〔共通語訳〕

これはね、国頭サバクイ。国頭からね、あのように一番上等な木(を選んだ)。そして、首里に引つ張つて行つて、首里の瓦家を造つた。この村からあの村まで、そして、次の村へと、そうやって首里まで村という村を経由して引つ張つて行つて、そうやって昔は持つて行つたようだね。

あれはね、チャーギの木、チャーギの木の話。あれは、誰彼が切るうとしても、切ることができなかった。これは神であつた女親の子どもがこれを切つたんだよ。それで、この木は、どんなに大きい木であつたか分からないわけさ。(この子ども名が)亀千代とのつているよ。

これはね、国頭で一番上等な木ね、これよりも上等(な木を)見つけることができない。その木は誰彼が切る事ができなかった。切らうとしたらこの木が叫ぶから。それで、それより上等な木はないということ、首里に(運ばれた)。この木は、それで、国頭から首里まで交代交代して(運んでいった)。幾つこの村を通つてきたか分からないほどだ、首里に行くまでに。

※1 国頭サバクイ 沖縄本島国頭地方の木造り歌。

※2 国頭 沖縄本島北部の総称。山原ともいう。

※3 首里 王府のおかれていた文化・経済の中心。現在の那覇の首里地区。

※4 瓦屋家 ここでは首里城のことをさしている。

(5) 鶴と犬の育て子

① 鶴と犬の育て子

普久原ウシ (大正二年生) 嘉間良

親が捨てた子どもを、犬が連れて行かなかったかねえ。そして鶴がいるさあね！。それにいつもだっこさせて温めて、そして犬はまた食べ物取ってきたりなんかしてやっていたという話はあったんだ。ガマ(洞窟)の、ガマ(洞窟)の中であつたはずね。

二 婚 姻

(一) 難題婿・嫁

① 難題婿(ヘシグダキ)

鳥袋盛保(明治三十七年生) 知花

「方言原話」

チャー木で作った桶は、どんな上手な大工さんがやっても一日、十五日になったら水がもるとい話もあつたんですよ。

昔ムヌクチャーが各字歩ちやがちー、

「勝連濱川真鍋樽(まなべ)スシムントウリ、四郎樽金(しろうだん)やだきとうめてーしがやー」でいる話えあまくまぬ部落んじすたんでーい。あんさーに、うぬ話すぬ本人ぬん聞ち、「あんいーる人見ちんでーやー」んでい互に思とてーるふーじ。やいぎーしが、あがとー首里から、わざわざ勝連ぬんかい通てい、うぬ女忍びーが行じえーぎさんひが。な、なかねー戻たるばーんあるはじやしが、いちゃてい話さるばーんあてーぎさぐと。

「私ん忍びーがめんそーちやらー、川ぬ水ぬはい止るむぬばーに、テー仕ぬチーふしるないるばーにめんそーれー。あんしえー話物話んなくと。あんさーに馬二一ちに鞍一ちうすていめんそーり」でいちゃぐと。女の、あがとーから来る人ぬ、また、ことに首里人ぬやひが、ちやぬあたぬ常識ぬあみしえーが

やー、ちやぬあたぬ学力ぬあみしえーがやーんち試するばーやてーぎさん。あんすくと、いんねーすんねー、うぬ、馬二ちんかい鞍一ちうすいんどうんくとうん難しーやい、二ちんかいどうーん乗てい行きわるやくと。また川ぬ水ぬはい止るむんどうぬくと。んねーらんしえー。あんしが、道ん人ぬむる歩かんないねー、川ぬ水ぬはいどうどーんでいいやらりーるうりんあんでい。あんしーねー、テーばしるぬチーないるばー」でいねー、屋開きーねーはしろー重さばとーしが、戸締りしーねー「ちなーどうないしえー。あんくとう、まーんくういはしるぬみちやとーんからーな、にーかなとーくとう、誰がんでんくとう、うにーに來んでいるばーやてーぎさん。な、うりが要求なけー、どうーぬわかいいしえーむるねーんどうあいぎさ。はしろー、よーやくわかいしんない。あんしが、馬二ちんかい鞍一ちうすいんでいしんない、聞ちんーだん話でーわからんあ。川ぬ水ぬ止まいんでい理由んねーらんてい思てーてーひん。帰てい行じ、けー隣なーりーぬ年寄ぬちやーんけー、おーかがいさくとう、

「うれー川ぬ水ぬふあい止るむでいちえーねーらん。道ん人ぬむるうらんないねー、川ぬ水ぬふあいどうらんてい意味やくと、あんしにつかなくていか。また、はしらんでいしえー、開きーねー重ぼとーひが、みちーねーちーんかいなくと。かさぎ馬んけ、みー馬んけ乗てい行ちーどうんふあ、二ちんかいうしとーしとーゆぬむんやくと、あんし行き」ん

補遺 沖繩では結婚式の日に婿に難題を出したり、困らせたりする風習がある。其を能く知恵を働かせて争せぬ結婚をする話や、難題を解いて結婚する話など結婚そのものを主題にしている話である。

注1 チャー木 いぬまき、樺の一種。木材は固く淡黄白色で沖繩産の最上の用材となる。

でいち習なさつたかどうか、うぬ通とい行いじえーざさん。

あんすくとう、うぬ女いあんし来きくとう、約束やくそくやぐとう、入りいらんないるばーやしが。ふあしる開あきたくとう、まる竹たけしーてい、シーグしーてい、粟飯あわしーていウジンていーちなかい飾かざりらつとーたんでい。あんすくとう、くぬ竹たけ抱かちくみ、シーグしーくみでいちあいざさひが、うれーわからんなやーに、『あがとーな一から来きぬ人ひとあわりぬ者ものやーんち。粟飯あわちよーんかみんでいち、米飯こめねーらんやーに、粟飯あわ煮ゆちうちえーはやー』でい思おもひやーに、シーグし竹割たけわりやーに粟飯あわちうちゆかどーとう。

「うんじよー粟飯あわ欲ほしちめめんそーちえーる。私わたし欲ほさしめんそーちえーるばーあらんで」でいちやぐとう。な、な一へー話はなしーうーさんなやーに。『な、女おんななかいあんしふりーるあたゐ男おとこしまりていんゆーちらーねーらん』でいやーに自殺じそくけー死しぬぎざさんど。本ほん当とうやうぬ女いぬんしかとう、うぬ男おとこやな一かなはぬ。うぬ粟飯あわんでいぬうりんしかとう理由りゆうぬあるふーじ。昔むかし人ひとぬいしみーねー。くぬ、

ゆかていしさみ桶かや、真昼まひらまに咲さちゆい

あわり粟あぬ穂ほや、夜中よなか咲さちゆい

んち。粟あぬ穂ほや夜中よなかどう咲さちゆい。あんさーに、本ほん当とうや、な、『ないくとう、入いちめんそーり』でいぬ意味いみどうやてーざさひが。わからんなやーに自殺じそくちやくとう、うぬ女いぬん、本ほん当とうやかなはてーひが、あり試あふんでいけー死しなちよーくとう、

「私わたしねーな、人ひと一ひと人ひと殺ころちよーしどうゆぬむんやく

とう、私わたしが死しぬぬばーや、あぬ人ひとが葬おほらつとーるくぬ幕まぬきーみになけー葬おほむつていとうらし』んでいち。

あんさーに、あぬふあた、くぬふあたしんジュグわーぬあてーざさぐとう、うまんじ植いていさぐとう、男おとこぬ葬おほらつとーる所ところから竹たけぬみーてい、女おんなぬみーとーるとうくるからーチャーギぬみーたくとう。うぬ竹たけ高たかくなたくとう、うぬチャーギぬみーかくていどうういざざさんど。あんすくとう、「うれ、意味いみぬあるふあじやつさー」んちやてーざさひが。「ああ、な、うれ、ぬーやていんしむくとう、うれ、男女おとこからみーとーるうりやくとう、ぐーなし」でいやーに、うぬチャーギ板い乾かわかざーに、帯竹おびたけありざーに、くぬ桶かゆーていさくとう、「日ひ十五ご日にちえ、あんしざりてーさでいぬ話はなぬあたんよ、昔むかしえ。今いまあな、うんな事ことねーらんしがよー。

〔共通語訳〕

チャー木きで作つくった桶かは、どんな上手うまいな大工だいこうさんが作つくつても一日いちにち、十五日ごじゅうにちになつたら水みづがもるとい話はなもあつたですよ。

昔むかしの乞食こじきが各おの字おのをまわりながら、

「勝連かつれん濱川はまがわ真鍋まなべ樽たるスシムントウリ、四郎しろう樽たる金かねやお似に合あいなんだけどねえ」とい話はなをあちこちの部ぶ落らくでししていたそうだ。それで、その話はなの本人ほんじんも聞きいて、『そいう人ひとを見みてみたいものだ』と互たがいに思おもつていたようだ。そうは思おもつていたが、遠とほく離はなれた首くび里りから、わざわざ勝連かつれんに通とほつて、その女おんなを忍しのびに行いかれたようだ

が。もう、その中で、(会えずに)戻ったこともあるはずだが、会って話をしたこともあつたらしくて。

「私に密かに会いに来るのなら、川の水の流れが止まる時、兩戸が閉まる頃にいらして下さい。そうすれば、語り合うことができるから。その時には馬二頭に鞍ひとつで来て下さい」と言つた。女は、あんなに遠い所から来る人、また、ことに首里の方であるので、どれくらい常識のあられる方が、どれくらい半力がある方なのかと試すためであつたそうだ。そしたら、なる程、その、馬二頭に鞍ひとつをかけるということも難しことで、二頭の馬に自分も乗って行かないといけないので、また川の水が止まるということもないさあ。だけど、道行く人がいなくなる頃のことを、川の水が止まる頃と例えていた時もあるそうだ。そうすると、「兩戸が閉まる時」というのは、昼兩戸を開けたら戸は重なっているが、戸締りしたら(戸は)ひとつになるさあねえ。だから、どこもかしこも戸が閉まっている頃といつたら、遅い時間ということだから、誰も見ることはないから、その時をみはからつて来て下さいということだつたらしい。だけど、その女の要求で、自分の分かるものはひとつもなかつたそうだ。兩戸のことはなんとか分かつたようだ。だけど、馬二頭に鞍ひとつかけるというの、聞いたことのない話なのでわからないし。川の水が止まるということもないと思つていたそうだから。帰つていつて、隣近所のお年よりに教えを乞うと、

「それは川の水が止まるということはない。道行く人

がいなくなるということが、川の水の止まる頃という意味だから、そうやって遅い時間に。また、兩戸というのは開いている時には重なっているが、閉めるとひとつになるので。妊娠している馬にメスの馬に乗って行くと、二頭の馬に鞍をかけていることになるので、そうやって行きなさい」と教えてもらったので、言われた通りに行つたようだ。

それで、その女は、そうやって(男が)来たので、約束なので、入れることにしたそうだが。(男が)兩戸を開けたら、竹が丸ごと小刀と、粟飯がお盆と一緒に置かれていたそうだ。すると、この竹は抱いて、小刀はすぐにとつた意味らしいが、その意味がわからないので「遠く離れた所から来るのは大変なことだねえと、粟飯でも食べて下さいと、ご飯がないので、粟飯を炊いたんだねえ」と思つて、小刀で竹を割つて粟飯を食べたそうだ。(すると女は、

「あなたは粟飯が欲しくていらつしやつたのですね。私が欲しくていらつしやつたのではないのですね」と言つたら、もう少しも話ができなくなつて「もう、女にこんなに思われてもそれがわからないとは、男に生まれても意味がない」と自殺して死んだようだね。本当はその女もすごくその男のことを思つていたのだが。この粟飯というものにも、深い意味があるようだ。昔の人がいうことには、

豊かに実つた稲は 眞昼に咲くが

哀れな粟の穂は 夜中に咲く

と。粟の穂は夜中に咲くそうだ。それで、本当は「待つ



ていましたので、どうぞお入り下さい」という意味であつたそうなんだが、わからないがために自殺してしまつたので。その女でも、本当は愛しいと思つていたのだが、男の人を試めそうと愛しい人を死なしてしまつたので、

「私はもう、人、一人を殺したのと同じなので、私が死んだ時には、あの方が葬られている墓の近くに葬つてちょうだい」といわれた。それで、あの場所、この場所と溝があつたらしいので、そこで葬ると、男の葬られている所からは竹が生えて、女の葬らつている所からはイヌマキが生えた。その竹は高くなると、そのイヌマキにからみついたようだ。そうしたもんだから、「これには何か意味があるかもしれない」ということだつたようだ、**「ああ、もう、これは、なんでもいから、これは、男女からはえた木なので一緒にしよう」と**いって、そのチャーキ板を乾かして、帯を竹で作つてこの桶を作つたら、一日、十五日は、必ず水が漏れたという話があつた、昔は、今はもう、そんな事はないけどな。

② シীগダキ

昔久原幸 (大正五年生) 泡瀬

シীগダキというんだよ。このトシチのある女の所に行つたわけさ。この女はみんな欲しいけどね、この人を自分の意に従わすことができなかった。

「私が行く」といった人がね、このお膳にね、ご飯などお汁を出して竹とシীগ(小刀)と置いて出したら、この検査通らない人はね、

「うれ、お箸お箸作つくていムヌかみんちやさやー(これは、小刀で竹を削りお箸を作つてご飯を食べなさいということなんだね)」「ん得意やーに、シীগさーにウメーシ、お箸お箸くいたん得意。あんさぐとうや、(といつて、小刀でお箸を作つたそうさ。そうしたら、)

「これはダメ」帰されて。また次来る人も、こんなもんであつてダメだつた。ある人がね、これ、シীগ(小刀)とダキ(竹)と出したからね、**「ああ、これ、シグダキ(すぐに抱いて下さい)」**という意味だね」と、その女の所に行つてすぐ抱いたつて。それでどおつたつて(女性と結婚することが出来たつて)。

③ 難題嫁

昔久原幸 (大正五年生) 泡瀬

ある金持ちの家がね嫁取りするのに、この嫁は自分が気に入つた嫁を迎えるには知恵試ししないとイケないつて。それで知恵試しするにはね、**「この家のシンメーナービの一杯の芋をね、薫一束、チュチカといつたら薫一束よ、米を取つた薫ね。あれ一束で芋を煮る**

ことができればね、これは嫁にしてい」ということ
でねやつたらしい。そしたらね、「薬チユチカ（一東）
で芋を炊くことができるもんか。そういうことは出来
ない」といって皆出来ないといっていたらしい。ある
娘がね、

「私が行きます。これはね、出来ないことをいうわけ
がないから、できるからいうんであつてね、私は薬チユ
チカで芋炊いてきます」といってね行ってみたら。そ
この家の後ろはたくさん木が茂っていてね、木の葉が
たくさん落ちていたつて。だからこの人は、たくさん
木の葉をたくさん取つてきて、この薬チユチカとね混
ぜて、これで、この芋を炊いたつて。だからね、こつ
ちの主はね、

「あーはつー、とーくりやさ、いい嫁やさ（ああ、こ
の人こそいい嫁だ）」といつて。

昔の人はみんな儉約でしょう。儉約できる人を嫁に
するために、こんなことがあつたよーということをし
ね、話していたのを私聞いたんですけどね。

④ ニーブイ虫次郎

桑江朝盛（明治四十五年生）中の町

「方言原話」

昔、非常に怠けものねニーブイ虫次郎の話だがね。
その、非常に怠けものでもう仕事は絶対やらん。寝て
おつてばかり、もう、物考えーばかりかし。また、そ
の近所には金持ちが、非常にきれいなお嬢さんがおつ
てなんだつたらしんだよ。で、このニーブイ虫次郎が

考えたことには、「この女は是非自分の家内にやろう」と
いうこの野心が出て毎日それを考えて。もう、親
が、

「仕事やれ」ともう、

「仕事おーおー」つて絶対やらなかつたつて。世間か
らもこのニーブイ虫次郎は、もう人間と言われんぐらい
の怠け者でやつたつて。

そつて、このニーブイ虫次郎が考えたことに、ある夜
中、雨もチョン、チョン降る時に、白鷺を買つてきて
ね、飛ぶ鳥よ、サージャー買つてきて、そつて、庭
に大きい木があつたというから、この上に登つてい
つて、そつて、その金持ちの家の親父を起こして、起
こして、その言い方が面白さーね。

「私ねー神からぬ使やし、いったー女ん子まーぬ、
まーぬ、ニーブイ虫次郎妻なさんあれー、いったー女
ん子命えねーん。くぬうちうりやんどー、早くあま
ん、ひーぶーくし妻なし。うりなさんあいな、女
ん子んでーじないしと早くなしよ。私ねー神からぬ
使なてい、私ねー、飛でいちゆくどろーち、うり家
かいし飛ばちえーるふーじや。白鷺飛ばしたらしいん
だよ。なー、うぬまえーなり、だー、白鷺飛ぬじよー
しスーやー。私ねー天ぬんかい飛でい行ちやくどろー」
んちやくどろや、そー合点してこれを。

夜ぬ暗さ、雨降やーぬ暗間なてい木ぬみーうていあ
びてい、あんしスー終わていから、「うりが妻なざ
に、いったー女ん子命えねーんどー」でい言やつてい
て。親でいしスーなり、女ん子ぬうり考しスーやー。

※ニーブイ虫次郎
次郎のあだ名。

眠つてばかりいる



「あんさーなかい、明日え、早速行じやーんかい、次郎所に行つてね、」

「私たー女ん子妻どらうらし、なーうりやくとらう」んちよー。あんし、うまめキープクさりやーなかい。うみち、うにーから寝んじゅーうーさん、うまていはまてい夫婦なんでいぬ話あんどー。」

〔共通語訳〕

昔、非常に怠け者のね二一パイ次郎の話だがね。その非常に怠けりでもう仕事は絶対やらん。寝ておつてばかり、もう、物考えーばつかし。また、その近所には金持ちが非常にきれいなお嬢さんがおつてなんだつたらしんだよ。で、この二一パイ次郎が考えたことには、「この女は是非自分の家内にやろう」というこの野心が出て毎日それを考えて。もう、親が「仕事やれ」ともう、

「仕事はい、はい（やりますよ）」つて絶対やらなかつたつて。世間からもこの二一パイ次郎は、もう人間と言われんぐらいの怠け者でやつたつて。

そつて、この二一パイ次郎が考えたことに、ある夜中、雨もチョン、チョン降る時に、白鷺を買うてきてね、飛ぶ鳥よ、サージャー買うてきて、そうつて、庭に大きい木があつたというから、この上に登つていつて、そうつて、その金持ちの家の親父を起こして、起こして、その言い方が面白いさーね。

「私は神からの使いだけど、あなた方の娘は、どこそこの二一パイ次郎の妻にしなないと、あなたの娘は命

がないよ。そのうち死ぬことになるから、早く二一パイ次郎のところを日を選んで嫁がせてあげなさい。そうしないと、娘が大変なことになるので、早く嫁がせなさいね。私は神からの使いなので飛んでいくよ」といつて、それを家に飛ばしたらしいね。白鷺を飛ばしたらしんだよ。もう、その主人は白鷺が飛んでいるさあねえ。「私は天に飛んで行くから、」といつたのでね、本当だと思ひこんだようなんだね。

夜の暗い中、雨も降り暗闇の木の方で話して、話が終わると「次郎の妻にしなないと、あなた達の娘は命はないよ」と言われたので。親というのは娘が幸せになることを第一に考えるさあね。

そうして、明日は、早速行つて、次郎の所に行つてね、

「私たちの娘を嫁にもらつてくれませんが、そうしないと娘の命がないそうです」と。そして、そこに乞い求められて婿になった。その時からは怠けることなく一生懸命に働いて暮らしたという話があるよ。

⑤ アカバナ

金城初子（大正五年生）センター

小さい時からとっても仲の良い三名友達がいつて。これ学校、小学校から中学校、高校、大学までも、喧嘩一回もしたことはないつて。とっても息が合つて仲が良い友達だったのに。竹馬といつたらお馬乗ることですよ。あんな時も一緒、何する時も一緒。な、年頃なつたからもう、自分たち三名は兄弟以上だ



から、今から奥さん探すときも、よそからあれしたら奥さんが変わっていたら喧嘩もするはずだから、こんなことしないようにして、自分の妹がいるところ妹から、いないところは従兄弟からこうやって、こんなして。これ決めた人が兄さんがシンイチという人。この人がいつまでも年取っても仲がいいようにして、「こんなにして、縁談も決めようねえ」と言つて決めた人がシンイチ。そして、「そうしようねえ」と言つて、二人は妹いるけど、シンイチは妹いないわけ。従兄弟がまたマジルーといつて、とてもかわいい娘がいるわけ。そんなに話も決めてあるのに、シンイチの従兄弟のマジルーがあんまり兄さん好きになつてね、も、「兄さん、兄さん」といつて行くけど、兄さんが妹でもないでしょ。それで、「あんた私の妹みたいだよ、妹みたいだよ」と言つて話しているけど、このマジルーはもう、妹というよりは恋人にしようと思つているわけさ。

「お兄ちゃんお兄ちゃん、あんたに話があるから、話があるから」と言つて、

「何で兄弟のような、兄弟なのに話早くしなさい」と、「そんなに焦つてする話はない。ゆっくりゆっくり決める話から」と言つて。

「兄弟の仲でもこんな決める話があるねえ」と言つてね、絶対聞かないで。そんなに話している時に、二人があのカイカイして来たわけ。

「あ、人が来るよ」と言つて、逃げようとする時にこのマジルーは手紙書いてあるわけ。兄さんに思いあ

れしてもう、一時も兄さんのことが忘れられないから、忘れられないからと言つて。そうして書いて持っているのを慌てて逃げようとしたら、この手紙落として行つていくわけ。そうするなかにあの二人が探して、

「あんな馬鹿野郎自分なんかで決めておきながら、自分で初めに決めておきながら、従兄弟という子は自分で取ろうとしているねえ」と言つて、二人もう勘違いして、

「どこ追いつけても殺す」と言つて。今まで喧嘩一回もやったことのないけどね、

「今度はもう許されぬ」と言つて、もう二人は腹立つてね、殴る、蹴る、も、乱暴して、兄さんはもう口からも鼻からも血い出すわけ。もう今にも死にそうになつていく時に、

「大変なつたよ、大変、大変だよ」と、見た人たちがみんな助け求めようとしたら、マジルーが来ているわけ。だけこのマジルーが書いた手紙あれ達が持っているさあね。

「あ、これは私が書いたもの。何で兄さんあんなにあれするねえ」と言つたら、

「あんた方、兄さん兄さんと言つてね、自分達は仲は睦まじくなつていくくせに、こんな言うかねえ」と言つてね、マジルーに怒つたから、マジルーは、

「兄さんには何も罪もないです。私がこれやったの、私一人の考えでこれは書いたんだから」と言つて、

「兄さんには何の罪もないですよ」と言つて、も、

あれがしきりに願ったから、

「そうか」と言つてもう、手を出すのをやめて。だから、
「そうだったのか」と。

「じゃあ私の気持ち分かつてくれたねえ」と言つてこのシンイチは言うさ。その時に、

「ごめん早合点して。もう、あなたの話も聞かないで
ごめんね」と言つて二人は謝つているわけ。もう、今
にも死にそうになつてゐるけど、

「私の気持ち分かつてくれたかあ」と言つたら、

「今で分かつたよあなたの気持ち。もう、重々分かつたからごめんささい。勘違い、僕達が悪かつた」と言つて謝つたから、

「分かつてくれたならいいから、あつちに咲いているアカバナー一枝私に下さい」と言うわけ。このアカバナー持たしたから、このシンイチがアカバナーを持つて、

「あんなにきれいに咲いて、私はどの花よりもこの花が好きらつたのに。何で人間はこれを恨んで後生花と言うかねえ」と言つてね。昔は後生花ごせいげと言ひよつたよ。子どもたちにさえね、このもらわす時のこれ、芯は切つてからあげよつたんだよ、私らちが大きくなつてまで。これがいけないといつてね。そして、シンイチはこの花を持つてね、

あんちゆらさ咲ちよる アカバナどうやしが

(あんなに美しく咲いている アカバナなのに)

ぬゆでいくぬしげや ちらていくいゆが

(どうして人々は こんなに嫌うのだろうか)

と云うてね、花を持つてそのままもう倒れてその場で死によつた。このシンイチが花にあれし、後からは、これいい花と言つてまたあちこちに屋敷にも植えよつた。生えていた。

これも私が十二、三才の頃だつたかねえ。私はまたこの話が好きでね昔話が好きでね。ちよつと暇、夜の暇があつた時にはもう、農家だつたからね、農家はもう、昼さえあの終わつてきたら夜は暇でしょう。暇みてからに「昔話やつて、昔話やつて」と言つてねお父さんに。よく聞かしよつたみたい。

三 誕 生

(一) 子育て幽霊

① 子育て幽霊（打紙由来）

鳥袋ウシ（明治四十二年生）池原

〔方言原話〕

うんぐとーうーしかさぎん人ぬ亡しざぐと、うぬウチカベーあんていざぐと、じゆんねー焼きてーねーらん。あんざぐと、うぬ墓うとーい亡し行じから、墓んじ産しむのー子あ産ちやぐと。うぬウチカベーさー菓子買いが来、かんし手に取いねーじゆんに銭ないひが、うりが銭箱んけーうちんちやーにむりていはいねーウチカベなやーに。『あはー、うれーなーウチカベーあんじゆるむんやはーやー』りち、うぬ伝えから、あんしうりしち。

なー、うぬわらばーふるわーふんり、ちやー通てー来來そてーるばてー、うぬ店んけー。な、ちや買とーる店んかい来たんり、また、ちやー時間作てい。あんしそーたんりひが。ぬーんりが、うんぐと、うりざぐと、なー、ウチカベし銭さー菓子買ていわらばーふるわーふんりち、あんしそーたんりちぬ伝え話やあたひが。あんひが「とー」んでいちゃぐと、来んなどーたんでいぬ話どうやたる。

子ぬ生まりやーに、うぬ子んけー食まふんりち菓子買いが来たぐと。あんしる、ミーフガーし

打ったつとーへーやー。三万貫でいるばーやるばーてーうりんけー。あんざーうり、うぬ伝えぬあやーにる、うぬウチカベんでいへー宝やんでるばーどうやんどー、後生ぬ人のー。

〔共通語訳〕

あのように妊娠していた人が亡くなったので、そのウチカベを燃やしたが、ちゃんとは燃えてなかつた。すると、亡くなってから、墓の中で子どもを産んだので、そのウチカベでお菓子を買いに来て、こうやって手に受け取る時には確かにお金だが、それをお金箱に入れてしまおうチカベにかわつたそうだ。（そんなことがあつたことから）『なるほど、打ち紙はしつかり焼くものだねえ』とその伝えから分かつた。

もう、その子どもを育てるといつて、いつも通つていたわけだね、その店へ。いつも買つている店に来たそうだ、また。それも決まつた時間に。そんなふうにしていたというが。なんというか、そうやって、いつも来て、ウチカベのお金でお菓子を買って子どもを育てていたという、そういう伝え話があつたが。それで、「子どもを墓から出した」といつたら来なくなつたという話であつた。

子どもが生まれて、その子に食べさせるといつてお菓子を買いに来ていたので。それで、穴のあいたもので（ウチカベは）打たれているさあねえ。三万貫というわけなんだね、それには。それで、その、伝えがあつてウチカベというのは宝というわけなんだよ、後生の

誕生 異常な誕生をする話をまとめたものが「誕生譚」である。



人にとつてはね。

② 子育て幽霊

刃土名ナベ（明治三十七年生）池原

〔方言原話〕

かさぎとーるばー墓かい。「なーやがてい産すんどー
でいーにうりしーねーや、ウーガキ、ウーブシよ、
昔えウーブシからみちゆたへーや。うりとうシーグ
とう持たちやらしよー」んでい。あんさーに、あんし
さくとう、うぬわらばーや、ミツチャミーんでいがら
うりさくとう。あんししるダビぬ日ひからナーチャ、ミ
チャミーまでー墓めーすんでいしえーうぬばーやん
でい。

行じやくとう、子こ生まりてい、うぬ墓うていンガー、
ンガーしあびーし聞ちやーなかい、うぬマジムの一い女
ぬ親な一、けー死じよーしえーどう産ちえーしやや。
ウチカビし町んけー行じやーに子んけーくいーん
でい、ちやー人一人から買ていよ。あんさーに、取い
ねー銭やし、取てい入りーんまでー銭やし、な一、
ねーんなてーういさくとう、「くれーな一今回んうり
が来るばーや、うりしわるやる」んでいやーい、水入
てい置ちやーに側んかい、あんし浮きたくとうウチカ
ビなていよ。

「ぬーがいやーや、あんしうりやし、ぬーぬ事ぬあ
ていあんしすが」んちやくとう、

「私ねーあかんし、や、ぬーんでいぬちねーゆうり
やし、後生んじわらばーが生まりていうぬわらばー

喰ちよーうりすんち、あんし通とおいくとう知らちとうら
し」ていん事やんでい。うぬ話やたん。

〔共通語訳〕

妊娠している時に（亡くなったので）墓へ（葬つ
た）。「もうすぐ子どもが生まれるという時に亡くなつ
たらね、芭蕉から糸を紡いだものウーブシ、昔は芭蕉
から糸を取っていたでしょう。それと小刀を持たせて
葬りなさい」と言われていた。それで、そのようにす
ると、（墓の中で生まれた）その子どもは、ミツチャミー
の時に（墓参りしたら墓の中で泣き声がしたそうだ）。
それで、葬式の日から翌日、三日までは墓参りをする
のは、そんな事がないかということ始めたそうだ。

（墓に）行ったら、子どもが生まれて、その、墓の
中でンガー、ンガーという泣き声を聞いて、その魔物
になった母親は、亡くなってから（子どもを）産んで
いるわけだからね。

ウチカビを持ち町に行き、子どもに食べ物をおげる
といつて、いつも同じ人から買っていた。それで、（お
金）取る時には確かにお金だが、取つて（錢箱）に入
れるまでお金だが、もう、（入れたはずのお金）な
くなつたりするので、「これは、もう一度その人が来
たら確かめてみよう」と思つて、水を入れた（容器を）
側に置いて、（受け取つたお金を）その水の中に入れ
たらウチカビになつた。

「どうしてお前は、いつも買ってくるが、どういふ訳
があつてそうしているのか」と聞くと、

「実は私はどこそこの者ですがね、後生で子どもが産まれて食べ物をおけるといっていつも通っていたので、そのことを知らせて欲しい」ということであつたそう。そんな話であつた。

③ 子育て幽霊

平田シゲ（明治三十五年生） 登川

「方言原話」

これもよー、年寄りの話が。大昔、妊娠した人が、月ぬみつちよーの子がやてーら、生まりまんまーる。女ぬけーしーぎさくどとよー、あんしうすてーちくとう。けーちあとうから生まりてーくと、うぬわらばーやな、生きちが生まりてーら、後生半分、生きみ半分でいやーい。生きみぬよーマチヤンかいよ買物しーが。本当ぬ錢のーな、生きみぬ使い金やへスーや、金錢。後生やまた、ウチカビどうかんしあんじやーによ、錢ぬ型打ちゆしスーや。あんし、うり、錢びちスーしあんじゆぐと。

うぬマチヤン人なや、始めよー人んでい思てい売いたんでい。「ひるましーむんや。ぬーうれーうまんかい買いむんしーが来るわらばーや」。じゆんぬ品物ん持たて、あんしやしーねーよ、錢のー置ちきーねーそーひが、あらんないんでいがら。あんさーあとムシリがよ、

「どーあんでやらー、うれーうつたげーぬ者やくとてー、買いむんしーが来るばーや、ありが置ちきーる錢やてー、茶碗に水入りやーに、うまんじ、本当ぬ錢

やがやー、あらんがやーんで、水入てーる茶碗にうぬ入りーねーや、本当ぬ生きみぬ錢やれーうまんかいちやーんとうあくとう」んでい言ららに。あんし、うりがありはんやに。あんさーに、やつばし思てい感じやに「ああ、くれー見ちえー生きみぬ人ねーねーそーんでいがよー、あらん。くぬ茶碗に入てーる水んかい溶きていよー。わからんへーや、んちや、紙どうやへー、紙あんでーでいるやれー。あんしやんどーいたしが。

ぬーえー、あんしあらんえーまーや、人んでい思まーりてーんばーてー、うぬマチヤン人が。

やつばし昔あんしあてーどくとうがやらー、エイサー節にうんねーる一歌あつさー。

「共通語訳」

これもよー、年寄りの話で。大昔、妊娠した人が、生まれ月の子だつたのか、生まれなまま母親が亡くなられたらしく、そのまま葬つたようだ。母親が亡くなつたあとから（子どもは）生まれたので、その子どもは、もう、生きて生まれたのか、後生半分、生き身半分であつた。人間の店に買物しに（来たさうだ）。本当のお金というのは、生きている人の使うお金は鉄で出来ているお金。後生のお金はまた、ウチカビといつてこうあぶるが、（それには）錢の型を打つさあねえ。それで、それが（後生での）お金としてあぶるのだが。

その店の人はもう、始めは人だと思つて売つていた

※1 後生半分、生きみ半分 後生とこの世を往復できるといふ意味か。

※2 マチヤ 日用雜貨や菓子などを売る店。

※3 後生 死後の世界

※4 ウチカビ わら紙を三枚一組にして、錢型を横に五行、縦に七行打つたもの。あの世のお金と言われ、亡くなつた人のお金に困らないように使つてあの世に送る習俗がある。

※5 エイサー 念仏唄りに起源を有するとされ、沖縄本島で招魂を供養する盆踊りとして、旧盆に青年たちが太鼓を持つて踊る伝統。

そうだ。「珍しいねえ。なんか変だ、ここに買物に
来る子どもは」。ちゃんと品物も持たしてね、そうやっ
ていたが、お金を置いて行くが、(取ったはずのもの
が)お金ではなくなるようだ。しまいに、モノシリ
が、

「ねえ、そういうことなら、(買物に来る人は)普通
の人間ではないはずだから、買物に来る時には、そ
の人が置いていくお金をね、茶碗に水を入れて、そこ
で(確かめなさい)。本当のお金かどうかは水にその
お金を入れてみたらわかるから。本当の人間のお金な
らそこにちゃんと残るはずだから」と言われた。(そ
の通りにすると、それはお金ではなかった。それで、
やっぱし変だと気づいて「ああ、これは見ると人間の
ようだが、そうではなかったんだ」。この茶碗に入っ
ている水に(受け取ったお金を入れたら)溶けたそう
だ。(取る時には確かにお金なので)わからないさあ
ねえ、だけど、(水に入れたら)紙さあねえ、紙あぶっ
たものであったわけさ。そういうことがあったといっ
ていたが。

だけど、水につけて確かめるまでは、人間だと思っ
ていたわけだからね、その店の人は。

やっぱり昔そのようにあつたことなのか、エイサー
節にこんな内容の歌があるよねえ。

④ 子育て幽霊

平田カマド(明治三十三年生) 登川

「方言原話」

ある人ぬマジムンなてい清ら女ぬちやー菓子買いが
来。物いんよーい、

「いやー、またマンジュー買いがるちゃん」でい
ねー、かじさーい、

「いー」んでい、また売やーに。またん翌日ん来しー
しーふんでいち。かさぎとーい産ちえーんとー後生
んじ、うぬ子。あんしやくとー、また、うぬおばーが

「くれー確かにちがとーん」んでい。「くれー、うまっ
ちマンジューかむる青年ぬちやー、すぐん来るふあじ
やくとー、待ちよーてい、うぬ女見でいよーやー」でい

いやつとーぎさん。

「いー」んでいうーてちく、いんねーすんねーまた
ん来や、うぬ女。かーぎん清らはぬ、笑かんでい。

「若女ぬ来くとー、うりやくとー」んでい、うぬおばー
や目よーし、よー。

「またんいやーマンジュー買いんなー」んちやくとー、
「買いん」でいいやーに。また、出じてい、うりが

後追い青年のー、
「なま追てい行き」んでい、うぬおばーがやらちえー
ちく。すぐ川からーちやーしが飛ん越たらーわからん

でひがや、みーぐてい青年ぬ行ちゆんとうや、菓ぬ
中んけーふあちやー。あ、うぬ墓調びてちく、じゅ
んに子んうい、菓子んあんでい。子抱ちよーてい死

じえんとー、うぬ女。

「買いん」でいいやーに。また、出じてい、うりが
後追い青年のー、
「なま追てい行き」んでい、うぬおばーがやらちえー
ちく。すぐ川からーちやーしが飛ん越たらーわからん
でひがや、みーぐてい青年ぬ行ちゆんとうや、菓ぬ
中んけーふあちやー。あ、うぬ墓調びてちく、じゅ
んに子んうい、菓子んあんでい。子抱ちよーてい死
じえんとー、うぬ女。

【共通語訳】

ある人がマジムンになって、きれいな女（に化けて）毎日お菓子を買いに来た。なにも言わないで、

「あなた、またマンジウを買ってきたの」というと、うなずいて、

「はい」というのでまんじゅうを売って。また翌日も来たりしていたようだ。妊娠していたので産んだんでしようねえ後生で、その子どもは。だから、また、そのおばーが「これは確かになかある」と。「これは、

ここでマンジウを食べる青年たちに、（この女は）すぐに来るはずだから、待ってもらって、その女を見

なさいね」とお願いしたようだね。（青年らは）、

「はい」と返事してそこで待っていたら、おばーの言っていた通りにまた来たようだ、その女は。美しい人で、にこやかに。

「若い女が来るので、その人だから」と、そのおばーは目で合図をした。

「またあなたはまんじゅうを買うの」というと、

「買う」と返事した。そして、帰っていくので、その女の後を追いかけてせよと青年たちに、

「すぐ追いかけて行け」と、そのおばーが行かせた。（女は）すぐ川をどのようにして飛び越えたか知らない

が、まわって青年たちが行くまでには、墓の中に入

て行つた。それで、その墓を調べたら、ほんとに子どもがいて、菓子もあつたそうだ。子どもを抱いたまま

死んでいたんだよ、その女は。

⑤ 子育て幽霊

喜納カマ（明治二十八年生）登川

【方言原語】

うれ、まーぬ字がらー、私つたー字んわからんしがてー、昔話やくとう。

自分ぬ子ぬでいきたくとう、きたむのーねーんしえーやー、う懸め中うとてー。あんさくとう、うぬけー亡ちよーる人ぬマブヤーぬ出して来に、マチ

ヤんじ、

「菓子売り」んでい言ちえーくとう、

「おー」んでい菓子売ていさくとう。なうりがうるえーかー銭やんでいしが、うぬ者行いねー、うれーさんみんしえー銭のー当たらんてーしーし。珍らしー

くとうやっさーんり思つてい、「ひるましーむん、くりでーつさーやー菓子買いが、くまんけー毎日来る人」んでいいち、やたんでい。

うぐとうーしえーちくとう、うぬ見ち「くれーそー本当ぬ人あらんやー」でいやーに、確かみやーに追

てい行じやくとう、う懸んじえーぐりーそていはいたんねー。入ちふあいひん見らつてい。内うとてい

わらばーがあびーる声ぬあんりでいやーにどう「りー開きてい見ちんだ、開きてい見ちやくとう箱ぬ上からほーだらーし遊ぶたんり。仲順ウスメー、あんしる

ふどう。うぬ話どう聞かはつてーたんどー。

あんしさくとう、箱ぬ上なーりーから遊ぶんでい

いやーにどう、うんぐとうー子取ていふるふあてーていんどーでいぬ話まで聞かはーてーる。

※ マチヤ 日用雑貨やお菓子などを売
る店。
※ 箱ぬ上 棺桶の上。死者の棺桶はそのまな蓋に納める。数年経過すると死者の骨を取り出して洗骨をし、蓋に納めて墓の傍に置く。

〔共通語訳〕

この話は、どこの字か、私たちは字も知らないけれど、昔話だから。

自分の子どもが生まれたが、子どもに食べさせるものがないさあねえ、お墓の中では。すると、その亡くなった母親の魂が出て来て店へ行き、

「お菓子を売ってくれ」というので、

「はい、どうぞ」とお菓子を売った。その人がいる間はお金だが、その人が行って、計算してみると金額があわなくなったりしていたので「珍しいことだ」と思って、「不思議なことだが、この人だねお菓子を買いにここに毎日来る人は」と確信しようた。

そのようなことが続くので、よく見ると、「この人は、本当の人間ではない」と思つて確かめるために追つて行つてみたら、お墓の中へおじぎをして入つて行つたそうた。お墓の中へ行くのを見られてるが、(墓の)中から子どもの声が聞こえるといつて、「さあ、開けてみよう」とその墓を開けてみると、(赤ん坊が)板の上から這いずり回つて遊んでいたそうた。仲順ウスメーはそうやつて成長したという話を聞かされたよ。それで、板の上で遊んでいる子どもを連れ出して育てたという話を聞いたんだよ。

⑥ 子育て幽霊(打紙由来)

榮野比呂(大正六年生) 知花

〔方言原話〕

妊娠そーる女ぬや、なー今日明日産ふんどーでいぬ女ぬ亡ちやぐどう、墓んけー入りーへーやー。うぬ子や内うてー元氣どうやぐどう、墓んじえーけー生まりたくどう。あんさーにうぬ子なー墓んじどう生まりとーへーやー。うぬ親やちむんしぬばらん毎日うぬウチカビ持ち、マチヤグワー通てい必じコンペンぬちやーどう買いたんでい。必じ時間ぬん夕さんでいぬ六時頃あんし行ちゆたんでい。あんさーに買ていしーねー、うぬコンペのー持ち行じ、うぬ子んけーくいーんち、あんし持ち行じし。な、うぬマチヤグワーぬ人が「ひるましーむんやんやーうぬ女なー、あんし必じ時間あていていやー、うんぐどうーし来ひが」んち。あんさーうりから取てーる錢見ちやぐどうやー、むるウチカビやたんでい。本當ぬ錢あらんたんでい。取いにまで一本當ぬ錢やんでいんどー。後から見じーねーウチカビどうやたんでい。あんさーに、うにーからよ、な、うり追てい行じ見ちやぐどう、うぬ子うまうてい生まりてい元氣やたんでい。

ちよーどう「ムンぬハチかまふん」でいひんうぬたつべーどうやるはじどー。いかなぬーやていん、かんしご飯やていん、ぬーやていん、しきーしやていんて、一番初み、しきーしからどう入りーへーやー。あんふくどう、うぬハチかまーに、うぬ子やていん元氣そーてーるばーてー、ゆーふあねー。

※1コンペン 駄菓子の一種

※2ウチカビ わら紙を三枚一組にして、錢型を横に打、縦に七打つたもの。あの世のお金と言われ、亡くなった人がお金に困らないように焼いてあの世に送る習俗がある。

※3ハチ 作り物や、取り立ての一番最初のものをいう。御初。

ちよーどう、いーねーなーコンベンやていんハチ
 どうからどうはじどー。本当ぬコンベのーかてーねー
 んどー。あいやー生まりていちゃーきぬ子ぬコンベン
 かみーふん。うれー、ハチんでいしかどーどうばー
 よー。しきーしやていん、一番初めしきーし取てい
 からどうりやつさみ。茶やていん、十五日ん、一日ん
 ウチャトーしーねー最初うまんかいさぎーしからち
 じからどうどうーなーや飲むくとう、ハチヌー取てい
 からでい。最初ぬむんけー「ハチ」んでいしちえー
 るばーてー。

あんさーに後生んけーや打ちからあんでい持たふ
 んでいしえーうぬ由來記やんでい。ウチカビあらん
 えーまー通らんてい。後生んじえーうりどう使りーん
 てい、ウチカビどう。

〔共通語訳〕

妊娠している女がね、もう今日か明日（子どもを）
 産むという女が亡くなったので、墓に葬るさあねえ。
 その子は（母親のおなかの）中では元気なまんだから、
 墓で生まれたそだ。それで、その子は墓で生まれて
 いるさあねえ。母親は気の毒に思つて毎日そのウチカ
 ビを持つて、店に通つて必ずコンベンを買つていたそ
 うだ。必ず時間も夕方の六時頃に行つていたそだ。
 そうやつて買つと、このコンベンを持つて行つて、そ
 の子どもにあげるといつて、そうやつて持つて行つて
 いた。すると、その店の人が「珍しいものだね、この
 女はもう、こう必ず同じ時間に、そうやつて来るが」

と。ところがその女から取つたお金を見たらね、みん
 なウチカビであつたそだ。本当のお金ではなかつ
 たつて。取るまでは本当のお金だといふんだが。後で
 に見たらウチカビであつたそだ。それで、その時か
 らね、その女を追つて行つて見ると、その子どもは墓
 の中で生まれて元気だつたそだ。

まさに「食べ物の初物をあげる」というのもそうい
 う意味だと思ふよ。どのようなものにしても、こうこ
 飯でも、なんでも、お供えするものでもね、一番始め
 は、お供えするものから入れるでしょう。だから、そ
 の初物を食べて、その子どもでも元気していたわけさ
 あ、もしかしたら。

例えていえば、コンベンでも（お供えの）初物を食
 べたはずよ。本当のコンベンは食べてないよ。まさか
 生まれたばかりの子がコンベン食べることが出来ると
 思ふ。それは、初物というものを食べているんだよ。
 お供えするものだつて、最初にお供えするものを取つ
 てからやるでしょう。お茶でも、十五日も、一日に仏
 壇にお供えする時には、最初に仏壇にお供えするもの
 を注いでから自分らは飲むので、初物は取つてから
 と。最初のものには「ハチ」といつていたわけさあ。

だから、（ウチカビは）後生には（お金の型を紙に）
 打つてからあぶつて持たすというのはそれからのいわ
 れだつて。ウチカビでなければ使えないそだ。後生
 ではそれが使えるそだ、ウチカビが。

※ウチャトー 毎月田圃の一日、十五
 日に火の神や仏壇にお茶をお供えするこ
 と。

⑦ 子育て幽霊

徳里静（明治四十四年生）住吉

昔、女の人がよー、おめでたしているのをよー、そのまま（お墓に葬つて）、お産はしないで亡くなったからよー。親は死んでから子どもは後生行つて出来たからよー。（親が）マブイ（魂）となつて（現れた）。

ちやー、うれー、スーコーさーに紙あんじゅしえーやー（人が亡くなると、いつも法事の際には紙銭を焼くでしょう）。あれは亡くなった人の、例えばよー、生きている人のお金のあれ（役目）なつていてからよー。そのウチカビ（紙銭）あるさーねー、スーコー（法事）なんかやつていさあねえ。そのお金を（母親が）持つてよ店にみえていたんでしょ。このお金を持つていて、何もかも買つてこの子どもにあげてあつたらしいよ。したらね、この人が帰つたらそのお金はやウチカビになつていたつて、いつもよー。いつも買いに来るさーねー、この人が買つて行つたら、そのお金は、後はウチカビになつていたというからよー。それで、『珍しいねー』と言つて、その人がよー買いに来たからよー、後つて行つたらしいよ。ついで行つたらよー、そのおめでたしてそのまま親は亡くなつた（が）子どもはあつち（後生）行つてから生まれてくるさーね。それでウチカビを金のあれ（代わり）にして買つてよ、行つてあげて。後をついて行つたら、そうだったといつてよ。その伝え話で、こうだからつて、（墓を）開きやーないやしたくとつ、うぬ子あま（後生）んじ産ち（その子どもは後生で産んで）。

あんしるや（それでね）、昔はよー、おめでたした人が亡くなる時もよ、必ずお産させてからすんどー（葬つたんだよ）。おめでたして亡くなつたんでしょ。亡くなつて子どもをそのままあれて（一緒に葬つている）さーねー。だから焼香のウチカビはよ、あれ（後生のお金）さーね。人の目がだまされているんでしょ。金になつて買つていくけどよー、その人が帰つたらウチカビになつていたつて、いつも。だから珍しいと思つてついで行つたら、あれ（後生の人）だつたつて。

その伝えからね、女の人がよおめでたして亡くなる時には、必ずお産をさせてから（葬つた）。

⑧ 子育て幽霊

比屋根善子（大正十四年生）安慶田

あのね、夜なつて、お菓子とかなんとか買いに来る人がいたつて、夜ね、夜なつたら。だから、お金を取つてお金箱に入れてね、また翌日見たら、ウチカビ、ウチカビあるでしょう、その紙なつてね。こつちのこの主はもう不思議に思つてね、またもこの女が来たから、『不思議だねー』と言つて、追いかけて行つたらね、墓に、墓に入りよつたつて、うぬ女が。墓に入つたので、この隣近所に話してね。

「こういう人がいたから、行つたから墓に入りよつたよー」と言つてね開けてみたらね赤ちゃんが（墓の中で生きていた）。女のいないさー、亡くなつた時は妊娠していた。それで、（お墓の中で）産んでね。

※ウチカビ わら紙を三枚一組にし、錢型を横に五行、縦に七行つたもの。あの世のお金と言われ、亡くなった人がお金に困らないように焼いてあの世に送る習俗がある。

その後からね、このナーチャミーってあるさーね、今は、いえー、今はないけど。ナーチャミーといって、一週間、昔はね、一週間墓に行きよった。墓に行くようになったって「生きていないかねー」といってね、ナーチャミーとか一週間は通いよった。今は行かないけどね火葬だから。人が死んだら墓にお茶（お供え物）。こんな話はおばあさん、おじいさんからいつも話聞かされたよ、小さい時に。

墓までは行くさあねえ。この死んだ人もお墓から出てからに「一緒にモアシビーしよう」とって、モアシビーしようって。本当かなあ、ウソかわからないけど、こんな話聞いたわけ。

⑨ ナーチャミー由来へ子育て幽霊

喜納兼俊（大正七年生）東

妊娠した女が亡くなっているって。それで、妊娠しておるんだが亡くなって墓で子どもを産んだわけ。子ども生まれたから。まあ、人間というのは昔は埋葬でしょう。埋葬だから、何も子どもに与える作物がないから、このオカ（母さん）がお店に行つて、化けて、なんか子どもに与える品物買つて子どもに与えているわけ。だから、お店はそのお金を取るのはほんどのお金みたよだがね、あくる日見たらねウチカビになつてしまつてよ。それが不信に思つて店の人がたよりに行つたら、この子どもは、赤ちゃんの声がしよつたつて。

それから、ナーチャミーから、三日ぐらいたつたか

ねえ、一週間ぐらいたつたか、墓参りしよつたよ。生き返つた人もおる話だつたがね。それで、「ナーチャミー」といって、死んで葬式やつておるんだが、墓行つてから生き返つた人もおつて。その伝えから。

⑩ 子育て幽霊

知念善助（大正七年生）古謝

首里の王府の近くに美人の女性がいって、産む月になつてからこの女は病にかかつて亡くなつたもんだから、そのまま埋葬してしまつて、その子がですね生まれてからに、赤ちゃんが泣いているということ、その話があつて。その近くには、あめ玉を売る店があつた。そこに、その母親が子どもを養うということで、母親が来よつたそうなんです。その人が置いていくお金は木の葉だつたそうなんです。で、別の人が開けた場合にはお金ではあるんだけど、この女が帰つてしまつたら、木の葉であつたような話がありました。これ、毎日来よつたそうなんです。

⑪ 子育て幽霊へ七つ墓

桑江幸子（明治四十一年生）泡盛

これはね、七つ墓ななつむらといつてあつたそうですよ、真嘉比まがひのね。したら、その毎夜この店にね、お菓子買いに来る人がいたつて。開けて見たら、もう、（お金）木ぬ葉きぬはなつていたつてよ。で、「不思議どー」ちゆいゆうて追つて行つたらねお墓に入つて行つたつて。それで、この人洗骨してみたらね子どもがいたつて、そう

※1 ナーチャミー 葬式の翌朝早々と御茶漬、花、水、お菓などを持って墓参りをする。死者が蘇生してはいないかどうかを確かめるためといわれている。
 ※2 七つ墓 お墓が七つ並んでいることからそう呼ばれたのであろうか。
 ※3 真嘉比 首里確保から安里に至る道。

いう話があった。

毎日、毎夜にお菓子買ってね行ってその子どもにあげたわけでしょう。「あ、なんで、不思議だねー」ちゅーて、あと追って行ったら、この七つ墓イナカに入ったって。だから、この主に言つて聞いたらね、「妊娠したまま死んで、あつちで子どもが出来て、じゃ、こうしたんだな」というふうな話があつたつて。

妊娠した人が亡くなってそのまま葬つたら、向こうでお産して、そして、この方は赤ちゃんにお乳をあげるために、カピジン持つてきて買ったそうです。うぬ人が持つち来る銭のー入れたことは入れたが、なくなつているからね、「どうしたか」と思つてよくよく注意したら、あぬカピジンなつてゐる。そして、その家に行つたら、

「あー、あんしえーなーどうしよう（ああ、それならどうしよう）」と言つて開けてみたら、だー、赤ちゃんがいいたそうです。それから、妊娠した人はちゃんと産ませてから送らないとね苦労してゐる。それで、カピジンうさぎーしん、何か、自分がこう、うさぎむんしても、すぐ、また食べたいものがある時には、「カピジンうさぎとーけー、うりさーい買つていうさがいこう（ウチカピをお供えしておけば、それで欲しい物を買つて召し上がるから）」という意味で、みんな（ウチカピをお供えするんですよ）。

前は（ウチカピは）三枚でしたが近頃は五枚になつてゐます。値上げしてゐるから五枚になつてゐる。三枚だつたんです。

② 子育て幽霊（打紙由来）

伊佐ツル（大正五年生） 泡瀬

（妊娠して）してゐる時に、そのまま亡くなつたらねお墓に入れるでしょう。だからその子どもが生まれついてね、墓の中で。そつてーそこへナンカ、七日ナカ七日ナカによー拌みに行くでしょう、死んだ人の家族が。一週忌とか二週忌とか三週忌とか。その時に行つたらね、ここで赤子の泣くあれがあつたとか。私も聞いた話だけ。

ウチカピつてあるでしょう。あれがね、後生ウチカのお金だつて。それで、それ沢山あげると、お金はあるけど、それないと。それ取つてお店へね買い物に行つて、毎日夜遅くから来て、やつて帰つて行つて。その人が帰つた後は翌日は木の葉が入つていたつてその箱の中に、銭箱カネの金箱に。だから「不思議」だ思つてね、そのお墓まで、お墓の親戚の所に行つて、やつぱしそこの赤ちゃんができてね、何かしゃぼつてね生きていたとかいふ話だつたけど。

自分の子どもに胎をしゃぶらせていたんじやないかねえ。だから妊娠してゐる人がね死ぬ時はね、やつぱし、ナイフなんか置いて行かすつて。だからナイフで自分であれして生かす、するんじやないかね。

それも、ひとつの例とかいつて。そういうふうな話をしてゐましたがね。

※1カピジン ウチカピのこと。後生のお金といわれている。

※2ナンカ 亡くなった日から、七日ナカとに四九日までの間「ナンカ」と称して、仏を供養するために執り行われる祭り。

⑬ 子育て幽霊

金城初子（大正五年生）センター

昔話でしょう。昔、若い人がね、子どもをお腹に持って妊娠しているわけ。だけど、子どもが生まれないうちに亡くなっているわけ。それお墓に入られたから、お墓の中で子どもお産して。したら、食べるのも何もないからね、いつもお母さんはお墓から出て、人に気づかれないようにしてお店に行って、タンナフアクルーというお菓子、いつもあのマンジュウだけ買って行きよつたつて。店も一、二回はそんなに疑いはなかつたけど、あんまり毎日のことなつたから、「何でかねー、また（来ているけど）。」お金もまた、あの神様にあげる印籠つかれた紙があるでしょう。焼香あげる時にこれ焼く紙があるでしょう、あの紙ばかり。取るどきのお金だけど、納めたつて、また見るときにはこの紙になつて。「珍しいねえ」と思って、後は気が付いてからは、いつも来る人がこのお金を持つてくるが、お金と思つてなおしてあるけど紙になつているわけ。そういう意味から、この店の人は、この女の人がお菓子買って帰る時に、後ついて行つて見たから、お墓に行きよつたつて。だからこの、「死んだ人にはこれ（ウチカビ）あげるな」と思つてね、それから、死んだ人にはお金の代わりに紙を焼くそうです。

⑭ 子育て幽霊

眞賀アキ（明治四十三年生）胡屋

死んだから、死んでお墓で、昔は。今火葬だけど、火葬でない時。子どもの泣き声がしよつたそうだよ、墓で。

「子どもの泣き声がするよー、夜なつたら泣き声がするよー」いゆうて。来たからね、妊娠した女は毎日ミルク買いに来よつたつて、店に。それで、最後にね、「（この）人は毎日、夜からミルク買いに来るなあ」と思つて、ほいで見たらね、葉っぱね、あれお金にしてね、お金にして。

「こう、来る人はもう、普通の人間でない」いゆうて、そして、そのお墓行つて見たらね、いっぺん後ついて行つて見たらね、子どもの泣き声が出て、そつて開けてみたらね、子どもに毎日（ミルクを与えていた）。母親は死んで、（ミルクを子どもに）飲ましていゆうてね買つていたそうだ。それ、昔あつたそうだ。

⑮ 子育て幽霊

喜友名トシ（大正九年生）團田

『方言原話』

妊娠そーるまま、明日うぬまま送いねー、親や死じよーしが、子や生ちち、墓中うとーてい生ちちよーしえーやー。あんざーに親ぬ魂が出じてい、ウチカビんちあしえー、くり持ち店んじ買物しちやーいくいてい。あんしからウチカベー後生ぬ錢。くりが、また、おめでたそーし、うぬまま送てーならんどうぬく

※1 タンナフアクルー 駄菓子的一种
※2 神様にあげる。打ち紙のこと。紙に紙の型を打つたもの。後生の人たちの紙と考へられ、死者の供養のために焼く。
※3 ウチカビ わら紙を三枚一組にして、紙型を横に五行、縦に七行打つたもの。あの世のお金と言われ、亡くなった人がお金に困らないように焼いてあの世に送る習慣がある。

と一、うりから聞かりたん。おめでたそーる人子出じゃちから、親どう子わかち、墓に入りーるくとうんかいなたんてい。

あんし、どうくうぬ店ぬ人が不思議に思てい、取いねー銭やし、帰てい行じしばらくし見じーねー、ウチカビなたぐとい「うれーぬーやがやー、や」。あんし、人疑てーな、しばらく待ち、いくけーぬん来ぐとう、あと一、迫てい行ちやぐとう墓などーたんてい。あんざーに「くれー不思議どー」んち開きたぐとう、わらびや、うぬ、棺箱ぬ箱ぬ、まんまーるしちほーていうたんてい。

〔共通語訳〕

(一)くくなったので) 妊娠したまま翌日そのまま葬ると、親は死んでいるが、子どもは生きて、墓の中で生きてるさあねえ。それで、親の魂が出て、ウチカビといつてあるでしょう、これを持って、店に行つて買い物をしてきて子どもにあげて。それから、ウチカビはあの世のお金。そういうことから、妊娠している人をそのまま葬つてはいけないことは、その時から言われるようになった。妊娠している人は、子どもを(お腹)から出してから、親と子は分けて、ちゃんと、墓の中に入れるようになったつて。

それというのも、あまりにも店の人が不思議に思つて、取るとお金だけど、(その人が)帰つて行つてしばらくするとウチカビになったので、「これはどういふことなんだろうねえ」と思つた。しかし、人を疑つ

てはいけない(と思つて)、しばらく待つていた。だけど、幾度となく来るので、しまいには後を追つて行つたら、墓になつていたそうだと。そして、「これは不思議だ」と思い、(墓を)開けたら、子どもはその棺桶の、箱の周囲を這つていたそうだと。

⑬ 子育て幽霊

宮城次郎(大正三年生) 園田

首里の汀良での話だよ。この(妊娠した)まま墓に埋めたら墓の中で子どもが生まれた話。この親がなこの子どもに、ウチカビというもの、あれ後生の金持ち行つて、お菓子なんか買つて子どもにくれるといつてやったから、感性の(するどい)人がいたわけ。この人がお菓子を買いに来たら、この人(が持つてきたお金)をつかまえて水にぶち込んだから、紙になつていたとの話があった。この話があった。これは昔の、大昔の話。

※1 首里 王府のおかれていた都文化、経済の中心、現在の那覇の首里地区。

(2) 仲順大主

① 仲順大主 (墓出生)

仲宗根盛雄 (明治四十三年生) 登川

これは、仲順流りというものがあんだよ。七月の仲順ウスメーというものは、今の仲順墓に祀られている。

あれは、あれが親が死んだ時、まだ孕んでいる親を死んだから葬ったと。葬ったら、これが、アサミーに行ったら墓の中で子が泣くからといって開けたら男の子が出た。それが仲順ウスメーであると。だから、この人は墓から生まれて来て、もうこれが能力もあるし、いろんなことも分かると言って、昔の人、このおじい、その時はおじいでないが、これが大変、神ともうみんなが慕ったそうです、墓から来た。それが、このウスメーの話に、「後生のやるべきものはどんなことである」と言つて、後生の流れを解いて聞かされた。「後生に行つたら、悪いことしたら、どんなことする。また、どう良いことしたら、どんなことがある」と言う話を、私は後生にいる時に話は聞いた。これはもう、「まさか、腹の中にいるのが、こんな聞くわけないんだよ」そう言われたから、もうこれ本当の通り信じて、仲順ウスメーと言つて、みんな信用してやつて、仲順ウスメーというのをやつたというが。

年寄りが、死にかけた者が、食べるものが食べられないから、人の乳でなければ(食べるものが)出来ないうということ。それで、自分が産んだ兄弟集めて、

嫡子の者に、

「あんたの子が飲んでる乳を私にあげてくれ」と

いつて頼んだら、

「年寄りは世は終わっているから、子ども殺すことは出来ないから」と断つた。また、次のこれにやつたから、

「親のことならば、子は産めば生まれるから、自分の子を埋めてでも乳をあげたい」といつてやつたから、
「じゃあ、この子をどこのどこに埋めてやりなさい」といつてやつたら、この子を埋めに行つたから、このじいさんは、宝のあるだち(だけ)言いつけた穴に置いて、これに後は継がせたと。これが、仲順ウスメーの由来であるというが、仲順ウスメーとは別でないかと思うんだよ。

あれ孝行の話であつて、仲順流りにとじているがよ。そして、親のことは、自分の子を殺してまでも、親のことをやつたという、この伝説はあるんだよ。

本當の仲順ウスメーというものは、仲順の人の話によれば、この人は神さー生まりして、後生のことを何でも分かつて。また、ナンカ、ナンカのこと。また、やるべき法事なんかは、どういう風にやらなければ通らないということ、あの人が教えた。後生のことを教えたというのが仲順ウスメーであると。そうして、七月ニブン子なんか、それにも、七月はいろんな祖先の供養であるから、仲順口説きというものを、これを先にやるのが例になっているというよ、この話があつたんだよ。仲順の人なんか、こんな話するね。

※1 仲順流り 親孝行を主題にしたエピソード。

※2 仲順ウスメー 北中城村字仲順にいたといわれる長者。

※3 アサミー 人が亡くなり舞つて、翌日墓参りをする。

※4 神さー生まり 霊力が高い人のこと。

② 仲順大主へ墓出生

仲宗根フミ（明治四十二年生）豊川

仲順ウスメー話の流れが「仲順流り」という。あれは、お母さんが妊娠している時にお母さんが亡くなったで、ほんで、その仲順ウスメーというのお墓の中で死んだお母さんのお腹から生まれたって。それで、三日目にお墓参りに今でも行くでしょう。それで墓参りに行ったら、お墓の中で赤ちゃんが泣きよったって。「これは不思議」と思っつて墓を開けてみたら、赤ちゃんがそのお墓の中で泣いているのを救ってきたのが仲順ウスメーという、今までも。

エイサー節でも「仲順」あれがあるでしょう。あの話はそれから持ってきた話だという話よ。

ナーチャミー、ミツチャミーはこの仲順ウスメー救った道理から、お墓参りは「墓はどうもないかねえ」と行くのは、その人からの教えで、明日も行くし三日目も行くし、こっちでは七日目も行くんですよ。



※1 仲順流り 仲順大主を主人公とする話は「仲順流れ」の題名で伝承された。「流れ」は子孫の意味と思われる。

※2 エイサー節 「念仏歌」のひとつとして歌われる。

※3 ナーチャミー 葬式の御新婦々と御茶湯、花、水、お重などを持って墓参りをする。死者が蘇生していないかどうかを確かめるためといわれている。

※4 ミツチャミー 亡くなって三日目に墓参りをする。

四 運命と致富

(一) 炭焼き長者

① 炭焼き長者

神里マカト(大正元年生) 安藤田

[方言原語]

妻さーやまんどーしがてー、「私ねーうれー妻さーならん、ならん」し。あんさーにまた、

「私夫ないしえーや、うまから来くどう、私ねーありどうどうないん」んちやくどうや。うにーに、魚かたみてい売いが来んどー。売いが来しがよー、

「魚買いみそーれー」さくどう、買どーるばーてー。あんさくどうまた、「階から下りてちやーに、

「私ねーうりどう夫する、うれー私夫どうやる」んちや、かちみていそーるばーてー。あんさくどう、

「ぬーが、私んねー妻えどうめーらんでいんすむんぬーがいやー必じ私妻ないる」。

「私ねーいやー妻どうないる」んち。あんさー、うつたーんかい連てい行じよるばーてー。うんにんに、

「連てい行き」んち連てい行じやくどう。また、親ぬちやーがや、

「あんししいやーや、ヒンスムンぬん夫すんなー」んちやくどうや、

「あんしうれー、私ねー私夫んち決まているうんむあぬりする」んちやくどうや。

あんさーにまたうれー「家んかい連てい来」んち、

連ていちやくどうてー、あんさくどう、皆んかいクワツチーくいししが、うれーむるクワツチーくいらんばーてー。茶びけー飲まちよー。あんさーに家かい来、

「でいー、いつたー親ぬちやー私うしえーていて、私にんかいクワツチーくいらん、あまかいクワツチー

きいさ。私にんかいむるクワツチーくいらんていちやくどう、うぬ女ぬてー、

「あれー一番上等茶。あり飲みーねーや、ひつちーやていんやーしこーねーらんちどうあり飲まちよーん

どー」。

「あんし、クワツチーくいらん茶びけー飲まちよーん」でいちやくどう、

「あれー一番上等茶やくどうや、ごーぐちえーさんけー」んち妻ぬあん言ちよーるばーてー。

また、親ぬどうくまから「来よー」さくどう、ちやくどうてー。米なかい、うりさくどうやー黄金持た

ちえーるばーてー。黄金やしがて、「持ち行き」んでいちやくどう、鳥ぬうてーるばーてー。うぬ黄金投ぎてい

殺ちよーるばーてー。あんすくどう家んかい行じやーま、

「いつたー親ぬちやー私にんかい石持たちえーしがてー、うぬ石えぬーんならんむん、私鳥殺すんでい

ち投ぎたんどー」でい。

「あつざー大事。あれー一番上等や黄金どうやるむん、ぬーんちあり投ぎたくどう、

「うんねーるむん。うりがん黄金な。私が行ちゆるどう

運命と致富 人間の運命風土、結婚喜は神によつて定められている。その運命に逆らうことはできないが、神に願ひ不運を幸運にかえてしまふ話もある。

※1茶 お茶の栄養は氣力が出て機氣強くなるという。長い道のりを歩いても少しもこたえないという。



くまや、ちゃっさうりがまんどーぐとら」んでい。
 「どー取てい來わ」んちゃくとうや、だてーん取てい
 ちゃーなーかいしく家んかいうちきてい。でーじな
 エーキンチュなどーたんでい。

〔共通語訳〕

(武士の娘を)妻にめとりたいという人はたくさん
 いたが、(娘は)「私はその方の妻にはならない、なら
 ない」と断り続けていた。そして、

「私の夫になる人はね、そこから来るので、私はあの
 人と結婚します」といった。(そこへ)魚をかついで
 売りに来ているわけね、

「魚を買って下さい」と来たので、買っているわけさ
 あ。すると、すぐ二階から(娘が)下りて来て、

「私はこの人を夫にする、この人こそ夫になる人だ」
 とつかまえているわけね。すると、

「どういことだ。私は妻をめとらなくてもいい。ど
 うして、お前は必ず私の妻になるというのか、

「私はあなたの妻になる」と、そこで、その人の家に
 連れて行っているわけね。その時に、「連れて行け」
 と言うので連れて行ったら、すると親たちがね、

「お前はあのように貧しい人を夫にするのか」と聞い
 たらね、

「そんなことをおっしゃっても、私は、私の夫はこの
 人と決まっているので結婚します」と答えた。

そうして、また、男を「家に連れて来なさい」とい
 われたので連れて来た。すると、みんなにはご馳走を

あげるが、男にはご馳走をあげないわけ。お茶ばかり
 飲ましてさ。そして家に帰って来ると、

「ねえ、あなたたちの親たちは、私をバカにしてさ、
 私にはご馳走をくれないで、よその人にご馳走をあげ
 てるさ。私には、これっぽっちもご馳走をくれないで」
 というと、嫁さがね、

「あれは一番上等のお茶。あのお茶を飲むとね一日中
 でもおながすくことがないので、お茶を飲ませたん
 ですよ、

「それでも、ご馳走もくれないでお茶ばかり飲まし
 て、

「あれは、一番上等なお茶だったので、文句を言わな
 いで」と妻がなだめたそうさ。

また、親のところから「来なさい」と呼ばれたので、
 行ってみるとね、黄金を持たしたようだね。男はこれ
 は石を持たせてあると思っているわけ。(黄金を)持
 たしたら、鳥がいたそうさ。持っていた黄金を投げて
 鳥を殺したようだね。そうやって家に戻ると、

「あなたの親たちは私に石を持たしたのでね、その石
 はなんの役にも立たないので、私が鳥を殺そうと投げ
 たよ」と。

「なんと一大事。あれは一番大切な黄金なのに、どう
 してそれを投げたのですか、

「そんなもの。あれが黄金というものか。私が行く所
 は、どんなにたくさんそれがあることか」と。

「それなら、取って来て下さい」というとね、たくさ
 ん取って来てそれを家に置いた。(それから)たいそ



うお金持ちになつたそうだ。

(2) 産神問答

① 産神問答

昔久原ウシ（大正二年生）嘉間良

女二人が浜辺に遊んでいた。そこに白いヒゲのおじさんが来てから、

「あんたがた二人とも妊娠しているけれどね、一人は男一人は女だからね、その子どもたちが年頃なつたら一緒に夫婦になして」といったんでい。だつたら、その子どもたちが年頃になつたから、おじいさんがいよつたというからその通りやつた。それで、もう、やつたからその家庭いつも裕福さ。だけど、裕福になつたから、この男の人は心迷ひしてからに浮気するさ、女泣かして。

「だつたら、あんたこつちから出て行け」と言つてね。実はその女がタケブン（天分）上だけど、「出て行きなさい」といつたから、この当たり前の妻は出してやつて、浮気している女また連れてきて寝るさ。だから、それからもう家庭はもうメチャクチャ。メチャクチャになつて食べるものも着るものもない。したら、あとはこの男の人は物乞ひになつて。

女の人は、妻は出されるさーね。もう迷つて、「どこに行くのかね」といつて迷つて行つたから、また、そのおじいさんであるか誰かわからないけどね、「あんたはこつちでこんな迷つてゐるからね、どこ

の方角に行きなさい」と言つた。言つたから、その通りまたその女の人は行つたからね、炭焼き、炭焼き小屋に行つたから、そこで暮らすうちにその炭焼きの人と一緒にまつてしまつて。その家に前の夫は物乞ひになつてそのお家来るさーね。（以前は）この食べ物でも、こんなものも食べれるか何かといつて、もうみんな、はね返しよつたつて。だけどそつちに行つて、自分が元の妻だつたといふことわからなかつたはずね。だつたら、「何かくれなさい」といつたら、残り物もみんな持つていつてあがつてしたから、その女の人はがちゃんとかつてゐる。だから、

「あんた、前はこんなご飯なんか食べなかつたのにね、今食べるね」と言つたら、そんな時に、も、感じながらね、舌かんで死んでしまつたつて、こつちで。だから、それを今の夫にも言いきれないで、「どんなするかね」と言いきれないで、どつかお家からあんまり離れない所に女が埋めてからね、お茶も沸かしつて、ご飯も炊いたら、先に持つて行つてこつちに置きよつたつて。今の夫は、

「なんであんたはこんなして、先にこんなして何もかも持つていくね」と言つたから、
「いや、これは冷ましてあるんだよ、熱いから冷ましてあるんだよ」といつて。そうしてな、お箸とご飯と一緒に置かないつて。

だから、その伝えから、「ご飯でも何でも入れてきたらね、お箸は置かないで、食べる人か来てからお箸は出しなさい」と言よつた。それ入り口のところに置



いたつて。だから、「こつち来てあんだこれ置くから、ハチ取りなさい」といったははずね。

これは戦前、弟の嫁の兄さんが話しよつた。

(3) 子供の寿命(米寿由来)

① 米寿由来(子供の寿命)

喜納兼増(大正二年生) 登川

「方言原話」

神ぬ世^{かみよ}んでい。昔な^{むかし}一人ぬうふえい^{ひと}きらさぬばす

ぬ世やしが。うぬ女^{むすめ}わらばーが、女^{むすめ}わらばーしーじや

やてーんやー。あんさ、うりんかいおんぶしみや

に、うぬ男^{おとこ}わらばーやらちやくとう、くぬ、子^こ丑^{うし}寅^{とら}

ぬ十二ふあぬ星^{ほし}ぬ神^{かみ}んちやーがよ、^{かみ}「生命ぬじひ決

みりわるない」んでい、^{かみ}「ぬーぬ人何月、何日

生まれー幾ちまでい。何月何日生まれー幾ちまでい」

んでい。あんさーに、まーんくいな、国々巡ぐい、

十二ふあぬ星^{ほし}んちやーが歩^あちゆみしえーるばーよ、

うぬ男^{おとこ}わらばーそーとーるネー^なーくわーが、どうー

ぬうちやくそーとーる男^{おとこ}わらばー頭^{かぶ}丈^ぢささぬ清^{きよ}らかー

ぎーやたんでいしが、十二ふあぬ星^{ほし}んちやーが、

「くぬわらばー見^みちえーな、顔^{かほ}姿^{すがた}んあていあんし

頭^{かぶ}丈^ぢささしが、くれー命^{いのち}えーな、ぬびていハちまでい

るあつさー」んでい、あん言^いみしえーたん。あんさー

頭^{かぶ}なでいてい、

「可愛^{かわい}そやんでい」はいみしえーたんの。うぬ女^{むすめ}わらばーやすく、走^はえー走^はえーし、うぬわらばーやそー

やーに親^{おや}んけい、

「どうーなうつとうぬ男^{おとこ}わらばーや、八ちまでいる

頭^{かぶ}丈^ぢやんでいしがな、ちやーしえーしむがやー」ん

でい、女^{むすめ}ぬ親^{おや}んかいあん言^いちやくとう、

「まーんかいはいみしえーたが」んでい。

「な、うとうしきーんでいらわん、いほーな、

ぐんだはるタンメーさんたーやみしえーたん」でい。

「いくたいやたが」

「十二名やみしえーたん」でい。

「ど、あんしねー、なままでーかめいねー、ちやー

しん、いーぬじゆるはじ」。かめーたくとう、んちや、

前^{まへ}んかい歩^あきみしえーし見^みじやーによ、

「うぬ人^{ひと}たーどうやたのに」

「やたん」でい。

どーあんしーねー、

「ふりーやしが、なー」わびさーに、

「ゆるみていいふえー話^{はなし}ん聞きり」。あんさーに、話^{はなし}さ

くとう、

「ならん」でい、

「どーりん助^{たすけ}きていきいみそーり」なー泣^なちかかてい

さくとう、

「人^{ひと}ぬあんすか、あん言^いしえー、でい、いふえー話^{はなし}

でー聞^きちん」でい。一番^{いちばん}命^{いのち}ぬ生命^{せいめい}持^もちよーしえー、

ぬーぶしえーあらんど。西^{さい}ぬふあ。西^{さい}ぬふあぬ星^{ほし}

ぬ、「ならん」でい言^いちよーる。だ、今^{いま}ん、かんしえー

たすーぬ人^{ひと}ん、十一名しんか、血^ちんあろー涙^{なみだ}んあんでい

やーに、



※一ハチ「ハチ」とは最初という意味
があり、炊きたてのご飯をお召し上がり
下さいということ。
※二タンメー 土産のおじさま。

「ゆるみ」でいいやーにゆるたぐとう、うりから、
 「あんしーねーなーちやつさまでーやが」んでい、
 「十八ぬ年まで、あんしーねー延ばさな」んでい言
 ちやぐとう、

「と、十八ぬ年までい延ばすみしえーひんありがたい
 やひが、花盛り、十八ぬ年けーるーなー、うーら
 ないんどー花盛り、ゆくちさいびーくとう、なーへー
 延ばちいくみそーり」んでい。うぬ、お母んじんぶな
 やてーんやー、

「ちやーしんならん」でいいるくとうんかいなやーに
 よ、そーんでいしが。上びんかんし十八やしえーやー。
 「なー八んでいる字やたつくわーちいくみそーらん
 なー」でい言ちやぐとう、八十八んかいなやーによ、
 ごまかはらーに。酒んクワツチーんな、ゆるやーに
 うさぎていせいさくな、

「あんしんしむん。あんしーねーな、うりんけー八
 んでいる字たつくわーし」んでいいやーに、せいそ、
 八十八歳んかいけーなていねーらなよ。あんさーに
 る、「とーうれ、人ぬムンから命ひち、うつさゆじ
 たるむぬんあらん、うりがたましどうやんどー」でい
 ち。

あんし、トーカチぬすーじんでいひん切りマシ。落
 ていーるぶのー子孫周開けーぬ、命んけーぬ。子ん
 かい、

「私ねー、私たましどうかどーんどー」んでいいやー
 に、トーカチしたんでいる話やひがよ。

あんさーに、くぬ星運ぬ弱さしえー、ユタんでー三

世相んかい問いねーよ、一夜星ぬ上がていから十八
 夜。十八日んじ念願しーねーとうーいん」でいいち、
 ありん十八やしえーやー。旧ぬ十八夜。願てい念願し
 あぎやーに、「命ぬびー取らちいくみそーり」んでい
 願ひん、うぬ関係やんでい。

「米」んでいる字。略しドー三ちぬたつくわー
 しえー「米」んでい読むしえーやー。「八」「十」「八」。
 あんさーに「米ぬ御祝えー」んでい。また「米ぬ
 御祝えー」でいしえー「米」やくとうよ、米ぬかま
 にうんなげーが頭丈やんよ、ムンぬ恩ぬんやるば
 てー。

〔共通語訳〕

神の世のこと。昔、人が少し少ない世のこと。ある
 女の子が、女の子が年上だったらうねえ。その子
 におぶらせて男の子を行かしたら、この子、丑、寅の
 十二支の星の神様たちがね「生命の長さを決めよう」と
 と、「なに年生まれの何月、何日生まれば何歳までの
 寿命、何月何日生まれば何歳までの寿命」といつて、
 そうしているんな国々を巡って、十二支の星の神さん
 が歩いていた時のこと。この男の子を連れてくるお姉
 さんは、自分が背おっている男子は丈夫そう、美し
 い容姿であったというが、十二支の星の神様が、
 「この子どもは見た目には美しい容姿で、頑丈のよう
 になっているが、この子の命は長くても八歳までだな」
 とそうおっしゃって、そして、頭をなでて、

「可愛そうだね」と行かれたそう。この女の子はす

ま「トーカチ 米御祝いのこと。八十八
 に似た米の文字になんで、タライに米
 を盛り、そこに竹で作った斗桶を刺した
 ものを飾って長寿を祝う。

ま「ユタ 神がかりなどの状態で神霊や
 死霊など超自然的存在直接に接触・交
 流し、この過程で霊的能力を得て託宣・宗
 教的職務者、大部分が女性である。

ま「三世相 愚者のこと。

ぐ走って行って、この子どもを連れて、親に、
「自分の弟は、八つまでの命があるそうだが、どうしたらいいのかねえ」と、母親に言ったら、

「どこに行かれたのですか」と。

「落ち着いているというか、どこか、風貌のかわったタンメーさんたちでした」と答える、

「何名だったか」

「十二名いらつしやいました」と。

「それなら、今ならまだ探すとたぶん追いつくことができるはず。探すと、案の定前を歩いている方を見つけたので、

「この方たちでしたか」

「そうです」と。それならと、

「失礼ですが」と、声をかけて

「足を止めて話を聞いて下さい」とお願いして、話始めると、

「できない」と。

「どうか助けて下さい」と泣いてお願いすると、

「人があんなにまで言うのなら、ねえ、話だけでも聞いてみようじやないか」と。一番、命の、生命（を司る役目）を担っているのは、星名ではなく、西の方角、西の方角の星が「できない」と言っている。ねえ、

十一名の仲間は血もあれば涙もあるので、
「融通をきかしてくれ」といったら、聞いてくれるように、それから、

「そんならもうどのくらいまでか」と、
「十八の年まで、そんなら延ばそうね」と言われたので、

「ねえ、十八の年まで延ばして下さるのはありがたいことですが、花盛り、十八の年に亡くなると、花盛りなのでさらにつらいので、もう少し延ばして下さい」と。お母さんも、知恵のある方であつたんでしようねえ。

「これ以上はぜつたいに延ばすことはできない」といわれたようだが、上にこう十八という字があるでしょう、

「もう八という字は付け加えてもらえませんか」とお願いしたら、八十八になつてね、ごまかされて。酒もご馳走も休んでもらつて差し上げていたから。

「そうしていいよ、」

「それならもう、十八に八という字をたしなさい」といわれたので、八十八になつてしまつてね。それで、「これは、人の者から命を引いて譲つてもらつたものではなく、この子の持分だよ」といわれた。

トーカーの祝いというのも、切り柗（柗で切つて）落ちる分は子や孫の周囲の人たちの命。子どもたちに、

「私は私の分を食べているんだよ」といつて、トーカーし、祝うことになつたという話でしたがね。

それで、また、どうして星運の弱い者は、このユタとか三世相に聞くとね、「夜、星が上がる十八夜。旧の十八日に念願したら、願いが叶う」といつて。あれも十八さあねえ。旧の十八夜。祈つて、念願して「命を長くあらしめて下さい」と願うのも、この関わりからきている。



「米」という字。くずしてみると三つの字を組み合わせたもので「米」と読むことができるさあねえ。「八」「十」「八」。それで、「米ぬ御祝え」と。また「米の御祝い」というのは「米」だからね、米を食べてこんなに長い間頑丈なんだよと。食べ物のおかげであるという意味もあるわけさ。

② 子供の寿命(米寿由来)

金城初子(大正五年志) センター

トイカチの話してもいいね。八十八の由来記だね。八十八の話と言ってもいいね。

娘さんと乳母ちちといったら分かるでしょ。小さい時から本当のお母さんじゃなくて、育てのお母さん、ついでいるでしょう、昔の人はね。その乳母と一緒に遊びに出るところ、出て行くところとしている時に、皆がもう素通りする人たちが振り向いて、あんまりきれいな娘さんだから、振り向いて、もう、長いこと歩きながらも後ろばかり見て、この娘の顔だけ見つめて通りよかったです。それが二回目はまた、馬車引いてる人たちが見て、「世にはこんなきれいな子もいるねえ」と言つて、あれだちも足止めて見て。その次が、三番の人が仲順大主ちかぬりといつてね、昔の偉い人。この人が皆見つけているのを、三番目だから見ているでしょう。そのおじいさんが、

「あんたはね、こんなにきれく生まれていても、命は十七歳しかないねえ」つて。

「あんたは十七歳以上には命はおがまれない」とおじ

いさんが言うたから、この娘はこれ聞いてびっくりしてもう綺麗な着物も着けて出掛けるといつてしているのに、もう、ワーワー泣いてからに。着物も、も、べつたり土につけて泣いているのをまた、おじいさんは行ったから。今度はお母さんが弁当持ってもうついで来ているわけさ。

「なんでどうしたの、転んだの」と言うたから、

「いえ実は、今行きよつたおじいさんがね、私、きれく生まれていても十七歳の年しかうがまれないとおっしゃっているから私はどうするかね」と言つて、泣いている」といつたから、乳母ちちがこれを聞いて、

「心配するな。あんなに教えてくれるおじいさんはいおじいさん。確か、あのおじいさんの後ついで、このお母さんがついて訳聞くから泣かないで、泣かないで」と言つて、お母さんは、乳母ちちはおじいさんついで行ったわけ。そしたら、おじいさんは仲順の人つて。こつちにお家訪ねて行ったから、

「どうしてあの子が十七歳まで生きるんですか。もつと生き延ばされませんか」と言つて聞いたら、

「あー、あんた乳母ちちなっているか」と言つて、

「そうよー」

「そうよー、どうかおじいさん教えて下さい、教えて下さい」と言うもんだから、

「あんなにあんたがするなら、私が一応教えてあげるけど。浦添ゆうどうりつてあるでしょう、分かるでしょう。あつちに按司墓がある、その按司墓の所で、あれ確か、夜のあんた十二時まで、お餅も重箱一ついっ

いさんが言うたから、この娘はこれ聞いてびっくりしてもう綺麗な着物も着けて出掛けるといつてしているのに、もう、ワーワー泣いてからに。着物も、も、べつたり土につけて泣いているのをまた、おじいさんは行ったから。今度はお母さんが弁当持ってもうついで来ているわけさ。

「なんでどうしたの、転んだの」と言うたから、
「いえ実は、今行きよつたおじいさんがね、私、きれく生まれていても十七歳の年しかうがまれないとおっしゃっているから私はどうするかね」と言つて、泣いている」といつたから、乳母ちちがこれを聞いて、
「心配するな。あんなに教えてくれるおじいさんはいおじいさん。確か、あのおじいさんの後ついで、このお母さんがついて訳聞くから泣かないで、泣かないで」と言つて、お母さんは、乳母ちちはおじいさんついで行ったわけ。そしたら、おじいさんは仲順の人つて。こつちにお家訪ねて行ったから、
「どうしてあの子が十七歳まで生きるんですか。もつと生き延ばされませんか」と言つて聞いたら、
「あー、あんた乳母ちちなっているか」と言つて、
「そうよー」
「そうよー、どうかおじいさん教えて下さい、教えて下さい」と言うもんだから、
「あんなにあんたがするなら、私が一応教えてあげるけど。浦添ゆうどうりつてあるでしょう、分かるでしょう。あつちに按司墓がある、その按司墓の所で、あれ確か、夜のあんた十二時まで、お餅も重箱一ついっ

※トイカチ 数え年八十八歳末の米寿の祝い。旧暦八月八日に行われる。トイカチは元来、米の杵切りに使つた道具の方。
※2 仲順大主 北中城村字仲順にいたといわれる長者をいう。
※3 浦添ゆうどうり 英祖王統と尚寧の墓。浦添城跡北側地下中腹にある。

ばい、またおかずもいっぱい作って、お酒も一升。また、二人で暮を打っているからね、酒盃、これもコップ二つ置いて、ついで。いっつも口は濡らさないで、あんた、あの人たちの前で口は絶対なんでもいいから口は出さないでよ」と言つて、

「知らんふりしてから、あの人たちが食べたらまた入れ、飲んだら入れて飲んだら入れてそうやって、あの一升瓶を酒を二人に飲まして下さい。したら、お暮もつけてからにご馳走は自分なんかで食べるから、ご馳走あの人たちの前に置いて、あんたは側で立つておきなさい」と言われて、教えられたもんだからね。お婆あちゃんはもう教えて、このお母さんは教えられた通りにやっているわけ。

行つてみたら、んちゃ、この仲順大主が教えた通りに暮を打つていたつて、二人。だから、このおじいさんおっしゃつた通りに、酒も出してご馳走も出して、もう酒ついで出したから、夢中なつてからにもう、暮に夢中なつてから側見ないわけさ、この按司加那志たちは。そつちゅう飲んだり食べたり、飲んだり食べたりして、もう、夜がしらしら明ける、鳥の鳴き声がする頃からは三時なるわけさ。その間この乳母はこつちに立つて、そして、もう酒も全部なくなつたつて。丁度あれだちがご馳走も全部食べて二人で、なくなつてゐるときに鳥が歌つたつて。

「ああ、もう、そろそろ夜が明けるから、こつちはしまつておこう」と言つて。しまる、片付ける用意してゐる時にふつと見上げたから、この乳母が立つてゐるの

を見てね、

「あんたさつきからこつちに立つていたねえ」と言つて、

「そうですよ」と言つたら、

「何であんた一言もモノ言わないね」と、

「あんまり夢中なされていらつしやつたからね、もう、私が口出したら無礼になると思つて、私はずつと我慢してました」と。

「何でこつちに、何の用事があつて来たねえ」と聞かれたからね、

「実はこうこうこうして、娘がもう、あれされて、仲順大主から話聞いたら、こつちは命延ばす所。そういうたら、ちようと役場みたいなところになるわけさあ。

「どうにかなりませんですかねえ」と言つたら、お願いしたらね、ご馳走も食べてしまつてあるさあねえ、お酒も飲んでしまつてあるから、もう、この人が言うことも聞かんけいかなければいけない」と思つて。その按司加那志が手を打つたらね、中からこつちの給仕している人達が来ていたつて。して、

「あの帳簿を持つて来なさい。奥に奥にあの置いてある帳簿ね、命の帳簿持つて来なさい」と言つたら、持つて来たから、ほんとにこの娘は十七歳で終わるようにして、十七歳しかたつていなかったつて(記載されてなかつたつて)。

「もう、あんたの、あんたのご馳走も食べているから、これ聞かなければいけないから。これはじゃあね、八、



※1 按司加那志「按司」は各地の領主をいう。加那志は敬意を表す接尾辞。

八に直そうね」と言つて、この七の字を八に直して、この七も八に直して、八十八に。

「この八十八歳までこの子が元氣だつたら、八十八歳の年迎える日が来たら、柁の四角い柁、あれに赤い御飯炊いて詰めて、それから移してからに、これでお祝いしなさいねえ」と言つて教えられて。丁度この子がね八十八歳までやつたから（生きることができたから）、このトーカチ（米寿）の由来記がこれに流れて来ている。この按司加那志は神様だつたはず。今もあるよ。

③ 子供の寿命

當真アキ（明治四十三年生） 胡屋

とても美人の子がね十八なる娘盛りがね外に立つていたそう。それでね、坊さんが通つたからね、

「ああ、この子はかわいいそうだなあ」とその娘に言うて、

「何ですか」いゆうたら、

「これ、寿命が十八、十八しか生きられない。かわいそうな人だなあ」と言つて通つて行きよつたそうだよ。

それで、それ聞いた自分は奥に入つて、お父さんにね、「お父さん、私の命は十八しかないと言つて、道通る人が言ひよつたよう」言つたからよ、

「誰がそんなこと言つて」つて怒るだろう、誰でも、

「あつちに行く坊さんが、そんなに言つたよう」言つて。そうして行つたらね、追つかけて行つてね、

「あんたうちの娘に、うちは男の子もいないね、この

子が跡取りといつて大事にしているのに、十八しかないといつたら、今十八だよ。そんなことは何でわかるか」と言つて怒つてね。

「いや、そうなつていといつてちゃんと帳簿に書かれてい」つて、坊さんは、死ぬのも仏の道もよくわかるだろう。それでね、そうして、

「そんならもつと延ばせるような方法ありませんかね」と言つて相談したらね、

「あるよ、そんならね、どこそこに行くと時には目隠してね、すぐ一直線に行つたらね、そこにお寺があるからね、お寺があるから、そこは、碁もく（碁碁）ね、碁もくよ。三名座つて碁もくやりよつたそう。坊さんにまゝ、帳簿持つているね、帳簿持つている地獄の神様かもしれんよね。そこおつてね、

「目隠して始め行つてね、突き当たるところが、そこだからね、そこにお酒もね、ご馳走も持つてね。行くところはこの碁、碁打つて一生懸命に見向きもしないでやる、やるんだから、そこへ行つてね、お酒注いで、注いであげて、三名に。そうしてまたこのご馳走もね、もう、碁もくする人は夢中になつて、誰がくれているか、誰が飲ましているかわからんよ。そうしてはさんでね、お口に入れたりしてねえ、三人。一生懸命みんなまた無くなつたらまた、注いであげて、そんなにしなさい」言つて、言つて通りにやつてね。そうしたら、あと、（碁打ち）終つたらもう、こつち娘さんが座つているだろう、

「あつ、このご馳走はあんたが持つてきたのか」

「はい、私が持つてきました」

「何しにこつち来たか」言うて、

「ある坊ざんが、あんた十八しか命はないからといって、そうやりなさい。延ばす方法をね、この三名に一生懸命にお祈りして頼みなさい言うて、言われてね来ましたよ」言うたから、

「そうか。あんた、帳簿見たらね、そうだ。あんたは十八しか生きてないんだよ。そんなら延ばす方法、たつている（そう決められてる）んだから、どうした、消すわけにはいかないから、どうしたらいいかな」と言つてね、一人の知恵のある人がね、

「そうだ、上に八書いたらいいんじゃないか十八の上に、そして、八十八なるだろう、

「あつ、そうだな」と言つてね、一人の知恵より、三名の知恵がまゝ、あれだから、

「そうだな、あんた八十八」それから、

「命はもう神様から貰つた」言うてね、八十八のお祝いは、

「十八に死ぬのはね、その神様の真心の貰いもんだから」言うてね、八十八はあるそうだよ。

(4) 親の声は神の声

① 親の声は神の声

原宣ハル（大正三年生）安藤田

〔方言原話〕

あつた雨ぬ降たくとうてー、うまんかいシーぬ下ん

かい、かたかんかい雨宿りしーが行じよーしが。うーばんじ雨降とーしがてー、親ぬ声聞かりーたんでいやーに、『あい、ぬーがやー。私達親ぬ声聞かりーるやー』んち飛んじたくとう、飛んじーしとうまじゅん、うぬシー壊りとーたんでいしちぬ話。その話。

親よームヌシリぬ家かい行じやーに、「どー、いやーや何月何日ぬ、何時頃お、いやー子ぬ名前叫んで呼びなさい」つて言よつたから、あん、呼でーるばーどうやんでー。あんし、やつばしうぬ日ぬ、何時頃やたんでいいちぬ話や聞ちゃん。ムヌシリぬ家かい行じやーに、あんし、うんぐとーうーいやつてい、あんしあびたれー、あんし、うり、飛んじやーに助かとーたん。残いん入ちよーんでいしが、残えーうぬまうさーつとーるばーてーな。

あんさーにとー、うぬムヌシリんでー、あたいるばーんあさんでい言る聞ちゃんどー、私達や。ムヌシれー、ふりむるやるんでいしんうしが、うんぐとーうし、あたいるばーんあんどーぬーぬーんでいし聞ちゃん。そんな話聞いた。

〔共通語訳〕

急に雨が降つたので、近くにある岩の下の側に雨宿りしていた。大雨のさなか親の声が聞こえたといつて『あれ、どうしたことが。私達の親の声が聞こえるのは』と飛び出したら、飛び出すと同時に、隠れていた岩が壊れてしまったという話。その話。

親はね物知りの家に行った（時に）、

「ねえ、あなたはね、何月何日の、何時頃に、あなたの子の名前を叫んで呼びなさい」って言よったから、言われた通りに呼んだんでしょねえ。それで、やっぱりその日の、何時頃に（事故が）起こっていたという話を聞いた。物知りの家に行ったら、そう、そのように言われて、子どもの名前を呼んだら、そしたら、子どもは飛び出して助ったそう。他の人もいたそうだが、その人たちはそのまま岩に押しつぶされたそうだ。

それで、その物知りも、あたることもあるんだねえと言ふことを聞いたんですよ、私達は。物知りは、気がふれた人だという人もいるが、このようにあたる時もあるんだよということを聞いた。そんな話を聞いた。

② 親の声は神の声

半良芳子（大正十三年生）中の町

「アイ、私（わ）かマドウーやうらんがー（私たちのカマドウーはいないかねー）」といつて、お母さんが、この子どもの名前呼んだら、この人は、

「あー、お母さんが呼んでるねー」と言つて、何かは知らないけど、血のつながりで聞いたんじゃない。飛び出たから、その崖は崩れてこの人は命が（助かった）。

親の話よ。笑い話みたいにそういう話を聞いた。

この崖の下に雨宿りして、で、この崖が、お母さんが（子どもの名を）呼びよったつて、この人（子ども

は親の声）が開こえよったつて。なんか、自分の名前呼んだ。カマドウー、カマドウー。

「カマドウー」といつて親が呼びよったつて、

「うー（はい）」と（返事して）「なんでお母さんが呼ぶのかねえ」と思つて、（崖の下）から出たらこの崖が壊れたつて。それだけ親のあれがあるという話よね。

③ 親の声は神の声

山内盛福（大正二年生）南棟原

このお母さんの声が聞こえたんじ話ね。

子どもがね、家を離れてどっかに奉公に行つてなにしたものかな。

これもね、どつか畑に仕事に行つて。疲れて崖下にこうして休んでウトウトと寝ていたらね、お母さんが、「そこはね危ない」ということと、夢の中でこう言つていた。夢を見たというんだ。それ、お母さんがね、ウトウトと寝てたら、お母さんの声で、「危ない」ということで、「あい、今やつたが」と思つて、ちよつと、そこ離れて、「なにかな、これお母さんの声だつたが」と出て行つてみたら、「ああ、今の夢だ。夢を見たけど、お母さんが近くにきて呼んだと思つたんだが」飛び出して、崖の外に飛び出たと同時に崖が崩れたと。それで助かつたと。夢でと。今、あなたのお母さんの心の中は子どもがえー、お母さんが呼んだと言つてね。

あれは子どもが、私達の聞いたのは、崖下で休んでね、居眠りして疲れておるんだったら、夢でお母さん

※崖のあれ、親が子どものことを心もとなく思い、名前を呼んだので子どもが命が救われた。

の声を聞いたという話ですがね。夢の中でね、お母さんが、「危ない」ということ、『あれ、お母さんの声だかなー』と思つて、『そこにお母さん来ておるのかなあ』と思つてね、まあ、まだこないはずだから、僕は夢の中なんだが飛び出した。そうと、その崖が崩れたと。いや、やつぱり親子というなにはね、霊というのがあるのか、で、お母さんも非常になんだったでしようね。子どものことをなにしていたでしよう。息子はそれで居眠りをしてね、夢で知らしてあつたといふね。

(5) 千年蛇

① 千年蛇

平良キヨ(半楽原カマド)(明治三十九年生) 越来

龍というのはね蛇だからね、これ、見たから話するよ。龍が上がつていくの三回見たよ。龍というのはね、ある岩にね小さい時から住んでおつたからよ、人に誰にも一回も見られないつて。見られたらね龍ならないつて、蛇が。だからね、こんな大きくなるまで、一回も人間に見られないでね岩にすくんでおつてからね、一度でも人間に見られたら龍にならないつて。だから蛇がね、海から泳いで行つてからに、天に上がるときは海が波が大きく(うねる)。

② 千年蛇

内間シモ(明治四十四年生) 城前

海に行つて、すぐエーキ(金持ち)してからもう、とつてもね、生き虫くわー教らつた人がいるつて。「あんなあとはさー、これを言うなよー」つていつて言つたらよ、むる、みせわなつていたつたつて。口から出すもんでないつて。口からは。

昔さ、ハブよ、この龍とあるでしよう、龍、ある人がさ山奥に行つたらよ、この龍はさ何年待つたら天に上がるつて、ハブがよ、この龍、龍さ、下がるでしよう。山の奥山の掃除してよ、立派に掃除して、ある人がよ、山奥に行つたから、掃除して、『はーなー、くまんじりつば掃除してるか』と思つたつて。見たらよ、この木の枝にさ、ハブがさ天に上がつていく形だよ。いって。してね、このハブはさ、人に見られたら駄目つて。すぐ泥水落ちてよ、もう、大変だつたつて。

「うちが、うちのね言うのを聞いてちようだい」と言つてハブが。

「うちは千年ね、こつちに地上に暮らして今、神、神といつてや、偶像であるさ。神なつたらちちや天なかい上がいしが、いやーが口から出じやさんねーや、一生一代や、ご飯、ムヌン、エーキ(金持ち)すくど、口から出じやさんきよー。(天に上がるところだつたが、あなたがこのことを誰にも話さなければ、あなたの一生一代、食べ物や物に困らないぐらいの金持ちにさせてあげるから、このことは誰にも話さないでね)」

※ハブ 沖縄に分布する陸生毒蛇のうち、ハブ・ヒメハブ・サキシマハブの三種の総称
※天に上る 蛇は陸で千年、海で千年人に見られないで生きていれば、天に昇つて龍になると言われる。



と言つてこの人を納得させてよ。(これを見た人は)貧乏だつたつてよ。龍といちゃー龍の糞^糞でいすいや、もうものすこいもう宝よ。

して天に上がつていつてからさ、何にも言わないて。

「あんしヒンスムンぬあんし、エーキすしヌー何(ぬー)やがやー。(あんなに貧乏者が裕福になつてゐるのはどうしてかねえ)」とみんな、問うでしょう。

「これ言つたらおしまい、」

と言つたつて。口ずめして、も、絶対言わないつて。この、何のためウエーキ(金持ち)したか。浜ばたに龍の糞^糞よ、宝さ。して、もう売つたりして、この人生活して成功しているわけさ。

あることもう、何年待つてからもあることつて。これはもう酒飲んでではつぶかちねーんどうあんでー(酒を飲むんで言つてしまつたわけさ)。すぐ晩に無くなつたつてよ。

だからね、人間の口から出(ん)じーねーや、くくみんなん。(口からでたものは、取り戻すことができな)いでいしや。龍は必ず天に上がつて行く。龍とね、誠め神と戦争して下に降ろされたという話なんだよ。龍、龍が上がつて行くつてよ、あつちつち、天に。これは見られたからこの本人に見られたから。言わなかつたらしいけれど、後はもうウエーキしてもう、あふれたから、

「お前ほどのようにして金持ちになつたか」と友達が言うでしょう。話してしまつてから、その場に(話す

と同時に無くなつたつて。これに言うもんじやないつてよ。口から外に出すものではないと、死ぬまで。だ、代々もう、自分の子、孫に言わないわけさ。代々続くわけよ。こんなこと由来^{ゆらい}もあつたよ。

③ 千年蛇

佐渡山ゴセイ(大正三年生) 城前

これからかねえ。「蛇の夢見たら三日は人に話さんもん」つていうけど、これからきたのかねえ。

蛇は千年生きたらジャーになるつて。天に昇るといふてこれを聞いたけど。

④ 千年蛇

普久原ウシ(大正二年生) 嘉間良

(ハブは)七回すでかわるさあ。して七回目という時に、もう最後という時に人間に見られたから、もう、どうすることもできないさ、上がること、天に上がることはできない。だから、その人間が、

「私はこんなことはね見なかつたということにするから、ちゃんと上がつて行きなさい」と言つたつて、天に。上がつて行つたから、もう、その御恩として、この屋敷とか屋根のあれ、柱とかなんどかに黄金とかなんどか、そこに落ちてきよつたつて。落ちてきて、もう、いつも満足しているけれどね。いつの間にか、夫婦喧嘩して、こつちの家は。夫婦喧嘩してからに、「あなた、誰のお陰でこんなにいつも裕福にしていると思うね。これがそんなことがあつてね、いつも天

*1 龍の糞 龍の糞をいう。龍糞は万病の妙薬で、切り落とした首でも、龍糞があればつなげると言われる。
*2 話してしまつてから 金持ちになつたために、ハブとの約束を破つてしまつた。

から、それ授かつて、こんなに裕福しているよ」といったからね、もう、『そんなかねー』といってパタミかしてもう、落ちてきたって、ハブが。その(約束したハブが)、「見られた、見られているのにこつちにながってくるねー」と言ったからでなかったかねー。も、もう、その時からもう、(その家は)だめさ。ハブは七回すでと龍になつて上がるって。男の人がよ、

「私はもう、見なかつたといつてね誰にも言わない」といつて約束したから、その、もう上がつたから、その恩として(豊かに暮らしていたんだが)。

⑤ 千年蛇

佐渡山夏枝(大正七年生 室川

あるよ、木こりのね夫婦がとつても貧乏者だつたらしい。それでね、木こりしてそれを売つてね生活している人がね、年寄りの夫婦者がいたらしいさ。そして、この夫婦者がね、山にね木こりに行く時に、大きな木の根っこにね蛇がこういたらしいさ。そして、この年寄りね、ハツと思つてね、蛇見たもんだからビックリしてよ。この蛇がよ、

「私はね、あんた方には何もしない、噛みもしない。私はね今日ね天に昇つてね龍になる」つて。

「今日ね、天に昇つて龍になりに行くけどね、人に見られたらね、私はもう行かないから、あんた方がね、私が言うことを守つてね聞いてくれたら、私は天に龍になつて行かれるからね、それをね守つてちょうだい」

「うん、守る。何の秘密ねー」つていつたらよ、これがね、

「私を見たと言わないでね、この秘密を守つてちょうだい」。秘密と言うのはねこれから出たらしい。この蛇を見てよ、この年寄りにこんな相談していなくなつていたらしい。それがね、この年寄りたち家帰つてね、もう一日一日ね、もう一カ年、一カ年、生活がとても良くなつてね、エーキンチュ(金持ち)になつたらしいさ。金持ちになつて、それがね、金持ちになつたら、隣のね人が来て、

「何であんた方、そんなにね貧乏だつたのに金持ちになつたねー」つてそれ聞いたらね、もう溢れるエーキンチに話してしまつたらしい、その秘密をね、守りきれなくて。もう、エーキ(金持ち)したら、これがあんでいてもう何もかも忘れてしまつていらしいさ。そしてね、話してしまつたらね、その晩にね、この蛇はね殻になつてね、家の前にねヒンプン、それにね、この蛇がよ殻になつてこう落ちていたらしい。それからね、この年寄りたちはね、だんだんだんだんもうね貧しくなつてね。

だから秘密を守りなさいつていうのはそれから出たらしいよ。秘密守るいうことは。

これね、私たちもね、フィリピンで國頭(くにがしら)の方がよ、昔の話あんた方に聞かそうねえ。このおじいさんもまたね、おじいさんといつてもね、あの時分六十歳あまつていたはず。「昔の話聞かすさねえ」つていらっ



しやたのがね、みんな部落の人が集まつたのが、うち
 だったの。だから、私ね、これぼつかしは記憶に残つ
 ていますよ。住所もわからん、名前もわからん。私は
 茶ちや小沸こふいかして、茶ちやうきぐわーしこつてあげるから、
 行ゆち戻かへやーしているからね、何だか思つてね。この話
 した時にはじつと座つているからね、記憶に残つてい
 る。うん。そのね、秘密というのは、それから出たら
 しい。だから秘密を守りなさい。人間はね、あんまり
 金持ちになつたらよ人を馬鹿にしてね、もう自分のね
 さられたことも忘れてしまつてね、だから心も悪くな
 るらしい。

◎ 千年蛇

屋宜カメ(明治四十一年生) 安藤田

〔方言原語〕

昔むかしあなたでい。天あまぬんかい飛といでい行ゆちゆしや、うぬ
 女おんなに見みらつたかどうかよ、
 「いやー絶対誰たれんかいやんあらーよ、いったー、し
 ぐ私が毎日まいにち念願ねんがんし、いつべーエーキしてみていや、子こぬ
 ちやーんではないからうりすくどう、私わたしね、誰たれんかい
 昇あいたんでいいなよーやー」んち、うぬへど神様かみさまな
 てい昇あいたんでい。天あまぬんかい龍りゆうないてい。あんさく
 とう、金かねん儲たくわきてい、子こん儲たくわきていエーキさくどう、
 あんし夫婦ふうふおーたんでい。おーたかどう、夫おとこ婦めかけおーた
 かどうか、あんし、
 「あんしえー、私わたしねーひやー天あまぬんかい龍りゆうぬ昇あいし、
 いし見みじやーに、いやーや徳とくくいらやー、ウエーキ

しみやーんち私わたしがウエーケーさる、いやーから
 ウエーケーさんどー」夫婦ふうふおーたんでい。おーたか
 とうや、昔むかしえーなり、便所べんじょん外とちんどうあつさいやー。
 小便せうべんしーが出でじよる、便所べんじょんかい行ゆじやい。あんし、
 行ゆじさくどう夫婦ふうふおーていさくどう、じこーおーてい
 からな、うぬ女おんな小便せうべんしーが出でじたんでい。ウーぬ
 みーんでーな芭蕉ばしやう作しやうるウーて。ウーぬ一杯いっぱいあなたん
 よ。ウーぬみーんちうまから切きやーに、うり芭蕉ばしやう作しやうい
 くどう。うぬ、ウーぬみーんじ、うぬ女おんな殺ころさつとー
 たんでい。うぬ龍りゆうぬ下したがていつち。

「私わたしがウエーしみたる、いやーが何なにん儲たくわきーすが。
 私わたしが、私わたしが儲たくわち儲たくわきたる」夫婦ふうふおーてーるふー
 じー。夫婦ふうふ。おーたかどう、あんさくどう、またうぬ
 龍りゆうぬ、龍りゆうなかうぬ女おんな殺ころさつたんでいどーやーんでい
 言いみしえーたんどー。

うぬふーじーんあなたんでい。うぬ、うりんなー自分おのれ
 なーが見みちんらんわからんしえー、年寄としよんちやー
 話はなるやつさいやー。うん、うんぐどうーあなたんでい
 さーんでい言いみしえーたん。

〔共通語訳〕

昔むかしあつたそうだ。(龍りゆうが)天あまに飛とんで行くのをね、
 その女おんなに見みられたのね。

「お前まへが絶対誰たれにも言いわなければ、あなた達たち、私わたしが毎
 日まいにち念願ねんがんして、たいそう金持かねもちちにしてね、子ども達たちも立
 派はげにしてやるから、私わたしのこと誰たれにも昇あつて行ゆつたと言い
 うなよ」と約束やくそくして、そのへどが神様かみさまになつて昇あつた

「そうだ。天に龍になって。すると、金も儲けて、子どもも授かり裕福に（暮らしていた）ら、夫婦喧嘩をしたそうだ。喧嘩したので、夫婦喧嘩したらね、そこで（女は話してしまつた）。

「私は、天に龍が昇るのをこう見てしまつたので、（龍が）お前に徳を授けようねえ、金持ちにしてやろうねえと（言つたので）、私のおかげで裕福になつてゐるのに、あなたが裕福にしたわけじゃないんだよー夫婦喧嘩したそうだ。喧嘩したのでね、昔は便所も外にあるでしょう。小便しに便所に行つて。そうやつて、便所に行んだが、夫婦喧嘩したので、大喧嘩をしてから、その女は小便しに出たそうだ。芭蕉の中は、芭蕉布作る芭蕉ね。芭蕉の木がいつぱいあつたよ。芭蕉の木はそこから切つて、それで芭蕉布を作るから。その、芭蕉の中でこの女は殺されていたそうだ。その龍が下がつて来て。

「私が裕福にしたんだ。あなたが何を儲けたというのか。私が、私が働いて儲けたのだ」夫婦喧嘩したようだ、夫婦喧嘩したので、それで、またその龍が、龍にその女は殺されてしまつたそうだよとおっしゃつていましたよ。

そんな話もあつたそうだ。その、その事も自分らは見たこともなく、わからんさあ、お年寄りの話さあねえ。そんなこともあつたそうだとおっしゃつていました。

⑦ 千年蛇

鳥袋サダ（明治三十六年生）高原

ある貧乏者が畑に行く時に、この蛇がすつせいで天に昇ろうとする時に、このおじいさんが見たつて。おじいさんが、天に昇る時に見たからね、おじいさんに見られたから、

「おじいさん助けて下さい。私は、天に昇るがね、人にも聞いたら、私はすつかいするから誰にも聞かさないですよー」と、言つてしたから。（蛇が）庭に宝落として、これ（おじいさん）とても金満家になつてからに。金満家になつたから、酒小飲んでよ、

「どうして、あなたはこんなに早く金満家になつたか」と言つたら、

「こうこつたつた」と言つて言つたから、すぐなくなつて。それで貧乏になつてしまつてね。

⑧ 千年蛇

西早マツ（明治三十四年生）久保田

千年よ、千年ね、この一石の中によ、シー（岩）ぬ中にね、もう、何年も食びらん、何にも食びないよ、これは龍なるからね。これ、千年ね。穴もない、自然の石の中によ、ただ空気が吸うわけよ、これ龍なる蛇はね。空気が吸つて千年、これからもう、千年なつたら、この石からよ、石割つてね割つて龍になるわけよ。それでね、この話はね聞いたよ。

それで、この人がよ、山に行く時よ、龍が石ぬ中から割つて出よつたつて。な、天に上るいうつてね、



こうして天見よつたつて、この、龍やよー。(その様子を)山に行く人にね見らつてよ、人に見られたら、龍は(天に昇ることが)できないつて。それでよ、

「もう、あなたにね、あなたに私見らつたからね、な、うちは天に昇ることができない。千年うちやや、何にも食べない、かぎ空気だけ吸うてね千年生きただけ、あなたにね今日はもう天に上がる日やけどね、あなたに見られて、私はもう神にできないしね」つてよ言つたら、この見た人がどー、

「あなたがね、私見た誰も言わんようにね、自分の嫁さんにも、親に、子どもにも言わんように、自分一人だね、胸にねつめてあつたら私はね、今日は天に上がるけど」つて言つたらよ、これを、

「私は誰にも言わん。言わんからね、もう天に上つて下さい」言うて、この人が言つたつて。この人はよ、またあれやつたつて、もうこの龍なつてね、天に上つたつたこの人はもう、ものずくエーキ(金持ち)したつて、黄金、宝が落ちてきて。

それからね、また友達がよ、隣の友達がね、
「あなたはね、こんなに、もー、いつどきにね、いつどきにあなたはこんな金持ちなつてね、どんなして金持ちなつたか」言うて(聞かれたので)隣の友達に話したつて。

「こういうな事情でやつたよー」(話すると)、龍がみんな家焼いてよ、すくヒンスー(貧乏)なつたつて。天に、もう(龍は)天に上がっているけど神にできないわけよ。(龍は)落ちてきたんでしよう、もう、神

になりきれないから。

(6) 金持ちと貧乏者

① 金持ちと貧乏者

昔久原ウシ(大正二年生) 嘉間良

片一方はとつても金持ちであるし、片一方はいくらもうこの主人が毎日出かけてもつかつてきてやるけれど、とつてもあがらない(暮らしが豊かにならない)つて。その子どもが、

「なんで、お父さんは毎日こんなに掛けても、出稼ぎして来るのに何ももうできないのかねー、どんなかねー」といつて、そのエーキンチュ(金持ち)のお家に行つて、

「どんなにしてあなたがたはこんなエーキ(金持ち)したね。どんな、どんなしたねー」と言つたからね、その主人が、

「こつちおいで」つて呼んで、その井戸がツルべだつたつて。始まははツルべはもらない。もう一杯ずつ汲んで入れるさーね。入れる桶が底はない。底はないから、いくら主人がもうかつかつてきてからも、妻がそんなバキだつたらたまらないさーね。だから、いくら入れても、もう底はないからたまらないさーね。だつたら、

「こんなだよー」と言つたから、

「だつたら、変えてみようね」といつて。今度はツルべを壊れているもの、桶は底があるもの。だつたらそ

ホーバキ 竹で編まれた白の荒いザルをいう。穀物・芋などを入れるのに使用する。

のツルベも壊れているものだから、ちよつとしか水はかかつてこないさーね。だけどあとは、いっばいなつていったて。だつたらもう、

「いっばいなつているよー」といったからね、

「その通りだよ、あんたがたは」んでい。そしてその時からね、その子どもが絶対このお母さんに、お父さんがもうかつてくるお金はやらなかつたつて。金持の主人が子どもに、「こんなしなさい」と言つてるんだよ。最初は底がない桶に、一杯ずつ汲んで入れてもたまらないさーね。

「もういくら入れても、溜まらないよ」と言つたから、今度はまた反対に取り替える。ツルベはもう壊れているもの、桶はまた底があるもの。して、これツルベは壊れているものだから少しづつしか水入らんさーねー。だけどそんな少なくても、こんなやつたらたまつていくという意味になつてはすよ。

(7) 金持ちと神様

① 金持ちと神様

内閣シモ(明治四十四年志) 城前

ある人が金持ちで、財産もあつて食べ物もたくさんあるけれど、乞食が来て、乞食というのは、神様の人みる、心を試しに。したら、「あなたらにあげるよりね、犬猫にあげた方がまし。いっただいんスムーズのーや、どうなたーがな、あれーすしえーあらん(あなたた貧乏者はね、私たちがかわるものではない)」でい

ちもー断つて行かしたから、この金持ちも長らく続かなかつたつて。見るになくなるわけさ、見るに。

だから、神様はいないというけれどよ、うちに神様はいらつしやるよ。先祖も魂いらつしやるよ。だからね、心持ち立派作りよーつて、もう、こつちさー(心が大切である)。

(8) 猿の赤尻由来

① 猿の赤尻由来

長峯シズ(明治四十五年志) 高原

「方言原話」

エーキンチュムや、稲植たくとや、ヒンスムンぬやーまた、

「うぬ稲ちやーし植たくが。いっただいんむんゆかどーるむん」でいちゃぐとや、

「めー種や、いりちからや植りよー」んでい、ヒンスー者んかいうぬエーキンチュりくさし言いちきたくとや。さくどや、

「やーん」。うぬめー種いりちえーぐとやみーらんしえー。憎さしや、うぬヒンスムンぬや、怒み持ち門ぬや、

「いやーやうぬ石、石んかい登りよー」でいちゃぐとや、あんさーに、赤まい猿などーんでい。黒い石があるでしよう。うり焼ちやー、

「いやーやうりが上んかい登りよー」んちゃぐとや



※「マイイサー」黒い色の堅い石をい、磨石などに用いる。

やー、あんざーに、うぬ猿、赤まい猿などーん。人間からや猿などーん。

【共通語訳】

金持ちのね、稲植えたからね、貧乏者がまた、

「その稲はどんなふうに植えたのですか。あなた方のものはよく実っているので」と聞いたらね、

「米種子はね、いためてから植えなさいね」と、貧乏者にその金持ちがきらつて教えた。すると、

「そうですか。その米種子はいためてるので、芽が出るわけないでしょう。憎んで、その貧乏者が金持ちにうらみを抱いて、門のねマイイサー、マイイサーを焼いてね、貧乏者がだよ。うらみ、うらんでマイイサーを焼いてね、

「お前はその石に、石に登れよ」といったら、それで、赤尻猿になつてゐるって。黒い石があるでしょう。それを焼いてね、

「お前は、その石の上に登れよ」といったからね、それで、その猿は赤尻猿になつてゐるんだと。人間から猿になつてゐる。

(9) 金持ちのあやまち

① 金持ちのあやまち

古堅宗信(大正五年生) 安藤田

私のおじいさんの話。おじいさんがおじさん達に話しているのを側で聞いたわけ。それは、少しだけあ

たつてゐるか違つてゐるか分からないだが。ちよつとやつてみましょうね。久米島のおじの話。

昔ですね、ある篤農家、久米島は全部農家だから。

篤農家にね、「七度はからつて人を疑え」という言葉があるそうれすよ。「七度はからつて人を疑え」ということはね、この篤農家の家にね、下男というたら奉行人さ、下男の三良がいたそうすよ。三良という人がね、この下男の三良の部屋はね、昔の馬小屋の上の天井小に寝起きしてゐたらしい。丁度、ある日、この主人に呼ばれてね、

「三良ここに来なさい」つて呼ばれて、

「何でしょうか旦那さん」つて行つたらね、

「お前に聞くことがあるからね、話して聞かせなさい」つて、

「この家の天井小にお前の側に鳥が毎日卵産むけれど、これ毎日無くなつてゐるけれど、これはお前分らないか」と聞いたらしい。

「君、分らないか」と。

「私は全然知りません」言つたらね、その旦那さんがね、

「そこね、誰かが来る時があるか」と聞いたらしい。

「誰も私のところに来ないですよ」と。(それでも)その主人が、

「ここからなくなる卵はね、誰が取つたのか」と聞くわけ。

「分かりません」と言つたらしい。そしたらね、

「お前の部屋、君の部屋の側に卵産んでゐるんだから

※1 久米島 沖縄島那覇の西方百キロメートルに位置し、二〇〇二年に仲里村と具志川村が合併してできた新しい町である。

※2 篤農家 家農のことか。



ね、お前より他に取るのはいない」つて。

「取る人はいないつて。お前が取っただろ」つて叱責したらしい。したらね、この三良はね、それから数日後死んだらしい、自殺して。

そしたらこの旦那さんはね、三良が死んで後からも卵はどんな無くなりよつたそうだよ。「珍しいことだね、盗人はね居なくなつたが、三良が死んでしまつたがね、卵が無くなる」と。「これは確かに盗人が他に居るからね、この天井小に寝ていてね、卵盗人を捕まえてやる。三良のために捕まえてやる」と。寝て、もう夜、夜中も寝ないで待っていたらね、ゴソゴソして音がしよつたらしい。「あーもうこれ捕まえたぞ。やれやれ来た」と。いや、音はあんまり小さいわけさあね。明かりをつけてよ、すぐ見たら、びつくりしたこと、大きなネズミ、大きなネズミがね、頭の上に卵乗せてね運んでいたらしいよ。そしたらね、「ハッ！ シャ、これ三良がしたのではなく、ネズミがしたんだね。三良は誠な者で働き者だったのに、私はもう三良を死なしてどうするかねー」これからね苦労して、この人は病氣して死んだらしい、旦那さん。これ昔話。こんなものもあるよ。久米島仲里村にいたお祖父さんから聞いた。もう生きていたら、百何十才なつてい

② 金持ちのあやまち

屋宜ハル（大正三年生）安藤田

「方言原話」

うちの親が、「泥棒は、自分で捕まえないと泥棒とはいえないよー」と言つてから。

あるところに金持ちが、夫婦二人使つてからね、奥さんはお手伝いやつて、また旦那さんはハルに行かして、夫婦ともやりよつたつて。こつちの鳥がよ毎日卵を産むけど、毎日この卵がないけど、またこのジョーヒチャー奥さんにね、

「あんたは自分の旦那さんにこの卵あげているでしょ」と、このお婆さんは言われてよ。また、あげてないから、

「あげてない」つて言つたら、

「あんしこの卵は、産する卵ぬねーんないるむんぬ、うり誰んかいくいらんむんぬ誰がかむが」んでい言ちさくとう、

「私達やくいらんたん、かまんたん」でいいやーに、うつたーや出じていはちやぐとう。

うまぬ主ぬよー、「うつたーがはちん卵ぬねーんないしが、ぬーが別にん卵も盗人ぬういるすがやーが」んち、毎日管理そーたれー、ネズミが抱えて持つていきよつたつて。

それからね、こつちの主人も「あつたーやはまやーやたるむんなー、家かいやらちねーらん」ち、毎日しんさくつて、あとは病氣なつたつて。

こんな話があるから、これはね、「泥棒は自分で捕



まあないうちは泥棒と言ふなよ」と教えられた。これから、この話が出たもんだよ。

〔共通語訳〕

うちの親が、「泥棒は、自分で捕まえないと泥棒とはいえないよー」と言つてから。

あるところに金持ちが、夫婦二人を使つてからね、奥さんはお手伝いやつて、また旦那さんは畑仕事をし、夫婦で働いていたそうさ。金持ちの家の鳥がよ毎日卵を産むけど、毎日この卵がないけど、またこの下人の奥さんにね、

「あんたは自分の旦那さんにこの卵あげているでしよう」と、このお婆さんは言われてよ。また、あげてないから、

「あげてない」って言つたら、

「だけど、この卵は、産んだ卵がなくなるのは、それは誰にもあげないもの誰が食べるのか」と言つたら、「私達はあげないし、食べていません」と言つて、その下人夫婦は出て行つたそうさ。

その主がね、「あの人たちが行つた後も卵がなくなくなるが、もしかして他にも卵の盗人がいるのかねえ」と、毎日監視していたら、ネズミが抱えて持つていきよつたつて。

それからね、こつちの主人も「あの方達は頑張りやだったのに、家に帰してしまつた」と、毎日後悔して、しまいに病氣なつたつて。

こんな話があるから、これはね、「泥棒は自分で捕

まえないうちは泥棒と言ふなよ」と教えられた。これから、この話が出たもんだよ。

(10) 屋良ムルチ (生けにえ)

① 屋良漏池 (継子のいけにえ)

金城初子 (大正五年生) センター

屋良ムルチに出て来る蛇ヘビ(退治するにはどうしたらいいか)といつてから。あつちこつち、しんじ神の所行つたらね、「辰年の人の辰の人の十八才の女の子をジャヤにかまसानかつたら、このジャヤはおさまらな。毎年ほる」といつての話があつたと言つて。も、この辰年当たつている所は、この貧乏人の人と一箇所はとつても金持ちの人と二箇所しかなかつたつて。そしてだから金持ちの人がね(貧乏者の娘に)こう言つたつて、

「もう、私らちとあんた方と年頃の娘はあつているけど、お金はいくらでもあげるから、あんたこの身になつて行かないね」と言つて。この(貧乏者の娘は)お母さんには相談はしないで、お母さんは継親よ育ての親。お父さんはめくら。この娘があんまり心が良くつてね、

「いつまでもお母さんに恩返しもできないし、お金はあれ(金持ち)たちが、いくらでもあんた欲しいだけはおげるからあんた行つてくれないね」と言つて金持ちに頼まれたら、

「行きます」と言つて。そうしたから、この貧乏人の

※ 屋良ムルチ 中頭郡喜手納町屋良にある。喜手納町から県道七十四号線を沖繩市に向かい、道の駅喜手納を少し過ぎた左手に位置する。

お母さんは自分では生んでないけど、小さい時にこっちの後妻になって来ているお母さんだけけど、このお母さんが毎日毎日神様の所行って、「どうか助けて下さいい神様」で毎日通っているわけ。今日も明日もぬふんしー担いで行くけど。子どもはもうお金を持ってそこにお父さんの側に置いてからに、

「自分はジャーにかまれる」と言つて行っているわけ。そのうちに、この育てのお母さん船つて来て見てからに、

「これ何か」と言つて見たらお金でしょう。

「まーんか行いじゃが、行いじゃがー。(どこに行つたのか、行つたのか)し、しよつちゅう捜しているけど、見えないからとにかく、『あつちにジャーのところに行つてはるはず』と思つて、お母さんは追い駆けて行っているわけ。

「うんじゅん(お父さんも)な、ゆつくり私の後ついできなさいよ」と旦那さんに、目は見えないからね。いつもは手を引いて歩くけど、娘が今にもジャーにかまれるかと思つて、お母さんもあわてているわけ。そしてお母さん、

「どうか、こつちの中にに入れて下さい。中に入れて下さい。私はあつちの娘の親だから入れて下さい」と言うて。この門頭の人達が入れないというているけど、こつちのまた頭がいい人が立っているから、

「入れなさい」と言つて入れて。そうしたから、

「お前がかまれたら私は生きててどうするの。私もあんなと一緒だから驚くなよ、心配するなよ」と言つて

この娘の側に行つて、

「どうか私もお願いします」と言つてこんなにしてる時に、ジャーもゴワツて登つてくるわけさ。それにかみつかれそうになっている時に、海の神様が出て来て、このジャーは殺すわけさあ。したら、今にも殺されると思つてがまんしているけど、なかなか(かみつかれない)。ちよつと真つ暗なつていてね、そのすきにお母さんたちこんなしているけど、^{ヌブシ}の玉、海の神様がヌブシの玉くれるわけお母さんに。そのお母さん取つてはいるけど、夢中なつて目は閉じているわけ。も、この暗がりがなくなつたからこの持つている玉を、このくらの玉持つているわけさ。「これ何だ。これ何だろう、何だろう」と自分一人言言うている時に、お父さんは目は見えないけども、二人の名前呼んでこつちに呼べば来るわけさ。

「今ね、こんな玉が私の手に入っているけどお父さんこれ何ねー」と言つたら、お父さんは、「だー(どれ)」と言つて取つて、お父さんこれなでいやーなでいやー(なでまわ)して。

「はー、これ何かねー、何かねー」と、まぢやーまぢやー(まわして)している時にお父さんの目はパツと開いているわけよ。親子三名また元のように暮らすようになってるといつて。お母さんの心と娘の心が通じてからに、天までもこの心が通じているつてのことよ。だから海の神様が恵みの玉あげて助けてあるさ。



② 孝行娘とヌブシの玉

昔久原ウシ(大正二年生)喜間良

貧乏の娘と金持ちの娘と同年の同じ日に生まれた。それくじ引きして(生けにえを出すことになり)金持ちの娘があたっているさーね。だけど、その貧乏の娘はお母さんはその娘を産んでから別に行ってしまったて、お父さんは目もかくれて(不自由) いるさーね。昔だから何もなければ、同じ赤子がいるところに行つてお乳もらうさーね。そういう時にかわいそうと思つている女の人が、「その娘私に育てらさんかね」といって、そうつて、そのお父さんと夫婦になつてしまふんだ。その娘を育てるために。そんなしたから、それ(娘)が年頃なつたから、あつちの娘とこつちの娘と同年の、同じ月、同じ日に生まれたの蛇へびに喰わすといつて。くじ引きしたから金持ちの娘にあつたから、「そうでない」といって、そこの貧乏の娘と替えるといつてお金を持つてきて。したから、その旨のお父さんも、また、そのお母さん母親であるけどつてもいい人。したから、「そんなことしない、お金はいらぬ。娘が人用だからお金はいらぬ」といって引き返す。したら、も、そこの貧乏の娘困つているさーね。だから、父は目をかくれているし。そんなだからといつて、その継母はもう毎日朝晩、晩も、お祈りしにあつちこつちに行くんだよ。娘が無事に蛇へびに喰われないようにするといつてお祈りしに行くんだよ。そんな時に金持ちのお父さんが、お金持つて来て(自分の娘)と引き換えに。したらもう、その娘がまた、

「もう、家も困つているから、私は蛇へびに喰われてもいいから」といって。お父さんは、いつもお家に、目を見えないからいるさーね。したら枕元のところに、金持ちから持つてきたお金を置いてからに、自分も蛇へびに喰われに行くけれど、このお父さんが、「何で、こつちにあるの何かね」といって気づいてやつたら、お金だつて。そして、お母さんが帰つてきたら、

「そんなしていけない」追いかけて引き戻しに行くんだよ。だが、もう、そんな時にちゃんどあつちまで行つているから、

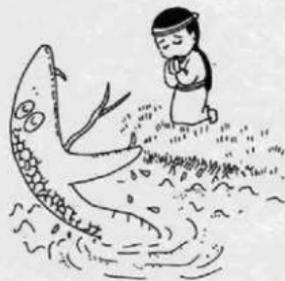
「あんたも私も同じもんだから、同じようにして私も喰われる」といって。そつからもう(母親も)どかないって。したら神様だはずね、

「あんたがたの親子の誠はどうしようもないからね、あんたがたは喰わないから帰んなさい」と言つて。そこで、昔、ヌブシの玉といつてそれをもらわすんだよ。その時にまた、この目をかくれているお父さんが追いかけて、手探りしてかけてくるさーね。して、その時に三人抱き合つてやつたら、神様からヌブシの玉もらつているさーね。そのヌブシの玉をお父さんにやつたんだ。だつたらその目が開いていたつて。

③ 屋良漏池の大鱈

鳥袋新栄(明治三十二年生)池原

屋良ムルチといつて伝説はあつたんですが、屋良ムルチには大蛇おろちんというような(話だ)が、あれウナギだつたでしょうと私は思つていますが、それが住んでおつ



て、いつも農作物を荒らしておったので、「いかにしたら、これが退治できるかね」というのを考えておったそうだが。そして、聞く人から聞けば、「これはまあ、若い娘なんかをはなして、これにエサにすればそんな農作物は荒らさないとだろ」というような意味で協議したんですが。その一人の娘が、

「皆が生活に困らんようなことができるなら私が犠牲になってもいい」というような申し出た女がいたと。

それで、まあ、そうだからまつりをして、「今日の日はこの娘を川にあれして、エサにさせよう」というようなまつりをする場合に、急に雲が流れてきて、その大蛇の上に雷が落ちて、この大蛇が死んでしまったので、その娘は犠牲にならずにすんだというような話もあつたわけです。

④ 屋良ムルチ

仲里マスイ(明治二十五年生) 池原

『方言原話』

屋良ムルチぬ御神ぬいぬ辰ぬ人やたんでいいひが、エーキぬ人子取いでいよ。エーキンチョー銭ぬまんどーぐとう、

「私たーが銭出じやしーねー、あぬヒンスー者ぬ子から取てい。ちよーどう、うれーなー海んかいふつくわふるふーじやるばーて。あんし、やてーひーが。また、ヒンスー者ぬ親親どうやひが、

「いかなしん取らはん。子ぬたましえー私とていぐいりーんでいひーや、

「あんしえーならん」でいち、あんさーに、エーキぬ人ぬ子ぬがーらち、ヒンスームぬ子取いでいちゃしが、神様ぬ、

「いかなしんあねーしみるん」でいよ。あとーヒンスー者ぬ子でーじなウエーキし体ん助しかてい、エーキンチユぬ子や、うりどう取てーちさんでいひぬ話やたんどー。

『共通語訳』

屋良ムルチの御神が同じ辰年生まれの人(を生贄にしようということ)だったところが、金持ちの子どもの命を取ろうとしていた。金持ちはお金がたくさんあるので、

「私たちがお金を出すので、あの貧乏者の子を(代わり)にしよう。それというのは、子ども海に沈めるということなんだね。そういうことであつたが、だが、貧乏者の(子ども)親は親なんだけども、

「どんなことがあつても行かさない。子どもの代わりに私の(命)を取ってくれ」といってね、

「そういうことはできない」と。そして、金持ちの子どもは許して、貧乏者の子の(命を)差し上げようとするが、神様は「絶対にはやせさせない」と。しまいは、貧乏者の子はたいそう金持ちになり命も助かったが、金持ちの子どもは命を取られてしまったという話であつたよ。



⑤ 屋良ムルチへ生けにえ

上根ウサ(明治三十一年生)宮里

〔方言原話〕

天願ガラー今カラーあしが、あまがやらー。天願ガラーぬクムイにイナジぬまぎくなやー、ジャーんじウナギんかいなてい。あんさー夜なれー農夫達が作くてーる食物荒らちよー。あんさーにまた農夫達えすりやーに話するうち、神様が聞ちやーに、「いったーぬ話すが」んちやぐと、

「くぬカラなかいジャーんどうるソナジぬやうびーしが、うぬジャーやちやーしえー殺さびーがでい、いちでいやいびーん」「とーあんしやいねーや、うぬジャーや一人娘喰んだれー死なんくとう」でいちゃぐと。また、うぬ付近なかい親子暮らしぬ一人娘がうーてい、うりが聞ちやーに、「はー、私ねーヒンスムンやいびーしが、金んねーらな、お母が病氣なてい医者んかい見しーるくとうんないびらんくとう、私のー、うぬジャーに喰てい親孝行やさびーぐと、ジャーに喰りーる時え、うほーくぬ褒美いーらしみそーり。褒美いーらば農夫達え、私たーお母ん医者んかい見して、立派に治しみそーり」んでいいち農夫達に頼まーに。また、うぬ女天国行く姿さーに、畑いちよーたぐと、ジャーや波立ていてい来る時え、ぐ天が真つ暗くなやーに、雷が落ちていジャーや殺ち、一人娘命ん助かつてい。あんさー、うほーくぬ褒美いーやーに、お母ん病院ぬんかい連れてい行じ治ち、今立派に暮らちよーんでいぬくとうぬあんどー。

〔共通語訳〕

天願川は今も川があるが、あそこのことなのかねえ。天願川の水の溜まっている所のウナギが大きくなって、ジャーという大きなウナギになった。そして夜になると、農夫達が作った食物を荒らしていた。そこで、また、農夫達はそろって話してるところへ、神様が(そのことを)聞いて、「お前たちの話をしているのか」と尋ねると、「この川にジャーというウナギがいるんですが、そのジャーはどのようにして退治しようかと思つて話しているんですよ」「さあ、そういうことならば、そのジャーは一人娘を喰わないと死なないよ」といわれた。また、その付近に親子暮らしをしている一人娘がいて、その娘が(そのことを)聞きつけて、「ねえ、私は貧乏者で、お金もなく、お母さんは病氣ですが医者に見てもらふこともできませんので、私は、そのジャーに喰われて親孝行をしますの、ジャーに喰われる時は、たくさんのほうびを下さ。ほうびをもらったなら農夫達は、私のお母さんも医者に見てもらい、立派に治して下さい」といつて農夫達に頼んだ。そしてまた、女は天国行く姿をして、畑に座つていたら、ジャーが波立てて来てと同時に、すぐ、天がまっ暗くなって、雷が落ちてジャーは死んでしまい、一人娘の命も助かった。そして、たくさんのほうびももらい、お母さんも病院に連れて行つて治し、今は立派に暮らしているということがありますよ。

★天願ガラー 沖縄本島中部に位置し、うるま市を流れ、金武湾へ注ぐ川

⑥ 屋良ムルチの生けにえ

宮城タケ（明治四十年生）与備

〔方言原語〕

屋良ムルチぬ話んよ。ぬー年ぬ、ぬーぬ日に生まりたる女ん子二箇所うてゐるふーじ二人。ヒンスームンとうエーキンチュとう。

「どー今度、いったーわらばー生まり年あたどーぐとうや、ジャーンかいいくわーし」んでいちさくとう、エーキンチュヨーナー、

「自分ぬ子あたらしーやるむんヒンスームノーあたらし。あんさーに今度エーキンチュから銭うほーく持たさーなかい、うぬ、ヒンスーむぬんかい持ち行じやぐとう、男ぬ親ミツクワゝやるはーてー、めくら。あんしうぬ銭のー女ん子ぬ取どーるばー。

「私が行ちゆぐとう」んち。親うんぐとうーやる、

「行ちゆん」でいちや、うまんかい出じさーなかい、な、親ん子んわかりてい。また、女ぬ親親どうやがやー。親なー、願立し、白衣着けて願立さくとう、な、いざ、あまんかい行ちゆんなたぐとう、うまんかい、立たらんしーねーしく神ぬ出じていちやーに助きらつとーるばー。あんさーに、また、うりんくガニぬタマぬ出じていて、うぬわらばー命教らつてい。

また、うぬタンメーん、

「くれーぬーやが」んでい、見したくとう、

「うれーぬーやが、ぬーやが」し、わからん、

「いや、うれ、見らんなー」でいちやぐとう、

「見らん、うれーぬーやが、ぬーやが」さくとう、あとー目んバツトあちやーなかい、

「あいやー、クガ二どうやさやー」んち。

そんな伝え話もあるさー。

〔共通語訳〕

屋良ムルチの話もね（仲順大主の話に似ているんだよ）。

「どの干支の何の日に生まれた娘」というのが二箇所にいたそうだ二人。貧乏者と金持ちの（家に）。

「ねえ、今度はあなた達の子どもが、今年の生けにえにあたつていたので、ジャーンに食わしなさい」ということになったので、金持ちは、

「自分の子どもは大切なので、貧乏者にさせなさい。そこで今度は金持ちからお金をたくさん持たして、貧乏者の所へ持つて行つたら、お父さんは目が不自由であつたそうだ。盲目。そこで、持つて行つたそのお金は、（生けにえを承諾して）娘が取っているわけ。

「私が行きますから」と。親は目が不自由だが、

「おまえ一人しかない子をやらすわけにはいかない。だけど、も、

「行く」というので、そこに行つて、親子の別れをして。また、お母さんというのは母親なのかなあ。親は神様に願いをかけ、白衣を着て願立をしたら、も、いざ、生けにえになる場所に行くと、そこに立つと同時に神が出てきて助けられているわけ。そこで、また、その娘にも黄金の玉が出てね、その子どもは命を救わ

れた。

また、そのおじいさんが、(黄金の玉)を、

「これはなにか」というので(お父さん)に見せると、

「それは何かなあ、なんだろう」とわからなかったが、

「あなた、これ、見えないか」と聞くと、

「見えない、それは何か、なんだ」と、そんなやり取りを

りをしているうちに、しまいには目がパツト開いて、

「なんと、黄金なんだねえ」と。

そんな伝え話もあるさあ。

⑦ 屋良ムルチ(へ生けにえ)

比羅真信(昭和二年生) 中の町

悪い龍がムルチグムイに住みついで、毎年毎年人身

御供を、きれいな女の子を喰ひ殺していた。それで、

ある時に金持ちの娘にその白羽の矢がたつて龍の人身

御供になったのだが、金持ちだから貧乏者の娘にすり

代えようとしたわけだ。そしたら、「あんたが代わつ

てくれたならば、あなたの病氣しているお父さんも病

氣も治してあげましょう。そして、病氣治してあとも

お父さん、お母さん幸福にさせてあげましょう。だから、

金持ちの娘と入れ代わつてくれんか」といってたら、

この孝行娘は、「もう、どんなに自分が働いても、

今の状態ではお父さんお母さん幸福にすることは出来

ない。だったら自分が身代わりになって、龍のえじきにな

ることによつて、自分の両親が幸福になるんだつた

らいい」ということで、その金持ちの娘とすり代わ

り代わつて、そして龍に喰われるというこ

とで、ムルチグムイの龍に喰われるようにしておつたら、

まさにその龍が出て来て喰おうとする時に神様が

現れて、「こんなすばらしい孝行娘喰わすわけにはい

かん」と龍をやつつけて、そして孝行娘は助かつて、

おかげで両親も皆メデタシ、メデタシということで、

ムルチグムイの孝行娘の由来というのが今の話。

⑧ 屋良ムルチ(孝行の巻)

伊佐安弘(明治四十一年生) 山里

一番貧しいところの女の子が、このジャヤー(蛇)の

餌食になれば、ジャヤーはこんな流れ放題のことはやら

ないというんで、いえば、昔の政府からね、「じゃあ

あ、このジャヤーの方に生けにえになる人間はいない

か」と。丁度、真玉橋の話と同じように、「生けにえ

になる者はおらんか」と言つたら、この一番貧しい

家の女の子が、「あは、これで父親が裕福なるんだつ

たら、うちが犠牲になつて行きます」というなでね。

なつたら、政府も、「ああ、そうか」と言つて、その

生けにえになるその日を何日といつて決めて、そこに

全部、政府の方々も座つて拝みをして、この女の子を

上段に置いて、ジャヤーが来るのを見て、もう、待ち構

えておつた。丁度その時、天からガーツと星みたよう

なものが落ちて、そのジャヤーをこれが退治して、この

女の子は助かつて、それからその女の親の方たちは、

政府からの褒美で裕福に育つたという話も。



※ムルチグムイ 人工的に造られた小さなため池でクムイという。

⑨ 屋良ムルチ

柴野比トヨ (大正六年生) 知花

〔方言原話〕

浴みが行ちゆるうつざー船てー来んなやーに、ひるまはるある。なー、うぬクムインじでいるしにくまどーるんちどうやたんでんが。あとうぬうじゆまいじえーうぬウナジヌーヌチンクヌーんでいち殺はつてい、人どうばつペーやーに殺はつてい、殺ち見ちやぐと、ギーフアー七ち入りちよびーたんでいや。

〔共通語訳〕

水浴びしに行く人みんな帰つてこないの、珍しく思つていた。これは、このクムイにひそんでいるものの仕業と思つていたらしいんだが。しまいにはウナギがトーヌチンを喰うといつて殺されて、人と間違えられて殺されて、殺して見ると、ジーフアーが七つ入つていたそうですよ。

(11) 誠の上には弓も矢も立たない

⑩ 誠の上には弓も矢も立たない

松下盛一 (明治四十五年生) 池原

〔方言原話〕

じこーぬ誠め者ぬ御城動きやたんでいしがよ。くぬ誠な者おちやー御城んかい動きやーに、くぬ御城から、あぬ御城んかい言上持ちてー手紙持ち行ちゆるばーに、へーライぬよ、うり殺すんでいちすーちが、

「実え私んねー、くれーとうじゆみていやー、くり持つち行じ戻やーに、うれーしちから、あね、明日んかい私ねー殺るちとらし」でい言ちえーぎさん。

「うん、あんどらんやれーしむん」でいちなーしえーぎさんよーやー。あんざーに、

「あんしえー、いちぬいつか月ぬ夜やー。月ぬ夜やるばーんじやー」んで相談のーやてーぎさんてー。

あんざぐと、御城んかい戻てい行じよー、うれー、「私ねーなー、かんかんしやしがなー、私ねー殺るざりーる事なとーつざー」でいち、御主加那志前んかい

うんぬきたぐと、

「えー、いやーや誠な者やぐと絶対にいやーんかいからんくとう。とー、私がいーむん習さわ、くぬ、私がいる通いしーよーやー」でい言ちえーぎさんてー

やー。あんすぐと、

「うぬ、太刀持ち行ちやーによ、月んかいあててい、お月様んかいあててい向かーちよーていしーねー、あまのー入ちえー来さんぐと、うぬ覚悟さーにしー

よー」でい言ちえーぎさん。いんねーすんねーうぬ日、なー月ぬ夜にあててい、いぬ場所んかい行じえー

ぎさんてー、うりん来たんでいよー、やー。あんしなー、

「とーあんしえー殺しえー、殺しえー」さーに太刀えよー月んかいあていらつてい照らさつとーるばー。あ

まから見しえーやー月んかい向かていどううくとう。あんざぐとてー、打ちーさなよー

「私が勝なーんぐとうなー、わびすん」でいちくぬへー

*ーギーフアー かんざしのこと

レー詫すたんでいどー。うにーからやさ、「誠まことぬ上うへん
かひや弓ん矢ん立たん」でいしえー。

〔共通語訳〕

たいそう誠の者がお城に勤めていたそうだが。この
誠の者はお城に勤めていて、このお城からあのお城へ
と言上を運ぶ（仕事で）手紙を持って行く時に、追
はぎがこの人を殺そうとしたので、

「実は私はこの仕事を終わらせてね、これを届けて
戻って報告してから、明日にでも私を殺して下さい」
とお願ひしたらしい。すると追いはぎも、

「そうか、それならそれでよからう」と言うことになっ
たようだね。

「それなら、いついつの月の夜にしようなあ。月の夜
にしようなあ」と相談がまとまったようなんだね。そし
て、御城に戻って行つてから誠な者は、

「実は私はこれこれしかじかで殺されることになつて
います」と御主加那志前に申し上げると、

「ねえ、あなたは誠な者だから絶対に殺されることは
ないと思う。あなたに良い事を教えるから、私の言う
とおりにしなさいね」と言つたらしい。そして、

「太刀を持って行つて月にあてて、お月様に向つてか
まえていたら、相手はかかつてこれないから、その覚
悟でかまえていなさいね」と教えたらしい。言われた
通りの約束の日、月が出た日になり、同じ場所に行つ
てみると、追いはぎも来ていたそうだな。そして誠な
者が、

「さあ殺せ、殺せ」と言つて、太刀は月に向けてかま
えたら刀が照らされているわけ。相手からは見えるさ
あね、月に向つているわけだから。すると追いはぎは
太刀が月で反射して討てなくなり、

「私に勝ち目がないので降参する」とこの追いはぎは
わびたそうだ。その時からだよ、「誠の上には弓も矢
も立たん」と言うようになったのは。

(12) 夫婦の縁

① 夫婦の縁（縁結び）

平田朝昌（明治三十四年生）登川

〔方言原話〕

生まりれーからし、すぐ生まりーるばーうてい、
「誰たれとう夫婦ふうふなりんでい」わかとーんでいんどー。お
ばさんたーやていん夫婦ふうふ夫んうるむんやれし、いつ
べーゆーふわるないんどー。だー私わたくし話はな聞きかへー。

ある所に、一人えー南方みなみんけーなーギンザやーぬ子
やたんでいよー。一人や山原やまはらんけーゆぬギンザやーぬ
子ぬ。一人えー男おとこ一人えー女おんなぬ。南んかい生まりとー
へー男おとこやたんでいよー。山原やまはらんけー生まりとーしえー
女おんなやたんでい。あんさーに、なー、二人妻ふたりつまかめーらん
でいほーかめーふあん、夫ん持たんでいふおー、親おや
ぬギンジャーぬ子なやーに妻さーやうらんやーに。
二人かんしえーならんでいいやーに、家いへから出じやー
に、男おとこ西んかい歩あつちよーるばー。女おんな南んかい歩あ
ちえーくとう、な二人うたやーに、ゆくていしえー

幸一山原 沖縄本島の北部のこと、北部
は、平地地が少なく山が多いので、山原
（やまはら）とも呼ばれる。

くどう。二人ゆくどーるとくるんけー二人まじゆん
いーちよーぎさん。あんしえーくどう、女ん清らかー
ぎーやたんでいよー、ギンザやーぬ子やひー。男ん清
らかーぎーやひが。あんさーに、しえーひが、二人いー
ちよーてい、話しえーくどうな、二人妻ん夫かめー
いがる来い、一人やまた妻かめーいがる来へーやー。
二人清らはんなやーに、うまいーちよーていなー仲
どうやーに夫婦なてーるぐとーん。あんさーに、うま
んかい一夜寝ち家や遺くやーに、生活しえーぎさん。
あんふるうちに二人、かさぎとーんでい女、あんさー
に子産ちしえーくどう、うぬ子ぬ生まりやーに、男子
んでいがらー生まりとーたんでいひが。あとーな、
五ち六ちびかーんなてーぐどう、ちやーしん、たーり
まーりしありそーていやーい、ムヌシリぬ家行じえー
くどう、

「いったーうれー、シジ方ぬ神拝がまちえーねーん
どうあんそーる。シジ方ぬ神拝まし」んでいちえーく
どう。なー男ぬ方んどうーぬ方んけー連てい行きわる
やふえーやー。連てい行かんあるーギンザーどう、ギ
ンザやーぬうの所なやーに、うれー女清らはるあく
どう。な、連てい行けーならんなやーに、な、物思し
どうるばていうてーるば。女ぬ言ろー、

「ぬんでいなーや、あんとどうるばとーが」でいちゃぐ
どう、

「私の一なー実えまーぬまーや、ちやーし、ちやーし
やん」んでい、どうーぬなりゆち語てーるば。うぬ
女んうんねーりーなやーによ、うりん、ギンザやーぬ

子なやーに、二人あんなやーにしえーくどう。
「私たーはたあんなん」でい。
「私たー方あんなやんどうーやー」でい。あんさー二人
夫婦なとーちえーやー。
「生まりれーからー夫婦んで、御天から誰とーなり
んでいあはやー」んでいち、昔ん人ぬ話ぬ、くぬ話あ
てーるばてー。

あんくどう、「夫婦ないへー、ゆーふあるないんどー
やー」でいちぬ話ぬあんなよー。

〔共通語訳〕

生まれると、すぐ生まれた時に、「誰と夫婦になり
なさい」ということが、決まっているそうだよ。お
ばさんたちでも夫婦、夫がいるのなら、たいそう大切
に思った方がいいよ。どれ、私が話を聞かしてやろう。

ある所に、一人は南方に乞食の子がいたそうだよ。一
人は山原に同じく乞食の子がいた。一人は男、一人は
女で、南に生まれているのは男だったそうだよ。山原
に生まれているのは女だったそうだよ。それで、二人と
も妻をめぐりたいと思ってもできず、夫を持ちたいと
思っても親が乞食で、その子どもなので妻になる人も
いなかっただ。二人ともこんなではいけないと、家から
出て、男は西に向って歩いてるわけ。女は南に向つ
て歩いていたらしいが、も、二人とも疲れて、休んで
いたそうだよ。二人休んでいる所が、二人同じ場所に座つ
ていたそうだよ。そうしていると、女もきれいな人であつ
たそうだよ、乞食の子もだが。男も美男子で。そんな



※ムヌシリ 元来は博識を意味した
が、一般に不明な事象についてこれを手
知し、原因を判断する能力を有する呪術
宗教者を称する。

ふうに住んでいたら、二人座って話をしていたので、二人とも妻や夫を探しに来ていて、一人はまた妻を探しに来ていたわけさあねえ。二人ともきれいで、そこに座っていて仲良くなり、夫婦になったようだ。それで、そこに一夜泊まって、家を造って生活を始めたようだ。暮らしているうちに二人（の間に子どもができて、妊娠したようだねえ）が、そして子どもを産んで、その子が生まれて、男の子が生まれたようなんだが、大きくなって、五、六歳になった頃にたぶん（その子に）霊的な災いが起こったんだらう、モノシリの家に行くよ、

「あなたたち、この子は父方の神を拜んでないのでそうなっている。血筋の神を拜まじなさい」といわれたそうだ。だけど、男の方は自分の実家に連れて行かないといけないうえあねえ。連れて行かないわけにはいかないし、乞食の乞食のいる所だから、男の妻はきれいでもあるし（困っていた）。だけど、連れて行かないといけないので、物思いにふけていたようだ。女はずねたようだ、

「どうしてあなたは、こんなに物思いにふけているのですか」というと、（もう、その時ばかりは、自分の素性を語らないわけにはいかなかった。）

「私のところは、実は乞食なんだ」といったようだ。女も同じように乞食の子であることを明かすと、二人とも同じ境遇であることがわかった。

「私のところもそうなんです」と打ち明けると、「私の方もそうなんです」と。それで二人夫婦になっ

たさあねえ。

「生まれたら夫婦に誰となりなさいというのは、御天から誰と結婚しなさいとあるんだねえ」と、昔の人の話、こんな話があったわけさ。

だから、「夫婦になったら、仲良くしなさいね」という話があったよ。

(13) 火の神報恩

① 火の神報恩

普久原幸（大正五年生） 泡瀬

「方言原話」

「いったー家[↑]焼ち」んでい神様から言いちきらつとーしが、そこ行こうとしたら、その人がいい事したから、「いったーむのー焼かんくどう、その代わり村はじしんかい行じやーにや、薬やていん、ぬーていん燃[↑]ざーに火どろーいしよ。これで、あつちは報告はするから」という、こんな話があたんよ。」

「カーミはね、ただは、んーなむのーは置かないで、水ぐわー入とーきよ」といつて。うぬ、うりんかい隠つきーんでい、火の神が。その神がその中に隠れるからね、これ水入れておきなさい。水には火は入らないさあねえ。だから、んなむのー置くなという、このいわれであるよーと聞いたよ。

「これいい事しておかないといけないう」という。どんな厄がきても、はずれるよーといちよーるちむえーてーや。



〔共通語訳〕

「あなたたちの家を焼いてこい」と神様から言いつけられたので、そこに行こうとしたら、その（家の）人がいい事したから、

「お前たちの家は焼かないので、その代わり村はずれに行つてね、藪でも、なんでもいいから燃やして、火事だと呼べよ。これで、神様には報告はするから」という、こんな話があつたよ。

「ツボはね空っぽのものは置かないで、水を入れておきなさいね」といつて。その、からっぽのツボに隠れるそうだ、火の神が。火の神がその中に隠れるからね、これ水入れておきなさい。水には火は入らないさあねえ。だから、からっぽのツボは置くなというの、そういういわれがあるからだと聞いたよ。

「日頃からいい事しておかないといけないよ」という。どんな災難が起きてても、いい事をしていたら外すことができるという意味あいであるわけさ。

(14) 棺桶は黄金

① 棺桶は黄金

西平マツ（明治三十四年生 久保田

普天間に行く橋にね、三人やね越えていよ。この人が箱にね黄金が入ったもんがね。人がや先なつて一人、二人は（箱に入っているものは）死んだ人と思つている。死んだ人思つてね、それから、この人はねもう人間と思つたわけよ。「葬式してやる」言うてね、家にね「かわいそうねこの人はや、親類もうらんしね、一人者、あの道にな橋ぬ外にね死んでおるから、家行つてね葬式やる」いゆうてよ、この箱持つてね、持つて行つたら、開きていね、開きてい見たら黄金なつて、自分の家によ。



五 運命譚

(1) 水の神の運

① 水の神の運

佐渡山ゴセイ（大正三年生）城前

この話はよ、これは、

「あなたは水で、水の中で落ちて死ぬ運命だよ」と言
よったって。「うりがん、あんいちんあみ（そんなことがあるか）」
と言よったけど。外には出さなかつたのか分からんけ
ど、その水の絵にこう顔突っ込んで死んでいたって。
それからよ、「人の運というものは、どこで死ぬと
いう運命がある」というこれ聞いたんだけど。家の、水の絵の中に顔かほを、こうして（突っ込んで）
死んでいたって。どこに描かれている（絵かは知らな
いが）私もこれだけしか聞かんかった。人の、「外に
出したらもう大変」と言って、外には出さなかつたん
でしょう。それが、お家の水の絵のところところで死んでい
たって。

(2) 水の神の寿命

① 水の神の寿命

普久原ウシ（大正二年生）高間良

小さい時に、子どもの時、ユタが、

「何月何日に水に溺れてこの子は死ぬよ」といった
から、「そうかね」といって、そしてみんな親戚中集まっ
て、集まってからこの子どもを囲んでいたって。だ
けど、も、その運命というのは、ほんとにね。昔、茶盆ちawanといつてあつたさーね。湯のみなんか。
「それに、ちよつと水ぐわーたまっている。（その子
は）、それに突っ込んでからにそのまま死んでいたっ
てよー。その茶盆ちawanに顔突っ込んでからに亡くなつたっ
てよー」という話は聞いたけれど。お祖父さんから聞いた。それはもう学校行つていた
はず。

② 水の神の寿命

普久原幸（大正五年生）泡瀬

[方言原語]

運勢をよく見る人に行つて、

「いやーや、やー、くぬうちや何月何日にね水にそう
て死ぬからね、水死するから注意しなさい」と言われ
たらしい。あんさくとうやー、「うれー水んかい行か
んだれーしむくとう」でいやーい、「川んかい、海ん
かいまーんかい行かんしえーまし」でいぬ家んかい

※1ユタ 神がかりなどの状態で神霊や
死霊など超自然的存在と直接に接触・交
流し、この過程で霊的能力を得て託宣・
卜占・病氣治療などをおこなう呪術・宗
教的職務者。大部分が女性である。
※2茶盆 湯飲みなどを入れる容器。



かくまと一たんでい。あんざーにや、
 「誰がん外んかい出じやすなよー」んちしえーたぐ
 とう。しばらくして見て見たらね、この人はね屏風に
 水の流れるかたがあつたつて。うりんかいうつちやか
 やーに死じよーたんでい。

〔共通語訳〕

運勢をよく見る人に行つて、

「あなたはね、近いうち何月何日にね水に溺れて死ぬ
 からね、水死するから注意しなさい」と言われたらし
 い。そうしたら、「それなら、水のあるところに行か
 なければいいから」といつて、『川や海など（水に閉
 わる）所に行かなければいい』と家にかくまっていた。
 そしてね、

「誰も外に出すなよ」と気をつけていた。しばらくし
 て見に行つたら、この人はね、屏風に水の流れる絵が
 あつたつて。それにもたれかかつて死んでいたそう
 だ。

(3) 十五夜由来

① 十五夜由来

平良キヨ（宇栄原カマド）（明治三十九年生） 越来

〔方言原話〕

八月ぬ十五夜に、男どうしぐわー三人並でい歩ちゆ
 たんでい。さくとう、真中ぬ一人や、なー、むるうら
 んなてい、かーがーや写らんたんでい、真中ぬ一人や。

さくとう、ある友達がや、

「よー、今日や、やー、いやー、家かいや、うっかり
 しえー入んな、よー」でいさくとう、

「ぬーが」んちやぐとうや、

「いったー家ねーや、や、いやーが好かん人ぬうくとう
 や、入ちえーならんぞー」でいさくとう、

「いやーや、家かいらーや、入にや弓引ちからや家
 かいや入りよー」でいちゃやんでい。うぬ引くん

でいしんじこー問題やいぎさんぞー。さくとう、うぬ
 若者や、どうーぬうちよー外から遊でい入ちちゆうん
 ぞー。くぬ女が、やー、自分ぬ家ぬ戸欄ぬ中に、やー、

うぬ男かじみてーたんでい。あんし、うぬ、男ぬや、
 うま、むこーから弓やらちやぐとうや、戸欄ぬ中にう

ぬ男んかいたていや死じよーたんでい。うぬ意味や
 んでい。

あんしるや、八月ぬ十五夜や、家ねーてー遊ぶぬむ
 のーあらん。外かいてい遊でい月見しーが出じー
 でいちぬ意味やんでい。

〔共通語訳〕

八月の十五夜に、男友達三人並んで歩いてたそう
 だ。すると、真中の一人はいないかのように、影が写
 らなかつたそうだ、真中の一人は。すると、ある友達
 がね、

「ねー、今日はね、お前家にはいつものようには入る
 なよ」といふと、

「どうしてだ」と聞き返すと、



「お前の家にはな、お前が好きでない人がいるから、いつものように入ってはならないよ」といった。

「お前は、家に入るならば、入る時には弓を引いてからね家には入りなさいね」ということになった。その弓を引くというのも、たいそう問題ではあったそうだが。その若者はね、世もふけてから外で遊んで家に帰ろうとするんだよ。男の妻がね、自分の家の戸棚の中にね、他の男を隠していたそう。それで、その、夫なる者が、外から弓を放つたら戸棚の中の男のあたり、その男は死んでいたそう。だ。弓を放つてから入りなさいというのは、そういう意味だったらしい。

それでね、八月の十五夜は家の中で遊ぶものではない。外に出て遊んで月見しに出なさいという意味だそう。

(4) 扇子の寿命

① 扇子の寿命

桑江朝盛（明治四十五年生）中の町

「方言原語」

モノにはなんにも寿命とあるという話。ある所にね、易者から、

「あなたが持つておる扇子はね、何日の何時までしかこの寿命はない」と。人の寿命でないよ、扇子のモノの寿命よ。

「これは嘘である」と言つて。その持つている人は毎

日の仕事から、うんと毎日働いて、もう日雇いなんかいうと働かないといかない家柄だった。言われたもんだから、昼のたいがいもう十一時ぐらいと例えて、

「十一時にはもうこの扇子はなくなるね」と言つたら。「まさか、これが、こういうこともあるか」と天井から吊り下げてはたけて、自分は寝て時間待つておるわけさ、時間を待つておるわけ。で、その時間になつたもんだから、家内が、

「今日働ちがーさん、ぬーがうんぐとうーそーる。うぬ扇ぐわーが見ちきてい、やーさるしみーる、人やーさしみーねーちゃーすが」んでいち。さくとうよー、すぐ来てね、

「扇びかー見ちきてい仕事けーかい行かん」でいち、しく、うぬ扇ふいつちち捨ていたんでいよ。その時間がね、びつたりおうておつたつて、それが。「そういうこともあるかと」言つて。なーいつそー仕事かい行じ、仕事さんあれーでーじないるとうくるやし、なーうりとうかーきーし。ピツタリあつたつておつたつてよ、負けたつて。

夫は、「まさかそういうこともあるか」と言つてぶら下げたら、誰がさわらんようにね下げて。これ、下げたらどうにもないでしょう。そして、仕事毎日行つておる人が、仕事行かないもんだから、妻が怒つてきて、扇を見つけたものだから、すぐ破つて寿命も終わらさー。



〔共通語訳〕

モノにはなんにでも寿命があるという話。ある所にね、易者から、

「あんたが持つておる扇子はね、何日の何時までしかこの寿命はない」と。人の寿命でないよ、扇子のモノの寿命よ。

「これは嘘である」と言つて。その持つている人は毎日の仕事から、うんと毎日働いて、もう日雇いなんかいうと働かないといかない家柄だったつて。もう（易者に）言われたもんだから、昼のたいがいもう十一時ぐらゐと例えて、

「十一時にはもうこの扇子はなくなるね」と言つたら。「まさか、これが、こういうこともあるか」と天井から吊り下げて広げて、自分は寝て時間待つておるわけさ、時間を待つておるわけ。で、その時間になつた時に家内が、

「今日は働きにも行かないで、どうして寝そべつているのですか。その扇を見つめて（私達に）ひもじい思いをさせるのですか、私達にひもじい思いをさせたらどうするんですか」と言つて。すると、すぐ（妻が）戻つて来てね。

「扇ばかり見つめて仕事には行かないで」と、すぐその扇を破つて捨てたそうだよ。その時間がね、（易者が言つていた時間と）ぴったりおつておつたつて、それが、『そういうこともあるか』と言つて。もう、いつもなら仕事に行つて、仕事をしなければ大変なことになるところだが、だけど、易者とかけをしていたの

で。ピッタリあたつておつたつてよ、（それで、その男は）負けたつて。

夫は、『まさかそういうこともあるか』と言つてぶら下げたら、誰もさわらんようにね下げて。これ、下げたら、どうもありません。そして、仕事毎日行つておる人が、仕事行かないもんだから、妻が怒つてきて、扇を見つけたものだから、すぐ破つて寿命も終わらさー。

六 呪宝譚

(1) 犬と猫と指輪

① 犬と猫と指輪

島袋次郎（明治三十四年生） 知花

「方言原話」

昔よ狼ぬ三枚銭んち。じこぬいーどうしやるばーてー。一人やてーげーやあい、一人やじこぬヒンスー者やるばー。あんざぐとどう、くぬ狼ぬ嬪子わらばーたーがかんし水ぬみーかいーがさーし、ありすし、けー助きやーによー。うりから、くぬ助きてーる狼ぬ、

「ぬーやましやがいーらすしが」んでい、

「狼ぬ三枚銭いーみしえーんどー」でい。あれー、銭のーなしとろーしーすくとどうてー。銭のーなしとろーしーすくとどう、銭箱ぬ下うとてーい銭のーなしとろーしーすくとどう。

「狼ぬ三枚銭、ぬーぬ宝やかんやうりどうましやくとどう、うりどういーみしえーんどー」でい、助きていやる狼ぬ言ちよーるばー。あんざぐとどう、

「えー、あんやんなー」んち。

「ぬーまし、いやーがましやしーらすしが」んでい言ちやくとてー、

「あ、私んねーなー狼ぬ三枚銭どろーいーやびーる。な、うれー狼ぬいーらさん考やてーるばー。あんしがなー「うりどいいーる」でいちゃぐとどう、「いやーがましや

しいーらすん」でい言ちよーしえーやー、うりいーらちえーるばー。な、金庫の底うとてーい銭かんしなしとろーすくとどうて、エーキそーるばーてーくぬ人、あんざぐとどう、どうしぬやー、

「いやー、ちやーしエーケーさが」んでい。

「私ねー狼ぬ三枚銭でいしけーいーやーにどう。狼けー助しきやーに、あんし、かんしエーケーほーんどー」でい。

「あ、うれー、ぬー、ちやーしぬやーが」んでい、

「銭箱ぬ下うとてーい、銭なしとろーしーすくとどうてー、あんしる、エーキなとーる」んでい。

「あ、うり、私にんかい借らはんなー」んち。

「いー、ぬー、なー私ねーうっさもーきてーくとどうからふさ」んち、貸らちえーるふーじやん。離りとーるばーてーちねーや。あんざぐとどう、

「持ちくー」んちん持ちえーくーんぐとーん。あんざぐとどう、マヤーとどう犬とどうやらさつてーるばー。

「行じ取てい來」あんざぐとどう、

「おー」んでいち行じやくとどう。今度床さんじ、かんしいーちよーしが、なかなか分からんしえーやー。エンチユぬはつちやくとどう、マヤーぬ取かちみやい、やー、

「どー、銭箱ぬ底なかいや、狼ぬ三枚銭ぬ入ちよーくとどう、うり取ちゅーらーすむん。取てーくーんあらーなまうちゆ喰いんどー」でいちゃぐとどうや、

「あはー、私が取ちやーびーん」んち、エンチユぬカチカチしふがさーに、うぬ狼ぬ三枚銭のー取ていちマ

呪宝譚 昔話には、いい事をした褒美として宝物を得る話で、その不思議な力で幸せになる。その宝を「呪宝」という。神や動物から与えられることが多い。

「ヤーんかいどうらちよーるばー。港みなとぐわーから越こに、やー、

「いやーや、口ぬいんちやさぬや、私わたしんぬんかい取とらんさんね、うぬ、じんきよーしえーならんどー」でい

ちやくとどうて、

「えー、あんやんなー」でい。

「私わたしねー口長くちながさくどう、私わたしにんかいくいり」んでい言

ちやくとどうて、

「えー、あんやみ。うり」んちどうらちやるむの、

「あんしえーうり、けー落おどうちえーならんどー」ん

ちやくとどう、

「おー」んでいやーに、口くちえけーふらちやーに、けー

落おどうちねーらんやー、港みなとんけー。港みなと潮うしほちよーい。

「な、ぬー、うれー、いちよーたんでーねーんむんぬ。

私わたしねーいーじふあいん」ち犬いぬふあちよーるばー。あ

んさくどう、マヤーやいちよーていや、いちよーてい。涙なみだ

ボンボン落おどうちよーるむんぬ、アカグチャー魚いさなぬか

ん飛とんじさくどうて、どうつかちみやーによ、あんさー

に、

「どー、うぬうぬ狼おおかみぬ三枚さんまい銭ぜにいやーうまや取とていくわーし

むいや、取とてーくーんあらー、今いま私わたしがかん殺ころすんどー、

うちゆ喰くいんどー」でいちやくとどうやー、

「取とていやーびーん」ち、あんさーに取とていつちよ、

あんし取とちえーるふーじやん。あんさーにマヤーや

どうー一人ひとりあとうからいーじ行いじよーるばーてー。

あんしえーくどう、今いま度ど主人しゅじんのーや、すぐなー犬いぬ

「狼おおかみぬ三枚さんまい銭ぜにぬん港みなとんかいもーらさーにや、あんし、あまんじ泣なみだちやびーたしえー」でいち、犬いぬな一クワツ

チーしみらつとーるばー。あんそーしが、マヤーやあ

とうから狼おおかみぬ三枚さんまい銭ぜにぬんくーやーにいーじ家いえんかい、来

るばーてー。あんさくどう、

「かねーる者ものぬや、うり落おどうちえーならんどーん

ち、おーんでいいやがちーな、ちよーどう口くちえふら

ち、けー落おどうちや。あんし、いーばー私わたしがアカグ

チャーイユぬ飛とんじさくどう、うりかちみやーに、う

りが取とていちどうらちる持もちえーびーる」んち。

「えーあんやみ。えー、あんやらーしむん。いやーゆ

くしむにーし、あんしるむのしーくわいんな」でい

いち、主人しゅじんなかいうわーていよー。あんさくどう、

「いやーぐとーるむの、私わたし殺ころしみらんでいさんやー」

んち、なーちやや追おとーるばー、犬いぬなけー。あんすく

どう、家いえめ前まへなかい、豆まめ干かりゆーたんでい。赤あか豆まめぬ干か

りとーたんでいよー。あんしえーくどう、うまから追お

ていちゃーに、マヤーやうぬ豆まめかからとん越こやーに、

飛とぬじはちよーいや、犬いぬうんかいかくんしじらかさー

に、くるでいよ。あんするえーかねー、犬いぬ、マヤーけー

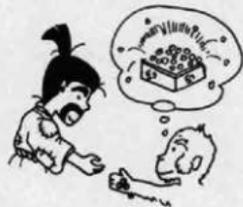
ひんぎてい。あんし、あぬマヤーや、やー、豆まめくわー

んたんでい。うぬ話わやるばー。

〔共通語訳〕

昔むかし狼おおかみの三枚さんまい銭ぜにというのがあつた。たいそう仲なつのよ

※アカグチャー フダイ科、ハゲフダイ
イモアカグチャダゴ。特徴は歯は白く、
口のまわりは赤く、体は全体に赤褐色の
まだら斑。



びをしている時に（溺れているのを見た貧乏者が）助けてあげたそうさ。それで、その助けられた狼が、「なにがいいですか、お礼をしたいのですが」と、言ってきたそうさ。

「狼の三枚銭をもらって下さいね」と。それは、銭をどンドン出してくれるのでね。お金を出してくれるので、銭箱の中でお金を出し続けるので。

「狼の三枚銭というのは、どんな宝より方がいいから、それをもらうんですよ」と、助けてあげた狼が教えてくれた。それで、

「ああ、そうですか」と。

「何が欲しいですか。あなたが欲しいものをあげますか」と言うので、

「あ、私はもう狼の三枚銭が欲しいです。だが、これは狼はあげない考えでいたようさ。だけど「それが欲しい」というので、「あなたが欲しいものをあげます」と言ったわけだから、それをあげたようさ。ね、金庫の底でお金はこう増え続けるわけだからね、金持になつたそうさ、貧乏者だった人は、すると、友達がね、「あなたはどうかやって金持になつたんですか」と聞いたようさ。

「私はね狼の三枚銭というものをもらったおかげですよ。狼を助けたので、その時にそれを持ち金持になつたんだよ」と。

「あ、それというのは、どんなものなのか」というので、「銭箱の中で、お金がどンドン出てくるので、それで、お金持になつたんだよ」と。

「あ、それ、私に借してくれないか」とお願いした。

「はい、それは、もう私はこんなにもうけたので、貸してあげよう」と、貸したようさ。（友達とは）離れているわけさあ、家が、それで、

「狼の三枚銭を返してくれ」といつても持つてこなかったそうさ。そこで、猫と犬に取り返すように使いにやつたようさ。

「行って取つてこい」と。すると、

「はい」と返事して行つたようさ。そして床下で、こう座つて様子をつかっているが、なかなか探すことができない。（そこに）ネズミが来たので、猫がとつつかまえてね、

「さあ、銭箱の底に狼の三枚銭が入っているからそれを取つてきたら許す。取つてこないのならすぐに喰つてしまふぞ」といつたらね、

「ああ、私が取つてきます」と、ネズミがカチカチと穴を開けて、その狼の三枚銭は取つて来て、猫に渡したようさ。港から越えるときにね、（犬が）、

「お前は口が短いので、私に渡さなければ港を越えることはできないよ」というと（猫は）、

「ああ、そうか」と。（犬は）、

「私は口が長いので、私が持とう」といつたのでね、

「ああ、そうか。ほら」と（猫は）渡して、

「それならこれを、落としたらいけないよ」というと（犬は）、

「はい」と口を開けてしまったひょうしに、（狼の三枚銭を）落してしまつたようさ、港に。港の潮は満ちて



いるし。

「もう、これは、すわつていてもどうしようもないことだ。私は泳いで帰ろうね」と犬は行ったようだ。だけれど猫はすわつていてね、すわつて涙をボンボン落としていたら、アカグチャーという魚が(猫の前から)飛んだので、とつつかまえて、そして、

「さあ、その猿の三枚銭を取ってきたら生かしておくけどね、取ってこないなら、今、私がかみ殺してやるぞ、喰つてやるぞ」といったらね、

「取ってきます」といつてね。そして取つてきてね、そして渡したようだ。それから猫は自分一人、あとから泳いで行っているわけさ。

そしたら、今度は、主人にすぐ犬は、

「猿の三枚銭を港に落としてね、そして、あそこで泣いていましたよ」と話して、犬はご馳走を食べさせられていたわけ。そうしていたら、猫はあとから猿の三枚銭をくわえて泳いで家に来ているわけさ。そして、「こいつが、猿の三枚銭を落としたらいけないよ、わかつたど返事をすると同時に口をあけてしまし落としてしまつてね。だけど、いい具合にアカグチャーイユが飛びはねたので、それをつかまえたなら、それが取つてきてくれたので持つてくることができました」と。

「ああそうなのか。そういうことならわかつた。お前はウソをついて、そうやって無責任なことをするのか」と言つて、主人に追われたそう。そして、

「お前のようなやつ、私を殺させようとしたな」と、翌日(猫は)追われているわけ、犬に。すると、家の

前に豆を干していたそう。小豆が干されていたそう。干されていたので、そこから追いかけてきたので、猫はその豆の上から飛び越えて、飛んで逃げて行ったが、犬は豆ですべてしまし転んでね。そうしているうちに犬は猫に逃げられてしまった。それで、あの猫はだね豆は喰わなくなったそう。そういう話なんだ。

(2) 塩吹き白

① 塩吹き白

仲宗根盛雄(明治四十三年志 豊川

大変貧乏な家があつたが、この家に神様が年ぬ夜の日に来て、

「泊めてくれ」と言つたら、

「もう、年ぬ夜というものは、ムヌクチャー(物乞い)、ギンザチャー(乞食)がでも人(の家)には泊まらないうが、どうして、こんな年ぬ夜に来たかねえ」と言つたら、

「もう、行く所もないから泊めてくれ」といつて、ある年寄りのヨチヨチした人がこの貧乏の家に来たから、

「も、寝る所も作れない」という貧乏だがね、年寄りが来たから、

「も、こんな家でも、年ぬ夜でもあるが、こつちは何も無いが、こつちにも泊まつて下さるか」と言つたら、その年寄りは、

「ああ、もう、すまないが泊めてくれ」といって、その年寄り、この貧乏の家に泊まった。泊まったら年ぬ夜だからといっていろいろな話が出て。

「こつちはなにもない。また、寝る所もないが、も、我慢してくれ」と、この年ぬ夜は話をやったが。

「あなた方はこんな貧乏だが、私はあなたがたになにも情するものがないが、この石臼、あなたの石臼は、これは右に（回して）何が出てくれと願つたら何が出る。また、左に回したら何が出るから、私が言つたように正月にはやりなさい」と、そう言つて一緒に泊まつてやったが、夜明けには泊めた所から、この年寄りはいなくなつてた。そのいなくなつたから、この貧乏の家庭はもう、

「珍しいもので、何もあけなくつて、泊まる所も汚い所に泊めたから、また、いなくなつて。もう、汚いから逃げたんでしよう」と言つて心配したというが。

「この人はこう言つたから、まず、この臼をめぐら（まわ）してみよう」といって、めぐらしたつと、それが言つたとおりよ。めぐらしたから、ご馳走も出るし、お金も出るし、また、今度は何でも自分の願ひは出るから、も、こんな上等なことはない。この臼はもう、自分で大切にやつたそう。だから、また、これを、こつちがもう大変な状況になつたから、ある日、欲張りの人が来て、

「あなたがた、こんなに急にもうけたが、どういうふうふうにもうけたか」と、で、言つたら、

「ああ、なんだか、何も得体のわからない人が泊まつ

て、この人を泊めたから、こういうことを教えたから、もう、珍しくつて、ほんとに、こんなこともあるかと思つているよ」と言つたから、この人は、

「ちよつとこの臼を貸してくれないか」といつたから、

「あ、これは貸してはいけない」と、

「いつときだから貸してくれ」と言つたから。この人は塩がなかつたそうだよ、この時は、貧乏になにもあるが、塩はなかつた。今度、これが塩がないが、

「塩出るかね」と言つたから、塩をどこの方にまわしたら出るかと教えたから、出ると。だが、止めるものは知らなかつた。どういうふうにもぐらしたら止まる。それがわからなくつて、めぐらしたから、もう、塩でいっぱいになつてね、あふれてしまつて。も、止められなくなつて、これが海に流れてから海の潮は辛くなつたという。これ、おとき話はずよ。

② 塩吹き臼

佐久田千代（大正七年生） 室川

「方言原話」

「嬢子えあんずかー親ぬ孝しーうーさん。じこーまんどーんでいしがてー、ちねーや。あんしが、女ぬ親ん病氣さくとう、

「ぬーんかむしえーねーらんむん、うふえー分きていとうらさんなー」しーじゃぬ家んかい行じやくとう、いかなしん分きてー取らさんなやーい、なー、ガツクリし家かい備てい行ちゆしん行からんしえーや。行じやんでーなー煮ちうさぎーしんねーらんむんでい



※ 石臼
臼は穀物を研いで粉にする道具

ち。あんされ、途中うていや、足ん重さぬな、うまんかいゆくていから行かる物考んないがすらんちそーしが、雨ぐわぬ降たれ、けー寝んていよ、うまうてい。あんされ、髭んパーパーそーるおじーが夢ぬ中んかい出じてい來に、

「くぬ白や持ち行じやーにみぐらしーねーや、ぬーん出じーん、また左んかいみぐらしーねーぬーぬ出じーんでいち」。ざくとう「あんやがやー」んでいちて、「本当やがやー」でい思むやがな一目や覚みたれーな、うぬおじーうらんなどーしそーや。あんさーに、うり持ち行じやーに、したくとうて、な、ちやー米どう欲さしそーや。あん右んかいみぐらちえーんで。あんされ、んじゆみてい米ぬ出じやーに、ふしがらんあたいたいエーキンチュなていやーな、ふしがらんあたいたい。あんさーにな、

「ぬーんちいやー、あんしエーキそーが」でいちゃくとうて、

「あんし、うんぐとうり、うんぐとうりし兄さんたーから戻やー、あんし、家かい歸てい行ちーに、雨ぬ降たれ、道ぬ側ぬガメ下んじ雨ぐわー晴らち座れーえーか、二ーブイさくとうり、やるとうりい言ちえーんてい。

「うぬ白おじいさんか買やーに、や、あんし、うり持ちつちありさーに、うりからあんし出じー」んちやぐとうや、

「あんやんなー」でいいやーによ。兄さんはまた欲じゆーさしそーや。な、自分やかエーキなてい

うしそー。あんさーに今度、うりが寝んじふりとーいにより、盗みどうすんで。盗まーにより、海んかい船ぐわー浮きてーしそーや。うりから持ち行じやーにより、したたか出じやすんでいいやーに、したくとう、まーんかい回らちんがしむらーわからん。左んかい回んぐわちえーんで。あんされ、塩ぬ出じてい、な、あんりるか出じやーに沈じゆまーにや、あんさーに、うぬ塩ぬどう出じゆーさぬ潮などーんでい。

船と一緒沈んでしまった。欲が出て、も、泣いても泣いてもたまらんさーねえ。これが、涙なつて「悪いことさんでーれーやー命んあてーしがやー」んちよーるふーじーし、なー悔やでい、ちやー泣ちし、あんしうりがるや潮などーんでい。あんしる、うぬ涙塩じゆーさんでいど。

〔共通語訳〕

嫡子はそんなにまで親孝行できない。たいそう（お金は）あるというんだがね、その家庭は、そんな中、母親が病気になるので（次男が）、

「何も食べるものがないので、少し分けてもらえませんか」兄さんの家に行ったら、絶対に分けてくれないので、もう、ガックリして家に戻るのも（気が重たかった）。そのまま帰ることもできないでしょう、帰ったとして煮て差し上げるものがないからと。そう思いつつ、家に帰る途中で足取りも重く、そこに休んでから帰ればよい考えも思いつくかもしれないと（少し休む



ことにした)。雨が降ったら寝てしまったそうだが、そこで、髭もボウボウしているおじいさんが夢の中に出て来て、

「この臼を持って行って回すとねなが出る。また左に回すとねなが出る」と。すると、「そうかなあ」と思つてね、「本当のことだろうか」と思いながら目が覚めると、もう、このおじいさんはいなくなっているさあねえ。それで、その臼を持って行って（言われた通りに回）したらね、もう、いつも米が欲しいさあねえ。そこで右に回してみたようだ。すると、たいそうの米が出て、計り知れないくらいに金持ちになつてね、言葉にできないくらい。そこで（兄さんが）、

「どうしてお前は、こんなに金持ちになつたのか」と聞くので、

「このように、これこれ、しかじかで兄さんたちからの歸りに、その家に戻る時に、雨が降つたので道の側の洞窟の下で雨宿りをして座っていたら、眠気がして……、正直に話したんだろかねえ。」

「その臼をおじいさんから貰つてね、すぐ、それを持ってきて言われた通りにすると、望み通りものが出るんですよ」といふとね、

「そうなのか」といふてね。兄さんはまた欲が深いだるう。もう、自分より金持ちになつていけるわけだから。そこで、今度は弟が眠りこけているときに、（臼を）盗んだようだ。盗んで、海に船が浮かんでいるでしよう。船に臼を持って行ってねたくさん出すといふて回すと、すると、どこに回していいのかわからない。左

に回したんだろかねえ。すると、塩が出てねえ、もう、船から溢れるくらい出て、船が沈んでしまい、それでその塩が出すぎて潮になつていそうだ。

（兄さんは）船と一緒に沈んでしまった。欲が出て、も、泣いても泣いてもたまらなさんあねえ。これが、涙なつて「悪いことをしなければね、命を落とす事もなかったはずなのに」という具合で、もう、悔やんで、ずつと泣き続けて、それでね、兄さんの流した涙が潮になつているそうだ。だから、流す涙は塩からいということだよ。

③ 塩吹き白

上根ウサ（明治三十一年生）富里

「方言原話」

兄さんの「エーキンチュなやーに、また弟おヒンスームンなやーに。あんざーに、な、夫婦妻んかい、（しよくとま）「正月んなてい来るむん、兄さんぬ家んじ一応米借ていくーいー」んでいち、カグぐわー持ち米借いが行じやぐとらう、

「いやーやヒンスームンぬうり貸らちえーとらうしうーすみ。ならんざー」でいやーに、（あはれ）「泣り泣く泣く家んかい行ちやーに。な、夫婦火正月しーねー、助きやーおじーが家ぬ壁叩たちやぐとらう、

「たー」んでいち出じたぐとらう、

「だー、道ん暗らさぬ歩かららん。一晚のーうまんかい泊まらし」んちやぐとらう、また、うぬお父や、

「私たー、あね、ぬーんねーやびらんどー。泊まらす



くとーないびーしが」

「いー、私ねムン喰まんていん一晩泊まれーしむくとう」んでいいやーに、夫婦火ぬくでいいちよーるとうくるんかいめんそーち、

「とーや、いったや、あんやらーや、白えねーんな」でいいちやぐと、

「白ねーやびらん」

「隣んじ借ていくーわ」んでい、隣んじ借ていちゃーにしちやぐと、

「と、くぬ、白や、お菓子出る出る、また、お金出る出る。右んかい回しえー出じーしが、左んかい回しえー出じらんくとう、とーあんち、し、よー」でいいちさくとう。なーあんさーにエーキさーに、また兄さのー

「くぬひやーや、ぬーんでーエーキそーがやー」んでいち間いが来くとう、

「あん、あんやたんどー」でい。あんさーに、「一回のーうりが寝んとーいに盗ていきわるないど」でいいちさーに、「白え盗まーなかい、伊計と、ハナリとうえーがやらー船ぐわーんかい乗しやーなかいな一ふちえーぐと。船ぐわーなかい乗しやーな行ちーねー、しぐ、ジャブ ジャブ ジャブーし、なー塩がいつばいなやーに、

「助けていくれー」んでいちんねー、しんちやたん

〔共通語訳〕

兄さんは金持ちで、また弟は貧乏者であった。そこでね、もう、(貧乏者の)夫婦の(夫が)妻に、

「正月が近づいてきたので、兄さんの家に行つて一応米を借りてこようねえ」といって、カゴを持って米を借りに行つたら、

「お前のような貧乏者に米を貸そうものならそれを返すことができるのか。できない」と断られたので、哀しくて泣く泣く家に帰つた。仕方がないので、夫婦火正月をしていると、助けてくれるおじいさんが、家の壁を叩いたいたので、

「誰か」と出てみると、

「もう、道も暗く歩くことができない。一晩はそこに泊めてくれ」とお願いするので、また、そこのお父さんは、

「私たちはなにもありませんよ。泊めることはできませんが」

「うん、いいですよ。私は何も食べなくても一晩泊まるだけでいいですから」といって、夫婦が火で温まつて座っている所にいらつしやつて、

「さあ、それなら、あなた達はそういうことなら、白はありますか」と聞くので、

「白はありません」

「隣で借りてきて下さい」と(言われたので)、隣に行き借りてきたら、

「さあ、この白はね、お菓子出る出る、また、お金出る出ると右に回わしたら(欲しいものが)出るが、左

に回らずと出ないので、さあ、そうやって使いなさいね」と教えてくれた。そうやって(弟が)金持ちになつたので、また兄さんは「こいつは、どのようにして金持ちになつたのかねえ」といつて聞きに来たので、「これ、これ、しかじかでしたよ」と(話した)。すると、

(兄さんは)「一回はこいつが寝ているときに盗みに行こう」と思つて、白を盗んで、伊計島とハナリだったのか船に(白を)乗せていったぞうだ。(白を)船に積んで行って(塩が出る)と回したんだらうね)すると、すぐ、ジャブ ジャブ ジャブと塩が(船の)いっぱいになつて、

「助けてくれ」と叫びながら、海の中に沈んでいつたぞうです。

(3) 黄金犬

① 黄金犬

上根ウサ(明治三十一年生) 宮里

〔方言原語〕

男^{おとこ}子^こ大^{おほ}家^やな^なや^やーにや金持ちなてい、また親病^{おやぢぢやまい}でいん見^{けん}だぬ^ぬ、くれ^れ。あんさ^{あんな}ーい弟^{あに}お、ちや^{ちや}ーな^な親病^{おやぢぢやまい}むんでーしわすてーや。あんさ^{あんな}ーに、

「ど^どー、くぬうちえ^{くぬうちえ}ならんくどうや、お父^{おや}が亡^なざわや、いや^{いや}ーやヒンス^{ヒンス}ームぬぬ^{ぬぬ}ーんね^{ーんね}ーんくどう、線香^{せんかう}とう酒^{しゆ}とうさざりよ^ー」んでいいや^ーに。あんさ^{あんな}ーな^なかい、

「兄^{あに}さん、お父^{おや}や、な^な、百^{ひゃく}歳^{さい}余^まていめん^{めん}そ^そーち^ちうら

んど^{んど}ーんちやく^{やく}くどう、二^{ふた}人^{にん}片^{かた}付^けきや^やーに。また、弟^{あに}お、酒^{しゆ}ぐわ^わーとう線香^{せんかう}とう持^もち、家^{いへ}んか^かい^いちや^やーうさ^さぎが来^きに、

「いや^{いや}ーぐど^どーる者^{もの}ひや^やー、ちや^{ちや}ーひや^やー、うぬ線香^{せんかう}とう酒^{しゆ}ぐわ^わ、ぬ^ぬーやがひや^やー、クワツチえ^{ちえ}ーすがてー来^きなひや^やー、うまかい来^きならんぞ^ぞー」んちやく^{やく}どう、「いえ^{いえ}ー、あんす^{あんす}んな^{んな}ーんでいあ^あーに、な^な、御^ご幕^{まく}んかい通^とていあ^あつち。四^よ十九^{じゅう}日^{にち}ぬ日^{にち}や、御^ご幕^{まく}んうさ^さぎや^やーに、後^{あと}ろなていち^ちーね^ね、犬^{いぬ}ぬガツ^{ガツ}テイか^かさ^さい、驚^{おどろ}ちやるむ^むんぬ、な^な、うぬ犬^{いぬ}ぬ糞^{ふん}な^なぶい、足^{あし}なぶいさ^さーに、「お父^{おや}霊^{たま}がやら^らーわからんむ^むんぬ、家^{いへ}んかい連^つてい^いき^きわな^ないる」んでい^いちや^やーに。

あんさ^{あんな}ー、一^{いち}合^がかむ^むるム^ムノ^ノ二^{ふた}人^{にん}う^うちか^かま^まーな^なかい。な、う^うりが便^{べん}するむ^むの^の一^{いち}む^むる黄金^{こがね}な^なや^やーに、エ^エキ^キさ^さーに。あんさ^{あんな}ーに、「くぬひ^ひや^やーちや^{ちや}ーしえ^えーエ^エキ^キそ^そーがや^やー」んでい^いち、またし^しーじ^じや^やー来^きに、

「ど^どー、あん^{あん}う^うてい^いや、な^なーやう^うま^まうさ^さざら^らさ^さな、私^{わたし}の^の一^{いち}御^ご幕^{まく}んか^かい^いちや^やー行^いじ^じさ^さーに、犬^{いぬ}ぬ御^ご幕^{まく}んから、お父^{おや}霊^{たま}がやら^らーさ^さーに、私^{わたし}の^の一^{いち}家^{いへ}んか^かい^い連^つてい^い行^いじ、一^{いち}合^が煮^にるむ^むん二^{ふた}人^{にん}か^かま^まー、う^うりが尻^{しり}か^から出^でじ^じるむの^の一^{いち}黄金^{こがね}や^やた^たんど^どー。あんさ^{あんな}ーに、私^{わたし}か^かぬ^ぬ一^{いち}金^{かね}持^もちや^やんぞ^ぞー」

「ど^どーあんさ^{あんな}ー、うぬ大^{おほ}貧^{ひん}ら^らちえ^えー」んちやく^{やく}どう。「あ^あんね^ねーる者^{もの}ぬ一^{いち}合^がく^くい^いるむ^むの^の一^{いち}、私^{わたし}の^の一^{いち}一^{いち}升^{しやう}く^くい^いるする」生^{せい}ち虫^{むし}どう^{どう}やく^{やく}どう、一^{いち}升^{しやう}ん^んく^くい^いや^やーな^なかい、な、プ^ぷー^ーラー^{ラー}な^なてい^い死^しに^にや^や。

あんさ^{あんな}ー、また弟^{あに}や、

※1一合 容量の単位、一升の十分の一。
 ※2エーキ 金持ち、富、富裕の人、車をさす。
 ※3一升 容量の単位、一斗の十分の一、一合の十倍。



「だー兄さん、犬^{いぬ}。持ていち死な^ちーなかい、捨てい^ちー草んモ^も。」

「兄さん、な^い、犬^{いぬ}持てい行^いか」ちやぐと、

「ぬ^いが、いやー犬^{いぬ}。私^{わたくし}が一^い升^{しやう}な^いム又^{また}くいてい、黄金^{こがね}出^いじやさんむん。な^いれ、あまんかい捨^すていてい^いさんでい。あまんじ取^とりや^いにや庭^{にわ}な^い埋^うみてい^いさん。あんさ^い九年^{くわんねん}母^ぼ木^ぼ植^ちや^いに。だ、うぬ^{うぬ}九年^{くわんねん}母^ぼ木^ぼゆ^いくないなや^いに、な、買^かい^いん来^きい^いや。親^{おや}孝^{こう}行^{こう}な次^{つぎ}男^{おとこ}。

八月^{はちがつ}え黄金^{こがね}ぐる^い、私^{わたくし}達^{たち}う^いり^いど^うう^いさ^いぎ^いん^いど^い。
まぎ^いや^いう^いさ^いぎ^いらん^いたん。まぎ^いぐる^いも^いや、うれ^い、
みやりえ^いる。うれ親^{おや}孝^{こう}行^{こう}ぬ^い者^{もの}やくと^う、うり^いる^いう^いさ^いぎ^いて^い、まじ^いよ^いん^いし^いぎ^いん^いど^い。

〔共通語訳〕

息子は大家に住むくらいの金持ちだが、だけど親が病に伏しても世話をしない、この息子は。そうだけど、弟は、いつも親が病でいるといえは心配していた。そんな中、

「ねえ、今度ばかりは治りそうもないので、私が死んだら、お前は貧乏者で何もないので、線香と酒をお供えしなさいね」といわれた。そして、

「兄さん、お父さんは百歳をこして亡くなりましたよ」といって、二人で葬式もすました。そして、弟は酒と線香と持って、家にいつもお供えに行っていた。(すると)、

「お前のようなやつは、いつも、その線香と酒ばかり

(持ってきて) どういうわけか、ご馳走を準備してこないで、ここに来てはいけないよ」というので、

「ああ、そうですか」といって、(それからというもので) 御墓に通っていた。四十九日の日は、御墓にお供えして、(お墓を) 後ろにしていたら、犬がガバツと出てきたので、驚いたものの、その犬が着物にまとわりついたり、足にまとわりついたりするので、『お父さんの霊かもしれないから、家に連れて行かなければいけない』と、連れて帰った。

そして、一合ある食べ物二人で分け合って食べていた。すると、その犬が便するものは全部黄金になつて、金持ちになつた。すると、(兄さんは)『こいつ、どうやって金持ちになつたんだろう』と、兄さんが弟の所に来たので、

「ねえ、これこれしかじかでね、兄さんが家でお供えさせてくれないので、私は御墓にいつも行ってお供えしていたら、犬が御墓から、お父さんの魂のか出てきたので、私は家に連れて行き、一合煮たものは二人で食べて、犬の尻から出るものは黄金だつたんだよ。それで、私は、金持ちになつたんだよ」

「それならば、その犬を貸してくれ」といって(貸してもらつた)、『あいつが一合あげるのなら、私は一升食わしてやる』生き物なので、一升もあげると全部食べてしまい、も、食べ過ぎて死んでしまった。

そして、また、弟は、

「どれ兄さん、犬は。(兄さんは犬を) 持ってきたが死んでしまったので、捨ててしまったようだね草むら

※1 九年母 ミカン科の常緑性小高木、種子から結実するまで九年かると言われ、この名が付いた
※2 黄金 ミカンの一種、小粒で、真っ黄色をしていることから黄金クガニと呼ばれる。



に。

「兄さん、もう、犬を連れて帰ろうね」というと、

「どういふことだ、お前の犬は。私が一升の食べ物をおげても、黄金を出さないもの。だから、ほら、あそこへ捨ててあるさ」と。(弟は犬のなきがらを) 草むらから取って庭に葬った。そして九年母木を植えた。すると、その九年母木がたくさんの実をつけたので、買いに来る人もいて榮えていった。親孝行な次男は、

八月黄金、私達それをお供えするんですよ。大きいものは供えなかった。大きいものは見るだけであつた。ミカンは親孝行者(の話から出たものなので)それをお供えして(他のものと)一緒にお供えするんですよ。

(4) 黄金猫

① 黄金猫

上根ウサ(明治三十一年生) 富里

〔方言原話〕

兄さんとうウナイ、

「兄さん、アンマーや生ちちよーいねー雷怖らーさーやるむん、でいつか今日やアンマーぬみーんでいー、アンマーや怖らさそーらー墓んかい行じんだ」んちやくと、

「いやーぐとーん者。死じよーる者ぬひやーうりわかゆみひやー。いやー自分一人行けー」んでいーちやぐと、妹お行ちゃーに、墓開きてい入ちやぐと、

遺骨ぬ上なかい猫ぬいやーに、「はー、くぬ猫やアンマー霊がやらーわからんむん」でい、家んかい連れてい。ちよーどう犬とーゆぬむん連れてい来い。

な、また、うりん二人、かむるむぬんむんかまーなかい。まいるむぬんむる黄金なやーに。「くぬひやーちやーしスーエーキそーが」んでい、また兄さのー行じやくと、

「どー、あんあんし。なーや行かんやーいや、私なーアンマーや怖らさそーらーんでい行じやくと。なー、あんさーなかい、アンマー霊がらーわからむんでい、猫連れてい来ちしちやくと、なー、かむるムヌん二人かまーなかい、うりがまいるむのーむる黄金どうやたん」でい。

「いえー、あんどうやんなー。あんしスー、私んがる悪さーやー」んでい、なー、兄さのー後悔そーたんでい。

〔共通語訳〕

兄さんと妹(がいた)、

「兄さん、お母さんは生きてる時には雷を怖がる人だったので、さあ、今日はお母さんの所へ、お母さんが怖がつてないか墓に行つてみよう」と言うと、

「お前のような者は。死んでいる者がそういうことわかるものか。お前自分一人で行け」と言われたので、妹は行つて、墓を開けて入つたら、遺骨の上に猫が座っていたので、「ああ、この猫はお母さんの霊かもしれな」と、家に連れて行つた。(前に話した「黄金犬」



妻アンマー 母親 お母さんのこと
 平民の呼び方
 妻エエキ 金持ち、富 富裕の人
 をさす。

と同じく猫を連れて来た。

そして、また、猫と二人、食べる物も仲良く分け合つて食べていた。すると、猫の（尻から）出すものは全部黄金であった。

「こいつは、どのようにして金持ちになつたのかなあ」と、また兄さんが（妹のところに）行つてみると、

「ねえ、これこれしかじかで、兄さんはお墓に行かなかつたが、私はお母さんが恐がつてないかと思つて行つてみた。そしたら、（墓の中に猫がいたので）お母さんの霊かもしれないと猫を連れてきた。そして、食べ物は二人で仲良く食べていたが、猫の（尻から）出すものはみんな黄金だつたんですよ」と話した。

「ああ、そうだったのか。それは、私が悪かつたね」と言つて、もう、兄さんは後悔をしていたつて。

(5) 黄金の花

① 黄金の花

金城ナベ（明治三十六年生）松本

〔方言原話〕

中城^{なかつま}どうやはに。中城番所^{なかつまばんじょ}んげーちやー^{ちやー}通いに、うぬ黄金^{うぬこがね}ぬ花^{はな}ちやーうぬ人^{うぬひと}んかい見^みたんでいへー。開きてい見^みちやーえーんてー、えーりん。あんくとう、うりんかいどう見^みちやーえーんていどう、誰^{たれ}んかい見^みちやーらん。徳^{とく}ぬあてーるばーて、うれー。

〔共通語訳〕

中城でのごとだろう。その中城番所にいつも通つている時に、その黄金の花はいつもその人には見えていたそうだよ。開けて見たんだろうねえ、たぶん。だから、その人だけが見ることができたそうで、他の人には見えなかつたそうだよ。徳があつたんだろうねえ、その人は。

※1 中城 中城村。本島中部、中城城など名城がある。
※2 番所 昔の役所のこと。

七 兄弟譚

〔一〕仲順大主

(一) 嫁の乳

① 仲順御大主(嫁の乳・七月エイサー)

昔久原ウシ(大正二年生) 喜聞良

〔方言原話〕

仲順大主といつて三男までいたつて。だけど長男、

次男はあんまり欲張りだつたつて。だから大主が、

「その子ども達の心を見ようね」いっただから、もう、

そのおじいさんがいうことみんなはねて、次男まで。

だけど、この三男は子どもは出来ているけれど、

「その子どもは捨ててからに、乳、お乳自分にあげな

さい」と言いよつたつて。

「うぬつ子あ捨ていていが行ちーねー、まーんかい三本松

ぬあくとう、うりが下んじ、ちやつさ穴掘やーなかい、

うまんじ、うぬつ子あ埋みり」んでい、うぬ大主が言

ちよーるばーてー。あんさくとう、な、あん言てー

くとう、うんでいやーなかい、あんしうまかいな、う

ぬつ子抱ち行じ、さくとう。な、んちゃ、穴掘た

くとう、「アイエーナー、一尺掘てーん、二尺掘てー

ん」でい、「アイエーナー、な一尺しえ、とーと

な一うぬつ子埋みーさやー」んでいちそーしがてー。

あんし、いじやな一三尺掘たくとう、な、黄金ぬ

出していちよーるばーてな。あんさくとう、な、
黄金ぬ花ん拜まりーんでいち、家かい、あんし、掘てい
行し。

さくとう、うり聞ちやーなかい嫡子ん、次男ぬん欲

張りやくとう、な、うり取いんでいち。あんし、さ

なかい、な、うれー殺するば、三男の、弟お。殺

さーなかい、ちやんとうな一葬式んし墓んかい入て

しが。ちようとう、うりたとうれーな、神様どう

やてーさに。あんさくとう、

「いやーや、今早さくとう掘りんでい」んでいち、掘

さつたんでい。掘さつたくとうや、

「あんし、いやー家かい行ちーねーや、七月んでい

しえー。七夕から後生ぬうとういむち。うれー、りつ

ば供え事んさーなかいエイサーしー」んでい。あんし、

うりからるうぬ由来記るやんでいいたんでい。

心、見だめし。くつさぬ子ども達が、その子ども達

がどんな性質もつているかねーといつて。そして、心

をみように。あんし、「掘ていから、うれー、ちやん

とうしよー」んでいち、あまから言らつていさーな

かい。あんさーなかいエイサーや後生ぬウトウイムチや

くとうんでいやーなかい三線。

「仲順大主すくちなむん。産し子三人うしが」うり

し、うりからどう、エイサーぬ始まいぬ歌あ出じーえ

さに。

うぬ仲順大主た一墓ん立派やし、うまぬ敷ぐわん

じこー大やんやー。

兄弟譚 昔話には様々な兄弟が登場して活躍する。兄弟の墓場を三題とする話。

※1 仲順大主 北中郷村子仲順にいたといわれる長者をいう。

※2 アイエーナー 「あおじょうしよう」

困った時などに発する言葉。

※3 一尺 長さの単位 一尺は約

三十一センチメートル。

※4 三尺 約一メートル。

※5 エイサー 念仏唄りに起源を発する

とされ、沖縄本島で祖霊を供養する盆踊りとして、旧盆に青年たちが太鼓を持って踊る芸能。

〔共通語訳〕

仲順大主といつて（その人には）三男まで（子どもが）いたつて。だけど長男、次男はとても欲張りだったつて。だからその大主が、

「その子ども達の心を見ようね」いつたから、もう、その、おじいさんがいうこと暫断つた、次男まで。だけど、この三男は子どもは出来ているけれど、（仲順大主が）、

「その子どもは捨ててからに、乳、お乳自分にあげなさい」と言ひよつたつて。

「その子を捨てに行く時には、どこそこに三本松があるの、その下でどのくらいの穴を掘つてから、そこでその子どもは埋めなさい」とその大主が言つてゐるわけさあ。それで、もう、『あのように言つていたから』と思つて、そして、そこにその子どもを抱いて行つた。もう、なるほど、穴を掘ると、『アイエーナー、一尺掘つた、二尺掘つた』と、『アイエーナー、もう一尺掘ると、とうとうもうその子を埋めることになるねえ』と思ひつづつ掘つていたが。そうやつて、いざ三尺掘つたら、もう、黄金が出てきてゐるわけさあ。すると、黄金に恵まれたといつて、家に戻つて行つた。

すると、それを聞いた長男も、次男も欲張りなので、もう、黄金を取ろうと。それで殺すわけ、三男を、弟を、殺して、ちゃんと葬式もして墓に入れてあるが。ちやうど、それも、たとえれば、神様だったんだらうねえ。それで、

「お前は、まだ早いので帰らなさい」といつて（神様に）

帰されたそうだ。帰されたのでね、

「そこで、お前が家に戻つたらね、お盆には七夕から後生のおもてなしをして、立派に供えものしてからにエイサーをしなさい」と。それで、それがエイサーが始まつた由来記だよつていつていたよ。

心を試してみようと。これだけの子ども達が、その子ども達がどんな性質もつてゐるかねーといつて。そして、（その子どもの）心を知ろうと。そして（三男は）「帰つてからエイサーはちゃんとしなさいね」と神様から言われたので。それで、エイサーは後生の人をおもてなしすることだといつて三線も弾く。

「仲順大主はおどけ者。子どもが三人いるが」と、それからエイサーの始まりの歌は歌われるでしょう。その仲順大主達墓も立派だけど、その敷地もたいそう広いよね。

② 仲順大主（嫁の乳）

鳥袋義堅（大正三年生）古蹟

〔方言原語〕

仲順大主でいしえー、子んちやー三人座ちさくとう年え寄てい、な、かむぬくとうんならん。あぬー、うつたー、

「私にんかい乳飲まち」んでいち。子んちやーや、いーねー「乳飲まし」でいーねー、殺しんでゐるばーどやさに。あんざぐとう、子んちやーうり見じゆるたみがやたらー、うれーわからんしがや。親んかなさそーがやー、さんがやーでいしが、言よーぬ今ぬ世ぬ

中しえ、^{「子うりさーに、親んかい乳飲まち、親生ちぎり」}んでいしえ、^{「今ぬ世に話通らん。やし、うぬ時代や、うぬ人ぬ考や、私ん思むとーがや、ちやーすがやー」}んちどうあん言ちやらわからんしが。

「乳飲まち、うりしー」しざくとう、嫡子ん

「子どうあたらざどう、寄たる年どうやる」んでいちはにーるばー。次男んかい問たぐとう、次男ぬん同くとう言い、

「寄たる年どうやる」でいちはにーるばー。三男のーまた、三男ぬ妻えーよ、

「子産しえー産しけーらりしーがや、親ぬ産しけーらりみ。乳ゆあぎやびら」んでいちやぐとう。あんさーにざくとう、

「どーあんしえー、いやーや、やー、うぬわらべーや、まーぬまーぬ一本松にや、うまかい行じうまんじうりし、よー」でいち。あんし、泣く泣くに連てい行じやーに、なー、夫婦行じやーに、「一銀落とうしえーちやー見、二銀落しえーちやー見し、目笑れーし、やー。一銀落とうしえー、うぬわらばー笑てーういし、二銀落しーにん笑てーういし、目笑れーてー。また、三銀落しーにん、うりしー。てーげー三回落ちやぐとう、黄金出じてるうんで。あんざくとう、うれー、黄金ぬ出たぐとう、うり取やーに、子ん助きてい、黄金んうりしーんち、家かい来んでい。

あんざーい、親んでいしえー、やつぱしくぬ黄金んでいしえー、「親思いんしかいくいれーやー」でい思

てい、あんしさるはじどー。あつたーな、目グルグルそーるば。『やつぱし、うりくいーるたみどうやてーさ、やー』んちやしが。

あんしが、今ぬ世んちやー、あんぐとうしえー話通らん。

「共通語訳」

仲順大主という方は、子ども達三人いたが、年とつても、食べることができなくなつた。そこで、子どもたちに、

「私に乳を飲ませてくれ」と。子ども達にいわば、「乳を飲ませてくれ」ということは（子どもを）殺しなさいという意味だろう。それは、子どもたちの心を見るためだったのか、それはわからないがね。親もいとおしく思っているだろうか、思っていないだろうかということだが。言いが今の世の中においては、「子どもに乳を与えないで、親に乳を飲まして、親を生かせ」ということは、今の世においては話は通らない。だけれど、その時代は、その人の考えは、「私のことをいとおしく思っているだろうか、どうだろうか」と思つて、あのように言われたかわからないが。

「乳を飲ませて、生かしてくれ」とお願いしたら、嫡子も、

「子どもが大切だ、（親は）年取つているんだから」とはなつていけるわけ。次男に聞いたから、次男も同じように答えた、

「年をとつているのだから」と断つた。三男はという

と、三男の妻は、

「子どもは産もうと思えば産むことができるが、親は産み返ることはできない。乳を差し上げましょう」といった。そう答えると、

「さあ、それなら、おまえはね、その子どもをね、どこそこの一本松のある所にね、そこに行つてそこで葬りなさいね」と。そこで、泣く泣く連れて行つて、もう、夫婦で行つて、一鍬落したら（子どもの顔を）見て、二鍬落としたら（子どもの顔を）見つめると、ほえんでいた。一鍬落とすと、その子どもは笑つたりして、二鍬落とした時も笑つたりして、ほえんでいるわけ。また、三鍬落としても、ほえんで。だいたい三回（鍬を）落したら、黄金が出てきたわけさあ。それで、そこで、黄金が出たので、それを取つて、子どもも助かり、黄金ももらつて、家に戻つてきたそうだ。

そこで、親というのは、やはり、この黄金というものは、「親を思う者にあげたい」と思つて、そうしたいと思う。他の二人は目を丸くしているわけ。「やつぱり、宝物をあげるためだつたんだねえ」と思つたらしいが。

だけど、今の世の中では、あのようなことでは話を通らない。

③ 仲順大主（嫁の乳）

喜友名朝灌（明治四十二年生） 園田

「方言原話」

ちむ見でーによ。子んちやーが三人うたんでい。あんざーに、宝うぬ三本松ぬ下んじ埋みてーるばーて。子ぬちやー心試しやるばーて。『本当誠やがやー、あらんがやー』んち。あんざーに、嬪子んかい言ちやぐとう、あぬ、うりやたんでい。大主や、

「子捨ていてい私にんかい乳飲まちとらし」んでい言ちやぐとうよ、

「大主やゆとーる年どうやるや、亡ざわんしむん」でいち、うつたーな、ぼーはにとーるばーて。次男ぬんうぬふーじーやるばー。あんざーに三男がよー、

「子産しえーまた産ざりーや、親んでいしえー産ざらんくとう、私がうりすん」でいち、三男がうりし、よ。あんざーに芝居うていうりすたしがて。「オッパイ親父んかい飲まし」んでいちよーるばーて。「私たーがあんしえーすん」でいち、三男が引ち受きてい、受きてい。あんし、

「うぬワラベーうぬ三本松ぬ下んじ埋みり」んちてー。埋みーが行じやぐとう、鍬し掘たれー宝が出じとーるばーて。あんざーに、うれ、な、ちむ試し、みー試しどうやぐとう「真心やがやー、あらんがー」んち、子ぬちやー試ちよーるばーて。あんし、し、うりやたんでいさ。子産しえー、また産ざりーどう子どうやるや、親んでいしえー産ざらんしえーや。な、親んでいしえー一人なーどううぐとう。あんざーに、うり

がな、親孝行ぬ子んち、宝むるうりんかい譲てーるばーてー。

あんざーに、な、嫡子、次男のーなーまた、うりから、な、残念そーるばー。三男のーうーぐどうそーるばーてーやー。だ、うれー宝ん持ち子んちもーきてい、そーてい家かいちよーしえーや。な、あつたーまたうれーまさそーるばーてーやー。

あり、芝居にんしえーたしえー。あ、うれー本当ぬ話やいやするはじどー。あんしる芝居んかいくぬでーる。

〔共通語訳〕

（子ども達の）心を試そうと思つてさ。子ども達が三人いたそうだ。そこで、宝をその三本松の下で埋めたわけさあ。子ども達の心試しなんだよね『本当に正直者なのか、そうじゃないのかなあ』と。そこで、長男に言うつと、こう答えたそうだ。大主は、
「子どもを捨てて私に乳を飲ませてくれ」といつたら、
「大主は年をとつているのでね、死んでもいい」と二人は受け付けなかつたようだね。次男も長男と同じようなんだね。そこで三男がね、
「子どもは産もうと思えば、また産むこともできるが、親というものは産むことができないので、私が言う通りにしましょう」と、三男が引き受けた。それは芝居でもしていたがね。「オッパイ親父に飲ませ」といつているわけさ。「私たちが言う通りにする」と、三男が引き受けて、受けた。それで、

「その子どもを三本松の下で埋めろ」という。埋めに行つて、緘で掘ると宝が出てきたそうだ。それというの、それはもう、心を試すための、心試しだから「真心を持つているかなあ、どうかかなあ」と、子ども達を試みしているわけだから。それをやつてみると、そういう結果になつたそうだ。子どもは産もうと思えば、また、産むことができるが、親というものは産むことができないさあねえ。も、親というのは一人しかないのでということ。それで、三男が親孝行の子どもだということ。宝は全部その子に譲つたようだね。

それで、長男、次男は、そういうことであつたのかと、たいそう残念がつていたというがね。三男はおお喜びしているわけさ。ほら、三男は宝も得て、子どもも無事で、ともに家に戻る事ができたさあねえ。ところが、また、他の兄弟は、三男をうらやましく思つているわけさあねえ。

この話は芝居に作つていたさあ。あ、それは本当の話であつたはずだよ。だから、芝居に仕立てたんであつて。

④ 仲順大主（嫁の乳）

〔方言原話〕

久場政三（明治四十三年生） 團田

親がよ、三名の子の心を、精神見ないがために、この三本植えてある松の間に宝物を埋めてあるけども、『その宝物は誰にやるか』と言うて親としても悩んでおつたさ。だから、

「もう私は、この年なつてこの病氣はもう女の乳飲まんと私はできないから」言うて。あんさーい最初嬪子からあびてい、

「いやー子殺ち私にんかい乳飲まし」んでいちそーい、「親や年ゆとーる年どうやる、死ぬらー死ねー。子絶対殺さん」んち。あんしやい、

「ええ、あんやみ」んち、また、嬪子からんくいいてうりし。また今度次男んかいありし、次男もやつぱり同じ言葉ありし。三男を呼んできたら、三男は、「子産しけーれー産しけーらりゆい、親産しけーるくとーいならんくとうあんさびーん。乳飲ますん」んでい

「あんすらー、うぬ三本みーとーる松ぬ下んじ穴掘てい埋みり」んでいち。あんさーに、うまんじ穴掘いかなーどう、うぬ子見ちえー穴掘てーしーしーし、また一銀落さーに子見ちえーういし、三回落ちやぐとううまから黄金ぬ花ぬ土がつてい、子ん助かい、親ん助かい。やつぱり親ん「誰んかいくぬ宝ああぎーがやー」んでいその精神ぬあてーるばてー。あんさーい、三男ぬんかいうぬ宝くいとーるばー。

〔共通語訳〕

親がよ、三名の子の心を、精神見ないがために、この三本植えてある松の間に宝物を埋めてあるけども、「その宝物は誰にやるか」と言うて親としても悩んでおつたさ。だから、

「もう私は、この年なつてこの病氣はもう女の乳飲ま

んと私はできないから」言うて。最初は嬪子から呼んで、

「お前の子を殺して、私に乳を飲ませてくれ」とそう言うと、

「お父さんは年とつてる老人なので死ぬというなら死ね。子どもは絶対に殺さない」と言つた。そしたら、

「ああ、そうか」と言つて、嬪子からはそのような返事を聞いた。また、今度は次男にも同じように聞いてみた。次男もやつぱり嬪子と同じ返事であつた。三男を呼んできたら、三男は、

「子どもは産もうと思えば産めるが、親は産むことはできないので、お父さんの言うとおりにします。乳を飲ませましょう」と言つた。

「それじゃあ、この三本ある松の木の下の穴を掘つて埋めなさい」と言つた。そして、そこで穴を掘りながら、この子を見ては穴を掘り、また一銀落としては子を見たりして、銀を三回落としたら、そこから黄金の花が上がつて、子どもの命も助かり、親も助かつた。父親は「誰にこの宝をあげたらいいか」という気持ちから、そのような心試しをしたわけさあ。その結果、三男に宝をあげることになつたわけだね。

⑤ 仲順大主へ嫁の乳

照屋ツル（明治四十二年生）照屋

〔方言原話〕

三人いるから。木め下んでいで、うまんじ穴掘たぐと黄金。あれー、何か埋すでーるばーてー。チムさどーいるために、あんざーいうりさくどー。「うり、私んゆーすんかい、うれーありすんでい」やーに。あんざーいなか、ちよーどう三男が、うりさーに。嫡子ん次男「ならん」でいるばーてー。子ぬ心んわからんしえー、今ぬ世ぬ中。いったん、私たーん、ちよーどう心ちがいしえーやー。あんすくどー、うぬ嫡子、次男、三男生し子ぬあさーや、親ぬ恩でいしえー、忘らんち、あんざーいなか、うりそーるばーてー。あんざーい、子産ちえーるばーてー三男、あんざーい、

「いやー子うりさんなー」んちさくどー、嫡子ん、

「ならん。子捨てていまでー親あんしすしえーあらん」でい。あんしから、また、次男んかい言ちやぐどー、

「寄どーる年どーやる」。ちよーどう、死なわんしむんでい、ちよーるばーてー。あんざーい、三男かい言ちやぐどー、

「親に産さつていやー、親ぬ事さんあいねーならんくどー、あんしえーターリーさい私んねーあれーやし、私が、あんしえーロクパンにうりさびーんどー」でい言やーい、「あんしえー産し子や捨てていんやー」、ちよーる埋すみーが行ちゆるばーてー。なー、ぬー、まーいぬうふあ子どーやし。埋すみーがんち、

あんざーい、

「うぬつ子や、三本松ぬうまんかい穴掘てい、三尺掘やーいしーねー。さーいなか、埋すみーんでい、ちやぐどー、三尺掘たぐどー、黄金ぬ出じてい、ちやーい。あんざーいなか、また、子ん助しかてい。な、黄金ん、三男ぬむんなどーるばー。乳飲まし」んでい、ちよーるばーてー。嫡子んかい言ちやぐどー、

「ならん」でい。次男んかい言ちやぐどー、

「乳飲ますしえーならん」でい、ちよーるばー。あんざーい、

「親またどー拜がまんくどー、産し子理じゆみていんや、親拜がみ」でい、ちよー、あんざーい、うりさくどー、

「あんしえーや、三本松ぬ下んかい三尺穴掘ていし、よー」んちやぐどー、うまかい黄金ぬ。あんし、子ん助しかてい。あつたーや、なー、黄金んでい、ちんねーんばーてー。

〔共通語訳〕

三人いるから。木の下あたりに、そこで穴を掘つたら、黄金、何か埋めているわけさあ。心を知るために、それで黄金を埋めているから。「それは、私によくする子にあげよう」と思って。それで、ちよーど三男が引き受けて、嫡子も次男も「できない」というわけさ。子どもの心もわからないさあねえ、今の世の中は。あなたたちも、私たちも、このように心は異なるでしょう。だから、その嫡子、次男、三男と。三男は

子どもがいるが、親の恩というのは忘れることができな
ないと、それで、親の言うことに従おうと思つてい
るわけ。そうして、子どもがいるわけね、三男は、それ
で、「あなたの子どもを葬つてくれないか」というと、姉
子も、

「出来ない。子どもを捨ててまで親の事をすること
はできない」と。それから、また、次男に言つたら、
「年をとつてゐるんだから」。たぶん、死んでもかまわ
ないといつてゐるわけさ。そこで、三男に聞いたら、
「親に産んでもらつてね、親の事をしないわけにはい
かないから、それなら、お父さん、私は三男ではあり
ますが、私が言われる通りにします」と答えて、

「それならば、産んだ子どもは捨ててもね」（といつ
て、まさに埋めに行くわけさあ。子どもは病氣をし
てゐるわけでもないが、埋めにといつて、それで、

「その子どもは、三本松のそこに穴掘つて、三尺掘つ
て。そうやって埋めなさい」というので、三尺掘つた
ら黄金が出てきた。そこで、また、子どもも助かつて。
ね、黄金も、三男のものになつてゐるわけ。「乳を飲
ましてくれといつてゐるわけさあ。姉子に言つたら、
「できない」と。次男に言つたら、

「乳を飲ますことはできない」といつてゐるわけ。そ
れで、ね、三男がね、

「親は二度と拜むことはできないので、産し子を葬つ
てもね、親が元気であることを願う」といつて、そう
したら、

「それならば、三本松の下に三尺穴掘りなさい」そう

したら、そこに黄金が（出てきた）。それで、子ども
も助かり、ほかの（兄弟二人は）もう、黄金もないわ
けさあ。

⑥ 仲順大主（嫁の乳）

上江洲マカト（明治三十八年生 比屋根

「方言原話」

三男め親孝行すんやー「ぬーが」んちゃぐとどう。

子や産ちやぐとどう、三男まで一むる子産ちえーん

て。

姉子んかい、

「いやーや、子んかいや乳飲まさんぐとどうに、私にん

かい乳飲まし」親ぬやるば一て。あんさぐとどう、

「うれーならん」でいち姉子え反対さぐとどう。

「親ゆと一る年どうやる、子なまからどううりやく

とどう、うれーならん」でいちやぐとどう、

「えー、あんやみ。うれーしむん」。と一あんしえー

次男ぬんかい、

「いやーや、ちやーが。子んかいや乳飲まさんぐとどう。」

えーりんなん、親ちんちえーるば一どうやる。

「私にんかい、乳飲まし」でいちやぐとどう、うりんゆ

ぬ口やるば一て。

「いやー、なーやゆと一る年どうやる。な一いくちな

いぐとどう。子うつちやんなぎてい、私にんかい乳飲ま

しんでい言んなー」でいち。また三男ぬんかいと一

たぐとどう、

「いやーやちやぬふーじーやが。私にんかい、乳飲ま

「子産しえー、産しけーらりーぐと、あんしえーらんじゅんかいや乳うさぎていしむくとう」でいちゃぐと、

「ああ、やんなー」でいやーに。あんさーに、うぬ三男子うりさぐと。親のーちむ見じゅんでいちゃん言ちよーるばーてー。あんしさくとう、だ、ぬーんくういぬさだみさくとう、うぬ三男ぬんかい黄金いーらちやぐと、嫡子ぬちやー、

「私にんあんすん、私にんあんすん」んちえーる、うにーから、なー遅いやしえーや。あんさーに、三男のーうりさーに、嫡子、次男ぬんかい、うれー、うらりざらつてるばーてー。

〔共通語訳〕

「三男が親孝行するのは「どうしてか」というと。

子どもを産んで、三男まで、みんな子どもがいた。嫡子に、

「おまえは、子どもには乳を飲ませないで、私に乳を飲ませてくれ親がそういつているわけさあ。すると、「それはできない」と嫡子は反対した。

「親は年とつているが、子どもはこれからが楽しみである。そういうことはできないな」というと、

「ああ、そうか。それならいい」。さて、次に次男に、「お前はどうか。子どもには乳をあげないで（私にくれ）。たぶん、（子どもを）殺しなさいといっているんでしよう。

「私に乳を飲まして」といつたら、次男も同じ返事をするわけねえ。

「あなたは年をとられているのに、何歳になられると思ふのですか。子どもはほつたらかして、私に乳を飲ましてくれというのか」と。また、三男に聞いてみたら、

「おまえは、どうか。私に乳を飲まして子どもは葬れ」というと。も、考えてから、

「子どもは産みかえようと思えば、産みかえることはできるので、それなら、あなたに乳を差し上げてもいいですよ」と答えると、

「ああ、そうか」と。それで、その三男は引き受けた。親としては、（子どもたちの）心を試そうとそう言っているわけさあ。そこで、いろんなことで心を試して、その三男に黄金をあげたから、嫡子たちは、

「私もそうする、私もそうする」というものの、その時には、もう、すでに遅いわけさあねえ。それで、三男は豊かになつたので、嫡子、次男に三男はやつかまされたようだね。

⑦ 仲順大主（嫁の乳）

喜屋武英正（明治三十年生）久保田

〔方言原話〕

今日の勝る日仲かる日に子んちやー呼でい、くぬ心見じゅんでいるばーてー、「ちやぬふーじーやが」んち。長男のーなー、

「乳飲まちとうらし」んでい、うぬ仲順大主ふりてい

どうする。次男じなんなんー、ふりていどううんでいち、二人合点ふたりあひていのーさん。三男さんなんなんー、

「子産こたんしけーれー産しけーらりーぐと、子殺こころちん乳ちんえーあげる。んでいうぬ人いちよるばーて。あんなさくとう、うぬ子ども、どこにも、どこにも埋めさせない。必ず「三本小松さんぽんしょうしょうの中に穴掘あなほりつてから、三尺ぐらい穴掘あなほりつてから、こつちにこめなさい」おやじ言われたそうさ。そうやつたから、まあ、穴掘あなほりつたら子ども喜んでおるそうさ。穴掘あなほりりに羽はねだち。ぬー言つてもわからない小さい子どもだから。おじいさんが、こつちに三本小松さんぽんしょうしょうの下したにこの黄金こがねがうしてーたんでい、うまんかい。あんさーうり取とらすぬたみ、心見こころじゅんでいやってーるふーじやし。な、あんさーに掘ほやーに、黄金こがねぐわー取とやーに掘ほてい行いちゆるばーてー三男さんなんのー。喜んで帰かへつて行く三男さんなんのー。しーじやぬちやーや年は、いーとーる年としどうやどちやーしんしむんでい。

〔共通語訳〕

今日の勝る日かちるひよき日に子どもを呼んで、子どもらの心を試こころそうとしてゐるわけさあ。「親をどのくらい思おもっているかなあ」と。長男ちやうなんは、

「乳を飲のみませてくれないか」と（言うので）、その仲順大主ちゆうじゆんたいしゆは気がふれてる。次男じなんも同じく、気がふれているといつて、二人合点ふたりあひていがいかなかった。三男さんなんは、「子どもは産うもうと思おもえばまた産うむこともできるから、子どもを殺ころして乳ちんをあげよう」と三男さんなんは返事こたへをし

たようだね。そうしたら、その子ども、勝手に好きな場所ところに埋くまめさせない。必ず、

「三本小松さんぽんしょうしょうの中に穴掘あなほりつてから、三尺ぐらい穴掘あなほりつてから、こつちに埋くまめなさい」おやじに言いわれたそうさ。そうやつたから、まあ、穴掘あなほりつたら子ども喜んでおるそうさ。穴あなを掘ほつているのを見みて手をバタつかせて（喜んでいたそうさ）。なにを言いつてもわからない小さい子どもだから。お父おとうさんがこつちに三本小松さんぽんしょうしょうの下したにこの黄金こがねを隠かくしていたようさ。そこに。それで、それを取とらせるために、心を確たかめるためにやつたそうなんだが。それで、言いわれた通りに掘ほつて、黄金こがねを取とつて帰かへつていくんだね三男さんなんは。喜んで帰かへつて行いつた三男さんなんは。だけど、兄あにさん達は年としは、とつている年としだからどうなつてもいいんだと（そう思おもつて、いうことを聞きかなかつたんだな）。

⑧ 仲順大主

上原ウシ（明治四十二年生）住吉

〔方言原話〕

仲順大主ちゆうじゆんたいしゆ子三男こさんなんまでいうりそーしが、「な、子こむる産うさー、うつさーな、子私こしがムノーかましーうーさんくとう、長男ちやうなんぬ子こ一人ひとりや犠性ぎせいなしんち」やし、

「ならん」んでいいやーにうりさくとう。また、次男じなんぬ子こうりすんでいちやぐと、

「ならん」。三男さんなんぬ子こ、三男さんなんがうりさくとうな、「産うし子こや産うしけー見みじるすど。またとう我が親おやや見みだだん」でいやーに、自分おれぬ子こ犠性ぎせいにうりそーるばー

て。な、子うすいんち、生ち埋み、て。うすいんち、うりすしが、うりさぐとうな、子うすいめーから、下から黄金ぬちやつさんなうじてい、黄金ちやつさんもたんでい。三男や、な、うりなんでい。うぬ子ん。

〔共通語訳〕

仲順大主は子どもが三男までいたそうだが。も、(三男までみんな) 子どもが出来て、「こんなにたくさんの子どもを私は育てることができないからと、長男の子ども一人を犠牲にしてくれ」というが、

「できない」といつて断られた。また、次男の子どもを犠牲にするといったから、

「できない」。三男の子どもを(葬つていいと)三男が引き受けたので、

「子どもは産みかえて、また、見ることもできる。二度と我が親にはお目にかかることが出来ない」といつて、自分の子どもを親の言う通りに犠牲にすることにしたわけさ。もう、子どもを葬ろうと、生き埋めさ。葬ろうと取りかかっていると、子どもを葬ろうとした所から、下から黄金がたくさん出てきて、黄金をたくさんもらったそうさ。三男はもう、お金持ちになったそうさ。その子どもの命も助かって。

◎ 仲順大主(嫁の乳)

當眞アキ(明治四十三年生) 胡屋

仲順大主いゆうて、仲順にあつたそうだけど。

昔ね、男の子三名産んで、男の子三名産んでね。「私はもうこの歳になつていけるけど、いつ死ぬかわからんしね、これだけある財産をどの子に譲ろうか」と言つてね、そのお父さんの考えでね。子どもはみんなかわいんだけど、誰が本心から親といつて思つてくれるか、そういう試みだな。芝居にあるよ、それは。仲順大主言うてね、仲順大主の芝居がある。

まず、長男から始め呼んでね、歳取つたら歯もなくなるだろ。

「私は歳取つてね噛むことはできないからね。(みんな、子供を一人ずつ抱いているよ)噛むことができないから、子ども、子どもをね棄ててね、私にオッパイくれないか」言うて。試みだからね。親が子どもの心を見るためだからね、

「歯がなくて、モノを噛むこともできないから子ども棄てて、そのお母さんのオッパイ私にくれないか」そう言うてね、そうしたら、

「仲順大主はね、かにはんでいてい(もうろくしている)、ボケてねバカになつているんだよ」と言つてね、振りすてていつたそうさ。また、次男にね、次男を呼び出して、

「私はねモノを噛めないから、子どもにやるオッパイを私に飲ましてね、死にたくないから」言うたらね、仲順大主はフリムンどうなとーがやー(気がふれた

のかなあ)。死ぬなら、死んだらいい」と言つてね。それも二人同じ言葉言つて。三男はね、それで、昔からね、三男は親孝行だと。今でも三男はねとても親孝行だよ。次男はウーマク(きかかん防)だ。それでね三男がね、

「私、子どものチー(乳)飲ましてくれ」というているわけさあ。三男がね、真心からね、

「自分の親は死んだらまた生き返つてこないしね、自分の子どもはね、また生まれかわつて抱くしね。子どもは捨ててね、お父さんを大事にします」と言つてね。涙流してね、三男がこういう気持ちになつて、

「そんならね、その子どもはね、この松ぐわーの下にね、松ぐわーの三本松の、三本松の下にね、ちよつと引つ込んでいるからね、ここを穴掘つてねそこに埋めなさいよ」と、これをお父さんが言ふんだよ、仲順大主がね。そうしたらね、一鎌落とせば悲しいだろう。一鎌落とせば子どもの顔を見たり、また二鎌出したら、もう。そんなしてね、とても悲しい仲順大主の芝居あるんだよね。そうつて三つ落とした時にはね、それは、黄金ぬ花、花が咲いてね、お金がジャラン、ジャラン出てくるんだよ。この穴仲順大主が埋めてあるんだから。「こつちする人には、親孝行の子にあげる」いゆうてね。それは、仲順大主がやった事だから、後で子どもの命も助かったね。親の命も助かったいゆうてね。そういう昔話がある。芝居にあるよ、仲順大主つて。一鎌落としてね、子どもの顔見に来たりする時にはね、とても悲し

い、悲しいものだったみたいで。それ、あつたかどうか、おとぎ話かなにかわからんけど。

◎ 仲順大主

高江洲昌保(大正二年生)センター

仲順大主。エイサーの歌でもね、「仲順大主や、果報者。産ちぐわや三人産しんじやち」するでしょう。その歌があるでしょう。産し子や三人産ち出じやち。三名また、子どももいるんですよ、芝居には。子どもがおるんだけど。

いえば、学校時代にあんた方「リア王物語」というのは教わつたでしょう。あれにやがや似てるんですよ。あの「リア王」は三名とも女でしょう。そつて次女までは「親の言うとおりに」と言いながら、今度「リア王」が病尽きて方々歩いたら、今度三女の方が助けるわけさ。あの「仲順大主」もそんなですよ。リア王の三女の方、あれは、僕らの学校時代に「リア王物語」教わつたんだがね。やや似ているんですよ。

仲順大主はですね、計画によつてね、ひとつの、松を三本植えてね、三本松の中に、黄金、金のね壺を三尺下に埋めてね、その子どもたちの心を見るわけさ。だから、長男も次男も、

「あんた、大主は、歳も年とつとるが、自分の子どもを外に埋めて、親を育てるこれはできません」といひ、長男も次男も反対するわけさ、埋めることは。

「自分の子どもを埋めてね、私にお乳を飲まして下さい」と。

「お乳をそのお乳を飲ませて下さい」と頼むんだけどね。じつちやくを、長男も次男も、それを開け、反対するわけさ。

「自分の子どもがさ、親父はもう年も取っておるから出来ません。協力は出来ません」。また、三男の方はどうかと言つてさ、三男の方に頼んだらね、

「子どもは産めばできるから、親はまたとは拜まれんから、親父の方に自分の子どもを埋めてお乳をあげます」と言つて。とうとう、いよいよ本番になったら、

「ここに三本松があるから、そこを三尺下掘つて埋めなさい」と言われるわけさ。そうして、三尺下掘つたら壺が出てくる。それで、誠なる人がね、三男の方は成功するわけさ。

「子どもはね産めばたくさんできるから、親、親父の方はまたとは拜まれんから、年は取つておるけど拜まれんから親孝行します」と言つて、そういうふうになつたね、今の仲順あのエイサー節も、そうなつてゐるのがある。

(仲順大主は)年は取つておるしね、年はいいでしょう。もう、子どもを大切にする人たち(長男と次男は)、言うんだけどね、三男の方はそうではないです。

「子どもは、産めばたくさん出来るから、親は、も、一番失つたらそれで終わりだが、親の生きておる間は孝行します」と言つてね。金の壺を買つてね、そして徳をして。お乳を飲ますそれは、向こうの心を見るわけで、そう、仲順大主は話したのはずだがね、長男次男はそれが分からないわけさ。

⑩ 仲順大主(三男の肝・エイサーの始まり)

金城初子(大正五年生) センター

この仲順大主は、子ども三名、三男まで出来たわけ。子どもの心の中はわからないわけ。心試しに、一人一人の(心を試そうと)長男を始めは呼んでからに、長男に聞いたわけ。

「あなたの子どもを殺して埋めてからに、あなたの(嫁の乳を)私に下さい」と言つて頼つたわけ。だから

「仲順大主や、ふりていどうめんしえーさに(気がふれたのであろうか)。こんな可愛い子どもを殺して捨ててね、あなたに乳をあげるか。あなたは年も取つてゐるのにね、死ぬなら死ぬ」と言つて、長男はいゅうたわけ。今度次男に頼んだ。次男も頼んだから、同じ言葉。今度は三男に頼んで、三男に頼んだから、

「子ども、もう、可愛いけど、子どもはまた出来たら、新しい子どもが出来る。親はもう再び見られない。この親亡くなつたら(おしまいだから)」と言つて、

「します」と言つて、賛成したわけ。
「じゃあ、あなたの子どもを埋めるなら、三本ガジマールのある所に三尺穴掘つて、こつちに埋めなさい。(子ども)顔も形も(しみじみと見つめ)子どもと今日別れ(と思いつつ)、とうとう、この森についたから、一回は轍落としたから、(子どもを)見たら、とつても喜んでゐる、両手をバタバタさせて。また、振りかえつてきて、また、二回(轍を)落とすと、二回ともこの子どもは、もう、また、お父さんの顔を見ているさあねえ。「アイヤ、あと一回だなあ」と言つて、

※「エイサー」念仏廻りに短編を挿入するとされ、沖縄本島で祖堂を供奉する益勝りとして、旧盆に青年たちが大鼓を持つて踊る芸当。

心の中、泣きながら穴掘ったから、掘ったかと思つたら、こつち、黄金がドツサリ湧き出てきているわけだから、この『宝物どうするか』といつたら、

「これ、あなたにあげる」といって、全部もらつた。これをまた、兄の二人が聞いてからに、

「これは許さん。あなたはねえ、自分一人であんなたくさんの宝物もつて許さん」といって、殺すといつて、しているけど。一応は三男殺されているわけ。だけど、次男、二人で意地悪しているわけ。ほんとに、命までは取れなかつたわけさ。死んでいると思つていて、後生の閻魔王が助けているわけ。

「あなたはいい心持つて後生に今早いから、こつちに来てはいけない」といって、助けて。そして、
「エイサーをあなたが、後生の人を楽しませてくれ」といって、エイサーをこの人が教えられた。

⑫ 孫の生肝（仲順流り）

大権轉（明治二十七年生）池原

〔方言原語〕

仲順流りんでいねー、うれー、一番嬪子から呼ばーにやー、

「いやー子あ殺さーに、おじーんかい乳あぎり」んでいちよーるばーてー。

「ならん」んでい言たんり。あんさーまた、うりから次男ぬんかいありさくとうや、次男ぬん、

「ならん」んでいたんり。三男ぬんかいあん言ちゃやうと、

「あんししまびーんりさ」んでい。あん、うれー親ぬ孝しえーんでいしやーい、いつべーとういむたつとーたんりぬ話、うれー。

うぬわらばー殺さーに、うぬ親ぬ乳やフアーフジンかいあきてーしえーやー。あんさー、うり、また、わらばーや殺ちうまんかい理じゆみてーるばーてー。うぬ三男でいしえー黄金、むるうりがあんさる所おむる黄金ばかーん堀い出じやちえーたんでいるばー。

あんど、親ぬ孝しえーまちげーねーらんりちよーるばー。うぬ話どうやんどー。二鐵落しえー、くぬわらばーなーありしえーやー、目グルグルしうりし、三鐵落さくとうなり、むる黄金ばかー堀い出じやちよーさ。あんしる親ぬ孝しえーまちげーねーらんりてい言ちよーるばーどうやんどー。

〔共通語訳〕

仲順流りといつたら、その話は、一番長男から呼んで、

「お前の子どもは殺して、おじいさんに乳をあげなさい」と言っているわけさ。

「できない」と言っていたそうさ。そしてまた、それから次男に同じことを言つたら、次男も、

「できない」といつたそうさ。三男にそう言うと、

「それでもいいですよ」と。それで三男は、親孝行したという話で、たいそう優遇されたという話だよ、仲順流りというのは。

その子どもを殺して、母親の乳を祖父にあげたさあ

ねえ。そこで、その、また、子どもは殺してそこに埋めていたわけさあ。その三男は黄金、すべて、この三男が掘るところからは黄金が出てきたというんだよ。だから親孝行をすれば間違いないという話だよ。二歳落とすと、子どもは目をキョロキョロし、三歳落とすと黄金ばかりが出てきたという。それで、親孝行をすればまちがいはないということだよ。

⑬ 仲順大主（嫁の乳）

金城永保（明治四十二年生） 松本

仲順大主子ども三名にあつたらしいがね。子ども

の気持ち見るために、

「もう、年を取つて歯もない。君の子は埋んで私に乳を飲まさない」と言つたから、

「もう、年を取つただけで、新しい子を埋まれるわけがあるもんか」と言つて。次男に言つても次男が聞かん。また三男言つたから、

「子は産しかえれば産しかえられる。もう、またとは挿まれる親はおらんから出来ませう」と言つて、

「どこの三本松の下で埋め」と言つたらしいねえ。子はこんで、一歳一つ落としてからも、この子どもは

はにだして喜ぶね。またも落として、またもはにだして、またさらにまた（一歳を落としたら）黄

金が埋まつていたつて。見るどね、あとは兄弟じゅう喧嘩しておつたつて。「私が取る、私が取る」とか言つ

てね。その由来記らしい。

⑭ 仲順流り

高江洲節（明治三十五年生） 松本

仲順流りというのは、あれは親孝行のもんでしょね。財産は宝はあつたそうだが「この宝は誰にくれるか」と言つて。親は皆、子どもは可愛いさーね。そして誰か（親孝行か）試しやつたら、嫡子んかい、

「私は死ぬ病気やるから、あんたの子を殺してね私に乳を飲まして」命をもう、あれしよと思つて言つたら、

「出来ない、出来ない」て嫡子は言つたそうだ。次男もしたら、次男もそう言つたそうだが「出来ない」て。三男の、

「親やまたどー見だらん、子や産しけらろー、また出来るから（親は二度とは見ることはできない。子どもは産もうと思えば、またできるから）」と言つて、夫婦相談して、そして、「出来る」と言つて、「子や殺ちやていん、親んかいねーまたどーうがまらんくどう（子どもは殺してでも、親はまたとはおがめないから）」と、あんち親こーいるマチえねーらんてい。子や産しけーろーまんどーんてい。（親をかう店はないが、子どもは産もうと思えばそれができる）。それで、親の孝行して、これに宝をあげたつて。

昔のニンプチャーねー、鉦、人が死ぬ時にはね、坊主は普天間に行つて頼みよつたよねー。ニンプチャーと言つておつたよね、カニグワーケンケンいっ

てね。この人がこの（仲順流りの）歌はしよつたつて。

※1はにだしー 両手をバタつかせて喜んでる様子のことか。

※2ニンプチャー 葬式の時に鉦を叩き、念仏歌を歌う人。

※3ニンプチャー 葬式の時に鉦を叩き、念仏歌を歌う人。

※4ニンプチャー 葬式の時に鉦を叩き、念仏歌を歌う人。

※5ニンプチャー 葬式の時に鉦を叩き、念仏歌を歌う人。

※6ニンプチャー 葬式の時に鉦を叩き、念仏歌を歌う人。

⑤ 仲順大王（嫁の乳）

佐渡山ゴセイ（大正三年生） 城前

男の子三人いるさーねー。で、その人はこの三名子どもいるけど、「心の中はわからないから」といって、「自分宝物はあるけど、黄金はあるが誰に渡したらいいのかわからない」といって、この由来記があるよ。病気でないけど、

「うちは病気はその乳飲まん」と死ぬけどどうするか。自分の子どもは捨てて私に乳を飲ませてくれ」と長男に言ったって、

「これはできない。とっている年だのに」と言つて、あんの言い捨てて。また次男もいうたら、こんな言いしたって。後、三男に言つたら、

「産めばまた子どもはできるから、お父さんを助けよう」といって、「これがほんとの子どもだ」といって、三男の方に宝物は譲つたつていう話。

「子どもは、も、埋めてでー自分の父にあげる」というけど、その仲順大王が、

「それなら、その子はどこに埋めなさいよー」と言つてから。宝物を埋めてある所に。そこで埋めさすといつてから、これ掘つたところに宝物が出たさあね。（子どもも）助かつたといつて、これ（三男）にあげる。

「も、ほんとの親の孝行する人にあげる」と言つて、その自分の子ども、三男の子ども埋めさすと言つてから、「こつちの方に埋めなさい」と教えてあるわけさ、宝物。それで黄金出てこの子どもにあげたつてね。黄金は三男が取つたわけさ。

⑥ 仲順大王（嫁の乳）

喜納兼儀（大正七年生） 東

仲順流りといつて、お父さんは年取つて歯がなくなつてゐるから、それで、子どもたちの知恵をなにするためにじゃなかつたすかねえ。最初は長男から呼んで、

「お前の子どもは捨てて、奥さんのオツパイは私にあげてくれ」といつたら、長男はいやがつておるわけだね。自分の子どもを捨てるのは、誰しもなんだから。長男もできないから、今度次男呼んで来たでい。次男にもそういうお話伝えたら、次男も「出来ない」ということになつた。今度は三男に行つて話かけたら、三男は「オーケー」しているわけ。だが、

「この子どもを埋める所は三本木の松の下に埋めなさい」といつてね、このおじいさんが言うたわけだ。やつとかつと子ども抱えて、「うー」とも、泣きながら、穴掘つて、三本松の下に埋めてなにしたら、そこから、黄金がね湧き出てきている。その黄金を有り難く受け取つてね、子どもの命も救つたし、このおかげで、もう、お金持ちになつて、お父さんはまた、ミルクかな、なにか買つてあげて助けたという。

⑦ 仲順大王（嫁の乳）

宮城ハナ（大正五年生） 与備

子ども三男までできていたんだが、みんな嫁さんもらつて。そして大王が病氣したから、

「私に嫁さんの乳あげて命を助けてくれ」頼んだんだ

が、みんな、

「(大主は)年だから、こんなことできない」んち。すると、三男の嫁さんがね、

「私が、自分の子どもをあれしてもまた出来るから、その分は大主にオツパイあげるから」と。そして、三男の嫁さんが、

「子どもは今から産むことができるから、これは親助けるあれがあるから」って、自分は子どもにやるオツパイは大主にあげたそう。それで、この大主は心見にやったそうです。試しにやったから、この子どもは、裏の山に埋めるって穴掘ったそうです。穴から神様が出て来てこの子どもも救って、また大主も救ったとの話を聞いたんだがね。

⑧ 仲順大主(嫁の乳)

桑江朝盛(明治四十五年生) 中の町
桑江朝盛(おんじょうあさひ)の仲順流りね。

あの七月のエイサーの仲順流りね。あれは、次男、三男、四男といっておるが、親父がね病気がかってさーねー、もう、どーでも治らないという病気で。そして、子どもはみんなおるが、子どもを埋めてねその女のおっぱいを、お乳をあげたら治るという。で、長男に聞いても出来ないと言って、次男に言うても出来ないと言うて、そうって、三男に言うたら、

「子どもは作ったらまた作れる。親は死んだらもうなくなる。いいでしょう」。その親が、

「じゃあ、子どもはどこどこに埋めなさい」と言っ

指定して。そして、埋めに行つた。埋めに行つたら、そちちに宝が埋められていた。子どもは置いて、穴掘つたら宝が生まれて、そして、子どももお金でね、そして、できたという。その親孝行者の話。仲順流りとは、そういう意味。黄金も出ておるからね、もうどんなことも出来るさーね。これでもう子どもも殺さんでね、親孝行なんで、一番成功したんだね。

(2) 孝行な子供

① 孝行な子供

昔久原ウシ(大正二年生) 嘉間良

お母さんが病氣だつて、その子はどつても親孝行だつた。そこに行つてなにか鯉いるさーね、池の中に鯉。真冬もう氷張っているけれど、

「薬といつてそれ取つて来てあげなさい」と言つたから。行つたから、もう氷張つて取りきれないでね、自分でそこに入つてからに自分の熱で(氷を)溶かして、そうしてその鯉を取つてきたという話もありますね。お母さん元気になつたはず。

〔2〕 屋良ムルチ

(1) ウナギ

① 兄弟の仲直り

神里マカト(大正元年生) 安藤田

〔方言原話〕

兄弟二人いたつて。みんな自分の兄弟ではしないでよ、あつちこつちで友達と仲良くしていたつて。畑に行つたからね、畑に鱧が出てきてよートーンチン、トーンチンすぐかんし倒ちえーたくてーすたんでい。あんさーま男なーしわさーにてー、「私たーむんだーなーいぢでーじなとーさな。むる、盗人ぬちやーにうちゅ喰てーくとうや、私どうしあびていぢやーになー殺しみりわるやる」んち、どうしあびーが行じやくとうや、「ぬー、いやー、私ねー私たーわからん。恐さぬ私たー行かんむん」でい来なかつたつて。あんし、「な、でーじなとーさ、な、うつさぬむんむる盗人にうち、喰りーさ、でーじなとーさ」ちよー、しわそーいーねーてー、あとーまた、うぬ兄弟がうまー来くとう、

「な、あんしえーなー仕方ならん。私にん行ぢゆんでー」んち行じやーなかいや、殺ぢやくとう、すぐウナギなどーたんでい。饑なつていて、あんさーにまた

皆、

「あつさな、私たーや、人殺さんや、饑る殺ちえーんどー」さーに皆あびていぢやーに、また、汁わかち皆かまぢやくとうや、

「あつさ、なーな、兄弟ぬぐとーるいんのーねーらんや。人のーぬーんさんしがてー、や、人のー、人んかい言ぢやんでーま、私たーがわからんぞー」ち、今んとうーぬどうしぬ、どうしぬ兄弟ぬ、やー、うりそーしがてー。「兄弟やかいーむのーねーらん、人のーさんしがなー兄弟のー、し、とうらち。なまからなーむる兄弟ぬくとうるするや、人どーあんすかーすなよー」りち、昔め話またうぬあるばーてー。

〔共通語訳〕

兄弟二人いたつて。みんな自分の兄弟とは(仲良く)しないでよ、あつちこつちで友達と仲良くしていたつて。畑に行つたからね、畑にウナギが出てきてねトーンチン、トーンチンすぐこのように倒して喰つたりしていたそうだ。それで、男はもう心配してね、「私の作物はもう大変なことになっているさ。みんな、盗人が来て喰っているからね、私の友達を呼んで来てやつつけさせよう」と、友達を呼びに行つたらね、

「なに、お前、私は、私たちは知らないよ。恐ろしくて私には行かない」と来なかつたつて。そして、「もう、大変なことになっているさ、も、こんなにたくさんのも、全部盗人に喰われてしまふ、大変なことになっている」と、心配しているところへ、男の兄弟がそこに来たので、

「もう、それなら仕方がない。私も行くよ」と行つて殺したら、それはウナギなつていたそうだ。ウナギだったので、そこで、また皆、

トーンチン トーキビのこと。



「ああ、もう、私たちは人を殺さないで、ウナギを殺したんだね」といつて、皆呼んで来て、また、お汁を作つて皆にあげてね、

「ああ、もう、兄弟のようないいものはないなあ。他人は何もしてくれないがね、他人に、他人にお願ひしても私たちは知らないよ」と、今まで（仲良くしていた）友達であるが、（いざとなつたら）兄弟が（してくれない）。「兄弟よりいいものはない、他人はなにもしてくれないが、兄弟は助けてくれる。これからはすべて兄弟のことをするね、他人とはあんまり仲良くするものではないよ」と、昔の話がこうあつたわけさ。

② 兄弟の仲直り

当真つる（大正十五年生） 泡瀬

〔方言原語〕

トリーヌチン畑があつたつて。トリーヌチンといつたらトウモロコシ。トモウロコシの昔小さいのがあるさ。赤トリーヌチンといつて、トウモロコシの黄色じやなくて。粉してから餅作るのがあるわけよ。その畑にね、大蛇が出よつたわけだが。これ食い荒らしてからにや、食べてからに。

「盗人さつていな、私たーふしがらんむん」でいやーに。あんさーになり、「うれ、今日やかちみやーに殺しやるや」んちさくとうや、うぬ、じゅんになり、トリーヌチンくわいたんでい。あんさーうり、しぐ、包丁持ち行じや殺ちやぐとう、どうしぬ家んかい、「私ねー人殺ちえーさ、でいつか片付てい来」んでい

ちやぐとう、

「わん、いー、ならんどー。うれーとうるさぬやー、あんしえー共犯でいやーにでーじやぐとう、私ねーならんどー」んちやぐとう、泣く泣くあたらん兄弟ぬ前んかい行ち、

「私ねー人殺ちえーんどーやー」んちやぐとう、

「やん、あんしえーでーじやさ。でつか、あんしえー埋みていく」でいやー、二人行じやーに。だから、兄弟というのは、切つちん切ららん、どうしえー、くいえるえーま、「兄弟というのは切つても切れない縁であるから、兄弟やゆーし、よー」というのは、その話。

ほんで、行つたらへびだつたつて。その時から、やっぱし、親、兄弟どう、ありやさやーんでいらりーる。「どうしやかり、親、兄弟どうふんとーやさやー」んでい。あんさくとう「指ねーまんかい折りが」でいしえー、「十ぬ指まーんかい折りが」でいしえー、この話さ。こつちには折れるさあ。友達の所には折れないさあ。だから「十ぬ指うまんかい折りぐとう、ちやー親兄弟し、人んかいや、し」でいちよーるふーじーぬ話で、その話。

〔共通語訳〕

トリーヌチン畑があつたつて。トリーヌチンといつたらトウモロコシ。トモウロコシの昔小さいのがあるさ。赤トリーヌチンといつて、トウモロコシの黄色じやなくて。粉してから餅作るのがあるわけよ。その畑にね、

※「指ねーまんかい折りが」他人より両親が大切という教訓の暁

大蛇が出よつたわけへびが。これ食い荒らしてからに
よ、食べてからに。

「作物を盗られても、私たちは耐えられない」と思い。
それで、『こいつは、今日はつかまえて殺してやろう』
と隠れていたら、ほんとにトリーヌチンを喰っていたそ
うだ。それで、その、すぐ包丁を持って行って殺した
ので、友達の家に行つて、

「私は人を殺してしまつた、さあ、(一緒に)片付けに
いこう」というと、

「私も、いや、できないよ。そんなこと恐ろしくて、
そうしたら共犯と思われて大変なことだから、私は手
伝わないよ」と言われたので、泣く泣く気の合わない
兄弟の所に行つて、

「私は人を殺してしまつた」というと、

「そうか。それは大変なことだ。さあ、それなら埋め
に行こう」といって、二人で行つた。だから、兄弟と
いうのは、切つても切れない、友達は、何かを与える
間だけの仲で、「兄弟」というのは切つても切れない縁
であるから、兄弟は仲良くしなさいね」というのは、
その話。

ほんで、行つたら、へびだつたつて。その時から、
やっぱし、親、兄弟が大切だねえといわれる。「友達
よりは親、兄弟がほんとに大切だねえ」と。だから、「指
はどこに曲げることができるか」というのは、「十本
の指はどこに曲げることができるか」というのは、こ
の話さ。指は手前には曲げることができるが、反対側
には折ることはできないさあ。だから、「十本の指は、

自分にむかつて曲げることができるので、いつも、親、
兄弟のことは仲良くしてから、友達とも仲良くしな
いね」ということの話なんだね、この話は。

③ 屋良ムルチ(兄弟の仲直り)

西平マツ(明治三十四年生) 久保田

嘉手納の屋良ムルチの由来話よ。

この人はよ、兄弟やよ、むぬすこいよ、な、な、他
人とはよくするわけよね。また兄弟とはな、も、な、
道会みちあひつてもよモノも言わん、兄弟仲が悪くなつて。そ
れでよ、屋良ムルチからね、毎日トリーヌチンよ、あれ、
屋良ムルチからやものすこい大きなウナギが出てよ、
トリーヌチンはみんな喰つてしまふわけ。それでね、こ
の主がよ、『これ毎日な、このトリーヌチンはねみんな
喰つて(いるが)、人が盗んでやる』言うて思つたん
でしょ。このウナギが食べるつてわからん。『今日は
ね、畑のアムトウ(畦)に座つてね、この人間がトリー
ヌチン食べる時にね、うちは殺してしまわんとあか
ん』思つてよ、棒持つてきてね。案の定このウナギ出
てね、トリーヌチンものすこ喰いよつたつて。この主が
よ殺したつて。そしたら、このウナギよ死んだつて。
うんだらこの主がよ、(殺したものを)人と思つてね、
他人とはよくしてね、(この人は)他人の前に行つたつ
て、

「今日はね私に頼まれてくれ」つて、夜中よ行つたら、
「何でね」つたらね、

「人殺してね。うちのトリーヌチンみんな喰つていない。

※1 嘉手納 沖縄島中部の西海岸に面
し、那覇から北へ二十三キロの地点に位
置する。戦後は那覇市の八十五パーセン
トが米軍に接収され、巨大な軍事基地が
建設された。

今日は隠れて、これが喰うむん見て、うちは棒に殺しているからね、死なしておるから、あんなね、加勢して人間片付けてくれ」いゆうたよ。友達がよ、

「いいや、もう、あんなはね人殺してあるからね、私はもうできない」つて。そうしてやつたらな、また、仲の悪い兄弟に行つてね、

「私はね人殺してあるから、トーマチン喰つてね、人殺してあるから、あんなね手伝つてくれんか」つて言つたらね、もう、この兄弟がよ、

「あんなは人をも殺したら大変だね。だ、人が見らんうちにね、二人で片づけておこう」つてよ、夜から片づけに行つたらウナギなつたつて。屋良ムルチから出てウナギなつてよ。そうやから、ね、

「あるえーかぬ赤の他人や、や、ゆくする、いーえーかどうやる。指、まーんかい折りーが。(何も不自由してないときは赤の他人はよくし、仲がよいが(その逆の場合はそうじゃないよ)指はどこに曲げることが出来るんだ。前に折れるんでしよう)つて、これからつて。赤の他人や食べさせる間。兄弟はね、いかな兄弟反対やつてもね、いざといえ兄弟(が助けてくれる)。

④ 兄弟の仲直り

松下栄吉(明治三十五年生) 池原

〔方言原語〕

兄弟二人や仲ぬ悪つさしがや。やしが粟作ていんや、あせ麦作ていんトーンチン作ていん、うぬウナジぬ

出じていうちゆ喰いるばーよ。

さくとう、あとーわじてい、さくとう、行じやーになー刃物しかち殺ちえーるばーて、な。かち殺ちやくとう、な。心配し、仕方あならん心配し泣ち。自分ぬ作物うちゆ喰たぐとう、盗人かち殺ちえーるばーよ。自分のー盗人んち。

さくとう、うり、な、しじみられーならんなくとう、人ん頼まらん、あとーうぬ兄弟家んかい行じよるばーよ。兄弟んかい行じやくとう、

「いやーや今ぬぐとうし、ちゆくい喰れー人かち殺すりんあみ」んでい、

「ちゆてーやしが」。やしがな、うれー人他人のーしじみーさんや、な、兄弟、兄弟ぬるないくとうんでい。行じやくとう、ウナジなとーたんりちや。

あんさーに、うぬ人殺しーねーや、人のーかしーならんしえー、ひーじーや仲悪さぬくうふあさが、いじやななくとう、兄弟ぬ二人し行じしじみたぐとうウナジなやーに。

うりから、やくとう「兄弟いへーいちやていんゆーしわるやんどーやー」んでい。人、他人のー死に人しじみーさんが、兄弟の行じやくとうウナジなとーたんでい。あんしる兄弟やゆーしーんでい。

〔共通語訳〕

兄弟二人は仲が悪かったそう。そういう仲であつたが、(弟の方が)粟を作つてもね、麦を作つても、トーマチンを作つても、ウナギが出てきて全部喰われてしま

※2指まーんかい折りーが 他人より肉割が大切だという教訓の譬。

うわけよ。

それで、しまいには怒って、畑に行つて刃物で殺したようなんだね。切り殺したから、もう、心配して、仕方がないが心配して泣いていた。自分の作物が喰われたので、盗人を殺したようなんだ。(ウナギを殺したのだが)自分では、盗人を殺したと思つていた。

そこで、それ、もう、片付けないといけなくなつたので、人を頼むこともできず、しまいには、兄弟の家に行つてゐるわけよ。兄弟の家に行くのと、

「お前は今のうちに、作物を喰われたから人を殺すということもあるか」といい

「突然のことだと思つたが」と。だが、このことは他人に頼んで片付けることはできないので、兄弟、兄弟しかあてにできないからと。兄弟に頼んで行つてみると、ウナギになつていたんだと。

それで、その、人を殺すとね、他人はどうすることできないが、普段は仲が悪い兄弟でも、いざとなつたら、兄弟と二人で行つて片付けたら、それはウナギであつた。

そんなことから、「だからね兄弟というものは、いつでも仲良くするものだよ」と。他人は死んだ人は片付ける手助けはしないが、兄弟にお願ひして行つてみるとウナギであつたそうだと。そんなことから、兄弟は仲良くするもんだよと。

⑤ 兄弟の仲直り(屋良ムルチ)

鳥袋ウト(明治三十八年生) 池原

「方言原話」

トーヌチン植てーたんり畑んじ。トーンチン植てー、うぬトーンチのな、むるねーんばーてー。あんすくどう、兄弟やいっペーくふあさんでい。どうしえーまたなー兄弟やか深しくぬ、くしていーちか話すぬあたいどうしぐわーやてーしが。

ウナジえ殺ち、ウナジるやてーしが、人殺ちえーんりやーに。私ねーやー、なーらうぬ門口んどうーうぬ兄弟や入らんたんりんどー、くふわさぬ。難ぬあたたぐどう、うぬ一番どうしえー、

「私ねーかんかんやぐどうりつかー兄さん、まじゆーんしやつけーしくれー」りちやぐどう、

「いーあんすからー行ちやんてー」りち、兄弟ぬ兄さのーまじゆん兄弟どう行ちやぐどう。

あんしる、ちやふえーぬ深しくぬどうしやていん、きいたい食らいする間どうどうしえーやる。たきにちちに、じんばいぬちよーみぬ集まらんとーならんしえー、兄弟や深しくんり。どうしえーひれーるえーかどうやる。どうしえー悪つさぬ事ないねー、いざないねー「んばーんり。飲らい食たいする間あ心ーちやしがてー、兄弟や、うふ難ぬあたいねー、ひーじーやくんぐどうそーていん、うぬ難、難ぬあたいねー一番先などーたんでいぬ話ぐわーやたるばーてー。

〔共通語訳〕

トーキビを植えていたそうだが。トーキビを植えていたが、そのトーキビが（収穫しようとしたら）全部ないわけ。それで、兄弟の仲はたいそう悪かったそう。友達とは兄弟より親しくしていた。なんでも相談するくらい仲の良い友達であったというが。

ウナギを殺し、ウナギだったそうだが、人を殺したと思ひ。私はね、いまでかつて、門口までもその兄弟の家にすることはなかったそうだよ、仲が悪くてね。災難にあつたので、その一番友達に（相談をした）が取り合ってもらえなかつた。仕方がないので兄弟の家を訪ね、

「私はそんなわけで人を殺してしまつた。さあ、兄さん一緒に手伝つてくれないか」とお願いした。

「そんなことなら、行つてみようじゃないか」と、兄さんは一緒に兄弟と行つた。

そんなことから、どんなに深い友人であつたとしても、あげたり、食べたりの間だけが友達である。困難なことがあつた時に、親身になつて集まらなくてはいけない時は兄弟は大切である。友人は日々の付き合いだけである。友人は悪い事になると、いざとなつたら「いや」と断る。（友達は）飲んだり食べたりする間は心は一つだがね、兄弟は大災難にあつた場合、日ごろは仲が悪くても、あのように災い、災難にあつた時は一番先に協力してくれたという話があつたわけさ。

⑥ 兄弟の仲直り

平田嗣昌（明治三十四年生）豊川

〔方言原話〕

兄弟と一い仲あらんたんでいるば一と一。人とうじこ一い一仲あらんたんでいるふ一じやんよ。あんしえ一ひが、ウナギぬ出じや一に、屋良ムルキぬ働うていト一ンチン荒ち喰て一んぎさん。『くれ一、ぬがらちえ一ならん。殺ふわるない一んち。し一じやぬ夜行じや一にウナギぬ出じと一ひ、出じてい行じや一に樽さ一にすくい殺ちえ一ぎさん。今日や、なり、人たつ殺ちね一ん一んでい、どうしぬ家んかい、

『でいつか私の一人殺ちえ一く行じしじみていく一』んでいちえ一くどう、

『ああ、いや一と一人殺ちえ一れ一私の一行かんぬん一』でい。うぬどうしんで一行かんたんでい。あん、兄弟ぬ家んかいちや一、

『あんしやんど一や一』んでいちし、

『人殺ちえ一んと一私ね一。でいつかしじみていく一』んでい。うぬ兄弟の一人仲ゆ一しえ一ね一んたんでいひが、兄弟ぬくとうなや一に、

『人殺ちえ一ていから行き一るふる』でいや一に、うぬ弟まじゆ一ん行じや一に

しじみていちえ一くどう。

兄弟でいへ一ゆ一ふわるないどう。人他人ゆ一しちえ一ぬ一んならんひんな一でいちぬ話ぬあたるば一て一。

〔共通語訳〕

兄弟とはいい仲ではなかったというわけ。他人とはとてもいい仲であつたようだ。ところが、ウナギが出て、屋良ムルチの側のトーンチンを荒らして喰つていたそうだ。「これは、許してはおけない。退治しないといけない」と。兄さんは夜行つてウナギが出てきたら、出て行つて棒で叩き殺したようだ。「今日はもう、人を殺してしまつたようだ」と思い、友人の家に行き、

「ねえ、私は人を殺したので（一緒に）行つて片付けられないか」と頼むと、

「ああ、お前は人を殺していたら私は行かない」と断つた。その友人は行かなかつたそうだ。そこで、兄弟の家に行き、

「人を殺してしまつた」といい、

「人を殺してしまつたんだよ私は。さあ一緒に片付けてこよう」と。その兄弟の仲はよくなかつたというが、兄弟のことだからといって、

「人を殺したというのなら、行つてみよう」と、その弟は一緒に行つて片付けたそうだ。

兄弟というのは仲良くしてないといけない。人、他人とよくしていても、いざという時には力になつてももらえないもんだという話があつたわけ。

⑦ 兄弟の仲直り（屋良ムルチ）

喜納カマ（明治二十八年生）豊川

〔方言原話〕

うまんけー作てゐるトーマチン喰いくとうでいやーに、「私どうわちやくすぐとう殺ちどうらふん」でいやーに。だまてい行き行きしえーな、後当たてい。人ぬそーんてい思てい行じ、くんぐとうーし喰いたんていいやーに、「あー、今日や、あまー殺し、たつ殺ちどうらさ」でいやーに殺ちやくとう、バツタリみかち、かんしくるぶたんでい。「どー、一大事などゐるむん。私ねーな、今日や人殺ちえーるむん。本当や殺ふる思やあらんたしが、驚かする思るやたしが」んでいいち。

どうしぬ家んかい始まいや行じやくとう、

「アーキサ、いやー人殺ちえーちから、いやーとーどうしえーさんくとうくるさん。いやーとー行かぬ」んでい。「なーくれーな、ぬーんかかららん。兄さんどうかかいる」。兄さんかかいが行じえーちく、

「いやーや、まるえーどうしんちやーとうどうあつちゆるむん。ぬーが人殺ちえーら私どうそーいな。殺ちえーら、どうしーていーかじみれ」でいちえーちく。

「うれーなー頼まらんやーに兄さん前んかい来くとう、どーりん助きていとうらし」んでい言ちさくとう、

「いー」んでい行じ見ちやくとう、ウナギどうやてーちんでーんでいいやーに話る聞かはつてゐる。

〔共通語訳〕

そこで作っているトーキジを喰うからといって、「私をからかっているのでやつつけてやるぞ」と思った。忍んで何度か通っているうちに、とうとう見当てることができた。人の仕事だと思つて行つてみたら、こんなふうにして喰つていたといつて『ああ、今日こそはやつつけてやるぞ』といつておそいかかったら、バツタリと倒れたようだ。「これ、一大事な事になつてしまった。私は今日人を殺してしまった。本当は殺すつもりじゃなかったのに、ただ驚かすつもりだっただけだったのに」とつぶやいた。

友達の家には最初に行くど、

「なんてことだ、お前人を殺したというのなら、お前とは友達はできないので来るな。お前とは行かない」と断つた。「もうこうなつたら、頼る人はいない。兄さんに頼るしかない」と言つて兄さんを訪ねた。兄さんは、

「お前は普段は友達と一緒になのに、どうして人を殺した場合は私を頼るのか。人を殺してしまつたら、友達と一緒に片付けなさい」と言つた。

「これはもう、頼めなくて兄さんの所へ来たのだから、どうか助けて下さい」とお願いすると、

「そうか」と言つて二人で行つて見ると、それはウナギだったそうだという話を聞いたよ。

⑧ 屋良ムルチ（兄弟の仲直り）

喜屋武英正（明治三十年生）久保田

〔方言原話〕

毎日作荒らさつたぐと、トーヌチンんでーうり取いがちよーたんでい、うぬ大蛇。あんしえーぐと、たつ殺ちえーるふーじてーな、くり、ぬすどうでい殺ちやぐと、友達ぬ家んかい行じ、

「人殺ちえーるむん助きていとうらし」んでい行じやぐと、友達えーな、

「あ、人殺ちえーならん。しーじやんでいしえー、いっペーくふあさし、むるあたらぬーやたんでいうとうだんな。むる、あたらんし、やし、うつとうぬ、

「人殺ちえーるむん」。さくとう、しーじやーな、

「あんやていから」んち、

「まじゆん、片付きていくーわ」んでい行じやぐと、人あらんウナジなたぐと、二人さーに家かいかたみていち、あんし、ありさんどー話やしが。

あんさーにから、兄弟ゆーしわるやるんち、仲良くなとーたんでいぬ話。

〔共通語訳〕

毎日作物を荒らされたので、トーキジなどを荒らしていたそうだ、その大蛇が。そこで、叩き殺したものの、これは、盗人を殺したと思ひ、友達の家に行つて、「人を殺してしまつたので助けてちょうだい」と行つたら、友達は、

「あ、人を殺したなら断る」。お兄さんとは、たいそう

仲が悪くて、相性があわなかったそうだが兄弟は。ほんとに相性が悪かったというが、弟が、「人を殺してしまつた」(という)と、仲の悪いお兄さん、

「そんなことであるならば」と、

「一緒に片付けてこよう」と行つてみると、人ではなくウナギであつたらしく、二人で家に担いできたというふうな話であつた。

そんなことから、兄弟はよくしなないといけなさと、仲良くなつたという話。

⑨ 兄弟の仲直り(屋良ムルチ)

喜納嘉徳(大正七年生) 東

この屋良ムルチの付近に畑があつたらしいですよ。この畑にトウモロコシといつてね、昔は名産ではトーヌチンこれを作つてあるんだが、たまたま、このトーヌチンはちぎられておるわけさ。それで、泥棒がやつておると思つて、ある日、隠れておつてよ、この泥棒捕まえるつもりだが、そろそろこの泥棒が出て来てしまつたんだから、棒で打ち殺してしまつたんだ。「大変」と思つて今度は、常日頃ていねいにしておる友達にそういう話を伝えたらね、

「ああ、くれー私がいならん(ああ、そういうことは私は手伝えない)」といつて断られておる。死体を処理するためだから、「どうも、これは困つたねえ」と思つて、今度は日頃、常日頃、なんか(仲の)悪いお兄さんかね所行つて、

「実はこうこうして人を殺してしまつた。だが、死体処理するのにあんた協力してくれ」というもんだから、兄弟は、

「それじゃあ、二人で処理しよう」といつて。行つてみたところが人間じゃなくてウナギであつた。人間ではなくウナギがトーヌチンを食つていたのだが、人が盗んでいると最初は思つていたわけ。そういう伝え話だけどね。

⑩ 兄弟の仲直り(蛇)

伊佐安弘(明治四十一年生) 山里

雨降りそうになつたら、この屋良ムルチは海の鳴るよよにしてね、ゴー、ゴー、ゴーして鳴りよつたですよ。ね。

あれはね、まあ、兄弟二人農業でね、その屋良ムルチの上の方に黍、トーヌチン、これを満作させたらね、毎晩このジャア(蛇)が出て来て取つてしまつてね。それを、この長男の方が、腹も立てて「もう、これはもう、これではいかなから」と思つて、このジャアを殺したらしい。殺して見たら人間になつてしまつてね。人間を殺したと思つて、最初は友達のところに行つて頼んだらな、

「あー、これは私は知らないよ」といつて。なー、やつぱり頼りになるのは兄弟だと思つて、兄弟のところに行つたら、

「なるほど。うーん、そうか。じゃあ行つて片付けようねえ」といつて、兄弟二人行つてみたら、今度は

ジャーだったというお話があつたんですよ。それから、兄弟仲良くしてねえ、日夜、働けるようになったと由来談義があるんですよ。

⑩ ヤラムルチのへいけにえ・兄弟の仲直り

島袋新栄(明治三十二年生) 池原

〔方言原話〕

昔うぬ屋良ムルチんかいでーじなまぎウナギぬうたんち。あんさーに、一人ぬ青年の、「うぬふーじーし、皆が作くてーるそ菜類や色々ぬ農作物栽培しえーし、あんし荒らさつてーならんくどう、くぬ盗人なー私かちみでいやりわる。うつたーがーなーウナギぬうんでいちえー知らんなやーに、盗人ぬそーんでいちぬうみーぬあやーに、毎晩夜番ていさーにうぬ盗人かちみりわるやるんち、あんしそーるばーいに。また、一人ぬ年寄ぬ人、部落の長老ぬ、

「うれー、うぬウナギんでいしえー、何年生まりぬーそーぬ人ぬくぬ部落ぬ美人ぬ女性、うぬウナギぬはんめーなしわる作えー荒らさんーでいんちぬ話ぬあん」でいち、さーにそーるばーいに、うぬ美人ぬ女性今日までいどう命どうあるな、今日やウナギぬはんめーないんでいいる日に。あんさーに、うぬばーに神め話ぬちむえーぬばーどうやいさに。うぬ、ウナギぬ、上んかい雷ぬ落ていやーに、あんさーに、うぬウナギぬえー雷さーに死なちえーたんでい。

あんさーにうぬちむえーさーに、盗人ぬふどうぬ作くえーやどーする。ウナギのーしえーねーらんでい

ち、うんぐどうしえーる人私ねーな、盗人番どうずんでいちさーに、くぬ盗人私が打ち殺ちねーらん。ひーじーや、常日頃兄弟とうんいつべーくふあさぬ、ちやふえやていん交際んしえーねーらん、相手んしえーねーらん兄弟どうやし。あんさーに、どうしどういつべーしくふかしくそーるどうしぬうやーい、
「な、盗人たつ殺ちねーらん。私ねーうぬ盗人なーちやーしん、処理しわるやるむんでい」うみーぬあやーに、どうー一人しえーならん事んち、な、兄弟ぬ家んかい行からんくどう、ゆーひだとーるどうしぬ家んかい行じ、うぬ、盗人しじみでいわるやるんち頼みーが行じえーるふーじやくどう。

「あーとーうりやれーなーいかなだ、ちやーるふかしくぬどうしやたんでん、うんな事私ねー手や入りらん。私ねーあんしーねー私までいんでーじないくどう」でいちさーに。あんさーに、うまからーはにらつてい、どうしから断わらつてい戻たくどう。ふいーじーな、いつべーくふあくそーる兄弟ぬ家んかい、「ちやーし向かてい行ちゆがやー」んちそーるばーいしがな、頼るかたーねーらん事んち、兄弟ぬ家んかい行じやくどう。

「あー、うぬふーじーやれー、じひ二人さーに立派片付きわるやるんでいち、まじゆーんなてい行じえーぎさくどう、人あらん、ウナギどうやたるんち。あんし、な、ウナギぬはんめーなてい、くぬ世すんでいち去る女ん命ん助かてい、うりやし。な、あんし、ひーじー、どうしぬあんししち兄弟とー暮らざらんむ

んぬうりやし、兄弟め立派うりさんでいちぬ関係ぬあやりに、「ししえーきれー前んけーゆやーるん」しえーてーげーうぬちむえーから出じとーんでいちぬ話やるばーてー。

いかな、ちやーるかなさるどうしやたんてーん、兄弟ぬぐとーねーらん。どうーぬ兄弟「あんなやていから助しきりわるやる」んちどうやし。な、どうしのとーめーの話どう、どうしびれーないるしじやる。にそくうとうちまでい、兄弟助しけーならんていへー、うぬちむえーからどう。な、
「ししえー切れー前んかい寄やーにしえー」てーげーうぬちむえーから出じとーるはじんち、ぬ、うにーやるばーて。昔話あんしあんでい。

〔共通語訳〕

昔、その屋良ムルチにたいそう大きなウナギがいたそうだ。それで、一人の青年は、「こんなふうに、皆が作った野菜類やら色々な農作物栽培してるものを、あんなふうに荒らされては困るので、この盗人は私がつかまえてやろう」。この人たちはウナギがいるとは知らないで、盗人が、人の仕業だと思い、毎晩夜番をしてその盗人を捕らえてやろうと、様子をうかがっていた。すると、一人のお年寄りの方が、部落の長老が、

「それは、そのウナギというものは、何年生まれのなるといふ干支生まれで、部落において美人の女性をそのウナギの生けにえにしないと、作物を荒らさなく

るといふ話がある」といって、そんなこんなしている時、その美人の女性は今日までの命だね、今日はウナギの生けにえになる日のこと。すると、その時、神の話の出来事だろうね。その、ウナギの上に雷が落ちて、それで、そのウナギは雷で殺されたそう。

そうやって、盗人は人であつて、作物が荒らすのはウナギの仕業とは思わないので、そうする人を（捕らえてやると）「私が、盗人番をしてやろう」とこの盗人をその青年がやつけた。普段は、常日頃は兄弟との仲はたいそう悪く、全く交際をしてなく、付き合いない兄弟がいた。しかし、友達とたいそう深く付き合っている友達がいたので、「ね、盗人を殺してしまつた。私はその盗人をどうしても片付けなければならぬ」と思いがあつたので、自分一人では出来ないし、兄弟の家にも行けないので、日ごろ仲良くしている友達の家に行き、その盗人を片付けたいと思ひ頼みに行つたようだ。

「ああ、そんな事であれば、どんな仲の良い深く付き合っている友達であつても、そんな事に聞かせることはできない。私が手伝え、私までも大変なことになるから」といわれた。そうやって断られて、友達に断られて戻つた。普段はたいそう仲の悪い兄弟の家に、「どのようにしてお願いすればいいものかなあ」と悩んでいたが、他に頼る人がいないので、兄弟の家に行つてみたら、

「ああ、そういうことであれば、ぜひ二人で立派に片付けよう」といって、一緒に行つてみると、人ではな

* ししえーきれー 体の肉は切つても
寄り合つて一つになるものである。
#2にそくうとうち 意味不明

くウナギであつたそうだ。それで、もう、ウナギのえじきになつてこの世を去ろうとしていた女の命も助かつたという話だが。だけで、こんなふうには、日ごろ、友達と仲良くして、兄弟とは仲良くしてなかつたけれども、兄弟の手助けでちゃんと問題を解決できたということ、で、「ししえーきれー前んけーゆやーるんしえー」という言葉は、その話からでたという話なんだ。どんなに親しくしている友達であつても、兄弟のようではないと。自分の兄弟は、「そんなことであればなんとかしよう」と手を貸してくれるが。もう、友達は普段の適当な会話で友達をするだけである。にそくうとうちまでい兄弟の助けはできないというのは、そういう意味あいである。

「体の肉は切つても寄り合つて一つになるものである」という言葉は、そういう意味合いから生まれたものであると思うわけさ。昔話にそういう話があつた。

② 兄弟の仲直り

屋宜カメ（明治四十一年生）安藤田

「方言原話」

屋良ムルチとあるでしょう。あつちでね、昔は野菜、トーンチンと作るわけ。この屋良ムルチからこんな大きなウナジさ、ウナジぬ出じていち、うぬトーヌチンむるうちゆ喰てい残さん。毎晩かな（らす）夜しか出ないって。夜出てうち喰たくとう、うぬ主が、「かんしな一、くぬバカ、バカにさつてーねーらんむん殺し

わりやる」んちよー。あんざくとうや、うぬムルチから出じとーるウナジ、巡いが出じよーぬ土地主め、棒さーにすぐい殺ちねーんよ、うぬウナジ。あんざくとうな一、あつたに見ちえーな一びつくりし、な一、人間んち考たるば一てー。ウナジどうやし。うつびそーたんでい。友達ぬ家にどう、

「いーいん私ねーならんぞー」でい友達は断つたから、あんざくとう、仲の悪い兄さんに、

「兄さん、今日やな一私ねー人殺ちねーんむん、考ていとうらさんな一」んでい言ちやくとう、あんざくとう、うぬ兄さんや、

「あんやていから」んち行じやんでい。行じやくとうウナジなていや、

「あい、ウナジどうやるむんいや一人んでい言んな一や一、うれーウナジどうやんぞーや一」

んでい兄さんが言ちやんでい。あんざくとう、うぬウナジ兄さんとう妹とう二人しかたみていち、家ち殺ち煮ち食だくとうや、うぬ友達えーな一、「ウナジどうやてーるむん、ウナジどうやてーるむん私ねー行かんたるや一」んでい思てーるば一てー。うにーから一後悔そーるば一てー、うぬ友達え。

あんざくとう、ウナジえうまぬ家族ん、うぬ、兄さん達家族ん煮ち食だくとうや、うぬまた友達え、門からファイファイぐわーし歩ちゆたんでい。ファイファイぐわーでいねー指吹ちゆしえーや一。ファイファイぐわーし歩ちゆたんでい。あんざくとうや、だーうれーな一、「ならん」でいちる帰たつさいや一。あ

んさくとう、うれ、くいらんたんてい、うりんかいや、友達んかいや。くいらん、また、兄さん達家族とうや、妹の家族、皆さーに食でいぎさんていぬ、私達主人ぬお父さんが言みしえーたん。

あんさくとう、うれ、「兄弟んでいしえーや、いかなくふあざていん何しん、いさんていいーねー兄弟ぬる見どうる、どうしのー見だんどうーや」てい言みしえーたん。うんぐとうやんでい。だ、うれ、気分どうみつくわさる本当、ちむからじんからみつくわさるむのーあらんしえーや。なり、自分ぬ意見どうあわんどやなり、あんし悪さるばーやつさいや。うんぐとうし言みしえーたんどー、私達親ぬ達が。

〔共通語訳〕

屋良ムルチとあるでしょう。あつちでね、昔は野菜、トーンチンと作るわけ。この屋良ムルチからこんな大きなウナギさ、ウナギが出てきて、そこにあるトーマチン全部食べてしまった、余すところ無く。毎晩、それも、必ず夜しか出てこないらしい。夜出て食べてしまうので、その主が、「このように、この踏みまじられてはたまらない。殺さないといけない」と（考えでいた）。そこで、そのムルチから出ているウナギを見回りに行っている土地の主が棒で叩き殺してしまつてね、そのウナギを。すると、一瞬見たら、びっくりしているの、（やつつけたのは）人間だと思つていたわけだな。ウナギなんだけど。こんなに大きかつたそうだと。友達のところをお願いに行くと、

「いや、私は手伝えないよ」友達は断つたから、そこで、仲の悪い兄さんに、

「兄さん、今日は、私は人を殺してしまつたので、考えてもらえませんか」とお願いすると

「そんなことであるならば」と（一緒に）行つてみたそうだと。行つてみるとウナギだつたので、

「あれ、ウナギなのにお前は人だというのが、これはウナギだよ」

と兄さんが言われたそうだと。そこで、そのウナギを兄さんと妹と二人で担いできて、家で殺して煮て食べたから、断つた友達は、もう、「ウナギであつたのか。ウナギであるなら私は行けばよかつたなあ」と思つたようだね。その時から後悔しているわけさ、その友達は、

それで、ウナギはその家族も、また、兄さん達家族も煮て食べたから、その、また友達は、門からファイファイと歩いていさうだ。ファイファイぐわーというとき、指笛を鳴らすでしょう。そのようにしてファイファイして歩いていさうだ。そうだけど、友達は「できない」といつて（断り）帰っているでしょう。だから、（ウナギは）あげなかつたそうだと、その人には、友達には。あげないで、また、兄さん達家族とね、妹の家族、皆で食べたそうだと、私達の主人のお父さんが話していました。

だから、「兄弟というのはね、どんなに仲が悪いだろうがなんだろうが、いざという時は兄弟が助けてくれるもので、友達は助けてくれないよ」とおつしやつていた。そういうことなんだって。ねえ、仲が悪いと

いうことは、気が合わないだけで、本当は心から、心底から憎いと思つてゐるわけではないさあね。それは、自分と意見が合わないから、仲が悪いということであるから。そのようなことをおつしやつていたんですよ、私達の親達は。

⑬ 兄弟の仲直り

上樞ウサ(明治三十一年生) 宮里

〔方言原語〕

「兄弟二人うしが、兄弟ばかり、どうしよう相手さうに。ちよーどうなまにいていなーンナジぬ食物荒らすつてーくどう、なー、ンナジどうやしが入んない思やーなかい殺さーに、あんさーどうしに行ちやーに、」
 「私食物お荒らち、私のー今日人殺ちえーくどう二人片付ていくーやー」んちやぐどう、どうしえー、
 「え、いやーや、うぬふーじ人間どうやていやー、今からいやーとーどうしえーさん。なー、ならぬん」
 「でいちやぐどう、ちやーんなららん。また兄弟ぬみーんかい行ちやーに、」
 「兄さん私のーな、野菜ちやー荒らちならな、今日や人殺ち煙置ちえーくどう、でいか二人片付きていくー」んでいちやぐどう、
 「ならんさ」でいうしが、
 「とー、うぬふーじ兄弟んでい、私顔までいん悪くないくどう、いやーや、でい。二人片付きーが行じやぐどう、ンナジなやーに、家んかい持ちちち、なー、隣どうさーむる煮ちかだんでい。」

とー、うにーから、兄弟やぬちえーぬからん。「私顔までいんいやー、悪くなすくどう、あんやらーでい、くー」んでい行じやくどうンナジなやーに、人あらな。うりから兄弟や、やなむぬん、いーむぬん兄弟やぬちえーぬからどうぬ言葉なとーんでい。」

〔共通語訳〕

兄弟二人いたが、兄弟とは付き合わないで、友達と仲良くしていた。そんな中、ウナギが作物を荒らしていたので、もう、ウナギなんだけど、人が荒らしていると思つて殺し、それから友達のところへ行き、
 「私の作物を荒らすので、私は、今日(荒らした)人を殺したので二人で片付けてこよう」とお願いしたら、友達は、
 「え、お前はそういう人だったのか、これからはお前とは付き合えない、できない」といい、絶対に付き合えないと。そこで、兄弟の所に行つて、
 「兄さん私はもう、野菜をいつも荒らされて困つてしまひ、今日は人を殺して煙に置いてあるので、さあ二人で行つて片付けてこよう」というと、
 「できない」と断るが、
 「だけど、こんな兄弟がいると思われて、私までも悪く思われるから」と。二人で片付けに行つてみたら、ウナギだったので、家に持つてきて、もう、隣同士みんなんで煮て食べたそうさだ。
 そう、その時から、兄弟は切つても切ることができない仲だと。「私の面目まで悪くなるから、そうなら

ないように片付けてこよう」と行つてみたらウナギで、人ではなかつた。

それから兄弟は、いやなことも、いいことも（一緒に、兄弟は切つても切れない仲だという言葉ができた）。

④ 兄弟の仲直り

豊田喜連（明治三十四年志 山内

伝え話であるがね。ある所に、兄弟が愛情がなくて非常にいつも互いに助け合いもしないような人。または、兄弟以上な非常な親密な友達がおつたようです。その一人が農作物を植えたらね、ウナギが出てきて、モサモサ荒らしたようですが、『これはどうして退治するかなあ』と思つてみな考えてみたら、ある人が、兄弟の一人の方に、

「そんなら木灰を持つて行つて、その通る道の方にそれを撒いておきなさい。そうしたら、それはとれるから」と言うことで話したそうで。その男は、それを聞いて「それならば、たくさんの木灰をもらつて、その通り道の方にはいたほうですがね。『いつも、農作物荒らされて困るからと思つて、そういうことをして、もう、いつかは退治しないといけないなあ』と思つて、人からそういうことを聞いて、木灰を撒いたら、ウナギは出て来て農作物を荒らそうとしたから、それ、ひつかかつて、木灰の方に、もう、ウナギは荒れてないようになつたら。ある一人の男が見たら、ウナギが出てムサムサしている。『ああ。これはよいことをした

なあ』と思つて。

もう一人の男は、兄弟とあわないその男は、それを棒で殺してしまつたと。『良いことをしたなあ』と思つているが、それは大きくて自分で持ちきれなかつたという話だ。それが、一人の友達の方に言つてみたら、非常に助かりもしている、いつでも親友の友達に行つてみたら、

「実は、私はこういうことで、誤まつて人を殺してしまつたよ、棒でなぐつてしまつた。それをもう、世の明けないうちにそれを片付けたいと困るから、あなた手伝いてくれんか」と言つたら、その人が、

「そんなことなら、そんな人は、うちなんか、わしはあぶないから、そういうことはやらない」と。非常に親切な友達であつたが、そういうことには、わしは手を入れないとことにしたら。一人の人の気持ちの合わない兄弟の方に行つてみたら、行つてみて、

「助けてくれ」といつたら、

「ああ、それならば、私は誤つて人を殺してしまつた」

「そうか。そんなら、ああ、そんなら、そう、早くやらなんといかない」といつて、その気の合わない兄弟が「その行こう」といつてやつたら、行つてみたらウナギであるし。ウナギである。そういうことであつたようですが、その友達の方に行つたら、「そういう人殺しは、仲良したる者は、その悪い事は、そういうことは、わしは一緒にやらない」といふうと。また、気持ちの合わない兄弟の家に行つたら、兄弟の方が助けてくれる、やつたと。行つてみたらウナギである。

そういうことがあつて、そういうことであるからね、「指まーんかい折りれー」（指はどこに折ることができるか）前に曲がるの、後ろには曲がらない。どんなに意地悪い兄弟も、そういうことになったら、難しいことになったら、助けてくれるのは兄弟だ。兄弟という愛はな、切つても切れない。どうしても兄弟ということは、非常に細密な愛情であるだろうと思つてゐる。また、非常に親友している友達のは、それを聞いて非常に後悔した。兄弟愛というのは、親戚というのは、その他、愛情がある。難しいことになったら助けてくれる。そういうことで、昔の話はそう聞いてみたがな、それ別にあつただろうと思つてそう話すすよ。

⑬ 兄弟の仲直り

知念真章（明治四十二年生） 小屋

屋良ムルチから何かが出て来て作物を荒らしたそう。その人「これはいけない」といつて棒を持つて行つて、「退治してやる」といつて力いっぱい殴つたそう。そう、倒れてしまつてね。今度は仲のいい友達に、

「かちくももう、泥棒さんも殺してしまつて、一緒になんとか片付けてくれ」といつたら、

「大変だねえ」断られてよ。仲の悪い友達にいつたら、「じゃあ、それは兄弟だからやらないいけない」といつて、一緒に行つたらな、人間じゃなくてそのムルチのウナギだつたそうや。

それで、そのウナギを片付ける。食べるといかん。その、友達は歩いたがな、もう、それから何とも言わない。その伝説がある、屋良ムルチの。

それで、仲の悪い兄弟は、いざとなつたら兄弟という。（それがきつかけで）仲良しなつた。

⑭ 兄弟の仲直り

知花ツル（大正五年生） 藤間良

ほんとうはこれウナギであつて、野菜、植物を荒らされるものですから。男の兄弟二人いて、二人の兄弟仲悪かつたらしいんですよ。一人の（兄弟には）とても（仲の良い）、友達がいたらしいんですよ。ある日、畑荒らされるもんだから、夜忍んで行つて殺したそうです。したら、血（は流れて）こつちにうずくまつているの見たら人間と思つたでしようねえ。

「私は、こうこうも人殺してしまつたんだけど、どうすればいいかねえ。考えてくれ、私は、もう、どうするか」つていつたら。一緒にこれ隠したりなんか、助けてくれという意味でしょう。したら、友達は、

「これだけは私でできないよ。兄弟の家に駆け、駆け」つて。今までとても仲悪かつた兄弟が、ま、こちら（友達にお願ひすることは）はできなかつたけど、兄弟の所はまず行つてみようと思つたら、兄弟は、

「それなら早く片付けないと大変だ」と行つたら、大きいウナギだつたそうですよ。ウナギだつたもんだから、炊いて食べるでしょう、家持つて行つて。この人は、前で断つた人は、ちよつとやらやましがつて、こつ

半1 仲の悪い友達 仲の悪い兄弟の語り
違ふと思われ。

ちから「オホ、オホ」して咳して歩いたつていう話な
んですよ。

⑦ 兄弟の仲直り

吉田（鳥巻）タケ（大正七年生）知花

〔方言原話〕

昔、兄弟やあんまり仲ゆたしこーねーらん。あんさーに、どうしぐわーどうどうゆーやそーてーるばー、くぬある人どー。どうしどうじこーゆーさーに、兄弟どーなーむるくふあていあんすかーゆーさんてーるばーてー。あんすくどう、屋良ムルチぬ大蛇どう殺ちえーしが、うれーなーじこー畑荒らすたんでいよー、うぬージャーやどー。あんさーにさくどう、うりどう殺ちえーしが、人けー殺ちえーんでい思みとーるばー、くぬ兄弟のどー。あんすくどうなー、どうしぬ家んけー行じやくどう、

「私ねなー今日生ち人けー殺ちねーんしが、でいはいやーしーていーし片付きていどうらはんなー」

でい、どうしぬ家んかいは行じやくどう、

「はーつ、いやー、うぬ事でーむん私ねーないんなー。いーいーいー、うれーなー、いやーがるないどう」

でいちさくどう、「なー、ちゃーあてーれーしむがやー」でいいやーに、あんさーに兄弟ぬ家んけーなー、

「なー、あんならーからーなー兄弟どうかかいきーる」

でいいやーに兄弟ぬ家んかいは行じやくどう、

「なー、人生ち人けー殺ちねーんしがなー、でいかなー、いやーしーていーし、なーうりしどうらさん

なー」んちやくどう、

「はつさー、あんやていからなー、でーじなとーさ」

でいいやーに、

「ディツチャ早くなー」でいいやーに、兄弟やよ、まじゆーんな行じやーに、うれー片付きーんさくどう、

なー、ジャーどうやんしえーやー。あんさーに二人さーに片付きてい。あんし、しえーくどう、「ちゃー兄弟どうーぬしどうあたらさーふる。人いじやないねー

あんでやんどーやー」んち、な、物知らしやるばーてーなー。「人かまちゃい、ヒヤヒヤふるえーかどう、どうしんどうしえーうりやる。いじやぬんかいかいねてー、今でーじないんどーでいる立場や親兄弟ぬどう考うする。たがんならんどー」どいるうぬ、話ぬちゃー聞かさりーたさ。「うんくどう、兄弟ちやー仲良くさんねーてー、いじやしめるたじやーないねー、兄弟親兄弟ぬどう助きーうする。人のーならんどー」でい。私たー親ぬちやー、ちやー言らりーたさ。

〔共通語訳〕

昔、兄弟あんまり仲が良くなかつた。それで、友達とよくしていた、このある人はね。友達ととてもよくしてて、兄弟とは仲が悪くあまりうまくいつていなかつたんだらうねえ。それで、屋良ムルチの大蛇を殺しているが、これがひどく畑を荒らしていたそうだ、そのジャー（蛇）がね。そんな事があつて、そのジャーを殺したのだが、人を殺したと思つていられるわけその兄弟はね。そこで、友達の家に行つて、

「私はもう今日人間を殺してしまつたので、さあ、あなたも一緒に片付けてもらえませんか」と、友達の家に行つたら、

「なんてことだ、そんな大変なことだもの私は手伝うことはできない。だめだ、これは、あなたがやりなさい」と断られたので、「もう、どうしたらいいかねえ」と思い、そこで兄弟の家に行つて、「もうこうなつては兄弟に頼るしかない」といつて、兄弟の家に行つたら、

「ねえ、人、人間を殺してしまつたので、さあ、あなた一緒に片付けてもらえないか」と言つと、

「そうか、そういうことなら、大変なことになつてる」といつて、

「さあ、急いで」といつて、兄弟はね、一緒に行つて、それを片付けようとしたら、それは、ジャーさあねえ。

そこで二人で片付けた。そうやつたので、「いつも兄弟は、自分の身内を大切にするものだ。他人はいざという時は頼りにならない」と、もう、教えであるわけね。「他人はご馳走したり、ヒヤヒヤとおだてている間は、友達は友達であるが、いざ困難なことが起つたら、今大変なことになるぞという立場の時は、親兄弟が力になってくれるものである。だれでもできるものではないよ」というその話を聞かされていた。「このように兄弟はいつも仲良くしないとね、いざ大変なことが起つた場合は、兄弟、親兄弟が助けてくれるものだ。他人にはできないよ」と。私たちの親は、いつも言つていたよ。

⑬ 兄弟の仲直り（屋良ムルチ）

桑江カマド（明治三十四年生 東橋原

〔方言原話〕

屋良ムルチんでいしえー、ウナジぬまぎーぬうたんでい。あんざーに夜ないねーな、畑んかい出ていちやーにて、むる作荒らちよ。あんざーなかい、ある日兄弟がうりが殺ちやぐと、あんざーにない、ひーじーやくふあさしが、な、うり人んかい言らんしえーや。人殺ちえーぐと、人どうやるんちてー。あんざーに行じやーに、兄弟んかい話さぐと、

「いや、人殺ちえーていから、あんしえーうれーな、人んかいや語ららんむんぬ、あんしえー、私た二人し処理ささーやー」んち、あんしやたんでい。ウナジどうやんでいど、屋良ムルチぬ話。

〔共通語訳〕

屋良ムルチというのは、ウナギの大きいのがいたそう。それで夜になると、畑に出てきてねえほとんど農作物を荒らしていた。そうしたもんだから、ある日兄弟（の一人が）ウナギを殺したので、それでも、普段は仲の悪い兄弟だが、そんなこと他人に言うことはできないさあねえ。人を殺しているわけだから、（ウナギだが）人を殺していると思つているからね。それで行つて、兄弟に話すると、

「お前、人を殺したのであれば、そういうことは他人に話すことはできないもの、それなら私たち二人で処理しようねえ」と、そういうことだつたそう。

ウナギであつたそうだよ、屋良ムルチの話。

⑬ 兄弟の仲直り

永山ウシ(明治三十七年生) 大里

屋良ムルチに大きなウナギがいたつて。兄弟はいつも仲が悪かつたつて。そしたら、弟がね屋良ムルチで大きなウナギを取つたらしいですよ。伝説は屋良ムルチは大きなウナギがいたつて。夜は出てね、あつちこつちの農作物を害するといよつた。そう話だつた。これはね、弟が畑に行つたからウナギ取つたんでないかねえ。殺して取つたわけよ。だからね、

「えー兄さん私ねーや、人殺ちえーしがやーちゃーすがやー。(ねえ兄さん私ね、人を殺したがねどうしようかねえ)。人に頼んだらね断られたつて。

「私、人を殺してあるからね、あんた一緒にこれ片付けてくれ」つて人に頼んだらね、「こんなことは出来ない」と断られたつて。自分も罪になるでしょう、「こんなこと出来ない。やらない」と他人に頼んだら断られたつて。どうどう、いつも仲の悪い兄さんに、

「えー兄さん、私ねー人殺ちえーしがやー、な、まじゅんざーに片付けていとうらさんなー兄さん(ねえ兄さん、私は人を殺してね、も、一緒に片付けてくれないかねえ、兄さん)」いつたらね、

「あんしえーまーんかいあがだー、でーじやさ、でいっか一緒に片付けよう(それはどこにあるんだ、どれ、大変なことだ、さあ、一緒に片付けよう)」と、この仲の悪い兄さんがいつたらしいよーねー。そうたら、

それから後は、いざとなつたらね、大事な時に兄弟というふうな話にあるわけ。

「指まーんかい折りが(指はどこに曲げることができるか)指は前にしか曲げることができないでしょう、だから。

⑭ 兄弟の仲直り(猪)

普真アキ(明治四十三年生) 胡屋

あんた違わかる、聞いたことないかな。屋良ムルチいうて、それにちよつと似ているけど、そうではない。

農業する人であつたそうだけど、毎日、もう畑を荒らされて、夜なつたらもうあの畑を荒らして、もう「これではいかん」と思つてね。「今度捕まえたらもう殺してやるぞ」と思つてね。腹立つて、自分が難儀して作つた作物をねみんな荒らしてなくなるから。そうする間も隠れてあの見えたら、隠れて見えていたらね、ほで、黒いのがきよつたそうだよ。「あ、これだな泥棒は」言うてね、隠れて見えているから、棒持つていつていたそうだよ。棒でね、コンと叩いたらね、動けなくなつたそうだよ、黒いのは。「あら、これ、なるほど、もう、私人動かない。人殺したんだな」と思つてね。とつても友達に、もう、朝晩も遊んでいる人が酒飲んだり、飲み友達よ。自分のまた兄弟はおるけどね、あれは友達で。この友達とね兄弟みたいにしていたそうだな。

※「指まーんかい折りが(指を折ると自分に向う、そのことから、身内のことを先に奪えるのが自然の人情である。他人よりも肉親が大切という意味。

「私は、今日人殺してあるからね、夜明け頃になつて、ちよつと一緒に行つてみてくれない」つて頼んだぞうだね。頼んだらね、

「あんだ、もう大変しているよう。人殺したらあんだ、いいえ、私はこんなところ行かないよう。二人でもやられたといつておいて、こんなところには行かない」と言つてね突つばねてね。行かないからね、後、自分の兄弟は仲悪いけど、

「友達に行つてくれといつて頼んでも聞かないから、お兄さん一緒に行つてくれないか」言つて、

「そ、お前大変だ。やっぱり兄弟はね、いざという時には力になるなあというか初めてわかつたつて。いつも仲が悪くても、このばんなつたらね。」

「じゃー一緒に行く」言つて行つたらね、この兄弟二人夜明けに行つてみたら、人間ではないね。猪だつたぞうだよ。それで、とつても安心したんだな。

「あつ、猪だつたら。人を殺したと思つているけども安心した」言つてね。それからもう、人間はいくらいい友達でもね、いざという時にはもう、兄弟に懇親を打ち込んで助けてくれる人はいないといつて初めてわかつたぞうだよ。

これ屋良ムルチに似ているけど、そういう昔話。それ短いいけど、あつた聞いたことしか覚えてないから、そんなにおもしろくもないんだけど。

② 屋良ムルチ

比嘉真信（昭和二年生）中の町

屋良ムルチのクムイの近くにね、とつても仲の悪い兄弟がいたつて。で、もう兄弟だのにもう他人以上に仲悪くて、お互い友達としかお付き合ひしない。たまに、弟の畑が屋良ムルチのクムイの側にあつたつて。そしたらね、もう本当に作物が踏み荒らされてね、もうワジワジしてね、「けしからん」と。それで、その弟はある日ね、棒を持つてね潜んでいたつて。もう、作物を食い荒らす奴をやつつけるつて。そしたら、やっぱり、夜、夜中にね、ガサガサガサしてね音がして、で、来たつて。てつきりまた作物を踏み荒らす悪い奴と思つてね、一生懸命もうその泥棒だと思つて叩つ殺したわけだ、ボンボンね。それで、もう感情がげきして、やつつけて後にねハツと気がついて、「あつ自分はあんまりやり過ぎてね、人間を殺してしまつた」と驚いて、びっくりして、それでもう家帰つてきて、「さて、どうしたか」と。「もうあんまり怒つてしまつてね、とんでもない人を殺してしまつた。やっぱり、こらしめるつもりが殺してしまつた。びっくりしてしまつて、「どうしたもんか」と。兄貴の方とは仲悪いし、仕方がないから友達の所行つて、「でーじなとーっさー。盗人たつくるちねーらんさー。ちやーしえーましがやー（大変な事になつてしまつた。盗人を殺してしまつた。どうしたらいいかねえ）」と言つたら、そのお友達がびっくりして、

「いやーなーむのーうまーん。私ねーなうれーわか

らんどー。はーさ、うれーなー、ちゃーさらーましが私ねーなわからんどー（おまえなんてことしたんだ。私には関係ないことだよ。もうどうしよう、これどうしていいか、私は知らないよ）。もう、そんな殺人とは関わりたくない。この常日頃はもう兄弟以上に仲の良かったお友達がね、こういうことを伝えたたんにね、冷たくもう関わりたくないと言って逃げて、もう弟はガツカリしてね、あんなに信頼した友達だのに相談にもものつてくれない。この際は仕方がない、もう頼る友達もいないから仲の悪い兄貴の所に行つてね、

「ヤツチー、じゃーふえーなとーさー（兄さん、大変なことになってしまった）」

「ぬーが（なんだ）」

「畑どうく、なー荒らさつたかどうか、わじやーなかい、ちゅーや待ち伏せさーなかい、たつ殺しえーならんさー。けー死じよーるはじやさー（畑をあまりにもひどく荒らされたので、怒って、今日は待ち伏せしてやつつけてやろうと（思いつきり限った）。たぶん、死んでいるはずだ）」

「あんし、ちゃんぐーさが（そして、どうしたか）」

「あんくどう、かんかんしーや、くわつきとーちやーなかい、しぐ、うまんかい来くどう、私棒さーうち殺ちゃんよ（だから、これこれしかじかで、隠れていて、すぐ、そこに現れたので、私が棒で叩きのめしたんだよ）」

「あんし、ちゃんぐとー（そして、どうなったんだ）」

「死じよーるはじどー（死んでいるはずだ）」

「あんし、うりでーじなとーるむんやー、でいかあんしえー、まじゅん行じんだー（それは、一大事なことだな。さ、それなら、一緒に行つてみよう）」と仲の悪い兄貴が、弟のその最悪状態の時に、今までの仲の悪さもなくなつて、

「あーじゃー行つてみよう」つて一緒にね行つて見たら大きなウナギだつたつて。大きなウナギが死んでいたつて。ようするに海から上がつてきたウナギがね作物荒らしていたわけ。人間と思つてやつつけたらウナギだつたつて。それから、二人もう兄弟仲良くね、棒に担いでね、で、そのウナギを取つてきたといつてね、隣近所みんなに、「どうぞ、どうぞ」つてやつて、この仲の良かった（友達）はね、門まで来てね、中に入ることもできなかつたという、そのね、どんな仲の悪い兄弟でもね、最悪の時には助け合ひするのが兄弟だよ。いう意味の話なんだね。

だから、方言でね、「いーべーまーんかい折りーが（指はどこに曲げることができるか）」という言葉があるさー。要するに、いざとなつたら身内なんだとね。

◎ 兄弟の仲直り

宮城タケ（明治四十年生）与儀

『方言原話』

うつどうとう、しーじやとう仲ぬ悪さてーるばー。くぬ野菜荒らさつていさぐどう、ちよーどう番そーるばーてーうぬ畑ぬ。あんさーに、ヤリ持ち行じ突ち殺

ちさぐと、うぬ、ムルチんかいあたとーるばー。あ
んさーま、たまし拔ぎやーなかい、家んかい備てい、
思焦がりさーに、な、どうしんかい言ちやんでーん、
どうしぬんならん。あとーな、しーじやぬ訪にてい
来くとう、

「私ねーあんかんし、な、人殺ちちえーさー」でい
ちやぐと、

「と、人殺ちえーだんらー私にんしーていー行じんだ」
でい行じやぐと、うぬ、屋良ムルチぬまなかい死
じよーたんでいぬ話、うつび聞ちやるばー。

〔共通語訳〕

弟と、兄さんは仲が悪つたようだね。この野菜荒ら
されたので、時機をみて番をしていたようだね、その
畑を。そして、ヤリを持って行って突いて殺したら、
その、ムルチ（にいるウナギ）にあつたようだ。す
ると、ビックリして家に帰り、思い悩み、も、友達に
言つても友達は断つた。そうこうしていると、兄さん
が訪ねて来たので、

「私は、これこれしかじかで、人を殺してきたさあ」
といつたら、

「さあ、人を殺してしまつたなら、私も一緒に行って
みよう」と行つたら、その、屋良ムルチのそこに（ウ
ナギが）死んでいたという話、それだけ聞いたわけ。

② 兄弟の仲直り（ウナギ）

島袋盛保（明治三十七年生） 知花

屋良ムルチです。あつちから出るウナギがです
よ、粟の穂をつんで、おそろしい被害があつたらしい
ですよ。足型もないのに、穂がつまれておるから、「こ
れはもう普通の泥棒でない」と思つて、隠れておつて
待ち受けて、来るのを待つておつて棒でやつたんで
す。その人は力もあつて、いっぺんでそのウナギも殺
してしまふぐらい。倒れたから、その取り分のは
段つたはずだが。暗闇でウナギとは思わぬ、人であ
ると思つて、もう、全然動かなくなつたもんだから死
んだと思つて、人を殺したら昔は処罰うけるんだか
ら、驚いて自分の友達に頼んで片付けるといつて頼み
に行つたらしいんだが、

「お前は人を殺したら、もう、自分も後先死なねばな
らないんだから、そんな危ないところにはできない」
と言つて断られたらしいんだが。とても兄弟が仲が悪
くてまた、なんの付き合ひもしてみない兄弟だつたら
しんだが、そういうことで頼みに行つたら、すぐ、さつ
すく、

「じゃ、それ、もう、夜の明けないうちに片付けな
いといけないから」といつて、何して。その兄弟がそん
なに仲良くなつたという話もあつたが。

(2) イノシシ

① 兄弟の仲直り

名嘉真ヨシ(大正九年生) 美里

〔方言原語〕

ひーじーやじこー仲良しやしがよー。で、ヤマシシ
どうやしがつて、山んじ人殺ちえーんていちょー
ばーて。あんさくとう、どうしんかい、

「でーじなとーさ、なー。片付きていとうらさんなー」
んちやくとうてー、

「怖いからいいえ」んでいたんでい。さくとう、また、

兄弟がねー、兄がね、

「でーじやさな、兄弟なとーていうんぐとーるく
とうんあみ」んちてー、とつても仲が悪いけど、その
日だけはね、一緒に片付けたらね、ヤマシシだった
て、その話。

それからね兄弟はね、「切ちん切ららん兄弟。仲良
しならんならんさ」のーとーるばーて。仲良しなとー
るばーて、うにーから。

〔共通語訳〕

(友達と) 普段は非常に仲良しなだけだね。で、
イノシシ(を殺したよう) なんだけどね、山で人を殺
したと思つてゐるわけ。それで、友達に、

「大変なことになっている。片付けてもらえないか」
とお願ひしたら、

「怖いからいいえ」と答えたようだ。すると、今度は、

兄弟がねー、兄がね、

「大変なことだ、兄弟だにそんなことがあるものか」
と、とつても仲が悪いけど、その日だけはね、一緒に
片付けたらね、ヤマシシだったて、その話。

それからね、兄弟はね、「切つても切ることができ
ないのは兄弟だ。仲良しならないといけない」(仲
が悪かったが、仲良しになったそう。仲良しになつ
ているわけさ、その時から。

② 兄弟の仲直り(猪)

金城初子(大正五年生) センター

小さい時から仲の悪い兄弟だった。どうしても
仲直りしない。もう、兄さんも弟も同じ性格で気が合
わなかつて。そして、大きくなつてから、猪、あれが
トーマン荒らすからと言つて、あれ退治しに行く
言つて、弟が退治しに行ったから、もう、鉄砲打つた
らこの猪が死んでいるけど、「全く人に似ていた」言つ
て、もう、あつちこつちに、

「助けて下さい助けて下さい。もう、夜のうちに、明
けないうちにこれ担ぎ出さんといけないから」と言つ
て頼んだけど、誰も、

「人殺すぐらいの人のもの、助ける必要があるか」
と言つて誰も断つて、友達がはしなかつた。どう
とう兄貴に、「これは打ち明けたらどうかね」と思つ
て、恐る恐る兄貴の前に行つてお願ひしたら、

「あんた大変さー、もう、人を退治してあるなら、早
くこれ夜の明けないうちに片付けないといけない」と

言つて、お兄さんと二人で担ぐといつて準備してもつて、担ごうとしたから猪になつてゐる。人間じゃなくて猪なつて。あれから兄弟の仲が良くなつたとの話は聞いた。人間と間違えてる。

(3) 兄弟の仲直り

① 兄弟の仲直り

仲宗根盛雄（明治四十三年生） 豊川
昔の年寄りの話で、「遠ざるどうしやか、身内ぬ兄弟みつくわさていん、うりがる、本当ぬ、ぬーぐとうんない（遠くにいる親しい友達より、身内の兄弟は憎しみあつていても、いざとなつたら力になつてくれるものである）」というふうな、「人他人どうやる。血兄弟ぬどう、ちやーるくとうんない（他人はしよせん他人である。血でつながっている兄弟はどんな時でも力になつてくれる）」である、これが伝説につながっているんだよ。

屋良ムルチのウナギが畑を荒らしに出ているものを、仲の悪い兄弟だったが、これが、兄であつたかね、弟であつたか、それは、はっきり分らんが、これが行つて屋良ムルチのウナギを殺したつて、人殺したら、これは家に行つて、

「私は人を殺してしまつたがどうするか」と言つたら、も、人と間違えてウナギが大きくて、「大変なつていゝ」と見もしないで行つてやつたら、別の人に行つて、「私は人殺したから、これ片付けるから来てくれ」と

言つたら、これが行かなかつたが。兄弟の、も、毎日喧嘩ばかりやつている兄弟はもう、自分がかかる者は誰もいないから、兄弟に行つて、も、自分が憎いもんでもつれなければ、片付けないと頼んだから、

「も、大変だー。兄弟が人を殺したなら、もう、兄弟大変だ」と言つて、これが行つて見たらウナギであつた。人ではなくて、ウナギであつた。

それから、兄弟は抱き合つて「人、他人はどんなこともやらないが、いざとなれば、兄弟でなければできない」といつて泣き伏したという、こんな話があつた。だから兄弟はどんなに憎くつても、やつぱし兄弟でなければ、ほんとの信じというものがでないという、こんな話があつたんだよ。

※1 血兄弟 血縁は切つて切れるものではない。

八 大歳の客

(一) 猿長者

① 猿長者

幸島マツ (明治四十二年生) 池原

〔方言原話〕

歳ぬ夜ぬばーに袋さきていつ来、でーじなやなすが
いそーしが、

「一夜いつたんかい泊まらさんな、うんじゆな一ん
かい泊まらちくみそーり」んり、エーキん人ぬ家んじ
あんいちやぐと、

「今日や年ぬ夜んやぐと、んーんーん、私つた一
んかい泊まらさんどー」んち、な、断わとーるば一
や。断わていさぐと、うぬ人また戻てい行じよ一
るば、「あまー泊まらさんでいるむん」でいち。また、
戻てい行じ、またじこー貧乏人の家ぬ小て家ぐわ一
んかいめんそーちさぐと、うぬ人。あんさーに、あ
ぬ、

「今日一晚のー泊まらちくみそーれ、私ん泊まら
ちくみそーれ」んちやぐと、

「あーは、な、私たーや、な一ヒンスームンなてい
正月んやしが肉ん買らつてーねーん、米ん買らつてー
ねーん、火燃ち火正月るそーる」でいち、じーさん
と、ばーさんとうあん言ちえーるふーじ。あん言
ちやぐと、

「ゆたさいびーさ、私ねーぬーんねーんていんうん
じゆな一んかい泊まらせ、な一幸福やいびーさ。泊
まらちくみそーれ」でいちやぐと、

「うー、あん泊まいみそーれ。家んしたなざーあし
がなー泊まいみそーれ。食むるむぬんねーん火正月
るやいびんどー」りちよーしが、うぬ人おうまんじ泊
またぐと、

やっぱし、うぬ人な一福の神、神様やみしえて一
んてー。あんしえーむのーとらーらんでいち、んちや
来ちやぐと、いかなぬーんねーらん、火どろ燃ちよ一
てい火正月やたんでいくと。あんさーに、じーさ
ん、ばーさんよーい黙ていあんそーたぐと。うぬ人
が家んかい一晚のー泊まてい、家んかい戻てい行ち一
ねー、

「いつた一んかいこの薬をあげるから、薬ぐわー鍋ん
かい入りりよー」んちやぐと、うぬ人が言みしえ一
んねー聞ち、「あー、薬ぐわーや鍋んかい水むげーら
ち、うまんかい入りりんでい」いみしえてーるむん
ちやぐと、肉になりご飯になりして、ご馳走がよ一
けー出たつて、

また、お金持ちにもなてい、

「あんた方は何が一番いいか」と言うたら、
「私つたーやな一若げーいしえーましやいびんどー」
んちやぐと。若返る薬、またうぬ人たーにうさぎ
てい。湯ふかさーに、うりんかい薬入れて二人ぬ者浴
みたぐと、じーさん、ばーさん浴みたぐと、あ
んさーになー二人や若返つてさー。元の十七、八の若人

大歳の客 豊地栗の金持のおじいさんには神の恵みはなく、心の優しい貧乏人のおじいさんには神様から黄金を車んでもらって大金持ちになる時。

※1 火正月 普通 大晦日の晩にはご馳走を食べ新年を迎えるが、貧しくて何も買えないので、ジールと叫ばれる悪徳屋で火を焚くだけの賤しい正月をいう。

※2 若返つて 貧乏者夫婦が湯を浴びることで若返つたことから、正月に若水を汲む由来として話す場合もある。



かいけーなてい、あんざぐと隣ぬエーキンチュぬ人
んちやーが、よー、

「あい、ぬーがいったーエーキンそーい、食むるむぬ
んまんでい若げーていんうる」んちやぐと、

「あぬ、昨日めんそーちよーたる人ぬうんぐとどうし
てーみしえーんどー」でいちやぐと、

「うまいはいみしえーたがよー」し、よー。後追いし行
じよーし行じ。うんにーから頼でい家んかい泊まら
ちやぐと。やつばし、うまぬやーぐーな、エーキ
ン人やしが、家もなし、もう、みなサールーぐわーに
なつてさ。

「うまい私つたー家どうやる」んでいち、うまんかい
いちやさくと、ちべーまつ赤らそーたんでいむんぬ
やー。

今もサールー昔話の伝えがあるが、サールーは尻の
方に赤いがあるでしょう。だからあのサールーは
ね、人間から猿になてーぐと、人のヒヌカソといっ
たかありんかい尻いしたぐと真つ赤になつてい
てねー。

〔共通語訳〕

大晦日の晩に袋を下げて来て、たいそうみすばらし
い格好をした人が、

「今夜一晩あなた方に泊めてくれませんか。どうか泊
めて下さい」と金持の家にお願ひしたら、

「今夜は大晦日だし、いいえ、私たちに泊めることは
できない」と断つたわけね。断られたので、その人は

戻つて行つたんだね、「あの家は泊めてくれない」と
いうので。また戻つて行つて、また、たいそう貧乏人
の家で小さい家にいらつしやつてね、その人は。そし
て、また（その家でも）

「今日一晩泊めてもらえませんか。私を泊めて下さい」
とお願ひすると、

「ああ、もう、私たちはこのように貧乏者で、正月と
いうのに肉も買つてない、米も買つてない、火を燃や
して火正月をしているんですよ」とじいさんと、ばあ
さんは答えたようだ。そう言うと、

「それでもかまいません。私は何もなくてもあなた方
に泊めて下されば、それだけで幸福です。泊めて下さ
い」とお願ひすると、

「それじゃあ、お泊りになつて下さい。家も汚いので
すが泊つて下さい。食べ物もなく火正月をするんです
よ」と言つたが、その方は貧乏人の家へ泊まつた。

やはり、その人は福の神、神様であられたんでしょ
うね。（泊まることになつたもの）こんなことでは、
道理がいかないと、来て見るとほんとになにひとつな
く、火を燃やして火正月をやつていたからね。それに
おじいさんとおばあさんは黙つて火をぬくんでいた。

その人が一晩泊り家へ帰るといふ時、

「あなたたちにこの薬をあげるから、薬を鍋に入れな
さいね」と言われたので、その人が言われた通りに、
「お薬は鍋の水を沸かしてそこに入れなさい」とお
しやつていたからと（その通りにしたら）肉になりご
飯になりして、ご馳走がいっぱいできた。



※「ちべーまつ赤ら」猿の尻が赤くなつた由縁話として伝えられている。

また、お金持ちにもなり（その上）、

「あんた方は何を一番望みますか」と聞かれたので、

「私たちは、若返ることが出来たらと思う」と二人は答えた。（すると）若返る薬を、また、この方々に差し上げた。湯を沸かして、それ薬入れて二人とも、じいさん、ばあさんが浴びると、二人は若返つて元の十七、八歳の若者になった。すると、隣のお金持の人たちが、

「あれ、どうしてあなたがたは、お金持ちにもなり、食べ物もたくさんあつて若返つてもいるの」と聞いたら、

「これは昨日いらつしやつていた方が、このようにしてくれましたよ」と答えると、

「この方はどこに行かれたんですかねえ」と言われて、後を追いかけて、帰っていくのを追いかけて行つて、それからまた頼んで、家へ泊めたら、すると、その家族はお金持ではあるが、（しまいに）家もなく、みんな猿になった。

「そこは私たちの家だ」と、そこに座つたのでね、尻はまつ赤になつたというね。

今でも猿の昔話の伝えがあるが、猿は尻のほうに赤いがあるのでしよう。それは、猿は人間から猿になつているので、ヒメカンとかなんとかいう石に座つたのお尻が赤くなつたそうだよ。

② 大歳の客（猿の赤尻由来）

栗野比トヨ（大正六年生） 知花

〔方言原話〕

うふスー精神わづか思おもえな。けー隣とななけーいつべーいー心こころぐわー持もちち、でーじないー人ぐわーんうてーるばーてー。うまー年とし寄よ寄よ夫と婦とやひが、

「いがたー正月としごほなていんかむしんねーらんなー、火か正月としごほはやーんていち夫と婦と火か燃もちぬくどーいねー、
「なー、人ひとぬ家やや、やー、あんぐとうクワツチーんし
こーていかまーふい、いぎたやなー夫と婦と年とし取とりていぬーんねーんどうあくとう火か正月としごほはやーウスメー」ん
でいち、二人火か燃もちぬくどーいに、うぬエーキンチュ
ぬ来きに、

「いったーや食物しょくぶつぬんねーん火か正月としごほどうそーんなー」
でい言いちやぐとう、

「私わたしたーなー、あんやんどー」でい言いち。さくとう、
今度いまどうぬ神かみぬ降りていめんそーやーに、

「サミヨー、いったーやなーやー、可あ哀は想いにうんぐ
とうーしちなー。とー鍋かまんあらわや、とーうぬ鍋かま早はや
くなー立た派はんぐわー洗せんやーにカマンけーいしるー」
でい言いち、カンブーんけーぬちるギーファーがあへー
やー。うんぐとうーぐわーさーに、うぬ鍋かまんけー粉こな
ぐわーどううけー入りーたんでいひが。あんさーに、片かた
一方ひとへやシシ、片かた一方ひとへやご飯いし、あんし、

「とー早はやくなー、いったーや、や、うりさーに年とし取とり、
若わか年とし取とり」でい言いちらつたくとう。うぬ年とし寄よめちやー
や、片かたはたーご飯いし、片かたはたーシシぬーんぐいーねーや

※1 神かみぬ降り 大歳おととし日には天あまから神かみが降くだりて来ると信じていた。

※2 サミヨー 備ついでに気持きもちちのある時ときに発はする言ことば。

※3 若年わかとし 年は取とつても若わか々々、



いざさくとう、

「うりかまーに年え取てい若年取りよー」んでいちざくとう。なーんちやうりかだくとう二人ぐみーな元ぬ十七、八んけーなていて。あんざくとう隣んけー、

「えー、私たやあんかんし、夕べーや火正月そーひが、えー、うんぐとうーし私たや、うんぐとうーうんぐとうーん人ぬ降りていめんそーち、あんし、私たー鍋んげーや、ギーファーぬカブぬみーどう、かんし粉ぐわー入りらりーたひが、うんぐとうーし、ぬ、うりさーに若年取りよーんでいらつてい、うりからあんし私たー若くなどーんぞー」でいいちやぐとう、うぬエーキンチュやるんちやーが、

「あんいる人私たーんけー紹介はんなー」でいいちやぐとう、

「な、うれーな、私たーがな火めーなちよーいにどうや、はちめんそーちうりやる。ぬーん私たーが紹介んしえーねーらんひが、うんぐとうーうんぐとうーやんぞー」んでい。あんしが、な、時々降りていめんそーちうりやたんでい。あんしさーに、今度おなーあまんうぬ人紹介さくとう、

「あんししむんぞー」んち、うぬエーキンチュぬ家んかい行じ。うまーいっべー精神悪ざたんでい。あんざーにさくとうな、

「とー、いつたーんあはーや若くないぶはらー、早くシンメーナーど洗らやーに、湯ふかしえーわ」んでいいちざくとう。うりんギーファーぬカブぬみーぬーんでいがらーうちきらりーたんでいむん、うりかだく

とう猿んけーなてい、な、うまぬしんかーどー。あんざーに、今度うぬ年寄ぬちやーや家ぐわーんなーぐまーぐわーでいやたんでいくとう、

「どーあぬ家や、やー、あつたーなーイチムシなていうりそーくとう山んけーどーうなーひんぎーくとう、いつたーうぬ家や、な、いつたー住まーりーんち、うぬ夫婦うまんじうりさくとう。な、猿んけーなどーへーやー。毎日うまんけー来ししー、来ししーさくとう、と、くれーなーちやーしさらーや私たーな、毎日うぬ猿なてい、うまぬ家ぬ主があんし化きてい来うんぐとうーやひが、ちやーしさらー、な、来んないがやーやー」んでいさくとう。今度お、

「どーあんやらーや、うりがちやーいーる門入り口んけー、んじゅみてい石焼ちやーに、うまんけーうちぎとーきーね、すぐうり来けーいーるはじやくとう、あんし、しー」でいいやーに、うにーに、焼ちえーる石ぬ上ちけーいやーに、ちべーけーはぎやーに、ちびはぎ猿ちちやんでい。な、来るうつさー、「な、うまー私たー家やたひがるやー」でいちみーぐてい来ん、うに、ちやーうまつちいーたんでい。あんざーいーるうつさーむる石焼ちやーにさくとう、な、いーねー、んちややな熱はどうあくとう、けーはぎーへーやー。あんざー、うにーからちびはぎ猿なたんでい。

ギーファーぬカブ、ギーファーはかなざしのこと。かなざしの一方端が耳掻きほのくぼみになっている所をカブといい、神様がそのくぼみ一杯の粉を鍋に入れたことをいう。

※シンメーナーど 大波な劇



「共通語訳」

少し心持の悪い(人と)、隣にはたいそういい心を持った大変いい人もいたわけさ。そこは年寄り夫婦であったが、

「私達正月になっても食べるものがなく、火正月しようねえ」といって、夫婦火を燃やして温まっていたら、「ねえ、よその家はね、あのようにご馳走をこしらえて食べているようだが、私達は夫婦年を取って何もないので火正月をしようねおじいさん」と、二人火を燃やして温まっていたら、隣の金持ちが来て、

「あなた達は食物もなく火正月をしているのですか」と言う、

「私達はそうですよ」といっていた。すると、今度は神様が降りていらつしやって、

「サミヨ、あなた達はね可哀想に火で温まって。さあ鍋があったら、その鍋を早くちゃんと洗って釜にすえなさい」と言つて、カンブーにさすギーファーがあるさあねえ。ギーファーでこすりやつて、その鍋に粉を入れていたらしいが。すると、片一方に肉、片一方にご飯(ができたそう)、そして、

「さあ早く、あなた達はそれを食べてね年を取りなさい、若年を取りなさい」と言われたそう。その年寄りの夫婦は、片一方はご飯、片一方は肉とか色んなご馳走だったらしく、

「これを食べて年を取つて若年を取りなさいねえ」といわれたので、なるほど、そのご馳走を食べたら、二人とももとの十七、八に若返つたそう。すると隣に、

「ねえ、私たちはこれこれしかじかで、夕べは火正月をしていたら、ねえ、このように私達に、こんな感じの方が降りてこられて、そして、私達の鍋にね、ギーファーのカブの一杯だけ、こうして粉を入れられていたが、このように、ほら(ご馳走が出て)、これで若年を取りなさいねと言われて、それを食べたらこのように私達は若くなつたんですよ」と言つたら、この金持ちの人間が、

「そういう人を私達にも紹介してくれないか」と言われたので、

「ねえ、これはもう、私達も火で温まっている時にね、いらつしやつたのでね。何も私たちが紹介できるものではないですが、そういうことがあつたのは確かです」と。そうではあるが、まあ、時々降りていらつしやつていたそう。それで、(いらつしやつた時に)、今度は金持の家の人を紹介したら、

「いいですよ」といって、その金持の家に行かれたよう。その人はたいそう心が悪かつたそう。そこで、神様が行かれて、

「さあ、あなた達も若くなりたければ、早くシンメーナービを洗つて、お湯を沸かしなさい」といつたそう。すると、その時もギーファーのカブの一杯なにかを(鍋に)入れられたようだが、それを食べたら猿になつたそう。その金持の家の人はだよ。そこで、今度は、その年寄りの家は小さかつたらしく、

「さあ、あの家はね、金持ちらは動物になつてしまつて山に逃げて行くので、あなた達がその家に住みなさ



い」と、その夫婦をそこに住ませた。(金持の人達は) 猿になつてゐるさあねえ。毎日ここに來たりしたので、

「ねえ、これはどうしたらね(いいのかねえ)。私たちは、毎日その猿になつた金持の家の主が、猿になつて來て(困つてゐる)、どうしたら、も、來なくなるのだからか」と考へてゐた。また(神様が來たので)、

「そういうことならね、猿がいつもすわる門、入り口に、強く石を焼いて、そこに置いていたら、すぐ猿が來て座るはずだから、そうするといいよ」といわれた。(猿が來て) その時に、焼いた石の上に乗つてしまひ、尻がはげて、尻のはげた猿といわれるようになった。ね、(猿が) 來る時には「も、そこは私達の家であつたんだけどねえ」とまわつて來たら、その時には、いつも、そこに座つていたそうだ。それで、座る場所すべての石を焼いておいたら、ま、いわば、熱いもんだから(尻が) はげてしまふさあねえ。それで、その時から尻のはげた猿になつたそうだ。

③ 猿長者

知花ツル(大正五年生) 喜間良

これは大昔の話ですよ、これは、年寄りのおじさんおばあさん夫婦がいて、年の晩にさ何ももないもんだから、火をたいて、

「火正月さーやー(火正月しようね)」といつて二人していたら、みすぼらしいすがい(姿)して神様は、片一方の方は、「乞食が來た」いっておつ払いよつたそ

うですよ。したら、この貧乏人のおじさんおばあさんは、

「どうぞ入りなさい、何もないんですけろ、火たいて火正月しほよづめしてありますけれど、どうぞお入り」つて。まあ、年の晩つていつたら寒いですよ。で、こう家の中にあれして(入れて) からの、したら、神様ですからね、米やらなんやら、ご馳走やらいろいろ出てきて、こちとはとてもいい正月して。

「湯を沸かしなさい」つていって、湯ゆ沸かしてお風呂入つたら、このおじさんおばあさんとても若くなつて、夫婦とも。して、それから、米やら、なんやら、もう不足なしに出たそうですよ。

隣の家は毎夜ここに出でうらやましがつて。したら、これ、お猿のお尻があれ(赤く) なつてゐるのも、瓦いしを焼いてね、これの上に座らして、こんなだつたつていいよつたですけど。

④ 猿長者(犬・猿)

神里マカト(大正元年生) 安慶田

「方言原話」

おじーたー、おばーたーいっぺーヒンスームンやたんでい、何んなんねーらん。かむしんねーらん、ヒンスームンやたくとう、また、隣となやいっぺーエーキンチュやたんでい。あんさー米こめんぬーんうりしーねー残のこいしえーやー使つかんかい、使つかんかい残のことーしえーやー。あんさーなかい、

「私わたしたーな、あんしヒンスームンなていや、ぬーん



かむしんねーんむんちやーすがやー」なかつた。

「うま、借っていちやーなかないや、落さーなかないうり使けー」んち男言ちえーるばーて。あんし借っていちやーなかない落さーなかないよ、落さうちうりさくどう、な、落さうちうりさくどう、あんさくどうしらぎやーなかないご飯煮ちよるばー。ご飯煮ちうさぎとーるばーて。

「ああ、なー私たーや、や、人ぬ家やあんしエーキんすが、私たーやぬーんねーびらんしがや、な、ウブクうさがとーちみそーれー」でいちウブクうさぎとーるばーて。うさぎとくどうや、ちゆてーさくどう、すぐ年寄ぬ出していめんそーやーに、や、

「いったーや、な、ウブクうさぎとーさ、やー」とうん、
「な、私たーぬーんねーびらんしがウブクうさぎとーびんどーやー」でい言ちやぐどうや、

「とーあんしえーな、いったーやな、すぐうりしえーるむんぬや、鍋しきれー」んでい。鍋一ちどうあんでい。

「うりんかい水入ていしきれー」んでい。水入ていしきたくどう、かたはらご飯、かたはら肉汁、肉汁なつていてーな。あんさーに、また、

「あつさよ、ぬーがあんしひるまさどう」でいちよ食だくどうて、食でいうりさくどうて。翌日また、「とー、私が浴みしーくどうや、あまんじ、鍋かていちゃい、ターレー借ていちゃいすい」んちやぐどう、ターレー借ていちゃい、

「とーあんしーねー、いやーや湯ふかしえー」んちや、

湯ふかさーなかない二人浴みしたくどうや、二人浴みしたくどう、すぐ若くなていよ、若くなてい。あんさーんなかないだ、うまんかいターレー持ち行じやんでい。

「ぬーがいったーあんし若くなとーどう」

「昨日来よる年寄ぬや、あんし若くなちえーんんどー」んちやぐどうや、

「アイエーナー、私たーんあんしえーな、私たーん年寄なとーるむん、あんしえーな、うりしつくりわるやさ」んち、

「あびていくくりわるやさ」んち。あびていちゃーなかい、うりさくどう二人な、浴みしたくどうや、一人や犬なてい、一人や猫なてい、あんさー、「ウワーグワーウー」しあびていてーな、心ぬ悪さてーるばーて。あんさくどう、うぬ人がて、

「くまーいったー家あらんや、エーキンチュいったー家やくどうや、あまんかい行きよー」んでいちうぬ人が言みそーちやくどう。あまんかい行じやくどうや、すぐ、猫なとーしんうい、犬ぬんなどーるばーて。あんすくどう、うつたーが来に、

「私たー家どうやし、私たー家どうやし」し、「ワン、ワン、ワン」しあびていよ、うまんかいいーちよるばーて。とーな、うま、いつペー火さーにすく、火くるしえー、うつたーがいーねーや焼ちるぐどうし、うりしえーんでいちゃぐどう。フーフー焼ちよるばーて。あんすくどう、うつたー来なかないいーやーなかない、

※1ウブク 仏を供養する飲食物、火の神に供える飯で、小さな椀に山盛りにしたものをいう。
※2アイエーナー 思わずつぶやいたり、叫んだりする時に発する言葉。

「アッサビヨ、すぐ、クークー。チョコ、チョコ、チョコ」しひんぎていはちよーるばーて。あんざー
なかいや、うまぬ年寄ぬちやーんや、

「アイエーナー、あんし、私たーうんぐとらー上等な
すんちるやてーさやー。やなくとーすしえーあらんざ
やー」んでいちよー、うったー、また、あんし、うり
すたんでい。うったー二人ぬむんよー、エーキンチュ
ぬ家んかい入ちてー二人上等などーたんでい。

あんざーにまた、若くなやーに子ん産ち、でーじな
ありやたんでい。

〔共通語訳〕

おじいさん、おばあさん達たいそう貧乏者だったそ
うだ、何もなく。食べるものもなく貧乏者であったそ
うだが、また、隣はたいそう金持ちであったそうだ。
そこで米なども俵から移すと残りものがあるでしょ
う、俄に、俵に残っているさあねえ。それで、

「私達は、こんなに貧乏しくてね、なにも食べるもの
がないものどうしようかねえ」といつたら、

「金持ちの家で俵を借りてきて、俵に残っているもの
を落としてそれでなんとかしよう」とおじいさんが
言っているわけさあ。そして、俵を借りてきて落とし
て、落とすと、も、(いくらか)落ちていくわけさあ。
それを精米してご飯炊いたわけ。ご飯を炊いて(火の
神)にお供えしているわけさ。

「ああ、もう私達はね、よそのところはあのように豊
かに暮らしているが、私達は何もありませんが、も、

ウブクでも召しあがって下さい」とウブクお供え
しているわけさ。お供えしてしばらくしたら、すぐ年
寄りがいらつしやつてね、

「あなた達はウブクお供えしたんですね」と、

「そう、私達は何もありませんので、ウブクをお供え
しているんですよ」と言ったら、

「さあ、それなら、あなた達は、あるものをお供えし
ているので、鍋を準備しなさい」と。鍋もひとつだけ
あったそうだ。

「鍋に水を入れて火にかけなさい」と。水をいれて火
にかけると、片方にはご飯、片方には肉の汁、肉の汁
になってねえ。そして、また、

「ああ、なんて珍しいことか」といってね食べてねえ、
食べ終えた。(翌日)また、

「さあ、私が浴びせるからね、隣で鍋を借りてきて、
タライでもいいから」というと、タライを借りてきた
ら、

「さあ、それなら、あなたはお湯を沸かしなさい」と
いってね、お湯を沸かしてから二人浴びさせたらね、
二人浴びさせると、すぐ若くなって、若くなった。そ
れでだね、隣にタライを(返しに)行ったそうだ。
「どうしてあなた達こんなに若くなっているのか」

「昨日来た年寄りがね、こんなに若くしてくれただ
よ」というとね、

「アイエーナー、私達もそれなら、私達も年寄りになっ
ているもの、それならその人を呼んでこなければいけ
ないね」と、



「呼び戻してこよう」と呼び戻して来て、同じようにしてね二人浴びせると、一人は犬になり一人は猿になり、そして、「ウワーグワーワー」と叫んで、心が悪かったんだらうねえ。すると、その人（お年より）がね、
「この家はお前達の家ではないのでね、金持ちの家はお前達の家だから、あそこに行きなさいね」と、そのお年寄りがおっしゃったので、金持ちの家に行つた。すると、猿になつてゐる者もいるし、犬にもなつてゐるわけさあ。それで、そいつらが来て、

「私達の家だ、私達の家なんだけど」と、「ワン、ワン、ワン」と吠えてね、そこに座つてゐるわけさ。そこで、そこにある石をたいそう火で、火で焼いて、そいつらが座つたらね焼けるようにしなさい、（といわれたので、その通りに）したそうさ。フーフーし（石を）焼いたようだね。すると、そいつらが来て座つてしま

い、
「アッサビヨ、すぐ、クークーク。チョロ、チョロ、チョロ」と逃げていつたそうさ。そしてね、貧乏者の年寄りは、

「アイエナー、こんなに、私達をこのように暮らしたを良くするといつてだつたんだなねえ。悪いことをするものではないねえ」といつてね、その年寄りは思われたそうさ。年寄りの二人の者は、金持ちの家に入つて二人幸せに暮らしたそうさ。

それで、また、その時から若くなつて、子どもにも恵まれないそう幸せに暮らしたそうさ。

⑤ 猿長者

吉里ウシ（大正四年生） 照屋

「方言原話」

隣んかいね、ヒンスームぬおじさんとう、おばあさん夫婦うたんでいしや。また、隣んかい、また、エーキンチュがうてゐるばーやしえーや。あんしえーくとう、ちやー、なり、ヒンスームおばあさんだちいじみとてゐるばーて。あんしえーくとう、「イッダーヒンスームやるむん」でいちえーくとう、ある白髪ぬおじさんがめんそーちや、さーんかい、すぐ、

「一夜泊まらち」んちいみそーちえーるばーて。泊まらちえーくとう、あんさーんかい、

「今日や正月やるむん、年ぬ夜やるむん、米一合持ちちえーくとうや、いつたーなり、火正月どうそーくとう」んち、一合、五合鍋んかい洗しみてい煮ちえーくとう、いつばいなくていよ、あんし、そーたんでいむぬ。なり、うりんかまーなかいまた、隣んかい年ぬ夜んち、めんそーちえーるばーて、行じくーんち言つしーが。あんさーなかい、行じえーくとう、

「なり、いい正月やいびんや、若年とうみそーちー」んち、めんそーちえーるばーて。あんえーくとう、

「はい、いつたー、いい正月どうていー」んでいち、いちえーみしえーるばーて。あんえーくとう、な、うまんじ、年ぬ夜んうりさーなかい、話んしから備てい行じえーくとう、

「どーあんしえー、ピンダレーんかい水入ていくわー」んち、て。入ていちやーなかいえーくとう、

「顔洗顔を洗いでい手てん、足足をん洗洗わ」うていど、さくどう若くなくて。そのおじいさん、おばあさん若くなくていさくどう。また、あくる日、

「一日ぬ日日をや隣隣に、おめでどう言うて来来」んちて、あんし、

「おめでどう」んじさくどうな、帰帰てい来来ねーうんどう、若くなどしえーや。あんずさくどう、あまんじ、

「ぬーが、いったーや、あんし若くなどる」んちて、さくどう、

「私私たんかい白髪ぬおじいさんがめんそーち、あんなさーなかい、ピンダレーんかい水入水入りやーに顔洗顔を洗ていさくどう、若くなどーんどーや」んちさくどう、

「どー、あんしえー、うぬおじいさん私私たーんかい必必じめんそーらし」んでいいちえーるばーて。あんなさくどう、行行じやくどう、

「うんじゆ、めんそーちくいまそーりていぢやくどう、めんそーり」んでい言言ちえーるばーて。あんなさくどう、めんそーちえーるばーよ、やー。あんなさくどう、うまんじ、

「おじいさん、私私たーん若くないぶさいびーさくどう、な、若くなくいまそーり」ていぢて、しえーるばーよーやー。あんなさくどう、うぬ、おじいさんの、

「どー、いったーん若くないぶさんな。とーあんなしえー早早くな、ピンダレーんかい水入水入ていくわー」んち、水入水入てい顔洗顔を洗ちやくどう、土ぬぐどうし顔顔んブツターブツターちけーなどーるばーて。なていさく

どう、猿猿ぐわーなち山んかいやらちよーるばーて。山んかいいーほーとーるばー。あんなさーかい、おじいさんまた輪輪ちやーなかい、

「どー、あつたーや、や、山んかい猿猿なていはちよーぐどう、あぬ家やいつたむんしー」んちどうど。あんなさーなかい、うぬ、おじいさん、おばあさんの、だー、うまんかい入入ちえーるばーよーや。入入ちさくどう、

な、猿猿なてい来来なかい、ヒリヒリヒリしな、しぐ屋敷ぬまんまーる、歩歩ちやー歩歩ちやーして、木んかい登登たいぬーさいし、家ぬ山んかい上がたいぬーさいし。あんなさーなかい、うりさくどう、

「くれーな、かんしえーな、怖怖くてな、あんしえーならんくどう」でいやーんかい、また、神様んかい手うさーちて、

「かんがんし、でーちゆやな、うんじゆが、うぬ家んかい私私入入らちしえーみしえーしが、うまぬ主ぬやー、猿猿なてい来来なかい、むる、私屋敷ぬまんまーる、むる荒荒らち、あんし恐恐らさいびんどー。ちやーがな、うちくみそーり」でい手手うさーちるばーて。あんなさくどう、また、めんそーち、

「どー、あんすらーや、火石門ぬ両方両方かい置置き」んでい言言ちえーみしえーるばーて。さくどう、うぬひーさー、うんたびかーそーし、たてーてるばーよーやー。冬やくどうや、あんなさーなかい、あぬ、うぬ猿猿や寒さどうあぐどう、うぬ石ぬ山んかい、座座ちーねーな、すぐ、うりさくどう、尻尻けー焼焼ちえーるばーて。まっ赤赤なてい。うんにんから、な、来来んなどーるばー



よー。怖くてうぬ狼オオカミ恐るさんち。また、焼かりーぐとうんち。うにんから、ちやー遠トホぎーやるばーてー。なー、戻カエてーくーんぐーとう。

あんしえー、あぬ狼オオカミ尻赤どーんでーやー。あんざーかいうぬ、おじいさん、おばあさんのー「有難うございます」でいいっぱー喜ウレシくでい、うりそーたん

あんくとう、貧乏のーうしえーてーならん。あるなーか、助タきてい、うらせんでいやるばーよー。みんなお互いにね。人間のーゆぬむんやしえーやー。あんどとう、なー、このおじいさん、おばあさん、とつても、うつきわーたーざーんかい、すぐ、若くなどーびしえーたんできさ。

〔共通語訳〕

隣にね、貧乏者のおじいさんと、おばあさん夫婦いたそうだ。また、隣に、また、金持ちがいたんだらうねえ。それで、いつも、もう、貧乏者おばあさん連いじめていたわけさあ。それで、「お前たち貧乏者だから」といって（いじめていた）。ある白髪のおじいさんがいらつしやつてね、そして、すぐ、

「一夜泊めて下さい」とおつしやつているわけね。泊めてあげたら、そしたら、

「今日は正月だし、年の晩だから、米一合持つてきたのでね、あなた達は火正月をしているので」といって、一合、五合鍋に（米を）洗アらわして煮たら、いっばいになつてね、炊アけていたというが、それを食べてから、

また、隣に年の晩だからと行かれたわけさ。（白髪のおじいさんが）行つてきなさいと言われるので。それで、行つてみると、

「ねえ、いい正月ですなえ、若年をとられましたか」と、行かれたそうだね。そしたら、

「ねえ、あなた達もいい正月を迎えましたか」といって、おつしやつているわけね。そしたら、そこで年も迎えて、話もしてから家に戻つたら、

「さあ、それなら、洗面器に水を入れてきなさい」といわれた。入れて持つていつたら、

「顔を洗つて、手も、足も洗いなさい」といわれて、（言う通りに）したら若くなつた。そのおじいさん、おばあさん若くなつたので、また、あくる日、

「二日の日は隣におめでどう言うて来なさい」といってね、

「おめでどう」と言いに行つたら、帰つてくる時には、さうとう若くなつていでしょう。だから、あそこで、「どうしてお前達はこんなに若くなつているのか」と聞くので、

「私達に白髪のおじいさんがいらつしやつて、それで、洗面器に水を入れて顔を洗つたら、若くなつたんだよ」といって、

「さあ、それなら、そのおじいさん私達に必ず来てもらえませんか」といっているわけさあ。それで、行つて、

「あなたに来ていただきたいというので尋ねて下さいね」と言っているわけさあ。それで行かれてはいるわけ

よねえ。そしたら、そこで

「おじいさん、私達も若くなりたいたいで、ね、若くして下さい」といってねお願いしているわけよね。そして、その、おじいさんは、

「さあ、お前達も若くなりたいたいか。さあ、それなら、早く洗面器に水入れてこい」と(言うので)、水入れて顔洗うと、土のように顔もブツブツブツターなっているわけさあ。そうだったので、猿になって山に追いやっているわけさあ。山に追い払っているわけ。それで、おじいさんまた帰ってきてから、

「さあ、あの人はね、山に猿になって行っているの、あの家はお前達が住みなさい」といわれた。それで、その、おじいさん、おばあさんは、ねえ、そこで住むようになったわけよねえ。住んでいると、猿になって来て、ヒリヒリヒリして、すぐ屋敷の周りを歩き回ってね、木に登ったりなどして、家の上に登ったりなんかして。そういうふうにするので、

「これは、こんなことでは怖くて、そういうことではいけないから」といって、また、神様に手を合わせてね、

「これこれ、しかじかでお願ひがあります。あなた様のおかげでこの家に住まわせていただいています。その主がね猿になって来て、すべて、私達の屋敷の周りをいつも荒らして、とても怖いですよ。どうにかしてもらえませんか」と手を合わせているわけさあ。それで(神様は)またいらっしやって、

「さあ、それならね、火石を門の両方に置きなさい」

とおっしゃるわけさ。すると、その火で、これくらいしているのを暖めていたわけよねえ。冬だからね、それで、あの、その猿は寒いものだから、その石の上に座ったものだから尻を焼いてしまったわけよ。まっ赤になつて。(猿は)その時から、もう、来なくなっているわけよ。怖くてその猿は恐ろしいと思つて、また、焼かれるのではないかと。その時から、ずっと逃げっぱなしであるわけ。もう、戻ってはこないで。

それで、あの猿の尻は赤いそうだよ。それからというもの、そのおじいさん、おばあさんは「有難うございます」といってたいそう喜んでいたそうだよ。

だから、貧乏だからと見下したらいけないよ。あるもので助けてあげなさいということであるわけ。みんなお互いにね。人間は同じでしょう。だから、もう、このおじいさん、おばあさん、非常に喜んで、すぐ、若くなつていたというさあ。

⑥ 猿長者（猿の赤尻由来）

鳥袋キヨ（大正四年生）高原

昔ね、大昔よ、ある大晦日の晩にね、とつても、エーキンチユーと、またヒンスームンの老人夫婦の隣り合わせて住んでいたつて。それがね、このエーキンチユーの家にね、みの笠をつけた、ぼろをつけた人がね、

「道に迷っているから今晚泊めてくれませんか」つていつて来たからね、

「今日の大晦日のよい日にね、あなたのようなこんなに見ずばらしい物乞いがこつちに来るか。縁起もない、あんた早くどこかに行け」と言つてね、それで追われたそうです。それで、

「そうですか」と言つて、この旅人はこつちから、エーキンチユーのところから出て、この貧乏のおじいさんとおばあさんといるところに行つたそうさ。それで、

「遅くもなつていますけど、今晚一晩泊めてくれませんか」といつて聞いたからね、

「どうぞ、どうぞ。今日は大晦日でありますけどね、私は貧乏で何も馳走もなくてね、こんなにして、火を炊いて、火正月をしていますよ」と言つてね。この火正月というのはね、これからきたそうです。それで、

「あなたもこつちに温まつて、今晚はこつちで夜を明かして下さい」と言つたからね、この旅人がですね、

「ちよつと、鍋だつたら何でもいいですから、こつちに鍋を持って来て、この囲炉裏、火の上にかけてください」と言つてね、その鍋を持って来て、火の上にか

けたからね、ご馳走がたくさん出てきてね、炊けて。それで、こつちで、この神様、神様だつたでしょうねえ。それで、こつちで大きな大晦日をして、また翌日は、

「どうもありがとうございます」と言つて行つたそうです。それで、その人が行つてから、このおじいさん、おばあさんたちは、とつても大金持ちになつてね。それで、隣の金持ちの人がね、

「何であなたたちは、こんな貧乏が急にこんな金持ちになつているが、どうしたか」といつて聞きに来たらね、

「そうさうで、大晦日の晩にボロを着た人が来て、それで、こんな、こんなやつたから、神様だつたはずと思ひますよ」と言つたからね。その金持ちの人はね、さつそく、この人を捜しに行つてね、それで、捜して来て、こつちにもとつてもおもてなしして。だからね、

「あなたたちも、今日は正月だから、今、若水ね、若水を汲んで来なさい」と言つてね、

「それで、若水つて、この若水を、この火の上にかけて、沸かしてその水で浴びなさい」と言つてね。で、その水で浴びたから、家族全部お猿になつてしまつて、それで、おわりださうです。

それで、その前に、そのおじいさん、おばあさんも若水を使わしてね、とつても若くなつて、若返つて。あの、パンジャグワー（若盛り）になつたから、こつちはもう羨ましくなつて、習いに来て、「さう、さうだつたよ」と言つたから、真似して、またこのエーキン

※1 若水 元旦の日に、井戸から水を汲んで来て、その水でお茶を入れて飲んだり、顔を洗つたりすると若返ると信じられ信仰されている。

チユーもやったからお猿になってしまつて。それで、自分の家にもいられなくなつて、山に追われて、それで、毎日こつちの主人だつた猿が毎日、毎日来よるから、

「家を返せ、家を返せ」といつて、この若夫婦に、若返つた夫婦に言つて、毎日来るから、もう（困つていた）。また神様が来てです、

「それではね、これを追い払うのにはあんたたちは、マールサーを焼いてこつちに置いておきなさい。これが来る時分に焼いてね置いておきなさい」と言つて、それである、毎日、このマールサーに座つて、「家を返せ、家を返せ」と言つたから、それを焼いて置いたから、次来て焼いたマールサーに座つたから、赤まゝ猿になつてです、あれからはもう来なくなつたそうです。それで、赤まゝ猿になつた。

① 猿長者

金成初子（大正五年生）センター

神様が、ヨロヨロの悪い着物着て、金持ちのお家に、「もー、四、五日も御飯食べてないから、もしやご飯があつたら少し下さい」と言つてお願ひしに行つたから、女中がこれを見て、

「あんななにかにあげる物があるかあ。ああ、汚い汚い」と言つて。

「こつちの奥さんお願ひします、お願ひします」と言つたらね、この奥さんが出て来てすぐ見るなり、「はあー、こんなのが入つたら大変。早く早く帰しな

さい、帰しなさい」と言つて、塩持つてからに、塩で撒いて追い歸したわけ。だから、もうこのおじいさんは、本当は神様だけど、心見するためにこんな歳の晩に歩いているけど分かんわけさ。また、貧乏人のお家に今度行つて、

「ごめん下さい。もう私は四、五日もご飯食べてないから御飯下さい」と言つてしてね、

「どうぞどうぞ」と言つて、この貧乏のおじいさんおばあさんが出て来て、

「どうぞどうぞ。もー私達にはね今日は歳の晩でもあるけど、食べる物がないからね、開戸裏に火いっばいつけてね、この火で年を過すといつて温んでいませうから、これでよかつたら一緒にご一緒にして下さい」と言つて、一緒に食べる物はないけど、火正月（カシ）しているわけさ。その夜、

「こつちに一緒に寝ていいですか」と言つたら、

「はい、寝かして下さい」と言つて、一緒におじいさんおばあさんと寝たわけ。その時に、もう、夜が明けないうちに、おじいさんもおばあさんもきれいな服装になつて、そしてからに貧乏のお家は全然なくて、とつても綺麗なお家の大きい建物なつてるわけさ。このポロポロのおじいさんがあんなにしてから。こつちのおじいさんおばあさんも、びつくりして。朝起きたら、何でもこんなにも若くもなつていしね、十七、八になつていしわけさ。水もちゃんとカマドの側に汲んで置いてあつたつて。この水で顔洗つて。したから、もう若くもなつていし、着物も上等着て

幸一 マールサー 黒い硬い石で形の丸いもの。



いるし、お家も上等なっているしね。

「本当にあのおじいさんは何だったかねー、何だったかねー」と言つて驚くばかりらつたつて。それを、あのお金持ちのお家はこんな引き換えつてしているわけさ。貧乏人のお家になつてゐるわけさ。だ、あつちがお父さんお母さんが、

「こつちは本当私の家だよ、私の家だよ」と言つて、毎日こつちに来て邪魔しよつたつて。したら、またおじいさんが、ヨボヨボのおじいさんが、

「どうねー、気持ちはどうねー」と言つたから、

「もーこの間のおじいさん泊まつてから、私らちはもー、こんなに金持ちになつたみたいして、お家も上等なっているし、着けている洋服も着物も上等なっているし、夢みたいですよー」と言つたらね、

「あれ私か換えつこしたんだよー」と言つてね、

「それで、あつちのお父さんお母さんはもー、毎日こつちを僕の家だつた、僕の家だつたつて来るよー」と言つたら。あつち（金持の人達）はみんな猿なしてあるわけさ。来ない内に、猿なつてから来ているわけ。

「じゃあ、どこに座るねー」と言つたら、

「門の入り口に両方にすわる」とつて。

「それがすわるところで、石、大きな石焼いてね両方に置いておきなさい。あれだちが来る時分まで、強く焼いてからね置いておきなさい」と言つたら、猿は分かんから、また来てこの石に座つてゐるわけ。石に座つてゐるわけさ。したら、（焼いた石にすわつたので）あの時から、この猿のお尻があんなに赤くなつて、

焼けているとの話だつたけど。

⑤ 猿長者

西早マツ（明治三十四年生）久保田

昔の人から聞いた。これはよ、物凄いや貧乏者、また金持ちの人がね、もう家もきれいに造つてね。この貧乏者は馬鹿にしてね、いじめて、ね、貧乏者は、いじめて。金もないから、正月する金もないわけよ、このおじー、おぼーはね。そしたら、おじーがね、

「火正月しようね、おぼー」つて言つたら、天からよ、天からね、あの神様が下りて来て、

「あんたの家に泊ましてくれ、寝かしてくれ」言うてや、神どうやからね。来たらね、正月、年の晩つて。来たらの、白髪のね、この人たちは御神やけど、人間と思つたんでしょ。

「うちの家はね汚い。ね、カマスひいてね床もない、竹床でね寝ていますからね、こんな所、汚い所にね、もう、お宅は（泊めることは）できないから、隣の家はねきれいな家やからね、向こう行つて、ね、泊まりなさい」言うたらな、

「いや、私はね、あんたの所しか泊まるところない」言うてよ。そうしたらよ、このおじーさん、おぼーさんはね、火温みよつたつて、火正月してね、（何も）ないから。それで、もう正月もしないでしょ、年もとらん。このおじいさんが、神様がよ天に上がつてね、始めは、

「ハガマね水は入れなさい」言うてやつたらね米なつ



ている、ご飯なつて。これでまた、また、

「水を入れなさい。入れてきなさい」肉なつてね、肉なつて。それでこの神様が天に上がったらね、お金が天から落ちてきたつて、このおじーさんのね、ヒンズームンに、落ちてきたら、このエーキンチュよ、金持ちや、この貧乏者いじめた人よ、ね、も、たちまちこの貧乏者金持ちなつて、や、家もきれいに天から家も下るして、きれいにやつているんでしよう。やつたら、この金持ちがよ、

「なんでおばーさん達はね、こんな金持ちになつて、なんでねー」というとね、

「私はね、天からね、天から、神がいらつしゃつてね、こうこうして、私はね、天ぬ神様が金持ちにしているよー」つて言つたらね、

「私もする」言つてよ、この金持ちはやつたつて。(すると、猿になつてしまった)。猿はこれからつて。金持ちは、この貧乏者ぬ真似かたやつているわけよ。やつたらね、この神様がよ、これ、屋敷にね石があるんでしよう。や、これ、これによ、この昔も赤互いうてあるんでしよう。赤互よ火つけてね焼いて、神様が焼いてこつちに何したらね、この猿が、この(赤互に)火つけて焼いていると思わんよー、この猿が座つて猿の尻はこう(赤い)つて。

⑨ 猿長者

久高千恵(大正六年生) センター

昔ですな、もう大昔のずつと大昔のですな、片田舎の人里離れた村があつたそうす。それでそこにちよつと人の心試しと通つたのかそれは知りませんですけど、みすばらしい姿をして杖をついて、大晦日の晩にですな、お家もきれいな門で構えておられたお家ですけど、そこに入つていらして、

「私はこういうことで旅して歩いてる者ですけど、今日のところは宿をとらして下さいませんか」つてお願いしたらしんんです。ですけど、この方がみすばらしい姿で来られたもんで、その金持ちの方は断つたそうす。そしたら、また再三のお願いしたけども、門前払いされて。それからまた、トボトボ歩いて行くうちに、雨戸も綺麗に閉め切つて、ちよつと、隙間から明かりが見えたそうす。「じゃ、ここのお家立ち寄つてみようかね」と思つて、この方は行つたらしんんですよ。そしたら、おじいさんとおばあさんと二人きりで、も、お正月も何もなくなつて、食べるものもなくつて、白い御飯もない。それで寂しく二人囲炉裏のとこで座つて居る時に、この方が入つていらして、そういう事情を話したら、

「あ、こんなところでもよろしいんでしたら、さあどうぞ。一晩だけは、もう、かふるものもないけど、よろしかつたらどうぞ」と言つてお泊めしたそうす。そして、その翌日ですな、この方は立ち去つて行つたの。

「も、いろいろお世話になったから」と言ってお礼をあげて。こち去って、それで、この方は、ほんとは人間じゃなくて神様だったらいいんです。それでですね、この金持ちのお家の人の心見みたいなこと、この方は通つていらして。それでその豊かなお家は、「お風呂炊きなさい」と言つて、この方が、前、尋ねた方。

「お風呂炊きなさい」と言つて、そのお風呂にこの家族入れたそうです。それから、お猿さんになつて、この家族の人。猿になつて、そして、また、したら、もうこの貧乏、この方のお家に行つて、このお猿が、いつもなんか嫌がらせみたいなの、も、やつてるうちに、「そういうことするんじゃないかね」と心には思つて、それでまた通つて行つたそうです、そこに。それしたらね。

「そういうことでしたら、玄関の角にね、いつも同じ時間に来ていたそうです。それで、その玄関の角にマア石^{いし}つて言うんですよ、石。

「あれを焼いて、ここにこれが座るところに置いときなさい」と言われたそうです。あのおじいさんおばあさんに。それで、そういういつも来る時間、時刻を待つて、そしてここに石を焼いて置いて。したらこのお猿がそこ来て座つたらいいんです。それで、お尻が赤くなつたみたいですよ。これだけしか覚えてない。

⑩ 猿長者（チブルの種）

鳥袋サダ（明治三十六年生）高原

貧乏の家と、また、お金持ちの家と。神様が正月の年の晩に宿借りに来たから、

「今日は年の晩だから宿を貸さない」と言つて戻したわけさ。これ、戻したからね、貧乏の家に行つたから、この貧乏の家は、

「何もないのに人泊まらしたら。お正月でもあるし火正月もしているよ」といつて、火をたいて温まつて、

「馳走はないよ」

「それでもいい」と言つてこの神様が言つたから。この神様、少し何かを（編に）入れるみたようにしたらけど、編にいつばいのお米ができてねご馳走ができて。それをやりながら、また、この家は正月をこれでご馳走なつて。帰る時にはこのチブル、ヒョウタン。これをね、このヒンスーにもくれてエーキンチュにもくれば、このヒンスーにもくれば、金持ちの家のチブルもたくさんなつて、貧乏の家のものもたくさんなつてしたけれど、この金持ちのなつたチブルは切つたらね、蜂^{あぶら}がいつばいして、みんないじ飛ばされて。したら、もう、猿に女の主がなつたわけさ。これも、神様の仕業だから、刺されたから、この神様がくれたチブルには蜂^{あぶら}がいつばい入つて、これに刺されて、このお母さんは猿になつて、お父さんはまたガラサー（カラス）になつたわけさ。夜、いいことガラサーもあり、悪なことガラサーもいるさ。この女の主は、

※1年の晩 大晦日の晩。
※2この女の主は「神様」の語り遣いと思われ。



「も、いろいろお世話なつたから」と言つてお礼をあげて。こち去つて、それで、この方は、ほんとは人間じゃなくつて神様だつたらしいんです。それでですね、この金持ちのお家の人の心見みたいなこと、この方は通つていらして。それでその豊かなお家は、「お風呂炊きなさい」と言つて、この方が、前、尋ねた方。

「お風呂炊きなさい」と言つて、そのお風呂にこの家族入れたそうです。それから、お猿さんになつて、この家族の人。猿になつて、そして、また、したら、もうこの貧乏、この方のお家に行つて、このお猿が、いつもなんか嫌がらせみたいなの、も、やつてるうちに、「そういうことするんじゃないかねー」と心には思つて、それでまた廻つて行つたそうです、そこに。そしたらね、

「そういうことでしたら、玄關の角にね、いつも同じ時間に来ていたそうです。それで、その玄關の角にマー石^{マシ}つて言うんですよ、ね、石。

「あれを焼いて、ここにこれが座るところに置いときなさい」と言われたそうです。あのおじいさんおばあさんに。それで、そういういつも来る時間、時刻を待つて、そしてここに石を焼いて置いて。そしたらこのお猿がそこ来て座つたらしいんです。それで、お尻が赤くなつたみたいですよ。これだけしか覚えてない。

⑩ 猿長者（チプルの種）

鳥袋サダ（明治三十六年生）高原

貧乏の家と、また、お金持ちの家と。神様が正月の年の晩に宿借りに来たから、

「今日は年の晩だから宿を貸さない」と言つて戻したわけさ。これ、戻したからね、貧乏の家に行つたら、この貧乏の家は、

「何も無いのに人泊ましたら。お正月でもあるし火正月もしているよー」といつて、火をたいて温まつて、

「ご馳走はないよー」

「それでもいい」と言つてこの神様が言つたから。この神様、少し何かを（鍋に）入れるみたようにしたけど、鍋にいっぱいのお米ができてねご馳走ができて。それをやりながら、また、この家は正月をこれでご馳走なつて。帰る時にはこのチプル、ヒョウタン。これをね、このヒンスーにもくれてエーキンチュにもくれば、この人が。くれたから、金持ちの家のチプルもたくさんなつて、貧乏の家のものもたくさんなつて

したけれど、この金持ちのなつたチプルは切つたらね、蜂がいっぱいして、みんないじ飛ばされて。したら、もう、猿に女の主がなつたわけさ。これも、神様の仕業だから、刺されたから、この神様がくれたチプルには蜂がいっぱい入つて、これに刺されて、このお母さんは猿になつて、お父さんはまたガラサー（カラス）になつたわけさ。夜、いいことガラサーもあり、悪なことガラサーもあるさ。この女の主は、



昔1年の晩 大晦日の晩
※この女の主は「神様」の語り違い
と思はれる。

「あなたは、あんたたちは、この金満家の家に入りなさい」と言つて、貧乏の家の人間は、このエーキンチユエーキンチユの家に入つたさあ。あれたち鳥になつてしまつたから、猿サルに。そこに入つたから、また、もう一回来る時に、この神様が、

「どお」つて言つて来た。

「猿が毎日この黒石に座る」と言つたからね、

「したら、あれを火で焼きなさい。したら、来ないよ」と言つて。焼いたら、赤まゝ猿サルというのは、この焼いたもんに座つたから赤まゝ猿サルになつたわけ。焼いた石に座つたために尻しつぽが赤くなつて、赤まゝ猿サルというのはそれからの話の伝えと。

「自分の家つて」言つて来てこの黒石に座つたから。金満家だから、黒石といつたらたくさんあつただろう、みんなあれを座つたり、椅子もないから、あんなのに座つたりするから。あれに座つたから、尻しつぽを（焼いてしま）い、赤まゝ猿サル、赤まゝ猿サルになつてね、その時から来なかつたつていふ。

ガラス（カラス）はねいいことも語るし、悪い事も語るといふのは、この男のよしつて。その主はね、ガラサーだけけど、子どもが生まれる時にも、朝鳴く時には、「イイクトウガラサー」というだろう。夕方鳴くのは、また、悪いつて昔の人は言つたよ。

(2) 大歳オホトシの客① 大歳オホトシの客

平田シゲ（明治三十五年生）登川

〔方言原話〕

年としぬ夜よにてー、ヒンスーし、よー。なー。皆みな年としぬ夜よやクワツチーんくわつちーん作なめていかむぎさひが、天あまぬ神かみ様さまぬ降りていめんそーやーに、や。わからつとーてんばーがらー。「うまにかい宿泊しゆくぱくまらし」んでいめんそーちよー、

「家いへんやなやーぐわーねーびーくとうやー、なー、くまやかエーキンチユエーキンチユういびーるはじやくとう、いー所ところんじ借かみそーれ」んでい、かんし言いちえーるふーじ。ヒンスームヒンスームぬおじー、おばーがる、

「くまる上等じやうとうやるなーひ」いみしえたんでいやーに、わかとーみしえーぎさぐとう、とー神かみ様さまぬちやーんとう。うぬおじー、おばーや、なー、クワツチーんくわつちーんねーん、

「火ひ正月しんげつさーやー」んちな、ふゆーなーやなータムンぐわーくわー燃もちあんどうそーんでいひがよー、

「うふうふ鍋なべぬシンメー鍋なべんかいや湯ゆ、とーふかしえー」言いちきみさーに、うつたーが、

「おー」んちあんしふかちえーしく、薬いすぐわーねーそーりよー、味あじの素もとふーじーがらー、あんしさじぐわーさにいふいぐわーどう入りーらいなーしぐご飯いひかいるいぬクワツチーや炊いきていて、うぬ鍋なべぬいっばい。あんし、ご馳走ちしうがなーうまんとうーありはーい、「どー

神様やてーん」でい、うにーねー勤付てーがら。

「どー皆今日や、や、年ぬ夜ちクワツチーかどーくどう、いつたーんとど、くぬ鍋んかいつぱい炊ちえーくどう、皆年ん取てい、クワツチーんかみ」でいらつてい。また、

「湯んあちらはらーに、ゆー風呂わち浴みり」んでい言みそーやーに、浴みねー、しぐ十七、八ないるよ若者んかいつぱいなてい。年寄りぬおじー、おばーやな、あんひな、じこーぬ、くぬ人なー貧乏者どうやひがな。

隣れーまた、やな心お悪さめてー、やな、おじー、おばーやたんでいひが。うまにかいなムスルグワー借いがる行じよーたんでいるばーてー、うん人んかいつぱい泊まらずんでい。またうり、なーちやー持ち行じやくどう、

「アイナーぬーがやー。うぬ隣ぬおじーおばーさんねー、くぬムスロー貸らちえーひが、あんし若返らつとーる」んでい。や、話聞ちえーぎさはー。あんざくどう、

「夕び、ちやぬふーじぬ人ぬめんそーやーに、湯んふかしんちわかちやぐどうクワツチーんご飯からいるいるぬクワツチー鍋ぬいつぱい煮とーくどう、皆正月かてい、クワツチーかみんでい、かまはつてい。また、とー湯あちち浴みんでいららーに、けー浴みたくどう、年えー取てい色わかんでい。色ん若返ていよー、年やか上等になてい。やんどー」でい。ちやぐどう、

「あんしまーんかいはいみしえーたが」んでい。やーに、うりん寝ていてー、若くないんでい。ちやたんでい。が。やつぱし神様あ誠そーい人悪欲め者神ぬどうわかいみしえーる。正直の頭に神は宿るんでい。昔い言葉ぬちえーさぬあへー私ねー聞ちやる覚あるばーてー。

「共通語訳」

大晦日の晩に、貧乏なのでね（何もできなかった）。もう、皆は大晦日の晩はご馳走を作つて食べるようだが（貧乏の家では何もなかった）。天の神様が降りてこられてね。（神様は）わかつていらつしやつたのか。「そこに宿を貸してくれ」といらつしやつて、

「家も粗末な家なので、もう、ここより金持ちもいるはずですから、住まいの良い所で泊めてもらつて下さい」とこう返事をしたようだね。貧乏者のおじいさん、おばあさんが、

「ここが上等ですよ」とおつしやつたらしく、そんなことは分かっていたようで神様はちやんと。このおじいさん、おばあさんの所はご馳走もなく、

「火正月しようねえ」といつて、薪を燃やしてそうやつて温まつていたというが。

「大きい鍋のシンメー鍋に湯を、さあ沸かしなさい」言いつけて、おじいさんとおばあさんが、

「はい」と沸かすと、すぐ薬のようなものを、味の素のようなものを匙で少し入れたら、すぐ、ご飯から色々なご馳走が炊けてね、大きい鍋のいつぱい。ご馳走がいつぱいあつて、「これは神様にちがいない」と、そ

の時に気づいたのか。

「さあ、皆ね今日は大晦日の晩ということで、ご馳走を食べているから、あなたたちも、さあ、この鍋のいっぱい炊いてあるから、みなさんも年を取って、ご馳走も食べなさい」と言われた。また、

「湯を沸かして、風呂を沸かして浴びなさい」とおっしゃられたので、浴びると同時に、すぐ十七、八なる若者になってね。年寄りぬおじいさん、おばあさんたちはもう、たいそうな貧乏者であったそうなんだが。

隣の人は心が悪くてね、いやなおじいさん、おばあさんであったというがね。そこにムシロを借りに行っていたそうだと、その方を泊まらすと行って。それを翌日（返しに）持って行ったら、

「あれ、どういふことかねえ。その隣のおじいさん、おばあさんにこのムシロを貸したのだが、あんなに若返っている」といってね、話を聞いたようだね。すると、

「夕べ、こんな感じの方がいらつしやって、湯を沸かしなさいというので沸かすと、ご馳走が、ご飯から色々なご馳走が鍋のいっぱい炊けてるので、皆、正月のご馳走を食べなさいと下さって。また、さあ湯を沸かして浴びなさいといわれたので、浴びると、年を重ねても若くなりますようにと若返ってね、年より上等になつたんですよ」というと、

「その方はどこに行かれましたか」といって、その人もその人を尋ねて、若くなるうと思つていたらしいが。やつぱり神様は誠をしている者と悪欲のある人は

神は知つてゐるもので。正直の頭に神は宿るんという昔の言葉があるのを、私は聞いた覚えがあるわけさあ。

② 大蔵の客へ若水由来

桑江信子（明治四十一年生）泡瀬

「方言原話」

貧乏のお家はですな、ぬーんねーらんぐとう火正月んち。吊るしてタムンサーーいただ茶沸かち茶飲む正月。エーキンチヨーマた豆腐ん肉ん買やーんぶち、年ぬ夜やい。そのおじいさんぬんいらつしやつて、泊みていくいり」んでい。

「私たーや、なー、らんぐとう、らんぐとうしぬーんねーびらんや。火正月し、火ぬ年ぬ夜どうやいびーくとう、あまぬエーキンチユぬ家うてい泊まていくいみそーれー。な、家んいばさぬはごーさいびーくとう」
「必なーじ、ちゃんぐとうそーていん泊みていくいり」んでい、

「あんしヌーなー、ぐぶりーやいびーしん、らんぐとうそーていんゆたさいびーみ」

「ゆたさん」

「どーあんしヌー泊まいみそーれー」んでい。夜が明けたら、十二時過ぎたらお正月でしょう。

「ゆー風呂ん若水ん浴みーわるやしながなーうり、ちゃーすがやー」んち夫婦話しに、うぬおじいさんが、

「お湯もちゃんと沸かち、とーとーとー皆早く入れー」とおじいさんがおしやつて。あんさーい浴みたくと

若くなつたわけ。あんざーい、正月、正月お正月夜明きねー
若水さーい浴みねー若くないんでる話はなし。

それで、そのおじいさんは去つてから、うまぬ家や、
なー、若くないれー、いい正月お正月なやーい。あんざー
い、他ほかぬうむちむぬかい若水うさぎやーい、いいこと
があつたとかいお話。

あんざーい、うぬおじいさんがめんそーちやく
とう、つるさげて鍋ぐわーや実んねーらん汁ど
やし、すぐクワツチーん肉ん豆腐ん、うぶさーわか
さーすかまんてい。うぬ人めんそーらんなくとう
やー。うぬ人ぬーやたがやーんでい、神様。正月お正月ぬ神
様やみしえーたんでい。

あんざーい、近所隣聞ちやーい、正月お正月ねーうんとうー
し、なー若水さーい浴みーねー若くないんぬーぬー
んち。また、いー正月お正月んやくとうという話がありまし
た。

〔共通語訳〕

貧乏のお家はですね、なにもないので火正月といつ
て(火で温まつていた)。(やかんを)吊るして薪でた
だ茶を沸かして茶を飲む正月。金持ちはまた豆腐も肉
も買つて煮込んで(こ馳走を作つた)年の晩でもある
ので。(貧乏の家に旅人の)おじいさんがいらつしやつ
て、

「泊めてください」と。

「私たちの家はこんな状況で何もありませんよ。火正
月をして、火で温まるだけの年の夜なので、あそこ

金持の家で泊まつて下さいませんか。ごらんのよう
に、家も狭いうえに汚いところですので、」

「どんなでもいいですから必ず泊めて下さい」と。

「それなら、失礼ではありますが、こんな状態でもい
いですか」

「かまいません」

「それならどうぞ泊まつて下さい」と。夜が明けたら、
十二時過ぎたらお正月でしょう。

「風呂も若水で浴びないといけないんだが、もう、ど
うしようかねえ」と夫婦で話していたら、そのおじい
さんが、

「お湯もちゃんと沸かして、さあさあさあ皆早く入り
なさい」とおじいさんがおしやつて。そういわれたの
で浴びると若くなつたわけ。それから、正月、正月夜
が明けると若水で浴びると若くなるという話がある。

それで、そのおじいさんは去つてから、貧乏の家は、
もう、若くもなるしい正月お正月になった。そして、他の
神様にも若水を差し上げて、いいことがあつたとかい
うお話。

そして、そのおじいさんがいらつしやつたので、吊
り下げである鍋の中には実のない汁なんだが、すぐこ
馳走が肉やら豆腐も煮込んだり炊いたりするほどたく
さんのご馳走をいただいた。旅人のおじいさんはいな
くなつていたので。その人は何者だつたかといえは神
様であつた。正月の神様であられたそうだ。

そこで、近所隣聞いて、正月にはあのように、もう
若水で浴びると若くなるとか言い、また、いい正月で

もあるという話がありました。

③ 大歳の客（若水由来）

当真つる（大正十五年生） 泡瀬

〔方言原話〕

ある年寄りの夫婦がいたって。年寄りなつて、じめん儲きうーさんな、じめんねーらん、

「今日や私たーニクブクー布団敷ち寝んだやー、ウールかんでい寝んだやーハーマー」でいさくとう。うぬおじいさのー見ちよーしえー神様どうやつさい。あ

んさーに、「可愛そやうやつさー」でいやーなかい、あかちち起きやーに、

「うぬ若水、うぬ水さーに顔洗ねー若くないんぞー」でいやーに、あんさーに若水し。若水んでいしえー出じーたんでいぬ話てーな。

「私たーん若さでーやー働らんありんすしが」んでい話んしがちー寝たくとう、「あ、くぬ人たーがするむん」でいやーに、若くないんぞーでい。

「若水さーに顔洗いねー、若くないんぞー」でい。あんさーに、正月ねー、若水。

〔共通語訳〕

ある年よりの夫婦がいたつて。年寄りになつて、お金も儲けることができなくて、お金もなく、

「今日は私達は、ニクブク布団を敷いて寝ようねえ、ふとんかぶつて寝よねえハーマー」ということにした。

そのおじいさんたちの（様子を）見ているのは神様さあねえ。それで、「かわいそうだねえ」といって、明け方起きて、

「その若水、この水で顔を洗うと若くなるよ」といわれたので、それで若水で（顔を洗った）。（この話から）若水というのは出たという話でした。

「私達も若かつたならば働らいて年の夜も過ごすことできるのにね」と話ながら寝たので、「あ、この人たちはほんとに若ければ頑張るだろうなあ」といつて、若くしてくれたそう。

「若水で顔を洗うと若くなるよ」と。それで正月になると若水（で顔を洗う）。

④ 大歳の客

当真アキ（明治四十三年生） 胡屋

〔方言原話〕

トゥシヌユールー、年の晩。

「途中うていゆつくとーるむんなー泊まらちくいらんがやー」んちやぐとうよー、

「はーひやー、いやーやなームンクーヤどうやさに、いやーぐとーる者」んちいーほーたぐとうやー。トゥシヌユールぬどうあびーくしえーんちちゆさいやー。

なーちちとうくろー、いつべーヒンスームンやたんでいよー。火正月しいちよーたんでい、うぬかなしん

ねーん。

「芋がるあんどーやー、ぬーんかむしんねーんしが、あんしえー、まじゅーんうさがれー」んちよー。

「トウシヌユールーやるむんぬねーんたんな」でいちよー。

「うまんかい、いつべー持ちちくわー」んでいちよー。

「うまんじ泊まいんどー」でいち約束やくそくさくとう、とーうれーな、クアツチーあんなーにみつちやかーあんなよ、なしぐ、かでい。また、しぐ、銭ぜにんよ、金かねん家いかい行いちちねーよ、

「うれー私わがが出ていからどう聞ききーんどーやー」んちよ、金かねんうほーくよ、ウチユクイジチンなかいよ、うんぐとうーし、よ。うんぐとーる、な、乞食こじきぬ。

昔むかしエトウシヌユールーねー坊主ぼくしの夢見ゆめみじーねヒンスーぬ神かみぬ入いちよーしが、ムヌクーヤー夢見ゆめみじーねーよ、うりから出いじとーんでい。「早はやこー寝ねんどうな」んでいちよ。あんし、いい心持こころもちちよーしえー、しぐ、クアツチーんなーくいまそーちよー、銭ぜにんうほーくありつち、やー、あんしやたんでい。

うまぬ、また、なー泊よみらんたるとうろー、ヒンスーなていよー、

「いったー、たれーま、あんし、まーからウエーキさが」でいちよー、

「ゆうびや、ムヌクーヤーやしが、んなあるぐとうどうあるんちや。かむしんねーん、な、泊よまらちくいりでいちやぐとう、泊よまらちやぐとう、あん、あん、やたんどーやー」んちよー、話わさくとうよ。欲ほぬまぎさぬぐとうよ。「神かみどうやみしえーてるやー」でいちよー。

「トウシヌユールーねー早はやこー寝ねんどうな」でい

たしが、今いまあんいちんあみ、な、ニープイしーねー、寝ねんじゆしえーやー。

【共通語訳】

大晦日の晩、

「途中で日が暮れてしまったので泊めてもらえませんか」とお願いしたら、

「なんてことだ、お前は乞食だろう、お前みたいな奴なんか」と追い払った。大晦日の晩にいろんなことを耳にするでしょう。もう一カ所は、たいそう貧乏者であったそうだね。火正月して座っていたそうだ、食べるものもなく。

「芋があるんだよ。何も食べるものではありませんが、それでは、一緒にお召し上がり下さい」といつてね。

「大晦日だというのに、何もなかったんですか」といつてね。

「ここに(ご馳走を)たくさん持つてきなさい」といつてね、

「ここで泊まります」と約束をするとそこにはご馳走がたくさん出来た。すぐに、それをいただいて。また、すぐ、お金もね、お金も、(この人が)家に帰る時にね、「これは私が出てから開けるんだよ」と、お金もたくさん風呂敷包みに包まれていた。あのような乞食が。

昔は大晦日の晩には坊主の夢を見たら貧乏神が入っているが、乞食の夢見たらね(いいことがあるそう)だという話は、そのことから出ているようだよ、(大晦日の晩は)「早く寝るな」といつていた。それで、い



い心を持つているものは、すぐ、ご馳走もいただいて、お金もたくさんもらうことができたそう。

「その、また、泊めなかつた所は貧乏になつてね、お前たち、あつという間に、こんな金持ちになつたのか」といつてね、

「昨夜、乞食だが、みんな、あるだけのものしかないが、食べるものもなく、それでも、泊まらせてくれというので、泊まらせると、こんな風になつたんですよ」と話したら、欲深かつたんでしようねえ（最初に尋ねた家の人たちは）。（乞食の姿をした人は）「神様だつたんだらうねえ」と。

「大晦日の晩は早く寝るな」と言つていたが、今はそういうことはないよね、眠くなつたら寝るものね。

⑤ 大歳の大の客（獲長者）

東静江（明治四十年生） 池原

昔の年寄りの話聞いたんだよ。その時（大晦日）にね、どんなに身なりは悪くやつていても、それは追い出してはやつてはくれるな。で、それはやつばし尊敬やつて、尊敬といつても親切にやつて。

大晦日の節句は、お互いに両方、向こうもやつてまた自分も一緒に食べて、その大晦日の節句を親切にやつてあげたなら、

「あんたは何か欲しいか」と言つてね。向こうから入つてきたその年寄りが、その惨めな生活をやつてい

「あんたは何か欲しいか」と言うたらね、

「子供も欲しいが、金も欲しい」と言うたらね、

「今日は、お湯に入れて若くやつてあげましようね」と言つてね。で、鍋にお湯を炊いて、お互いにそこで節句をやつたなら、すぐその場で年寄りであるけど若い青年になつてしまつて。

また、明日からは、生活がどんどん変わつてしまつて、一時の間で若くなつて。またどんどん日々に、生活とお金と不自由はせずに、楽に生活はやつていつたそうだとの話があつたんですが。

⑥ 大歳の大の客

当山全栄（明治四十年生） 池原

エーキンチュ（金持ち）とヒンスームン（貧乏者）とお隣同士いたそう。それで、この、エーキンチュンかい食料がないもんだから、ヒンスームンが金持ちの家に借りに行つたそう。その金持ちの所に行つたらこれは貸さなかつたそう。よ、借はね、外にある米俵。仕方ないから、いえは、夫婦暮らしてあるから、

「今日は火正月ひなまつりしよう」といつて。台所に火をたいてぬくんで、年寄り二人正月したそう。そうだから、今度は、この若水わかみづというのに、これを、昔、神様が下りて来て、

「今日、こちらに宿を貸してくれ」といつて頼んだけれど、

「ここは何もないからね、この隣の金持ちの家へ向こ

※1どんなに身なりは 大晦日は乾物の置がやつて来るので大歳と言われ、その晩に訪問する客が福を授けるので、身なりがみすばらしくても追い出さないといふこと。

たらいけない』と思つて、あの、神様からね、

「お前はそんなに毎日喧嘩するんであつたら」と言つてね、お猿になつたそうだよ。昔、この金持ちはね、猿に化けたつて神様から、猿になつて、貧乏人は真心だから、バカにするからね、バカにするから、

「同じ人間でありながら、こんなにお前はもう精神が悪い」言うてね、お猿になつた。ね、それで、あの、猿になつたからね、山に行くんだな猿は、木の実を食べてあれするから。

それからよーねー毎日この家に来て、猿がよ、モノは言わんけどね。あの、こつちに大きな庭石があつたそうだよ。庭石ね、そこに座つてね、「キヤーキヤー」言つてねしよつたそうさ、このお猿が。これ、あの金持ちの人間だよ。もう、そうなつたもんだから、「これではいけない」思つて、この石をね火であぶつてね黒焼きにしたそうだよ、石を。毎日来て座つてうらめしそうに見ているから。それで、黒焼きにしたらね、またこつち来て座るそうだね。座つたからね、熱いだろう、「キヤー」と言つてね、飛び出てね。あれから、お猿の尻は赤くなつてお猿だ。

そういう子どものおとき話みたいなもんだけど。それも聞いていたから。それからね、お猿の尻はもう赤くなつてね、もうあれから来なくなつたそうさ。

九 継子話

(一) 継子の麦つき

① 継子の麦つき

仲宗根カメ(明治四十二年生)登川

〔方言原話〕

昔よー、ある所んかいやいびんよー、継子まっかとう女ぬ親おやとうあい仲なつやいびーたんでいしが、継親まっかおやぬどうく悪魔あくまなやーによ、日々ひびぬ暮くらしんあんすかゆーや、いゆ仲なつあらんないそーるむんぬ。麦取あきてーぎさくどう、うぬ麦よ、白んかい入りやーに、「からじきし、よー、やーんでいやーに、ぬーん入りらんうんぐとーにちかちやぐとうな、な、な、ひつちーちちんな、いぬ色いろやるば、皮かわむきーんでいんねーらん。さくとうな、おや「かんしる人親ひとおやひれーがやー。人ひとびれーんでいへーかんしやがやー」んでい泣なち、「どうーぬ親おやどうんやれーやー、どうーぬ親おやぬ生なきちよーていーねーかにんあらんたるむん」でいやーに、「話はなんちゆーごーないたるむん」でいやーに、あんし、うぬ子こぬ泣なちえーる涙なみださーに、落おていてーるとくま麦ぬしらきやーに。あんさーに取とりてい見みちやぐとう、白しろどーしんあい、ちやーんしんねーんしん、「私わがが涙なみだ落おていてーるぶのー、やつぱし白しろどーさやー」んでい、うりからどう、「水みづ入いてい麦あきさよーやー」んでいぬ継子まっかからぬ伝説でんせつ、ならーし。

〔共通語訳〕

昔ね、ある所にすね、継子と母親との仲のことですが。継親があまりにも悪魔のような人で、日々の暮らしもそんなに、いい仲ではなかったが、麦を取った時のことであるが、その麦を、白に入れてから「そのままつきなさい」といって、なにも入れないでつかしたので、もう、もう、一日中(ついても麦の色が)同じ色で、皮がむけるわけでもなく。そうしたもんだから、「このようにして人は継親と付き合うものだろうか。人と付き合うとはこういうものか」と泣いて「自分の親であればね、自分の親が生きていたならば、そういうこともなかったはずなのに」と思い、「話もちゃんどできたはずなのに」と思いながら、そして、その子が泣いて涙が落ちた所の(麦の)皮がむけた。そこで取って見たら、白くなっているものもあるし、変らないものもあり、「私が涙を落とした所は、やつぱり白くなっているねえ」と思い、それから、「水を入れて麦はつくものだ」ということは継子からの伝説、教えである。

② 継子の麦つき

吉田(島袋)タケ(大正七年生)知花

〔方言原話〕

うぬ継子まっかや、て、ちゅーばー継安つとやすンマーない育そだていらつとーてるばーてー。なーちかなつとーてるばーてー。あんさくとう、「いやー、今いま日ひや、な、うぬ麦あしらぎりよー」んでい

継子話 継親のいじめに継子が耐え、継子が成功する話。

言つとゝるばー。

「(水)使んよーいや、うぬ麦しらぎり」んでい言つとゝるばー。あんざくとうな、

「おー」んでいちなー。昔ぬ継安マーでーじやたんでいよ。あんざーになー、うぬ子や、

「おー」んでいちなー、ちやさくさじやんでーんなー、手ぬ皮ぬはぎるかくさじやんでんなー、くさざらんでーな、うぬ麦えな、皮やはぎらんばー。あんざくとうな、白んかうちやかやーに、な。昔え、白んかいる、コンマーさーにるくさじゆくとう。あんざーに、うぬ白んかうちやかやーになー、ちゆふあーら泣ちえーるふーじ、な。手ぬやむかさんてんなー、皮やはぎらんしえーや。あんざーに、な、さくとう、な、うまんかい涙ポンない落ていていさくとう、うま柔らちよーしえーや、水ぬ溜まやーに。『んだ、な、なーひんまたしんだどー』でいくさじゆくとう、皮ぬはぎーたんでい。あんざくとう、『どー、うれーや、安マーがー水え入りらんよーいんでい言ちえーひが、水入ていくさじゆるむんどうやさやー』んでい言やーに、水入てい、あんざーに、うぬ麦えくさじさくとう、立派ぐわーうりし、しらぎらつとゝたんでい。

だから、あんしるや、うぬ継子からどう、うぬ麦しらぎよー習たんでいんどー、あんし。昔ん人ん分らんでゝるばー。うん、うぬまま水入りらんよーいしんないんでい思みてゝるばー。だから、『くぬ麦くさじゆしえーや、昔ぬ継子ぬ習ちえーる事やさ』んでい言りー

たるばー。

〔共通語訳〕

その継子はね、気の強い継母に育てられていたわけさ。もう、養われていたわけさあ。それでね、

「あなた、今日はもう、この麦をしらげなさい」と言われてゐるわけ。

「(水)を使わないで、その麦をしらげなさい」と言われてゐるわけ。それで、

「はい」と返事した。昔の継母は恐るべき人だったと思うだ。それで、その子は、

「はい」と(麦をついたが)、どんなに妻の皮をそぎ落とそうとしても、手の皮がむけるくらいそぎ落しても皮をむくことができない、その妻は皮がむけないわけ。それで、白にもたれかかつて。昔は白で棒で皮をそぎ落としていたから。それで、その白にもたれかかつて、涙が枯れるくらい泣いたようだ。手が痛くなるほどついても、皮はむけないさあねえ。すると、その涙が、そこにポンポン落ちたので、そこは柔らかくなつてゐるさあ。水が溜まつて、『どれ、もう、またやつてみようかねえ』と麦をついたら、皮がむけたそうだ。それで、『なるほど。麦はね、お母さんは水を入れないうつきなさい』といつていたが、水を入れてつくものだねえ』と思つて、水を入れて、そしてその麦をつくと、きれいに皮がむけて、しらげることができたそうだ。

だから、それでね、その継子から、その麦のつき方

を教わつたそうだと、つき方を。昔の人も知らなかつたわけ。そう、そのまま水を入れないでもつくことができるものだと思つていたわけ。だから、「この麦をつくのはね、昔の継子が教えたことだよ」といつていたわけ。

③ 継子の麦つき

榮野比トヨ（大正六年生）知花

〔方言原話〕

米やいねーしぐちやーちちしーねー、立派んぐわー皮や又カんけーなてい立派ぐわーないたんでいひが、うぬ麦え、なーちやさくさじんならな、うぬ子や泣ちがちーくさじやくとう、うぬ涙やうぬ麦んけーじこー落ていてんばーて。あんさーに、うりがしみち、うぬ涙しつたていさくとう、立派ぐわー皮んきてい、あんさーに、うんにーから、「あはー麦え水ん入ていいからちちゆるむんやはやーんでいち。うぬ、人ぬ涙し、泣ちよーる深し皮んきーるくとうなたんでい。あんさー、うにーからーなー、水ん入ていどうくさじゆるむんやんでいち、麦え水ん入ていからくさじやんでい。

〔共通語訳〕

米なつつき続ていると、きれいに皮はヌカかになつてきれいに出来たそうだが、この麦は、もういくら皮をそぎ落とそうとしてもそぎ落とすことができないので、その子は泣きながらそぎ落としていたら、その涙がこの麦にたくさん落ちたわけさ。それで、涙が麦に

染み込んで、その涙でしめつたので、きれいに皮がむけたので、それで、その時から「あお麦は水を入れてからつくものだねえ」とわかつた。麦は、人の涙で、泣いた涙で皮をむくことができたそうだ。それで、その時からもう、水を入れてそぎ落とすものだと、麦は水を入れてからそぎ落としたそうだ。

④ 継子の麦つき

平田ワト（明治三十二年生）松本

〔方言原話〕

ハ二ぬある麦んちあたしヌーやー。かんしちウーシんかい入つていちきわる皮やんきわるかまりてーくとうよー。どうーぬんかいや水かちやーしーねー早くはぎーしちちねーないしヌ。継こんかいや、水え入りらんぐーとうーひつちーちかすたんでい。な、うり、はぎらんしヌ。ギーギー泣ちやぐとう涙ぬ落ていてい、うりさーい、涙ぬあたいしヌーはぎーたしが、たとうれー、うぬふーじ。また、しヌーんてー、えーりん。

〔共通語訳〕

羽のある麦というのがあつたさあねえ。こうやつて白に入れてついて皮をむかないと食べられなかつたからね。自分の子どもには水まぜると早く皮をむくことができるさあ、つくことができるさあねえ。継子には、水を入れないで一日中つかせたそうだ。だからほら、皮をむくことができるさあ。ギーギー泣いたら

涙が落ちて、それで（水をいれたらつくことができる
とわかつたんでしようねえ）。涙が落ちたところは皮
をむくことができたので、それからヒントをえて少し
はできたんでしよう。それで、水を入れてついでみた
んでしようねえ、たぶん。

⑤ 継子の麦つき

諸見里マツ（大正二年生）美里

〔方言原話〕

うぬ継子や「水え入りらんぐーとうー、くぬ麦えち
きよー」でいちやぐとう、水え入りらんぐーとうー麦え
ちからん。あとー、もー涙でねー、うぬ麦えちゆくい
ぬぐとうなつたぐとう、あんざーに、麦え立派ちかっ
とーんちよ、くぬ継親や珍らささーに、
「水ん入りらんぐーとうー、かんしちなま麦いヤーや
ちえーしがーんでいち、ゆくんいじみたぐとう、
「実え、あんあんしどう、なちかさぬどうちちゃんどー
やー」んちやぐとう、それ以後はね、この継子いじみ
らんだんでい。

〔共通語訳〕

その継子は「水を入れないで、この麦をつきなさい」と
言われたので、水を入れないと麦はつけない。しま
いには、涙でねその麦をつくことができたので、それ
でやると妻が立派につくことができたので、この継親
は珍らしく思い、

「水を入れないで、このようになま麦をついたね」と、

これまでよりもいじめたので、

「実は、これこれ、しかじかで、悲しくて涙が出てそ
れでつくことができたんですよ」と答えたら、それ以
後はね、この継子はいじめられなくなつたど。

⑥ 継子の麦つき

屋宜ハル（大正三年生）安藤田

〔方言原話〕

昔え継子どう間ぬいっべーくふあさたんでい
しえー。麦やていんはだかーとう大妻どう二ちあん
よーやー。大妻えしらぎぐるさるばーてー。ありよー
ひー、ほんどー水入ていしらぎりわる、しらぎらりー
しが、水ん入りらんよーいしらぎらちよー、ふつちー
なー。あんざぐとう、うぬわらべー「あんし、うんなげー
しらぎていんむるみーならんあるやー」んち泣ち、涙
落ていとーるとうくまー、麦んかいあたとーし、うまー
しらぎらつたぐとう、「ああ、くれー水入ていしらぎー
しるやさやー」んち、水入ていしらぎたんでいしえー
聞ちやしが。

どうーぬ子ぬーんしみらんしえーやー。あんざーに
継子どうーぬ子やかいつべー成功そーたんちぬ話ぬ
あたん。

うぐとうーやくとう、いったんしんしく仕事ふゆーさ
んよーい、はまていしーよーんでい言たるばーどうや
んどー。

〔共通語訳〕

昔は継子と（継親の）間はないそう悪かったというでしょう。麦には裸麦と大麦と二種類あるんですよ。大麦はしらげにくいですよ。それはね、（大麦は）ほんとは水を入れてつくと、しらげられるのだが、水を入れないでしらげさせたのでね、一日中。すると、その子どもは「なんと、こんなに長い事ついてもらてるのができないのかねえ」と泣いて、涙を落としたところは、（涙が）麦に落ちたところは、そこはしらげることができたので、「ああ、これは水を入れてしらげるものだねえ」と、水を入れてしらげたというのは聞いたがね。

自分の子どもには何もさせないさあねえ。それで、継子は自分の子よりたいてい成功していたという話があった。

そういうことなので、あなたたちも仕事は怠けることなく、励みなさいよと言っていたんですよ。

⑦ 継子のまつき

神里マカト（大正元年生）安藤田

〔方言原語〕

麦ちかされー、ひつちーちん、ちちんむるなーしららぎららばーてー。『アイナ、ぬーんちしららぎらんがやー』んちよー泣ちやくとう、涙落ていたくとうてー、うまーしららぎらつとーたんてい。『アイエーナー、うれー水入ていしらぎーするやさやー』んでい、いやーにや、あんさーまた水入ていしらぎていよ、あ

んさーなかいありそーたんてい。

〔共通語訳〕

麦をつかされたので、一日中ついても、ついても全然しらげることができなかつた。『アイナ、どうしてしらげることができないのかねえ』と思ってね泣いたら、涙が落ちたので、そこだけしらげることができたそう。

『アイエーナー、これは水を入れてしらげるもんだねえ』とわかつてね、そして、それから水入れてしらげてね、それでつくことができたそう。

⑧ 継子のまつき

昔久原カマド（明治四十三年生）安藤田

〔方言原語〕

昔はね、継親どう継子ぬとつても差別があつたらしくて。うぬ^{ウヌ}継子^{ウヌ}よー麦ちちゆんでいたしがや、ちちゆしがな、なかなか。涙が出てね、涙が流れたから『これは水入れてつくもんだねえ』と思つて、水入れてついたら、皮がよきはげた。継子いじめでね、涙が出たから涙で、涙落ちた所はよくつけた。それで、「水入れてつくもんだねえ」と思つたつて。

この大麦といふものね、とつてもつきにくい。皮むちぐるさぬよー。ハダカームジ、ウフムジャーんでいあたしえーやー。

※『アイナ』「ああ、どうしよう」と、悲鳴に似た時に発する言葉。
※『アイエーナー』びっくりしたり、驚いた時に発する言葉。

〔共通語訳〕

昔はね、継親と継子のとつても差別があつたらしく、その継子は麦をつこうと、ついでいたらしいが、なかなか（つく）ことができなかった。涙が出てね、涙が流れたから『これは水入れてつくもんだねえ』と思つて、水入れてついたら、皮がよくむけた。継子いじめでね、涙が出たから涙で、涙が落ちた所はよくつけた。それで、『水入れてつくもんだねえ』と思つた。

この大麦というものね、とつてもつきにくい。皮むきにくくてね。裸麦、大麦等があつたがね。

⑨ 継子の麦つき

上福ウサ（明治三十一年生）宮里

〔方言原話〕

「大麦えいひぐわー水ふくらひわるやふあらちやーに皮やはんでいーや。あんさーに、なー、うぬ麦なー大麦やくとうな、水ぐわーふくらいはるはんでいーくとう。な、なんとうしちんはんりらな。あとー神様助しきーがめんそーち、

「えー、いやーが今日一日、うれーちからんどー。とー私が言んねー、いひぐわー水ぐわー、茶碗ぬみー入ちちやーうまーふつくわちんでー。なま、しらぎらでいー」んでいいやーに。なー、あんち、神様ぬ言ちやぐとう、助きらつてい、うぬ者しらぎらやーに継親ぬとうたんでい。

とー、あんし、継子苦しみそーんどー、昔え。

〔共通語訳〕

大麦は少し水でふやかすとやわらかくなり皮がむけるんだよ。だから、ねえ、その麦は大麦なので、水を含ませないと皮はむけないから。だが、どんなに（皮を）むくことができなかった。しまいには神様が助けにいらつしやつて、

「ねえ、あなたが今日一日中やつても、それはつくことはできないよ。さあ私が言うように（してごらん）、少しの水、茶碗の一杯水を入れてきて、麦をふやかしてごらん。すぐ、皮をむくことができるから」と教えて下さった。ねえ、そのように、神様がおつしやつたので助けられて、継子は麦をつくことができ、継親は（ついた麦を）取ったそうだ。

このように、継子というものは苦労したんだよ、昔は。

⑩ 継子の麦つき

照屋ツル（明治四十二年生）照屋

〔方言原話〕

ウフムジャーとうかぬーとうか言しえーや。これ、皮ついているわけ。あんさーい、ウフムジャーなーからちさくとう、涙どうやがやー、涙が落ちていていこつちにあれたつて。あの、できるわけ。『ああ、あんしえー、水入ていちちゆるるやさやー』んでいいやーい、うりしえーたんでいどー。

〔共通語訳〕

大麦とかなんとかいうさあねえ。これ、皮がついて
いるわけ。それで、大麦を何も入れないでついたら(つ
くことができなかった)、涙だつたのかねえ、涙が落
ちて麦をぬらしたそうだと。すると、麦の皮がむけたそ
うだ。「ああ、これは水を入れてつくものだねえ」と
思い、それから、水を入れてついたらそうだよ。

⑩ 継子の麦つき

桑江カマド(明治三十四年志 東横原)

〔方言原語〕

麦えしらぎらちやくとどうてー、うぬ継親んでい
しえー継子んかい、水入ていどう麦えしらぎーん
どー。あんしがな、ぬーん入りらんぐとーな、
ひつちーコッコイ、コッコイしてー、ウーシ、アジン
さーに。継子んでいしえー、な、うつちん、うつ
ちんむるんじちんざーん、ちやーゆぬむんどうやく
と、あとー泣ちやーに、麦んかい涙ぬ落たぐと、
うぬ涙ぬ落とーる、しつたとーしえー、しらぎらつた
ぐと、^{おと}「くれー水入ていすしどうやさやー」んち、
あんし、いーはんていち、うぬ継子ぬどーなーくる。
くぬ継親のー語らん、あんすかみつくわさし。涙ぬ落
ち、ちよーどう、うぬ麦んかい涙ぬ落てい、な、あ
とー、な、いーしつちやい、しつちやいし、しらぎ
らたぐと、うぬ、しつたとーしえーしらぎらつたぐ
と、^{おと}「水かきていどうすさやー」んち。あんざーに、
うりからどうやんでいど。水かきてい、うぬ麦えし

らぎらつたんでいしえー。

〔共通語訳〕

麦をしらげさせたからね、その継親というのは、そ
の継子に水を入れてから麦はしらげるもんだが。だけ
ど、何も入れないで(つかせたので)、ずっとコッコ
イ、コッコイして白をキネで。継子は、ついても、つ
いても全然皮がむけないでそのままなので、しまいに
は泣いてしまひ、麦に涙が落ちたから、この涙が落ち
てしめつた麦はしらげることができたので、「麦は水
を入れてやるもんだねえ」と、その継子は自分で知る
ことができた。この継親の教えではなくて。こんなに
憎まれて、涙の落ちて、ちよと、その麦に涙が落ち
て、それでも一生懸命についていたら、しまいはし
らげることができたので、その、しめつたところはし
らげることができたので、「水をかけて麦はつくも
んだねえ」と。それで、その時から麦は水を入れてつく
のは、その時からなんだそうだよ。水をかけて、その
麦はしらげることができたというさあ。

⑪ 継子の麦つき

喜屋武千代(明治四十四年生) 泡盛

〔方言原語〕

継子に麦ちかちやくとどうや、水え入りりわる麦え
ちかりぐと、いーから麦えちからんたんでい。あ
んざーにや、白んかい、かんざーにや、「アイエー、
わんたるむん」泣ちやくとどうや、この涙が落ちてちや

ぐと、『アイエー、くれー、水入ていちぢゆしやてーさ、やー』んでいやり、こんなちぢやぐと、
「いやーや、誰がこんなしてやりよつたか」と怒りよつたつて。継親がだよ。

〔共通語訳〕

継子に麦をつかしたらねえ、水を入れると麦はつくことができるが、そのままでは麦はつくことができなかったつて。それでね、白にもたれてね、『どうしようかねえ、私は・・・』と泣いたのでね、この涙が落ちて（麦を）ついたので『なんと、麦は水入れてつくものだったんだねえ』とわかつて、（水を入れて）ついたら、

「お前は、誰がこんなしてつけとつけたか」と怒りよつたつて。継親がだよ。

⑬ 継子と麦つき

宮城タケ（明治四十年生）与儀

〔方言原話〕

自分ぬ子んかいや米しらぎらち、また継子んかい麦しらぎらちやくと、な、麦ちぢやんでーん、ちぢやんでーん、ちやーゆぬむんどやつさーや。苦しみのあまりに涙ボンボン落ちてさ、この涙が落ちることに、これがわけて。うりから、麦水入ていちぢゆんでいだけ。

〔共通語訳〕

自分の子には米をしらげさせて、また継子には麦をしらげさせたら、もう、麦は（いくら）ついても、ついても、なんの変化もないさあねえ。苦しみのあまりに涙がボンボン落ちてきて、この涙が（白に）落ちるごとに、麦がつけるようになった。それから麦は水を入れてつくつて。それだけ。

⑭ 継子の麦つき

平安名常亀（明治四十年生）園田

〔方言原話〕

麦ちぢーねーどー、本当でいいーねー麦え水入ていどうちぢゆしやるばー。継親ぬ水え入りらんよーいちきんち。あんしな、水入りだんあいねー、うぬ麦のー皮やはんらん。はんらんくどう、くれーどーくなんじなてい、涙さーなかい麦えんだち、んださーなかい、うぬ麦ぬ皮ぬはんりていから、『麦えー水入ていちぢゆしやさやー』んち分かこーるばー。あにんねーうえーかーやー、継親のーしぐ、ふいつちーにんちからんぐと、哀りしみる考し。あんぐと、昔ぬ継親、継子でいしえー、うぬあたゐ哀りそーんどー。

〔共通語訳〕

麦をつく時にはね、本来は麦は水を入れてつくものなんだ。（しかし）継親は水を入れないでつけと。それで、水を入れないと、その麦の皮はむくことができ

ない、皮をむくことができなないので、それはたいそう疲れて、涙で麦をぬらし、ぬらしたので、その麦の皮がむけたので「麦は水を入れてつくものだねえ」と分かったわけ。それを知らない間は、継親は一日中いつでも皮はむけないので、つらい思いをさせようという考えであつた。だから昔の継親、継子というのは、そのくらいつらい思いをしているんだよ。

⑤ 継子の麦つき

島田敏（明治四十二年生）山内

〔方言原話〕

今だったら妻は水入れたらすぐ皮はとけるでしょう。水も入れないですぐつかしたから、

「必じ水や入りらんよーいーちぎ」んでいばーどうやくとー親のー。あんし、水入りらんよーいー、ふんと水入っているちぢしやししが、

「水や入りらんどうちぎ」んちやくとう、あい、ちかりーんな。泣ちやくとう、涙ぬポンないさくとう、うぬ、涙ぬ、ポンない、したとーるうつさー、はぎーたんでい。あんさくとう、水入っているちぢんでいるばーてー、うぬ。「ちやーざらー、うぬ継子いじみーがやー」んでい親のー。今やていん、今やていん、くぬー芝居あしえーや、継子いじめんでい。

〔共通語訳〕

今だったら妻は水入れたらすぐ皮はむけるでしょう。水も入れないですぐつかしたから、

「必ず水は入れないでつけ」と言うわけだから、継親は。だって、水を入れなくて（つくことはできない）、ほんとうは水を入れてつくものだけど、

「水は入れないでつけ」というから、つけるわけがないでしょう。泣いたので、涙がたくさん流れたので、涙が落ちて麦がしめつたところは皮がむけたそうだ。そしてから、水入れてついたというわけさ、麦を。「どうしたら、この継子をいじめることができるかねえ」と親は考えていたわけさ。今でも、今でも、この芝居があるさあねえ。継子いじめというのが。

⑥ 継子と麦つき

平田嗣光（大正六年生）登川

継親と実子と継子がおるわけですよ。我が子は可愛いもんだから、しかも弟だもんで大事にして、で、なんでもかんでも上の方に仕事を言いつけるわけです。そしてもう、夜は遅くまで「これだけの仕事をやれ」と麦を杵でつくそれをさせられたと。あまりの悔しさに涙をポロポロ流してついたら、案外手早くつけたわけですよ。そこで、その子はいつも麦をつかされる場合には、涙のかわりに水を入れてしめさせてやったら、非常に出来上がりがいいと、早いということになつて。それを今度他の方々が聞いて、見よう見真似で麦をつく場合にはやっぱり水を入れた方が早くつくんだというような伝えがあつて、昔、麦飯を炊く場合の麦つきは水をぬらしてついたということになつておるらしい。

① 継子の麦つき

新城キヨ（大正元年生）美里

泣いてからにいじめられてよ、継親に。で、いじめられて、いじめられて。米だったらつきやすいけど、麦は難しいなあねえ。あれつかしておいて、も、泣き泣きついてからに、その泣いた涙が落ちて、それで皮がむけやすくてね、早くつけたという話は聞いた。

それで、今でも麦つく時は、少しずつは水混ぜてねそれでつきよったわけです。そしたら、皮がむきやすくてね。涙でもね水さあねえ、しずくが落ちてそれで皮がよくむけよったそうだから、少しぐわーずつ水混ぜなさいいうてね。水混ぜて麦つきよったです。早かったわけ、そうしたら。

② 継子の麦つき

知名タケ（明治四十一年生）越来

二十日のお月様の上がる時によ、この継子に麦はつかしよったって、こんなして。麦というのは水を入れないとできないさあねえ。いくらついても同じだったって。そんだから、これがあんまりもう、なつかしうだったでしょう。これ、涙がこぼれてよ、涙でついたらわけさ、そこで、麦が皮がむけていたって。

そんでからよ、この二十日の月はよ、とっても早く上がるさあ、この意味で。昔はこんな言よったよ。二十日ぬ月ぬがいにねーや、継子ぬ麦ちゅんちや、（二十日の月が上がるね、継子が麦をつくっていったってね）この二十日の月はさ、早く上がっていたって。

③ 継子の麦つき

普久原ウシ（大正二年生）喜間良

義理の子と義理の親でなかったかねえ。麦、皮はぐさあねえ。その時に麦は水入れてついでからに皮はぐさあねえ。だけど、その継親はそれを教えないわけ。しょうちゅうグスグス、いくらついても皮はとれないさあね、だから泣いていたって。泣いたから、その涙がそこに落ちてその麦が涙で（しめったので）ついたから皮むけていたって。して、「これは水入れてつくものだねえ」といって、その時から水は入れてつきよったって。

④ 継子の麦つき

安里ウト（大正三年生）住吉

あの麦はね水入れないとむけないわけ。だから、むけない、しょっちゅう、こんなこんなしても変わらなかつたから、もう難儀なつてこつち（腕）が疲れてから泣いて、この涙がボンボン落ちて、後でこんなこんなしたらむけよったって。

だからこの麦は、「水、水入れてつくものだねー」と思つて水入れてやったからできたって。継子によ、継母が（麦を水を入れないでつかせた）。この話だけはわかる。

⑤ 継子の麦つき

喜納兼儀（大正七年生）東

言えば二号ですかなあ。継子は先に生まれておるか

※二十日のお月様 旧暦二十日の月は十時を過ぎてから上がる。夜中まで仕事をせたら可愛そうだと、神が憐れんで、二十日の月は十九日よりも早く上がらせたという。

ら、継子扱いとして悪い扱いするわけさあねえ。それで、夜の遅くまでも使えばつなしたよ。

だから、大麦を白に昔はつかしておるんだよ。これが、いくらついても、ついても皮がむけないわけ、大麦は。な、仕方がなく、シクシク泣いたら、この白にこの涙が落ちるさあねえ。この涙が落ち、涙で（大麦をついたのは）皮がむけています。それで、大麦というのは皮をむく時には水まぜてつくようになっておる。

② 継子の麦つき

鯖屋里マツ（大正元年生）古瀬

自分の娘には、イナムジといって昔は羽がついたのが作りよった畑で。だからこの麦は水入れたらすぐできるのにね、水は入れないで、継子にはすぐそのままつかして。また、自分の娘には水入れてやって。この継子がね、泣いて涙が水が落ちるさあねえ、水が落ちたところははげたから、また、「水入れてこれやるもんだねえ」って、これやったって。

自分の子どもには、水も入れて早くできるようにやって、この継子には水も入れないでカラでついで、いくらついてもできなかつたって。だから、「こんなになんげだねえ」って泣いたら、泣いて落ちた涙で、こっちの皮がむけたから、「これ水入れるもんだねえ」と、あとから水入れてやったってよ。

昔の人は鬼だよ。

③ 継子と麦つき

桑江信子（明治四十一年生）泡瀬

継親が継子困らそうとして「麦つきなさい」といつてつかしたら、ただ、こんな、こんなしてしてもつかれんから、あわりして（悲しくて泣くと）自分の涙が（麦に）落ちてしたらつかれよつたって。だからね、ためにあんしえー、神ぬ動きやーに麦んじょーぐにちち（神の助けで麦も上手につくことが出来た）。親が困らそうとしたが救われたという話があつた継子。水ぐわー入ていどうちちゆるばーてー（麦は水を入れてつくわけさあ）。

④ 継子の麦つき

金城初子（大正五年生）センター

「（麦を）継子にさせなさい」と言つて、継子にさ、自分たちがついてはもー皮はむけないでしょう。継子につかしたから、継子一生懸命、一生懸命にやっているけど、どうしても皮がはぐれない。もー、手が難儀なつて泣いて白に「どうしたらいいかねー」といつて、もう泣いてからに涙こちに落としてあるわけさ。「もー、難儀あるけどもつかされているから」と言つて、ついで、ついでといつて、涙が落ちたところは皮がむけていたつて。そして、「まだかー、まだかー」と言つてこの主が来て見たから、この娘が、「涙の落ちているところ皮がむけている」と言つて。それから、「あは、この麦つく時は水入れてつくもんだねー」といつて分かつたとの話があつた。

⑤ 継子の麦つき

宇良芳子（大正十三年志）中の町

涙でね、この子が泣いてもう、あれ麦は水入れないと皮むけないわけ。カラの麦だったら、どんなにいても手が血が出るまでこうしてついても皮むけないからね。継親が粗末にして、水を入れさせないで（つかせた）。普通のいとしい子どもであつたら「水を入れてつきなさいね」と教えるが、もう憎らしいから、「麦をつきなさい」とそのまま（水を入れしないで）ホロホロ一つかせたので、もうどんなにいても、血がでるまでついても、（麦の皮が）むけないわけ。そしたら、あと泣いて、その涙で（麦も）皮がむけたつて。だから麦はもう水入れてつくもんだよと言ふことをねされてたけどね。

⑥ 継子の麦つき

松本良子（大正十年生）諸見里

妻はあれは皮はとでも取れにくいから、継子（継子）に麦つかしたから、もう、どうしてもどうしてもその皮がむけないで、自分の涙でね、そのつく麦に落として、その涙で麦が皮がとれたからね、『ああ妻というものは水入れてつくものだねえ』と言つてね、その時からが水入れてつくものと言つて、うちの母なんかそういうふうな話をしていたがね。

(2) 継子の潮汲み

① 継子の潮汲み

仲宗根フミ（明治四十二年生）登川

海の潮（うしほ）を汲みに継子にさせられ、持つていく桶の底がぬけて汲んできても家までは届かない。それで、このハジマキ木の下でこれ（継子）が泣いたら、それが悪いかぜ（靈気）になつて、それでハジマキ木は、それが因縁こもつていて、ヨークハジマキといつてかくものがあるさあね。あれは、これからなつたものだからだという話があります。

(3) 継子の水汲み

① 継子の水汲み

新屋ヨシ子（大正八年生）越来

自分の子どもには水汲んで来なさいといつたらターグ（桶）水かかもの（水かき）に持たしてね、継子（継子）にはバーク（水汲み）、水は入らんの持たしてね。そしたらもう、いくらあれ（水を汲もうと）しても水かからん（汲むことができない）さあねえ。また、叩かれたり、叱られたりや。そういうような継子（継子）と自分の子どもは差をつけて、出来ない事をさせて、無理に叱るといふ、昔の人はしよつたつて。

幸一ハジマキ木 はぜの木
※2バーク 竹で編まれた目の荒いザルをいう。穀物・干菜等を入れるのに使用する。

② 継子の水汲み

知花ツル (大正五年生) 喜間良

モノは何をくれたかこれはわからないけど、毒の入ったのをくられて、この子は死にかけて、出て行って田んぼとかに行つたんじゃない。で、こつちで鳥がよ、田ぬヒラムスルーつてあるわけね、方言で。これをこう、ちぎつて食べるのを見て、ちぎつて食べたら、これ、またはくさあ。で、こんなことしたらから、『ああ、これは毒消しかねー』つていつて、この継子はこれを(見て、同じようにしたので命が救われた)。

継母が、

「これ(穴のあいたツボ)に水入れなさい」といつて。だー底がないから、なんぼ入れても担いでいつて入れてもいつぱいにならないさーね。だから、もう四苦八苦して考え込んでいるところを、なにか知恵のある人か、神かわからないける、こう、
「海のとこに行つて、このカメ、壺持つていつてこのまま置いたら一杯溢れんばかりの水があれする。これで、もうできあがり」といつて教えたつてよ。いろいろ昔の人もういろいろしよつたつてよ。

(4) 継子の妻入り弁当

① 継子と毒入り弁当

屋宜カメ (明治四十一年生) 安慶田

〔方言原話〕

継子と、自分ぬ子と、や、田打ちがやらちやく

と、クワさーに田んぼ耕すたんよ。田打ちが行じやくと、や、継子ちなかい持ち行じよ。継子ぬむの毒入てい、自分ぬ子ぬむのしぐーし。あんさくとう、

「くれーまーさぎさぬ、いやーかみーんでい取らすたんてい。初めーうぬ、うりんりくつそーてーんでい。うふえー投ぎたくとう、うまからカラスがあつちゆたんでいよ。喰ちやくとうよ、チリチリみんぐとーてい田んかい入たんてい。あん、田ぬヒラムスルーんちあるばーてー、うつびなーし。田ぬヒラムスルーんちあるばーてー、うりふいつちり喰やーに飛どーていはいたんでい。うぬヒラムスルーでいしえー油ぬんちよーぬそーるばー。田んぼなかい浮ちよーし。うぬ、上や油ぬちちよーねーんし浮ちよーんよ。うり、ひつちり喰やーにはいたんでい。うぬ実子ぬ見ちえーねーんてーてー、ちやーしん。あんさくとう、「うりまーさぎさ、いやーかめー」んちきいたくとう、うぬどーぬ子けーし、継子生ちち。うんぐとうさくとう、家んじうぬ継子殺さつたんでいさんてい。じこー親ぬ殺さーたんていさんち話あたん。うぬあたい憎さするばーてー、な、ちやーしん。うぬふーじーんあんでいんどーやーんでい言みしえーたん。

〔共通語訳〕

継子と、自分の子とね田打ちにやつた(時のこと)。クワで田んぼを耕していたよ。田を打ちに行く時にね、鍋二つに(弁当を)持つていつた。継子のものに

※ヒラムスルー ひろむしる科。開花たりのよい池、溝、水田などに生える多年生の水草で、根葉は泥中にあつてさかんに広がり、時には大群をなすことがあります。(和名植物図鑑・第5巻・低地の植物)
※カメ 貯蔵を目的としてつくられた大型の器類。その形は多種多様。

は毒を入れて、自分の子のものはそのままです。すると、(継子が)「これはおいしそうなのであなたが食べなさい」とあげたそう。初めは、継子は何か思うところがあつたんだろうねえ。弁当を少し投げたら、そこからカラスが飛んでいたらしくて、それを喰わしたら、のたうち回つて田んぼに入つたそう。そこに、田のヒラムスルーというのがあるわけさあ、これくらいのもの。田のヒラムスルーというのがあつたから、それをひきぎつて喰つて飛んでいったそう。そのヒラムスルーというものは油がついているようにしているわけ、田んぼに浮いているが、葉の上は油がついているように浮いているよ。それをひきぎつて喰つて飛んでいったそう。(その様子を)その実子は見てなかつたんだろうねえ、たぶん。それで、

「これおいしそうだからお前が食べなさい」とあげたら、その自分の本当の子は亡くなつて、継子は難をのがれたそう。そんなことになつたので、家でその継子はなぐられたそう。(継子は)たいそう継親にいいめられていたという話があつた。そのくらい憎くかつたんだろうねえ、も、たぶん。そんなこともあつたそうだとおっしゃっていました。

② 継子と毒入り弁当

上程ウサ (明治三十一年生) 宮里

〔方言原話〕

昔や、継子とう継親とうたんていいち。な、うぬ継子ひじゅー、年から年中芋かまぢや、また、自分

ぬ子ふるめーちやーかまぢ、さーに。うぬ継子ん
「継子ぬ投げーそーかやー」んち。

「ご飯ぬんかい毒入りやーに死なす考さーに、

「とーいやー今日や、やー、田ぬアカガビナー刈てい
来よー」

「うー」んでいち。

「な、持ち弁当しこーやーに持たすくどう、うりん
かい毒入てい、

「田草さーに夕さんでい来よー」んちやくどう、

「うー」んでいちやーに。あんさーに十二時えなたぐ
どう、な、田ぬアブシいちょーてい、弁当開きたぐ

どう、「ひるましーむぬ。くんげーや私ねー芋どう
くいーるむんぬ、今日やご飯持たちひるましーむん
やつさー。くれー毒どう入てーがやー」んでいち考やー

に、自分やかまんぐーとう、うまからクラーぐわー
が飛ぶたぐどう、投ぎていくいたぐどう、すぐ亡ち、

うぬクラーぐわーや。包まーにまた夕さんで一家んか
いちやーに、台所んかい入やーに、白ぬ上なかいいうぬ
弁当や置ちしちやくどう、女ん子ぬさーに、

「ああ、うまなかい弁当ぬあん。早く私のかま、だー」
んでいやーにすぐかまーなかい、シムなかいちやーか
んしーしやたんでい。

「共通語訳」

昔ね、継子と継親がいたということ。も、その継
子は一日中、年から年中芋をあげて、また、自分の子
にはご飯を食べさせていた。その継子も「継子の扱い

をしていゝね」と(思っていた)。

「ご飯に毒を入れて殺す考えで、

「ねえお前今日はね、田のアカガビナーを刈つてきなさいね」

「はい」と返事して。

「ねえ、弁当を準備して持たすので、それに毒を入れて、

「田草を取つて夕方に帰つてきなさいね」といわれたので、

「はい」といつて。そして十二時になつたので、田の畦に座り、弁当を開けたら、「珍しいことだ。これまで私は辛しか食べさせないのに、今日はご飯を持たせているのは不思議なことだねえ。これに、毒が入つて

いるのかねえ」と考えて、自分は食べずに、近くから雀が飛んだので、投げてあげたら、すぐ死んでしまつた、その雀は。(継子は残りの弁当を)包んで、夕方に家に帰り、台所に入り、白の上にその弁当を置いていたら、(実子の)娘が来て、

「あれ、ここに弁当がある。早めに私が食べようねえ」といつて食べたなら、台所ですぐに亡くなつたそだ。

③ 継子と毒入り弁当

喜屋武英正(明治三十年生) 久保田

〔方言原話〕

先妻ぬしーじやんかい、

「いやー、うれー食^めでーならんどー。兄さん物^{ぶつ}どうやんどー」さーにさくとう、兄^{あに}さんがーまた食^くまん、

「いやー食^め」でいさくとう、うぬ、うり、うち食^くむ、うり、けー死^しじやんでいぬ話^わてー。あれー、継子^{ついでこ}やるばーて。ジューシー^{ジューシー}毒入りやーに、うり死^しなすんでいぢやしが、また親^{おや}ぬ、

「うれーいやー食^めでーならんどー」でいやたんでいからー。また、しーじやー、

「ううん、私にん食^めまんぐとう、いやー食^め」んぢさくとう、うりうち食^めまーに、うぬ毒^{どく}さーに、どうーぬ子^こうらんなどーるばーてー。うぬふーじまんどーるふーじーどー。

〔共通語訳〕

先妻の子どもに(ジューシーを食べさせようと、自分の子どもには、

「おまえ、これを食べたらいけないよ。兄さんの物だからね」と(自分の子どもに)いつたが、だけど、兄さんはまた食べないで、

「あなたが食べなさい」とすすめたので、その、それを食べてしまい、本当の自分の子どもが死んでしまつたという話。毒入りの食べ物あげようとしたのは継子にだつたわけ。ジューシーに毒を入れて、継子を殺すつもりであつたらしいが、親は(自分の子どもに)、

「おまえはこれを食べたらいけないよ」と言つていたそだだが。ところが、兄さんは、

「いいよ、私は食べないから、おまえが食べなさい」と言つたので、それを食べてしまい、それに入つてい

る毒で自分の子どもは死んでしまつたわけ。そんな話

※ジューシー 炊き込み御飯のこと。ジューシーには炊き込みごはん種炊の二種類がある。炊き込みごはんをクラジューシー、種炊をヤフアラジューシーという。

はたくさんあつたようだよ。

④ 継子と毒入り弁当

仲宗根キヨ（大正二年生）与儀

〔方言原話〕

継親が、二人が弁当持たちやくとう、くぬ継子んかいやニクリン入つてい、また自分ぬそー子んかいや上等入りやーに。継子頭強さてーるばてー。『ちやーしん、かわらするはじ』んでいやーに交代しきいたくとう、うぬそー子けー亡ち、継子生ちち。

昔え、継子ぬ、継親ぬさしわけー、いっぺーあてーくとう、感じてえーんで。『ちやーしんうんぐとうし持たするはじ』んでいやーに感じやーに、ちーけーやーに。継子助かたんでいる話。

〔共通語訳〕

継親が、（実の子と継子）二人に弁当を持たしたら、この継子（の弁当）にはニクリンを入れて、実の子にはちゃんとした弁当を作った。継子は助がするどかつたわけさ。『ぜつたいに、同じ（弁当）ではないはず』と思ひ、交代して（実の子）にあげたら、この実の子は死んで、継子は無事だったわけさ。

昔は、継子に対する継親の差別はひどかつたので、感じたんでしょうねえ。『たぶん、悪巧みをして持たすだろうねえ』と思ひ、交換した。継子は命拾ひしたという話。

⑤ 継子と毒入り弁当

佐久田千代（大正七年生）室川

あれはね、上の方は継子でしよ。下の方は自分の子。だけどもね、弁当、弁当持たして、しよつちゅうハル（畑）させよつたつてよー、継子はよ。だけども、『今日（の弁当）はとつても美味しいの入れてあるからね、とつても働きやすいはずよー』つて、しかして（おだてて）からね行かしたつて。これにやつばし毒入れてあるわけさ、お弁当に。地面に弁当置いてたら、蟻が来て全部食べるからね、今度松の上に置いてあつたつて、この弁当はよ。『今日は美味しいもん入れたというからね、うんと、うんとやつてから、働いてからお昼は食べよう』といつて、松の上にさ置いてあつたからね、カラスが飛んできてよ、全部、これが働いている間に食べてから、パタパターパタパターしてからね、全部これが、仕事する前にね落ちて死んでいたつて。それでね『やつばし、うち、うちをね死なすため』にね、こんなの入れてあつたんだねーつてや。やつばしお母さんわかれてるさーね。その時からね、こんなことしなかつたつて。

いつなんどきね、やつばし自分が悪いことしたら、いつなんどきまた、自分の子に返つてくるかわからなつて。カラスにね、やつばし教えられているわけさ、この、長男も。

これが畑にね、飛んできてね、死によつたつて、これが弁当食べて。やつばしこれにカラスも別に飛んで

いって死んだらわからんさーね。ね、だからこれが働いている前に飛んできて死んだから、これに、やっぱし話は言わないけど、やっぱしこんなにして悪い弁当だったよーと言わんばかりに、これが働いている所に落ちて死んだって。食べてあんたどこかに飛んで行って死んだらわからんさーね。もう何も無いんだから。残ったのは食べるかもしれないやつだよ。カラスが食べてよー。やっぱしやー、悪いことしたら自分の子どもにどうにかして返ってきたら大変さーね。だから、こんな時から直ったとかの話だった。

⑥ 継子と毒入り弁当

桑江信子（明治四十一年生）泡瀬

継親がこの（継）子どもがいたら自分は困るといってでしょうねえ。そって弁当をいつもは作ってくれないが、その日に限って弁当作って、

「山に行ってこい」といってやつたら。あるおじいさんが出て来てね、

「これ食べたらいけないよー」と言われて食べなかつたって。で、食べずに帰ってきたら、継親は「不思議だねえ」と（思い）、

「なんであんた食べなかつたね」とって質問されたって。だから、

「私（私の所に）こうこういうおじいさんが出て、これ食べたらいけないと言われてこれ食べなかつたよー」って言ったからこの継親が罰されたって。

⑦ 継子と毒入り弁当

昔久原ウシ（大正二年）嘉間良

継子は人に使われてからに頼まれて稲植えるさあねえ。そこ、耕しに行くさあ。もう、常日頃だったら、あんまり（弁当は）上等でないけど、その日、とつても上等の弁当を作つてからに、なんか入れてからに、（継母が）弁当持たしたって。だったら、「不思議だねえ、こんなおいしもの作つて持たしてあるねえ」といってそう思いながら、その弁当を鳥が来て食べて、もう、チリチリチリー（どのたうちまわっていた）。毒だからまわるさあねえ。その田んぼに毒返しがあつたはず、草が鳥が毒返しの草喰つていきよつたって。それを見てからに、「これを食べたらなんにもでないさあ」といって、その弁当食べて、そしてその草取つてきて食べて、もう、なんにもでなかつたっていう話があつた。

⑧ 継子話（鳥と弁当）

知花ツル（大正五年生）嘉間良

ある継親がね、継子に毒を入れてあげたら死にかけから外に出てね、田んぼの所にヒラムスルーってあるんですよ。水の方に集つばだけ浮いているんですよ。あれを薬つて私たちも聞いてはいるんですよ。で、ちようどその時、カラスの鳥が、やっぱしこの鳥も毒あたるのを食べたんじゃないかねえ。これ食べてからに、はきよつたそうです。で、この鳥は元氣になつて飛んでいった。「あつはー、これは、ひよつとしたら」

この人も死にかけていたんだけど、「毒消しかねー」
 と思つて、どんなかしてこれ食べたそうです。で、こ
 れ、死にはしないで、生き返つたそうですよ。
 これ、小さい時の話聞いたんですけどね。

(5) 継子の水汲み・弁当

① 継子話

金城ハル(明治四十一年生) 東桃原

水の入らないのを持たしてね、「水は鍋のいつばい
 運びなさい」といつてね、そうしたら、何回、何回行つ
 ても漏るさあねえ、サーラナイ(どんどん)。そうつて、
 ある神様が現われて来てねえ、

「あなたに脱脂綿みたようなものやるからね、これに
 持つて行つてね、鍋になんか絞つて入れなさい」といつ
 てね。そうしたらね、鍋が一杯になつてね、「不思議
 だねえ」といつて、この継親が。

その息子にね、「今日は遠足だから」といつてねご
 飯に毒を入れて、自分の子にはほんとのもの入れて
 ね。そうしたらね、それも神様からだつたそうだね、
 それも取り替えてしまつて、別の人が。そして、自分
 の子が亡くなつてね、これは助かつたつて、継子は。

(6) 継子の茶腹飯腹

① 継子話

榮野比トヨ(大正六年生) 知花

[方言原話]

「しーじゃん子先アンマー子やてーるばーどうやは
 に。どろーが産ちスーしスーな、シシ切りんち
 ジューシーんばい煮ちくいやーに、うぬ継子やしスー
 茶ぐわーけー飲まち、

「ど、山原ぬまーぬまーまでー行じ、いやえー持ち行
 じくわー」んでい言ちやぐと、

「あんし私ねーム又んかまんよーい、な、あんよー
 い茶ぐわーびけーじ飲でい、あんしんないがやー」ん
 でいちざくとう、

「いやーや、茶ぐわーしんちゅーはるある」んち。

「ん、な、あんしやていからなー行じちゅーん
 てー」んじ行じよーんでいひが。くぬ、どろーぬ本当
 ぬ実ぬ子、シシちゆかたー切りんちやーにジューシー
 メーどうやいぎさくとう、うりちゆふあーらうちゆ喰
 やーに、アンダイーがさらーな、道んでー思ふち歩
 きーはん。くぬ茶びけーじ飲でーどろ人また、すぐ、
 山原ろー行じ来うりが、よーうまんけーオロオロほー
 いぬ行じはつちえーるふーじ。あんざーに、うにーか
 ら、うぬ子、

「なまからーやー、ムノーいんたかかましよー」んけー
 なとーたんでい。茶や、な、いつべーがくんちやん
 でい。

※山原 沖縄本島の北部のこと、北部
 は、平地が少なく山が多いので、山原
 (やんばら)とも呼ばれる。

〔共通語訳〕

年上の子は先妻の子であつたんだらうねえ。自分が産んだ(子どもには)、肉を入れたジューシーを煮てあげて、その継子にはお茶を飲ませて、

「さあ、山原のどこそこに行つて、ことづてをしてきなさい」と言われたので、

「そんな、私はご飯も食べないで、あのようにお茶だけ飲んで行くことができるのかねえ」というと、

「お前には、お茶でも充分だ」と。

「ああ、そう、それならもう(○)飯も食べないで」行つてきます」と行つたようだが。この、自分の本当の夫の子は、肉がたくさん入つたジューシーメだつたらしく、それを腹いっぱい食べたので、脂ぎつていたのが、道中で息切れして歩けなかつた。このお茶だけ飲んだ継子はまた、すぐ、山原に行つて来て、実子が道中でオロオロしている間に行つて来たようだ。それで、その時から、その子がね、

「今からはね、食べ物と同じように食べさせて下さいね」ということになつたそうだ。お茶は気力が長く続く要素があるそうだ。

(7) 継子と二ガナ

① 継子と二ガナ

上根ワサ(明治三十一年生) 宮里

〔方言原話〕

昔、^{おんざり}継親継子んでいしうてゐるふーじややびーん。

あんざーに、種取り折目んでいしえー、稲藁んかい包まーに泥んかい一週間の一置とーち、チル小ぬ出じれー田んかい下るすくとう、うりが念願ぬんでいち、種取り折目。夜なれークワツチーぬまんどうや、あんざー自分ぬ子、夜なれークワツチーまんどうさくとう、うぬ継子昼ぬ十二時頃ンジャナ葉取やーに、まーくまーくえーてい腹いっぱい食だくとう、だー、夜なたくとう、腹入なー。あんざー、うぬ継子ぬ、種取ぬンジャナ、花あがていたぼーり。悪魔継親にくいてえーるンジャナーんでいち。十月からーンジャナーねーな花あがいんどー。うぬ道理。

〔共通語訳〕

昔は継親、継子であつたようでございます。それで、種取り折目っていうのは、稲を藁に包んで泥(の中)に一週間置いて、根が出たら田に下ろすから、その折願が種取折目という。夜になれば、ご馳走がたくさんあるのね、それで自分の子には、夜になればご馳走がたくさんあるの(それを食べさせるが)、この継子には、昼の十二頃は二ガナの葉を取ってきて、おいしく、おいしくあえておなかいっぱい食べたの

※1種取り折目 年中行事の一つ、種取りをまく種おろしの日の行事。沖縄では、一九三二、三年頃まで、立冬の節の前日に種籾を水に漬け、翌日取り出して苗代に蒔くところと、千桑の日に漬けて、成己の日に蒔くところがあり、日取りは土地によって異なつていた。ここでは、後者をさしてゐると思われる。

※2ンジャナ葉 ホソバワダンのこと。日本、琉球各島の海岸近くの砂地や岩石地に自生する。葉や茎を切ると、乳白色の汁を出して苦みがある。沖縄では、広く食用や薬用にするが、発熱などに効と、いっしょに葉を煮じて服用する。

で、もう、夜になつても食べることができない。それで、その継子が、「種取りの頃のニガナは花が咲いて下さい。悪魔継親がくれたニガナ(が悔しい)」と歌つたそうだ。十月からはニガナはなく花が咲いて終わっているよ。それは、その話によるものである。

② 継子話

吉田(鳥袋)タケ(大正七年生) 知花

〔方言原語〕

ンジャナバー取ていちゃーに、な、うりんちゃーんけー。あんさくとう、うぬ継子ぬどー、
 「六月ないねーや、葉やむる枯りてい花むる。下ぬ葉んでーあんしかまはりくとうてー」んでいいやーに、六月ないねー花あがいんでいよー、うぬンジャナバーやどー。

また、正月、うぬどーうぬ子ぬちやーやしんぬんくういんかまさーに、くぬ継子んけー、シミジナーバ、シメジといつて山なりーきのことあるさあ。あんさーに「正月ないねーや、私んねーシシかわいくぬシミジナーバどうかまふくとう、正月ないねーや、虫出じりよーくぬシメジスー、むる虫出じりよー」んでい継子ぬ願てーるばーてー。

六月ないねーンジャナバーや花あがいん、また、霜月師走正月前ないねーあり虫出じーんでい、うぬシメジスー。あんさーによ、

六月になりば 花あがりンジャナ
 正月になりば あがりシミジ

んち、なー虫出じやーに、ねーんなりよーんでいる継子ぬ詠でーどう歌やんでいどーでい昔ん人いやらりーたるばー。

田ばるけー、どーうぬそん子とう継子とう、田草取いがやらちやぐとう、どーうぬ子やいねーい所取らさーに、くぬ継子ぬ行ちゆる所アカタピンでいる、かんひらたつたー草ぬじこーみーたんよー、田ばるどー、田んぼに。あんすくとう、くりがヒラムシルじこーみーとーる所取いがやらちやぐとう、なー、うま、取てい取ていんうぬ葉やうあーびんかい浮ていひつばていどう浮ちゆしえーや。あんすくとう、うぬ継アンマーが、

「どー早くなー弁当やかでいからうぬ田草取り」んでいいやつてーるふーじ。あんすくとう、毒入てい持ちえーるばー、くぬアンマーがどー。あんさくとう、ちやんとう神様ぬうりはつていめーるばーてー。

「どー私にんやーなまやーはんねーんくとう、あぬ松ぬゆだんかい下げらつとーかろー。私がやーしくないねー、どーうくる取ていかむくとう」でいいやーに、くぬ継子やどー。

「田草なーふスー取ていから私ねーかむくとう、あまかい下ぎてい、なーや家かいはらろー」でい言ちえーるばー。あんさくとううぬアンマー、

「あんふーなー、早くなー、あーはーかみよー」だらーに、どーうや家かいはらつてーるばーてー。あんさくとう、うりが出てじてい来んまーるガラサーぬちやーによ、喰てーるふーじてー。うぬガラしえーけー死

じうまんけー落ていとーんでいへーやー。『アキサミヨー。なー親からやてーはやー。あん私にんなー、あとうからかむんち、かまんでーくとうでーよ。なー、しぐんでーかみてー私にん今日までいぬ命えあてーはやー』んでいぢ。

〔共通語訳〕

二ガナを取つて来て、も、そればかりを（継子にあげていた）。そしたら、その継子がね、

「六月になるとね（二ガナの）葉は全部枯れて花も（早く咲いて欲しい。なぜなら）下葉をこう食べさせるから」といって、六月になったら花が早く咲くそうだが、その二ガナはね。

また、正月には、その自分の子どもたちには肉や美味いものを食べさせて、この継子には、シミジナーバ、シメジといって山に出来るキノコがあるさあ。それで「正月になるとね、私には肉の代わりにこのシミジナーバを食べさせるので、正月になったらね虫が出て、このシメジには全部虫が出るように」と継子が折っているわけさ。

六月になると二ガナは花が咲き、また、霜月、師走、正月前になるとシメジに虫が出るそうだ。そのシメジには、それでね、

六月になったら 花が咲いてくれ二ガナ

正月になったら 虫が入つておくれシミジ

と、もう虫が出て、なくなつて下さいという継子のよんだ歌であるよと昔の人はおっしゃつていたわけ。

田んぼに、自分の実子と継子と、田草取りに行かせたら、自分の子どもには草の取りやすい所を言いつけて、この継子の行く所はアカタビといつて、こう平たい草がたくさん生えよつたよ、田んぼ、田んぼに。そして、継子にはヒラムシルがたくさん生えている所に取り行かせたら、もう、それは取つても、取つてもその葉は上の方にたくさん広がりに浮いているさあねえ。すると、その継母が、

「さあ早く弁当を食べてから、その田草を取りなさい」といわれたようだ。弁当には、毒を入れて持つてきているわけ、このお母さんがね。だけど、ちゃんと神様が見ていらつしゃつたんだね。

「ねえ私はね今はおなかしいから、あの松の枝に下げて下さい。私がおなかしい時に、自分で取つて食べるから」といって、この継子はね。

「田草をもう少し取つてから私は食べるから、あそこを下げて、お母さんは家に帰つていいですよ」といっているわけ。するとそのお母さんは、

「それなら、早く食べなさいね」といって、お母さんは家に帰られたようだね。そしたら、継子が田んぼから出てこないうちに、カラスが来て喰つたようだね。そのカラスは死んでしまいそこに落ちていたそうだ。『アキサミヨー。もう親が私を守つてくれたんだねえ。私も、あとで食べるといって、食べなかつたからいいもので。もう、すぐ食べていたら、私も今日までしか命はなかつたんだらうねえ』と（継子は）思ったそう

③ 継子と二ガナ

高江洲節（明治三十五年） 松本

十月にはタントウイといって、稲撒き。その時にはご飯であるが、継子にはね二ガナのジューシー食べさせた。そうするから、やっぱりね、十月には、「タントウイべーねー花咲きよーンジャナ（種取りの日には花がさいておくれ二ガナ）」といって、タントウイの時には花が咲きよつた。花咲いたら枯れて葉もなくなるから「ああ、やっぱりご飯も食べられる」かと思つただろうと。これは昔の話である。

(8) 継子と竹の子

① 継子と竹の子

仲素根カメ（明治四十二年生） 登川

〔方言原話〕

昔、地頭ぢぢうでいからーぬ妻めづこぬんでいからー病氣しえーざさくとうどー、うぬ女めづこぬちやつさ医者かかていん治らん。さくとうど、

「私わがねー、節ふしんねーらん竹たけぬ子こよ、うりかむわる治いどろ」でいையーに。あんざーに、皆みなんけい、家来んけい言いちえーざさくとうてー、あんしえーくとうど、

「あんしえー、うれー取とり取とりがうぬ継ついで子こやらし」んでいையーに。あんざーに節ふしんねーらん竹たけぬ子こ取とりがやちやくとうど、とうめーらんやーに。とうめてーきーさんやーに。あんしーね、また、

「うぬ子こぬ生き肝かぶかむわどうなくとうど、うり殺ころち私

にんかいくいり」でいையーに、あんしやてーちさんでいぬ話がある。

〔共通語訳〕

昔、地頭の妻が病氣したので、その妻はどんなに医者にみてもらつても治すことができなかった。すると、

「私は、季節のない竹の子ね、それを食べたら治る」といった。それで、皆に、家来にも（竹の子を探そうに）言いつけたようだが、だけど（妻は）、

「それなら、竹の子を取りには継子を行かせなさい」と。そして、季節と関係のない竹の子を取りに行かせたが、探すことが出来なくて、探せなかつた。すると、今度は、

「その子の生き肝を食べないといけないので、その継子を殺して私にその子の生き肝をくれ」と、そういうことがあつたという話があつた。

② 孝行息子の話（継子と竹の子）

屋宜ハル（大正三年生） 安藤田

〔方言原話〕

継親じゃなくて自分の親だつた。親孝行おやうやうやてーんてー。あんし、

「ぬーかみぶさが」んち言いちやくとうど、

「竹の子かみぶさん」んちやれー、「竹の子冬ふゆどうやるむんぬ、ちやーちうりがありすがやー」んでい言いちそーしが。うまんじ毎日寝ねてーういういし、寝ねてい

※1 タントウイ 稲の種子を撒く種おろしの日の行事。

※2 タントウイべー 種取り南風のこと。（琉球列島民俗語彙）

※3 地頭 近世琉球で、領地を持つ士族をいう。各間切は当地地頭（後指地頭・総地頭）が、各村は郷地頭が領し、地頭地が与えられた。

自分ぬ熱出じやさーに、竹の子出じていっち、あんし煮ちくいたんでいいしが。

うり、本当がやら、ぬーがやらわからんばーてー。

〔共通語訳〕

親継じゃなくて自分の親だつたて。親孝行者だつたんでしよう。それで（病氣をしている親に）、

「何が食べたいですか」と聞くと、

「竹の子を食べたい」というが、「竹の子は冬なのでどうやって採せばいいのかねえ」と思ひ困つていた。山で毎日寝たりして、寝て自分の熱を出すと、竹の子が出てきたので、それを煮てあげたというんだが。

それ、本当なのか、なんなのかわからないがね。

〔9〕 継子とカンダ

① 継子話へカンダ

榮野比トヨ（大正六年生）知花

〔方言原話〕

サングワチャーぬ日やたんでい。ちよーどうどうぬ子や御重しこーてい、クワツチーしたたかしこーていて、どうーぬ産ちえーる子や。あんさーに、「早くなー浜下りしーが行き」んでい、クワツチーしこーてい浜んけーやらち。うぬ継子やしえー、「どー、いやーや、今日必じ、まーぬハルぬあつさーカンダ植てい来」でいちさくとう、うぬ継子や、「どうーぬ子や、やー、あんぐとうーし御重しこーてい、浜下

りしみーるむん。私ねー必じやー親んうらんちんあろー、うんぐとうーししみーくとう、今日ぬカンダやむる逆なち、植りわるやる「んち、むる反対に植てーたんでい、全部、一畑、あんさくとう、うぬ芋が、な一皆見じゆるうるつさ、「うぬ芋ねー、いつべー道理ぬあるはじどーやー、うぬカンダ植てーし見じーねー。んちやサングワチャーぬ日んやー、どうーぬ子あんぐとう、あからふたらしすがらち浜下しみてい、継子やうんぐとうーしみーるむんやー、んちや、うれー、あんし反対んけー植しやな一、あたためーやは」んでい、皆見じゆるうるつさー言ちよーたんでい。あんしが、うりがうぬ逆なてい植たるカンダぬ芋やー、カプチャーぬいひな一入ちよーたんでい。

〔共通語訳〕

三月三日の節句の日だつたそうだ。まさに自分の子は御重をこしらえて、ご馳走もたくさんこしらえてさ、自分の産んだ子どもには。そして、

「早く浜下りに行きなさい」といつて、ご馳走をこしらえて浜に行かした。その継子には、

「さあ、お前は、今日は必ず、どこそこの畑全部にさつま芋を植えてきなさい」といわれたので、その継子は、「自分の子にはね、御重をこしらえて、浜下りに行かすのに。私はねこのように、親もいないからと、そういつけるので、今日のさつま芋はすべて逆にして植えてやる」と、全部反対に植えてたそうだ。全部、畑いっぱい。すると、その芋が、もう、皆、見る人

※サングワチャーぬ日 年中行事の一つで、旧暦三月三日に体を清め、災厄を払いのけるために浜で潮干狩りなどをした通い行事。

すべてが、

「この芋の植え方には、たいそうなにか訳があるはずだね、このさつま芋の植え方をみると。なるほど三月三日の節句の日もね、自分の子にはあのように、きれいに着飾らせて浜下りさせるのに、継子にはそういうことをさせるのでね、ほんとに、これは、あのように反対に植えるのも無理のないことだ」といつて、皆見た人はそう言っていたそうさ。だけど、継子がわざと逆さに植えた芋はカボチャの大きさをくらひ出来ていたそうさ。

(10) 継子の機織り

① 継子の機織り

佐渡山ゴセイ (大正三年生) 城前

(機織を) 始めと終わりは継子にさせて。自分の子どもにはいいところばかり織らして。自分の娘は初めからできないさーね。その子が、よくあれ(機織が上手と)して、これは有名になっていたというけど。ヤナとうくろーよ、織いぐるさんとうくろー、継子(継子)しみやーに、うぬりちじやいぬーさい(むずかしい所、織りにくい所)継子にさせて、糸をつないだりする所は。自分の娘は中のほうこれしてから織らしよったつて。だ、あとなつたら、自分のあれ(子ども)はもう初めからしーきれないさー。この子どもが(継子)が上手なつていたつて、継子が。

② 継子の機織り

久場ナハ (大正四年生) 住吉

機織りは難しいところは継子にさせて、布の真ん中は自分の子どもにさせて、また、終わりは継子にさせて。そしたら、継子は、とつても布は上手になつた話を聞いていますよ。

③ 継子の機織り

浜比嘉ナハ (大正七年生) 住吉

機織り、自分の子にはさ真中、とでも織りやすいさあねえ、こんな、こんなーして。継子には一番しまい織らしておるわけさあ。しまいは、もう、難しいさあ。しまいはとつても難しいよー。きれいもするし、これくらい残つてまでも、もう、こうして織らないといかないから。したらさ、あとあとになつて、自分の子ども、継子の方がこの機織りは上手になつていたつて。継親は、とつても継子をもいじめよつたそうさですね。

④ 継子の機織り

町田ツル (大正五年生) 南桃原

昔よ、本妻の子どもと、二号の子どもといるわけさ。自分の子どもは機織りの中させるわけ。本妻の子どもはね、この始めと最後の所ねやらせるわけさ。それで最初と最後は難しいから、この人がとつても上手に織れてね、いい子になつて立身したとのこと。これだけしか覚えてない。

(1) 継子の井戸掘り

① 継子の井戸掘り

屋宜カメ(明治四十一年生) 安慶田

『方言原話』

先妻ぬ産ちえーるつ子、後妻のーいやーがー継子やしえーや。継子ぬや、昔チンガーちあたん。かーまな、十尋んでいねーな、何十メートルびかーやがや。十二、三尋な一落とうち、下んかいうていカ一掘いたるばー飲み水。カ一掘いてーくとう。じこー深く掘やーにーや、水ポンポンし溜まって、うまんかい掘らんとんでい。昔えー蹴しる掘つていさいや。『あんしん、なーひん掘り』んでい継親ぬ言たんでい。あんさくとう、

「水ポンポンし穴掘ららんむんぬ、私達アンマーなーひん掘りんでいんどーやー」んでい、隣お婆さんぬんかい問いが行じやんでい。あんすぐとう、隣ぬウンメーがや、

「どー、いつたーアンマーや心ぬ悪さくとう、ちゃーがなしよ。横穴掘やーにや、うぬ横穴んかい入ちよーきよー」んでい、ちやくとうや、

「掘ららんあらー掘らんけー」、うぬウンメーが教すたんでい。

「横穴んかい入ちよーけー」んちやくとうやー、あんさくとう横穴掘やーによ、うぬ水ポンポンそーぬ所、横穴掘やーにや、うまんかい入ちやんでい、うぬ継子あ。横穴んかい入ちやくとう、いんねーすんねー

うふえーる石落とうちよー、継親ぬ。あんすぐとう石落とうちやくとう、石ボンみかち落とうちやくとう、うま水はにーしえーやー。『今ねー死じえーるはじ』んち思てーるばーて、継親ぬ。あんそーしが、あんし、ちゆてー夜しから、な、また、かんしる上がいつさいや歩ちる。梯子ん無んくとう。くま石るやしえーやー。あんくとう、あんしえー出じてーるふーじー。うぬ継親や、目んぐるぐるしよ、うりそーたんでい。『あ、ぬーが死じがうらんでー生ちちよーさやー』んでい思てーるふーじーし、よ、目んぐるぐるそーたんでいどーやーんでいみしえーたん。

うぬふーじーんあたんでいどー昔えー。うんぐとーりんあたんでいみしえーたん。

『共通語訳』

先妻の産んだ子は、後妻にとつてはあなた継子になるでしょう。継子がね、昔、チンガーというのがあった。ずっと、十尋といったら何十メートルにあいたりするかねえ。十二、三尋ほど掘った下で井戸を掘っていたわけ、飲み水。井戸を掘っていたから、たいそう深く掘たらねえ、水がポンポン溜まって、そこは掘ることができなくなつたそう。昔は蹴で掘るでしょう。『だけど、もつと掘れ』と継親が言つたそう。そうしたら、

「水がたくさんポンポンして穴を掘ることはできないのに、私達のお母さんはもつと掘りなさいというんですよ」と、隣のお婆さんに行つたそう。する

と隣のウンメーがね、

「ねえ、あなたたちのアンマーは心が悪いのですね、考えなさいね。横穴を掘ってね、その横穴に入っておきなさいね」と教えて、

「水が出て、掘ることが出来なければ掘るな」と、隣のウンメーが教えたそうだ。

「横穴に入っていないさい」といったのでね、その通りに横穴掘ってから、その水がボンボンしている所に横穴掘ってねそこに入っていたそうだ、その継子は、横穴に入っていたら、案の定大きな石を落としてね、継親が、そうやって石を落としたり、石をボンと落としたり、そこは水がはねるさあねえ。「ぜったいに死んでいるね」と思っているわけさ、継親は、そんなことがあって、そして、しばらくして日が暮れてから、こうして上がるさあねえ、よじ登って、ハシゴもないから、壁は石さあねえ。そうやって井戸から出たようだ。その継親は、目を見張り、びつくりしていたそうだ。「あれ、なんと死んでいるかと思っていたら、生きていたんだねえ」と思っている様子で、目を白黒していたそうだよとおっしゃっていた。

そんなふうなことがあったよ昔は。そういうこともあったとおっしゃっていました。

② 継子の井戸掘り

屋宜ハル(大正三年生) 安藤田

〔方言原語〕

継親ついでつとめてー継子ついでこんかいカー掘ほらさーによい、い、

かーま下くだんとうーカーや掘ほらちやくとう、えー、うり
継親ついでつとやしえーやー。あんやくとう、うぬ隣ついでぬおばーが、
「いったーおカーや、いやーカー掘ほらすしえーてー、
ちやーがなむぬぐんやくとう、いやーや、カーかーま
下くだんとうー掘ほらんまーるうてい、あじやーぬみー作り
よー」んちやくとう、

「側わきんかい穴あなぐわー自分じぶんぬ入いるぶん掘ほとーきよー。あ
んざーあいねー、しく、いやーやでーじすんどー」でい
言いちやくとう。うれーなー、カーや掘ほいとうじゆみら
んまーる、あじやみーぐわー作つくていうちえーたん
でい。んちや、いんねーすんねーよーいー、うりがカー
掘ほいとうじゆみーてい、な、出いじーんちするうりー
にすぐ、上うびからだてーんぬ石いし落おとうちよー、あ
んしえー、うれー、あじやみーんかい入いちよーたぐとう
助たすかたんちぬ話わえ聞きちやんどー。

うぬあたい昔むかしえ継子ついでこみつくわさてーるばーてー。死
なすんでいち、あんしうんぐとうーしやたんでい。

〔共通語訳〕

継親がね継子に井戸掘らしてね、ずっと下まで井戸
を掘らしたら、ねえ、そう言いつけた人は継親さあね
え。だから、その隣のおばーが、

「あなた達のお母さんは、あなたに井戸を掘らすのは
ね、なにか企みがあるから、あなたは、ずっと下まで
掘らないうちに、隠れる場所を作りなさいね」といっ
て、

「側に穴を、自分一人入れるくらい穴を掘っておき

なさいね。そうしないと、いまにもあなたは大変なことになるよ」というので、継子は、井戸を掘り終わらないうちに、逃げる場所を作っていたそうだ。すると、案の定、継子が井戸を掘り終えて、も、出ようとしたら、すぐ、上からたいそう大きな石を落とされて、そこで、継子は、横穴に入っていたから、助かったそうだと、この話を聞いたよ。

それくらい昔は継子が憎かつたんだらうねえ。殺すといつて、あのようなことをしたそうだよ。

(12) 継子の屋根葺き

① 継子の屋根葺き

神里マカト(大正元年生) 安産田

〔方言原話〕

継子ぬ家に帰つて来てからね、また、うぬ女ぬよ「大変だね。また来くとうや殺しわるやる」んち、

「いや、あんしえーうまんかい登れ」んち、家ぬ上んかい登したんでい。登たぐとうや、下から火ちぎたぐとうて、な、今日な、でーじなとーさ、な、

な、私ぬ、うつさる生きちよーさつやー」でい泣ちよーたんでい。あんくとう天からすぐ、ありが下りていちゃーなかいや救やーに。

徳持ちちやてーんてー、うぬ継子や。あんさーに取やーなかい、またうりまーんかいでいがらー連てい行じえーんでい、うぬ継子。

親また、いつべーうつさそーるばーて。けー燃ちや

んでいち。燃ちやんでいち継親うつさそるばーて。あんしからー燃てーねーんしえーやー。うれーまた、別んかいやらさつてーるばーて。

あんそーたんでいぬ話やるばーて。

〔共通語訳〕

継子が家に帰ってきたからね、また、継親がね「大変だね。また来ているからね殺さなければ」と、

「おまえ、それならそこに登れ」と、家の上に登ぼらせた。(継子が)登ぼつたらね、下から火をつけたのでね、「今日は一大事なことになっている、もう、もう、私はこれまでの命だね」と泣いていたそうだった。すると、天からすぐ、(乗り物が)下りてきてから救われた。

徳持ちであつたんだらうねえ、その継子は。そして継子を救い、またその子をどこかに連れて行つたそうだが、その継子を。

継親は、また、たいそう喜んでるわけさあ。燃やしてしまつたと。燃やしたといつて継親は喜んでるわけさあ。だけでもう、燃えてないさあねえ。継子は、また、別のところに連れて行かれてるわけさあねえ。

そういうことがあつたという話であるわけさあ。

(13) 継子の井戸掘り・屋根葺き

① 継子話

神里マカト（大正元年生）安藤田

〔方言原話〕

女ぬ親ぬ継親が、

「どーいヤーやカー掘りよー」んちやぐとどう掘たぐとどう。うれーまた側んかい自分ぬ入る所掘とーるばーてー。掘たぐとどう、すぐ、石ボンナイ、ボンナイ、ボンナイ投ぎていて、女ぬ親ぬ、ボンナイ投ぎてい。さくとどう、「アイエー私、ナー、ナーでーじなどーんてー」ていそーす。あんざーに、また、出じていんじやーなかいまた掘たぐとどうや、

「くんねーる者。私が殺ちえーるむん、また、出じていちーくわいさ、やー」んでいヤーに。

また、

「あまんかい二階えんでいがら一造くれー」んちやぐとどうや、

「いやー、あまんかい造くてい入れー」んちやぐとどうや、

「おー」んでい造くたぐとどうよ、また、すぐ焼ちてー、な。焼ちさくとどう「なー私んねーな一焼かりーさ、やー」んでい泣ちよーいねー、すぐ天から神ぬ下りていちやーに、あんざーに救やーに、や、

「アッサビヨー、いやー、あんし、うりやたんなんー」んち、また、下りていさくとどうや。あんすぐとどう、うぬ、女ぬ親見ちやぐとどう、「アキチャビヨー、うれー、

私が殺ちん、殺さんむんぬ。でーじなどーさ」んち泣ちやーに、うぬ女ぬ親ぬけー死じよーたんでい。

〔共通語訳〕

女の親の継親が、

「さあ、お前井戸を掘りなさいね」と言いつけられたので掘っていた。継子は側に自分の入る場所を掘ったわけさ。掘ったら、すぐ、石をバンバンと投げられた。そうさ。継母がどどんと投げた。すると、「アイ、ナー、ナー大変なことになっている」と思っていたが。そして、また、出て行って掘ったらね、

「こんなやつ。私が殺したのに、また、出てきやがったな」と残念がっていた。

また、

「あそこに二階を造れ」と言いつけて、

「お前、あそこに造って住め」と言うので、

「はい」と返事して造ったら、また、すぐ焼いてね。火をつけたので、「ああ、私は今日はもう、焼き殺されてしまふねえ」と泣いていたら、すぐ天から神が下りて来て、そして救ってあげてね、

「アッサビヨー、お前はこんなにつらい思いをしていたのか」と、(二階から)下りてきたら、それを、その女の親を見たら、「アキチャビヨー、こいつは、私が殺そうとしても殺すことができない。大変なことだ」と泣いて、その女の親が死んでいたそうさ。

※1カー 井戸または用水に使われる溝をさす。

※2アッサビヨー 非常に驚いた時に発する言葉。

※3アキチャビヨー 「しまった」なく、期待はずれの時などに思わず発する言葉。

(14) 継子と十五夜の餅

① 継子と十五夜の餅

金城眞良 (明治四十年生) 古蹟

〔方言原話〕

八月十五夜にどういぬ産ちえーる子んかいやまんたきーくいてい、継子んかいや半分くいたくとう、

「十五夜の御月三日月がやゆら」んちいちえーるぐとーん。

「雲に隠りやに今る出じる」んち、また半分のー取らちえーたんでい。なー返さつとーしえーや、

「十五夜ぬ御月三日月がやゆら」んちやぐと、

「雲に隠りやに今る出じる」んちよ、ひつちちえーるむぬ、また取らちえーたんでい。たー、うりさん、まんたきーとうてーるばて。

〔共通語訳〕

八月十五夜に自分の子どもには(餅を)丸ごとあげて、継子には半分あげたので、

「十五夜の御月様は三日月なのか」といったようだね。

「雲に隠れていて今出てきたよ」といつて、また(残りの)半分をあげたそうさ。そうやって、歌で問われているわけさあねえ、

「十五夜の御月様は三日月なのか」といったから、

「雲に隠れていて今出てきたよ」と、ひきちぎつたもの、(残りの半分を)またあげたそうさ。誰も何もいうことなく、まるごと取ることができたわけさ。

(15) 継子と火事

① 継子と火事

金城眞良 (明治四十年生) 古蹟

〔方言原話〕

昔はね、倉というものがあつたらしい。米なんか積む倉というのがね。継子ね、継子倉んかい入りやーにや、火ちきてい焼ち殺るすんでいるいんどー。やくと、うぬわらばーな、どうーくるわかとーるばーてー、「焼かりーるさんみん」んち。さくとう、隣ねおぼあさぬんかい、

「えー私んねー倉んかい入つてい焼ち殺るするはかれーぐとやつさ。ちゃーさらーましやがやー」んちやくとや、

「倉め中じんにかいあるサシカサはてい、くりくらみていサシカサはてい立つちよーりー」んち。あんざーに、とーとー、うぬわらばーや、家や焼きとーしが、うぬわらばーや焼ち殺さらんたんでい。隣のおぼあさんから習いたんでい。

〔共通語訳〕

昔はね、倉というものがあつたらしい。米なんかを保存する倉というものがね。継子ね、継子を倉に入れてね、火をつけて焼き殺すというんだね。この継子は、自分でわかっているわけ「私を焼こうとするんだねえ」とはかりごとをしていることを。隣のおぼあさんに、

「ねえ（おほあさん）私を倉に入れて焼き殺すはかりごとをしているようです。どうすればいいでしょうか」と聞くね、

「倉の中心にある骨組のサスに、（足を）強く踏ん張って日傘を張った格好で立っていないさい」と教えてくれた。案の定、その子どもは（倉に入れられて火をつけられたが）家は焼けたが、その継子は焼き殺されなかつたそうだ。隣のおほあさんから教えてもらった通りにしたので。

（16）継子の通り池

① 継子の通り池

上根ウサ（明治三十一年生）宮里

「方言原話」

昔、昔継親とううたんどー。あんざーに継子んでいうしえー、お父が後から妻え探めーたぐと、

「どー、くれー、いやーがー継子やくと、いつべーかなーしよー」でいいやーなかい、お父や儲きーが行じたぐと。あんざー、どうーぬ後からー男んぐわ産なざーに、「自分ぬ産ちーえしなかいどうざりー。くぬひやーや、クムイんかい落とち流らしわらないる」でい思むやーなかい。継子なー、「継子ぬ扱すかやー」んでいくまー考とーくと。

「今日やクムイぬはたんじ三名遊でいくーやー」んちやぐと、また継子、

「うー」んでい。さーに、わざとや夜ゆーくわさーに

流らすん考えさーに。あんざーい、
「今日や道ん暗さぬ、な、ゆつくいていねーんむん。三人いぎたーうま寝んだやー」んでいいやーなかい、また、

「うー」んでいいち。あれーさつちゆー継子そーくとう。くれー継子、くれー実子、くれー継親。なー、夜ぬゆつくれーじるがじるやらーわからんぬーや。あんざーに、くぬ悪い親ぬ「寝んたかやー」でい思むやーに、継子んかい印入りやーに、うまんかい座敷んかい寝んだんしーや、しぐ取やーに、うりんかい置ち継子ぬ。あんざーにまた、「寝んたかやー、寝んたかやー」んでいしーにーよ、「ああ、くりやさやー」んでい流らちやぐと、くれー、

「アンマー、早くなー夜明きとーしが家かいはらな」
「アギジャビヨ、私ねーどうーぬ子どう投ぎてーさ、やー」思むやーなまた、どうーしーでい、くぬクムイんかい入ちやんでい。

宮古、八重山んかいあんでい。二ちクムイぬあしが、うぬクムエー一回なーまつくーらなゆん。

「共通語訳」

昔、昔継親と（継子が）暮らしていたそうだ。それで継子というのは、お父さんが（先妻が亡くなって）後から妻を迎えた（後妻に）、

「ねえ、この子どもは、あなたにとっては継子だけど、可愛がつてちょうだいね」といって、お父さんは働きに出た。そんな中、継親は後に男の子を産んだので、「自

分の産んだ子に面倒を見てもらおう。こいつは、クムイに落として流がしてやろう」と思っていた。継子はもう、「継子の扱いをうけるだろかねえ」と考えていた。

(継親が、)

「今日はクムイのそばで三名遊んでこようねえ」というので、また継子は、

「はい」と返事をした。そして、わざと日が暮れるまでいて(クムイに)流す考えでいた。そして、

「今日は道も暗くなり、も、日も暮れてしまったもの。三人そこで寝ようねえ」というので、また、

「はい」と答えた。継子はなにかを感じとっていた。これは継子、これは実の子、これは継親(と、はじっこに継子を寝かせ真中に継親が寝た)。だけど、日が

暮れると誰がどの子なのかわからなくなるのでね。そして、この悪い親は「寝たかなあ」と思つて、継子に

印をつけて、その座敷(のような所)に寝かせる。すぐ(印を)取つて実の子に付け替えた継子が。それを

知らない継親はまた、「寝たかねえ、寝たかねえ」とうかがいつつ、「ああ、この子だねえ」と(クムイに)

流したら、継子が、

「アンマー、早く、夜が明けたので家に帰ろう」「なんてことだ、私は自分の子を授けたんだねえ」と後悔し

つつ、また、自分も、そのクムイに身を授けたそうです。

(このクムイは)宮古、八重山にあるそうだ。二つのクムイがあるが、そのクムイは一回はまっ暗くなるそうだ。

② 継子の通り池

金城ナベ(明治三十六年生) 松本

〔方言原話〕

伊良部島ぬくぬ池ぬ二つあんどー。継子どうどうーぬ子どう二人かんし寝んしてーんていへーやー。あんなさくどう、くぬ継子あらんしが、くぬ継子どう寝んたしちー換やーに、あんなさ、くぬ池んかい落どうちやぐどう、どうーぬ子やへーやー。継子助かてい。継子ぬどうちーけーていでいんどーやー、本当ぬ子ぬどう。あんなさーに、な、どうーやすくなてい。親や、な、残念そーてーんてー。ゆくぬ者なていてー、な、継子やなーちやーしんしむんでいくどうし。

〔共通語訳〕

伊良部島にこの池が二つあるよ。継子と自分の子と二人こうして寝かしていたそうだね。すると、その継子ではなく、くぬ継子が寝ている間に(実子と)寝ている場所が入れ替わり、(それを知らない継親が継子と思ひ)、この池に落としたら、自分の子になっていた。継子は助かった。継子が本当の子と寝た位置を入れ替わったそうなんだよ。それで、も、自分の子どもがそこに落ちてしまつて。親はもう、残念していたんだろかねえ。欲張りな人で、も、継子はもうどうでもいいということ(あのようなはかりごとをしたんだろかねえ)。

③ 通り池の継子台

諸見里マツ（大正二年生）美里

大きな海だけど、何か石のところ、こんな人が寝るようなところに来てからさ、継子こつち（はじつこの方に）に寝かして、「あんた必ず寝なさい」といって寝かしてね、そういつたら、その子はそこに寝たわけ。したら、もう、自分の子がこの継子をどけて自分で寝て（こつちから落ちたつて）。こんなにして（話が伝わる場所）あるつていゆうたの、行つたけど、行つて見たけど、もう、恐ろしいところだなあと思つたけど。

して、こつちから落ちて自分の子は亡くなつて。この親が根性が悪いと考へたんでない。で、継子こつちに必ず寝なさいつて寝かしたけど、で、その、また自分の子が行つてさ、こつちに寝てから、こつちから寝つ転がつて自分の子落ちて亡くなつたもんだから、で、この継子は生きていたつて。継子台までは見て来たけど、あんまり……。

(17) 姉いじめ

① 継子話

比羅フジエ（大正三年生）山内

首里に出張に（行つたらしい）。そして、旦那が「面倒みてくれよー」つて奥さんに頼んだらしいよね。

「んーやるよー。やるから、心安いつていらつしやい」つて言つたらしいよねえ。そしてから、もう主人

行つてしまつたら、（子どもは）女と男の子だつたらしいよねえ。上は女で、下は男で。そして、とつても姉さんの方をいじめたらしいよ。そしてから、この子どもがあんまりいじめられたから、弟が、

「姉さんはあんなにいじめられて可愛そうだねえ」と言つてだつたらしいけど。そしてから、お母さん先死んでいるさあねえ。お母さんの墓の前行つて、

「どうして私産んだかー。産まない先に死ねばいいのに」つて泣きよつたつて。そして、道から通る夫婦が、「どうして、あんな子、今ごろ墓の前であんなに泣くかねえ」つて、ちよつと立つて聞いてみようつて、聞いたらしいよねー。聞いたら、

「なんで、あんたはこんな夜遅くに墓の前で泣くの」と言つたら、

「こうこうだから」つて話して、

「私の家に連れて行こう」

と連れて行かれて。こつちで大きくなつたかなにしたかこれはわからんけど、こんな話があつたよ。

(18) 嫁と姑の話

① 嫁と姑の話（ウドンとミミズ）

松本良子（大正十年生）諸見里

モノ見ない人（目の不自由な人）の話よ、話聞いたことあるけど。ちよつといええ、私は嫁さんで、あんたは姑さんでモノは見えないで。この嫁さんが毎日ね、豚の中味つていつてミミジャー（ミミズ）をくれ

てね。して、それは誰が悟ったか分からんけど、見たらそのミニジャーばかりくられてね。このミニジャーはとても上等であるつて。熱冷ましもだるつてよ、あれは上等つてよ。その人が目開いてしまつてね、見たらそれ(ミニズ)なつていたつて。そのおぼーさんは、確かに、その親は確かに、「何かねー」といつて一つづつ置いてあつたとかの話はあつたがね。そういう話も聞いたこともあるよ。

(19) 継子と二十日月

① 継子の麦つきと二十日月

鳥袋ワト(明治三十八年生) 池原

〔方言原話〕

継子とうどうーぬそーん子とー綾ぬあてい。継子二十日月ぬ上がていからウフムジャーうりちかちやくとう。継子あ憎さしが、時間ぬん遅くしみてーしが涙ぬ落やーに。

うぬウフムジャーんでいしえー水入ていちちゆたんよー。三回なー飛ばちえーういし。あんざくと、継子早く涙さーに麦えぬらしてから早くなどーたんでいるばー。また、自分ぬそーん子涙落らん、時間なげーかかていやたりぬ話、私ねー姑おぼーから聞ちやるばーてー。

〔共通語訳〕

継子と自分の実の子とは差別があつた。継子には

二十日月が上がつてから大麦をつかせた。継子は惜いので時間も遅くからさせたが、(大麦に)涙が落ちたので(早くつくことが出来た)。

その大麦というのは水を入れてついていたよ。三回程ミミを飛ばしながらね。それで、継子は涙で麦がぬれたおかげで早くつくことができたというわけさ。また自分の実の子は涙もこぼれないし、時間もとても長くかかったという話を、私は姑のおぼあさんから聞いたわけさ。

② 継子と二十日月

仲宗根カメ(明治四十二年生) 登川

〔方言原話〕

昔は、くぬ継子んでいしえーやいびんよー、まーぬ国やていんよー、親とうぬどうーぬ子とうぬあい仲あらん、あんすかーあらんたるはじやしながー、くれーありよー。継子とう継親とーあんやくとう、どうーぬ親たかてーしわぬ、いー意味えーしどう言ちよーびーるはじやしがてー。人間は心ぬゆいくとう。やしが、二十日夜ぬ月ぬ上らんえーかー夕飯のかまはらん。子守や、子ひつちー守らちよー、あんし仕事さー、仕事しみてい、ムヌん食まはん。必じ二十日月ぬ上がりわる夕飯のーあぎーるんでいやーにどうどー。あんし、二十日月や十九日月やか早く上がいんどーり言らりーたん。

〔共通語訳〕

昔は、この継子というものはですね、どこの国においても、親と実子の関係でなければ、(仲が悪いと言われているが) そんなにまでではなかったかと思うが、こんなことを言われていた。継子と継親との関係はそのようなもので、自分の(本当の)親にまさるものはないと、いい意味合いで言っているはずだが。人間は心次第なんだが。だけど、

二十日夜の月の上がらないうちは夕飯は食べさせてもらえなかった。子守りは一日中子守りさせてね、そして仕事する人は、仕事させて、食事も与えない。必ず二十日の月が上がらないと夕飯はあげないといつてね。それで二十日月は十九日の月より早く上がるよと言っていた。

③ 継子の麦つき・二十日月

永山ウシ(明治三十七年生) 大里

親がよ継子にはね麦つかすでしょう。本当の自分の子には水入れてつかして、継子には水入れないでつかしよつたつて、麦よ、大麦、あれ、水入れないと皮むけないわけよね、大麦よ、ウスでこうつくには。継親が自分の子には水入れてつかしたわけつて。継子には水も入れないで、カラカラばつかりしたら、いくら一日たつても皮むけないわけよ。あとはね、涙が出てね、涙が落ちたところは皮がむけていたらしいですよ、麦つくによ。継子は泣いてね一日ついてもね、ほんとの実の子はあんなに皮もむけているのに、自分は

一日ついてもね、皮もむけないつて泣いたらしいですよ。泣いたら涙が出てね、この涙が落ちているだけはね皮がむけていたらしいですよ。あれからね、「ああ、麦はね、水入れてつくもんだねえ」つてね、麦は水入れてつくらしいです。継子と継親の話ですよ。

「夕飯二十日の月上がる時に(継子に) あげる」というたらね、ご飯、

「そうですかー」といつて。もう、二十日いうたら、(月上がるのが) 十二時くらい遅くなるんでしょ。だからねえ、

「そうですかー」といつて、その継子は我慢しておつたから、(それを見ていた神様が哀れんで、月を早く上がるようにしたので) 二十日のお月さんは早く上がるつて。上がりよつたつて。

④ 継子と二十日月

喜屋武子代(明治四十四年生) 泡瀬

〔方言原話〕

昔の継子はねー、お月様が上がいに夕飯くいたんでい。あんさーにやー十日やかんやー、トートーメー上いみそーちやめ継子ぬ早くいーんでいやーに。月ぬ上いねーくいーくとうんでいやー、あんさー九日やかん十日ふえーく上いみしえーんでい、お月様は。

〔共通語訳〕

昔の継子はねえ、お月様が上がる時に夕飯はあげたそうだ。それでね、十日よりもね早くお月様上られる

のは、継子に早く（夕飯を）あげるといつて。月が上ると、（ご飯を早く）あげることが出来るからと、それで九日より十日は早く（月が）上るそうだ、お月様は。

⑤ 継子の二十日月

桑江朝盛（明治四十五年生）中の町

継子は二十日の月が出るまで仕事をさせられ、食事を食べさせてもらえなかった。継子を哀れに思つて二十日の月は十九日の月よりも早く出るようになった。

⑥ 継子の二十日月

吉村ヨシ（明治四十年生）山内

二十日の月は十九日より早く上がつてゐるつて話であつた。「長いこと夜はいつまでも、このお月様が上がらないうちは仕事をさせるから、二十日のお月様は十九日より早く上がつてちょうだい」つてこの継子に言う。これ拝んだから、今は十九日より二十日は（月が）早く上がるつてよ。

(20) 継子のシーの実取り・麦つき

① 継子話（シーの実取り・麦つき）

西平マツ（明治三十四年生）久保田

これはよ、昔、大昔ね、継子いじみ。あとの本妻がね、継子いじみていよ。大昔スード、山原山行つたら

ね、大きな木によ木の実があるですよ。あれ取つてきて食べるよね、シーメーしておいしいですよ。あれ山へ行つて、

「取つてきなさい」言つて継親が言いつけてやつたらね、この袋よ、ね、

「これに取つてきなさい」言つて継親がやつたんでしよう。両方の袋や縫てないから、うぬシー（実）は取つても、取つてもよ、入れても、入れても抜けていくからね、これでよ、もうシーは取つてこない、や、

また、後から、

「あんたはね麦よ、麦を白ねーたたきない」と言つてよ。麦はよ、水入りらんとーできないわけよ。もういくらたたいてもね、白でたたいても打つても、もうできないから、後やよ、うぬ継子ぬよ涙、自分の涙でね、あんまり苦しいやから、自分の涙でよ、この白に、この麦に涙が落ちて、涙が落ちたところは麦がつけよつたつて。これから麦はよ、水入れてつけるもんつてわかつたつてよ。昔の人、物凄い悪魔がおつたわけよね。

(21) 継子の二十日月・機織り・扇と弁当・水汲み

① 継子話（二十日月・機織り・扇と弁当・水汲み）

上原ウシ（明治四十二年生）住吉

〔方言原話〕

昔ね、継親、継子うたるばーて。この継親はこの子ろもな、しゅぐ朝から仕事に出して夜も夜中ま

で、二十日の月が出たらハルから来て、ご飯、夕飯あげよつたつて、継子。

あんしんし、また、どういぬ娘は織物するでしょう。一番最初としまいは継子にさせて、また、自分の子も真ん中まで、真ん中等の所まで織らすわけ。そうしたら、な、この自分の娘は何もできないわけ。な、難しいものはこの継子にさせて、自分の娘は何もできなかったつていうし。

また、田舎は田草取るでしょう。あれ取るつてね、フームシというのは田んぼの草。葉このくらいつてから上に浮いている草だからさ、取ていん取ていん上んかいちよるばーて葉や。浮ちうりそーる。

フームシぬ草や 我が命心
鳥飛ぶ鳥や 我親加那志

んちよー。これ、な、ぬーがらにぎりして、大きな田草取る前んかい、ご飯んち持ち来る。「ひるましーむん」ち、よー、「珍しい」と思つてこの子どもは、これ自分で食べないで、カラスが飛んできたからこれに分けてな、投げてあげたから、これがバタバタして死んだから、この歌よつたつて。鳥や、親めうりやていん私んねー命たちよーさやーんちぬ、うり意味どうやえーさに。

また、水んかたみらすし、水かみーんかい入りーねーよー、な、下や、底割りとーぬむんかい、うぬ水汲り入りらりーるするばーて、うぬ継子んかい。あんさくどうな、入ていん、入ていん、かたみてい入ていん入ていんねーんばー。な、あんしーう

りし後や、うりそーしが。また、割つてい、割りガミンかい入りらす、いくまーるんしーんちよー。あんし、ちゆーふあーらあつてさーりていそーしが。

また、うぬ後や麦、大麦。大麦ちゆかしゆるるばーて、皮はんするばーて、ちかち、白あり。うりずしが、うりやん。だ、水かきらんで、ちやつさうりしん皮やはざらんばーて。あんしな、泣ち、うぬ、継子ぬ泣ち涙落つていて、うりんかい水さくとう、うぬ皮はぎたんでい。皮はぎていちゆかり。うりさくとう、うにーから、うぬ麦、大麦は、「あんな妻は水入れてちゆくもんだな」と思つていつて、これから水入れてつきよつたよ。これ、継親、継子ぬ話。

〔共通語訳〕

昔ね、継親、継子がいたわけさあ。この継親は、この継子をすぐ朝から仕事に出して、夜も夜中まで。二十日の月が出たら畑から来て、ご飯、夕飯あげよつたつて、継子に。

そんなこともしていたが、自分の娘は織物するでしょう。一番最初と最後は継子にさせて、また、自分の子どもには（たやすい）真ん中だけ、真ん中の織りやすい所まで織らすわけ。そうしたら、もう、この自分の娘は何もできないわけ。もう、難しいものはこの継子にさせて、自分の娘は（難しいものはしないので）何もできなかったつていうし。

また、田舎は田草取るでしょう。あれ取るつてね、

※二十日の月 旧暦の二十日夜の月は、月の出が遅い。
※二番最初としまいは 機織の始めと終わりは糸がよく切れるので難しいといわれている。

フームシというのは田んぼの草。葉このくらいしてから上に浮いている草だからさ、取っても取っても上に浮いているわけね、あの葉は。浮いているものだから。

フームシぬ草や 我が命心

(ヒルムシの草は我が命の草)

鳥飛ぶ鳥や 我親加那志

(カラス飛ぶ鳥は私の母親)

と(歌をうたっていた)。これはね、なにかを(入れた)おにぎりを、広い田の田草取る前に、ご飯とって持って来ていた。「珍しいことだ」とね、「珍しい」と思つてこの子どもは、これ自分で食べないで、カラスが飛んできたからこれに分けてな、投げてあげたから、これがバタバタして死んだから、継子はこの歌をしたそうだ。カラス(が死んだの)は、親の愛情で、私の命は助かつたんだねえと、その意味あいなんだらうねえ。

また、水を担がせるのも、水を水ガメに入れさせるが、もう、(水を汲む容器の)下が、底が割れているものに、その水汲んで来なさいというわけさあ、その継子に。そうしたら、もう、入れても、入れても、担いで入れても入れても、なかなか水がたまわらないわけ。それでも、それで運び続けて。また、割れて、割れているカメに入れさせるので、何度運んでもなかなかいっばいにすることはできなかった。このように、大変いじめられていたようだが。

また、その次は麦、大麦。大麦をつかしているわけさあ、皮をむきなさいとつかして、白に入れて。白に

入れてつくが、なかなかつくことができない。水を入れてつかないと、いくらやっても皮をむくことができないわけさあ。そこで、継子は泣いて、その涙が落ちて妻が涙でしめつたので、麦の皮がむけたそうだ。そうしたもんだから、その時から、この麦は、大麦は、「妻というものは水入れてつくもんだねえ」と思つてわかつた。それから(麦は)水入れてつくようになった。これは、継親、継子の話。

(22) 継子の歌

① 継子話

鳥殺トメ(大正二年生) 松本

継子にモノも食べさせないで苦しめたらしいよ。そうだから、歌にもあるさ。

アキチャキチャバナ(とげのあるあざみは)

くだみりばやむい(踏むと痛い)

継親ぬひれや(継親の扱いは)

かんがあゆら(こんなにひどいものか)

(継親の付き合はこういふものだろうか)

刺がある葉っぱがあるでしょう。

(2) 継子いじめ

仲村トシ子(明治三十年生) 住吉

アキチャキチャチバナ (どげのあるあざみは)

くだみりばやむい (踏むと痛い)

継親ぬひれや (継親の扱いは)

かんがあゆら (こんなにひどいものか)

んち歌もあるよ。継親との付き合ひ方は難しくてね、「チバナ」というのは、苦いものがあるさあね。それを踏むと痛い、継親との付き合ひもこんなものであるのかなあという話だね。

(23) 継子の腹はれつ

① 継子の腹はれつ

佐渡山ゴセイ(大正三年生) 城前

モーアーサーこれがあつて。これ強くからしてから炒めたらあれさーね。また、腹の中に入ったら、たくさんなるさ。それで、それは、おいしくして炊いてんでしょ、これも、小さく。継親がさ。それを、「おいしいから食べなさい、食べなさい」って食べさせて、お腹を膨らませてから死なした。死んだんです、これ。こんな話があつたよ。そのモーアーサーはとっても膨れるさーね。これでいじめていたつて。こんな話。

(24) 手なし娘

① 手なし娘

普久原ウシ(大正二年生) 嘉間良

侍の子どもでなかつたかね。何かあつたはず。してからに、その恨みの人が(侍の子どもの)手、手を切つたのは。そうだったはずよ。こんな(手がなく)なっているから、どっかに同じだけおや(位の)人が誘つてきて、自分のお家にやつて(住まわした)。(手のない娘に)子どもは出来るが、助けた人の子どもでないはず。子どもが生まれてからかね、その(娘の面倒をみている)男の人は首里動めしていたさーね。(子どもが生まれたことを知らずため)手紙を書いて、「そうであるよ」といって、使ひの人に持たしたから、途中で、一夜そこで過すんだよね。したら、そこ(宿)の人が、その娘ねらんだ(危書を加えた)人だったはず。そうして(使ひの者が)、「手紙を持ってあつち(首里)に行くんだよ」と言つたから、したら、

「その手紙を見せてくれ」と言つたから、見せてやつたら、もう(手紙には)、「こんなしてもう子どもも出来ているよ」という内容であつた。子供ができ(たこと)対して(宿の人が)「そんなだつたらこつちからもう追ひ払つて」って書き直して(使ひの者に)持たしてね。したら、また、主人がその手紙を見たらね、「そんなだつてもね、家から出さないで私が帰

※1モーアーサー 煙アースともいう。雨後の芝生などに生える黒いキノコのようなもので、乾かしたものを水に浸して食用にする。

※2膨れる モーアーサーは水をよく飲むので、たくさん食べて水を飲むとおなかの中でモーアーサーがすぐらむ。

※3首里動め 琉球王のいる首里城に仕えること。王府の役人。



る時まで置いておきなさい」といって、書いてまた持たしたら、行くときに（泊まった宿の人に）「帰りにもこつちに寄ってね」と言ったからね、また、言う通りにまたこつち（行く時と同じ宿）に寄った。寄ったから、またその手紙をこつちの人が見るさーね、「見せて」といって。だから、それをもう、何もわからないから、何を書いてあるかわからないから、見せたから、「そんなだったら、こんなのもうこつちに置くことできないから外に行かしなさい」といって、またも書き替えて持たした。（そんなことは知らないのです）その主人が書いたと思つてよ、家の人は。もう、言う通りに泣く泣くに、この親子をそう（手紙に書かれているもの）だから、（娘を）家庭から出すんだよ。

家庭から出して、出て行く時に、何か取り外してからに子ども落ちそうになつたさーね。落ちそうになつたから、その時に（娘の）手は出ていたつて。手は出ていたつて。

（色々な話を）弟の嫁の兄さんから聞いた。これは戦前だから、まだ三十にならなかつたはず。はつきりはわからないけどね。自分の弟のお家だから行ってからに、戦前は夕涼みするさーね。して、夕飯も食べて、夕涼みしている時に、その兄さんがいろいろ話していた。

一〇 動物報恩

（一）雀報恩

① 雀報恩

屋官ヨシ（大正十年生）越来

ずつとずつと昔の話だから、その人の名前も知らないけどさ。貧しい人であつたらしく、暮らしが楽でなかつたようだ。そのお家は石が、こんなふうにしていゝる所であつたというがね。

「お前はここの主になきなさいね」と言つてからに、その貧しいお家にクラーグワー（雀）が指図したところ皆、金だつたつて。それで、豊かになつたという話もあるけどね。これ、クラーグワーの話だつたと思う。「ついできなさい」という風にして、で、そのお家を見たらね、もうカマドから何からみな金だつたということ。昔は金が出たというでしょう。金の山があつたつてよ、この沖繩にも。

動物報恩 動物は不思議な力を持ち、動物にやさしくしたり、助けたりすることで後に困つたときに動物に助けられる話。

(一) 鬼餅由来

① 鬼餅由来 (瓦)

柴野比トヨ (大正六年生) 知花

〔方言原語〕

兄弟二人うーたんでい、男どう女どう。くぬ、しーじやーてー男やひが、うれーなうーりし、女夫つち難島方面ぬんかい行じよてーんやー。久高まんぐらんでい、ウターんでいしえー。あんざーに、うぬ兄さのー鬼なてい、人ぬヒージャーんウワーんぬーんくういなー取ていかでい、かむしがねーんなたくとう、人ぬわらばーまでいん取ていかでい。あんしなうーわさぬ出じてい。あんざくとう今度うぬ兄弟がてし、「どー、くれーなーかんしえーならんむんやー。私兄弟やくとう、なー人ぬ子までいんイチムシえーいんねー買ていん買らりーひが、子や買ららんくとう、な、あんしみてーならん」でいいやーに、本当やがやーんでい確かみーが来くとう、いんねー、んちや、鍋なかいてー、人ぬわらばーぐわーよー煮ちえーたんでい。あんし、

「いーばー来ふあウター。今日や、なー、やー、兼しじてーくとう、いやーんかていどう行ちゆんぞー」んでいいちゃぐとう、

「やんー。だー、あんしーねーやー見ちんーだ」でい、

見ちやぐとうな、わらばーぐわーやたんでい。どうーや子ん抱ちどう来んでいんぞー。あんざくとう、「どーなーくりがー私子までいんやー、あんしけーしーねならんむん」でいち。な、けー考やーに子けーうつぱし、

「んだ、アヒー。私ねー便所いちくー」んでいあんいちやくとう、

「いやーやひんぎーねーならんくとう、んだあんふらー手んくびくんち、綱ひかちやらは」んち、くんちやらちやくとう。また、うぬ女たくまーあいるふくとう、フルぬ石んじ、うぬ石え綱やはんちけーくんじやーに、ひつちーかんしえーしーしーえーんばーよー。あんざくとうな、

「なまん、なーらやんウターんちえーしーしーし、なー」ひつちーかんしん。プーないひんぎてい行じ、船ぐわー乗ていひんぎていふあいでいちそーひが、な、かちみらりーどうたじやなたくとう、うぬ船ぐわーうつけーらざーに、うぬ船ぐわーぬんけーサバ二ぐわーぬんけー親子どうむなーあんし、すぐどーたんでい。あんざくとう、うぬアヒーやうままでいーはーえーし来、うぬ船ぐわーぬんけー立ちよーてい、

「アイヤー、うままでーウター見たるむん。うつたー親子がちーぶくくえーはんちやはやー」でいちえーしーしーし。あんしらん船ぐわーぬんけーうてい足どうんパンパンさくとう、「んちやな、私ねーいーばーどーな、かんしくえー隠きてーはやー。なうちゆくわー

逃竄譚 恐ろしい化物や鬼からなんらかの方法で逃げおせしる話。

※1 久島 沖縄本島西部の知念半島東方約五千メートルの島。地球の国づくりにちなむ神話や神の国として知られている島。

※2 フル フールで誰小娘のこと。誰小娘を兼ねた古い形の使所。

※3 船ぐわー ぐわーは乗船の接尾語。ここではサバ二のことをさしている。

※4 サバ二 一本の木をくりぬき造った小型のくり船。

※5 アイヤー 嘆息に思つた時などに思はず口にする言葉。

りてはやーんち。あんざーに今度な、うりがはちやる時分なたくとう、すぐ船ぐわ乗てい久高島んけーはちえーんばてー。

あんざーに一応また家んじ考てい、あんざーに、「ど、私たアヒーな、そくとう鬼などくとう、くれーなムーチーぬ日ね、ムーチー作くてい行じかまふあーどうやる」んち。うぬアヒーむの「瓦碎ちてーうりざーに作くてい、ちやつびん作くてい、またどうーぬむの一本当ぬ餅米びけーじし作くてい。あんざーに、

「んかアヒー、今日や、やー、ムーチーやくとう金城パンたんじ行じ遊ばちムーチーかまやー」んでい

いやーに、しかちそてーい行じ。

「うりアヒーくれーカムーチーやは、くれー鬼ムーチーやは」んち、うぬマギーやアヒーんかいかまちやぐとう、な、瓦ぬ入ちよーしがサーラナイかむたんでい。「んちやなうれ、本当鬼なとーはやー」んち。あんざくと、うり、うーばんじかまはがちー、どうーぬパンチョーけー脱じやーに、うぬウターや。あんし、うりあし、な、うままっ赤ほーしえーや。わざととうりんかいかちえーたんでい、アヒーんけー見しーんち。あんざくと、うぬアヒーや、

「ぬーやがウターいやーうまー」んでい。あんいちゃくとう、

「うまーよーアヒー、鬼喰口」んでいいやーに、しく、うにーぬどうん金城パンたんけー押し落とうちやーに

死なちやんでい、ウナイぬ。

家んで「焼きーねー、ヒジヤマゲーシんちふしえーや。くれーじじうりやくやーに、やー、うりはんぬーならんむんでい。

うぬムーチー煮ちえーる水さーに、屋敷ぬまんまーる、うぬ水、ムーチー煮ちえーる水し、よ、あんし「鬼ふか、徳内」んち、あんし、まんまーるはにたんでい。うりし、うぬ由来記えーなとんでい。今あんふんどー知花あ。あんざーにまた、うれー、アジマーガーキーぐわーざーに、ムーチーぬカーサ、うり、かんし立派ぐわーくんちてー、必じうまなけーさぎーんよ。人ぬ入ちやい出じたいふるうつべー。あんし、くまーがーきぐわーしくんちよー、あんしさぎーんばーよー。ちよーどういーねー十字架ふーじーなとーんばーやんやー、考いねー。うりし、ゆーふあねー返ふんちよーるあんどうやたるはじどんでい思いん。

〔共通語訳〕

兄弟二人いたそうだ、男と女と。その年上は男だけだ、兄さんは村にいて、女は結婚して離島方面に行っていたんでしようねえ。久高あたりだそうだ、ウターという娘は。すると、その兄さんは鬼になって、人の山羊も豚もなんでも取って食べて、食べるものがなくなったら、人間の子どもまでも取って食べていた。それでウワサが出た。そうしたもんだから今度は兄弟が「もう、これはこんなことがあつてはいけない。私の兄弟だから、もう、人の子までも（食べるとは）生き

キーパンタ 嵐

第2ヒジヤマゲーシ 火返しのことか。

火災時に女性の陰部が見えることを意味する「ホーハイ」といふかけ声を叫べば

火災は驚いて退散し、鎮火すると考えられていたことから、火玉返しに「ホーハイ」と唱えていたものと思われる。また、小さな小屋を作つてそれを燃やすことで、

火の神が天の神の命を返り、罰を下すべき家に火災を起こさせたことにした。

キーカーサ ムーチーを包んだ月餅の菓のこと。

物は、いわば買おうと思えば買うこともできるが、子
は買うことができないので、そんなことをさせてはい
けない」と思い、本当のことだるうかと確かめに来て
みたら、案の定、ほんとに鍋の中にね、人の子どもを
煮ていたそう。そこで、

「ちょうどよいところに来たねウター。今日は、もう、
ねえ、とてもおいしい食べ物も炊いてあるので、あな
たも食べて行きなさいね」といったので、

「ああそうですか。どれ、それなら見てみよう」と、
見てみると、子どもであったそう。ウターは子ども
を抱いて来ていたそう。そして、「もう、兄さ
んは私の子どもまでも、そのようにしたらいけない」
と。そこで、考えて子どもをおぶって、

「ねえ、お兄さん。私は用を足してこようね」とそう
言う。

「お前はね逃げたらいけないから、どれそれならば手
首を結んで、綱をひいてやらそう」と、結んで行か
したよう。また、そのウターは賢かったので、豚小屋
の石に、その石に綱をはずして結ぶと、しよつちゅう、
(綱を) 引っ張っているわけ。そして、

「まだなのかウター」と言ったりして、しよつちゅう
引っ張ったりしていた。(ウターは) 一目散に逃げて
行って、船に乗って逃げて行くとしていた。だけれど、
捕まえられるようになったので、その船をひっくり返し
て、その船の下に、サバニの下に親子ともども、こ
すくんでいたそう。すると、その兄さんはそこまで
は走って来て、その船の上に着て、

「アイヤ、そこまでウターは見えていたのに。ウター
親子の乳房を食べ損ねたな」とつぶやいたりして
いた。そうやって、船の上で足をパンパンしていたので、
「なるほど。私はいい具合に、こう隠れていたねえ。
もう少しで喰われるところだったねえ」と。すると、
今度はもう、兄さんが行った頃を見計らって、すぐ船
に乗って久高島に戻ったよう。

そして一応また家で考えて、そして、「ほんと、私
の兄さんはもう、本当に鬼になっているので、これは
ムーチーの日は、ムーチー作って行って食べさせて
あげなくては」と。鬼の兄さんのものには瓦を砕いて
入れて作って、大きく作って、また自分のものは本
当の餅米だけで作った。そして、

「ねえお兄さん、今日はねやムーチーなので金城バ
ンタに行つて遊びながらムーチー食べようね」とい
って、だまして連れて行った。

「ほら兄さん、これはカムーチーですよ。これは鬼ム
チーですよ」と、その大きいものを兄さんにあげたら、
も、瓦が入っているがパクパク食べていたそう。『い
や、まったくこれは、本当に鬼になつてしまったんだ
ねえ』と。そうしたもんだから、モチを夢中になつて
食べているときに、自分の下着を脱いでねそのウター
は。すると生理があつたようだね、たくさん。それで、
生理なので、も、そこはまっ赤になっているさあね。
わざと兄さんに向つて座っていたそう。兄さんに見
せるといつて。すると、その兄さんは、

「何だウター、お前のそこは」と。そういうので、



「そこはだね兄さん、鬼を喰う口」といって、すぐ、その時に金城バンタに押し落として殺したそうだ、ウナイが。

家などが焼けたら、ヒジャマゲーシといってやるでしょう。それは、ぜひそれを作つてね、それをやらなといけなといつて（やるでしょう）。

その餅を煮た水で、屋敷の周り、その水、餅を煮た水でね、「鬼は外、徳は内」と唱えながら（屋敷の）周りにまいたそうだ。それで、この由来記はできたそうだよ。今もそうしているよ知花は。それでまた、餅のカーサは、十字に結んで、餅のカーサ、それ、こう立派に結んでね、必ずそこに下げていたよ。人が出入りするところはすべてに。そして、小さく結んで、そうやって下げていた。ちょうど、言わば十字架のようになっているねえ、考えたら。それで、もしかしたら悪いものを、追い払うということではなかったかと思ふんだが。

② 鬼餅由来

鳥袋義堅（大正三年生）古謝

〔方言原話〕

那朝んでいたがやー首里がやたら、あまなかいあんでいぬ話よ。事実おうまでいやんでいさー。

うれー、今ウナーガマンちあんでいよー、本当がやらーや。

兄弟二人うしが、ウナイや真面目やていて、男鬼なてい、ウワサめ悪さぬ、ワラバーン連てい

ていうらんちえーうすい、しえ、殺ちうちゆかむんでいぬばーどうやたが、ぬーがやたらわからんしが。ウワサめ悪さくとう、「くれ、かんしえーならん」ち女ぬ餅作くやーに、うりがにーんかい。えーりん兄弟どうやくとう、みーしつちぬーんでいんたんるはじ。やていん、ちやつさ言ちきていん聞かんやーに、餅作くやーに、あんし、どうーぬイキーぬ前んかに行じえーくとうかまが向ーぬ話。女ウナイや下真つ赤さーに、なうりんかい向かてい話しえーさがな、餅くえーがな。さくとう、

「いヤー下ぬ穴ぬーやが」んでい、
「うれー、いヤーやわからんや。くまー餅かむる口、穴。うまー鬼くわいぬ穴」いちゃぐとうタマシぬぎやーに逃ぎーんでいさーにかい、崖から落ちていたんでい。

〔共通語訳〕

那朝んといつていたが、首里だったか、あそこにあつたという話ですよ。事実は首里らしいね。

それは、今、ウナーガマといつてあるそうだよ、本当かどうか。

兄弟二人いたが、ウナイは真面目でね、男は鬼になつて、ウワサも悪く、子どもたちを連れて行って、行方不明になつたりするし。殺して喰おうとしたのか、なにか、わからないが。ウワサが悪いので、「これは、こんなではいけない」と、ウナイが餅を作つて、男の方へ。たぶん、兄弟なので良く知っているの、何もいわなかったはずだが。だけどどんなに注意しても聞



かないので、餅を作って、そして、自分のイキ一の前に行つて餅を食べながらの話。女、ウナイは、下は真つ赤にしてイキ一に向つて話をして、餅も食べながらすると、

「お前の下の穴は何んだ」と、

「それは、あなた知らないのですか。ここは餅を食べる口、穴。ここは鬼を喰う穴」といつたらね、とてもビックリしてね、逃げようとしてね、崖から落ちたそうだ。

③ 鬼餅由来

祖聖トク（明治四十五年生）東

鬼が居たんでい。鬼が居たくとや、むる、人うち喰でい、人うち喰たくとや、（鬼が居たそうだと、鬼が居たのでね、いつも人間を喰つて、喰つていたので）、人をもう皆殺して自分で食べたから、これがね、あんまり怖くて、餅作つて、たくさん餅作つてこれ（鬼）にあけて、女のおの自分の兄弟がいるさーねー。兄弟がね、こつちを下を見させてから、

「これはね、なんねー」と言つたら、

「これや、鬼喰いるや穴やんどー（これはね、鬼を喰らう穴だよ）」でい言ちやくとやえ（と言つたからわ）、

「鬼喰いる穴どー（鬼を喰らう穴だよ）」んでい言ちやくとや（と言つたからわ）、

「アカサマヨー」さーに下んかいけー落ちていやーに、森から下んかい落ちていて死んでい。（ああ、なんて

ことだ」とびつくりして下に落ちて、森から下に落ちて死んだ）。

あんさーになかー、うにんからや、うぬ餅や作いるむんでい（それで、その時からね、餅は作るものだ）。

④ 鬼餅由来（鉄）

平田フミ（明治三十五年生）登川

ムーチーの節句は、兄弟一人は男が、自分の家庭の人でもない、別の人でも喰つてよー、自分が殺して食べて。同じ女だよ。兄弟でもなんでもかまわん。兄弟がよ、男が。して、もう、あとは、部落からも、親、兄弟からも、これは鬼だ、鬼だから別に、山に奥に人が見ない山奥に行かすといつてよ、なー、山に住んでいるわけさ。

だが、あるお話して準備してあるはず。相談してから、この十二月八日かねえ、この時の日であつたはず。ある所に大きな石山よ、石ばつかしある山の上に登つて、あんたは長男、あんた鬼でしょう、本当は。まず、これはウナイ兄弟だよ。だが、二人この女がみんな親、兄弟座らせて、で、あつたはず。まず見ないからわからない。話よ。このウナイが配つて、「あんた殺す」と言つて、これはもう他の人も食べるし、自分の兄弟も親も、何人も人食べているから、どうにかしてこれが命失わんとならんと、相談してあつたはず。

この女が、ウナイが石山のずつと上に、鬼が食べるものはカネのお餅、また、ウナイが人間が食べるのは本当の餅。二つ餅作つて、こうして山の上に登つて、



二人がもの飾って前に置いて。も、うれしくてすぐ鬼も来ている。またこれも一緒に二人登って向かい合って座って。そして、

「どう、今日は良い日だから、きれいなおいしいお餅作ってあるから、あんたも食べてねえ、自分も食べるから」と言っている。こうして、あなたの、鬼の前の餅はカニ（鉄）だよ、美味しそうなお餅みたいにお粉付けて。あのまた、ウナイのものは、こつちに二つ置いて。あの、本当に食べる、自分から。この鬼はこれ見て、これ食べると言っている面白くしているが、このウナイの下見たから、おかしくてアハハして笑って、こうして山の上でこんなして大きく手をまねいて、後にすぐフキパンタに、下に石山から下に流れて、この死なしたといて、この岩に。

⑤ 鬼餅由来（土）

桑江信子（明治四十一年生 泡瀬

鬼餅と言つてね、ウナイイキーいたそうだ。したから男の人が鬼だったわけ。だから妹がね、『もう、これ、こんなしたらいけないから』と言つて、餅作つて。で、自分の食べるのは本当の餅作つて、この鬼にあげるのは土ぐわいで作つてあげたつて。それでね、食べられなかつたからね、

「この餅は食べよう」と言つたから逃げて海の所に行つて。したら、も、こつち（女性の下部を）はつてここ見せたらねビックリして鬼が落ちて死んだつて。それで（餅を）作るようになったつて。（今でも）作つ

ていますよ、はい。「ムーチかむしえーくぬ口やしがいやー、鬼喰しえーうまやさ（餅を食べるのはこの口だけど、鬼を喰うのはここだよ）」といったらね、ビックリして鬼が落ちて死んだつて。ウナームーチー。

⑥ 鬼餅由来

上原ツル（大正七年生 東桃原

お兄さんが鬼になつて、山あがりしていたらしい。あんし、ムーチー作つて行つてさ、お兄さんは、こつち崖があるさあねえ、崖があるから、崖後ろなして座らせて、また、お姉さんはあつち（向かい）に座らせて、餅食べさせながら、こつち（下の方を）はつて（はだける）、

「あれは何ねえ」といったらさあ、

「これは鬼喰えー口（これは鬼を食う口）、これは餅くえー口（餅を食べる口）」といったら、こわがつて後ろにシリーシリー（後ずさり）していつてさ、そして落ちて死んだつて。

⑦ 鬼餅由来

島袋美智子（大正二年生） 与儀

餅の起源はね、首里のホーハイムーチーというのあれには。

あのね、兄さんと妹がおつて、この兄さんが鬼でね人を苦しめたり殺したりしてもう、とっても世間を騒がしておつたつて。そしたらね、妹が、ある日考えてね、餅をムーチーガーサに作つて、兄さんはね「山の



つべんまで遊びに行こう」といって連れて行って、「あい、兄さんこつち見てごらん」といゆうてへんな所見せた。これを見て驚いた兄さんが、そつちから駆け落ちて命を失ったということね。

私はそういうふうに関わされておる。

⑧ 鬼餅由来

桑江幸子（明治四十一年生） 泡瀬

あれはですなえ、自分のイキー兄さんが鬼だったそ
うです。人を喰う鬼だったから、このウナイ神はね、
兄弟の妹は、『どうにかしてねこの人殺さねばいけな
い』いうふうにしてねいたら、このムーチーの日に、「お
いしい、おいしい」と兄さんは言うからね、

「なーひんまーさしがあんどー（もつとおいしいのが
あるよ）」といつて、

「ぬーやが（なんだ）」といったから、

「今、見せてあげるから」

といつて、はんだ（塵）ぐわーに連れて行って、塵の
上に連れて行って、

「ムーチーやかまーさし見しーさ（餅より美味しいも
のを見せます）」といつて、自分の一番宝こうして見
せた

「ハキサミヨー」ってビックリしてすぐ落ちて死んで
しまったそうです。その時から、また、ムーチー食べ
に来たらいけないといううんで、中味は食べてしまっ
て残りの葉っぱだけ赤十字にしてね軒下に吊るしたそ
うです、鬼退治。

あれから、すぐ、そのムーチーは、兄さんの食べた
ムーチーの皮は赤十字で二つこう吊る下げて、

「ちえーしんならんどー（来てはいけないよ）」と鬼退

治、このムーチーの皮は分らんもんだから（食べた
ら）捨てるでしょう、これを踏むとバチがあたるよ。
どうしてですかというね、「こういう風に命を捨て
てた人は迷って来たら大変だから踏まないで下げてお
きなさい」と。だから、サンニンはカリいな（縁起の
いい）ものといった。

煮汁はアンマー（お母さん）がマー石の上にかけてよつ
たさあ。

たさあ。

⑨ 鬼餅由来（瓦）

金城永保（明治四十二年生） 松本

「方言原話」

くぬ、金城村どうく荒らち人喰ていならんよー
な。あんそーし行じやぐと、

「ぬーがいやーやチラーどうえーさに。人喰たしが、
今日やいやー来るむん、いやー喰てい、私ちーにしてい
とらさやー」んでいややぐと、

「アヒー、いやーや、ちさちにん、さち八重山んかい、
だんだんすくとーしが、あんどろなとーるいアヒー。
でいっかシマンかい婦てい行か」でいややぐと、

「シマンかい婦てい行け、私にーたさしくまし行か
らんむん」でいよーや。

「どーいやーや一人さーに行け」んち、

「あんどろやら、繩かきていやらし」でいいや



れー、うまかい犬ぬうてーんでいがらー、犬くみー
んでいいやーに、しく、

「チラー、いややんかい化きたるばすい。とー、犬
んかい化きていいーばーやさ。ちゅー殺ちくわーやー
に」でいそーるむんぬ。また、うぬあとから、くぬ
鬼どう話すんでい夫待ちかんでいーし、やー、なや。
夜ぬゆつきていぐー。

「いやーやなまでいーハルかいあつきわるやるい」ん
でいんじやぐと、

「めーぬカダババー櫃んでい、うりすんでいあんすん
どーやーアヒタワー」

「あんさんてーやー明さるえーまど、いかなあんさ
んでー私ねーいっべーしわじむ起ちよーつさー」

「ぬーがちやーるちむえーやが」んちやぐと、

「あんし、ちやーぬくどいないん私んねー、ひとつ
うまぬカーミンかい入ていとうらさ。あんにんねー
んだらーチンナングルー、たんなくさーていーちや
さ。ちやーるくとうんあていん捨ていらんどーやー」
んちやぐと、

「くぬ金城村あたしえー私たーアヒーどうやるはじ
どーやー」

「どーな、くれー、んちやなーいいやーや、顔持ちまー
んあつからん、あつかりが。くれーでーじそーさ
やー」でい、

「どー私が考めあしがやー、連ていちやーに餅作てい
くいてー、くぬ餅や喰てい、互餅までい喰らくれー、
殺しわるやくとうやー」。連てい来くとう、

「チラー、餅作たるばすい」。な、餅やらーぬーりー
からん落とうしかんでいーし、あと、うぬカーミぬ
わりさーに作くてい、にーし作くてい、うりまでいん
喰た、鬼どうやぐら、

「いやーや、互餅までい喰とーぐとやー、いやーがー
のーいしえーあらんむん」でいやーに、しく、湯ふき
やきやーによー殺するふーじやんどーやー。

女勘へーさんでいんどー。あんさー、うんにんか
らー、首里ぬホーハイムーチーでいしえー、首里やか
わていたたーさんでい。あれー、鬼やるぐとーん。鬼
殺ちえーる餅えかりーな餅んち。家ぬ後なかいかんし
下ぎーたしえー。まんまーろーふち湯ほーてい。

金城村ぬ内なかいガマぬあんでいさに。

〔共通語訳〕

この金城村をひどく荒らして人を喰うので困って
いた。それで（妹が）行ってみると、

「なんだお前はチラーじやないか。人を喰ったが、今
日はお前が来ているもの、お前を喰って私の糧にしよ
うなあ」というので、

「兄さん、あなたは遅かれ早かれ遠い所に行き、次第
次第に引きこもり、こんなふうになってしまったんだ
ねえ兄さん。さあ、シマに帰ろう」というと、

「シマに帰ると、私のことをねたむ人がいるので帰る
ことができない」といった。

「さあ、お前は一人で行きなさい」と、
「そうなら、縄をかけて行かせなさい」というと、そ



こに犬がいたらしく、犬を閉じ込めようと、すぐ、「チラーお前は犬に化けてしまったのか。その、犬に化けたのはちようどいいことだ。今日殺して喰うぞ」としていた。また、その後から、(チラーは)この鬼と話をしていたら夫は待ちくたびれていてね。夜もふけてきて。

「お前こんな遅くまで畑仕事をしないといけないのか」というと、

「以前のさつま芋を植えようと、それをするために遅くなったんですよアヒゲワ〜」

「そうはいっても明るいうちにやるのであって、さつま芋を植えて遅くなったも私はたいそう心配でたまらなかつたんだよ」

「どうして、どういうつもりですか」といって、

「たとえ、どんなことがあつても私は死んでも一緒だ。

そうじゃなければチンナングルー、たんなぐさのようにひとつだよ。どんなことがあつても見捨てることはしないよ」というと、

「この金城村の出来事は私の兄さんの仕業であるはずですよ」

「なんてことだ、それならお前は、恥すかしくて外を歩けない、歩く事ができない。これは大変なことになつたねえ」と、

「ねえ私に考えがあるがね、(兄さんを)連れて来て、餅を作つてあげて、この餅を食べて瓦の入つた餅まで喰つたら、その時は殺さないといけなからね」。連れて来たら、

「チラー、餅を作つたのか。ねえ、餅ならどから落ちにくそうで、しまいいには、カミミのかけらで作つて、餅に似せて作つた餅、それまで喰つてしまった。鬼だから、

「お前は、瓦餅まで喰つているのでね、お前は元に戻るはずがない」といって、すぐ、湯をかけてね殺したようなんだよ。

女は助がするどいそうだよ。それで、その時から、首里のホーハイムーチーというのは、首里はとくに特別な所であるそうだよ。あれは、鬼であるそうだよ。鬼を殺した餅はカリ〜な餅という。家の後にこのように下げたさあねえ(餅を包んでいた葉を結んで)。(家の)周囲には熱湯を撒いていた。

金城村の中にはガマがあるそうだね。

⑩ 鬼餅由来(瓦)

吉田(鳥袋)タケ(大正七年生)知花

「方言原話」

うれーよ、昔、首里ぬ金城村なかいて「鬼ん子ぬ生まりていよ、あんさーになー、うぬ鬼ん子や男やるばー。うりが、夜出じてい行じえー人喰てーしーしーし、よ。あんさぐどう、な、王様からて「な、くり、殺ふるぐどうし」んでいいやーい、布令出じやさつとーるばー。あんさぐどうな、「うり殺すしえーなー寝美んうほーく取らすんどー。殺しうりしん」でいちさくとうてー。

くれー、また、くぬ鬼よ、でーじなムーチーじよー



ぐーやてーるば。ムチじょーぐやてるばー。あんしざくとう、ウナイ、イキーうたんでいよ。あんざくとう、くぬウナイぬてー、ウナイでいしえー、女兄弟てー、女ぬ、「あんし殺し」でいいやつとーぐとうてー、「人なかい殺しみるゆかー、どうーぬ手し殺すしえーまじやくとう、あんしえーな、私がすん」でいいやーに、よ。あんざーにムーチーうほーく作やーにてー、見晴らしぬい所ぬハンタなかいてー、崖んけー、崖のある所んかい進てい行じやーに、

「アフィーや、アフィー今日やムーチーうほーくしんくでい」。うれい、また、かんやんでい。カーラぬ割り混じりてい煮ちえーるムーチーかもーから、な、くぬ人喰いしえーのーらんでいいち間かさつとーてーるばー。また、本当ぬムーチーんちやー喰でい、くれー残ふるむんやろー、人喰いしえー治いんでいちやたんてい。あんし、二ちしめくてい行じえーるばー。カーラムーチーとう、くぬ本当ぬムーチーとう二ち作くてい持ち行じやーに、

「今日な、ムーチーん作くてい来くとう遊でいくーやアフィー」んでいいやーに連てい行じやーに、あんなさーに、

「早なムーチーんかめー」んでいいやーに、ムーチーかまぢやぐとう、な、カーラムーチーまでいん、ぬーまでいん、バクないむるうちゆ喰たんでいよ。あんなさくとう、なうぬ女兄弟や、てー、

「どーな、いやー、や、な、殺ふあーどうなくとうてー、な、いやーや私手にかかてい極楽しえーわ、

やー」んでいいやーに、よ。な、カーラムーチーまでいうちゆ喰たくとうよ、うりがなー殺ちえーるばーてーな。女ぬな、うし落とうちしえーるはに、ハンタんけー。あんなさーに、な、けー亡しみてーるばーてー。あんなさーにうりが落とうざーにどう、ムーチーや、うぬ鬼退治しえーんでいいやーに、や、鬼殺ちやんでいる祝儀とうし、カリーなムーチーんちよ、ムーチーや、な、師走ぬ、くれーな日や、な沖繩中ちがとーしがてー、カリーなむんでいちよ、うぬ、鬼退治しえーんでいいやーに、あんしるムーチーや始またんでい。

このカーサはよ、十字してねさげるさ。これ魔除け、「鬼な、くまんけー、うりふなよー」んでいる鬼払いぬふーじぬうり飾いるばーどうやさに。鬼ぬ足ゆげーふんち、てー、あんなさーにムーチー煮汁や、門んかいよ、放んでいいやりたさ。

〔共通語訳〕

これはね、昔、首里の金城村にね鬼の子が生まれてね、それでね、その鬼の子は男なんだ。それが、夜になると出て行つては人を喰つたりしていた。そしてら、もう、王様からね「も、こいつは殺しなさい」と布令が出されたわけ。そして、「そいつを殺した者には褒美もたくさんあげる。殺して退治しなさい」ということになった。

これは、また、この鬼はね、たいそう餅が好きだったようだ。餅が好物であったようだ。そうしたもんだ



から、ウナイ、イキー兄弟がいたようだ。そこで、このウナイがね、ウナイというのは女兄弟さ。女兄弟は（王様から）「あいつを殺せ」といわれているからね、「人に殺されるよりは、自分が手をかけて殺すのがいいので、それならば、私がやる」といつてね。そこで、餅をたくさん作ってね、見晴らしのいい所の崖つぶち

に、崖に、崖のある所に連れて行って、
「兄さん、兄さん今日は餅をたくさんこしらえてあるよ」（といつて誘った）。これは、また、こういうことらしい。瓦の割れたものを混ぜて作った餅を食べるのなら、も、この人を喰うのは治らないと聞かされてい

たわけ。また、本当の餅だけ食べて、瓦の入った餅を残したならば、人を喰うのは治ると言われていたようだ。そこで二種類の（餅を）準備して行ったようだ。瓦の入った餅と、この本当の餅の二種類作って持って行って、
「今日は餅も作って来たので、遊んでこようねえ、兄さん」といつて、連れて行って、そして、
「さあ、この餅を食べて下さい」といつて餅を食べさせると、も、瓦の入った餅までも、なんでも、パクパクと全部喰ったようだ。そうしたら、もう、この女兄弟はね、

「これはもう、あなたを殺さないといけないのでね、あなたは私の手にかかるが極楽して下さいね」といつてね。も、瓦の入った餅まで喰ったので、女兄弟が殺しているわけさあ。女が突き落としたいんでしょね、崖へ。そうして、退治したようだね。そうやって、女

兄弟が退治したことから、餅は、その鬼退治をしたということだね、鬼を殺した祝いとして、縁起のいい餅といつて、餅は、これは、師走の、これはムーチの日は沖繩中異なるけど、縁起のいい餅といつて、この鬼退治した餅だといつて、それでムーチは始まったそうだ。

このカーサはよ、十字にしてねさげるさ。これは魔除け、「鬼はここに災いをするなよ」という鬼払いの意味でそれを飾っているんだろね。鬼の足を焼くといつて、それで、餅を炊いた煮汁は門に敷きなさいといつていたよ。

⑩ 鬼餅由来（互）

平マツ（明治三十一年生） 美里

「方言原話」

首里金城にあたんでい。うぬムーチーや、やー、どろくからんうぬ、男鬼なてい。あんざくと、むる人ん子ん殺ちうちゅ喰てーういういし、やー。あんし、いつべー村からやな口さつていよ。あんざくと、うぬ、ウナイぬ、「かんし悪いくとう口聞ちヌーうむこーねーらん」。考てい、また、うぬ、女兄弟ぬムーチー作くてい、ムーチーや作くてい、うぬ鬼んけーや、くいーる考やくと、うぬ鬼うまんけーふあんなぬはたに座しとてい、しぐ、うまん開きてい、

「くまー鬼喰る口。くまームーチー喰むる口」でいちざくとや。あんし、悪い鬼んけー、うぬムーチーや

くいていさくとう、うぬ、ふあんたに座ちよーぐとう、うり、くいやがなー、ふあんたんけーうしけーらち、けー死なちえーたんでいん、でいち。

鬼餅どうーかんでいち、寒さんあしえーや。

〔共通語訳〕

百里金城にあったそうだ。このムーチーはね、ひどいことにその男が鬼なつたもんだから。それで、いつも人や子どもを殺して喰つたりしてね。それで、たいそう、村人に悪口を言われてね。すると、そのウナイが、「このように悪いことばかり聞くのは耐えられない。考えて、また、その女の兄弟がムーチーを作つてね、瓦を割つて、ムーチーを作つて、その鬼にあげる考えだから、その鬼はその崖つぶちに座らしてね、そして、(下の方)を開けてね、

「ここは鬼を喰う口。ここはムーチーを喰う口」と言つた。そして、悪い鬼にそのムーチーをあけて、鬼は崖つぶちに座つているから、ムーチーを食べさせながら、崖下に突き飛ばして死なせたといつていた。

鬼餅の時は寒いといわれ、寒くなるでしょう。

⑫ 鬼餅由来(瓦)

付村文字(大正十年生) センター

村に赤ちゃんが出来たら、女の生まりれー、大男やい、また、男の生まれー大女ちぎーんち、反対やつた。どっち取りよつたかなー。どっちを喰いに来たのかねー、鬼が。

それでね、その餅は石、瓦みたいにサンニン(月桃)に包んでから、鬼にあげたらバリバリバリ食べよつたつて。そしてこれやつぱり、ウナイがとか、これは鬼だからといつてね。本当の鬼ではないけど、人喰いぎてあるわけさ。ウナイが餅を蒸してから岩に連れて行つたからさ、自分の兄弟、これ鬼だから。餅炊いてから、この汁、餅の汁、その熱いお湯、自分の兄弟にぬかけよつたつて。妹が崖に落としてからね、またこの餅の煮汁、熱いお湯、それまた岩からかけよつたつて、死なしたわけさ。それで、あの餅炊く汁はね、屋敷の周囲(にまいて)清めるわけ。鬼が来ないよるに。

⑬ 鬼餅由来(鉄)

平良ハナ(大正八年生) 明道

〔方言原話〕

お兄さんが鬼、鬼と言うより、人を捕まえて喰つていたそうさ、殺して。だから妹が、

「今日やムーチーやくとう、ヤッチーむんだてーん作てーんどー」んでい言やーに。この中に鉄を入れて、この崖の端に座つて、

「ムーチーはこれはヤッチーむんどー。くれー私むんち、

「食べようねー」んち食べて。そして妹が、この下を開けてね見せたそうさ、兄の方に。あんさくとう、

「アハ、アハ」し笑つてね、

「何笑やー」、



「下なかいあしえー」んちやぐどう、
「うれー鬼喰る、鬼喰しやさ」と言つたそうです、ね、
女の下に。あんざくどう、

「アハ、アハ」し笑やーに、その時に崖から落ちて、
妹が殺したという話を聞きました。

ムーチーの時は「鬼ムーチー」と言つて、このムーチーを炊いた汁それをね、このハシルゲンナリーみんなかけているんですよ。ウナー、ウナー足焼んといつて。

〔共通語訳〕

お兄さんが、鬼と言うより、人を捕まえて喰つていたそう、殺して。だから妹が、

「今日は餅の日だから、兄さんのものたくさん作つたよ」つて言つて。餅の中に鉄を入れて、この崖の端に座つて、

「この餅、これは兄さんのもの。これ私のもの」と、

「食べようねえ」と食べて。そして妹が、この下を広げてね見せたそう、兄の方に。すると、

「アハ、アハ」として笑つてね、

「なに笑つているの」

「下にあるのだよ」というので、

「これは鬼喰う、鬼を喰うものさ」と言つたそうです、ね、女の下に。そうして、

「アハ、アハ」して笑つて、その時に崖から落ちて（死んだそう）、妹が殺したという話を聞きました。

ムーチーの時は「鬼ムーチー」と言つて、この餅を

炊いた汁それをね、この家の戸口あたりから全部にかけているんですよ。鬼、鬼の足を焼くといつて。

④ 鬼餅由来（ガラス）

瑞慶寛好子（大正十年生） 城前

〔方言原語〕

ムーチの由来記はよ、男と女と兄弟二人いたつて。で、この男はさ、とつても根性が悪くて鬼になつて山に穴ぐわーに住まつてだつたつて。あんざーに、

「いつたーひやーイキーやうんぐどうーしや、むる鬼なてい山なかい住まていや、人喰いんていどー」でいち、人喰いたんでいどーや。あんざくどう、な、「うれー人喰いるむんなー、うれーなでーじなとーさやー」でいやーに、や。あんざーに、ムーチーぬ日によ、「ぐれーちやーしんなー、うれーな、あんし人喰ちえーならんむんや、じひとりん、うり殺さんあいねーならん」でいやーに、タマぬわりよ、コップぬわりさ、あんなに入れてねムーチー作つて、そして持つて行つてね、

「どーヤツチー、いやーんかめー、私にんムーチーかむさ」でいやーに、や。あんし、うぬムーチーよ、ありが前んかいやタマワリ入ちよーしうちきやーに、どうーぬ前や本当ぬむんうちきてい、

「どー、今日や、や、いやーどう私どうムーチー作くていちえーくどう、かまやーヤツチー」でいやーにや。あんざくどう、あれーな、やーさどうそーぐどう、うっさしく、ムーチーしく、タマワリ入ちよーし

昔一鬼ムーチー 旧の十二月七日に行事が行われる。餅米をひいて形を作つて、それをムーチーガーサ（月餅）の葉に包んで大鍋に蒸して作る。蒸汁は鬼の足を焼くと毒にまぐ。また、餅を食べた後のムーチーガーサの殻を、板合わせで十字架を作り軒下に吊るして魔除とする。

わからん、かまーに、むる、うまー血ダラダラし、よ、死じやんでい。

字ぬ人うぬウナイぬたみなないつべー助かたんでいいやーによ。あんざーに、うぬ日やいいつべー日悪さんでいやーに、ムーチャーぬ由来記んでいやーに、ムーチャー作くういわるやるんでい、十二月八日はムーチャー作つてうさげるわけさ。

うぬムーチャーガーサさーに鬼の足作くやーによ、入り口んかいむる下ぎやーに、よ、うぬ蒸したお湯でよ、お湯お碗に入れて二ーブさーに「鬼は外」して、こんなし、まいた。

ムーチャーヤーグワーといって、字の竹で小さい家ぐわー作つて火つけて「ムーチャーヤーぐわーホーハイ、ホーハイ」して言いながらこれ焼くわけさあ。鬼払いやるばー。青年たちはみんな竹を持ち寄せてね、で、みんなまた、ムーチ食べたこのカーサよ、これみんな持ってきてね火燃やしてからに、「ホーハイ、ホーハイ」してねムーチャーヤー焼きよった。

〔共通語訳〕

ムーチの由来記はよ、男と女と兄弟二人いたつて。で、この男はさ、とつても根性が悪くて鬼になって山の穴に住まっていたそつだ。それで、

「お前の兄さんはあのように鬼になって山に住んで人を喰うそつだよ」と。人を喰っていたそつだよ。すると、もう、「兄さんは人を喰うとは、それは、もう、大変なことになっているねえ」といってね。それで、

ムーチャーの日にね、「これは、どんなことがあつても、あのように人を喰わさせてはいけないからね、なにがなんでも兄さんを殺さないとイケない」と、ガラスの割れたもの、コップの割れたもの、あんなの入れてねムーチャー作つて、そして持つて行つてね、

「ねえ、兄さん、あなたも食べなさい。私も餅を食べるから」といってね。そして、その餅は兄さんの前にはガラスのかけらを入れた餅を置いて、自分の前には本物の餅を置いて、

「さあ、今日はね、兄さんと私とで、餅を作つてきてあるので食べようねえ、兄さん」といってね。すると、兄さんはおなかをすかしているから、喜んですぐガラスのかけらの入つた餅とも知らないで食べて、口あたりはみんな血がしたたり落ちてね、死んだそつだね。

村人たちは、その妹のおかげでたいそう助かつたといつてね。だけど、その日はたいそう日が悪いといつて、餅の由来記といつて、餅作る日十二月八日はムーチャー作つて差し上げるわけさ。

その餅を包んでいる葉っぱで鬼の足を作つて、入り口には全部下げて、その（餅を）蒸したお湯でね、お湯お碗に入れてひしゃくで「鬼は外」といって言いながら撒いた。

ムーチャーヤーグワーといつて、字の竹で小さい家を作つて火つけて「餅の家、ホーハイ、ホーハイ」して言いながらこれ焼くわけさあ。鬼払いの意味だね。青年たちはみんな竹を持ち寄せてね、で、みんな

また、ムーチー食べたこのカーサよ、これみんな持つてきてね火燃やしてからに、「ホーハイ、ホーハイ」してね、ムーチーヤー焼きよつた。

⑮ 鬼餅由来

幸島マツ（明治四十二年生）池原

〔方言原語〕

「あまにかい行ちるむんなー」んち、ちやー追し行じやぐとうよ。鬼んかいたくさんムーチーあぎやーなかい、うぬぬガマンかうぬ鬼ぬ行ちゆとくまにかいて、ちやー追いし行じやぐとう、うぬガマーまーやがやーんちい分からんたんでい、うぬ、ウナイぬ。あとうぬんーじゆみねー追てい行じやぐとうてーうまーガマやたんでいよ。大きいアブシンあたんでい。あんし、「顔をこつちぬ前んかい向んかりよ」でいしえー、うぬ話や、小さい時に、話聞ちよーたしがてー。あんさー、うぬ鬼ぬ追てい行ちやぐとうな、うまんかいうたんり。あんさーに、

「いやー、私が言し聞きよー」んちやぐとう、
「ぬーが、いー聞ちゆさ。いやーが言しえーぬーやていん聞ちゆさ。いやームーチーんたくさんあぎてーぐとう」んちやぐとう。あんさぐとう、恥はてい見したぐとう、な、まつばらし見したぐとう

「アンマヨー」し、な、うれー、しく、くさーんかいうつけーいやーい、うぬままたんでいぬ話や聞ちやしが。うりからぬ後はつきれー分からんばーてー。

あんしる、くぬ師走ぬムーチー、八日ムーチーんり

しえーて、どうーぬぬ屋敷ぬまんまるよー、うぬムーチーぬ汁てし、ウナー足ゆーげーすんち、うちぬ所あるよー。別えちやーがやらーわからんしが。私たムーチー作くいなーちやーあんすんよー。

〔共通語訳〕

（鬼が）「あそこに行くな」と、ずっとあとを追いかけて行つた。鬼にはたくさん餅をあげてから。（すると）その浜の洞窟にその鬼の行くところに追いかけて行く（鬼の住んでいる洞窟は）どこにあるかわからなかつたそうだと、その妹は。しまいは、追いかけて行くと、そこは洞窟であつたそうだと。大きな蛙があつたそうだと。「顔はこつち、前に向いてね」というのは、その話は、小さい時に話を聞いていたんだけどねえ。それで、（鬼を）追いかけて行つたら、そこにいたそうだと。それで、

「お前は、私が言うのを聞きなさい」というと、
「どうして。うん、聞くよ。あなたが言うこと何でも聞くよ。あなたは餅をたくさんくれたからな」と答えた。そこで、恥を覚悟で見せたから、もう、まつ広げで見せたから、

「アンマヨー」といって、その鬼はすぐ後ろにひつくり返り、死んでしまったという話は聞いたけど。それから後はつきりは分からないわけさ。

それで、この師走の餅というのは、（十二）八日ムーチーというのはね、自分の家の屋敷の周りね、その餅を炊いた煮汁さ、それで、鬼の足をヤケドさせるといつ

※「アンマヨー」びつくりした時、驚いた時に思はずする言葉。

て、うちの所はそうするよ。よそのところではどうするかわからないが、私たちが餅を作るときは決まってるよ。

⑩ 鬼餅由来

上根ウサ（明治三十一年生）吉里

「方言原話」

妹お働ち、兄さんの一働かなウワー盗でい喰たい、牛盗でい殺ち喰たいさーに。あんさー、あと一妹が、「ぬーが兄さんの一働かんだる。乱暴なくとうしち、ウワー殺ち盗でい喰たいしち、

「なーがー知らんさ」いやーにしちやくとう。あと一なー、うぬ兄さんの一鬼んかいなやーに、

「はー兄さんの一ふゆーさーなかい鬼んかいなとーやー」んでいやーい。

「いー。私ねー鬼などーさ。餅作くてい持ち来わ。酒ん持ち来わ」いやーなかい。うぬ妹が餅くわー作くやーにや置ちよーちやーい、

「はい、餅作くてーさ。なーうち喰わ」でいやーなかい、うぬ餅投ぎたくとうたつくわやーなかい、なー、海んかいちやー死に、鬼え。

ムンヌクムぬどー餅くわーや。

「共通語訳」

妹は働いて、兄さんは働かないで豚を盗んで喰ったり、牛を盗んで殺して喰ったりしていた。それで、しまいには妹が、

「どうして兄さんは働かないの。乱暴なことをして、豚を殺して盗んで喰ったりして」

「お前にはわからないよ」といつていた。ついに、その兄さんは鬼になって、

「なんてことだ、兄さんは怠け者になって鬼になってしまったねえ」と。

「そうだ。私は鬼になったよ。餅を作って持って来い。酒も持って来い」と（妹に）言つた。その妹が餅を作つて置いて、

「はい、餅を作つたよ。兄さん食べて」といつて餅を投げたら、餅が（足に）くつついて、もう、海に行き

そのまま死んだそうだ、鬼は。魔除けだよ餅は。

⑪ 鬼餅由来

知念栄子（大正三年生）美里

鬼の兄さんと妹の兄弟がいたそうですよ。島尻の金城どつかにいたそうですよ。はつきり覚えていません。そうしたらね、この兄はね、人を喰つたり、動物を喰つたりしよつたそうですよ。それで、その村人たちがね「なんとかして、これは退治しなければいかない」ということで、村で打ち合わせをして、どうにかしようとしている所に、妹が大変悩んで、自分のかしようとしている所に、自分が迷感かけてさせるよりは、自分がやつたほうがいい」ということで、この妹さんが兄の美味しい、大変餅好きだったらしい。お兄ちゃんの好きな餅を作つて、そして、このお兄ちゃんを断崖

の丘ところに連れて行って、そこで、お兄ちゃんとの餅を食べさせてやつたらしい。お兄ちゃんはその前に、妹が尋ねて来たから、(お兄ちゃん)「ゴーにいたそうです。」

「さあ、中の方に入り。おいしいご馳走がたくさんあるから」といってすすめたらしい。その中には、人の人骨とか、いろんなものがあつたとかということ、なにかの本で私は調べて。

そして、連れて行って、外の方で餅を食べさせて、なにしながらこの妹の方がですね、

「お兄ちゃん」って言ったかなあ。そつたら、

「もつと、いいのを見せてあげようか」といって、自分のこの下ね、これを開いて見せたから、お兄ちゃんは見たことなかつたんじゃないかねえ。ビックリしてからに、その崖から落ちてしまつて死んだそうです。それで、「ポーハイムーチー」というそうです。

今、厄払いで「鬼は外、福は内」という豆まきがありますよ。あれの代わりに、沖繩では、この餅を旧の十二月には作つて。百姓の所は十二月八日、また、侍の所とね漁業とかする所とは(ムーチーの日)が違います。

⑩ 鬼餅由来

東静江(明治四十年生) 池原

首里の侍であるけど、夫婦二人とも氣にくわなかつたそうや。氣にくわないのを男の方が悪だくみやつてさ、女と二人散歩しようと言つて、小さい船

に乗つて浜遊びに行ったそうや。海の真中ぐらに行つた頃に、こんなに(船を)ひっくり返して、女の方海に投げ捨てたそうや。

女の方、人が住んでいない国、陸に着いて、やつぱし命はあるさーね。女の方、生き物食べて暮らしてやつていたそうや。女の兄弟が、「あなたの妹の方は人が住んでいない部落に生きていますよ」と話を聞いて、「これは海に捨てたんだの話があるが、あ、そうか」。

で、向こうに住んでいる女は海の魚を取りに来る人みんな寄せて、みんな殺してね自分で食べよつたそうや。で、その話を聞いて恐がつてさ、

「どうしたならいいでしょう」といってみんなで相談やつて。

「これは小さい時は、とつてもお餅が好きであつたんだから、家の方からねムチをたくさん、お餅をたくさんこしらえて、で、それをたくさん腹いっぱいくわせて、たくさん食べさせたなら眠るんだからね、眠る時にそれをすぐ殺してやるよ」といって。

で、その考えで行つて。その女の兄弟の男がさ、そのお餅をこしらえて女に。それも兄弟もまた他人もわからないから、こんなに氣が迷っているんだからこの女の方は、「自分もどうされるか」と兄弟も恐がつているけど、

「私は誰だよ、誰だよ」といってよ自分の名前を言うて、餅をこんな投げてくれてさ。もうだいたいぶやつた。もうだいたいぶお腹は腹一杯やつているといつて、もうこ

※1ポーハイムーチー、ポーハイ(魔部)をさらけ出したことから、一名ポーハイムーチーとも呼ばれことがある。

んなにしてじつとやっていると、「ワツ」といつてすぐ倒して。その女の子、鬼というているわ、それ、やっぱし。それを殺して。

それで、あの餅はやっぱしみんながありがたさで、その十二月の八日はカリリーなウナムーチャーといつて、鬼というものは、何というかわい人間といつて、それいうてそのお餅は「ウナムーチャー」と名付けをやつて。こんな赤十字やつて自分の玄關、今、コンクリーにやつているんだから、これにかけられる所はないんだからやつていないけど、昔はカヤブチャーであつたんだから、こんな赤十字にくびつてさあ、このカリリーなムーチャーといつて、入り口、入り口はみんなそれかけよつた。

⑨ 鬼餅由来

平安名常集(明治四十年生) 園田

〔方言原語〕

師走餅や、鬼くえ餅、ホーハイムーチャーんでい言んよーまた、あぬ餅やどー。

あんどう、イキーぬ鬼なつたどうやー、イキーぬ鬼ぬなたれー、ウナイぬ、「あん餅ありし、しえーるむん、アフィーんかいくいてくーりわるない」んち、あんし、アフィーんかいくいーんち持つち行じやくどう、

「アフィー餅食めーわ」んちやくどう、

「私ねー餅やかねー、いやーがうふあそーするましやるむん」言ちさくどう、うぬウナえー魂抜ぎてい、ん

ちやな〜くれー鬼やさやー」んち。あんさーい、「小便しみていどうらシアフィー」んちやくどう、「いやーや、ふいんぎらに」んでい、

「ふいんぎらんさ」んでい。

あんしうまうてい、帯んはんちハカマン脱じ、あんし、「アフィー前うてーならんどうあまんじ行じ」さーない、小便しーねーびーし、しゆく、な、帯んはんちハカマン脱じえーどう、わらばーやかんさーい、胸口はていちゃーひんぎてー、ちゃーひんぎ。前やはてい。あんすくどう、ホーハイムーチャーんちよーる。うれーてー、師走餅やホーハイムーチャー。鬼喰えー餅んでいん言ん。

うりんやー、アシピンなかい芝居なかいあたしが、なー、うりむるはいしていねーらんくどう、うりん作くやーに、なまぬわらびんちやんかい話し、見していんーでいわるないさーんち、なま作くいんよ。

〔共通語訳〕

師走餅は、鬼を喰う餅。ホーハイムーチャーともいふよまた、あの餅はね。

それというのは、兄さんが鬼になつたのでね、兄さんが鬼になつたら、妹が「餅を作つたので、兄さんにあげにいこう」と、それで兄さんにあげようと持つち行つて、

「兄さん餅をどつぞ」というと、

「私は餅より、お前がおぶつているのがいい」と言うので、その妹はビックリして、「ほんとうに兄さんは

※1 カリリー めでたい、縁起のよいこと。
縁起の良い日に作った餅。

※2 ウナムーチャー 鬼餅の意味。

※3 カヤブチャー 茅で葺いた家。

※4 赤十字 ムーチを煮た後、塩んでいたサンシンの葉を十字型に結んで、魔除けとして軒に吊るし(こ)をいって

ると思われ。

※5 イキー 男兄弟をいう。

※6 アフィー こでは兄のこと。

※7 アシビ 八月遊びともいわれる豊年踊りで、稲の収穫の済んだ旧暦八月十日

前後に催すところが多い。

鬼になつてゐるねえ」と(思った)。そして、「小便させて下さいお兄さん」というと、

「お前は逃げないか」というので、

「逃げないよ」と。

それでそこで帯をはずし下着も脱いで、そして、

「兄さんの前ではできないので、あそこに行つて」と言つて、小便をするまねをしてすぐ、も、帯もはずして下着も脱いでいるので、こどもは、こんなふうにして、胸口をはだけて一目散に逃げた、一目散に。(着物の)前をはだけて。そのようなことからホーハイムーチーと言う。

それは師走餅はホーハイムーチー。鬼を喰う餅という。

この話は、アシビにも芝居にもあったが、そういうこともやらなくなつたのでこの人形を作つて、今の子どもたちに話して、見せてあげようと、今作つてゐるところなんだよ。

② 鬼餅由来

屋敷ヨシエ(明治四十一年生) 大里

兄弟二人おつたそうですよ。その兄さんが鬼であつたから、上の方からこれ始末しないといけないと思つてねしたけど、自分の妹が考へて、

「私が退治しますから」といつてね、ムーチーを、とつてもムーチーを好きであつたからうちの兄さんが、餅を作つて、そうして。

昔、餅を煮たお湯をですぬ、妹が兄さんの足にぶつ

かけて、そして、

「アキサミヨ、アキサミヨ(助けて、助けて)」

して急いでハンタ(崖)に山の上に行つてね、ハンタ(崖)に立ててね、そこに落としたそうです。

だから、その日にね、ムーチーは鬼退治といつて、ムーチー作つたそうです。伝説は。

③ 鬼餅由来へホーハイ

仲茶根初子(大正七年生) 越来

「ホーハイムーチー」と言われよつたから「なんで、こんな言われているか」といつて聞いたからよ。

ムーチー(餅)は作つてからに、ザルみたいにに入れて下に水入れて炊くさあねえ。この炊く水はよ、このムーチーは実は出してから、この水は何かに入れてよ、屋敷の周りに熱い水でこんな(撒いて)やりよつたさあ。

「なんでこんなするか」といつたからよ、

「これはね、鬼の足焼け、鬼の足焼け」つといつてねこんなして周りよつたわけ、屋敷みんな。

「なんで、こんな言うか」といつたからよ、これは、男と女と兄弟二人いたつて。したから、このお母さんは、昔はみんな、こつちにクルークル(黒々)して、ハチチといゆうかねえ、こんなしてつきよつたさあ。今はでないけど、昔は皆、こんなしてあつたさあねえ。

うちのお母さんまでは少しずつはあつた。みんなはなかつたけどよ。男の人がよ、暴力というかねえ、悪い人間さ、も、心が。だからこれが鬼といつて名つ

けられているわけ。

ある日、この男が自分の母親を殺してからに、大きな鍋に入れて炊きよったつて。炊いたから、この妹に「今日は、うちなんかは山からヤマシシ捕ってきて殺して炊いてあるから、あんたも馳走させるからおいで」といって呼びよったつて。したら、このウナイグワは女の人はね、「やさしいねえ、こんな言ったこと一回もないのに、こんなしても、馳走炊いてあるからおいでといつていうのもこれめずらしいさあ」といって、行つたわけ。そして行つたから、一回はも、大きなお碗に入れてからあげたつて。「これも、ほんとにヤマシシだね」と思つてよ、この女の人は。

「おかわりは自分で入れて食べるから、あんた、もう、座つておきなさい」といつたからや、この女の人は、大変珍しがつてよ、また、二回目鍋に入れに行つたつて。したら、もう、この(鍋の中を)カチャーサーカチャーサーして手のハジキが出てきていたつて。「アツサミヨ」(こんなこんなして、この女の子はよ、もう、これからも、ミーグルグル(あたりを見回)してよ、

「私はもトイレ入りにいくから行こうねえ」といつたからよ、

「んーんーん、あんたは逃げて行くからね、すぐは行かさんよ」と言ひよつたつて。「また、これ、もー珍しいねえ」と思つて、

「で、どうするの」といつたから、手にヒモくびつ

てからに、このヒモはまた自分がかまえて、

「じゃ、行つておいで」といつたつて。して、も、トイレに行つたから、この女「どうしてこつちから逃げようかね」と思つて。昔はトイレといつても、豚小屋さあねえ。豚糞つていたから、お家から離れて造つているさあ。そして、これ石にこんなかけてよ、自分の手のくびられたのはずして、くびつて、して逃げていつたわけ。

その二、三日あとは考えてからね、この女の子が「これはもうどうしたら殺しきれるか」といって。も、殺さんと大変さ。自分も殺されるかわらんからね。も、たいへん、たいへん考えてからに。あと、キビ畑よ、キビたくさん植えて、植えてある所、歩き道ぐわ少し半間ぐらひは空けてからによ、キビみんな倒してからに。

「今日はキビ倒したから手伝つてくれ」といってよー呼んだわけ。したら、その男の人は、

「私が言うのも聞くから、あんたが言うのも聞くさあ」と来たつて。来るにもこんなしてキビみんな植えてあるさあねえ。半間ぐらひこんな真つ直ぐして空けてからに、こちらに穴掘つてからに、これ落とすわけさ。

自分は奥の方に足は広げて(座つていた)。だから「ホイ、ハイムーチー」というわけ、その言葉はよ。して、その男の子はあつちから来たから、女の子あれだけ見て、この穴掘つているのわからんわけさ。だから、あつちから来たから、こつち穴さあねえ。キビでこんなしておおつてあるから、こつち来たらずーつと落ちたか



ら「どー、今さあ、殺すのは」と、石をポンない入れてからに。

だから、これは、女の仕事といつて「ホーハイムーチー」といわれているつて、この言葉はよ。

また、このムーチー炊く熱い水屋敷に撒くのはね、私の足を焼くといつて、悪い人はみんな逃げて行くというわけさ。この屋敷には悪い人間は来るなどという意味でね、鬼の足を焼くといつて、みんな、熱い水をポールに入れてから、こんな、こんなしよつたさあ。

② 鬼餅由来

吉里清秀（明治三十八年生 照屋

「方言原語」

大里ぬな、鬼餅おにもちんでいしやしがどー、うれー、私たーシマぬうれーあらんばー。私たーシマぬいーなかいなーウナイヤーんでいちあるばーて、鬼ぬ家おにぬか。うまなかい住まどーしがな、うれー本当ほんとうや、首里金城せうりきんじやう人ひとやてーるばー。あんしやしがどー、うれー私たーシマぬ上うへんかいかい、くぬ岩ぬ間まんかいな入いし、うりうてーるばーて。あんさーにどー、大里うぬ、鬼餅おにもちんでいちよーしがな、本当ほんとうや大里ぬうれーあらん。

あんしやしがどー、今度いまどおうまんかいかい、うぬウナイのウナイやるばーて。姉さんか、ぬーがなやるばーて、ウナイ。うりが、巡めぐていつちさくとうな、くれ、鬼おになてい人ひとんくわいんでいる話わやくとうんちなし、うぬウナイぬ来るばーて。あんさくとう、本当ほんとうやがやーんちなし、うりが、うーらーあいに、鍋なべ開ひきてい

見ちゃんでい。あんさくとうな、人ぬケーナンぬんたつ切りじりし煮ひちかむんでいちそてーるばーて。ハート、くれ、一大事いっさいじなむん。くり、うっかりしーねーならんくとう」でいな、さーに、うぬウナイやる、

「私わんねーフルいーぶさくとう」でいち、便所べんじやう家いえんねーんくとう、山小ぬみーんかいかいやるばーて。あんし、いちさくとうな、

「どーあんしヌー」んでいやーに、また細こさーにケーナくんちどー、

「あんすらー行いくわーんち。うぬウナイやー山小ぬ中なかんかいかい入いち行いじやーによ、木ぐわぬジタジタし、な、うりとうめーやーに、うぬ細こけーくんちよーるばーて。あんさーに、うぬウナイやどー、ウーがやー、うーらんがやーんち、ちゃーうり引ひちやーしーしがな。うり木ぐわーなかくんたつとーぐとう、あまぬ引ひちやーね、ちゃー、はにやるばーて。うんぐとうさくとうな、ウナイや、くれー魂たまぬぎやーに「いちでーじ」んでいやーに、逃にぎていはちよーるばーて。

あんすくとう、なまー西原さいげんぬ村むらなかいどー、マテイガーんでいる所ところぬあんよ。マテイガー、大里公園おほさとこうえんの中なかやら。マテイガーな、うま、行いじ、「ぬーんちマテイガーんでいちーちちよーんが」でいれーな、うままでい追おていちゃーに、

「待まちて、待まちて」しあびとーるばーて。あんさくとうな、あんしん、な、ウナイや聞きかりーやすしがな、

※1大里 沖縄本島南部島尻郡の中北部に位置。沖縄では数少ない海に面しない村の一つ。

※2西原金鐘 那覇市の字。字の通称は、開投しあう二つの字名。

※3マテイガー 西原町子夜衛にある拝井泉。



ちやー逃じーやるばーて。あんざーにあまぐいーから降り、今ぬ嶺井安ぬめくがたぐわーやしなが、んまの坂から降りてい逃んじてい行ちゅんでいしーねーな、んままれー来るばーて、うぬウナーや。やしがな、追ていんかからんくとうな、うまんじえー、

「行けー、行けー」し、あびとーるばーて。あんざー、うまんかいやイチヂ坂んでい今いちよんでい。

あんざーにどー、うれーから、この私たーシマーうとーて、ムーチーぬ場合ねどー、家ぐわー作くてい、ぬーんくういん集みていて、家ぐわー作くやー、こうぬ首里金城ぬウナーやよー、ホーハイ」でい、火ちきてい焼ちあぎーしえー、今残とーんよ。うぬウナーやホーファイんでいちな、くぬ火ちぎやーに火事起ちよるばーて。私たーシマンじえーわらばーたー、ぬーんくうい持ち集ていっち、家ぐわー作くやーに。

ホーハイや、一般ねーこの火事ぬ出じーねー、この言葉使とーしえーな。

〔共通語訳〕

大里のね、鬼餅というのはだね、それは、私たちのシマの出来事ではないんだ。私たちのシマの上にウナーやーというのがあったんだ、鬼の家。そこに（鬼が）住んでいるが、それは本当は、首里金城の人であったわけ。そうなんだけど、その人は私たちのシマの上（にある）、その岩の間に入ってその人は暮らしていたわけさ。それで、大里の鬼餅といっているんだが、

本当は大里の話ではない。

そうなんだが、今度、そこにその鬼の女兄弟なんだが。姉さんになるのか、なにかになつてはいるはず、女兄弟。その兄弟が立ち寄つてみたら、「これは、鬼になつて人も喰う」という話だからといって、その女兄弟が来ているわけさ。それで、「本当だろうか」と思つて、鬼がいない間に鍋を開けて見たら。そしたら、人の腕などが切り刻まれて煮て食べようとしていたんだらうねえ。「なんてことだ、これは一大事なことだ。これは油断したらいけない」と思つてね、そして、この女兄弟はね、

「私は用を足したい」と、ちゃんとした便所がないので、山の中に行くわけさあ。そう言つたら、

「それならば」といつて、また縄で腕を結んで、

「さあ、行つてこい」と。その女兄弟は山の中に入つて行つてね、木がビタビタとしまつていっているのを探して、腕に結ばれている縄を木に結んだわけさあ。すると、その鬼はだね、「もういいか、まだか」と、しよつちゆうその縄を引っぱつたりしているわけね。その縄は木に結ばれているから、鬼が引くと、常に手ごたえはあるわけだね。そうするので、女兄弟はびつくりして、「大変なことだ」と思つて逃げて行つていっているわけさ。

それで、今、西原の村にね、マティガーと呼ばれている所があるよ。マティガー、大里公園の中になつていのかねえ。マティガーね、そこに行つて、「なんでマティガーと言われているのか」といたらね、そこまで（鬼が女兄弟を）追いかけてきて、

※1 嶺井安ぬ 未詳。嶺井は、大里村の字。村北部に立地する農村集落。
※2 イチヂ坂 未詳。大里村の公園の中にあるのか。

ない」と思つて。自分の兄をとつても崖のところまで追いつめていつて、もう、

「おいしい餅作つて来ているから食べなさい」つて言つてしたら、妹はこちらから、兄はもう崖においやつて、で、こう下の方は何も着けないで、女は生理ありますよ。生理あるときにこうあれしているから、この男はこれ見たことなかつたかもしれませぬ。で、最初はこう餅をうんと食べて見せて、また兄の方には、カニ(鉄)とか石とかの餅をして、あれ、妹の方はもうとつても食べるんだから、「あんな堅いもんあんなに食べるね」つて珍しがつて、目を白黒さしている時に、

「お前のこの下のあれは何か」つて言つたら
「下の方は鬼を喰う口。上の方は餅を喰う口」つて言つたら、

「へえ」つてびつくりしてからに、こう後ずさりして、こう、妹見ながら後ずさりしていつて、こう崖に落ちて死んだそうですよ。これでこの兄は、妹が退治した事になつたんですつて。

鬼餅の由来は、これはよく年寄りも話しよつたですけども本にも載つていました。

② 鬼とアーサ

豊田喜進(明治三十四年生) 山内

この人な、(鬼に)化けたものがおつたので、それはもう、こんなにしてはいかないということで、兄弟のほうに『それをどうしてしめるかな、どうして殺

すかなあ』といつて、非常にもう苦心して、苦心しておつて。『それを離しておけば子どもを取つて食べて、非常に悪質なものであるから』と思つて、その兄弟のほうに、『どうしたらこれを始末するかなあ』と思つておつたようすが。

アーサというものがあつた、アーサ、かいじん草だな。かいじん草集めてそれを干して、干して、また干して、また干してもう、それが、非常に多くなつたのが小さくなるまで干してやつて、それをまた立派に料理して、その鬼の方の人にこう食べさせた。食べさせたら、それはおいしくて食べてしまつたら、腹が大きくなつて、

「腹が切れるよ、腹が切れるよ」して泣いて、その腹が大きくなつて切れるようになって、そうして、死んだという。して、それをおさめたという話。それ(兄弟)がもう、おさめて亡くなつたから、その喜びの餅に「鬼餅」といつて、力餅を作つてそれにあげるといふ話ですがね。そういうことを聞いたがね。それも本当であるか、それは各部落で聞いてみらんとそれはわからんすな、力餅。

(2) クスケー由来

① クスケー由来

上根ウサ(明治三十一年生) 宮里

「方言原話」
四十なていから男ん子もーきやーに、うぬお父や

※1アーサ 沖縄近海でとれる海藻で、通称、乾燥したものをいう。

※2鬼餅 ムーチー・師走ムーチー・ウニムチー・ムーチー・折目なども呼ぶ。

沖縄諸島の旧暦十二月八日の折目。

※3力餅 大きな葉(クバの葉)で包んだ特大な餅。

うっささーに、ウフミチんかい出じやーに、「今日や清らかーぎー女から連ていちゃーい出産お祝いしわらない」んでいちしちやぐと。

シモーガーターガーターする、隣ぬユタお母が、「ぬーやがやーうぬ家」でいち来に見ちやぐと、

「えー、えー、あまーうーしえー人えー幽霊どうやんどーやー」んちやぐと、

「えー、あんどやいびんなー。うり、ちゃーしえーやらすがやー」んでい、「な、祝儀終わていからやしわらない」んでい。あんさー祝儀えー終わたぐとやー、

「今日やとー有難うやくと、なー来る所んかい行きよー」んでいちさくと。あんさー、はにぐわー持ち後追いさーに。また、うぬ女後生んかい行じ、

「な、私ねー今どう来びーしえーえー、墓開きみそーり」でいちやぐと、

「いやーや時間のーねーらならんざ、戻れー」んちやぐと、

「出産祝いなかい頼まつてい、私ねー今どう来る」

「あー、あーならんざ、帰れー」んちやぐと、

「あんしえーうぬ赤ん防私が連てい来ねー入りやびんなー」

「はーつ。赤ん防いやーがー連うーさん」

「鼻ひらさーに連てい来ん」

「いやーやふりむにーし。いやーがー鼻ひらしーねー、あまぬ、生ちみーや頭まんていクスケーんでーやー、いやーそーふーじ。」「はーつ、でーじなとーむん」でい

お父やさーなかい、なちそーでーしぐぬわらばー鼻、なー、うんねー鼻ひちやぐと、皆さー「クスケー」んちやぐと、ぬーぐわーつたんでい。

〔共通語訳〕

四十歳になつてから男の子ができたので、そのお父さんは喜んで、賑やかな通りに出て、「今日はきれいな女性から連れて来て出産お祝いをしよう」と準備した。

〔台所でガタ、ガタ（音が）するので、隣のユタのお母さんが、「なんの音がねえ、この家でするのは」と行つて見たら、

「ねえ、ねえ、あそこにいる人は幽霊なんだよ」といふと、

「ああ、そうなんです。その幽霊をどうやって追い払いましようかねえ」と（思い）『も、お祝いが終つてから追い払おう』と考えた。そしてお祝いが終わったのでね、

「今日はね有難うございました。さあ、もとの場所へ帰るなさいね」といったそう。そして、（その幽霊が帰る後を）羽を持つて後を追いかけた。すると、その女は後生（の人が葬られている墓へ）行つて、

「ね、私は今戻ってきましたので、墓を開けて下さい」と言ふと、

「お前は時間もわからないのか、墓を開けることはできない戻れ」と言われたので、

「出産祝いに頼まれて、私は今帰ってきました」

「あー、あー出来ない、戻れ」というので、

「それならあの赤ん坊を、私が連れて来たら入れてくれますか」

「はーっ。赤ん坊はお前には連れてこれない」

「クシヤミをさせて連れてきます」

「お前はバカげたことを言うな。お前がクシヤミをさせても、あそこ人間は賢いので、クスケーといつたら（命を）とることはできないよ。」はーっ、大変なことになった」（そのやりとりを聞いた）お父さんは飛んで帰って、泣いている子どもを鼻を（つまもろうとしたら）、すぐ、その時にクシヤミが出たので、皆で「クスケー」といったので、子どもの命は取られずすんだと。

② クスケー由来

照屋唯兵衛（明治四十年生） 團田

〔方言原話〕

自分の奥さんが子どもができて、それで、これが酒買って来るときに夜なつていたんでしよう。親しいジュリグワーがいたらしんだよね。それで、そのジュリグワーの墓が道の側だつたらしいんだよ。

「元氣やてーやさー、元氣やてやさー」て、もー、ほんとに、生き姿になつて出ましてね。あんさんに、

「嬢子ぬ生まりやーに、私ぬ酒買いがどう行じやんどー」ちゅつてね。これ場所は分からんよ私は。それで話したらね、

「あんやんなー、あんしえーおめでどう。でいかにあんしえーまじゅーん、私にん祝義さー」んち、男元のジュリグワーと思つているからね、喜んで連れて行つたらしいんだ。それで一週間、昔の人はみんなが集まつて遊びよつたからねー、お産したら。

その、何目目は分からないが、それで、そこで一緒に遊んでね、明け方になつたからね、

「なーやがてい夜ん明きーん。ケツケレーグワーぬ歌れーからー帰らんくどう、私ねーなー帰らーいー」んち、挨拶もして出たらしいんだ。ほんとの人になつて来ていたつて。それでこれは、ケイタイグワーでいーねー、鳥の鳴ちねー行からんしがりしえー珍らしいむん」でいやーに、後を追つて行つたらしいんだよ。後追つて行つたらね、墓に行きよつたらしいんだ。

「いやーやミーサぬんじとーていまーかい行じやが」。墓の中では、大きな声で怒鳴られていたらしい。あんさーに、

「かんかんしー、元ぬ御客ぬ嬢子もーきてーんでいいち祝義るしちやる」んちやくどうや、

「あんしえー合点ならん。うぬわらばー取てい來」んち、それを聞いたらしい。そうしたらねー、この幽霊なつていた女が、

「あそこはみんながね、赤ちゃんを囲んでいるのに、どんなにして取りますかー」ちゅつて聞いたらしい。

「あれが鼻ひーに、うんにんに取てい來」ちゅつて聞いたらしいんだよ。あんし、くぬジュリグワーぬるむる習ちえーるふーじろー、その男に。

※ジュリグワー 那須の遊郭の女性遊女のことを「ジュリ」と呼ぶ。三編・歌を習得していた。



「あんしむしやー、クスクエー¹んでいねーちやーさびーが。ちーけーされー取らりーびらんしが」んち。
 「生ちみのうりまれー分からんぐと、早く出じ取ていくー。そういふうにして、また帰さらたらしいんだよー墓から。そうしたらもー、話は聞いているでしょう。それ聞いたから男はもー、走りだしてきて、みんなで囲んでね。するうちに、やつぱりクサミが出たらしいんだ。」

「クスクエー」つちつて、大きな声でみんなしたから、それで取れなかつたつちゅう話がある。

それで、それから、この辺ではクスクエーと言う。

〔共通語訳〕

自分の奥さんに子どもができて、それで、夫が酒買つて帰る時には夜になっていたんでしよう。(以前に) 親しいジュリグワーがいたらしいが(死んだらしく)、そのジュリグワーの墓が道の側にあつたそうなんだ。(そのジュリと会つたので、)

「元氣だつたんだねー、元氣だつたんだねえ」と、もうほんとの生き姿になつて出ているのでね。そこで、

「嫡子が生まれて、私は酒を買いに行つて来たんだよ」といふてね。これ場所は分からんよ私は。それで、そんなやり取りをしたら、

「ああ、そうですね。それはおめでどう。さあ、それなら、一緒に私も祝いましよう」と。男は元のジュリグワーと思つているからね、喜んで連れて行つたらしいんだ。それで、一週間、昔の人はみんなが集まつて

祝つていたからね、お産したら。

その、何日目かは分からないが、それで、そこで一緒に遊んでね、明け方になつたからね、

「もう、やがて夜が明ける。鶏の鳴き声したら帰れないので、私は帰りましょうねえ」と、挨拶もして出たらしいんだ。ほんとうの人になつて来ていた。それで、「これは、鶏が鳴いたら帰れないというのは不思議なことだ」と、後を追つて行つたらしいんだよ。後を追つて行つたら墓に行きよつたらしいんだ。

「お前は死んで間もないのにどこに行つたのか」墓の中では、大きな声で怒鳴られていたらしい。すると、

「これこれ、しかしかで、生きていた時のお客さんが、長男を授かつたということ祝いをしてきたんです」と言つたら、

「それは承知できない。その子どもの命を取つて来い」と。(男は) それを聞いたらしい。そうしたらねえ、この幽霊なつていた女が、

「あそこはみんながね赤ちゃんを囲んでいるのにどんなにして取りますか」と言つて聞いたらしい。

「子どもがクシャミする時に、その時に取つて来い」というやり取りを聞いたらしんだよ。それ(厄を払う方法は)は、そのジュリグワーがすべて教えたことなんだよ、その男に。

「それで、もし、クスクエーといつたらどうしますか。言い返されたら命を取る事ができませんが」

「この世の人はそれまでは分からないから、早く行って取つて来なさい」という風にして墓から返されたら

※クスクエー クシャミをするときに言う言葉で、「異喰え」という意味の言葉が魔物を追い払う力を持っているといふ。

しんだよ。そうしたらもう、話は聞いていなくてしょう。それ聞いたから男はもう、走りだしてきて、みんなで囲んでね、するうちにあの、やつぱり、クシヤミが出たらしいんだよ。

「クスケー」と大きな声でみんながいつたので、子どもの命は取られずにすんだという話がある。

それで、それからこの辺ではクスケーと言う。

③ クスケー由来

喜屋武英正(明治三十年志) 久保田

〔方言原話〕

取^といでいるばーてー、赤ちゃんが生まるとーしが。生まるとるば、うぬ子^こ取^といでいねー殺^{ころ}するはーどうやんどー。

「あり、いやー取^といんけーちやーすが」んちやぐと、
「あんし、あまー鼻^{はな}ひらしーねー、クスケーんていし
が、いやーちやーさが」んちやぐと。あんざー
に、あんしどう「クスケー」んてい言^いゆんでい。「ク
スケー」んでいーねーヤナムのーはいんでいいやー
に。鼻^{はな}ふいーねー「クスケー」んでいしえーやー。う
れー「クスケー」やあびーしえー。あんざーに、
「いやー糞^{くそ}くわていけー」んでいし。

うぬ、赤ちゃん生まるとくとう、

「今日^{けふ}生まるとーる子^こ、私^{わたし}取^とゆん」でいちざくとう
て、

「あんし、いやーが取^といるいけのー、ちやーし取^といが」
でいちやぐと、

「鼻^{はな}ひらし取^といん」

「相手^{あいて}スクスケーんでいーねー、いやーちやーすが」
あんざーに、あん言^いよーんでいヤナムのー教^{おし}ちえーる
「クスケー」んでい。

「生^うりとーるわらばーや、私^{わたし}取^とていちゆーん」んでい
言^いたんでい。

「あんしえー、ちやー取^といる」

「鼻^{はな}ひらし」

「鼻^{はな}ひいねー、クスケーんでい言^いねー」言^いち。あんざー
に、ヤナムぬ教^{おし}じどうやんどー。鼻^{はな}ひいねー「クス
ケー」んでい言^いねー、ケーシやるぐとーん。

〔共通語訳〕

(命^{いのち}を) 取るといふんだね、赤ちゃんが生まれてい
るが。生まれていふその子(の魂^{たま})を取るといふのは
殺すといふことなんだよ。

「ねえ、お前はどやうやって命を取るんだ」といつて、
「それで、むこうがクシヤミをして、クスケーといつ
たらお前はどやうしたか」と聞いた。それで、あのよう
に「クスケー」と言うらしい。「クスケー」というと
魔物^{まぶつ}は逃^にげていくといつて、クシヤミしたら「クス
ケー」といふでしょう。その時に「クスケー」とい
ふでしょう。それで、

「お前クソ喰^くつて行^いけ」といふもの。

その、赤ちゃんが生まれたので、

「今日^{けふ}生まれた子どもの命^{いのち}を私^{わたし}がとつてやる」とい
ふので、



「それを、お前が取るといふ命は、どうやって取るつもりか」と聞くと、

「クシャミさせて取る」

「相手がクスケーと言ったら、お前どうするつもりか」それで、クシャミをしたら「クスケー」と言えはいいと魔物が教えた言葉らしい。

「生れた子どもの命を私が取ってやる」と言っていたぞうだ。

「それは、どうやって取るのか」

「クシャミさせて」

「クシャミして、クスケーといわれたら」と言う。

そのこと（返しの言葉）は、魔物が教えたことなんだよ。クシャミしたら「クスケー」と言うと、返しになるぞうだ。

④ クスケー由来

吉村ヨシ（明治四十年生） 山内

〔方言原語〕

うぬ男ぬいっべージュリぬ家通とーたんでいしが。妻え子産ちやくと、くぬ、くぬっ子取らーんあいなーならんさー」でいやーい、な、幽霊、幽霊ぬめーなどーてるやー。あんさーい、うまんかい来くと、うぬ男あなーうり聞ちえーんてー。

「なー一回うりがクシャミしーねー、一回、三回すいに誰がでもクスタックエーんでい言やんあれーな、うぬっ子ぬぬえ取とーるしじやんどー」んでい言ちやくとや、墓めて、里主え行じやーいあにいゆ

しえー話聞ちやくとや、

「すぐ皆兄弟集まりよー」さーなかい、

「うりが、うぬっ子ぬ鼻ひーねー、すぐクスタックエーんでい言いよーやー」んでい言やーに、皆全部、

「クスタックエー、クスタックエー」さくとうて、命え取いさんぐとうたーちゃんんでい、うぬマジムのー。

そうしたら、

「これが鼻ひつたら、誰もクスタックエーと言つてなかつたら、すぐこれはもう、俺、俺だちのもの」これ聞いたから、すぐ戻つてきて皆に、

「集まれ、集まりよー」して、親類集めて、

「これがクシャミしたら、皆クスタックエーと言つてよー」でいち。な、二、三日、毎日こうしたから命は取りえなかつた。

〔共通語訳〕

その男はよくジュリの家に通つていたというが。妻が子どもを産んだから、「この、この子の命を取らないといけないさ」といつて、も、幽霊、幽霊になつていたんだらうねえ（そのジュリは）。それで、そこに来ると、その男は幽霊の話聞いたんだらうねえ。

「もう一回子どもがクシャミしたら、一回、三回する間に誰でもいいからクスタックエーといわなければ、その子どもの命を取つたことになるからな」と言つたのでね、墓のところに行つて里主はそういう話を聞いたのでね、

単一クスタックエークシャミをするときに言う言葉で、「異喰え」という意味の言葉が魔物を追い払う力を持っているという。



「急いで、皆、兄弟集まりなさい」と声をかけて、

「この子が、この子どもがクシャミしたら、すぐクスタックエーといいなさいね」といつて、みんな、全員で、

「クスタックエー、クスタックエー」と言つたら、命は取ることができずに消えたそうだと、そのマジムンは。

そしたら、

「子どもがクシャミして、誰もクスタックエーと言つてなかつたら、すぐこれはもう、俺、俺だちのもの」と（話しているのを）聞いたから、すぐ、（家に）戻つて皆に、

「集まつて、集まつて下さい」と、親類集めて、

「これがクシャミしたら、皆クスタックエーと言つてよ」とお願いした。もー、二、三日、毎日こうしたから命は取られなくてすんだ。

⑤ クスケー由来

仲系根カメ（明治四十二年生）登川

〔方言原話〕

浦添ユドウリんでいる所うてい、女ぬ道中雨ぬ降たくとう、墓ぬ雨垂いうてい晴らふんでいさくとうとー、うぬ墓ぬ中うとーていよー、

「まーんでいがらーぬ子生まりとーくとうとー、あぬ家んじうぬ子取ていくー」んでい言いちきてーるふーじ、うまぬ中うとーてい。

「あんし取いが行きやいんじんてー、ちゃーし取いが」

んでいちよーるばー。あんさくとう、

「鼻ひらち取り」でいちよーるばー。

「うぬわらばー、生まりてーるわらばー鼻ひらち取れー」でいちやくとうとー、

「あんせー鼻ひーねー、うつたーがてークスタックエーんでい言ねーやー、私ねー取てーきーさんどーやー」んでい言いたんでいやーに、よー、あんさーにうぬ女すく出じてい行じやーに、うぬ家んけー行じやーに、

「うりが鼻ひーるばーんじえーとー、すぐ、クスタックエーんでいりよーやー。あんしーねーとーヤナムのー婦ていはやーに、くぬ子命生ちゆーひが。いつたーがうり忘ねーくぬ子命ねーんどやー」んでい言たんでいちからどう「クスタックエー」んでいちよーんでいぬ話やいびーたんどー。

〔共通語訳〕

浦添ゆうどれつていう所で、女が道中雨が降つたので、墓の軒下で雨を晴らそうと雨宿りをしていたら、その墓の中から、

「どこそで子どもが生まれているから、その家に行き子どもの命を取つてきなさい」と言いつけている様子、墓の中でのやりとりだが。

「そんなふうな（子どもの命を）取りに行けと言われども、どんなにして取るのか」と言っているわけよ。すると、

「クシャミをさせて取りなさい」と言っているわけ。

「その子ども、生まれた子どもにクシャミをさせて取

※1 浦添ユドウリ 浦添ようどれは英祖王（二六〇―二九九）と尚寧王（二五九―一六二〇）の墳墓で浦添城跡の北がわの崖の中腹にある。

※2 雨垂い 後生の雨垂れといつて、新後生の場合は墓の前に茅で屋根をふいた。

りなさい」と言つたらね、

「それでクシャミをさせて、そこにいる人たちがクスタツケーつて言つたら、私は取つて来れないよ」と言つて、その女はすぐ出て行つて、その(子どもの生まれた)家に行つて、

「子どもがクシャミをしたらね、すぐクスタツケーつて言つて下さいね。そうしたら、魔物は帰っていき、この子の命は助かるから。あんた達がこのことを忘れると、この子の命はないよ」と言つていたことから、それから(クシャミしたら)「クスタツケー」と言うようになったという話でしたよ。

⑥ クステキ由來

島袋次郎(明治三十四年生) 知花

〔方言原話〕

ある人が憎い人であつたでしょう、その人の魂取いでいぢ。

「あ、ちやうしいやうぬ人ぬ魂取いでい」

「鼻ひらち取いでい。あい、クサミすしえーや、あんざくとうや、

「クスクエーヒヤー」んでいぢ、うり言ひ戻ちえーるば。あんしる「クスクエー」んでい。後生ぬ人ぬやたんでい。「クスクエー」んでい。

「クシャミしめてい私ね、ありが魂取いでい」でいぢやぐとうや、後生入ちよる人ぬ。あんざくとう、生ちよる人ぬ、ゆーさね、池城親方、テラシシカマガチでいらりる人ぬやてーさに、うぬ人ん

けい、

「あんそーぬむの、私んうりそーくとう、あり私取りわるやる」んでい、

「えー、いやーあり魂ちやうし取いでい」

「鼻ひらち取いでい」でい言ちやぐとうや、んじ、鼻ひらちやぐとうや「クスクエーヒヤー」んでい言ひ戻さつてい。あんしる、うぬ人ぬ魂取いでいさんなんでい。

〔共通語訳〕

ある人が憎(んでいる)人であつたでしょう、その人の魂を取るといつて。

「あ、どのようにしてねあなたはその人の魂を取るか」「クシャミをさせて取る」と。そして、クシャミしたら、

そしたら、

「クスクエーヒヤー」とかえしたようだね。それで(クシャミをしたら)「クスクエー」という。後生の人(魂を取ろうとしていた)そうだ。「クスクエー」といつて(かえした)ようだ。

「クシャミさせて私はあの人の魂は取る」といつたからね、後生の人(が)すると、生きている人が、もしかしら、池城親方、テラシシカマガチという方がたんでい、

「こいつは、私をこらしめているから、あいつの魂を私が取つてやろう」と、

「えー、おまえあいつの魂をどうやって取るのか」と。「クシャミさせて取る」と言つてから、クシャミさせ

※1 池城親方 湖濱、尚元代の三司官、三司官時代に池城親方と稱していた。
 ※2 テーラシシカマガチ 生き身半女、死に身半分といわれ、後生に任憑できる人物。

たらね「クスケーヒヤ」と言い返された。それで、その人の魂は取ることができなかつたそうだ。

⑦ クスケー由来

仲里マスイ（明治二十五年生）池原

〔方言原語〕

「産まりーんてい言くとうや、取ていくーやーんてい」やてーるばてー。ちよーどう私ねー本妻、いーやーやーふーふーいーやるばてー。

「私が産ふるつ子、うぬユーべーぬ取てい來やー。あれ子産ふんでいくとう、取ていくーやー」んでいいちしえーくとう。あんさーに、うり取いが来るばー。子ぬ生まりたくとう、あんし取いが来るなばんけーやてーくとう、鼻ひつちやくとう、「クスケー」んでいいちやくとうや、取いふあんたんでい。うぬ話どうやんでいたんど。あんしる鼻ひーねー「クスケー、メーウチユクエー」でいしえーや。鼻ひつちやくとう、ちよーどううぬユーべーぬ本妻ぬ子取いんでいしえーくとう、あんやちさんていぬうぬ話やあたんど。

〔共通語訳〕

「（子どもが）産まれるそうだから、（その子どもの魂を）取つてこようねえ」ということだつたわけね。いわば、私は本妻だとすれば、あなたはめかけの立場であるわけね。

「私が産んだ子の（魂を）、そのめかけが取つてこようねえ。本妻が子どもを生むというから（子どもの魂

を）、取つてこようねえ」ということであつた。それで、（子どもの命を）取りに來ているわけ。子どもが産まれたので（魂を）取りにきている最中に、（子どもが）クシヤミをしたので、「クスケー」といつたらね、取ることができなかつたそうだ。そんな話があつたそうだよ。それで、クシヤミをすると「クスケー、メーウチユクエー」というでしょう。クシヤミしたら、まさにそのめかけが本妻の子の命を取ろうとしていたが、「クスケー」といつてかえしたという話があつたよ。

⑧ クスケー由来（幽霊問答）

新城キヨ（大正元年生）美里

昔はね、子どもが生まれたらね、男が生まれたら「うふ女（大女）」つていうし、女が生まれたらね、「うふ男（大男）」つて言ひよつたわけ。それは、女のクエーブーと男のクエーブーがあるから、それを別にして言うらしいつていう話聞いたけど。

ある所にね赤ちゃんが生まれたわけ。そしたらね、その産んだ人の友達が遊びに來て、夜は御祝するさあねえ、酒ぐわー飲んで。この人はね後生人じやないかねえ。遅くなつて帰つて來て、このお墓の門口開まつていたわけさあねえ。で、

「開けてくれ」といつたらや、

「ぬーんち、なまでいーな、まーから歩ち歩ちゆが（どうしてこんな遅くまで、どこをほつつき歩いていのか）。叱られたわけ。そしたからや、

「うふ女 沖繩の伝説に、新橋使いの黒僧黒金主が退治された後、王子の家の中に「尊」なつて現れた。王子に男の子が生まれると早死にしたことから、その祟りを避けるために、男の子が出來たら「うふ女ぬ生りとーん」と、誕生した子どもの性を反対にいうようになつた。

※クエーブー 食べ物にありつく魂

「友達がぼーじやーすーじー（子どもの祝い）だから、今までなかったから開けて入れてくれ」って言われたから、中の人がね、中の死んだ人が、

「あんしえーうぬわらびぬや、魂取^{たま}ていちーねーや入りんどー（それなら、その子どもの魂を取ってきたら入れてあげるよ）」でい言われたわけ。で、この人は墓のウコ（糠香）焚くところがあるさあ、こんなにして。ここにひつちやきいしてね座っていたら、

その人はや、話すのを聞いたわけ。一人は死に者^{しにもの}で、一人は生き者^{いきもの}だったわけさ。それを聞いたわけよね。

「あ、これ、その子ども取りに行くというから、これ大変だ」と思って、飛んで行ってね、それで知らしたわけ。子どもの生まれてもう、そこ（の家）に。それだからね、もし、この赤ちゃんがね、「ハックション」んするさあ。鼻ふいーんでいしえーや（クシヤミするとうでしよう）。これに「クスクエーヒヤー」っていうさあねえ。それをね、みんなで「そろえて」「そろえて」「そろえて」とこの友達が帰ってきて、走って来て言うたらね、そしたら、やつぱり、この取りに来たわけさあ、魂取りにね。そしたら、赤ちゃんがクシヤミしよつたつて。そしたら、皆そろつていて話聞かしてあるから、「クスタックエーヒヤー」といつたからね、そのままで、何もなかったそらだつてね、そんな話を聞きました。

それで今でもね、クシヤミしたら「クスクエーヒヤー」というさあねえ。その由来^{ゆらい}だつてという話聞いてみた。

学校で話聞いたわけよ。幽霊の話からね、幽霊が来ていたのに、その幽霊がそこに座っているの、同じ人間がー見えないさあねえ。見ている人の袖からこうして見たらや、左の袖とか見たらね、よその人がも見えよつたつて。そんな話、年寄りからある時、聞きました。

お祝いといつてもね、昔は遅くまでもね、ユートウジといつてね、子なさー（産婦）慰さめて、ユートウジして喜んでね。そこへ、この幽霊が来ていたわけですよ。それで、遅くまで遊んで帰って行つたら、

「今時分までどこほつつき歩いたかー」つて叱られたら。で、帰つたらね、ある人がまた、雨降つたもんだから墓のこんな所に座つてね、座つていたら、この人が見えないわけさあ。で、話は聞こえたんじゃないかねえ。叱られたから、

「どーあんしえーな、うぬわらびぬ命取^{たま}ていちーねーや、入りんどー（ねえ、それなら、この子どもの命を取ってきたら入れてあげるよ）」と言われたから、この人もう、急いで逃げて来て。話を聞こえたから、急いで来て、「こんなこんなだから、子どもが鼻ひーねー（クシヤミしたら）クスヒヤー、クスタックエーつて、皆、口すりーてい言りよー（口をそろえて言いなさいね）」いうてね、そんな話。

それで、今でもね「クスタックエー」つて言うらしんですよ。

※ユートウジ 誕生間もない赤子は、悪霊に魂を奪われやすいと信じられており、悪霊から赤子の魂を守るために、子どもが生まれると産室に火をたき、節晩親戚の女性たちが番をした。

⑨ クスケー由來

仲宗根盛隆（明治四十三年生）豊川

あれは首里の話だよ。首里池城（いけしろ）といつてね。池城殿内（いけしろのうちに）といへば、昔は池城というマジムンンジャーがあつたよ。

あの人（池城親方）は墓場の前なんか歩いたら、墓の所で話するもの全部聞こえよつたつて。だから、あの人が墓の前から歩いたら、

「どこの子どもは今度は番にあつているから、あれを連れて来い」と言うことが墓で話していったつと。これは聞き分けな話だから、も、告げないとゆけないよ。しかし、そつちの話では、

「最初は行つたら鼻ひらす（クシヤミをさせる）から、あれが鼻ひする時にハクシヨンという時には、マブヤー（魂）は抜けているから、その時に連れて来たらもう、あれ、完全に（命は）取つた。だが、これが、クスケーといわれたらね取り返しはつかないから、そう言わないうちに取らなさいねえ」と語らつていたよ。そう言つたから、『あ、もう、これは大事な話であるから』といつて、この家を行つてね、

「あんた方は病氣している者がいるか」といつたら、「病氣している」つて。

「これは番に入つているから、これがハクシヨという時にはクスケーと言いなさいね。そう言つたら大丈夫だから。言わないと、これは命はないよ」といふて言つた。そしてから、もう、夜通しハクシヨ、ハクシヨやつたという。だから、その時、これが、「ク

スケー、クスケー」でやつたから、この人は助かつたという。そういう話もあつたよ。

だから、昔の人が「ハクシヨン」ゆつていつたら、「クスタツクエー」というものは、これから起これている（始まつた）といふがね。

⑩ クスケー由來

田場サダ（大正十五年生）明道

これはお産してからに、こう赤ちゃんが生まれてからに。して、こう「死神が迎えに来たら大変だね」つて来て。だいたいな「クスタツクエー」いうのはこの意味じゃない。「クスタツクエー」のハナ（クシヤミ）したから「クスタツクエー」いゆて。これ、何回もやるたんびに、やるたんびに、こうすれば、「あー、こつちの子どもの命は取られないよ」言うて、帰つて行つたの話はあつたけど。

それで、サツコビ（しゃつくり）こうするのがあつたわけ。こうするのがあつた。そんな時にも、年寄りらはこんなによつたさあ、やるたんびに。赤ちゃんがよ、鼻ひつたり（クシヤミしたり）、こんなしたり、よくする時は、大人の人が口にもつてきて、こうして、全部、追いつてからに、この子どもの命は助かつたよ。か話聞いたんだけど。

しゃつくりもするし、鼻（クシヤミ）もするからね、こう、しゃつくりの時は、「ビュー」つてやるわけ。こう親が特殊な感じでね、それに、また、鼻ひつたら「クスタツクエー」して、全部追いつたと言つた話聞

※1 マジムンンジャー マジムンを見る人

※2 池城親方 尚清く尚元代の三司官

三司官時代に池城親方と稱していた。

※3 クスタツクエー クシヤミをするときに言う言葉で、「裏喰え」という意味の言葉が魔物を追い払う力を持っているといふ。

いた。「こつちは、赤ちゃん出来ているから、こつちの赤ちゃんもらつて来なさい」いゆうて命令されて、もらいにくるさーね、死に神が。もらいに來ている時に、こう、「しゃっくりで取るか、あと、クスタツケーで取るか、どつちかで取つて来なさい」だけど、どつちも、もう、追ひ返されたから、取れないとの話聞いたんだけど。

(3) 猫を長く飼わないわけ

① 猫を長く飼わないわけ

漢那ツル (明治四十四年生) 喜間良

猫を長らく養つたらね、この養つた家ぬ主^{あかぬし}の命取るつて。なんでというたから、その話聞いたことない。八重山うていがら、沖繩うていがら(八重山でだつたか、沖繩でだつたか、それはわからないんだけどよ。

年寄りが、年寄りがね病氣してからに寝ていたのかな。その年寄りは何歳になつていたかそれはわからんだけよ話聞いたわけ。うぬ、おばあさんがいつも魚、

「魚食べる、魚食べる(魚食べる、魚食べる)」つて言よつたつて。したから、この猫がねおばあさんの丈も計つてからに、また、床下^{とこ}にいつてからに穴掘つて、これは幅も長さもでなかつたのかね。あんさーこれを猫が連れて行つてからにしてね、お婆さんはいなくなつたよーんでいち、探しているみたい話聞いたんだ

けどね。

後からは、これ床下見たのかな。猫が連れて行つてゐるわけさこのおばあちゃん。寝ていたつて床下ぬみーの穴(床下に掘つた穴で)。その猫が穴掘つてからに準備してあつたつていう話聞いた。このおばあさんは死んでいるわけさ。死んでから運んでいったかわからんね。そうでしょう、床下^{とこ}ぬみーに入つていつたつてよ、このおばあさんは。だから、長らく、養うのでないつて、猫は。人の命取るつてよ、これは。大変だはず、猫養つていたら長らく養わないでよ。ウワサ話だはずだけど。

(4) マスの角

① マスの角

半良芳子 (大正十三年生) 中の町

昔、墓場から幽霊が出よつたつて。それでね、マスは角があるでしょう、角、この角で追ひ払う。この角のあるものはこんなのにいいといよつた。この角を向わすと幽霊は逃げていったという。人間の指といのも、とつても不思議つて。昔、幽霊が出たら、こう指をさしたら、この指のあれで逃げるという話を聞いたからね。だから、墓の側から歩いたら、必ずこうして指出して歩きよつたのに、子ども時は。

※ 八重山 琉球列島の南端にあり、大
小三十一の島々からなる。

一二 愚かな動物

(一) 猫とカマフタ

① 猫とカマフタ

屋宜ハル(大正三年生) 安藤田

〔方言原語〕

弓(や)ちやーやたんでい主人の。あんさーに、うぬ
 主人が弓(や)まなかい幾(く)ち入(い)んでいやーに分(わか)かやー
 に。あんさーによーい、うぬ猫(ね)やデーヒルムンなやー
 に、長(なが)なやーないなありやるはーて。あんさーに
 よーい、弓(や)幾(く)ちあたんでいちわかやーなかい、うぬ
 猫(ね)なー主人(しゅじん)なかい弓(や)さーに射(や)らりーん。ぬーんちが射
 らりーんちがやたらーうれーわからんしがてー。

七(な)ちんでいがらーあたんでいちわかやーに。また、
 うぬ主人(しゅじん)ぬんじんぶのーまんどてんでー。あんし、
 猫(ね)のー七(な)ちさん(さん)みんそーい、主人(しゅじん)また、『くれー、む
 ぬぐんやくと』んでいやーに、『ちえーうふくなち、
 あとから一(いち)えーうふくなち持(も)ち。うり猫(ね)とち戦(いくさ)か
 たくとう、猫(ね)おなよー七(な)ちどうあてーくとう、七(な)ち
 打(う)つちんあたらんくとう、なーねーらんていやーに、
 今(こん)度(ど)戦(いくさ)いんでいやーに、主人(しゅじん)とち戦(いくさ)いんでいやーに
 そーたれー、主人(しゅじん)一(いち)えーうふおーく持(も)ちよーしえー
 やー。うんにんに、あんし主人(しゅじん)なかいうぬ猫(ね)殺(ころ)さつた
 んでいしえー聞(き)ちやん。

〔共通語訳〕

弓の名人であつたそうだ主人は。それに(猫は)、
 その主人が弓をそこに何本入れてあると分かつてい
 た。それでね、その猫は長い事養つていたので知恵も
 あつたんでしょねえ。それで、(猫は)弓が何本ある
 とわかつていて、その猫は主人に弓で殺されるが、ど
 うして殺されるのかはわからないがね。

(猫は)七本(弓が)あることを知つていた。また、
 その主人も賢かつたんでしょねえ。そうやって、猫
 は七本と数えているが、主人はまた、『これは、なに
 か企んでいる』といつて、一本は(弓を)多く用意して、
 あとから一本多く準備して持つていた。その猫と戦つ
 たら、猫はね、(弓は)七本だつたと、七本打つても
 あたらなかつたので、もう(弓は)ないと思ひ、今度
 は戦おうとして、主人と戦おうとしていたら、主人は
 一本(弓)を多く持っているさあね。その時に、主人
 にその猫は殺されたということを聞いた。

(2) 犬とカマフタ

① 犬とカマフタ

鳥袋義堅（大正三年生）古謝

〔方言原話〕

やつぱし主人んうりすんでい。長ちかないしえーあらんでい。長ちかなてーぬマヤーでーれい、大人どうワラビどうわかすんどー。ワラビぬかしまささーにすぐらんでいしーねー、しかかいんどー。また、大人ぬ「このやろー」し、しーねーと黙てい。長ないねーマヤーんうんぐとー。

また昔よ、昔話やし、本当がやらー。

ある人ぬ、やつぱし侍でいたのーあらに昔え。弓使たい、短刀使たいぬーさいする人てー、犬ちかなていさくとう、な、長なやーなていさくとう、うりやいざさん。うぬ人とうまじゅん寝んたい起きたい、昼寝んじし。ぬーがや、うぬ人ぬ、足元よ測てーういし、測いがすら、ぬーがすら、うぬ、わからのーあしが。な、うぬ人いーまーちそーし、行じやーに、家ぬ後んじ、穴掘てーういしさくとう、うぬ人ぬ弓かんし練習すんとうくまんじ穴掘いさくとう、「不思議やつさー、ぬーんちあんしうりすがやー」でいさくとう。今度隣ぬ坊主ぬ家行じ習かたさくとう、

「え、くんぐとー、くんぐとーやしが、この犬不思議やつさー」んちやぐとー、

「ぬーが」でいちゃぐとー、

「穴掘つたり、私がうりすぬ弓矢よ、あれー、かちやー

ちやいぬーさいすがうれー不思議やつさー」でいち、坊ざぬんかい言ちやぐとー、坊ざのーよ、

「どー、いやーや、私がいらりー聞き。弓ぬ矢やさんみんすらーや、「ちえー余計にうりし、うけい隠くちよーき」んでいち。あんさーに、今度おかんしさがな、練習するとうくまに来るばー。な、うつさち、うりが説でーぬうつさ、いくちがやらーわからんしが、うりが説でーぬうつさうさみたぐとー、主人かいしかきてい。主えあびーが来ねー、ムンやぐとーんち、うぬ、余とーる弓矢さーに、さーに殺ちえーたんでいぬ話。あんさーに命拾いさんでいぬ話。

〔共通語訳〕

やつぱし長く飼う（動物は）、主人をねらうそうだよ。長いこと飼うものではないと。長く飼う猫なんかは、大人と子ども区別するよ。子どもがうるさく思い殴ろうとしたら、歯向ってくるよ。また、大人が「このやろー」としたらね、黙って。長く飼うと猫もそうなる。

また昔よ、昔話だけど、本当かどうか。

ある人が、やつぱし、侍だったんでしようねえ。昔、弓使つたり、短刀使つたりする人が犬を飼っていたら、もう、長いこと飼っている犬だったので、そういうことが起こったようだね。主と一緒に寝起きをともにし、昼寝もしていた。なんだか、主人の足元を測つたりして、測っているのか、なにをしているのかそればかり、測つたり、私がうりすぬ弓矢よ、あれー、かちやーはわからないが、も、主人にまわりつき、ついて行

き、家の後ろで穴を掘ったりしたので、主人が弓をこんなふうには練習する所で穴を掘ったので、「不思議だねえ、どうして、こんなことしているのかねえ」と思っていた。今度は隣の坊主の家を尋ね教えを願った、

「ねえ、こんなことがあって、この犬を不思議に思っているんだが」と話すと、

「どういふことだ」といふので、

「穴掘ったり、私が練習している弓矢よ、それを、数えては行つたりするので、それが不思議なんです」と、坊さんに言うと、坊さんは、

「さあ、お前は私が言うことをよく聞きなさい。弓の矢を数えているようだったらね、一本は余計に準備して、それは隠しておきなさい」と。それで、今度は言われた通りに準備して（いつもものように練習していた）。犬が練習する所に来ているわけ。もう、これで、犬が数えた本数、何本なのか知らないが、犬の数えた本数終えると、主に襲いかかつてきた。主を呼びにきたら、なにかあるはずだと、その余っている弓矢でそれで殺したという話。それで、命拾ひしたという話。

(3) 豚化け美女

① 豚化け美女

伊佐安弘(明治四十一年生) 山里

豚が非常にべっぴんな女に化けてねだましておつたと。「これはめずらしいことだ」と言つて、まあ、皆で珍しがつて噂しておるうちに、とうとう皆で確かめるようになつて。したら、で、いよいよ、その当日になつたら、やっぱりこの男と遊んでおつたと。で、遊んで後はもうやっぱり帰るだろう、その時に後を追跡して行つたら、ある家のフール(豚小屋)に入つて行きよつたという話を聞いたんだよ、女が。まあ豚に、豚が化けておるんだから、やっぱり、自分の住みか、フールに飛びいつて寝ておつたという話はよー。

それで、もう、ばれたということだつたんだがね。これ、名護^{ナグ}の話と思つて聞いたんだがね。



※1フール 豚の飼育小屋を兼ねた便所

※2名護 沖縄本島北部の西海岸、名護湾岸に位置する。

〔一〕 親捨山

① 姥捨山（シバ折り・難題）

昔久原幸（大正五年生）泡瀬

〔方言原語〕

六十以上なれーからーや、ターブツクワんかい捨
ていーんでいちゃくとうや、ある親孝行者が、自分
ぬ親六十余たぐとうや捨が行ちうーさんなやーに。

「連てい行き」んち言ちやぐとう、うふあさーに行じや
んでいしが、月ぬ夜ぬ夜道行じやぐとう、うぬ、うつ
ちきてい帰ていちーね、むる、うぬ道えまぢがらん
ぐとうし、木枝ぐわーうふあさつとーてい、うぬ親
木ぬ枝ぐわー折てい置えーたんでい。あんさぐとう
や、来がな、私が道迷いさん考し、親かんししえー
んむんぬ、私た親捨ていーるくとーならんんでいや
に、また連てい来に、今度床開きやーに。床んかい
置とーちえーならんでいちよーぐとう草刈ていしえー
かち。あんさぐとう、なまね、あまから、あれこれ
のあれがあつて、

「灰さーに繩のーていくー」んでいちちやくとう、う
まぬ村ぬ人な、皆な心配し、

「うれ、あんいちえーならんしが、ちやーしすらー
ましがやー」ち吟味さぐとう、親んかい、

「えー、うんぐとう、うんぐとうーぬ難渋ぬ出じとー

いびつさー」でい、

「うれ、いやーや、どらーやつしーぐわーどうやる」

「ちやーさびーがやー」んちやぐとう、

「繩のーやーに、や、うりんかい塩水ぐわーんかいち
きていから、あんさーに、火ちきてい燃さーにや、うつ
ちきれー。うれ、あんしのーらつとーる繩やさ」ん

でい親が言ちやぐとう、これ持つて行つたら、これで、
検査通つて。

次えまた、馬二ち広つばんかい持ちつち、いんびな
そーる馬やんでいくとう、

「じろー親が、じろー子がんちくり見分きしー」んちや
ぐとう、

「えー、また、うんぐとーる事にあいびつさー」ん
ちやぐとう、

「うれーや、うふぬーんかい連行じやー、草くわーち
んでい。うぬ草あ先くわいしえーや子。親あとうから
くわいくとうや、先くわーしえー子やさ。また、こ
れも持つて行つたら、これも合格したつて。うんぐと
う、むるうりが通たぐとうやーふ、今ねよー、
「いやー、や、や、あんしむる、にーつうぬ難問ん
やー、いやーが通ちえーしが、いったーや、いやーな
けーぬーがらあるはじやぐとう」んちやぐとう、

「実えー、上さまがうんぐとーし言ち、六十以上
以上なれーからー、あまんかい連てい行きんちやぐ
とう、私た親六十余たぐとう、連てい行じやしが、
私ねーしぬばらん、また家んかいうりし、なまねー床
なかいあんしーぎてい置ちえーん」んでいち。

巧智譚 主人公が智慧を働かせて、めで
たい結末を迎える時。

「むる親から習いびたん」でいちやくとう、
 「とー今残どーるたーむる連てい来」んち。はんたん
 かい連てい行じえーる年寄むる婦ちゃんでいさめ話ぬ
 あつたわけ。「年寄なれーから、ム又ばかりじど
 かむどう仕事ならんくとうな、ありがどううつちや
 んきてい来」んち、アブシグワーンかい捨が行じえー
 たん。

〔共通語訳〕

六十歳以上になると山に捨てることになつてい
 が、ある親孝行者は、自分の親が六十余つたが捨てに
 行くことができないでいた。(親が)、

「連れて行け」と言つたので、おぶつて行つたとい
 うが、月夜の夜道を行つたら、その、親を置いて帰る時
 には来た道を間違えないように、木の枝をおぶられな
 がら、親は木の枝を折つていたそうだ。それで、帰ら
 がけ、「私が道に迷わないように、親はこのようなこ
 とをしてくれたのに、私は親を捨てることはできな
 い」といつて、また連れて帰つてきて、今度は床下を
 開けて。床下に置いたらいけないといわれているの
 で、草を刈つてきておおい隠していた。すると、そん
 な時に、偉い方から様々な難題が出されて、

「灰で縄を編んで来い」といつてきたので、その村
 の人たちは、もう、みんな心配して、「それに答えな
 ければいけないが、どうしたらいいものか」と吟味し
 て、親に、

「ねえ、これこれしかじかの難問が出ているがどうし

たらいいでしょうか」と。

「それは、お前、たやすいことだよ」

「どうしようかねえ」というと、

「縄は編んでね、それを塩水につけてから、そして火
 をつけて燃やしなさい。そうすれば、それは、編まれ
 た縄になるよ」と親がいつたので、これ持つて行つた
 ら、これで検査が通つた。

次はまた、馬二頭広っぱに連れて行つて、同じ大き
 さの馬だから、

「どつちが親で、どつちが子であるかそれを見分けな
 さい」といわれたので、

「ねえ、また、このような問題が出されましたけど」

「それはだね、広い野原に馬を連れて行き草を食べさ
 せてごらん。その草を先に食べるのが子馬だよ。親馬
 はあとから食べるので、先に食べるのが子馬だよ」。

また、これも(答えを)持つて行つたら、これも合格
 したつて。このように、みんなこの人が答えたので、
 今度は、

「お前はね、みんな全部、むつかしい難問をお前が解
 いているが、お前になにかあるはずだ」というと、

「実は、上様がこのようなことを言われて、六十以上
 になったらアムトウの下に連れて行きなさいといわれ
 たので、私の親も六十余つたのでいわれた通りにしま
 したが、私は可愛そうで見通こせなく、また家に連れ
 て帰り今は、床下に隠してあります」と答えた。

「みんな親に教えてもらいました」というと、

「さあ、今、残してきた者全員連れて帰りなさい」と。

崖つぶちに連れて行った年寄りはみんな連れ戻したという話があったわけ。「年寄りになるとご飯だけ食べて仕事できないから、そういう者は放つてこい」と、土手に捨てに行つていたそうだ。

② 姥捨山（難題）

屋直ハル（大正三年生）安産田

『方言原話』

食べるものがないから六十歳になったら、あつちに連れて行くさあねえ。あんさくとうよーいー、くまーな、えーりんいー人ぬちやーやるばーてー。王様んかい行ちゆるあたいぬ人ぬちやーやくとう、いー人ぬちやーやるばーてー。あんし、あまんかいやらちさーに。うまなかい、内地からよーいー沖繩んかい、「雄鶏ぬ卵と灰繩とう、三重城ぬムイんいがらー持つて来い」命令がちゃくとう、命令さつたる人ぬちやーなー頭うすてい。あんし、雄鶏ぬ卵でいち産さんしえーやー。むるならんぬーびかーんどうあんし言いちきてーるはじやつさ。あんしまた、灰繩でいしえー、「灰で綱ぬつておいで」といったもんだから、灰しん繩のーらりーるうれーねーんしえー。あんさくとう、うりんあい、また、「ムイ嬢ちくー」んでい言しん、うりん嬢ちえー行からんしえーやー。あんしむるならんぬーんびかーんあんしさくとう、うまー頭うしとーいねー。うまんかいうる六十歳ない親ぬ前んかい持ち行し、

「ちゃんぐとうーちゃんぐとうーしやんどー」でい

ちゃんぐとう、灰繩でー、

「いったーや、うりんわからん。うれーどうーやしむんやさ。薬、うりよ、いつべーちゅーく干さーに繩のーていて、うぬまま火ききてい燃しーるんしえー、ちゃんどううぬままー繩なとーしえー」んでい言ち習ちやらちゃんぐとう。あんし、今度おまた、「年寄ぬ考んありわるやるむんぬ」でい、うんにん山から年寄ちやーや連ていちゃんでいちえ話や聞ちやん。

『共通語訳』

食べるものがないから六十歳になったら、土手の下に連れて行くさあねえ。だからね、こは、たぶん身分の高い人たちであつたわけさあ。王様のところに行くくらいの人たちだから、身分が高い人たちであつたんだね。それで、（六十歳になつた年寄りは）土手に連れて行つた。そんな時、内地からね沖繩に、

「雄鶏の卵と灰繩と、三重城の山といつていたかねえ持つて来い」と命令がきたので、命令された人たちは、もう困つてしまつた。なんと、雄鶏が卵を産むかといえは産まないでしょう。ことごとく、無理難題ばかりを出したそうさ。そして、また、灰繩というのは、

「灰で繩を編んできないさあ」といったもんだから、灰で繩を編むことはできないさあ。だから、その問題もあるし、また、「山を壊してこい」というのも、それも壊して持つていくことはできないさあねえ。そんな、みんな出来ないものばかりなので、言いつけられ

た人たちは困っていた。そこで、土手にいる六十歳になる親の前にその難題を持って行って、

「こんなこんな問題が出されていきますよ」といったら、灰繩はねえ、

「お前達はそれもわからないのか。それは簡単なことである。藁、それを、充分に乾燥させて繩を編み、そのまま火をつけて燃やしたら、ちゃんとそのまま繩になつていてはないか」といつて教えて行かしたぞうだ。すると、そこで、「年寄りの教えは大切だ」と、その時から山から年寄りの方々を連れてきたという話を聞いた。

③ 姥捨山

原直カメ（明治四十一年生） 安藤田

「方言原話」

六十ないねー必じ息子がアムトウ連れてい行じうまんじいしーたんでい、食べ物んねーん。あんざくとうや、ある、親孝行や、

「いちよーちみそりーよーんちいしやーに、家かい備てい来たんでい。家かい備ていちーねー、親孝行やしえー、とうんけーやーに見ちえー、またうぬ親ん見ちえー泣ちゆたんでい。

今度また、親不孝な者や、六十ないねーおつぱしんじ連れていんじ、うぬアムトウぬ下にいして見だんふーなーし家かい走えーしはいたんでい。うんなばーぬあんでいよ、昔え。大昔てーな、うりん。親ぬちやー話どうやくとう。あんしうんぐとうしーしー

し、「今頃やーさるそーるはじどーやー」ぬーぬーでいぬ親孝行ぬ子言るばーてー。あんしまた、親不孝ぬ子ぬまた、さたさんたんでいよー。うんぐとうやたんでいしがや。

あんざくとうある百姓ぬ公事から命令ぬ、「灰さーに繩のーてい持ち来」んでい言たんでい。「繩のーてい持ちつくー。あん灰さーに繩のーりがやー。グミどやるむん、繩のーりがやー」んち百姓ぬちやーいっぺー心配そーたんでい。あんざくとうアムトウぬ下んじいちよーる人んかい習いが行じやんでい。あんざくとうや、

「藁さーによ、繩のーやーに、かんし長し置ちやーに、うりが火ちきねー、だんだん燃ていいちゆくとうや、うんぐとうし燃しーねーうれーわつくわさんよーい、よーうぶぐわーさーなかい、うり飛ばさんよーい持ちつち行じ見しり。あんし、灰し繩のーてーびんどーんちあまかい見しり」んでい言たんでい。うぬ、アムトウぬ下なかいいちよーる人ぬてー。

あんざくとう、うんにーからや「年寄ぬ功ぬ功やくとう、年寄や宝やくとうや連れて来」んでいちやーに、うんにんからー六十なていん連れてい行からんたんでい。

うぬ話しみしえーたん私達親んちやーが。うぬふーじーやあたんでい。

※「年寄ぬ功ぬ功」年とつた人の経験は深いものであり、年長者の経験は尊敬しなればならぬのとたとえてある。

〔共通語訳〕

六十になると必ず息子が土手に連れて行つてそこに置いてきたぞうだ、食べ物もなく。それでね、ある親孝行者はね、

「ここにて下さいね」とそこに置いて、家に戻つたぞうだ。家に戻る時に親孝行者は、振り返つては見て、また置いてきた親を見ては泣いていたぞうだ。

今度はまた、親不孝な者は、(親が)六十になると負んぶして連れて行つて、その土手の下に置いて見ないふりして家に走つて行つたぞうだ。そういう時代があつたぞうだよ、昔は。大昔さあ、その事は。親たちの話だからね。そういうことをしていたが、「今頃はひもじい思いをしているんだらうねえ」と、親孝行の子は言うわけさあ。そして、また、親不孝の子はまた、話題にさえしなかつたぞうだ。そういうことがあつたというが。

するとある百姓が公事から命令がきて、

「灰で縄を編んで持つて来なさい」と言つたぞうだ。「縄を編んで持つてこいと、あのような灰で縄が編めるものだらうか。ゴミなのに縄が編めるものだらうか」と百姓たちはたいそう心配していたぞうだ。そこで土手の下に置いてきた親たちに習いに行つたぞうだ。するとだね、

「藁で縄を編んで、このように長く置いて、それに火をつけると、だんだん燃えてくるのでね、そうやって燃やしたものを、それを形がくずれないようにそーつと扱つて、それが飛ばないように持つて行つて見せな

さい。そして、灰で縄を編んでありますよと公事で見せなさい」と言つていたぞうだ。その、土手の下にいる人がさあ。

そしたら、その時からね「年寄りの功は龜の功だから、年寄りも宝だからね連れて来なさい」といつて、その時からは六十歳になつても(土手に)連れて行くことはなかつたぞうだ。

そんな話をなさつていたよ、私達の親たちが。そんな話もあつたと。

④ 親捨山(難題)

鳥袋ウト(明治三十八年志池原)

〔方言原話〕

昔てー、六十なたくとどう姥捨山おばすてやまちあたなり。うまんかいうんちけーし行いじやくとどう。

今度お上かみからいつべーむつかしー話わぬちえーんてー。あんさぐとどう、うり返事する人おうらん、返事する人うらんなくとどう。とー、あんしえー姥捨山おばすてやまじ捨すていてーぬおばーさのー連つてい來、あんなから話わや、うまんかいひんとーしみりんりち、うぬおばーさのー山やまから連つていつち。話わやうぬ人が、上かみからめんそー人かい、だのーしえーたんていち。

あんさぐとどう、うんにんからー

「六十なちんやー、おばーさのー捨すていらんぐとどうし、年寄りやゆくたかてーしんでいちぬ話わやんどーんてい、おばーさんから私わねー聞きちやるばてー、私わつたーおばーさんから。

〔共通語訳〕

昔はね、六十歳になったら（山に連れて行く）姥捨山というのがあつたそうさ。（六十歳になつたので）そこにお連れしたそうさ。

すると、公儀からたいそうむつかしい話が出されたんでしようねえ。すると、それに答えられる人がなく、返事する人がいなかった。さあ、それなら姥捨山で捨ててあるおばあさんを連れて来て、そして、おばあさんから、むつかしい話の返事をさせよう（ということになり）、そのおばあさんを山から連れて来た。むつかしい話については、おばあさんから公儀の人に直接答えてもらったそうさ。

それで、その時から、

「六十歳になつてもおばあさんは捨てないで、年寄りほこれまで以上に敬いなさいという話だよ」とおばあさんから私は聞いたわけさ、私たちのおばあさんから。

⑤ 姥捨山

〔方言原話〕

辺土をキヨ（大正七年生）明道

次男、三男がおんぶして、山のアムトウぐわーに家ぐわー造つて。ぬーがら、バーキんかいいしていどう持つち行じそーてい行ちゆたんでい。ガヤぐわーで家ぐわー造つてから、こつちに置いてきてから。なー家かい帰いにからーな、おばー置ちはつちやーに「寂しいなあ」と思うけど。家んじ、「な、くれーな、

決まていどうる。仕方んならんさ」でいちうりしやーに。

なにかのまた、考え事があつたら、自分たちがわからんから若いので、わからんから、また、おばーに聞きに行かんと、「わからないねー」と。おばーに聞きに行つてしたら、「どーくれー、おばーたーやあんし、あまんじ置ちえーならん。家かいそーてい行ちゆん」でいやーに、また、家かいそーていちやーな。

話聞たよ。芝居もしよつたよ。

〔共通語訳〕

次男、三男がおんぶして、山の土手に家を造つて。なんでも、カゴにすわらせて連れて行つたそうさ。カヤで家を造つてから、そこに置いたそうさ。そうやって（連れて行つてから）家に戻る時には、おばーを置いてきたので、「寂しいなあ」と思うけど。家に着いても『もう、これは決められていることだ。仕方がないさ』と、あきらめていたようさ。

なにかのまた、考え事（問題が）があつた時、自分達がわからんから若いので、わからんから、そこで、おばーに聞きに行つて、「わからないから」と。おばーに聞きに行つてしたら（解決する事ができたので）、「ねえ、これは、おばー達をあのように、あそこに置いてはいけない。家に連れて帰る」といつて、また、家に連れて来た。

（そんな）話を聞いたよ。芝居もしよつたよ。

⑥ 姥捨山

浜比羅ノへ（大正七年生）佳吉

〔方言原話〕

おばあさんがねおんぼされて行く時ね、自分の子がね、帰る道、道迷いするかと思つてね、木の枝を折つてね、歩く所置いて行つたから、それで、その後からも。

「灰し繩のーていくー」ぬーぬーし言ちさくどう、若さしがーわからん、アムトウぬ下ぬ年寄んかいとうーいがんち行じやくどう、

「ちゃんどうーすがやー」んち聞ちが行じやくどう、「うれー、簡単どうやる」んでいち、うまぬ、うぬ年寄が、繩を置いてから、すぐ火つけてねー。そのまま、くずれないさあねえ。んちや、うんどうーし、んじ、持ち行じさくどう、年寄から習てーんでいやーんかい、うんにーから、年寄大事にすんでいいるばーてー。

〔共通語訳〕

おばあさんがねおんぼされて行く時ね、自分の子がね、帰る道、道迷いするかと思つてね、木の枝を折つてね、歩く所置いて行つたから、それで、その後からも、聞きに行つたら、

「灰で繩を編んでこい」という問題を出されたが、若い者では答えることができずに、土手の下の年寄りに、

「どうしたらいいのかなあ」と聞きに行つたら、

「それは簡単な事だ」といつて、その、その年寄が繩を置いてからすぐ火をつけてね。すると、そのまま、形がくずれないさあねえ。なるほど、このようにして持つて行つて、年寄りに教えてもらったというど、その時から年寄りを大事にするようになったというわけさ。

⑦ 姥捨山（灰繩）

上根ウサ（明治三十一年生）富里

〔方言原話〕

役お立たぬんでいガマンでい置ちよーけー、生ちちよーの間あ孫んちやムノーかやーちくいやーに。あんざー、孫ぬム又持つち行じやくどう、

「おじー、シバー主やー灰さー繩のーてい來んでー」でい。

「夕飯やしが」んでいいやーい、

「んーんー、んなじししえーさ。あまからアクタゆしていくーわ。私が灰さー繩のーてい持たすくどう」んち。

「イーゴーパーんかい葉あの一やーしちやーに、灰らつとーや、うり動かちえーならんくーどう、くれーとー持ち行じ見しれー」んでいあーに。

「はー、灰さーなかい繩のーてい年寄いや宝やさやー」んでい、うんにーから一年寄えーいしらんたんでい。ハルぬあむとうんかい置かんたんでい。

【共通語訳】

(年寄り)役に立たないので洞窟に置いていて、生きていた間は孫が食事を運んで食べさせていた。そうやって、孫が食事を持って行った時、

「おじー、シバー主に灰で糞を編んできなさいといわれたよ」と、

「夕飯だよ」と届けながら、

「そうか、いい所に来たね。あそこからゴミを集めてきなさい。私が灰で縄を編んで持たすので」といわれた。

「クワズイモ葉に藁で編んだものを置いて(燃やしたら)灰になっているので、それを動かさないでそのまま持つて行って見せなさい」といわれた。

「なんてすごいことだ。灰で縄を編むなんて年寄りは宝だねえ」と、その時から年寄りは洞窟に連れて行かなくなつたそうだ。畑の土手に置くことはしなくなつたそうだ。

⑧ 親捨てもっこ

平田シゲ(明治三十五年生)登川

【方言原話】

六十余れーからーや、生きちよーる人どうやひがよーアムトウんでいがらー墓んでいがらーんでいーしーたんでいがよ。あんし孫てー、いっぺー親孝行者なやーに、生きちよーるおじー、おばーんでいがらーよ、かたみていアムトウぬ下がらー、墓側やが、けーうすい。また、孫わらばーが、またんうりかたみてい

行じえーたんでい、オーダーとう、うぬ棒よー。またん家かいかんし持ちちちゆてんさくとうてー、

「ぬーがいやー、いやーや、皆うりしーていーうまんかいうすてい、うり持ちゆるむん」でい、しーぎらつとーるおじーがやらー、おばーが言ちやらー。

「またあとらうじーや、ありする人またんうりんかいさーに、あんしふん」でいがらーやたんでい、

「あんしえーとらうな」んでいいやーに、あんし、うぬあとらうからー捨ていらんたとーんでいむぬ。

うぬ前んかいなーひん年寄りがいーでーんすからぬ、ぬーがらぬ、上納むんふんでいがらー。人の分からんぬー、年寄がよーあかちえんやーにどう、「年寄りは宝」んでい、うんにんからよ捨ていらんたとーんでいたつさ。

【共通語訳】

六十余るとね、生きていた人なんだけどね土手とか、墓とかに置いたそうだがね。だけど、孫はとも親孝行者で、生きていたおじいさん、おばあさんとかを、かっいで土手の下か、墓の側か、そこに置いた。また、孫が、またもそれをかっいで行つたそうだが、オーダーと、それをかっく棒ね。また、家にそれをこう持つて行こうとしたらね、

「どうしてお前は、皆はおオーダーも棒も一緒にそこに置くのにそれを持っていくのか」と、そこに置かれたおじいさんか、おばあさんが言つたのか。

「また、今後、六十歳越した人を、このオーダーと

棒で連れてくるから」といつていたらしく、

「そういうことはしてくれるな」といつて、それで、その後からは捨てなくなつていたというが。

その前にもつとお年寄りが、偉い方からなにかの上納ものを納めなさいといつてだったのか。誰も答えることのできない事を、年寄りがね解き明かしたらしく「年寄りは宝」と、その時から捨てなくなつたといつていたぞ。

⑨ 姥捨山（モッコ）

宮城次郎（大正三年生） 團田

〔方言原語〕

六十余まれーからーアムトウぬ下んじ捨てた話聞いたかなー。

くぬ子ぬ親かんし捨てていーが行じえーるばーてー。あんさーにまた、子ぬかたみてい行じえーる棒家んかい持ちちつち、

「ぬーうれ、いやー、うまんかい持ちちつち捨てていてー。ぬーうまんかい置ちよーてい」

「いやーが六十一ないねー、また、かたみてい行じ捨てていーくとうーんでい。とー、うんにーから捨ていらん話。アムトウぬ下んかいや六十余ていん。

〔共通語訳〕

六十過ぎたら土手の下で捨てた話聞いたかなー。

子どもが親を（モッコに乗せ）棒でかついで捨てに行つたようだね。そして、また、子が親を担いで行つ

た棒を家に持ち帰つたら、

「どういふことだこれは、お前、そこに持つてきて捨てて、置いているのは」

「あなたが六十一なると、また、担いで行つて捨てるために」と。それで、その時から親を捨てることはしなくなつたといふ話である、土手の下には六十歳こしても（捨てなくなつた）。

⑩ 姥捨山（難題）

玉城カメ（大正十年生） 美里

薩摩藩は必ずこの琉球取るといふことさあねえ。だからねー頓智三つ出したわけ、薩摩から。「これだけ

明かしたらね（解くことができた）戦争はしない」つて言うわけ、琉球とは。それで、頓智三つ出したわけ。その前にねー、琉球はよー、六十才なつたら

ねー自分の親を皆山に捨てに行く、姥捨山つていうのがあつたらしいね。そしてあつちにねー、自分の親を皆捨てに行くわけ、おんぶして。そしてね、ある青年が自分の親を捨てきれなくて、「捨ててきましたよ」

つて言つてからにね役所にはそう届けたわけ。「自分の親も捨ててきましたよ」つて届けは出しているけど、夜中行つてからに、自分の親を連れて来て床

の下に入れたわけ、筵ぐわー敷ちやーに。助きてい

るばー（ムシロを敷いて助けているわけ）。そうしてねー、そうしている間に、もう皆、親を達捨てている

よー。この青年一人は自分の親捨てきれなくて、夜中連れに行つてからに床下に隠してあるわけ。そうし

※一薩摩 鹿児島のこと、薩王が島津氏であつたので、別名島津藩とも呼ばれる。

ている間にねー、薩摩から三つの難題きたわけ、こつちに、琉球に。「この三つの難題を解かしたら、この琉球は取らない」ということで、一時は停止させたけどね。

あんさくどう、その問題何かつていうと、パーキ、昔はパーキつて、芋なんか洗うのにパーキつていうのがあるよね。「あれの中にねえ、水いっぱい汲んでおいで」つていう難題がひとまず。そして一つはまたねー、「あの縄、灰で編んでおいで」つて、灰。あれで編んでつてからに難題。「雄鶏ぬ卵」くぬ三つ難題ねー、「これほどききたらねー、琉球とは戦争はしない」ということで。そして侍達ね、三司官も、城がいくつもあるでしょう。中・南山つてからに。その侍達全部がこの三題の問題(の答えを出しきれなくつて、もう困っているわけ。そうする間にね、もう仕方がないから、「必ずこれを解きなさい」だから、薩摩は。だからねー、もう、あつちこつちに立て札したわけ。そしてね、「この三題を解かされる人は褒美くれる」ちゅつて、琉球城から。そしてね、「この三つの難題を解かしたら、褒美をくれる」ちゅうことで、そしてらもう、誰がもわからんわけ、この難題三つは。そしてからに、この青年は、「ハッサビヨ」も、家帰つて来て、これ、立て札されているさーあつちにも、こつちにも。

「ぬーがいやーや、とるるばつとーる(どうしたのかお前は、ぼんやりして)」つて、その親の所に、床下に食事運んで行つたら、

「こうこうでね、城からこうしてきてるけど、むる解かしたら、褒美があるというが、自分は褒美貰いたい」つて言っているわけね。

「いったーひやー、わらばーたり、うつびぐわーぬうりんわからんなー(お前達、子供達よ、これぐらいのこともわからないのか)」つて、この母が言つたわけ。「じゃーね、「パーキぬみーぬ水汲でい来」んでいらーや、水いっぱいあいに所んじ、うぬパーキいしねー(水のいっぱいある所で、このザルを置くと)、水がいったまるでしょう。そしてまたね、「灰の縄編んできなさい」つたら、灰いっぱいある所に編んだ縄持つて行つて、「灰編まれているが」つて「縄編んであるでしょう。それをいっぱいある灰の中に入れたら、うん。そしてらもう、灰で編んだのと同じなつているさあ。もう一つは雄鶏の卵。

そしてねー、この親がいったから、これそのまま首里城に持つて行つたわけ、三司官にむけて。そしてらよ、これまた薩摩に送つたらよ、「琉球にもこんなに優れた人がいるかねー」ちて、「褒美たくさんくれるさーい」つて言われたつて。そしてその青年は呼ばれて首里城に行つたら、

「あんた何を欲しいか」つてゆつたらね、

「自分は何も欲しくない」と。

「だけど、親達を捨てないでくれ」つて言うことで。だから、「年寄や亀ぬ甲」つて言われているのが、これから始まつたということ。

※1中・南山 三山分立時代の中山の支配地域をさす。

※2雄鶏城 首里城のこと。王城。

※3ハッサビヨ 賢きときに発する言葉。

※4首里城 那覇市首里にあった王城。

① 親捨山へ難題

山城清輝（大正十二年生）中の町

「アムトウぬ下に連れて行かれる」と。食べ物がないからね、今の六十といったら皆元氣バリバリで働けるんだけども。あの頃はもう、四十代からは年寄りみたいなつておつたからねえ。五十代からはもつと年寄りで、六十といったらもう、六十一の祝いといったら、あつちこつちまれにしかなかつたよ、還暦祝というもの。だから、六十からは「アムトウぬ下（土手の下）」ということだ。

ある孝行息子が自分の親を。これ、法律だからね。「六十なつたらアムトウぬ下に連れて行け」というのは。アムトウぬ下に連れて行って。

薩摩から難題を出されてね、「カマドの灰で繩のーていく（繩を編んでこい）」と問題出されたわけよ。心配してね、家帰って色々やるけども、どうしても出来ないわけさあ。灰で繩がなえるかね、水でぬらしてみたり、いろんなことやってみても出来ないよ。だから、アムトウぬ下に行つてね、親に、

「くぬふーじーぬ難題王様が言いちきらつとーしやたしがない、じー困どーみしスーるふーじやつさー（このような難題が王様が言いつけられたようだが、たいそう困っているようですが）」

「あんしスーうれー、じーどうーやつしーぐわーやさ（それは、とても簡単なことだよ）言うことでね。繩を編んでね、火をつけてね、火をつけていると、次第に燃えていくでしょう。そのまま繩の形が残

るさあねえ。それ持つて行って王様に教えてあげなさい」とうことでやつたと。それで、その殿様もビックリして、そういうたぐいなもの色々なされて、とうとう「年寄りは大事にせんといかん」と。年寄りは肉体的労働できなくても、そういうふうだね、モノシリみたいで大事にしないといかんというふうなことで、それからアムトウぬ下に連れて行かないという話もあつたね。

② 姥捨山へアブシバレー由来

佐久田千代（大正七年生）室川

ずつと昔は年寄りはね人用ないと言つて、年とつたらね食べるのも若いのもあんまりないさーね。だから、石山の穴あいた所よ、あんな所にね連れて行って置きよつたつて。もう、養いきれないからつて。そうしたらね、ある年の、何月とかよく覚えてないけどね、小さなシエグワー（バッタ）、これがいつぱい出てよ、いくら何作くつても（作物が）できないわけさ。これがもう、すぐ、覆いかぶせてきて、もう畑もできないくらい。して、

「これはね、何したら、どんなにしたらね、これ全滅して野菜作り出来るかねー」して一生懸命みんな集まってよ、幹部の人全部集まって、もう村の人も畑にも行かれないさーね。して集まって、退治する考えしたけど、誰も考えていい考えないさーね。そーしたらね、

「一番年寄りに聞いたらどーかねー」という話から、

アブシバレー 田植の後に畦の草刈りを行い、虫払いをして、農作を祈願する年中行事。

一番年寄りを連れて行って置くからよ、あつちには。そうしてね、もう誰も考えつけないから、

「じゃーどことのお家は一番年寄りだからね、向こうのおじーの所に行つて聞いてもらつたらどうかねー」これが出たわけ、話は。そうしたら、行つて、聞いたらね、

「今から何年前にね、野菜とか、いえば食べ物さ、これをね出来るようにして立派に、何のあれもないようにしてね作られる。作つてねみんな喜ぶ、お祭りさ。あれ、あれがね、年数に当たつてゐるつて。で、これやらない限りはや、これは治まらなと言つて」教えたくわけよ、おじーさんが。そうしたらねその時から、おじーが言う通りやつたからね、もう、どこに消えたのか、いなくなつてゐるわけさ。そうしたらな、「ああ、やつぱし年寄りは宝だねー」つて。つて、またお家にお迎えしたつて。して、祭りと一緒にお祝ひした。

この沖繩ね、何月、何月はね、何を作つて喜ぶでしょう。正月とかね、なんの祭り、なんの祭りつちあるさーねー。そつて、そのあの一祭りさ。田舎なんかね、今も野菜とかな、食べ物の祭りがあるさ。あんな月々の祭り。こんなのが發生したから、みんな、もうわからんさーねー。全部年寄り捨てられたら、もう若い人だけしか残らんさーね。それが覚えちゆかないわけ。だから「年寄りに聞いたら」という意味でね、して聞いてきたら、こんなこんなして、教えられたつて。いわゆる、その通りやつたから、もう、消えてね。月々の畑やらなんやら、全部豊作なつたつて

だから、その時からね、「年寄りやつぱし宝だねー」つて捨てないでねまた迎えたつて。

⑬ 親捨山（枝折り）

仲程清一（大正二年生）知花

六十歳なつたら山に連れて行つて。ある年寄りが（捨てられるのは）山の中だからね、こう（家族の者が）帰つて来る時は、道がもしわからない場合もある山奥に、「帰り道は必ず枝を折つて帰りなさい」と言つたそうです。だから、その家に帰つて来て「これは年寄りは宝だねえ」といつて、また連れに行つたという話も聞いたんですよ。

【2】 黄金の瓜種

① 黄金の瓜種

金城眞良（明治四十年生）古謝

【方言原話】

畜場御嶽と言つてねー島尻にあるだろう、畜場御嶽と言つてね。その御殿の名前はもう忘れてしまつたんだよ、何御殿といったかなあ、忘れたからね。それが意味がある、こうだつたつて。

妻がね王様の前でおならしたから、

「バカヤロウ、あんたは私の前でおならするのか」これが久高島んかい島流しさつたところ、だー、うれー、妊娠の一始まつていたらしい。うぬ王様が知らない、妊娠始まつてゐるとことはだね。自分の妻だ

※1 畜場御嶽 知念村にある琉球最高の聖域、首里王府が最も信仰する御嶽。

けど。久高島に島流しされたから、その女は久高島で暮らして。それから、腹大きくなつて子ども産んだのは男の子。ね、その男の子が七つの年に、

「私は、父親どこだ」言つたら、

「あんたはね何御殿のね長男だよ」と言つたらね、

「どうしてこつちで私は生まれたか」つて言つたらよ、

「私ねー尻ひつちやるたみなかい島流しさつてい、いやーやくまうてい産ちゃんどー」でいちゃぐと、くり七ぢどうないしが。昔えー、ミーガーミーガーんち油ぐわー入りーるカーミぐわーぬあたんよーやー、耳ぐわーぬ付ち。うりんかいカラス入つてい首りんかい上ぶてい、

「尻ひーガラス買ひみそーりー、尻ひーガラス買ひみそーりー」んでいあびたくと、尻ひーガラスんでいしえーな、誰がん聞ちんーだん、見ちんーだんばーやくと、うまぬ王様ぬ、

「あ、いほーなカラスぬあさやー。だ、うぬワラバーから聞いて聞ちんだ」でいち。

「尻はりガラス買ひみそーりー」んち王様ぬ家ぬ前から歩ちやぐと、

「えー、待てい待てい。だ、いやーが持ちちよーるカラス見ち見だ」でいちゃぐと、

「あー、うり誰がん誰がのー見だだん」でい。

「何が」んちやぐと、

「うり、尻ひらん女ぬる見しじちーやる」言ちやぐとよ、

「人間ていらむぬ、尻ふいらん女んちんうみ」でい言

ちやぐとや、かちみらていワラバーに、

「何があんするむんぬ、私親尻ひちやるたみなかい島流ししえーが」んでい、かんしちちみてい、

「あんし、いやーありが子るやんなー」でいちゃぐと、

「やん」でい。

「どー、あんどう。いやーうまにうとーけー。使けー

やらち連らすくどと」んち。

「いつたんうぬ島流しさつてーくどと」でいやーなかい、斎場御殿んかい上ぶてい、はちやるむのー、むる行方ぬわからん。あんさーに、あまんじ朽ち果ていそーし、くぬジーフアーと、指ナギーとさーに分ちち、うぬ遺骨必じ取たんでいぬ話。

あんさーに、あまー当分のー、男ぬ拝みーねーウシンチーしる拝むたんでい。私達親までーウシンチーし拝だるんでい。私達から、しぐ拝だるばーてー。

斎場御殿、斎場御殿だしーねー、何御殿んちわかいるばーよー。

〔共通語訳〕

斎場御殿と言つてねー島尻にあるだろう、斎場御殿と言つてね。その御殿の名前はもう忘れてしまつたんだよ、何御殿といったかなあ、忘れたからね。それが意味がある、こうだつたつて。

妻がね王様の前でおならしたから、

「バカヤロウー、あんたは私の前でおならするのか」これが（理由で）久高島に島流しされたが、その時に

※1 薩摩 王府のおかれていた都文化経済の中心。現在の那覇の首里地区。
※2 ウシンチー 昔の女性の着物の着方。帯びはせずに着物の前部分を内ヒモに押し込んで着る着方。

は、妻は妊娠をしていたらしい。その王様はそんなことは知らない、妊娠していることは、自分の妻だけだ。久高島に島流しされたから、その女は久高島で暮らして、それから、腹大きくなつて子ども産んだのは男の子。ね、その男の子が七つの年に、

「私の父親どこだ」言つたら、

「あんたはね何という御殿のね長男だよ」と言つたらね、

「どうしてこつちで私は生まれたか」つて聞いたら、

「私は尻をひつたために島流しされたので、お前をここで産んだんだよ」と言つと、この子どもは七歳しかないが、昔は、ミーガーミーガーという油を入れるカメがあつたんだよ、耳の付いたものが、それにカラス入れて首里へ行つて、

「尻をひるカラスを買つて下さい、尻をひるカラスを買つて下さい」と声をかけていたら、尻をひるカラスというのはいもう、誰も聞いたこともないし、見たこともないわけだから、首里の王様が、

「あ、変つたカラスがあるものだねえ。どれ、その子どもに問うて聞いてみよう」と。

「尻をひるカラスを買つて下さい」と王様の家の前から歩いたので、

「これ、待て待て。どれ、お前が持っているカラスを見て見よう」といふと、

「ああ、これは、誰かが見れるものではありません」「どうしてか」と聞くと、

「これ、尻をひらない女が見るものです」と答えると、

「人間に、尻をひらない女がいるものか」と言つたのでね（その人は）捕まえられてね子どもに、

「なぜ、それなのに私の親は尻をへつたために島流ししたのですか」と、こつつかまえたまま（言つと）、

「それなら、お前はあの女の子どものか」と聞くので、

「そうだ」と答えた。

「そうなのか。それなら、お前はここにいておきなさい。使いをやつてお母さんを連れてこさせるから」と。

「一応は島流しされたから」といって、齋場御嶽に行つてみたものの、全く（母親の）行方がわからない。すると、齋場御嶽で朽ち果てているのをこのジューファーと指輪で分かり、その遺骨は取つたという話。

それで、齋場御嶽にはしばらくの間は、男が拝みに行く時には着物をウシンチーして拝みに行つていたそう。私達の親の時代までウシンチーして拝んだそうだよ。私達からは、そのままですぐ拝んだがね。

齋場御嶽、齋場御嶽を調べていくと、何御殿ということが分かるよ。

② 黄金の瓜種

上根ウサ(明治三十一年生) 宮里

〔方言原話〕

中城御殿殿内やてい、弟子ぬちやーぬまんどくどう女んちやー。あんさーまた久高から清ら女め来に、うりん弟子んちやーやし。また王様め清らカージーやくどうでいちやーに妻さーに。また、うぬ弟子んちやーがうらはこーふあさーにや、どうーぬ尻やひつちよーしが、うりがひつちえんちやーるやるはじ。出じゃすどう考さーに、うらはこーふあさーに。誰がやいたが、んでい王様あ言たんでい

「うぬ女ぬひつちえーい」

「かーげー清らーさーあしがや、だらしぬねーんだらーなー追ぎりわーない。久高んけー追ぎたくどう、ワタ持ちよーしえー。」

あんさーに、うぬ子ぬふるいーていから、

「オカー私ーのオトーまーうやびーが、

「いやーオトーうらん。私子どうえい」

「オトーうぐどうどう子産ちえーる。オトーどうーらんだらー私のー死ぬん」でいちやくどう、

「えー、あんやみ。とー、いやーやオトーや、やー首里ぬ御殿殿内なかいめんしえーぐどう、くぬ話聞かしえー。尻ひやーなかいうわーぎらつたる人ぬ子どうやんどーでい言えー」でいちやくどう。あんさーに行じやくどう、

「いやーや、まーぬわらばー」

「私ねー首アンマーやくまにうやびーたしが、尻ひ

やーにうわーぎらさーなかい。私ねー久高からちよーいびーんどー」

「いやーあんしえー私子どうやみ」んでい、

「うー」

「どーあんしえーアンマーん連れて来わ」でいやーい、またちゆとうくるうてい育たんでい。

〔共通語訳〕

中城御殿殿内には、奉公する人がたくさんいて女の人も奉公する一人であつたが、きれいな女が来て、その人も奉公する一人であつたが、きれいな人だつたので、王様が妻にした。すると、他の奉公している人たちがねたみ、その中の一人が尻をひつたのだが、その美しい人がひつたと言いつけた。御殿殿内から追い出す考えで、ねたんでいたので。

「誰が尻をひつたのか」と王様が聞かれたそう、

「その女がひりました」

「美人だけど、場所をわきまえないのならここから出て行つてもらおう」。(女は)久高に追い出されたが、その時にはおなかに子どもがいた。

何年か過ぎ、その子が成長してから、

「お母さん私のお父さんはどこにいますか」

「あなたはお父さんはいません。私だけの子です」

「お父さんがいたからこそ子どもが生まれたはず。お父さんのことを教えてもらえなければ私は死にます」

といつたら、

「ああ、そうですか。ねえ、あなたのお父さんは首里

※上中城 中城村。本島中部。中城城など名所がある。
※中城殿内 総地頭の御方家をさす俗称。身分の高い人が住む屋敷。



の御殿殿内にいらつしやるので、この話をしなさい。尻をひつて追い出された人の子どもですと言いなさい」と教えた。そこで、訪ねて行く、

「お前はどこの子か」

「私のお母さんは昔はここにいましたが、尻をひつたため追い払われました。私は久高島から来ました」

「それなら、お前は私の子なのか」と、

「はい」

「さあそれならお母さんを連れてきなさい」といわれて、また一緒に暮らしたそうだ。

③ 黄金の瓜種

伊佐ツル（大正五年生） 酒瀬

「方言原話」

昔、えらい所にお嫁に行ったら、そこのお嫁さんがオナラを出したもんだから追い出されて、そのイキーぐわーがね、

「尻ひりウンジャニ買いみそーり」し、ひじゅうーうまぬ家ぬまんまる、まんまる歩ちえーるばーてー。あんなさくとう、

「あぬ物売やーぬーあびーが、ありしえー」んでい呼ばーに

「あい、ぬーやが」んでいやーに、

「尻ひりウンジャニ買いみそーれー」でいちゃぐとう、

「尻ひりウンジャニんでいちんあみーでいちゃぐとう、

「あんするむんぬや」。どうーぬ姉さん出じやちえーしえーやー。あんすくとう、そついう風な話やった。

これ首里の方の話。

「共通語訳」

昔、由緒ある家にお嫁に行ったら、そこのお嫁さんがオナラを出したもんだから追い出されて、その弟が、

「尻をひらない種物買って下さい」と、しよつちゅう姉の嫁いでいた家の周りを、回っていたそうだ。すると、その家の人が、

「あの物売りはなんて言っているのか、聞いてみよう」と呼んで、

「あなたが言っているのは何ですか」と言われたので、

「オナラの出ない種物を買って下さい」と言う、

たので、

「それなのにね、（私の姉を追い出すすか）。自分の姉さん出しているさあねえ。それで（仕返し）をしたような話であった。

これ首里の方の話。

④ 黄金の瓜種

平田嗣光（大正六年生） 登川

首里王府の女官、そこに非常にきれいな女性がおつて、非常にお気に入りになったんでしよう、王様の。ただし、この人は尻をこくことは非常にすごいと。孕み女の時にウスガナシーの前で公表やったと。（女がお気に入りであったので）他の女官達がうらやまし



がつておるわけですよ。」「王様のごひいきにあずかつておるのに、いつかはおい落としてやろう」という魂胆はあるけれど、その悪さがつかめないものだから歯がゆく思っている時に幸いにそういう事件があったので、これを大幅に話を流してハジをかかそうと。そして自分自身を引くだろうということにして、「多分王様では、きれいなお方だから、おそろくいつたつて追放しないはずだから、皆で笑いにしたら身を引くだろう」ということでやったら、案の定その女はいたたまれなくなつて、腹に王様の種を宿しながら久高島かどつか列島の方に落ち延びたわけです。

そこで、子どもは産み落として立派に成長させて。それが年頃になつて、王様の種であるためにか徳が高いわけですよ。ある時、海に色んな黄金の瓜が流れてきて、そして、それを拾い上げて種にして作物にしたんでしような。

物心ついたら、今度は、その子も自分の父親を尋ねるわけです。

「私のお父さんはないのか」と。で、言えないわけですよ。しかし、その子はどうしても自分の親を探すと、父親を探したいと執念に燃えるわけです。で、ある時、親が言ったのか周囲から聞かされたのか、「お前は王様の子だよ」というふうなことはわかつてしまつたわけ。そこで、会いたさに首里に行くわけです。そこで、「黄金の瓜種買いませんかというふうによびないで歩いたら、多分人が騒ぐからその時に王様に耳に入るはずだ」と言う事で、その「黄金の瓜種だ」

といつて売り歩いたため、案の定ひつかつたわけですよ。役人に。で、これ、こういうような城下町をなにもも持って歩くということもあつたはずだが、不思議もあつたでしょう。そこで王様の前に呼び出されたわけです。その時かなあ、

「この種は絶対に尻をこかない女に植えさせたらね、立派な黄金の実になります」ということを証言するわけです。そうすると、女官連中もそろつておつて笑つたわけです。

「この世に尻をしない人がおるか」と言わんばかりに、

「いや、おります」と王様も言つたわけです。親も。

「そんなものはこの世にない」と。

「いや、あります」と

「事実あるんだ」という事を言つたら

「おかしい」と。もう、ほんとに怒られているんですが、

「じゃあ、なぜね尻をこいたために追放された女があるということ、どういう意味か」と言つたら、

「そういうことがあるのか」ということで、女官にただしたら、

「だれそれがしは、そういう時にシマ下がりしたんだ」と。

「首里城から下がつたのはその理由だ」と言つたら、

「それは申し訳ない」という事になって始めて親子の対面をした。そして、正式に王子として認められたというように結んであるはずですよ。

⑤ 黄金の瓜種

喜納養儀（大正七年生）東

奥さんが妊娠しておる時にね、旦那さんの所で屁出したわけだ。

「これ無礼者」といつて、これ（妻）を旦那さんが箱詰めして海に流したわけ。これ久高島に着いて、それで、久高島で子ども産んでむこうで育っておると。どうして教えたか知らないけどね、大きくなってからその子どもが、わざとこの旦那さんの所行つて、

「屁ひりンージャニ（瓜種）買りよー（屁をひらない瓜種買いませんか）」と声を出して歩いてた。このお父さんは珍しがつて、

「この屁ひりンージャミというのはどういふものかねえ。聞いたこともない」つたらよ。それで、やつとかと子どもと話あいううちに自分の子どもであることわかった。それで、子どもさんにお詫びして、お母さんは連れ戻した話だがね。

一四 枯骨報恩

(一) 歌い骸骨

① 歌いがいいこと

島袋盛保(明治三十七年生) 知花

昔は侍というものは田舎より非常に厳しくて、殊に首里の士族というものは非常に強かつたらしいんだから。外に出るといことはめつたになかつたらしいね。それで、その娘さんが、下男と友達になつてしまつて、(それが他の人に) わかつた頃になつて、今度は親戚同士の協議やることになつて、「こういうの、どう始末するか」ということに厳しい協議の始まるということが決まつたので。それで、もう、その娘さんは心配して、『皆にこんなふうにされるよりは、この世はなくてもいいから』つて言つて自分で自殺したらしい。

そうして自殺して、昔のこの侍の屋敷はあまりにも広くて、家族の者でも(廻ることはなかつた)。とにかく、屋敷全部、そこは下男たちが掃除するのだが、そこ(娘が自殺した場所)まではいかないので、白骨になるまで、誰も見ることはなかつた。

それで、マーティクといつてありますね。それが骸骨を持ち上げたもんだから、とにかく風当たりも強くなるわけだから。そこをサンカという町に通つておる馬持ちや^{ウマモチヤ}が、毎日、始終歩いておる道路の側だつた

らしいんだから。この死んで自分の墓に埋葬したら、ナーチャミーとかミツチャミーとかあるでしょう。ナンカとかいって、水を飲ませたり花をあげたりするから。そんなものも、もう、誰がもやらないわけさー。それで、このう、

北風^{キタカゼ}んすぎわ み髪^{ミカミ}ん痛い

(北風が吹くと 頭が痛い)

サンカ水^{サンカミヅ}欲や かんがあゆる

(現世での水欲しさは こんなものか)

こう言つたら、その骸骨が、人は見えないんだが、歌うのは馬引きが聞いたので、『そういう声があつたんだが』と言ふことを告げたら、全部捜してみたら、骸骨が竹の子に上げられて、それで風にもよく当たるから、乾いて誰がも水をあげないからといって、「見てくれ」と言わんばかりの魂の声だつたかもしらんが。

それで、その後から、そんなに厳しくはやらないようになつたという話もあつたです。それで首里の殿内^{ノミヤ}とか御殿^{ノミヤ}とかの屋敷内には必ずマーティクを植える習慣もあつた時から出たという話。

枯骨報恩 ある人物が、たまたま骸骨

のある場所に行き合せて、これを実家

に告げ、あるいは手厚く葬つてやり、ま

たは加害者に対する悔悟を表明して骸骨

や家に返す話。

※1 マーティク 唐竹。

※2 馬持ちや 馬車持ちのこと。

※3 ナーチャミー・ミツチャミー 葬式

の習俗に茶・花・水・お菓などを持って

墓参りする。死者が蘇生してい

ないかどうかわかるためだといわれ

る。ナーチャミーが翌日、ミツチャミー

が翌々日に行われるが、普通はナーチャ

ミーが主体。

※4 ナンカ 亡くなった日から、七日こ

とに四九日までの間(ナンカ)と称して、

仏を供養するために執り行われる祭り。

※5 殿内 総地頭の親方に対する敬称。

※6 御殿以下の土家に対する敬称でも

ある。

※7 御殿 首里に移り住んだ按司階層に

対する敬称。またその邸宅。王の世子・

王子の邸宅についてもいい。また、これ

らの人々の敬称としても用いた。



一五 その他

(一) 生き返った娘

① 生き返った娘

仲村カマ(明治三十四年生)高原

これ、牛すんちやー(牛飼人)が、牛買つて帰る途中雨が降つたから、晴らすといつて(墓に雨宿りをした)。昔はね、こうして(お墓に)、少しチラガタカーといつて通りよつたさ、人が死んだら、そこ(墓を背)におして座つたから、この(じくになった)人が、うちからカンカンしてね鳴らしたから、

「あなたたちの娘は生きてるよ」と言つたからね、
 これまた、

「そうか」と言つてね行つてみたら、生きていて。そうして、その人の妻になつたという話聞いた。

② 生き返つた娘

宮城ツル(大正十三年生)センター

シンジュ(墓)の中でね生きている人がいたつてよ。ある侍さんがさ、侍の娘さんがね亡くなつたつてよ。そしたら墓に埋めたつて。そしたらね、墓、墓でね生き返つたわけだね。

そつてある侍が三人ね、三人夜遊びしてから帰る時に雨が降つたつて。そつて墓の所に隠れたつて三人。そしたら一人の人をね、この石垣を崩してね髪掴まえ

てるわけだ。そしたら自分は、「あ、あの世の人だ、掴まえてる」と思つてびつくりしてからね。でも押さえてからさ、ガタガターしながら押さえてね、隣の人にね、

「あんたね、何か今ここにあつたら三人は一緒に何事も助けるか」と言つたらね、

「助ける」と言つわけ、これもね。で、あれにも、

「助ける」と言つわけね。そしたら、

「自分はね、(これから話すけど)約束だよ」と言つてね、

「自分はね今、墓の中から縛掴まえられているから、じゃあ、これを助けてちょうだい」と言つたら、

「ウワツ」つて皆逃げるわけさ、二人は逃げるわけだね。この人はもう掴まえられてね、皆逃げたからね、
 でもね、あの、

「墓の人よ、何で私をね掴まえているか」と言つたら、
 「自分はね死んでもないのに暗いところに入れられている。だから助けてちょうだい」と言つわけ。

「じゃあ、ここ離しなさい」と言つてね。そして、蹴とか、カニ(金属製)の真つ直ぐがあるさあ。あれを持ってきてね崩してからね、生き返つているわけ。そして生き返つたからね、家に行つて、

「あんたの娘さん生き返つているよ」と言つて、この人の妻になつたつて。後生戻(あの世戻り)いつていう名付けたつて。

※「チラガタカー」(チラ)は顔で「ガタカー」はささぎるで、相界をささぎる意
 味

(2) 宝比べ

① 宝比べ（子は宝）

久場カメ（大正二年生） 團田

〔方言原語〕

ヒンスームンや子うしが銭のーねーんでいし。また、ヒンスームンとうやエーキンチュとう勝負さんでい。エーキンチヨー銭ぬん債詰しいちよーてい。また、う孫子ぬうふさしエーや、う孫子とう勝負やるばーてー銭どう。う孫ぬうふさつ人闘いんたんでいちてー。さくとうよー、銭ぬまどーる人泣ちみしエーたんでい。

「子うらんや、銭とー笑らんや、う孫子とう笑らりーる」つちよ泣ちみしエーたんでい。あんし、銭ぬ上んかい登とーていまでい見じたんでいさ、銭持ちーや。「銭やかやう孫子宝ん」でい。

〔共通語訳〕

貧乏者には子どもはいるがお金がない。そこで、貧乏者と金持ちが勝負したそうさ。金持ちはお金を債詰めしてそれに座っていた。また、孫や子どもの多い人は、孫と子の勝負なんだねお金と。孫の多い人は孫が勝りをしたといつてね。すると、お金持ちの人は泣いていたそうさ。

「子どもがないので、お金と笑うことはできないが、孫や子とは笑う事ができる」といって泣かれていたそうさ。そこで、お金の上に登ってまでも（子どもた

ちの踊る姿を）見ていたそうさ、金持ちの人は、「お金よりね孫や子どもが宝だ」と。

② 子は宝

佐渡山ゴセイ（大正三年生） 城前

〔方言原語〕

これは、

「いったーが一世の中に一番宝は何か」と言うというたというか、一人は、

「お金」といって、一人は

「子ども」というたつて。して、

「いったーや、銭見ちよーてい笑りーみ。銭見ちえーて笑らんしが、子ども見て笑われるでしよう」でいーたんでいがらー。「銭どうん笑りみ、子見ちどう笑りーる」でい。

〔共通語訳〕

これは、

「いったーが世の中に一番宝は何か」と言ったら、一人は

「お金」といって、一人は、

「子ども」というたつて。して、

「あなた達はお金を見て笑うことができますか。お金を見て笑うことはできないが、子どもは見て笑うことができるでしよう」といったそうさ。「お金と笑うことができるものか。子どもを見てこそ笑うことができるものだ」と。

③ 子は宝

仲村栗シズ（明治四十二年生）安藤田

〔方言原語〕

ちゆとろくまーエーキンチュ子うらんぬー、ヒン
スー者子うほーくうたんでい。あんすくとう、子産さ
んとうくまエーキンチュでいち、ぬーんくういまん
どーたんでい。あんすくとう、上から調びーがちゃ
くとう、倉からぬーんくうい出じやち見してーるばー
てー。途中うてい雨降たぐとう、見じやーやけー逃ぎ
てい、うぬヒンスーぬ子持ちぬ入ていとうらさーなか
助かたんでい。

〔共通語訳〕

一カ所は金持ちで子どもがなく、貧乏者は子どもが
たくさんいたそう。それで、子どもがいなくて
は金持ちで、なんでもたくさんあつたそう。そこで、
役人が（財産を）調べに来たので、倉から何もかも出
して見せたようだね。（その）途中で雨が降つたので、
調べに来た調査員は逃げたが、もう一方の貧乏者の子
どもたちが（倉から出したものを）入れてあげたので
（金持ちは）助かったそう。

④ 宝比べ

松下盛一（明治四十五年生）池原

〔方言原語〕

あるばーにて、銭持ちぬ家や祝儀ぬあたんでい。銭
ぬんどうくまんでいナーんかいまじれーたんでいく

とうて。うりが、また、子持ちえーな、子ヒリヒリ
産ちよーぐとう銭のーねーんしえーや、あんし、う
しえーいたんでい。ざくとう、うぬアシビクルマーに
て、あんざくとう、うぬアシビくぬでてー、銭のー
くだみていアシベー見ちよーしが、子くだみたんでい
いやーに、うりから、（銭）やか子どう宝やさやーんでい
るくとうんかいなとーたんでい。

〔共通語訳〕

ある時にね、金持ちの家の祝いがあつたそう。お
金があまりにもたくさんあるので、庭に積み上げてい
たというそうだがね。それが、また、子持ちは、子ど
もが次々生まれるのでお金はないさあねえ、それで、
バカにしていたそう。すると、アシビがある時に（そ
のアシビを見ようと）、お金を踏みつけてアシビを見
たそうだが、子どもを踏むことはなかつたということ
で、それから「お金より子どもが宝だなあ」と言われ
るようになったそう。

⑤ 金持ちと貧乏の宝比べ

桑江朝盛（明治四十五年生）中の町

金持ちと子どもだちどつちがいいかという勝負し
て。金を積んで、金は積んでね、お金を積んで、それ
から子どもは舞を教えてね、舞を教えて。そして、「み
んなどこに人が集まるか」という勝負したらしいんだ
よ。金は踏んで踏みつけてね、子どもの所にみんな集
まつたという話があるよ。

(3) 塩が一番

① 塩が一番

昔久原幸(大正五年生) 泡瀬

〔方言原話〕

(王様を) 城から出^けじやさーに、な、毎日^やまいさむんムノくいやーに、まーさむばかーかどーぐと、人ぬ苦しさんむるわからんしえーや。あんさぐと、外に出して遊ばさーにさくど、

「私^{わたくし}ねーいふーなーやつさー、いふーなーやつさー」し。やーさでいっしえーわからんしえー。あんさー

「さいたーやさ、さいたーやさ」さくど、その時になにか、まずいものでもあげたんでしようねえ。うりがまーさたんでい。あんさーに、

「一番世の中なか、まーさしえーぬーやが」んちゃぐと、

「やーさいにかだし」でいたんでい。

またね、

「一番まずいのは何ですかー」でい聞^きちゃぐと、

「塩」といつたて。

「一番まずいのは何ですかー」でい聞^きちゃぐと、

「塩」といつたて。

「なんで、あなたさつきも塩といつて、またも塩といつか」でいちゃぐと、今度は、

「塩というのは一番必要なものであつて、うりが過ぎたらおいしくない。少なくともおいしくない。だからね、また、いい加減にできたら、これより美味しいの

はない。美味しく作れるのではないでしょう。だから、こんなことでね、まーさしん塩^{しん}にーさしん塩^{しん}でいたんでい。

〔共通語訳〕

(王様を) 城から出して、ね、毎日おいしいものをあげて、いつもおいしいものばかり食べているので、人の苦しみというものは全くわからないさあねえ。そこで、外に出して楽しませていたら、

「私はなにか、変だなあ、変だなあ」と。おなかすいたということがないので、

「妙だねえ、妙だねえ」というので、その時になにかまずいものでもあげたんでしようねえ。それがおいしかったそうだ。それで、

「一番世の中でおいしいものは何か」と聞いたら、

「おなかすいた時に食べるもの」といつていたそうだ。

またね、

「一番まずいのは何ですかー」と聞いたら、

「塩」と答えたそうだ。

「一番まずいのは何ですかー」と聞いたら、

「塩」と答えたそうだ。

「なんで、あなた、さつきも塩といつて、またも塩といつかねえ」というと、今度は、

「塩というのは一番必要なものであつて、それが多ければおいしくない。少なくともおいしくない。だからね、また、いい塩梅の加減なら、これよりおいしいのではない。おいしく作れるのではないですよ。だから、こ

んなことでね、美味しいのは塩、まずいのも塩」と
いつていたそうだ。

② 塩が一番

徳里カメ（大正七年生） 園田

〔方言原話〕

御主加那志前がね、いつもご馳走炊いてあげるで
しよう。それからもう、あげるのもないから、そ
の、コックさんが聞いたんですって。

「な、何やー一番まーさいびーが、んちやくとう、

「一番まーさいえー、塩やん」でい。

「何ぬむぬんかい塩入りらんあいねーむるまーこー
ねーんくとうや、塩入りねー何んまーささ」んでい言
みしえーたんでい。

〔共通語訳〕

御主加那志前にね、いつもご馳走炊いてあげるで
しよう。それからもう、あげるのもないから、そのコッ
クさんが聞いたんですって。

「なにが一番美味しいですか」と尋ねると、

「一番おいしいのは塩だ」と答えたそうだ。

「どんな食べ物でも塩を入れないと美味しくないので
な、塩入れると何でも美味しいもんだよ」とおっしゃっ
ていたそうです。

③ 塩が一番

渡藤次千代（大正十一年生） 泡瀬

〔方言原話〕

昔王様ぬ、

「一番世ぬ中ぬまーさむのーぬーが」でいちやくぐと
や、

「塩」でいちやくぐとう、

「うりが塩ぬんからさどうあんむんぬ上等やんなー」
んちよーるふーじーやてーるばーてーや。さくとう

よ、あふあむん王様に持ち行じやくぐとうや、

「うりがーかまらん」でいちえーるふーじてー。あん
さーに塩ぐわー取ちやーに入つていさくとうや、い

い塩あんべーなやーにまーさてーるばーてー。

「ああ、やつぱり世ぬ中ぬまーさむのー塩やさやー」
んでい言たんでい。

〔共通語訳〕

昔、王様が、

「一番世の中で美味しいものは何か」というので、

「塩」と答えたら、

「それは、塩はからいのに上等なのか」と言われたよ
うなんだね。すると、味の薄いものを王様に持つていっ
たら、

「それは食べられない」といわれそうなんだね。そこ
で塩を取って入れたらね、いい塩梅になり美味しかっ
たようなんだね。

「ああ、やつぱり世の中で美味しいものは塩なんだね」

と言っていたそうだ。

④ 塩が一番

昔久原ウシ(大正二年生) 嘉間良

娘三人いたつて。娘が三人いるけれど、お父さんが娘たちに、

「何がおいしいかねー」といつたら、長女は肉とかなんとか言つて、次女もそう言つたつて。三女が一番ご馳走は、

「塩(塩)」といつたから、

「あんし、私にんかい塩どう喰^くすんなー。(それで、私に塩をくわすのか)」。そしたら、それから親子が反対、反対なつて。

「親にこんなこと言うかねー」といつて。

いつかまた、何かがある時に、このお父さんこつちに呼んでご馳走作つてあげたつて。ご馳走作つてあげたから、何も味付けしないで、あふあむん(薄味のもの)出したつて。あふあむん(薄味のもの)出したから、「いつたーむのーうり、何ん味んちちえーねーらん、あふあさぬ食まらん。(お前達のもの、これは何の味も付いてないので食べられない)」といつたそうだ。そしたから、

「一番クワツチーや、あんさくとう、塩^{しほ}やらやー。(一番ご馳走は、だから、塩でしょう)」といつたそうだ。

⑤ 三人娘の塩が一番

佐久田千代(大正七年生) 室川

お父さんのねお祝いの時に、娘三名いるけど、一番の娘さんは豆腐、二番の娘さんはお肉、三番の娘さんは塩。そしたらね、一番と二番はほめるけどね、三番はどつても怒つてよ、お父さんが。「もう、あんた来なくてもいい」と言うあたり怒つてから。そうしてね、「あんしえーさんさ、もうあげないという意味で、あげなかつたわけ。そうしたら、お客さんたくさんいらつしやるでしょ。お客さんのもんは全部同じ味作つてよー。やつぱし塩も入れて。だけどお父さんのもんばか、おかすもおつゆも全部塩入れないでそのまま出したからね、お父さんも怒つてからね、

「こんなにして食べられるもんかー。こんな大きなお祝いの時にね。こんな駄目つて」つて怒つたからね、「ぬーがお父さんがるや塩をすなんですたくとうや、塩お入てーねーらんどー」(どうして、お父さんがね塩は入れるなというから、塩は入れてないんですよ)と言つたから、やつぱしお父さんがね、子どもさんにねワビ(謝る)しよつたつて。

その時からね、「子にどうムンならしえーさりーる(子どもに教えてもらうんだね)」とね。一番目と二番目(の娘は)ほめて、こん度は三番目は怒られて。ご馳走も、お父さんのなんでも(味を)うすくしているわけ全部、お父さんの前に出すのは。その時からね、お父さんやつぱし子どもにもね、「ムンならしされた(教えられた)」ということよ。

⑥ 塩が一番

佐渡山ゴセイ（大正三年生） 城前

私もこれはただ、

「いやーが一番世ぬ中にまーさしえー何やが。（あな
たが一番世の中で、おいしい（と思うのは）何か）」つ
て言よったつて。て、あの一、たら、今言うたように、
「塩」と言う人がいたつて。

「世の中の何があんしー、塩ぬまーさんちんあみ（世
の中で何といつても塩が一番おいしいということがある
るか）」つて言うたから、

「いかな何まーさむんやたんでー（どんなにおいし
いものでも（料理に）くり、（塩を）入れないとおいしく
ないでしょう）」と言いよったつて。

だから世の中のまーさむのー（おいしいものは）塩つ
て。味付けがないから。どんな人かーこれ尋ねたか分
からんけど、また、答えた人もどんな誰とも聞かんけ
ど。こんなあれがあつたつて。

⑦ 塩が一番

金城初子（大正五年生） センター

本当の自分の娘たちに、この殿様が一人一人に聞い
たから、「お肉が一番おいしい」と言う人もいるし、「魚
が一番おいしい」と言う人もいるし、また、

「これだけか、人数はこれだけか」と言つたら、

「もう一人います」と言つて、この継子の、

「あなたは何かいいか」と言つたら、

「一番おいしいのは塩です」と言うたから、褒美貰つ

たこの話。何でも塩入れないとおいしくないつてこと
から、殿様にほめられたつて。

(4) 旅人とウナイ神

① 船旅とウナイ神

新崎カマド（明治四十二年生） 中の町

どうく、このネズミがあんまり沢山なつたもんで、
もう、産む時にも十匹ぐらい産んでるでしょう。う
るさくてね、お家にもうるさくて。

このウンミーというのは、ちよつと、神、何か、生
まれが高かつたんでしょ。船からネズミが下りてく
るとね、ネズミが下りてきたら、「この船は危ないか
ら行くな」と言つて、乗る船を下ろしてから助かつた
わけ。それがウナイ神。船の海で事故のある時は、ネ
ズミでもみんな下りてくる。な、ネズミが先下りてく
るつてよ。それを見てから、生き物が早く下りてくる
そうだ、船が沈む時には。

「エンチユぬ下りていちゅーぐと、行くな。うりか
ら行くな。なーちゅけーに行き。（ネズミが下りて
来るので行くな。その船からは行くな。次の機会に行
け）」と。あんさくとう、出じとーるしんかーうぬ船え
沈じでーるばーて。あんさくとう、助かとーるばー
てー、自分ぬイキーや。自分ぬ兄弟や。（だから、出
て行つた人たちの船は沈んだわけさあ。だけど（行く
なと引きとめた兄弟は）、助つてゐるわけさ、自分の
男兄弟は、自分の兄弟は）。

★生まれが高かつた
生まれつき能力
が強いこと。



こんな話聞いたことある。だから、見送りにも「ウナイ神」といつて、何の見送りにも兄弟が女が先になつて行くさ、どんな忙しいでも。自分の兄弟が、内地に船乗つて行く時は見送りに行くさ、飛行機でも。

② 船旅とウナイ神

昔久原幸（大正五年生） 泡瀬

〔方言原語〕

船んかい乗てい遭難そーし、あんざーい、なま助しきーんでいち、ニブイし助しきーる所やたんち、親ぬ起くちやたんでい。「なーやがていやたんむん、なーやがてい助しきーたんむん、だー」でい言ちよーるとくるやたんでい。あんすくとう、うれー本当ぬうぬ時は船ぬ遭難していたつて。ウナイ神んちよ、ウナイやうんぐとうーしすんばーぬあんでい。

〔共通語訳〕

船に乗って遭難しているのを、そこで、今助けようとして、居眠りして助ける所を、親に起こされたので（助けることができなかつた。「もう少しだったのに。もう少しで助けることができたのに、残念だ」と言っているところであつたそうだ。すると、それは本当にその時は船が遭難していたつて。ウナイ神といつて、ウナイはそうやつて助けるときもあるそうだ。

③ ウナイ神と船旅

仲栄真セツ（大正五年生） 中の町

兄弟二人よー旅に出るけど、この女の人はサーダキ生まーりーるばーり（靈力の高い生まれをしている人であるわけさ）。機織りながらよ（寝てしまい夢を見て）、舟が溺れようとしている、もう、沈みそうになつたからね、一人はこうして（手を出して）ひっぱつて、自分で助けて、一人はこの（もう片方の手で）救おうとしているけど、誰かがこんな（パンと叩いたので、目が覚めて手を離）したからよ落ちていくわけ。だから一人は助かつて、一人は死んでいるわけ。これはウナイが、ウナイ神が助けているわけ。

(5) 道楽者の田植え

① 道楽者の田植え

鳥袋次郎（明治三十四年生） 知花

〔方言原語〕

代ぬ苗根ぐいから壊さーに、皆や泥しーていーかたみてい田んかい持ち行じ植るばーり。うぬ道楽者や泥うまなかいうつちやーに十人びちえーするばー、どうー一人し。あんしん、うりがむのー皆者やかー先出来とーるばー。あんざくとうや、

「ハーツ、ありがむんでいきたー私たーむぬやかましやるむん。でいーうんぐとうーさ」ち、あんしから、苗代ぬメーダねーかんしうーじ、うりが始みたんでい、道楽者だに。

※1 ウナイ神 兄弟を守護するといわれる姉妹の霊。
 ※2 サーダキ生まり 生まれながらにして靈力のある人。
 ※3 メーダねー 稲の穂程。



また田打ちゆしん、皆や、な、しぐいつそーかじーし、ハローかじねーするば。あんしが、うれーまたな、ちゅみーぐーしーし、溝ぬぐどうしけー作くいしえーや。え、あんしえー田や、んじゅみてい、土やふあらちゅんど。しぐかじてーしえーくふあさしがて、かんし、ちゅみーぐーしーふしえー。かんちゅくとーていむや、うまやビリーなどーるば。ひるまさんど、うりばかーじえー。あんし、うりん、うりが始みたんでい。皆な一四、五人さーにしどうあんする、うりどうー人さーになーうりどう。うりする人うらんば。いーしえーする人ぬうらんばーて、共同作業する人、あんさーにうりが始みたんでい。あんしからどう、田打ちゆしん、メーダ二うーじ、植しん、うぬ道業者から始みたんでい。

〔共通語訳〕

苗代の苗は根っこから引き抜いて、皆は泥ごと担いで田に持って行って植えるわけさ。この道業者はね泥をそこで落として（持っていくので）十人分の仕事をしているわけ、自分一人で。それでも、道業者は皆のものより先に出来たわけ。そしたもんだから、

「ハーツ、あいつのものの出来が私達のものよりいいな。さあ、あのようにしてみようか」と、それから、苗代の米種子はこう泥を落として（から植えることは、道業者が始めたそうだ、道業者が。

また田を耕すのも、皆は、もう、すぐ片っ端から耕し、畑を耕すようにしていた。だけど道業者は、ま

た、一つおきに耕して溝のように作ったわけ。ねえ、そうして耕した田は、たいそう土が柔らかくなるんだよ。そのまま耕した土は固いけどね、こうして、ひとつおきに耕した土は柔らかい。そのように耕やした田は、そこは土がとても柔らかくなっているわけ。珍しいよ、そればかりは。そして、それも、その道業者が始めたそうだ。皆はもう四、五人で耕すが、道業者は自分一人でやるから。その道業者の手伝いをする人はいないわけ。力を貸してくれる人はいないわけさ。（皆は）共同作業するさあ、だけど、（道業者には手伝う人がいないので）それで、そういうことも道業者が始めたそうだ。それから、田を耕す方法も、米種子の泥を落としてから植える方法も、その道業者から始めたそうだ。

(6) 婆いるか

① 婆いるか（塩は嘉例）

金城ハル（明治四十一年生）東桃原

夫婦がね、とつてもお互いに愛して仲が良かったつて。子どもが出来なかつたつて。そしたらね、旦那さんがね、

「私が死んでもあなたは結婚しないでよー」つて。またこの奥さんが死んでもね、

「結婚はしないでよー」つて約束していたつて。そうしたらね、始めは旦那さんが亡くなっていたつて。そうしたら、



「亡くなつてもお墓に入れないようにしなさい」つて、
そうしたらね、

「ああ、そうする」といつてね、大きいカメに入れて
置いてあつたつてクチャグワー（裏座）に。そうした
らね、この時にね、そのおじいさんがね、

「カマルー、カマルー」して呼んでいたので、

「はい、うんどう（はい、いますよ）。な、一歩も外
に出さなかつたつて。

「はい、うんどう（はい、いますよ）」でいそーにや、
かついで塩売りが来たからね、

「チャーピラタイ（ごめん下さい）」

「ハイサイ（はいどちら様ですか）」

「塩お買ひそーらんがやー（塩は買ひませんか）」と
言つたからね、

「はい買ひますよ。だーあんしえー（京判ぬ一枰買ひ
びらやー（それなら、京判の一升買ひませうねえ）」
と言つてね、

「京判のーねーんむん、んだ、隣（とろい）じ借（か）りていちゃーび
らうー（マスがありませんので、隣で借りてきましょ
うねえ）んちやくとうや。隣に行く間にね、（私の名
前を呼んだら返事をしていて下さいと塩売りにお願い
して出かけた）。

また、このおじいさんがね、「カマルー、カマルー」
して呼んでいたので。そうしたらね、その塩売の兄ざ
んがね、「不思議だねー。こつちの家は誰もいないの
に不思議だねー」と思つて、あつちこつち回つても誰
もいない。そつたら、裏ぐわー行つたらね、そこにカ

メがあつたつて。蓋があつたつて。その蓋を開けた
らね、幽霊になつて（旦那さんが）出ていたつて。

「ワーツ」つて驚いてね。そのお兄さんはね「いい塩梅、
塩があるのに」といつてね、塩でこうして全部撒いた
からね、すぐ、そのままカメに入つていたつて。

その例からね、この塩はね葬式に行つても、この塩
あげるそうだよ。

(7) サギピサーはいけない訳

① サギピサーはいけない訳

上根ウサ（明治三十一年生）宮里

「方言原話」

「私が死なば妻え探めーんなよー。いやーが死なば、
夫（う）お持つなようー」んでいやーに。妻ぬ死じやくとう、
妻探めーやーに、私ねー苦しみざーに。あんざーう
まんかい人ぬ下ぎ足しちやくとう、床下から足どうつ
かちみやーい、

「えーえーどうしんちやー、えー、私足ハブのくーとー
てい、くーとーてい」どうしんちやー見じやーに、

「ああ、でーじ」んでい過ぎやーに。

「くぬ、ぬーやらわん、まじ」んでいち、見ちやくとう、
内なかい女ういや。

「どー、なーや私に見らつとーくとう」。くれーまた
坊主やんでーは。

「私に見らつとーくとう。私たー家んでい、夫うー
しが、私が亡さば妻とうめーらぬ。また、夫ぬ亡さわ、



※1 京判 一升枰。

※2 塩 腐敗けになつたので、めでたい
塩の意味。

※3 下げ足 縁側などで、足を地面につ
けないで、床から下にたらすこと。

※4 ハブ 沖繩に生息する陸生毒蛇のう
ちのハブ・ヒメハブ・サキシマハブの三
種の総称。毒性は非常に強い。

「あんだ、私のお金取ったから今返せ」と言われたつて、この助けた人にと。

「今返せ」と言われたらねこの人は取ってないでしょう、お金は取ってないでしょう。白骨だから助けたんだつてね。だから、これが裁判になってしまつてよ、

「この人が私のお金を取りました」といつてね。

「私は取ってないです。あなた、こうこうだった」といつてもね、も、聞かないつて。

「いやーがる取てーる、いやーがる取てーる（お前が取ったんだ。お前が取ったんだ）」と。裁判にしたらね、この人がね、

「あ、ね、これは証拠があるから」といつて。なぜかといつて、

「うれーや、うりがむのーソーキブネーていーちえー不足やたぐとや、私ねートーマーミぬ骨や、ありーちえー入てーぐとや、とー、うれー、証拠やくとや（この人はね、この人はあばら骨が一つ足りなかつたの、ね、私はそら豆の骨ね、あれを一つ入れてあるからね、それが証拠だから）」といつたら、「それはもとに返せ」と返したら、やつぱし（そら豆の）骨が入つていたつて。この人はまた、このまま亡くなつたつて。

(9) キジムナー

① キジムナー（屁・魚取り・追い払い）

上洲マカト（明治三十八年生）比羅根

〔方言原話〕

うぬキジムナーや、ウミンチユーりさーに、毎日海んかい行じやーにて、うりが行ちーねーなうすまざ魚取いたんでいよー。

「屁ひーねー、うちゆるすんどーやー」でいちうりしよー。あんさーに、うりが持ちよーぐとやな、飛ぶるばーてー。飛だぐとや、えーりん「プー」みかちえーんてー。

「あい、いやー屁ひつちやらやー」んちやくとや、

「屁やあらん」。オージぐわー持ちよーてんてー。

「うりどうやたる」んでい。

「いやーや聞かんだろー、うりどうやたる」でいちうりし。あんさーにさくとや、な、毎日海え取ていちやーに。魚片目や扱じゆたんでい。片目やくぬキジムナーぬうちゆくわいどうばーてー、片目や扱じ。

あんさぐとや、な、家んかい来、「またん時分ないねー来るむん」でいいやーに、あんさーになー、「毎日すんかつてーならんむん」でいやーに、家ぬ上んかい登やーに、鶏ぬねーびーし、オージ「ち持ちやーにて、うりが来んたぐとや、な、オージヌーパタパタバタし、「タックルルーウー」し、鶏ぬ鳴ち声しえーんてーんてーな。うりから「戻ていはち、うりーから来んたんでい。毎日海かいすんかつとーたんでい。



キジムナー 沖縄島に伝承される妖怪。本島北部ではセーマ、フナガヤーなどの異名がある。赤い髪をした子供で、古い大樹の穴に住むといわれている。

海ヌーナー、ティールぬみちやカーナー取てい
ちゅーたんでい、なー。魚なーナー、うりがー持た
ん、キジムナーぬ持ちちよーぐとう、重くんねーんば
てー。ちやつさ取ていやていん。あんさーに家ち持ち
ち、うりさーに、むる片目や抜じよーたんでい。

〔共通語訳〕

そのキジムナーは、漁師を誘って毎日海に行つた。
キジムナーと行くとたくさん魚が取れたそうだ。

「オナラをすると、落とすしてしまふぞ」といわれてい
たようだ。それで、キジムナーにおぶされているので、
飛ぶことができるわけさ。飛ぶと（その拍子に）たぶ
ん、「ブー」とオナラが出たんだらうね。

「あれ、お前、オナラをしたな」というと、

「オナラではありません。」ウチワを持つていたらし
く、

「これだよ」と。

「あなたの聞き違いだよ、ウチワをおおぐ音だよ」と
言いくるめた。そんなこんなで、毎日、海に行つては
魚を取つてきた。（その）魚の片目は抜いたそうだ。
片目は、そのキジムナーが食べるわけさ、片目を抜い
て。

そうやって、また、家に帰つて来て、『またも、い
つもの時間になると誘いに来る』と思ひ、そこで、『毎
日誘われたらまらない』と、家の上に登つて鶏の真
似をして、ウチワ二つ持つてから、キジムナーが来る
時分に、ウチワをバタバタバタし、「クックルーウー」

し、鶏の鳴き声の真似をしたんだね。（それを聞いた
キジムナーは）それから戻つて行つて、それ以来（誘
いに）来なくなつたそうだ。

毎日海に誘われていたそうだ。海に行つた時は、カ
ゴのいっばい魚を取つてきていたそうだ。（取れた）
魚は、その方が持たないで、キジムナーが持つので、
重くもないわけさ、どんなにたくさん魚を取つてい
ても。そして、家を持つてきて見ると、全部片目は抜か
れていたそうだ。

② キジムナー（魚取り）

金城ナベ（明治三十六年生） 松本

〔方言原話〕

キジムナーとうどうしんちやーそーいに。あ、毎日
あびーが来や馬持ち。あんさーにキジムナーがうぶあ
せー。毎日やんでーひやー。毎日魚取いが。あんさく
とう、海んじ、うぬうぶあはつとーる人ぬ尻けーひつ
ちえーぎさん。すぐ、うつちゆるちよ、海ぬふあたん
じ。海ぬ中んじ浮ちよーたんでいどー。尻うとうるし
むんでい。人ぬ尻るふちゆして、プツプツプツし、
やたんでい。毎日やたんでい。んじ、また片目んだ
ねーむる抜じよ、片目んだねー抜じうりキジムナーが
くわていよ。あんさーなかい、ちやつさなーん取てい
持たすたんでいどー。うぬキジムナーとうしそーるお
父や。ちやさきーなーん。本家がやたらー。
尻けーひつちやくとう、うにんから来んたんでい。
家ぐわーんたつ壊ち、やー。うりが住まとーる。あり、



クワ一ギ木なかいんよー。うりたつ壊ちやくどうか
ら一来たんでい。

〔共通語訳〕

キジムナーと友達していた時のこと。ね、毎日誘いに来た馬を持つて。そしてキジムナーがおぶつて。(それが) 毎日のことであつた。毎日魚取りに。すると、海で、そのおぶわれている人が尻をこいたらしい。すぐ、(手を) 放したようだ、海の方で。(おぶされていた人は) 海の中で浮いていたそうだよ。尻は(キジムナーは) 恐いものだそうだ。人間が尻をひるものさ、ブツブツと、そうらしい。毎日誘いに来たそう
だ。それに、また片目玉はみんな抜かれていて、片目玉は抜いてそのキジムナーが喰つてね。そうだけど(魚は) たくさん取つてあげていたそうだよ。そのキジムナーと友達のお父さんは。たくさん。本当だつたかねえ。

尻をしてしまったので、その時から来なくなつたそう
だ。家も壊してね、キジムナーが住んでいた。キジ
ムナーは桑の木に住んでいたよ。それを壊した後から
は来なくなつたつて。

③ キジムナー(魚取り・尻)

吉田(鳥袋) タケ(大正七年生) 知花

〔方言原話〕

キジムナーとうどうしさーになり、ちやー海んか
いそーてい行じ遊ばちえーしーふたんでいキジ

ムナーがどー。うぬ人うふあさーに海んじ遊ばち魚
ぐわー取ていくいたいぬーさいし、な一、じこーどう
しやたんでい。あんしそーんでいるむんぬ、うぬキジ
ムナーでーじな尻ふいしでーじなうどうるしむんや
たんでい。あんざくどう、うふあはつとーしが尻やけー
ひつちやくどうよー、

「かんねーるむのー」でいいやーに海ぬ中んじちゅー
ら一く、けー落ちよー。あんし、ちやーしさんでいた
がやー、あーはー。あんざーになり、うにーからな一、
どうしえーな一キジムナーとーさんけーなどーたん
でいる話やしがてー。

〔共通語訳〕

キジムナーと友達になると、いつも海に連れて行つ
て遊ばせていたそうだ、キジムナーがだよ。その人
をおぶつて海で遊ばして魚を取つてあげたりして、も
う、たいそう仲のよい友達であつたそうだ。そんな仲
であつたそうだが、そのキジムナーはたいそう尻をひ
られるのが恐かつたそうだ。すると、おぶされている
人が尻をひつたのでね、

「こんなやつは」といつて海の中に見事に落したそう
だ。その後は、どうしたといつていたかねえ。それで、
その時からは、友達をキジムナーとしなくなつたとい
う話だつたがね。

④ キジムナーと尻

上根ウサ(明治三十一年生) 宮里

〔方言原語〕

キジムナーが人うさていくとう、

「まーんかいん連てい行ちゅん」でい言ちやくとう、

「いやー私なかいふあさつてい、しぐ尻んでーひー

らー海んかいふかち死なすんどー」んでい言ちさー

なかい。うーふあーしち行じやくとう、尻ひやーな

い、しぐ、海んかいんぶかち流りていやらちえーた

でい。

〔共通語訳〕

キジムナーが人をおそつたので、(キジムナーが、

「どこへでも連れて行く」と言つたので、

「お前、私に負ふされている時にすぐ尻などひろうも

のなら、海に落しておぼれさせるよ」と忠告してされ

た。(キジムナーに) 負ふされて行つたら、尻をして

しまったので、すぐ、海に落しておぼれさせていたそ

うだ。

⑤ キジムナー(尻)

平良ウシ(明治四十一年生) 安藤田

キジムナーと友達になつて、魚捕りに連れて行き

よつたつて。必ず、目玉取りよつたつてよ、このキジ

ムナーが、目玉取りよつたというけども。

負んぶして釣りに行くでしょう。釣りに行く時は

立つ所あつたかなあ。(魚を) 取つてきて尻ひつたら

さー、

「尻ひーなよーやー(尻をひるなよ) いゆうてね、尻

ひつたら、水の中でもゆるし(手を放し) よつたつて

いう話聞いた。

⑥ キジムナーの魚取り

富山茂(明治三十八年生) 美里

キジムナーどうし(友達)を作つてさ、キジムナー

どうしと一緒に海にね魚取りに行つたらね、とつても

魚がよく釣れた。ところが、その漁師のキジムナーと

一緒に取つた魚の方はね、左の目はみんななかつたそ

うだというようなことも聞いた。これ、なにかの暗示

かも知らんがね、子ども心にそういうキジムナーの話

を聞いた。

一 異類婚姻譚

[1] 婚姻・異類婿

(1) 蛇婿入り(芋環)

- | | | |
|---------------|------------------|----|
| ① 蛇婿入り | 与那嶺松栄(池原)…………… | 9 |
| ② 蛇婿入り | 幸島マツ(池原)…………… | 10 |
| ③ 蛇婿入り | 松下キヨ(池原)…………… | 11 |
| ④ 浜下り由來(蛇婿入り) | 柴野比トヨ(知花)…………… | 11 |
| ⑤ アカマター | 島袋トメ(松本)…………… | 13 |
| ⑥ 蛇婿入り | 内園シモ(城前)…………… | 13 |
| ⑦ 蛇婿入り | 屋宜ハル(安藤田)…………… | 14 |
| ⑧ 蛇婿入り(帽子) | 上江洲マカト(比屋根)…………… | 15 |
| ⑨ 蛇婿入り | 宮城タケ(与儀)…………… | 16 |
| ⑩ 蛇婿入り(赤てめぐい) | 高良カマ(登川)…………… | 17 |
| (2) 鍋蓋(芋環) | 島袋ウシ(池原)…………… | 18 |
| (3) 浜下り | 仲宗根カメ(登川)…………… | 19 |
| ① 蛇婿入り | 平田シゲ(登川)…………… | 20 |
| ② 蛇婿入り | 島袋次郎(知花)…………… | 22 |
| ③ 蛇婿入り | 玉城カメ(美里)…………… | 22 |
| ④ 蛇婿入り | 米原ヒデ(黒屋)…………… | 23 |
| ⑤ 蛇婿入り | 島袋義堅(古謝)…………… | 23 |
| ⑥ 蛇婿入り | 金城ハル(東桃原)…………… | 27 |
| ⑦ 蛇婿入り(てめぐい) | 昔久原幸(池澤)…………… | 27 |
| ⑧ 蛇婿入り | 比嘉カツ(中の町)…………… | 28 |
| ⑨ 蛇婿入り | 喜屋武英正(久保田)…………… | 28 |

(4) 字を書くアカマター

① 蛇婿入り

(5) 蛇婿入り

① 蛇婿入り

② 蛇婿入り(蛇女房)

(6) 犬婿入り

① 犬婿入り

② 犬婿入り

[2] 婚姻・異類女房

(1) 天人女房

① 天人女房(鉈切子)

② 天人女房(神繩の始まり)

③ 天人女房

④ 天人女房

⑤ 天人女房

⑥ 天人女房

⑦ 天人女房

⑧ 天人女房(猿魔王)

⑨ 天人女房(天から降る菓子)

⑩ 天人女房(歌)

⑪ 天人女房(歌)

⑫ 天人女房(鉈切子口説)

(2) 浜千鳥女房

① 浜千鳥女房

② 浜千鳥女房

③ 浜千鳥女房

(3) 猫女房

① 猫化け

(4) 木魂女房

① 木魂女房

② 国頭サバクイ(木魂女房)

桑江朝盛(中の町)……………

辺土名ナベ(池原)……………

渡口ヨネ(美里)……………

国吉キヨ(中の町)……………

吉村ヨシ(山内)……………

与那嶺松栄(池原)……………

幸島マツ(池原)……………

金塚永保(松本)……………

仲宗根セツ(中の町)……………

金城ナベ(松本)……………

永山ウシ(大里)……………

佐久本トヨ(池原)……………

松下栄吉(池原)……………

金城眞良(古謝)……………

吉田(島袋)タケ(知花)……………

島袋トメ(松本)……………

久田繁夫(明進)……………

昔久原ウシ(黒間良)……………

神里マカト(安藤田)……………

上根ワサ(美里)……………

上根ワサ(美里)……………

平野千代(明進)……………

比嘉眞松(城前)……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

二 婚 姻

- (5) 鶴と犬の育て子
 ① 鶴と犬の育て子

屋宜ハル(安慶田)……………55
 金城初子(セシター)……………56
 平安女骨鬼(園田)……………57
 昔久原ウシ(嘉間良)……………58

(1) 難題婿・嫁

- ① 難題婿(シゲダキ)
 ② シゲダキ
 ③ 難題嫁
 ④ ニーブイ虫次郎
 ⑤ アカバナ

島袋盛保(知花)……………59
 昔久原幸(泡盛)……………62
 昔久原幸(泡盛)……………62
 桑江朝盛(中の町)……………63
 金城初子(セシター)……………64

三 誕 生

(1) 子育て幽霊

- ① 子育て幽霊(打紙由來)
 ② 子育て幽霊
 ③ 子育て幽霊
 ④ 子育て幽霊
 ⑤ 子育て幽霊
 ⑥ 子育て幽霊(打紙由來)
 ⑦ 子育て幽霊
 ⑧ 子育て幽霊
 ⑨ ナーチャミ(由來(子育て幽霊))
 ⑩ 子育て幽霊
 ⑪ 子育て幽霊(へつ鳥)
 ⑫ 子育て幽霊(打紙由來)
 ⑬ 子育て幽霊

鳥袋ウシ(池原)……………67
 辺土名ナベ(池原)……………68
 平田シゲ(登川)……………69
 平田カマド(登川)……………70
 喜納カマ(登川)……………71
 柴野比トヨ(知花)……………72
 徳里静(住吉)……………74
 比原根善子(安慶田)……………74
 喜納兼優(東)……………75
 知念善助(古園)……………75
 桑江幸子(泡盛)……………75
 伊佐ツル(泡盛)……………76
 金城初子(セシター)……………77

四 運命と致富

(2) 仲順大主

- ① 仲順大主(幕出生)
 ② 仲順大主(幕出生)
 ③ 子育て幽霊
 ④ 子育て幽霊

當真アキ(胡屋)……………77
 喜友名トシ(園田)……………77
 宮城次郎(園田)……………78
 仲宗根盛雄(登川)……………79
 仲宗根フミ(登川)……………80

(1) 炭焼き長者

- ① 炭焼き長者
 (2) 産神問答
 ① 産神問答

神里マカト(安慶田)……………81
 昔久原ウシ(嘉間良)……………83

(3) 子供の寿命(米寿由來)

- ① 米寿由來(子供の寿命)
 ② 子供の寿命(米寿由來)
 ③ 子供の寿命

喜納兼増(登川)……………84
 金城初子(セシター)……………87
 當真アキ(胡屋)……………89

(4) 親の声は神の声

- ① 親の声は神の声
 ② 親の声は神の声
 ③ 親の声は神の声

屋宜ハル(安慶田)……………90
 宇良芳子(中の町)……………91
 山内盛福(南桃原)……………91

(5) 千年蛇

- ① 千年蛇
 ② 千年蛇
 ③ 千年蛇
 ④ 千年蛇
 ⑤ 千年蛇
 ⑥ 千年蛇
 ⑦ 千年蛇
 ⑧ 千年蛇

平基ヨ(宗原カマド)……………92
 内間シモ(城前)……………92
 佐渡山ゴセイ(城前)……………93
 昔久原ウシ(嘉間良)……………93
 佐渡山夏枝(室川)……………94
 屋宜カメ(安慶田)……………95
 島袋サダ(高原)……………96
 西平マツ(久保田)……………96

五 運命譚

(1) 水の神の運

① 水の神の運

佐渡山ヨセイ(城前) …… 113

(2) 水の神の寿命

① 水の神の寿命

昔久原ウシ(嘉間良) …… 113

② 水の神の寿命

昔久原幸(池邊) …… 113

(3) 十五夜由来

① 十五夜由来

平長吉(宇東原カマド)(屋敷) …… 114

(4) 扇子の寿命

① 扇子の寿命

桑江朝盛(中の町) …… 115

六 呪宝譚

(1) 犬と猫と指輪

① 犬と猫と指輪

鳥袋次郎(知花) …… 117

(2) 塩吹き白

① 塩吹き白

仲宗根盛雄(登川) …… 120

② 塩吹き白

佐久田千代(登川) …… 121

③ 塩吹き白

上根ウサ(宮里) …… 123

(3) 黄金天

① 黄金天

上根ウサ(宮里) …… 125

(4) 黄金猫

① 黄金猫

上根ウサ(宮里) …… 127

(5) 黄金の花

① 黄金の花

金城ナベ(松本) …… 128

(6) 金持ちと貧乏者

① 金持ちと貧乏者

昔久原ウシ(嘉間良) …… 97

(7) 金持ちと神様

① 金持ちと神様

内開シモ(城前) …… 98

(8) 狼の赤尻由来

① 狼の赤尻由来

長峯シズ(高原) …… 98

(9) 金持ちのあやまち

① 金持ちのあやまち

古堅宗信(安藤田) …… 99

② 金持ちのあやまち

屋直ハル(安藤田) …… 100

(10) 屋良ムルチ(生けにえ)

① 屋良ムルチ(生けにえ)

金城初子(セントア) …… 101

② 孝行娘とヌブシの玉

昔久原ウシ(嘉間良) …… 103

③ 屋良彌池の大鏡

鳥袋新栄(池原) …… 103

④ 屋良ムルチ

仲里マスイ(池原) …… 104

⑤ 屋良ムルチ(生けにえ)

上根ウサ(宮里) …… 105

⑥ 屋良ムルチの生けにえ

宮城タケ(身儀) …… 106

⑦ 屋良ムルチ(生けにえ)

比嘉貞信(中の町) …… 107

⑧ 屋良ムルチ(孝行の巻)

伊佐安弘(山里) …… 107

⑨ 屋良ムルチ

柴野比トヨ(知花) …… 108

(11) 誠の上には弓も矢も立たない

① 誠の上には弓も矢も立たない

松下盛一(池原) …… 108

(12) 夫婦の縁

① 夫婦の縁(縁結び)

平田嗣昌(登川) …… 109

(13) 火の神報恩

① 火の神報恩

昔久原幸(池邊) …… 111

(14) 棺桶は黄金

① 棺桶は黄金

西平マツ(久保田) …… 112

七 兄弟譚

〔1〕 仲順大主

(1) 嫁の乳

① 仲順大主 (嫁の乳・七月エイサ)	昔久原ウシ (齋間良)	129
② 仲順大主 (嫁の乳)	島袋義堅 (古淵)	130
③ 仲順大主 (嫁の乳)	喜友名朝満 (園田)	132
④ 仲順大主 (嫁の乳)	久場政三 (園田)	133
⑤ 仲順大主 (嫁の乳)	照屋ツル (照屋)	135
⑥ 仲順大主 (嫁の乳)	上江洲マカト (比羅間)	136
⑦ 仲順大主 (嫁の乳)	喜屋武英正 (久保田)	137
⑧ 仲順大主 (嫁の乳)	上原ウシ (住吉)	138
⑨ 仲順大主 (嫁の乳)	當真アキ (胡屋)	139
⑩ 仲順大主 (嫁の乳)	高江洲昌保 (センター)	140
⑪ 仲順大主 (男の肝・エイヤの時)	金城初子 (センター)	141
⑫ 孫の生肝 (仲順流り)	大塚樽 (池原)	142
⑬ 仲順大主 (嫁の乳)	金城永保 (松本)	143
⑭ 仲順流り	高江洲節 (松本)	143
⑮ 仲順大主 (嫁の乳)	佐渡山ゴセイ (磯前)	144
⑯ 仲順大主 (嫁の乳)	喜納兼優 (東)	144
⑰ 仲順大主 (嫁の乳)	宮城ハナ (与儀)	144
⑱ 仲順大主 (嫁の乳)	桑江朝盛 (中の町)	145
⑲ 孝行な子供	昔久原ウシ (齋間良)	145

〔2〕 屋良ムルチ

(1) ウナギ

① 兄弟の仲直り	神里マカト (安藤田)	146
② 兄弟の仲直り	当真つる (池原)	147
③ 屋良ムルチ (兄弟の仲直り)	西平マツ (久保田)	148

八 大歳の客

(1) 猿長者

① 猿長者	幸島マツ (池原)	170
② 大歳の客 (猿の赤尻由孝)	栄野比トヨ (知花)	172

(2) イノシシ

① 兄弟の仲直り (ウナギ)	島袋盛保 (知花)	167
② 兄弟の仲直り	宮城タケ (与儀)	166
③ 兄弟の仲直り (猪)	比嘉直信 (中の町)	165
④ 兄弟の仲直り (猪)	當真アキ (胡屋)	164
⑤ 兄弟の仲直り (猪)	永山ウシ (大里)	164
⑥ 兄弟の仲直り (猪)	桑江カマド (東桃原)	163
⑦ 兄弟の仲直り (猪)	吉田 (島袋) タケ (知花)	162
⑧ 兄弟の仲直り (猪)	知花ツル (齋間良)	161
⑨ 兄弟の仲直り (猪)	豊田喜進 (山内)	160
⑩ 兄弟の仲直り (猪)	上根ウサ (宮里)	159
⑪ 兄弟の仲直り (猪)	屋宜カメ (安藤田)	157
⑫ 兄弟の仲直り (猪)	島袋新栄 (池原)	155
⑬ 兄弟の仲直り (猪)	伊佐安弘 (山里)	154
⑭ 兄弟の仲直り (猪)	喜納兼優 (東)	154
⑮ 兄弟の仲直り (猪)	喜屋武英正 (久保田)	153
⑯ 兄弟の仲直り (猪)	喜納カマ (登川)	152
⑰ 兄弟の仲直り (猪)	平田朝昌 (登川)	151
⑱ 兄弟の仲直り (猪)	島袋ウト (池原)	150
⑲ 兄弟の仲直り (猪)	松下栄吉 (池原)	149
⑳ 兄弟の仲直り (猪)	仲宗根盛雄 (登川)	169
㉑ 兄弟の仲直り (猪)	名真真ヨシ (美里)	168
㉒ 兄弟の仲直り (猪)	金城初子 (センター)	168

(3) 兄弟の仲直り

九 継子話

(1) 継子の麦つき

⑩	継子の麦つき		
⑨	継子の麦つき	上根ウサ(宮里)	201
⑧	継子の麦つき	替久原カマド(安慶田)	200
⑦	継子の麦つき	神里マカト(安慶田)	200
⑥	継子の麦つき	屋宜ハル(安慶田)	199
⑤	継子の麦つき	諸見里マツ(美里)	199
④	継子の麦つき	平田ウト(松本)	198
③	継子の麦つき	栄野比トヨ(知花)	198
②	継子の麦つき	吉田(鳥巻)タケ(知花)	196
①	継子の麦つき	仲宗根カメ(登川)	196

(2) 大歳の客

⑩	大歳の客	知花ツル(嘉間良)	175
⑨	大歳の客	神里マカト(安慶田)	175
⑧	大歳の客	吉里ウシ(照屋)	178
⑦	大歳の客	鳥袋キヨ(高原)	182
⑥	大歳の客	金城初子(セシター)	183
⑤	大歳の客	西平マツ(久保田)	184
④	大歳の客	久高千恵(セシター)	185
③	大歳の客	鳥袋サダ(高原)	186
②	大歳の客	平田シゲ(登川)	187
①	大歳の客	桑江信子(泡瀬)	189
		当真つる(泡瀬)	191
		當真アキ(胡屋)	191
		東静江(池原)	193
		当山全栄(泡瀬)	193
		桑江朝盛(中の町)	194
		當真アキ(胡屋)	194

(2) 継子の潮汲み

⑩	継子の水汲み	桑江カマド(東照屋)	202
⑨	継子の水汲み	喜屋武千代(泡瀬)	202
⑧	継子の水汲み	宮城タケ(丘備)	203
⑦	継子の水汲み	平安名常庵(園田)	203
⑥	継子の水汲み	島田敏(山内)	204
⑤	継子の水汲み	平田綱光(登川)	204
④	継子の水汲み	新城キヨ(美里)	205
③	継子の水汲み	知名タケ(越東)	205
②	継子の水汲み	替久原ウシ(嘉間良)	205
①	継子の水汲み	安里ウテ(住吉)	205
		喜納兼儀(東)	205
		諸見里マツ(古瀬)	206
		桑江信子(泡瀬)	206
		金城初子(セシター)	206
		宇良芳子(中の町)	207
		松本良子(諸見里)	207
		仲宗根アミ(登川)	207

(3) 継子の水汲み

⑩	継子の水汲み	新屋ヨシ子(越東)	207
⑨	継子の水汲み	知花ツル(嘉間良)	208
⑧	継子の水汲み	屋宜カメ(安慶田)	208
⑦	継子の水汲み	上根ウサ(宮里)	209
⑥	継子の水汲み	喜屋武英正(久保田)	210
⑤	継子の水汲み	仲宗根キヨ(丘備)	211
④	継子の水汲み	佐久田千代(登川)	211
③	継子の水汲み	桑江信子(泡瀬)	212
②	継子の水汲み	替久原ウシ(嘉間良)	212
①	継子の水汲み	知花ツル(嘉間良)	212

(4) 継子の毒入り弁当

⑩	継子の毒入り弁当	桑江カマド(東照屋)	202
⑨	継子の毒入り弁当	喜屋武千代(泡瀬)	202
⑧	継子の毒入り弁当	宮城タケ(丘備)	203
⑦	継子の毒入り弁当	平安名常庵(園田)	203
⑥	継子の毒入り弁当	島田敏(山内)	204
⑤	継子の毒入り弁当	平田綱光(登川)	204
④	継子の毒入り弁当	新屋ヨシ子(越東)	205
③	継子の毒入り弁当	知名タケ(越東)	205
②	継子の毒入り弁当	替久原ウシ(嘉間良)	205
①	継子の毒入り弁当	安里ウテ(住吉)	205
		喜納兼儀(東)	205
		諸見里マツ(古瀬)	206
		桑江信子(泡瀬)	206
		金城初子(セシター)	206
		宇良芳子(中の町)	207
		松本良子(諸見里)	207
		仲宗根アミ(登川)	207

- (5) 継子の水汲み・弁当
① 継子話
金城ハル(東桃原)……………213
- (6) 継子の茶腹飯腹
① 継子話
柴野比トヨ(知花)……………213
- (7) 継子と二ガナ
① 継子と二ガナ
上根ウサ(富里)……………214
② 継子話
吉田(鳥袋) タケ(知花) ……215
③ 継子と二ガナ
高江洲節(松本)……………217
- (8) 継子と竹の子
① 継子と竹の子
仲宗根カメ(登川)……………217
② 李行屋子の話(継子と竹の子)
屋宜ハル(安慶田)……………217
- (9) 継子とカンダ
① 継子話(カンダ)
柴野比トヨ(知花)……………218
- (10) 継子の機織り
① 継子の機織り
佐渡山ゴセイ(城前)……………219
② 継子の機織り
久場ナヘ(住吉)……………219
③ 継子の機織り
浜比嘉ナヘ(住吉)……………219
④ 継子の機織り
町田ツル(南松原)……………219
- (11) 継子の井戸掘り
① 継子の井戸掘り
屋宜カメ(安慶田)……………220
② 継子の井戸掘り
屋宜ハル(安慶田)……………221
- (12) 継子の屋根葺き
① 継子の屋根葺き
神里マカト(安慶田)……………222
- (13) 継子の井戸掘り・屋根葺き
① 継子話
神里マカト(安慶田)……………223
- (14) 継子と十五夜の餅
① 継子と十五夜の餅
金城真良(古謝)……………224
- (15) 継子と火事
① 継子と火事
金城真良(古謝)……………224
- (16) 継子の通り池
① 継子の通り池
上根ウサ(富里)……………225

一〇 動物報恩

- (1) 雀報恩
① 雀報恩
屋宜ヨシ(越来)……………234
- (17) 姉いじめ
① 継子話
金崎ナベ(松本)……………226
② 継子の通り池
③ 通り池の継子台
諸見里マツ(美里)……………227
- (18) 嫁と姑の話
① 嫁と姑の話(分ドンとミミズ)
比嘉フジエ(山内)……………227
松本良子(諸見里)……………227
- (19) 継子と二十日月
① 継子の麦つきと二十日月
島袋ウト(池原)……………228
② 継子と二十日月
仲宗根カメ(登川)……………228
③ 継子の麦つき・二十日月
永山ウシ(大里)……………229
④ 継子と二十日月
喜屋武千代(泡盛)……………229
⑤ 継子の二十日月
桑江朝盛(中の町)……………230
⑥ 継子の二十日月
吉村ヨシ(山内)……………230
- (20) 継子のシーの実取り・麦つき
① 継子話(シーの実取り・麦つき)
西平マツ(久保田)……………230
- (21) 継子の二十日月・機織り・鳥と弁当・水汲み
① 聖助(二月・機織り・鳥と弁当・水汲み)
上原ウシ(住吉)……………230
- (22) 継子の歌
① 継子話
島袋トメ(松本)……………232
② 継子いじめ
仲村トシ子(住吉)……………233
- (23) 継子の腹はれつ
① 継子の腹はれつ
佐渡山ゴセイ(城前)……………233
- (24) 手なし娘
① 手なし娘
普久原ウシ(嘉間良)……………233

(1) 鬼餅由来

- ① 鬼餅由来(瓦) 235
 ② 鬼餅由来 238
 ③ 鬼餅由来 239
 ④ 鬼餅由来(鉄) 239
 ⑤ 鬼餅由来(土) 240
 ⑥ 鬼餅由来 240
 ⑦ 鬼餅由来 240
 ⑧ 鬼餅由来 241
 ⑨ 鬼餅由来(瓦) 241
 ⑩ 鬼餅由来(瓦) 241
 ⑪ 鬼餅由来(瓦) 241
 ⑫ 鬼餅由来(瓦) 241
 ⑬ 鬼餅由来(鉄) 241
 ⑭ 鬼餅由来(ガラス) 241
 ⑮ 鬼餅由来 241
 ⑯ 鬼餅由来(瓦) 241
 ⑰ 鬼餅由来 241
 ⑱ 鬼餅由来(瓦) 241
 ⑲ 鬼餅由来 241
 ⑳ 鬼餅由来 241
 ㉑ 鬼餅由来(ホーハイ) 241
 ㉒ 鬼餅由来 241
 ㉓ 鬼餅由来(鉄・石) 241
 ㉔ 鬼とアーサ 241
 ㉕ クスケー由来 241
 ㉖ クスケー由来 241

栄野比トヨ(知花)

- 島袋義堅(古瀬) 235
 祖堅トク(恵) 238
 平田フミ(登川) 239
 桑江信子(池原) 239
 上原ツル(東松原) 240
 島袋美智子(与儀) 240
 桑江幸子(池原) 241
 金城永保(松本) 241
 吉田(島袋)タケ(知花) 241
 平マツ(美里) 241
 仲村文字(センター) 241
 平良ハナ(明道) 241
 瑞慶賢好子(城前) 241
 幸島マツ(池原) 241
 上根ウサ(宮里) 241
 知念栄子(美里) 241
 東静江(池原) 241
 平安名常亀(園田) 241
 屋宜ヨシエ(大里) 241
 仲宗根初子(越来) 241
 吉里清秀(照原) 241
 知花ツル(嘉間良) 241
 豊田喜進(山内) 241
 上根ウサ(宮里) 241
 照屋唯兵衛(園田) 241

260 258 258 257 255 253 252 251 250 250 249 247 246 246 245 243 241 241 240 240 240 239 239 238 235

一二 愚かな動物

- (1) 猫とカマブタ
 (2) 犬とカマブタ
 (3) 豚化け美女
 (4) マスの角

- ① 猫とカマブタ 270
 ② 犬とカマブタ 271
 ③ 豚化け美女 272
 ④ マスの角 269

一三 巧智譚

1 親捨山

- ① 親捨山(シバ折り・難題) 273
 ② 親捨山(難題) 275
 ③ 親捨山 276
 ④ 親捨山(難題) 277
 ⑤ 親捨山 278
 ⑥ 親捨山 279

- 喜原武英止(久保田) 262
 吉村ヨシ(山内) 263
 仲宗根カメ(登川) 264
 島袋次郎(知花) 265
 仲里マスイ(池原) 266
 新城キヨ(美里) 266
 仲宗根盛盛(登川) 268
 田場サダ(明道) 268
 漢那ツル(嘉間良) 269
 宇良芳子(中の町) 269

〔2〕

⑦ 姥捨山(灰瀬)	上根ウサ(宮里)	279
⑧ 観捨てもん	平田シゲ(登川)	280
⑨ 姥捨山(モッコ)	宮城次郎(園田)	281
⑩ 姥捨山(龍懸)	玉城カメ(美里)	281
⑪ 観捨山(龍懸)	山城清輝(中の町)	283
⑫ 姥捨山(アブシバレー由來)	佐久田千代(室川)	283
⑬ 観捨山(松折り)	仲程清一(知花)	284
黄金の瓜種		
① 黄金の瓜種	金城黄金(古瀬)	284
② 黄金の瓜種	上根ウサ(宮里)	287
③ 黄金の瓜種	伊佐ツル(泡瀬)	288
④ 黄金の瓜種	平田嗣光(登川)	288
⑤ 黄金の瓜種	喜納兼徳(東)	290

一四 枯骨報恩

(1) 歌い骸骨

① 歌いがいこつ	鳥袋盛保(知花)	291
----------	----------	-----

一五 その他

(1) 生き返った娘

① 生き返った娘	仲村カマ(高原)	292
② 生き返った娘	宮城ツル(センター)	292

(2) 宝比べ

① 宝比べ(今は手)	久場カメ(園田)	293
② 子は宝	佐渡山ゴセイ(城前)	293
③ 子は宝	仲村娘シズ(安慶田)	294
④ 宝比べ	松下盛一(池原)	294
⑤ 金持ちと貧乏の宝比べ	桑江朝盛(中の町)	294

(3) 塩が一番

① 塩が一番	替久原幸(泡瀬)	295
② 塩が一番	榎里カメ(園田)	296
③ 塩が一番	渡慶次千代(泡瀬)	296
④ 塩が一番	替久原ウシ(富間良)	297
⑤ 三人娘の塩が一番	佐久田千代(室川)	297
⑥ 塩が一番	佐渡山ゴセイ(城前)	298
⑦ 塩が一番	金城初子(センター)	298

(4) 旅人とウナイ神

① 船旅とウナイ神	新崎カマド(中の町)	298
② 船旅とウナイ神	替久原幸(泡瀬)	299
③ ウナイ神と船旅	仲栄真セツ(中の町)	299

(5) 道楽者の田植え

① 道楽者の田植え	鳥袋次郎(知花)	299
-----------	----------	-----

(6) 婆いるか

① 婆いるか(塩は嘉例)	金城ハル(東桃原)	300
--------------	-----------	-----

(7) サギビサーはいけない訳

① サギビサーはいけない訳	上根ウサ(宮里)	301
---------------	----------	-----

(8) 白骨になった旅人

① 白骨になった旅人	替久原幸(泡瀬)	302
------------	----------	-----

(9) キジムナー

① キジムナー(鯉・魚取り・追い払い)	上江洲マカト(比摩根)	303
② キジムナー(魚取り)	金城ナベ(松本)	304
③ キジムナー(魚取り・尻)	吉田(鳥袋タケ(知花))	305
④ キジムナーと尻	上根ウサ(宮里)	306
⑤ キジムナー(尻)	平良ウシ(安慶田)	306
⑥ キジムナーの魚取り	富山茂(美里)	306

調査日誌と調査協力者

沖縄国際大学口承文芸学術調査団による沖縄市字池原・登川の調査

〔調査日程〕

一九八〇年 五月十八日

〔調査地域〕

沖縄市字池原・登川

〔調査団長〕

沖縄国際大学文学部教授遠藤庄治

〔口承文芸研究会〕

大城直樹・幸喜愛・大本敦子・西江美智・上江洲リカ（美里中3年）・袴晴一郎・
湧川紀子・金城あつ子・緑間直美・比嘉和男・崎原有美恵・辺士名美智代・
富村朝夫・仲原敦子・山岸信浩・安田啓子

池原（旧美里地区）

一九八〇年

五月 十八日……喜納弘子・岡田浩・新城悦子・島袋美奈子・

花城洋子・小橋川生枝・大熊亨・西銘千恵

美・渡慶次敷・仲宗根悦子・与那原早苗・

佐渡山美智子・仲松庸尚・安里和子

一九八五年

七月 八日……辺士名初美

七月 十八日……辺士名初美

七月 二十九日……仲松庸尚・辺士名初美・宮城利旭

八月 九日……辺士名初美

登川（旧美里地区）

一九八〇年

五月 十八日……袴晴一郎・湧川紀子・金城あつ子・緑間直

美・富村朝夫・仲原敦子・山岸信浩・安田

啓子・遠藤庄治・大城直樹・幸喜愛

一九八五年

八月 十二日……辺士名初美・仲松庸尚

八月 十九日……仲松庸尚

八月 二十六日……仲松庸尚・辺士名初美

九月 三十日……辺士名初美・宮城昭美・仲松庸尚・真栄城

榮子

十月 一日……宮城昭美

知花（旧美里地区）

一九八五年

九月 九日……辺士名初美

十月 十三日……辺士名初美・下田博美・島袋芳敏・安里和

子

一九八六年

七月 九日……宮里信勇・宮城昭美

七月 十日……宮里信勇・宮城昭美

八月 六日……宮城昭美

一九八七年

七月 十四日……宮城昭美

十月 二六日……宮城昭美

一九九七年

十二月十九日……玉代勢豊子・宮城昭美

松本 (旧美里地区)

一九八七年

五月 二八日……宮城昭美

六月 二九日……宮里純子・宮城昭美

七月 一日……宮里純子・宮城昭美

七月 七日……宮里純子・宮城昭美

七月 八日……宮里純子・宮城昭美

一九八八年 (わらべ歌調査にて)

十二月二七日……宮城昭美

明道 (旧美里地区)

一九九〇年

三月 十四日……上門博之・比嘉ゆり子・石原由香里・宣保

勝・桃原笑美子

美里 (旧美里地区)

一九九〇年

三月 十一日……仲松庸尚・興座範秋・比嘉ゆり子・謝敷勝

美・桃原笑美子・上門博之

三月 十四日……平良真也

越来 (旧コザ地区)

一九八九年 (わらべ歌調査にて)

十一月 八日……比嘉悦子・宮城昭美

一九九〇年

八月 二二日……豊岡早苗・新垣登季子・新垣孝幸・謝敷勝

美・喜瀬智美・知念美佳子・石川小百合・

大田判

十二月十六日……照屋京子・宮里英樹・大川清子・上門博之

城前 (旧コザ地区)

一九九〇年

八月 二二日……平藏美恵子・金城奈緒子・香村夏子・森章

史・平藏美恵子・大川清子・石川小百合・

宣保勝

十二月十六日……石川小百合・宣保勝・粟園実

嘉間良 (旧コザ地区)

一九九〇年

八月 二二日……照屋京子・久保田聡子・豊岡早苗・新垣登

季子・新垣孝幸・有銘和江・遠藤庄治・新

屋むつき・伊良智八重子・仲里香

十二月十四日……豊岡早苗・諸喜田綾子・稲嶺悦子

住吉 (旧コザ地区)

一九九〇年

八月 二二日……上門千賀子・瑞慶覧優子・山城綾子・大川

清子・石川小百合・仲里香・謝敷勝美

十二月十六日……平良真也・加島三史・香村夏子

一九九一年

八月 二二日……上門千賀子・瑞慶覧優子

室川(旧コザ地区)

一九九〇年

八月 二二日……上門千賀子・瑞慶寛優子

十二月十四日……上門千賀子・新垣孝幸・石川小百合

安藤田(旧コザ地区)

一九九〇年

八月 二十日……照屋京子・有銘和江・岸本かおり・栗国実・

稲嶺道子・島元要・崎山須麻子・平良真也・

新田尚子

八月 二二日……与座範秋・宮城加代子・上門博之・普天間

みどり・宮城昭美

十二月十五日……崎山用彰・諸喜田綾子・宮城昭美・上門博

之・瀬底正祥・山城綾子・平良真也

東(旧美里地区)

一九九〇年

三月 十四日……崎山用彰・宮城昭美・謝敷勝美・與座範秋

宮里(旧美里地区)

一九八九年

十二月 五日……比嘉ゆり子・宮城昭美

一九九〇年

三月 十一日……豊岡早苗・宮城昭美

七月 六日……宮城昭美・宮里信男・上門博之・武嶋昭子

照屋(旧美里地区)

一九九〇年

八月 二十日……上門千賀子・玉城直子・新垣登季子・翁長

利江・知念美佳子・宮城昭美

一九九一年

八月 十七日……友利幸子・照屋京子・武嶋昭子・香村夏子

古謝(旧美里地区)

一九九〇年

三月 十二日……宜保勝・與座範秋・謝敷勝美

七月 六日……與座範秋・仲宗根広恵・宮里英樹・稲嶺悦

子・照屋京子・平藏美恵子

一九九七年

十月 二日……遠藤庄治・阿波根祐子

東桃原(旧美里地区)

一九九〇年

三月 十三日……當山政子・宮城昭美・謝敷勝美・石原由香

里・上門博之

大里(旧美里地区)

一九九〇年

三月 十一日……平良真也

池瀬(旧美里地区)

一九九〇年

三月 十二日……知花春美・平良真也・伊良栞八重子・豊岡

一九九〇年

八月 二三日……稻嶺悦子・謝數勝美・平安名邦祐

一九九一年

五月 二三日……宮城昭美・香村夏子・謝數勝美・石川小百

合・照屋京子・大川清子

早苗・山城綾子・与那嶺礼子・飯田泰彦・犬養惠子

胡屋(旧コザ地区)

三月 十七日……宮城昭美・波平裕子

一九九〇年

八月 十九日……栗国実・稲嶺道子・山城綾乃・安次嶺寿・崎山須麻子

十二月十四日……宜保勝・香村夏子・森章史・栗国実

高原(旧美里地区)

一九九〇年

三月 十一日……平謙美惠子

七月 六日……平良真也・大川清子・富平惠智子・豊岡早苗・与那嶺昭郎

中の町(旧コザ地区)

一九九〇年

八月 二三日……照屋京子・諸喜田綾子・平謙美惠子・新城マサエ・森章史・香村夏子・豊岡早苗・与那嶺昭郎・宜保勝・富平・平良真也・宮城昭美

十二月十四日……照屋京子・與座範秋・山城綾子・宮里英樹・香村夏子・与那嶺昭郎

比屋根(旧美里地区)

一九九〇年

三月 十三日……上門千賀子

与備(旧美里地区)

一九九〇年

三月 十三日……比嘉ゆり子・豊岡早苗・瀬底正洋・山城綾子

子

園田(旧コザ地区)

一九八五年

十一月十九日……金城茂雄・辺土名初美・宮城利旭・宮城昭美

美

センター(旧コザ地区)

一九九〇年

八月 十九日……上門博之・伊野波智美・与座範秋・知念美千代・石川小百合・川満祐子・謝數勝美・平數邦祐

一九八七年

七月 十七日……比嘉寛勝・上間和夫・宮城昭美

七月 二日……上間和夫・宮里純子・宮城昭美
一九九〇年

八月 十九日……与那嶺昭郎・田場美恵子・仲松節子・宮城昭美・栗国実・稲嶺道子
十二月十四日……平良真也・上門博之

久保田(旧コザ地区)

一九九〇年

八月 二十日……平敷美恵子・平良美香・津嘉山朝昭
八月 二二日……通事美香・高良陽子・富平千恵子
十二月十四日……宮城昭美・山城綾子・新垣孝幸
十二月二二日……宮城昭美・大川清子・石川小百合・照屋京子

諸見里(旧コザ地区)

一九九〇年

八月 十九日……武崎昭子・池原健・野原恵・喜久山くに子
八月二十二日……照屋京子・久保田聡子・加島三史

山内(旧コザ地区)

一九九〇年

八月 二十日……豊岡早苗・菅真寛・上門博之・金城奈緒子・稲嶺悦子・宮里由美・高吉直紀

一九九一年

八月 十七日……犬養憲子・新垣孝幸・小橋川一・新垣純子・謝敷勝美・仲尾由美

南桃原(旧コザ地区)

一九九〇年

八月 十九日……新垣孝幸・宮城美雪
十二月十六日……上門千賀子・森章史・諸喜田綾子

山里(旧コザ地区)

一九九〇年

八月 二二日……平議美恵子・津嘉山朝昭
十二月十六日……平議美恵子・与那嶺昭郎・仲尾由美

○編集協力者

(表紙イラスト作成) 金城友美・八田夕香
(挿絵作成) 長浜益美

○翻字

上門博之・宜保勝・香村夏子・石川小百合・大川清子・照屋京子・山内智子・宮城昭美・山城綾子

○資料整理

上門博之・宜保勝・香村夏子・石川小百合・大川清子・照屋京子・比嘉ゆり子・辺土名初美・山城綾子・屋良奈那子

○原稿作成及び編集

比嘉清和・伊禮樹・金城友美・島田由利佳・玉城拓・縄田雅重・八田夕香・宮城昭美

○参考文献及び資料

- 『沖縄語辞典』国立国語研究所編集・大蔵省印刷局発行・一九八〇年
『沖縄文化史辞典』真栄田義見・三隈治雄・源武雄編・東京堂出版発行・一九八二年
『沖縄大百科事典上・中・下』沖縄大百科事典刊行事務局編集・沖縄タイムス社発行・一九八三年
『おおぎみの昔話』遠藤庄治・大宜見村教育委員会発行・一九九八年
『中城の民話』遠藤庄治・中城村教育委員会発行・一九九九年
『具志川市史 第三巻 民話編下 昔話』具志川市史編さん委員会編集・具志川市教育委員会発行・二〇〇〇年
『下地町の民話』遠藤庄治・下地町教育委員会発行・二〇〇三年
『本部町の民話 上巻・昔話編』遠藤庄治・本部町教育委員会発行・二〇〇四年
『池原の伝承をたずねて』沖縄市立郷土博物館編集・沖縄市教育委員会発行・二〇〇五年
『沖縄語辞典—那覇方言を中心に—』内間直仁・野原三儀・研究社発行・二〇〇六年
『沖縄市の伝承をたずねて(中北部編)』沖縄市立郷土博物館編集・沖縄市教育委員会発行・二〇〇七年
『沖縄市の伝承をたずねて(東西部編)』沖縄市立郷土博物館編集・沖縄市教育委員会発行・二〇〇八年

沖縄市の伝承をたずねて 本格昔話編

沖縄市文化財調査報告書第38集

平成22年3月31日 発行

発行 沖縄市教育委員会
編集 沖縄市立郷土博物館
〒904-0031 沖縄県沖縄市上地2-19-6
TEL (098) 932-6882
印刷 コザ印刷所
沖縄県沖縄市東1-4-18
TEL (098) 937-5015

